
バカと雲雀と召喚獣

G A U

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと雲雀と召喚獣

【Nコード】

N6715N

【作者名】

GAU

【あらすじ】

試験召喚システムを実装した、世界初の試験校『文月学園』。

そこに通う、はせくろ支倉ひばりと幼なじみの吉井明久。

二人をはじめとした、個性豊かなメンバーが繰り広げる、スラックプステイック学園コメディー、ここに開幕！！

原作キャラとオリジナルキャラ達が暴れ回る、『バカとテストと召喚獣』二次創作です。

第一問（前書き）

はじめまして、GAUと申します。

初投稿ではありますが、頑張つてゆるゆる進めていきたいですね。
この作品には、多数のオリジナルキャラが登場します。

原作ブレイク、オリジナル展開、原作キャラとオリジナルキャラ
のカップリングなどを含む場合があります。

もし、これらを許容できないと判断された方は、読まれないこと
をおすすめします。

それでは、よろしくおねがいします。

第一問

『ねえねえアキくんアキくん。ねえってばあ』

『うゝん、なあにー？ひーちゃん？』

『あたしねーおつきくなったら、あきくんのおよめさんになったげるー』

『すぴー（ツクリツクリ）』

『ねえねえアキくんってばあ。おひるねのおじかんはまだだよあ』

『んーぼくねむいよー』

『だからあ、アキくんのおよめさんになってあげるってばー』

『んーわかったよー（すぴー）』

『やったあ！やくそくだよ？アキくん（ブンブン）』

『すかー（かつくんかつくん）』

『えへへ、アキくんだあいすき（ゆッ）』

そこで彼女、支倉ひばりは目を覚ました。

天井を見つめながら、夢の内容を反芻する。

ぼひゅっという音とともに鎖骨まで赤くなった。いや、赤黒いといつてもいい。

「~~~~！！あたしってばっ！あたしってばっ！」

恥ずかしさのあまり、頭を抱え、長い黒髪を振り乱して身悶える。

「いかに幼稚園児とはいえ、これはないでしょ！？あたし？！」

ひとしきり悶えて落ち着いた頃、身を起こして一息つく。

「はあ。ま、まあ、今まで忘れていたわけだし、きつとアキくんも覚えてないだろうし、時効よね」

少し残念なような、嬉しいような、複雑な表情でため息をつく

「よっし！朝のお勤め、始めますかー！」

自分に言い聞かせるように声を出したひばりは、小さな体を勢いよく立ち上がらせると、ベッド脇に置いておいたりボンで、長い黒

髪をポニーテールにまとめると、自室をでて洗面所に向かった。

ガチャリ。

「おじゃましま〜す」

また徹夜をしたらしい父を起こさぬよう、朝食の支度をし、洗濯を済ませたひばりは、お隣の吉井家に来ていた。

幼なじみの吉井明久は一人暮らし。

彼の両親から、「よろしく面倒を見てやってくれ」と合鍵を預かったばかりか、何故か、彼への仕送りが自分のところに送られてくる。

恐らく、明久に生活費を渡すと、すべて遊びに使うだろうと判断した、彼の両親の計らいだろう。というか、その旨を記した手紙も前後して届いた。

「はあ。アキくん、お金の使い方間違えなければ、家事万能だし良い主夫になると思うんだけどね〜」

などと、ぶつくさ言いながらも、ひばりは明久を起こすべく、毎朝、吉井家を訪れていた。

勝手知ったる幼なじみの家。まっすぐ明久の部屋に向かうと、ノックもせずに扉を開く。

「アキく〜ん？朝だよ〜」

案の定、明久は未だ熟睡中だった。

「ほら、アキくん！起きてってば」

「う〜ん、あと十分〜」

そんなことをのたまいながら、明久は寝返りを打つ。

「だめだって。早く起きなさい！！」

何とか起こそうと、声をかけながら明久をゆすり続けるひばり。だが、当の明久は、いつこうに起きる気配がない。

業を煮やしたひばりは、両手をかるく握りながら腰にあてると、布団をひつかぶったままの明久をにらみ付けた。

「もう！こうなったら奥の手を使っちゃうんだからね」

そう言つと、かるくせき払いをしてから、明久の耳元に顔を近づける。

そしてゆっくりと口を開くと、別人の声流れ出す。

「『アキくん？』」

明久の肩が、ビクリとふるえた。

「『早く起きないと、チュウをします。それも、お嫁にいけなくなるほどすごいチュウをします』」

「うわあああああつっ！！！！起きますっ！！！！起きたっっ！！！！起きてますっ！ねえさ」

フトンをはね飛ばし、明久は転がるようにベッドから飛び出した。と、そこでイイ笑顔のひばりと目があった。

「あれ……？ねえさんは……？」

「『やつと起きましたか？アキくん』」

ひばりは、明久の姉、玲の声で明久にしゃべりかけた。

「つて、ひばりだったのか。てつきりねえさんが帰ってきたのかと……ていうか、それやめてって言ったよね？！心臓にわるいからっ！！」

安堵するもつかの間、明久はひばりに食ってかかる。しかし、

「『なに言ってるの。なかなか起きないアキくんが悪いんでしょ？』」

と、ひばりは涼しい顔だ。

「う。わかったよ、ゴメン。だから、もうねえさんの声音でしゃべるのやめてくれないかな……」

明久が半泣きになりながら訴えると、ひばりは一息つく。

「すぐに起きればいいのに、フトンの中でうだうだしてるからだよ。まったくもう」

そう言いながら、ドアへ向かう。

「朝ご飯用意してあるから、顔洗って、歯を磨いて、ちゃんと着替えてくるんだよ」

「へーい」

「『そんなに姉さんと暮らしたいので……』」

「サー！イエッサー！」

直立不動で敬礼した明久に満足したひばりは、上機嫌でキッチンに向かった。

慌ただしく朝食を済ませた二人は、現在、猛ダッシュで学園に向かっている。「も、もうっ！ー！ち、遅刻したら、ア、アキくんの、せ、せいだからね！ー！」

「だから！ごめんってば！ー！」

「だ、大体、なんで玲姉の、む、昔の制服を着ちゃったのよ！ー！」

「いや、あわてていたもんで、つい」

「ついじゃない！ー！」

自室から出てきた明久は、なぜか姉の玲の、お古のセーラーを着ており、それを見たひばりが派手に吹き出して大惨事となった。

結局、明久に着替えさせ、大惨事の後かたづけを終えてみれば、すでに遅刻上等な時間であり、大慌てで家を飛び出し、今に至るというわけだ。

学園の校門がようやく見えてきたが、ひばりは青息吐息だ。

小柄な上に、運動が苦手で体力がないため、すでに限界だったのだ。

「ひい……はあ……も、……ダメ……」

目を回しながらへたり込む。

「あた、しは、すこ、し、やす、んでから、行く、から、アキ、くんは、先に……」

そう言いながら、木陰に這いずろうとするが、
「ダメだよ！」

とつぜんの明久の声に、シャッキリがでる。

「つく。な、なに？」

「ぼくが遅刻するのは自業自得だけど、マジメなひばりがそれに巻

き込まれるなんてダメだ！」

珍しく真面目な表情の明久に、ひばりは呆けたが、すぐに眉根を寄せると、「いや、全部アキくんのせいじゃん」とツツコむ。

「うぐ。と、とにかくく!!」

言葉に詰まりながらも、ひばりに背を向けてしゃがみ込む。

「ホラ」

「うえっ?! や、やだよ?! 高二にもなったのにおんぶなんて!？」

「いいから」

こうなると、明久は頑固だ。

ひばりは、はあ。とため息をつく、と、恐る恐る明久におぶさった。

「重く……無い？」

「あははは。ひばりみたいにちっちゃいこの体重くあだだだだだだだっ?! 耳がちぎれるようにいたいゝゝっ?!」

「もうつ! いつも一言多いんだから! ほらほら、急いで急いで? ハイヨー! しるばー!!」

「しかたないなあ、よっし、いくぞおおっ!!」

ひばりをおぶった明久は駆けだした。

一分で力つきていた。

「こ、こんなはずでは……」

「いくら何でも、人ひとりおぶって走ったらたいいの人はそうなと思うよ? それにさっきまでアキくんも走ってたんだし……」

「うぐぐぐ」

うなりながらも校門に着くと、人影が見えた。

「遅刻だぞ、吉井、支倉」

浅黒い肌に、スーツ姿だが、その内に詰め込まれた、針金の束ねたかような筋肉質の肉体は隠しきれない。

「おはようございます、鉄じ……西村先生」

「おはようございます、西村先生」

文月学園が誇る、鋼鉄の生活指導担当教師、西村教諭である。

「支倉はどうした? ケガでもしたのか?」

「あーいえ、アキ……吉井君の遅刻に巻き込まれて、走ったはいいんですが、力つきちゃいまして……」

言いながらひばりは明久から降りた。

「吉井……支倉にまで面倒かけるんじゃない」

「えええっ！それじゃ、ぼくがいつもみんなに迷惑をかけてるみたいじゃないですか！」

「自覚が無かったのか……」

「自覚無かったんだね……」

鉄人とひばり、二人でため息をつく。

「あれっ？！鉄人はともかく、ひばりまでその反応なの！？」

いいつのる明久を無視して、鉄人が箱から封筒を二通取り出す。

「支倉、今回は残念だったな。理由はあれどルールはルールだからな」

「まあ、仕方ないですね」

ひばりは、封筒を受け取りながら苦笑いした。

「たがな、支倉」

「はい？」

「俺個人としては立派だったと思っているぞ？」

言われてひばりは頬を赤くする。

「ざんねんだったね、ひばり。ひばりの成績ならCクラスは力がつたんじゃないかな？」

明久も封筒を受け取りながらひばりに声をかけている。

と、鉄人が遠い目をしながら明久に話しかけた。

「吉井……今だから言うが、俺は今まで、吉井はもしかしたらバカなんじゃあないかと疑っていたんだ……」

「あははは。それは大きな間違いですね」

明久は受け取った封筒をきれいに開けようとして悪戦苦闘しながら答える。

「まったくだ。こんな勘違いを起こすなぞ、俺の目は節穴だったと思います」

そう言つて、鉄人は深くため息をついた。

「そうですよ。そのうち、あだ名にふし穴が追加されちゃいますよ？」

結局、きれいに開けることを断念した明久は、端をビリビリと破り出す。

「……吉井、お前への疑いは無くなった」

そして、中から折り畳まれた紙を取り出すとそれを開いて中を確認する。

ひばりはそれをそおつと後ろから覗いた。

『吉井明久…… Fクラス』

「お前は正真正銘のバカだ」

第一問（後書き）

まだまだ、冒頭部分レベルですが、いかがだったでしょうか？
楽しんで読んでいただけたなら幸いです。

更新はゆるゆるやっていきます。

それでは、感想やご意見をお待ちしております。

第二問（前書き）

読んでくださる方がいらっしやるようで、嬉しい限りです。今回も楽しんでいただければ幸いです。

第二問

「うわゝおつきい教室」

「去年は三階なんてほとんど来たことなかったけど、こんな大きな教室があつたんだね」

ひばりも明久も開いた口がふさがらない。

標準教室の五倍はあろうかという教室の教壇には、知的な眼鏡の美人教師が立っている。その後方には、黒板ではなく、巨大なプラズマディスプレイがあり、『2Aクラス担任 高橋 洋子』と映し出されていた。

「学年主任の高橋先生だね。クールで知的なところが素敵だよねゝ。憧れるなあ」

低身長な上に童顔なひばりは、自身の容姿にコンプレックスを持つており、クールな知的美人に憧れていた。

一方で明久は、豪華なAクラスの設備に目移りしていた。

「うわ、席、広っ！！エアコンにパソコンに、あ！！冷蔵庫まで？！」

「天井なんかガラス張りだし……高級ホテルのロビーみたいだねー」
さすがにひばりも苦笑する。

「では、はじめにクラス代表を紹介します。霧島さん、前へどうぞ」
「はい」

呼ばれて進み出たのは、物静かな雰囲気少女だ。絹のような黒髪は肩までのばされており、まるで日本人形のようにも見える。

「霧島翔子です。よろしくお願いします」

プラズマディスプレイにも、大きく名前が映し出されている。

「綺麗な娘だね……わたしなんかとは正反対だ」

「ひばり……？」

ひばりは、羨望の眼差しを向けていたが、不意に明久を振り返る。
「行こ！Fクラスの教室は渡り廊下向こうの旧校舎だよ」

「ちょ、ちょっと……?!」

そのまま明久の手を取り、旧校舎へと歩きだした。

「な、なんというか……」

「Aクラスとは逆の意味で凄いね……」

かわつて、Fクラス前。明久もひばりも、呆然と立ちすくんでいた。

同じ旧校舎にあるEクラスと比べても、明らかにオカシイレベルでボロい。

「設備格差ってレベルじゃないよね……」

そつつぶやきながら、ひばりは戸を開いた。

「遅いぞっ！ウジ虫やる……」

教壇に立っている野生味あふれる少年がひばりの方を見て固まった。

トサリ。ひばりが手にした学生カバンが落ちる。

「ふえ……」

見る見るうちに涙が溜まり、ポロポロとこぼれ始めた。

「すっ、すまん！てつきり明久のバカだと思「総員ねええっつ！

!!」うおっ?!」

明久の号令に呼応して、Fクラスの男子生徒の大半が上履きを構えた。

「お、おまえら！まだ知り合ってもない奴の号令に、何で即応できるんだっつ?!」

「やかましいっ!」

「こんな可愛い子を泣かす奴に人権などあるかっ!!」

「ロリっ娘最高!!」

「合法ロリは人類の至宝!!」 清々しいほどのバカの集まりである。

「わかった！！謝るっ！！謝るから構えを解け。それから……君、悪かった。さっきのは君の後ろにいるバカに叩きつけようと思った言葉で決して君のことを言った訳じゃない」

精悍そうな少年は意外なほど素直に頭を下げた。

「まったく。雄二も、もうすこしかんがえて声をかけなよ」

まだ、口を真一文字に結んでいる、ひばりではなく、明久が答える。

「てめえにだけは言われたくねえぞ？ 明久。このウジ虫やろう」

その言葉をキツカケに二人はメンチを切り始める。

「すみません。通してもらえませんか？」

と、明久とひばりの後ろから声がかかる。そこには、スーツ姿に眼鏡の冴えない男性が立っていた。

「席に着いて下さい」

どうやら、担任教師が到着したようである。

明久も雄二もひばりも、そして男子生徒達もひとまず席に着いた。

「だいじょうぶ？ ひばり。それにしても、すごい教室だね」

「ぐす。大丈夫だよ、アキくん。……すごいというか、酷い教室だよね」

改めてひばりは教室を見回した。

「畳敷きに卓袱台と座布団。畳はカビ臭いし……。あ、クモの巣……」

……

ひばりがあたりを見回しているうちに、教壇に立った教師が自己紹介を始める。

「2年Fクラス担任の……」

言いながら黒板に向かうが、すぐに振り返った。

「……福原 慎です。どうぞ、よろしく」

「黒板に名前書かないのかな？」

「いや、さっき教壇に立ったときに見たんだが……」

ひばりが首を傾げていると、雄二が答える。

「チョークのクズしかなかった」

「「うわぁ……」」

ひばりも明久も微妙な表情になった。

「自己紹介がまだだったな。俺は坂本雄二。そのバカとは、去年からの付き合いだ」

「あ、支倉ひばりです。アキくんとは生まれた直後からの付き合いです」

「？　どういうことだ？」

意味が分からんという風に雄二が首を傾げる。

「あはは、ぼくとひばりは、おなじ日におなじ病院で産まれたみたいなんだ」

「で、よく確かめてみたら、家もお隣同士。これも何かの縁だろうって、付き合いが始まったんですよ、坂本君」

「ほおー。にしちゃあ去年は顔を見たことがなかったが？」

「あたしは去年Ｃクラスでしたからね。でも、Ｄクラスの噂はよく聞いていましたよ？」

それを聞いて雄二は苦笑いをする。

「ろくな噂じゃなかっただろう？」

「ノーコメントで」

そう言ってひばりも苦笑いをした。

「設備の確認は終わりましたね？　では、端の列から自己紹介をお願いします」

福原教諭に促されて、男子の制服を着た可愛い女の子が立ち上がった。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。最初に断っておくが、ワシは男じゃ」

「?!」

その言葉に、ひばりが目をむいた。

「じよ、冗談だよな」

「支倉、認めたくない気持ちは分からないではないが、秀吉は、真正銘の男だ。そして明久、気持ち悪いから身悶えるな」

「うっ、だまされない……だまされないぞお」

見れば、明久が少し頬を染めながら体をクネらせている。

「ア、アキくん……」

ひばりはなんだかやるせない気持ちになっていた。

「前田俊夫だ！ 自由格闘同好会を主催している！ ただいま会員募集中だ！ 入会したい奴はいつでも歓迎するぞ？！ アッハッハ！！」

突如、聞こえてきた大きな声にひばりが振り向くと、巨人が立っていた。

身長が140を切っているひばりからすれば、180を超える長身と、全身、余すことなく鍛えられた肉体は、巨人以外の何者でもなかった。

「す、すごく……おっきいです……」

「ブシャアアアアアアッ！！」

いきなり何か吹き出す音が聞こえたかと思うと、いままさに自己紹介しようとしていた男子生徒が鼻血を吹いていた。

「……………ふちやほうた」

未だに流れ出る鼻血のせいか、聞き取りにくい。

というか、すでに生死に関わりそうな量になっている気がする。

「だ、だいじょうぶ？」

ほかの生徒が呆然とする中、彼の背後に座っていたセミロングで金髪碧眼の女子生徒が声を掛ける。

「……………（コクコク）」

「そ、そう」

どこか釈然としない面持ちで少女は立ち上がると、自己紹介を始めた。

「クリスティーナ」ウエストロードです。去年、家の事情で学校休んでたせいでダブっちゃいました。みんなのイッコ上だけど、気軽にクリスって呼んでね。」

そう言ってウインクひとつ飛ばしてみせる。

「「「クリスーーーーッ!!!!!!!!!!」」」」

「ハアイ」

「「「ブラボーーーーーッ!!!!!!!!!!」」」」

Fクラスのテンションはウナギ登りだ。

「静かに、静かにして下さい。次の人、どうぞ」

福原先生が、なんとか騒ぎを鎮静化させると。中肉中背の特徴の乏しい少年が立ち上がった。

「加藤武。美術部所属です。よろしくお願いします」

それだけ言って、すぐに座ってしまった。下を向いて何かしているようで、明久は少し気になって覗き込むように、首を伸ばしたが、次に聞こえてきた声と名前に青ざめた。

「島田美波です。海外育ちなので日本語は会話以外苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので」

スレンダーな肢体がモデルさんのような女の子で、髪をポニーテールにしている。

ひばりは、『また可愛い子だー』と密かに落ち込んだが、美波の次のセリフにハツとなる。

「趣味は吉井明久を殴ることです」

美波は、笑顔で明久に手を振ろうとして固まった。

「……………」

明久の前に座っている小柄な女の子が、自分を睨み付けているからだ。

「え……なに？」

美波にしてみれば、初対面の彼女に睨まれる覚えはない。

だが、明久に対して強い保護欲を持っているひばりにしてみれば、

去年一年間の、明久の生傷や大小のケガの原因かもしれない相手だ。
「ひばり、どうしたの？」

だが、そんな空気など読むつもりもない明久に声を掛けられると、
ひばりは軽く微笑みつつ、「何でもないよ」と返した。

「ふむ」

そのやりとりを見ていた雄二は、ひばりの中にある、漠然とした
危うさを感じ取っていた。

そんな一幕もあったが、自己紹介が続き、ひばりの番が来た。

「支倉ひばりです。家庭科部所属で、趣味はお料理です。特技は…

…」

一息あけると、

「『声帯模写だ』」

雄二の声でしゃべった。

シンツと、教室が静まり返る。

「『聞いたばかりの声でも、感情的でなければ、この通りじゃ』」
ついで秀吉の声。さらに口を開く度に別人の声になる。

「ス……」

呆然とした声を誰かが絞り出すと、

「『『スゲー……っ……!!!!』』」

と、教室は一気に騒然となる。ひばりは照れくさそうにしていた
が、その後ろで明久がせつば詰まった顔をしていた。

そして、ひばりが自己紹介を終えて座ると、何かを決心した漢の
顔で立ち上がる。

「えー、吉井明久です。気軽に『ダーリン』ってよんで下さいね♪」
『『『『ダアアーリーーン……!!!!』』』』

100%、野郎の野太い声で唱和された。

明久は、本気でノドの奥から苦酸っぱいものがせり上がって来た
かのような表情になると、

「失礼、わすれて下さい。とにかくよろしく」

と、訂正して腰を下ろした。

「何やってるのよ、アキくん……」

あきれた顔で、ひばりが振り向く。

「いや、ひばりのアレの直後だと、何かインパクトがないと、つかみが取れないと思って……」

明久が半泣きになりながら訴えていると、不意にガラリと教室のドアが開き、息を切らせた女子生徒が現れた。

「あ、あの、遅れて、すみま、せん」

「えっ？」

誰からともなく、教室全体が豆鉄砲を喰らった鳩のようになった。

「丁度良いですね。みなさんに自己紹介して貰っているところなので、姫路さん、あなたもお願いします」

「あ、はい！ えと、姫路瑞希です。よろしくお願いします……」

ひばり程ではないものの、小柄な身体を縮こまらせ、恥ずかしげに自己紹介する瑞希。

白い肌と柔らかそうな長い髪は、いつそ小動物的な保護欲をかき立てる。

「はいっ！ 質問良いですか？」

「あ、はい。どうぞ」

いきなりの質問に、少し驚いているようだ。

「なんでここにいますか？」

失礼極まりない質問だ。しかし、クラスの大半が感じている疑問でもあるだろう。

この可憐な少女は、入学後に行われたテストで、学年二位を記録しており、その後も必ず上位一桁以内に名前が残るという才女だからだ。

だれもが彼女はAクラスに違いないと確信しているに違いない。

「えっと、その、ですね……」

緊張した様子で、瑞希が口を開く。

「振り分け試験の最中に高熱を出してしまいました……」

文月学園では。試験途中での退席は、かならず0点扱いとなる。そのせいで彼女はFクラスとなってしまったのだ。

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？あれは高難度だったな』

『俺なんか、事故にあつた弟が心配で集中できなくて』

『黙れ？ 一人っ子』』

「実は、朝まで彼女に求められて……」

「うん」 今年一番の大嘘をありがとう」

バカばかりである。

「で、では、一年間よろしく願いしますっ！」

ピンクの髪が跳ねるほどの勢いでお辞儀すると、パタパタと恥ずかしそうに明久と雄二の間の、空いている卓袱台に着いた。

「はあ、緊張しましたあ……」

瑞希は、安堵の表情で卓袱台に突つ伏した。

「あ、あの姫「姫路」」

明久が瑞希に声を掛けようとすると、それに被せるように、強い声で雄二が声を掛けた。

「あ、はい。なんででしょうか？ えっと……」

人間はとつさの場合、より力強い言葉の方に反応する。この場合は雄二だ。瑞希は丁寧に雄二の方に身体を向けた。

「坂本だ。坂本雄二。よろしくな」

「あ、はい。姫路です。よろしく願います」

そして、深々と頭を下げる。その所作ひとつひとつに、育ちの良さが表れていた。

「ところで姫路。体調の方はもう良いのか？」

「あ、それはぼくも気になる」

「あたしも」

ここぞとばかりに明久が口を挟み、ひばりが便乗した。

「あ、明久君！？ それにひばりちゃんまで？」

緊張のあまり周りが見えてなかった瑞希は、会話に参加してきた、

二人の幼なじみに驚いていた。

すかさず雄二が、

「あー、姫路。明久がブサイクでスマン」

チャチャを入れる。

「そ、そんな！ 目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗ですし、全然ブサイクなんかじゃありませんよ！」

「そうだよ！ 坂本君。アキくんは黙ってれば点数高いんだから！」
反論する瑞希に便乗するひばり。しかし、微妙におとしめているようにも聞こえる。

「なるほど…… たしかに見てくれは悪くはないかもしれないな。俺の知り合いにも、明久に興味を持っている奴がいたはずだし」

「え？ それはだ『それって誰ですかっ！？』 あう……」 嬉しそうに詳細を尋ねようとした明久を遮って、瑞希とひばりが身を乗り出す。

「確か、久保」

「『久保……』」

三人は、素早く久保姓の女生徒を検索し始める。

「利光だったかな」

久保利光 ↓ ♀ (性別/オス)

「…………… 僕、もうお嬢にいけない……………」

「『ホッ……………』」

「明久…… うつとうしいからさめざめと声を殺して泣くな。冗談だ…… 半分はな」

「のこり半分は？！」

雄二の微妙な発言に明久が食いつく、しかし、雄二はそれをスル―して瑞希に声を掛けた。

「で、姫路。もう体調は問題ないのか？」

「ええ。もうすっかり元気です」

「そっか、良かった。あの時の瑞希ちゃん、ほんとにヤバそうだったんだもん」

ひばりも安堵の息をつく。

「ん？　なんだ、支倉も近場にいたのか？」　「うん。じつは、保健室まで連れていったの、あたしだもん」

「ねえっ！！　のこりの半分はっ！！？」

取り合わない雄二に明久の声が大きくなった。

と、パンパンと教卓を強めに叩く音が響いた。

「はいはい。その人たち、静かにして下さいね」

さすがに福原教諭に注意されてしまった。四人が居住まいを正して謝ろうとした瞬間。

バキィッ　バラバラバラ……

教卓か音を立てて崩れ落ちた。寿命だったのかもしれない。

「……えゝ替えを用意してきます。みなさんはしばらく待っていて下さい」

福原教諭はそう告げると足早に教室から出ていった。

「あ、あははは……」

瑞希が苦笑いをしていると、明久がまじめな顔で雄二に声を掛けていた。

「ンわぁゝあ。あ？　どうした？　明久」

「ここじゃ話しくいから、廊下でいいかな」

「ま、いいだろ」

二人で連れ立って廊下に出ようとした明久は、一瞬、瑞希と目が合っていた。

「ん、どしたの瑞希ちゃん」

我慢できずに秀吉等数人の男子生徒と、教卓の残骸を片づけてきたひばりは、廊下を気にする瑞希に声を掛ける。

「あ、ひばりちゃん。いえ、明久君と坂本君が廊下に出ていったので、どうかしたのかと思って……」

「ふたりが？　また、イタズラの相談かな？」

「いえ、明久君はかなり真剣な顔でしたから」

「アキくんが？　なんだろ？」

明久が真剣な顔をするときは、なにか無茶なことをしようとする
ことが多いが、今日の一連の流れからは、その理由が思い当たらず
に、ひばりは首を傾げた。

「Aクラスに試召戦争を申し込む？　明久、お前、何を企んでるん
だ？」

「企むなんて、人聞きの悪い。ぼくはただ、あまりの設備のひど
底の浅い嘘をつくな」うぐ」

「勉強に興味がないお前がなんで設備を気にする？　確かにFクラ
スの設備は酷い。Aクラスと交換できれば、学習環境としては最高
だろうが、お前がAクラスを狙う理由にはならない。むしろ、Dク
ラス、Eクラスあたりを狙うほうが説得力があるだろう」

「うぐぐぐ……」

雄二の反論に明久は何も言えない。

「……姫路のためか？」

「な、なぜトップシークレットをつ？！」

「バカ、カマを掛けただけだ」

「ぐはあっ！？」

もたえる明久の様子を見ながら、雄二かニヤリと笑う。

「ま、気にするな。Aクラス相手の試召戦争なら俺もやるつもりだ
つたからな」

「へっ？！　雄二も勉強なんかしてないよね？」

「何、世の中学力だけじゃないってことを証明してみたくてな」

「どゆこと？」

「気にするなと言っただろう？　安心しろ、Aクラスに勝つための作
戦も、何とか思いついた」

と、そこで教卓を運ぶ福原教諭が目に入った。

「先生が戻ってきたな。中に入るぞ」

新たにボロい教卓が置かれ、自己紹介が再開された。

「……来島アキ」

長い黒髪の少女はつぶやくように言うと座り込む。

「須川亮です。えー、趣味は……」

そんな風に自己紹介が続き、最後に福原教諭が雄二に声を掛けた。

「最後にFクラス代表の坂本君。君の自己紹介をして下さい」

「了解」

答えて雄二は立ち上がり、ゆっくりと前に出た。

その雰囲気、Fクラス中の視線が集まる。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは、ま、坂本でも代表でも、好きに呼んでくれ」

そこで、少し……間を空けた。

「さて……みんなにひとつ聞きたい」

言いながら皆と視線を合わせる。

そして、流れるように教室各所に視線を移していくと、みんなの視線も自然とそれを追っていた。

カビ臭く、すき間風が通る教室。

古く、うす汚れて綿もスカスカな座布団。

汚れた上に、脚もガタガタな卓袱台。

最後に皆を見据えると口を開いた。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……」

ひと呼吸置くと、確認するように告げる。

「不満はないか？」

『『『大アリじゃあっ！！！！！！』』』』

教室を揺るがす、魂の叫びだ。

「だろう？ 俺だって不満だ。このクラスの代表として、大いに問題意識を抱いている」

雄二は仰々しく同意する。すると、あちらこちらから不満の声があがり始めた。

『いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する！』

『そもそもAクラスだっておなじ学費のはずだ！ あまりにも差が大きすぎる！』

『そうだそうだ！』

それらをまとめ、引き継ぐように雄二は口を開いた。

「みんなの意見はもつともだ。そこで、これは俺の代表としての提案なんだが」

自信たっぷり、野生味溢れる笑顔で、

「Fクラスは、Aクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

彼、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

第二問（後書き）

いかがだったでしょうか？今回登場のオリキャラたちは顔見せ程度です。ちゃんと活躍させられるようがんばります。それでは、また次回、お会いしましょう。

第三問（前書き）

第三問です。楽しんで読んでいただければ幸いです。

第三問

『勝てるわけ無いだろう』

『コレよりひどい設備なんてあり得ない』

『姫路さんかいれば何もいらない』

『支倉を愛でたい』

Aクラスへの宣戦布告などという、現実味の乏しい提案に、クラス中から悲鳴が上がる。

一部、オカシいのが混ざってはいるが。

バカ代表クラスのFクラスとはいえ、Aクラスとの戦力差が絶望的だということに気づかない者はいなかった。

文月学園では、点数の上限がないテストが採用されている。一時間の制限時間内に、無制限にテスト問題を解いていくことが出来るのだ。

そして、科学とオカルトと偶然から生まれた、『試験召喚システム』。

教師立ち会いの下、テストの点数に応じた強さの『召喚獣』を呼び出し、戦わせることが可能となる。

『試験召喚戦争』はコレを利用したクラス単位の戦争となる。ゆえに、クラスごとの生徒数は一定である以上、個々のテストの結果の合計が、そのままクラスの総戦力となる。

AクラスとFクラスでは、生徒一人一人ですら、その差は三倍以上もあり、文字通り“桁が違う”のだ。

どうあがいても勝つことなど不可能としか思えない。

だが、雄二はそれを否定してみせる。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや……」

言葉を切った雄二は不適に笑いうと、

「俺が勝たせてみせる」

そう言つて、右親指で、自らを指差す。

そこには、絶対の自信と、迫力があつた。

一連の流れを見ていたクリスと俊夫は面白そうに笑みを浮かべている。

『しかし、どうやって……』

それでも不安の拭えないクラスメイトの言葉を、雄二は右手を挙げて押さえる。

「お前たちの言いたいことはわかる。俺の言葉だけでは、にわかには信用しづらいだろう」

『……』

クラスメイトたちは黙つて聞き入る。

「だから、俺たちがAクラスに勝てるという根拠となる要素を示そうと思う」

その言葉に、長い黒髪の少女、アキの目が、すうつと細まった。

「まずは……おい康太。畳に顔つけて姫路のスカートを覗いていないで、前に出てこい」

「……………！！（ブンブン）」

「ひゃわっ」

雄二に呼ばれた少年、土屋康太は必死に顔と手を横に振つて否定する。

覗かれた瑞希もさすがにスカートを押さえながら遠ざかる。

康太は顔についた畳の跡をさするように隠しながら壇上に向かつた。

「土屋康太。こいつがかの有名な、寡黙なる性識者^{ムツリーニ}だ」

「……………！！（ブンブン）」 雄二の紹介に、教室中が騒然となる。

『ムツツリーニ……だ……と？』

『ヤツがそうだというのか？バカな……』

『だが見る。ああまで露骨な覗きの証拠を、未だに隠そうとしてい

るぞ……』

『ああ……まったくだ。ムツツリの名に恥じない姿だ……』

周りがすべて納得する中、本人だけが否定しつづける。むなしくも誇り高いムツツリスケベの姿がそこにはあった。

「???」

ただひとり、瑞希だけが、訳が分からないという顔で首を傾げている。

「姫路は説明不要だろう。その実力はみんなが知っている通りだ」

「ふえっ！ わ、私がですかっ？」

突然話をふられて、あわてる瑞希。しかし、雄二はそれにかまわず鷹揚にうなずく。

「ああ。うちの主戦力だ。期待している」

「ああ、そうだ。俺たちには姫路さんがいるじゃないか」

「たしかに彼女ならAクラスに引けをとらないな」

「まったくだ。彼女がいれば、ほかに何もいらぬな」

「木下秀吉だっている」

「む？ ワシか？」

『おお……！』

『確かアイツ、木下優子の……』

「当然、この俺も全力を尽くす」

『確かに何かやってくれそうな雰囲気があるよな』

『そういえば、坂本のヤツは、小学生の頃は神童とか言われてたらしいな』

『てことは、振り分け試験の時は体調不良かなんかだったのか』

『なんだよ、Aクラスレベルが二人もいるんじゃないか、このクラス』

徐々にクラスの士気が上がり始め、教室内に熱気があふれ始めた。

「吉井明久だっている」

一気に冷めた。

「ちよっ?! 雄二っ!! どうしてぼくの名前がそこででてる

のさ！ ぜんぜんそんな必要なかったよね？！ 今！」

『……誰だ？ 吉井明久って』

『いや、知らん』

『なんとなく聞き覚えがあるような？？ いや、気のせいかな』

「せっかく、もり上がっていたのに、なんでもり下げることするのさ！」

「なんだ、みんな知らないのか？ こいつは《観察処分者》だ」

「なんでバラすのっ！」

『それって、学園最低のバカの称号じゃなかったっけ？』

「ちがうよっ！ ちよっとおちゃめな十六歳につけられる愛称だよ！」

「そうだよ！ アキくんはちよっとおバカさんただだよっ！ そんなにみんなでバカバカ言ったら、いくら、おバカなアキくんでも自分がおバカだって気づいちやうでしょっ！」

ひばりはフォローしたつもりらしい。その後ろの席で、明久のlifeは0になっていた。

「まあ、とにかくバカの代名詞だ」

トドメを刺された。

「で、でも《観察処分者》の召喚獣は、特例として物を触れるようになってますし、きつと便利ですよ？」

あわてて瑞希がフォローに入っている。

「お。よく知ってるな姫路。まあ、教師立ち会い下でしか召喚できないし、フィードバックで疲労やダメージの何割かを召喚者が被るんだがな」

『て、ことは《観察処分者》は召喚獣がやられると本人も苦しむってことか』

『おいおい、それじゃあ、あまり召喚できないヤツがひとりいるってことじゃないか』

『『『つかえねー』』』』

「みんなヒドいっ！！」

「アキくん大丈夫？」

「明久君しっかりしてください」

「ま、ただの雑魚だ。いてもいなくても大勢に影響はない」

「そこで追い打ちかけるのっ?!」

「とにかく。まずは小手調べにDクラスを攻め落とす」

「無視すんなっ!!」

「みんな、今のこの境遇には我慢がならないだろう？」

『当たり前だ!!』

「ならばペンを執れ！ 出陣の支度を始めるぞ！」

『おおーっ!!』

「お、おー……」

雰囲気飲まれて瑞希までもが小さく拳を作って挙げていた。だが、その雰囲気に流されない者たちもいる。

「うるさいな……構図がまとまらないじゃないか」

「……不満を刺激し、名が知られていそうな人間を槍玉に挙げてのアジテーション。確かにカリスマ性もある……後はどれだけ、戦術性に富み、戦略的な思考ができるか……鍵は姫路瑞希ではなく、『観察処分者』のほうかな？ うん、面白くなってきた……」

「明久、お前にはDクラスへの宣戦布告の使者をやってもらう。大役だ。任せるぞ」

「下位勢力の使者って、たいがいヒドい目にあうよね？」

「大丈夫だ。たかが学生の戦争ごっこで本当に危害を加えるわけはない」

「ほんとうに？」

「もちろんだ。俺は友人をだますような真似はしない」

「じゃあ、あたしが行ってくるよ」

「あー、ちよつといいですか？」

「え？ はい、何かしら？」

急に声を掛けられて訝しんだものの、ひばりに振り返った三つ編みの女の子はにこやかに答えた。

「Dクラスの代表さんはいらっしゃいますか？」

「代表？ ええ、いるわよ。平賀くん、お客さんよー」

「なんだい？ 玉野さん。お客さんって？」

「この子よ。あなたに用があるみたい。妹さん？」

「いや、知らないな。君、ぼくがDクラス代表の平賀だけど、何の用だい？」

ひばりの正体を知らない平賀は、腰をかがめて目線をあわせる。

「はい！ Fクラスの支倉ひばりです」

幼い子供のような笑顔で自己紹介するひばり。

「……え？」

平賀と玉野の二人は一瞬固まった。

「Fクラスからの使者としてきました」

そう言いつつ、ひばりはお辞儀をする。

「はあ。それはどうも……」

どうみても小学生なひばりの姿に、平賀、玉野の二人とも処理が追いつかない。

「はい、我々Fクラスは、Dクラスに対して、戦線を布告します。

開戦は今日の午後です」

「ああ、はい。……って宣戦布告？！ Fクラスが？！ 僕たちDクラスに？！」

平賀は驚きのあまり、悲鳴のような大声を出してしまった。

『どうした、平賀』

『Fクラスが宣戦布告とか聞こえてきたんだが？』

『使者が来てるらしい』

『はあ？！ Fクラスなんか俺たちに勝てるわけねーだろ？ バカにしてんのか！？』

聞きつけたDクラス生徒が集まり始める。

「バカになんかしてません！ 私たちFクラスがあなたたちDクラスをやっつけると言ってるんです！」

Dクラス生徒の暴言に、ひばりもムキになって答える。

『Fクラスのくせに生意気だぞ、やっちま……』

Dクラス生徒から声があがりかけた……が、ひばりの姿に勢いを失う。

繰り返しになるが、ひばりは童顔、低身長である。見方によっては、小学生にしか見えない。

いい年をした高校二年生が、集団でひとりの小学生につかみかかる……。

できるわけがなかった。

と、そこへ、事態を打ち破るべく、ひとりの少年が飛び込んでき

る。

「ひばり！ 大丈夫？！ たすけ、に、き……」

振り降ろしどころを求めている拳の先に、獲物が現れた。

『かかれっっ！！』

「ふぎやーっ！？ 何でこっちにっ？！」

「ア、アキくん？！ こらあ！！ アキくんをイジ……今の内に

脱出」ちよっ！？ 土屋君？！」
細身の体躯のどこにそんな力があるのか、ひばりは康太に抱えられてDクラスを脱出した。

ちなみに明久は俊夫に担がれて九死に一生を得た。

「もう！ 安全だって言ったよね？！ 坂本君！！」

ひばりはふくれっ面で雄二に食ってかかっていた。

「わかったわかった、悪かったって。ちよっとした冗談だよ」

「冗談？！ これのどこが？！ もう少しでアキくんも私も私も怪我をするところだったんだよ？！」

ひばりの怒りは収まる気配が見えない。

「ひばり」

と明久が声を掛ける。

「もついいよ。お互いに無事だったんだし、雄二を許してあげてよ」
そう言つて頭を下げる。

「アキくん……もう、アキくんは優しすぎだよ……坂本君、次は気をつけてよね？」

「ああ、わかった」

そう言つて、雄二は頭を下げた。

「明久君、ひばりちゃん大丈夫でしたか？」

二人の様子を見て、瑞希が小走りに寄つてくる。

「あたしは平気だよ。特に何もされてないし。でもアキくんは大丈夫？」

「はは、大丈夫だよ姫路さん、ひばり。ちょっと制服が破れたくらいだから」

そう言つて明久が笑う。

「そう、よかった……。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」
いつのまにか近づいていた美波が冗談めかす。

「島田さんはアキくんに近づいちゃダメ」

と、ひばりが間に割つてはいる。

「ちよっ！ 何よ支倉。ウチだって吉井のこと心配して……」

「どうだか。なんのかんの言つてアキくんに暴力を振るうつもりだったんじゃないの？」

言いながら、ひばりは、美波を軽くにらみつけた。

「そ、そんなわけ無いでしょ？ほんとに心配して……」

言い募る美波の顔は真面目に心配しているようだ。

「ほら、おまえら。今からミーティングすんぞ。ついてこい」

「……行こう。アキくん、瑞希ちゃん」

ひばりは美波から目を逸らすと、明久の手を取り、雄二の後を追つて歩き出す。

「ひ、ひばり」

「ま、待って下さい、ひばりちゃん」

明久はひばりに引つ張られるように歩きだした。瑞希もそれを追うように教室を出ていった。

「なによ。ウチだって、ウチだってほんとに心配したんだから……」
美波は、ひとりつぶやく。

と、耳に息が吹きかけられた。

「ふえひゃわあゝゝゝ／＼／＼っ?!?」

あわてて振り向くと、金髪碧眼の少女が楽しそうに立っている。

「な、なな、なにすんのよゝっ!」

怒りと羞恥で目をグルグルにしながら美波は怒鳴った。

「あつはっはゝ 美波は可愛いねゝゝ あ、美波。あなたのこと美波って呼ぶけど良いよね? わたしゃ、クリスティーナ。クリスでいいよ?」

怒声を流しつつ、クリスは自己紹介した。とても馴れなれしい。

「……えと……何か用? クリス」

美波は探るように聞き返す。「ん? 意地っ張りも大概にしないと、気づいて貰えないよんゝ」

クリスはニコニコしながらそんなことを言う。

「べ、別にウチは意地なんて……」

美波は否定しようとして言い淀んだ。

「まあ、さっきのはひばりちゃんにも問題アリかな?」

「? それってどういう……」

「ひとそれぞれに理由があるってこと。ホラホラ、置いてかれるよ?」

そういうと、美波の背を押し始める。

「ちよっと! わかったから押さないでよ!」

そう言いながら美波たちは、明久たちの後を追った。

屋上に通じる扉を開けてくぐると、太陽の下にでる。
雲ひとつない青空に、優しい春風が吹いた。

その春の日差しに、はためく瑞希のスカートに注視するムツツリ
ー二以外のメンバーは目を細める。

「支倉、宣戦布告はしてきたんだな？」

雄二はフェンス前にある段差に腰を下ろしながら聞いた。

「うん。今日の午後開戦って伝えておいたよ」

「それじゃ、先にお昼ご飯だね」

「そうなるな。しっかり腹ごしらえしとけよ？ 明久」

「わかってるよ」

「アキくんのお弁当はちゃんと用意してあるから大丈夫だよ」

ひばりがニコニコしながら言うと、ムツツリー二が目をむく。

「妬ましい……」

「なるほど、今までの弁当は、全部、可愛い幼なじみのお手製か？」

「全部ってわけじゃないよ。半々くらいかな？」

「アキくん……三、四日に一回しか作らないのは半々って言わない

よ……」

「あれ？」

「まあ、つまり明久も弁当作れるということじゃな」

どこか苦笑しながら秀吉もつぶやく。

やりとりをみていた瑞希は、何かを決心して顔を上げる。

「じゃ、じゃあ今度からは、私もそのローテーションに入れて下さ

い！」

「ほお」

「なんと」

「……」

雄二たちは積極的な瑞希の発言に感嘆する。が、反対に明久とひばりの表情が曇った。

「ひ、姫路さん……無理しなくても……」

「ん？ なんだ明久、嬉しくないのか？」

「なに言ってるんだよ雄二！ 姫路さんの手料理なら、たとえこの胃が溶け落ちても完食しきってみせるよ！ って、しまった！」

「ア、アキくん……」

ひばりは苦笑いする。

と、今まで黙っていた美波が口を挟む。

「ふーん。姫路さんってずいぶん優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

言われて瑞希はあわてる。

「あ、いえ！ それじゃあ皆さんにも……」

「お？ 俺たちにもか？」

「は、はい。お嫌でなければ」

「それは楽しみじゃのう」

「……………（コクコク）」

「うーん、楽しみになってきたねー」

「はあ。じゃあ、明日はあたしもみんなの分作るよ。瑞希ちゃん、いつしよにやる？」

「あ、はい一緒に作りましょうね」

その様子を見ていた美波は、なんだかおもしろくない気分になってきた。

「…………ウチも」

「え？」

突然拳がった声にみんなが振り向く。

注目された美波は少し頬を染め、目を逸らす。

「ウチも、みんなに作ってきてあげる。なんだかけしかけちゃったみたいになっちゃったし……」

そう言ってそっぽを向いた。

「はは、それじゃあ、明日はごちそうだな」

「これはしっかり腹を空かしておかねばのう」

「…………（コクコク）」

「そうだね、島田さんのお弁当もたのしみだなあ」

「そ、そう？ 楽しみなんだ」

「うん。どんなお弁当なのかきたいしておくね」

「~~~~~／／／」

屈託なく笑う明久に、美波が赤くなる。

「おやおやあゝ？ 美波、顔が赤いよゝ？」

「ク、クリス、やめてよもう……」

顔を赤くした美波を、クリスがからかう。

「ふふふ。そうだ、島田さんも、私たちと一緒に作りませんか？」

横で楽しそうに美波たちを見ていた瑞希はそう提案した。

「瑞希ちゃん？」

突然のことに、ひばりは驚く。

「いいですね？ ひーちゃん」

「ひーちゃんて……。もう、みっちゃんは……。良いよ。島田さんいっしょにやるっか」

「えっ?! でも支倉は……」

「……正直、さっきは言い過ぎたかなって思ってる。ごめんなさい」

「あ、ええとウチこそ……」

すこし、言い淀むがまっすぐひばりに向き直った。

「ウチも、吉井にヒドいこと言ってごめんなさい」

二人で頭を下げ合う。

と、そこへクリスが近づく。

「よーっし。この件はこれでOKかな。ちなみにおねーさんも味見役で参加したーいぞ」

「いや、この流れはあなたも作るんじゃないの？」

「ちゃっかりしているクリスにひばりがツツコむ。

「いやあっ。おねーさん……料理できないんだよねい。でもでも、ガールズトークには参加したいんだよ。ね？ いいでしょ？
でしょ？ おゝねゝがゝいゝ」

「はあ、わかりましたよウエストロードさん」

ひばりは疲れた顔でOKを出す。

「あーん、ひばりちゃん大好きー。でも、おねーさんのことは、クリスって呼んでくれると嬉しいな」

「……じゃあ、クリス。よろしくね」

ひばりは苦笑いをしながら了承した。

「よし、その件はここまでだ。試召戦争の話に戻ろう」

雄二のその言葉で、みなのもやもやが切り替わる。

「雄二。一つ、気になっていたんじゃが、どうしてDクラスなんじや？ 段階を踏むならEクラス。勝負にでるなら直接Aクラスじゃろう？」

秀吉が疑問を提示する。

「そつえばそうだね」

ひばりも不思議そうに首を傾げる。

「ああ。確かに理由はある」

雄二は鷹揚にうなずいた。

「どんな理由ですか？」

「理由はいくつがあるが、Eクラスを攻めない理由は簡単。戦うまでもない相手だからだ」

「え？ でも、クラスは僕らより上だよ？」

「振り分け試験時点ではそうだったかもしれない。だが、実際はちがう。明久、いまおまえの目の前にいるメンツをよく見る」

言われて明久は改めて周りのメンバーを見渡す。

「美女が一人と美少女が二人、美少女が一人にバカ二人とムツリが一人いるね」

「ヒドいよ、アキくん！ あたしそんなにちっちゃくないよー！」

「誰が美少女だと！？」

「ひばり落ち着いて？！ そして、何で雄二が美少女に反応するの！？」

「ありゃあ、おねーさんムツリよばわりは傷つくにゃあ」

「……………（ポツ）」

「クリスにムツリーニまで！？ どうしよう、ばくのツツ」
「能力じゃ対処しきれないよ！」

「まあまあ。落ち着くのじゃ皆の衆」

カオスになりかけた空気を、秀吉が治める。

「そうだな。ま、要するにだ。姫路に問題がない以上、正面からやりあってもEクラスには勝てる。俺たちの目標は、あくまでもAクラス。Eクラスとやり合っても、得るものは無い。だったらやる必要はないだろ？」

「なら、Dクラスとやり合うことには、意味があるってことだねい」「クリスの言うとおり、Dクラス戦はAクラス打倒に必要なプロセスだ。それに、派手にやって景気づけにしておきたいしな」

そう言つて、雄二が力強い笑みを浮かべる。

「あ、あの！」

不意に瑞希が大きな声をあげた。

「ん？ なんだ姫路」

「坂本君たちは、前から試召戦争について話し合っていたんですか？」

「ああ、それか。じつはさっき、姫路のためにつて明久に相談されて『それはそうと！』」

雄二の言葉を遮るように、明久が大きな声を出す。

「さっきの話、Dクラスに勝てなきゃ意味がないと思うけど？」

「負けるわけがない」

切つて捨てる。そして、その場にいるメンバーを見渡した。

「おまえ等が俺に協力してくれれば、必ず勝てる」

力強い言葉。

「いいか、おまえら。ウチのクラスは……最強だ」

根拠のない言葉。だが、その言葉は確実に、彼らに力を与えた。

「いいわね……面白そうじゃない！」

「なんかやれそうだって気になるね」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「うっん」 燃えてくるわね」

「……………（グッ）」

「やろう！ みんな！」

「が、頑張りますっ」

意気をあげるみんなに雄二は笑いかける。

「よし、作戦を説明する」

屋上へ続く階段。扉を挟んで、彼らの会話を聞いているものがある。

サラリ。

長い黒髪が揺れた。

「やっぱり面白くなりそう……」

「そうだね、まあ、Dクラス戦じゃ私らの出番はないだろ。ねえ？
アキ」

「ええ、そうねカオルさん」

人影は一つ。

だが、二人の声。

雄二たちがミーティングを終える頃には、彼女の姿はなくなっていた。

第三問（後書き）

少し美波ちゃんに悪いことをしてしまいました。美波ファンの方ゴメンナサイ。つぎは、いよいよDクラスとの戦闘です。あと、本作では、バカテストを入れるつもりはありません。ひばりはわからない問題に珍回答しない娘なんで。そちらを期待されている方は申し訳ありませんです。

第四問（前書き）

第四問です。楽しんで読んでいただければ幸いです。

第四問

「吉井！ 木下たちがDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ってたわよ！」 旧校舎の廊下をポニーテールの少女が駆ける。報告を聞きながら、明久は真剣な面もちでつぶやいた。

「ああ、胸か」

「ア、アンタの指を……く、自重しなきゃ、自重……」

明久のつぶやきが聞こえたのか、美波は肩をワナワナとふるわせる。

不穏な空気を感じ取った明久は、

「そ、それよりも！ 試召戦争に集中しないと！」
などと言ってごまかした。

前線では、秀吉率いるFクラス先遣隊が戦端を開いており、明久たちからも、展開されたフィールドに召喚獣が召喚される様が見えた。

明久と美波は渡り廊下とFクラス中間点、Eクラス近辺に中堅部隊を展開している。

と、鉄人の姿が見えた。

『戦死者は補習だ！』

『ヒ、ヒイツ？！ て、鉄人？！ イ、イヤだ！ 補習室だけはっ！』

『黙れ！ 負け犬が！ 戦死して捕虜になった者は、今日の戦争が終了するまで、補習室で特別講義を受けさせてやる！ 終戦まで何時間かかるかはわからんが、たっぷり指導してやるぞ？』

『あ、あんな拷問、耐えられるわけが……』

『拷問？ そんなことはせん』

そう言って鉄人がニヤリと笑う。

『補習が終わる頃には、趣味は勉強。尊敬する人物は二宮金次郎という具合に、理想的な生徒に改ぞ……仕立てあげてやろう。楽しみ

にするといい』

『あ、悪魔だ！　だ、誰か助け……』

明久の表情が真剣なものになる。

「よし、島田さん、全中堅部隊員に通達だよ」

「なに？　何か作戦でも思いついた？」

引き締まった顔で、明久は宣言する。

「総員退避！」

「馬鹿あつ！！」

「ぶるおぐえつしゃああ！？！」

腰の入った良いアッパーである。

「ああ、思わず殴っちゃった……支倉ゴメンやっぱりウチには耐えられないっていうか、きつと支倉も殴ると思うの」

美波はブツブツ言いながら明久に向き直る。

「吉井、あなたまがりなりにも中堅部隊の部隊長でしょ？　真つ先に臆病風に吹かれてどうするのよ。ウチら中堅部隊は、前線の木下たちの援護が任務なのよ？　消耗した木下たちが補給を終えるまでは、ウチ達が前線を支えなきゃならない。そしてウチ達の背後には、もう本陣であるFクラス教室しかないのよ」

それを聞いて明久はハツとなる。

「島田さんゴメン。ぼくたちが逃げだしたら、戦線が崩壊してイツキに押しこまれちゃう。そうなったら絶望的だ」

「ええ。だからウチ達は頑張らないといけないの」

「わかったよ、島田さん。とにかく今は、勝利することを目指そう」

「わかったわ。大丈夫よ、吉井。一対一ではかなわないけど、多対一に持ち込めば勝機はあるわ」

「そうだね、やろう！」

「吉井隊長、前衛部隊が後退を開始したぞ」

明久と美波の頬を、冷や汗が伝う。

「吉井……ウチらガンバったわよね」

明久は、『えっ?!』という文字のような顔になった。

「……うん。くやしいけどここまでのようだね」
二秒で同調した。

「よし！ 中堅部隊は……」

「明久よ！」

と、そこへ駆け寄ってきたのは、前衛部隊隊長の秀吉だ。

「秀吉！ いつも可愛、じゃなくて、無事だったんだね？」

「なにやら不本意な事を言われたような気がするのじゃが」

「気のせいよ。それより後退が早いわね？ 何かあったの？」

「いや、大したことはないのじゃ。前線を前田と二人で支えておつたのじゃが、良いのを貰ってしまつての。前田の薦めもあつて点数の減つた一部の者達と後退してきたんじゃ」

言われて渡り廊下の方を見れば、先頭に立つ、大きな背中が見えた。

「……よし、美波、俊夫の援護に向かう」

「そうね、仲間を見捨てるわけにはいかないもの」

そういつて明久と美波は視線を交わしてうなずいた。

「うむ、ワシもすぐに点数を回復して戻る。後は頼んだぞい」

そう言つと、秀吉はFクラスの教室へ駆けだした。

「よし、中堅部隊はこれから前線部隊と合流して戦線を立て直すよ
！」

「おうっ！」

なんのかんの言つても、明久のことをキチンと隊長扱いしているらしい中堅部隊は、そのまま前線へと突入していった。

「おまたせっ！ 俊夫！ こっちと交代して、回復試験を受けてきて！」

「おう！ 明久に島田か！ おれは、よつと。まだ大丈夫だ。おりや！ 消耗した先遣隊の連中を後退させてやつてくれ。せいっ！」
言いながら相手召喚獣の攻撃を捌く。

武器もなく、手足を覆つた手甲と脚甲のみで戦う俊夫の召喚獣は、

武器としても設定されている、大きめの手足で相手の攻撃を逸らしながらカウンターを決めている。

「よっし、ばくも！ 試獣^{サモン}召喚っ！」

掛け声とともに、学ランをまとい、木刀を持ったディフォルメ明久が現れる

「チツ、増援か」

「いや、よく見る。雑魚だ」

「あの程度なら無視してかまわん」

「それより、こっちのデカいのがシブトい」

「囲んで押しつぶせ」

「ひどいや……」

「あつはつはつ！ 相変わらず言われ放題だな？ 明久は」

俊夫は攻撃を捌きながら豪快に笑う。

「あいかわらず器用なことしてるね」

無視された明久は、俊夫の戦いを見ながら感想を漏らした。

「いやいや、全然ダメだな、っと。徐々に点数が削られてるな！
っと」

ズドンッ！！

廊下に轟音が響く。気づいたときには、俊夫の召喚獣の拳が、あいて召喚獣の顔を貫いていた。

「っと、心臓を狙ったんだがな。やはり、明久くらいの精密操作が
できんと話にならん」

その表情に余裕はない。

「くそ、くらえっ！」

俊夫の召喚獣に向けて突撃する他の敵召喚獣。しかし、
「てい」

いつの間に回り込んだのか、明久の召喚獣がその足を木刀で引っ
かける。

「！」

足を引っかけられた召喚獣は、つんのめってバランスを崩した。

「せいりや！」

力強い震脚とともに、俊夫の召喚獣が肩から突っ込む。

『~~~~っ!!』

カウンター気味にそれを貰った相手は、顔面が跳ね上がるように吹っ飛び、そのまま地面に叩きつけられる。

「ハッハア！ ナイスアシストだ明久！」

「どういたしま……」

「吉井！ 危ない！」

鋭い声とともに、明久の召喚獣に迫る刃を美波の召喚獣がサーベルで受け止める。

「ありがとう！ 島田さん！」

「気をつけて。徐々に戦死者が増えてきて、周りを囲まれ始めてる」「まずいね。ぼくや島田さんはともかく、俊夫が戦死するのは避けたいかな」

「なに言ってやがる。おまえ等が戦死するのだって十分マズい、だろっ！」

言いながら敵を殴りつけるが、大したダメージにならない。

「チ、調子に乗って消耗しすぎたか」

「秀吉達はまだ？」

「まだみたい」

「く、どうする」

徐々に劣勢になっていく味方部隊。

「あ！ そこに居られるのは、美春のミスウィート美波お姉さま！ 五十嵐先生、早くこちらに！」

そう言いながら縦ロールツインテ少女が美波に向かう。

「み、美春？！ く、抜かったわ」

美波はあわててそちらにサーベルを向けさせる。

少女はかまわず叫んだ。

「行きます！ 試獣^{サモン}召喚！」

美春と呼ばれた少女の足下に、幾何学的な魔法陣が現れた。そし

て、召喚獣が姿を見せる。

その姿は、デIFOオルメされた本人そっくりだ。

「……お姉さまに捨てられて幾数日、美春は、美春はこの瞬間を待ち続けていました！」

「もう！ いい加減うちのことは諦めなさい！」

その言葉とともに、美波の召喚獣が打ち掛かる。

「イヤです！ お姉さまは、いつまでも……いつまでも、美春のお姉さまなんです！」

繰り出された一撃を、美春の召喚獣が受け止める。

「来ないで！ ウチは普通に男が好きなの！」

「嘘です！ お姉さまは美春のことを愛しているはずですよ！」

どう見ても美波は本気で嫌がっているはずなのだが、美春にはそう見えないらしい。

「たあああつ！」

「やあああつ！」

すさまじい気迫に周囲の戦闘が一時的に止まる。

「て、やあ」

「負けません！」

何合かの打ち合いがあつたが、その全てで美波の召喚獣は打ち負ける。

「まずいな、島田の召喚獣と相手の召喚獣の地力が違いすぎる」

「島田さん！ 点数が上の相手に、正面から打ち合っちゃダメだ！」
「明久も必死にアドバイスするが、」

「そんな、こと、言われても、細かい、動作は、できない、のよ、きやつ！？」

力負けした美波の召喚獣が武器を弾かれる。

「ここまでですっ！」

そのまま倒れた美波の召喚獣に、美春の召喚獣が剣を突きつけた。二人の召喚獣の頭上に94と53が表示されている。当然、美春が94で美波が53だ。

「さ、お姉さま、勝負はつきました」

「うっ、ほ、補習室は嫌あつ！」

「補習室？……フツ。そんな無粋な場所へお姉さまを送り込んだりしませんわ。さあ、参りましょう」

そう言つと、美春は美波の手を取つた。

「な、なにを……」

「この時間ならベッドも空いてますわ」

感極まつたように笑う美春と対照的に、美波の顔は真っ青になつた。

「ひっ！ よ、吉井、フォ、フォローを……」

「邪魔をすれば殺します。誰であろうとも……」
本気の殺気に俊夫ですら動けない。

「くっ、山ごもり中に出会つた月の輪熊を遙かにしのぐプレッシャーだと……本当に人間なのか？ コイツは……」

「よ、吉井……」

半泣きになつて明久に手を伸ばす美波。それを見た美春の殺気が、明久に向かう。

「邪魔者は！ コロスツ！！」

叫びとともに、明久の召喚獣に襲いかかる。

「ひえっ?!」

とつさのことに、明久は対応できない。

「危ない！ アキくん！ 試獣^{サモン}召喚！」

魔法陣が展開され、ブルーのアーマーを纏つたひばりの召喚獣が飛び出し、手にした剣で美春の召喚獣を斬り裂いた。

その頭上には124と表示されている。

「そ、そんな……」

召喚獣を一撃で倒された美春は、呆然と立ち尽くした。

「戦死者は、補習……」

「ハッ?!」

美春は即座に逃げだそうとしたが、あっさり鉄人に捕まる。

「お姉さま！ 美春は諦めませんからね！ 無事に卒業できると思わないでくだ……」

それは想い人への言葉としてはいかなものだろう。

その場に残された全員がそんな顔をしていた。

「アキくん、大丈夫だった？」 「うん、ぼくはだいじょうぶだよ、ひばり。それより島田さんが……」

そう言つて、明久が美波の方を向くと、美波が明久に飛びついた。
「グヒ？！ 島田さん、いくらぼくがたすけられなかったからつて、ベアハッグから流れるようなバックドロップはかんべんして……」
と、そこで、明久は美波が震えていることに気づいた。

「ウ、ウチ……も、もうダメかと……」

「だいじょうぶだよ、島田さん。彼女……えっと、清水さんだっけ？ 彼女なら、もう鉄人に連行されたから」

「うん、うん……」

「五十嵐先生は化学だっけ？ 教室にもどつて回復してきなよ」

「うん……吉井、ありが……」

「助けたの、あたしなんだけど？」

美波の言葉を遮つて聞こえたのは、ひばりの声だ。

周囲の敵を駆逐しながら、引きつった笑顔で二人を見ている。

「え？ ひばり、なんで怒ってるの？」

「支倉、こ、これは……その……」

「そ・ん・な・余・裕・が・あ・る・な・ら」

言葉を区切りながら二人に近づく。

合わせるようにして、二人は後ずさる

「早く戦線に、戻りなさいっ！」

「「は、はいいい……」」

明久と美波はあわてて戦線に戻った。

渡り廊下戦は、ひばりの参戦でどうにか持ち直した。

結局、美波は俊夫とともに教室へ回復試験を受けに行っている。

「どうにかなりそうだね」

「そうだね」

「ひばりどうしたの？ さっきから機嫌わるいよ？」

「べつに」

余裕が出てきて明久はひばりに話しかける。しかし、ひばりはそっけない。

思い当たる伏がない明久は、なんとか突破口を開こうと、先ほどの顛末を話し始める。

「……で、その清水さんをひばりがたおしてくれたんだけどっ、はなしを聞かない性倒錯者につれて行かれそうになるなんつ、て、島田さんも災難だよね」

「……た、しかに、それは嫌かも……」

そう言ってひばりは吐きそうな顔になった。

「本人同士が納得してるならまだし、もっ、片方が真剣に嫌がつているの、に、気づかないで、自分の気持ちだけ押しつけてもねえ」

「まったくだよ、ね、つと。ほいひばり」

「ちよいさ」
二人は雑談しながら戦っていた。そのコンビネーションは抜群で、二人で戦線を維持していると言っても過言ではなかった。

「と、アキくん危ない」

「おっと、ついでに足ばらい」

「ほい、トドメっ」

「何でこんなにきれいに連携できるんだ？ コイツらは」
Dクラスの前線部隊を指揮している塚本は啞然となる。

召喚獣の操作は、意外と難しい。

馴れないうちは突撃させたり、武器を大振りさせるのがやっとなのだ。

正直、味方との関係プレーなど、考える暇もない。

しかし、明久とひばりは長年のつき合いから、お互いのことをよく知っている。

相手が次にどうするのか、どうして欲しいのかを知ることなど造作もなかった。

また、明久が操作に慣れているのも大きい。まだ、操作に慣れてないひばりをフォローする余裕すらあるのだ。

『明久、支倉！ 無事か？！』

よく通る声が響く。

雄二の声だ。

「雄二！」

「本隊が動いたみたいだね」

これを見た塚本は、残るDクラス残存兵力とともに後退し始めた。

「よし、こちらに残存戦力を回収して、一度、教室に戻るぞ」

こうして、一時的にせよ両軍は戦力の回復をはかるために撤収した。

「よくやったな明久。おかげで、補給組はだいぶ回復できた」

「そう？ じゃあ、もしかして……」

「ああ、授業を終えて下校する生徒も、教師も増えている。頃合いだろう」

雄二はニヤリと笑って回復を終えた2・Fのメンバーに振り向く。

「さて、そろそろDクラス代表の首級を獲りに行くぞ！ 俺も出る

！ みんな続けえっ！」

『『『『『おおー！ー！ー！ー！ー！ー！』』』』』

こうして、Dクラス戦の最終局面が始まった。

下校生徒に紛れて半包围する。Dクラス一人に対し、3〜4人で一斉攻撃を行い、瞬時に倒すことで、反撃させることなく撃破していく。

「必ず複数であたれ、決して一人で挑もうとするな！」

雄二が指示をとばす。

『Dクラス塚本を討ち取ったぞ！』

そんな声が聞こえた。

そのときだ。

「援護に来たぞ！ もう大丈夫だ！ 落ち着いて取り囲まれないように動け！」

こちらにもよく通る声が響く。

Dクラス代表の平賀だ。

「Dクラス本隊が来たぞ！」

これで、この周辺には双方の主力が集まったことになる。

「正念場だね」

「そうだね、ひばり、行こう」

そう言って明久はひばりと二人で飛び出す。

「本隊の半分はFクラス代表の坂本を狙え！ 残りは包囲されている者を救出だ！」

平賀の号令に、Dクラス部隊は即座に反応する。

雄二を中心としたFクラス本隊はあつと言う間に囲まれてしまった。

「Fクラス、撤退だ！ 分散して敵を攪乱しつつ後退するんだ！」

「逃がすな！ 個人戦ならそうそう負けはない！ 追いつめる！」

声に従い、Dクラス部隊は追撃に移った。

「！ ひばり、チャンスだ」

みれば平賀の周囲はガラガラだ。「うん！ 向井先生！ Fクラス支倉と」

「吉井明久が……」

「Dクラス玉野美紀が受けます。試獣召喚^{サモン}」

ふたりで仕掛けようとした瞬間、三つ編みの少女が割ってはいる。「近衛隊？！」

ついで四人ほど参戦してくる。

「悪いけど、君の動きには特に注意させて貰ったよ。小さなFクラス使者ちゃん」

「！　ちっちゃくないよっつ！！」

「宣戦布告の時は呆気にとられたけど、居るといのがわかっていれば、警戒するのは簡単だよ。むしろ、隠し玉にすべき人間を使者に立てるあたり、やはり、所詮はFクラスという事だね」

そう言って、平賀は鼻で笑う。

「成績は良いらしいから、この人数で確実に勝たせて貰う。君たちはここでおしまいだ」

「たしかに絶体絶命だねひばり」

「そうだね、近衛を倒しても平賀君は倒せないかも」

二人で平賀を、いや、その後ろを見つめる。

「だから、みっちゃん。後はよろしくね」

そう言ってニヤリと笑った。

「???　みっちゃん？　何を言ってるんだ？　君たちは……」

困惑する平賀は、後ろから肩を軽く叩かれた。

「あ、あの……」

振り向くと、あの有名な姫路瑞希が立っている。

「あれ？　姫路さん。Aクラスはこの廊下を通らなかったはずだけど、どうしたんだい？」

「いえ、そうではなくて……Fクラスの姫路瑞希です。よろしくお願いします」

「あ、はい。どうも」

瑞希の丁寧なお辞儀に、平賀も頭を下げる。

「えと、Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます」

「……はあ」

「あの、さ、試験^{サモン}召喚です」

呆然としながら平賀も召喚獣を召喚する。

その頭上には、それぞれ、339と129と表示されている。

「え？　……あれ？」

「ご、ごめんなさい！」

瑞希の召喚獣が、手にした巨大な剣を素早く振るうと、平賀の召

喚獣は、脳天から真っ二つになって倒された。

第四問（後書き）

第四問、いかがだったでしょうか？着地点は変わりませんが、原作とは、また変わった進み方になってます。ひばりのおかげで、美波の暴力が、少しソフトになりました。原作ファンの方には物足りな
いかな？あと、ひばりの召喚獣の描写が少なすぎて、イメージしづ
らいかと思います。ブルーのブレストアーマーを着た、デIFOル
メひばりです。得物は日本刀で、スピードタイプの召喚獣です。そ
れでは、また次回、お会いしましょう。

第五問（前書き）

少し遅れましたが第五問です。なんか、まとまり悪い感じで作者はしょんぼり気味ですが。それでは、読んでくださる方が楽しんでいただければ幸いです。

第五問

Dクラス代表 平賀源二 討死

その報を受けた両軍の様子は、対照的だった。

Dクラス生徒は、一様に肩を落とし、Fクラス生徒は拳を突き上げて喜んでいる。

「バカ騒ぎは終わった？」

「ええ、終戦したみたいです」

「ふーん。まあ、あたし等には関係ないわね」

「そうですかね？」

「？ どういうこと？ 御鳥」

「優子は気にしてなかったたので知らないでしょうが、今回の戦争は、FクラスがDクラスに攻め込んだんですよ」

「はあ？ Fクラスが？ Dクラスに？ 勝てるワケないじゃない」

「いえ、どうもFクラスが勝ったようです」

「Fクラスがつ？！ どんな裏技使ったのよ……」

「裏技って程じゃないみたいだな。見てみなよ」

二人の少女の会話に、一人の少年が加わる。

「あれって……まさか姫路瑞希！」

「ああ。まあ、彼女一人で押し込んだわけでもないようだ」

「どうしたの？ 祐介」

「Dクラスとやり合った割には、Fクラスの被害が少なく感じる……」

「Dクラスが不甲斐無いつてだけでしょ」

そういつて、優子は肩をすくめる。

「……そうやって油断して、足元をすくわれるのか？」

「なんですって？」

祐介の皮肉に、優子は柳眉を逆立てる。

「やめなよ、ふたりとも」

「……クラス内でのめ事は禁止」

「愛子に代表……わかったわ。とりあえずそうね……Fクラスの情報でも集めましょうか」

「Bクラスの室外機を壊せと？」

平賀は雄二に聞き返す。

「そうだ。次のBクラス戦に必要な措置だからな」

「なんともまあ、頑張るものだな。正直ついていけん。まあ、設備破損で教師に目を付けられるだろうが、それで教室の交換をしないでくれるなら、願ってもない。要求を飲もう」

平賀はあきらめた様子で瞑目した。

「タイミングはこちらで指示する。よろしく頼むぞ」

「ああ、すまないな。君らがAクラスに勝てるよう祈ってるよ」

「くくつ、リップサービスは必要ないぞ？」

「そうかい？ ま、社交辞令だよ」

そういつて、平賀は立ち去る。

「さて、皆！ 今日のご苦労だった！ 明日は消費した点数の補給をするから、今日のところは帰って「ちよつと待って！」どうした支倉」

「えと、みんな疲れているところを悪いんだけど、簡単に教室の掃除をしたいから誰か手伝って欲しいんだけど」

「あはは、ばかだなあ、ひばり、Fクラスの間みんながそんな面倒なこと手伝うわけじゃないか」

「……アキくんは強制参加ね。ほんとにだれも手伝ってくれないの？」

「ふむ、みんな疲れているだろうし、Aクラスの設備が手には入れ
ば用済みになるからな。積極的に掃除しようとは思わないだろう」

雄二はひばりに、そう解説した。たしかに無くなってしまうものを
掃除しようとは思わないだろう。

「でも、短い間でも、私たちの教室だよ？　なるべく綺麗にしたい
んだけど……」

ひばりは懸命に訴えるが、色良い返事はもらえない。

「そっか……頑張ってくれた人には、明日、デザートを作ってきて
あげようと思ったんだけど……」

ザッ！

Fクラス生徒の足が、男女問わずに止まった。

「じゃあ、ひばりのデザートは、ぼくがひとりじめかな？」

そう言いながらも、明久は苦笑いを浮かべていた。

「しかたない、行こっか？　アキくん」

「まて！」

連れ立って歩きだそうとした二人を制止する声。

振り返ると、Fクラス男子勢がキリツと引き締まった表情で立っ
ていた。

「……クラスメート女子の手作りスイーツが食べたい（俺たちも
手伝おう）……！」

本音と建て前が逆転していた。

「し、しまった！　つい建前を隠して本音を叫んでしまったーっ！
頭を抱えて七転八倒するクラスメートたち。

「あ、あははは……」

ひばりはもう苦がりきった笑いをこぼすだけだった。

「掃除をしてみると、改めてヒドさを感じるな」

そう言って雄二は一つ息をつく。

「あたしもここまでとは……」

その横で、げっそりとした表情のひばりがつぶやいた。

「まさか、半分以上の畳が腐りかけているとは……」

結局、クラス総出で手早く終わらせようと言う雄二の意見もあった、全員で掃除を始めたのだが、開始五分であび叫喚の地獄絵図となった。

結論から言えば、生半可な清掃ではどうにもならないことが判明した。

壁のスキ間はそこかしこにあり、黒板はひび割れ、窓ガラスは割れてないものを探すほうが早かった。極めつけは、畳である。

踏んだ感触がおかしいことに気づいたひばりが、男子数人の手を借りて畳をめくると。

「ギイヤアアアアアッ!!」

「く、腐ってやがる……」

「まだ早すぎたんだ……」

「ふ、腐海があふれる……」

とまあ、そんな言葉が誰知らず出てくるくらいひどい。

画像がグロいので、モザイクまで掛かってしまっている。

これを見たひばりは、急遽掃除を断念。全ての畳のチェックを始めた。

結果は惨憺たるありさまで、腐りはじめ程度のものまで含めると、半分以上の畳が腐っていることが判明した。

「どおりで、すき間やガラスがはまってない窓が多い割には臭うと思っただぜ」

雄二も頭が痛いとはかりに額を押さえて天井を仰ぎ見た。

が、すぐに真剣な表情で周囲を見回す。

「みんな見たか?! この教室はここまでひどいということだ! これを我慢できるのか?! 俺たちはたしかに成績不良者の集まりかもしれない。だが、ここまでの仕打ちには、もうガマンがならない! そうだろう?!」

『そつだ! 俺たちだって人間なんだ!』

『こんなのは差別だ! 奴ら(Aクラス)にも味あわせるべきだ!』

「姫路さん、結婚して下しあ！」

「支倉とチュツチュしたい！」

若干妙なのが混じっているが、雄二は無視した。

「そのとおりだ！ 俺たちはつかみとるんだ！ 人間にふさわしい教室を！」

『『『『『『『『』』』』』』』』

Fクラスが気炎を上げる。

「坂本君」

「なんだ？ 支倉」

「乗せるのうまいね」

「なに、このくらいはなんということもない」

そう言々と雄二は、ひばりの頭に右手をボンと乗せた。

「う？ な、なに？」

ひばりは何事かと雄二を見上げる。それを受けて、雄二は何か気づいたような顔になった。

「……いや、乗せやすいなと」

言いつつひばりの頭をワシワシと撫で始める。

「ちょ！ な？！ や、やめてよ！ 坂本君！」

突然のことにひばりは目を白黒させるしかない。

「支倉、お前、撫で心地いいーな！。小動物愛でてる気分だ」

「なっ？！ ち、ちっちゃくないよっ？！ あたし、そんなにちっちゃくないよっ？！」

ひばりは必死で雄二を遠ざけようと手を伸ばすが、とどかない。

「わーんっ！ あたし、ちっちゃくないもーんっ！！」

ひばりが半泣きになったので、雄二は悪い悪いと手をどける。

それを見ていた周囲の人間は、一様に『何？ あのカワイイ小動物？！』な顔をしていた。

「よし、これ以上はどうしようもないだろう。畳を戻して帰り支度だ」

雄二の言葉で皆が片づけ始めた。と、そこへ瑞希が小走りに寄っ

てくる。

「あ、あの！ 坂本君、少しお話良いですか？」

「どうした姫路」

瑞希の顔は真剣そのものだ。

「あれ？ 姫路さんどうしたんだろ？」

「なるべくまともな畳を中心に持ってきてねー！ ? どしたの？
アキくん」

「いや、なんか姫路さんが雄二にはなしかけてて」

「ありや。ほんとだ。なんか真剣に話してるね、周りなんか眼中に
ないみたい」

「……」

「……アキくん……スカートめくり放題だとか思ってたんでしょ
ね？」

「バカな?! ぼくの心の悪魔のささやきが聞こえるなんて、あな
たが神か」

「んなわけないでしょ。あんたの幼なじみを16年やってる、ただ
の女の子だよ」

明久とひばりとバカなやりとりをしている内に、二人はこちらに
近づいてきた。

「俺自身、もともと興味はあったんだがな。きっかけはコイツがそ
んな話を持ちかけてきたことだな」

「じゃ、吉井君がそんな話を持ちかけたのは……」

「さてな。そういや、振り分け試験でなんかあったらしいな。もし
かしたらそれかもしれないな。何か、譲れない気持ちがあったんだ
ろ」

雄二は楽しげに答えている。

「振り分け試験……じゃ、じゃあ、もしかして……」

「俺の口から言えそうなのは、このくらいまでか。だが、まあ、姫
路の想像は間違ってると思うぞ」

そう言いながら、雄二は自分のカバンを手取る。

「さて、明久。帰るとするぞ」

「うん」

「あ、坂本君帰っちゃうの？」

明久を伴って教室を出ようとする雄二に、ひばりが声をかける。

「ん？ なんだ支倉。また撫でられたいのか？」

「そ、それはもういいから！ そうじゃなくて、職員室まで付き合っ
てほしいの！」

ひばりは顔を赤くしながら雄二に頼む。

「職員室？ いったい何の用で？」

理由がわからず雄二は首を傾げた。

「さっきの畳のことだよ。設備に差があるのは仕方ないけど、不衛生
であることを受容する理由にはならないもの」

ひばりは瑞希のほうを少しうかがってから雄二に頼み込む。

「おねがい、こういうのは、代表から申請したほうが良いと思うし」
「フム、言いたいことはわからないではないが、試召戦争で勝ち抜
けば無用な心配だぞ？」

雄二は無駄だと言わんばかりの表情だ。

「それでも、だよ」

ひばりは真剣だ。雄二は軽くにらむようにひばりを見ていたが、
やがて折れた。

「はあ。わかったよ。先に言っておくが、通らない可能性のほうが
高いと思うぞ」

そうクギを刺してくるが、ひばりは、それでも良い、と言い、二
人で職員室へ向かうことになった。

「明久、俺のカバンを持って、校門で待っていてくれ」

「りょうかい」

ひばりも瑞希の方を向くと、

「ゴメンね？ 瑞希ちゃん。校門のところで島田さんとクリスと三
人で待っていてくれる？」

そう言つて、手を合わせてくるひばりに、瑞希は優しく微笑む。
「良いですよ？ 三人でお弁当の献立でも相談しながら待ってますね」

そう言つて二人に声をかけに行つた。

「よし、行くぞ」

雄二にうながされ、ひばりは教室を出た。

「で、どうして学園長室の前にいるのかな？ あたし達……」

ひばりは遠い目をしているが、雄二に緊張は見られない。

「おそらく、職員室で担任の福原教諭に訴えても、型どおりに申請しておくただけで終わっちゃうかもしれない。なら、最初っから一番頭に話を通して来たほうが早い」

そう言つて、雄二はドアをノックした。

「開いてるよ」

中から老女の声が聞こえる。

「失礼します」

「し、失礼します」

雄二は堂々と、ひばりは緊張気味に入室した。

そこには、机で書類に目を通してゐる老女がいた。

「二年Fクラス代表の坂本雄二です」

「おなじく、二年Fクラスの支倉ひばりです」

二人が自己紹介すると、老女は面倒そうに顔を上げ、二人をみやると、フンと鼻を鳴らす。

「あたしが学園長の藤堂カヲルさね。で？ 何の用だい？ この、すつとこどっこい共。こっちは忙しいんだよ。とつとと話な、ウスノ口」

罵倒された。

ひばりはひきつった顔で話し始めた。

「今日は、二年Fクラスの教室のことでお話があつて参りました」

ひばりが先に口を開いたため、雄二は見にまわった。その目は、面白そうなものを見る目になっている。

一方で学園長も、素早く手元の端末でひばりのデータ呼び出ししている。

「まず、最初に断っておきたいのは、私たちがこちらへうかがったのは、教室設備の向上の陳情ではなく、衛生状態改善のための陳情です」

間を取り、反応を見る。

「続けな」

「はい。文月学園では、二年次より、成績によりクラスが分けられ、設備に格差が設けられていることは周知の事実です。私をはじめとするFクラスの面々は成績不良のため最低クラスとなりましたが、それ自体は自身の努力が及ばなかったものであり自業自得であると考えます」

「ふん、わかってんじゃないか」

言いながらも端末に記された、試験を途中退席した理由にも目を通していた。

「はい。ですが本日、教室の清掃を行った結果、ある事がわかりました」

「……何がわかったんだい」

「Fクラス教室が、学生では手の施しようがないほど劣悪な衛生状態だという事です」

「……さっきあんたも言ったように、設備に格差があるのはこの学園の方針だよ」

「わかっています。ですが、衛生状態は、設備じゃありません」

ひばりの言葉に、学園長の目が、スウツと細まる。

「振り分け試験時、監督をされていた教師の方はこう言われました。『体調管理も試験のうち』だと」

「ふむ。で？」

「はい、私は衛生状態の改善も体調管理の内であると考えます。し

たがって、教室の清掃を行いました。しかし、学生の手が及ばない部分には手の出しようがありません」

「だから、陳情に来たと、そういうことだね」

「はい」

ひばりは緊張した面持ちでうなずく。

学園長は少し考えてから答えた。

「……いいだろ」

その様子に、雄二は軽い驚きの表情を浮かべている。

「ただし、全部とはいかないねえ。こちらで吟味させてもらうから、リストを作りな」

「あ、はい！」

「あと、業者の手配が面倒だからね。入れ替え等はお前達自身でやるんだ。いいね」

「はい！ ありがとうございます！」

「ありがとうございます、学園長」

ひばりが頭を下げるのにあわせて雄二も下げる。

「そのデクノボーは何しに来たんだい？」

雄二の額に青筋が浮かぶ。

不穏な空気を感じて、ひばりが取り繕う。

「あ、あの、あたしが無理言って付き添ってもらったんです！」

「まあ、いいさ。リストは一週間以内に、担任を通じて提出しな。」

リストの作成は支倉お前さんが責任を持ってやるんだよ。いいね？
わかつたらとつとと失せな」

そう言って学園長はシッシッと手を振った。

「はい！ 失礼しました！」

「失礼しました」

ふたりは退室の挨拶をしてでていく。

「よろしかったのですか？」

入れ替わりで入室してきた高橋学年主任が学園長に訪ねた。

「かまわないよ。もともと衛生状態の改善だけなら受け入れるつも

りだったからね」

「ですが……」

「衛生状態は設備じゃない。あたしもそう思うよ」

学園長の言葉に高橋は驚いた。

「そ、それでは……？」

「去年まではそんなことに気づく奴なんて居なかったねえ。今年の二年は面白いのがそろっていきそうだよ」

「は、はあ……」

楽しげに笑う学園長に、高橋は一抹の不安を感じた。

学園長室を出た二人は、そのまま別れた。ひばりは荷物を教室に置いてあつたし、雄二は明久に預けてあつたからだ。

「じゃあ、また明日！」

「おう。また明日な！」

言葉を交わして別れる。

ひばりは、そのまま教室に向かい、戸を開けた。

「？……あれ？ みつちゃん？」

「！ ひばりちゃん！？」

教室には瑞希が居た。

「どうしたの？ って手紙……？」

「あ、あう……」

瑞希は突然のことにフリーズする。

そのスキに近づいたひばりの目に、手紙の文字が飛び込んできた。

あなたのことが、好きです

「ラブレター？」

「あ、あうう、見ちゃダメです」

瑞希はあわてて隠そうとするが、すでにひばりに見られた後だ。

「だれに……？」

ひばりは瑞希に、そつと訊ねた。

「……………／／／／」

瑞希は、真っ赤になってうつむいたまま黙っている。

「……もしかして、アキくん？」

「ひゃ、ひゃう！」

言われてはねるように顔を上げた。顔は真っ赤である。

「おおー当たった」

ひばりはにこにこ顔である。

「うまく……行くといいね」

しかし、胸の奥が少し痛んだ。

「……ひーちゃんは……」

「え？」

「ひーちゃんは、それでいいんですか？」

瑞希は真っ直ぐひばりを見つめて訊ねた。

「あ、あたしは……」

ひばりは狼狽していた。

と、扉がガラリと勢いよく開かれ、バカが入ってきた。

「たっだいまーっ！！」

「うひゃあっ！」

「ひうつっ！！」

突然のことに、二人は飛び上がらんばかりに驚いた。

ハラリ

流れるように瑞希のちゃぶ台から紙切れが明久の足元へと滑っていく。

「なんだこれ」

「「あっ?!」「」

叫んだときにはすでに遅し。

明久の動きが一瞬、止まった。そして、瑞希のもとに歩み寄ると、にこやかに告げる。

「変わった不幸の手紙だね？」

あさつてな言葉が飛び出した。

「それはそれで困る勘違いなんですけど……」

瑞希は、トホホ顔で明久から手紙を受け取る。

「こんな婉曲なことをしなくても、言ってくれば僕が始末してあげるのに」

「アキくん、それは不幸の手紙じゃないよ？」

「うぐうつ？！ ひばり、僕にとどめを刺すの楽しい？」

「え？！ どうしてそうなるの？」

「明久君、落ち着いてください」

そう言つと、瑞希は明久の手を取つて、自分の手で優しく包んだ。

「……そっか、現実なんだね。それで、相手はうちのクラスの？」

「はい、クラスメイトです」

赤くなりながらも真っ直ぐに答える。

「そ、そいつのどこがいいの？ やっぱり外見とか？」

「え、えとそうですね、外見もですけど、優しくて、明るくて、いつも楽しそうで……私の憧れなんです」

「……その手紙」

明久は手紙を指さして優しく笑った。

「よい返事がもらえるといいね」

「ハイ」

そんな二人をおいて、ひばりは、一人教室を抜け出していた。強く握った拳を胸に当て、今にも泣きそうな顔で階段を下りていった。

「到着！ ここがあたしの家だよ」

玄関を開けて、三人に振り返る。

「へえ」。今日はご家族の方は？」

「たぶん出てると思うよ？ さ、あがつて」

クリスマスは珍しそうにのぞき込みながら入ってきた。

が、残る二人、瑞希と美波はとまりが気になっっているようだ。

「え、えーっと？ 瑞希ちゃん？ 島田さん？」

いつまでも入ってこない二人に、ひばりが声をかける。

「ふえっ？！ なんでしよう？！ ひばりちゃん」

「ひやいつ！ な、なに？ 支倉？！」

ボケていた二人は、突然声をかけられて驚いて振り向く。

みれば、あきれ顔のひばりと、楽しくて仕方ない様子のクリスマスが二人を見ていた。

「あつはつは、二人は吉井にご執心だね」

「はあ、玄関閉めたいから早くはいつて」

「す、すみません！」

「ご、ごめん！」

瑞希と美波はあわてて支倉宅に飛び込んだ。

「食材はこっちのキッチンね。で、そっちがリビングだから、適当に座ってて」

言いながら、ひばりは食材を冷蔵庫へとしまっていく。

「あ、ひばりちゃん手伝います」

すると、瑞希も寄ってきて手伝い始めた。

「ありがとう、みっちゃん」

ひばりは、一端手を止めて瑞希に笑いかけると作業に戻る。

一通り仕舞い終えたら、飲み物を用意してみんなのところへと。

「これ飲んで待っててね？ あたし着替えてくるから」

そう言つて奥へ入っていった。

「ふん。支倉の家つてずいぶんスッキリしてんのね」

美波は周りを見回しながらそんな感想を漏らした。

「まあ、自室じゃないし、ご両親があまりインテリアに興味ないのかもしれないね」

クリスマスも同様の印象を抱いたようだ。だが、瑞希だけは少しうつむきかげんで黙っている。

ふと、美波は飾り気の無い写真立てに目を奪われた。

「うわっ！　綺麗な人……支倉のお母さんかな？」

「どれどれ、おおー。超美人じゃん、あ、でも、この笑ってるかんじは、ひばりちゃんに似てるかも」

美波の声につられてクリスマスものぞき込んだ。

「ひばりちゃんのおかあさん……美空さんですよ」

瑞希はどこか悲しそうに答えた。

その様子に気づいたクリスマスは、どうしたのかとこえをかける。

「？　どしたの瑞希ちゃん？」

「い、いえ……」

だが、瑞希は歯切れ悪く返事をするだけだ。

「三人ともどうしたの？」

と、そこへひばりが声をかけた。着替え終わって出てきたようだ。

「あ、支倉。この美人が支倉のお母さんかなって話してたところよ」
言われて、ひばりも、ひょいと、のぞきこむ。

「あー、うん。あたしのお母さんだよ」

そう言って微笑んだ。

「へー、女優とかやってそうだねー」

「あはは、うん。うちのお母さん女優だよ。舞台女優だけだね」

「ほんとに！　いいなあー。会ってみたいなー」

美波の無邪気な一言に、ひばりの身体がビクリと硬直した。

「ねえ、支倉、今日はお母さんかえ……って……」

美波は笑いながらひばりを振り向いて硬直した。
ひばりは泣いていた。

「え？　ど、どうしたの？　支倉。ウチなんかした？」

突然のことに美波はあわてふためく。

「瑞希ちゃん、もしかしてひばりちゃんのお母さんって……」

「……はい、ひばりちゃんのお母さんは六年前に……」

「死んじやった……」

瑞希の言葉を受けて、ひばりがつぶやいた。

「ご、ごめ……ウチ知らなくて」

美波があわてて謝る。

しかし、ひばりは顔をぬぐって笑いかけた。

「いいよ、知らなかったんだから仕方がないよ。それより、あたしのほうこそゴメンね？」

言われて美波は驚く。

「だめだなあ。不意を打たれるとやっぱり涙が出ちゃうね」

そう言いながら、ひばりは笑顔で涙をぬぐい続けた。

「あーっ！ もうっっ！」

突然叫んだ美波は、そのままひばりを抱きしめた。

「泣けばいいじゃない！ ここには、ひ、ひばりの友達しか居ないんだからっ！」

「し、島田さん？」

「ウチのことは美波でいいわよ。ウチもこれからはひばりって呼ぶからね」

「うん……ありがとう、みなみちゃん」

そう言ってひばりも美波の背中に手を回して抱きしめた。

「ねえ、ひばり……」

不意に美波がひばりに声をかける。

「？ なに？ 美波ちゃん」

「ウチ……今、気がついたんだけど、ひばり、服の中にメロンパンをふたつも入れてるのね」

「なに言ってるの？ 美波ちゃん」

見上げた顔は、ハイライトが消えていた。

「こ、怖っ？！ 怖いよ？！ 美波ちゃん？！」

「メロンパン、メロンパンなの……」

うつろな顔の美波に、クリスと瑞希が苦笑いする。

「み、美波ちゃん？ あたし、メロンパンなんて入れてないよ？」

ひばりはそう言つて美波から離れて両腕を開く。
たゆん。

ひばりの胸に、たわわに実るメロンが二つ。

「ウチは裏切られた！ 友達になつた瞬間に裏切られたのよっ！」
その場につつ伏して号泣する美波。

「たしかにおつきいね。ひばりのおっぱい。」

クリスはエロイ視線でひばりを見ている。

「あ、あははは……」

瑞希は苦笑いするのみだ。

「た、確かにあたしの胸つて大きいんだけど……」

美波が号泣する理由に気づいたひばりは困つたように胸を押さえる。

そして戸惑うような顔でこう問うた。

「……変じゃない？」

「「へっ？」」

その問いに、クリスと美波は呆氣にとられた。

「だ、だって、あたしの体格（138）で、おっぱいだけおつきい
んだよ？ なんか……不格好で……」

「いや、そんなことはないと思うわよ？ ウチは」

「うんうん。おねーさんもそーおもっけどなー。」

美波は、むしろ羨ましそうにしている。クリスも気にした風ではない。

「でも……」

それでも、ひばりの表情は晴れない。

「あたしは、むしろ美波ちゃんが羨ましいけどなあ」

そう言つて美波を見やる。

「へっ？ ウチ？」

「うん」

驚きを隠せない美波に、ひばりはうなずく。

「で、でも、ウチ、可愛くないし、おっぱいだって……ちっちゃい

し……」

言いながら美波は落ち込む。

「そんなこと無いよ!」

突然ひばりが大声を出した。

「ひ、ひばり?」

「美波ちゃん、美波ちゃんは十分可愛いよ? 手足は細くて長いし、肌だつてきめ細やかで綺麗だし、腰の位置だつて高くて、本物のモデルさんみたいだよ」

「で、でも、ウチ、おっぱい大きくないし……」

しかし美波もおっぱいにこだわる。

「はあ、美波ちゃん、おっきいおっぱいにこだわりすぎだよ……」

「だ、だつてえ……」

美波はすでに半泣きだ。

「あのね? 美波ちゃん。本物モデルさんつて大抵おっぱい小さいよ?」

「? でも雑誌で見かける女の人は、みんなおっぱいおっきかったわよ?」

そう言つて美波は首を傾げる。

「それはグラビアアイドルじゃないかな? なんにしても、あたしよりずっと良いと思うよ?」

「そ、そう?」

「うん。あたしなんて……」

ひばりは死にそうな顔で落ち込んだ。

「な、なんでそんなに落ち込むの?」

クリスに尋ねられて、ひばりははあ。と嘆息した。

「あたし、この容姿とおっぱいのせいでさんざんバカにされたから、そういつてため息一つ。」

「バカにされたつて……」

美波とクリスは戸惑った。だが、瑞希は悲しそうにしている。

「胸子」

ひばりがボソリとつぶやく。

「土偶、おっぱい姫、エロ子」

そして、苦々しい顔になり、

「キモ胸」

シンッと静まる。

「な」

美波の肩が震えた。

「なによそれっ!!」

部屋中が鳴動した。

「今すぐそいつ等全員連れてきなさい！ 全員顔がわからなくなるまで、ぶん殴ってやるわ！」

美波は怒っていた。いままでにないほど。

「ありがと。美波ちゃん。大丈夫。言った人たちは、みんなぶつ飛ばされてるから」

ひばりは笑顔でお礼を言った。

「アキくんがね？ 今の美波ちゃんみたいに怒ってくれて、みんなぶつ飛ばしちゃった」

うれしそうに笑う。

「だから、もういいの。でも……」

しかし、その顔が曇る。

「でも、あたしは意気地がないから……」

「ねえ、ひばりちゃん」

と、クリスが声をかけてくる。

「はい？」

「あしたは、その胸隠さずに登校してみなさいな」
そういつてウインク一つ飛ばす。

「で、でも……」

「だいじょうぶよ」

クリスの顔は自信に満ちあふれていた。

「あたし達のクラスは、バカばっかりなんだから」

それから四人は、明日のお弁当の相談をし、一部の仕込みをしてから、翌朝また支倉邸に集まることになった。

「じゃあ、みんな、また明日」

「うん、また明日ー」

「明日はがんばりましょう」

「おねーさんはパスかもー。早起き苦手なのよねん」
そうして帰っていった。

翌朝、2・Fで騒ぎが起きた。

『神様ありがとうございます！』

『リアルロリ巨乳キタコレ』

『ありがたやーありがたやー』

『支倉、結婚してグヘッ（殴られた）』

まさにカオス。

「ネ、バカばかりでしょ？」

「そうだね」

ひばりは嬉しそうにうなずいた。

第五問（後書き）

いかがだったでしょうか？少し重い話が入りましたが、2 - Fのバカさ加減で中和できていればよいなあと思ってます。あと、瑞希の殺人料理ですが、ひばりが中学以降徹底矯正したおかげで並程度になってます。ただし、明久は四年間味見で付き合っており、すでにトラウマになってます。さて、いよいよ対Bクラス編。彼女たちの参戦と、クリスの召喚獣がお目見えか？

第六問（前書き）

第六問です。楽しんで読んでいただければ幸いです。

気合いとともに出陣するFクラス前線部隊。

廊下で待機していた、数学の長谷川教諭、英語Wの山田教諭。それに物理の木村教諭も移動を開始する。

と、渡り廊下向こうにBクラス生徒が現れた。

「高橋先生を連れているぞ！」

「人数は十人程度だ囲んでフクロにしろ！ 生かして帰すなーっ！」
どこぞのチンピラのようなセリフを皮切りに、戦闘が開始される。次々と召喚獣が召喚され、戦いが開始されるが、表示される相手召喚獣の点数はどれも高く、Fクラス生徒の点数の二倍以上はある。次々に打ち倒されるFクラスの召喚獣。明久はその戦力差を改めて実感した。

「くっ、とどめを刺されていない人は一度下がって別フィールドへ。点数に余裕のある人は他の人をフォローして！」

矢継ぎ早に指示を出す。

「戦力を分断されないように、各個撃破を避けるんだ！」

各教科フィールドでは仲間たちが奮戦している。

「せいあっ！」

英語Wでは、外国語が得意な俊夫が奮戦している。外見からは想像がつかないが五力国語を話せるという。もつとも、ライティングは苦手なのだそう。それでも、表示されている点数は156とBクラス並だ。

「くそ！ 点数は五分なのに、異様に強いぞ、コイツ！」

だが、それ以上に若いながらも卓抜した格闘技の知識と経験、そして、ある種、天才的な格闘センスにより、彼の召喚獣は点数以上の強さを誇っている。

ほかのフィールドでも、物理では美波が、数学ではクリスが何人かの仲間と奮戦中だ。

だが、一部の例外をのぞいて、全体的には押され気味ではある。とそこへ、ピンクの髪の少女とちっちゃな女の子が到着した。

「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」

「み、みんな、は、はいよ」

息を切らせる瑞希とひばり、二人は特に運動が苦手なため、体力の余った男子生徒の全力疾走についてこれなかっただろう。

「来たぞ！ 姫路瑞希だっ！」

Bクラス側から声が挙がる。それに伴い、Bクラス生徒の表情が一様に堅くなった。

「姫路さん、来たばかりでわるいんだけど、おねがいできるかな？」
明久は、ほんの一瞬だけ迷うそぶりを見せたものの、すぐに指示を出した。

「は、はい。行って、きます」 呼吸を整えるまもなく、瑞希は戦場へとトタトタ向かう。その姿は、とてもなごむものだ。

「長谷川先生、Bクラス岩下律子が、Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」

「律子！ 私も手伝うわ！」

「あ、姫路瑞希です。よろしくお願いします」
Bクラスは瑞希をよほど警戒しているのか、その場にいる十人のうちから、二人も挑んできた。

「……試^{サモン}獣召喚！」

三人の声が重なり、三体の召喚獣が現れた。

「うわぁ……」

なぜかひばりが驚いている。明久はそれには気づかず、瑞希の召喚獣に違和感をかんじた。

「？ あれ？ 姫路さんの召喚獣ってアクセサリーなんてつけてるんだね？」

そう、瑞希の召喚獣は左腕に、宝石のついた腕輪をしていた。

「あ、はい。今回、数学はかなり解けたんですよ？」

なにやら嬉しそうに瑞希が答える。

「そ、それって！？」

「わ、私たちが勝てるわけ無いじゃない！」

腕輪に気づいた律子たち二人は悲鳴を上げた。明久が不思議そうにその様子を見てみると、ひばりが肘で突つついた。

「もう、忘れたの？　腕輪をしてるってことは特殊能力が使えるってことじゃない」

ひばりが説明すると、明久は、なるほど！と手をたたく。

「じゃ、いきますね」　そう言つて瑞希は、胸の前で両手を握つた。
「ちよつ！　まっ！」

「いいから避けるのよ！　律子！」

二人の召喚獣が、大きくはねる。

瑞希の召喚獣が左手を持ち上げると、腕輪が輝き、手のひらから光線が放たれる。

「きゃああああーっ！！」

その光に飲み込まれるように、律子の召喚獣は跡形もなく消え去つた。

「り、律子おーっ！」

思わず叫ぶ相方の少女。

だが、次の瞬間、瑞希の召喚獣が彼女の召喚獣に巨大な両手剣を振りおろす。悲鳴を上げる間もなく、彼女の召喚獣は脳天から股下まで斬り裂かれて消滅した。

ほとんど一瞬でケリが付いてしまった。みれば、瑞希の召喚獣の頭上には412と表示されている。

「い、岩下と菊入が！」

「なっ？！　そんなバカな！？」

「い、一撃だなんて……。姫路瑞希、噂以上だ」

Bクラス側に動揺が走る。

「よそ見してる暇はないぞ！」

怒声とともに、俊夫の召喚獣が相手の懷に飛び込む。

「あ、しまっ……」

相手の注意がそれた瞬間のできごとだ。

「フンッ、セイツ、はあぁっ！」

俊夫の召喚獣は、低い姿勢から相手の顎めがけて掌底を突き出すようにまっすぐ立ち上がる。

それを受けた召喚獣は、ゴキユツという音とともに顎が跳ね上がり、浮き上がった。

ついで、俊夫の召喚獣が背を向けるように身体を丸め、瞬間、身体がブレたかと思うとズドンという震脚とともに背中からぶつかる。そして、その一撃で吹き飛ばされた召喚獣を追いかけるように低空に跳躍すると、そのまま跳び蹴りを食らわせると、相手は地面に落ちるヒマもなく消え去る。

まさに連続攻撃。怒濤の攻撃である。

勝負を制した瑞希や俊夫の姿に、味方の士気は上昇し、相手の混乱は広がった。

「み、みなさん、頑張ってください！」

普段の瑞希からは想像できない大きな声。

それは、指揮するものとしては褒められる内容ではないものの、前線部隊のみんなのやる気を引き出した。

「姫路さん、とりあえず下がって」

明久は、瑞希に余計な消耗をさせないためにも一端下がるように指示する。

むやみやたらに瑞希だけを戦わせても消耗が激しすぎるためだ。

「中堅部隊と入れ替わりながら後退しろ！ 戦死だけはするな！」

Bクラス側も損耗を気にして後退をかけるようである。

戦況は、Fクラスに傾きつつある。瑞希を中心にして、少しずつ押し込めば、当初の目標は達成できそうである。

「明久よ」

「秀吉？ どうしたの？」

優位に推移する戦況を見ていた明久に、秀吉が話しかけた。

「うむ、ワシらは教室に一端戻ろうと思うのじゃ」

「補給テスト？」

「違うと思うよ？ アキくん。木下君たち消耗している感じじゃな

いもの」

確かにひばりの言うとおり、秀吉が連れている何人かは、まだ余裕がありそうだ。

「うむ、支倉の言う通りじゃ。実はの、Bクラスの代表なんじゃが……」

そこで言葉を切った秀吉のかわいらしい顔が、苦々しく歪む。

「あの、根本らしい」

「あのつてことは、あの根本恭二？」

「うえっ、Bクラスの代表って、あいつなの？ うわ、最悪……」
「うむ」

本気で厭そうなひばりに、秀吉がうなずく。

「たしかに、あの男が代表ってことなら警戒した方がいいかもなあ」
明久ですら顔に嫌悪感があらわれている。

「カンニング上等、競争相手に一服盛る、喧嘩に刃物は当然。まさに卑怯を体现したような男じゃ」

「あんなのに雄二がおくれを取るとは思えないけど、一度ようすを見にいった方がよいかもね。姫路さん！」

明久は瑞希に状況を説明しにいく。

「木下君、あたしも戻ろうか？」

ひばりは秀吉に尋ねた。「いや、支倉は残ってほしいのじゃ。あまりこちらに前線側の戦力を割いてしまつては、本末転倒じゃからな」

「確かにそうだね。うん、じゃあ木下君たちが戻ってくるまでは、あたしが木下君たちの分までガンバるね！」

そう言つてひばりはニッコリ笑つて見せた。

「ッ?!」

不意に、秀吉の顔が赤くなる。

「どうしたの？ 木下君。顔が赤いよ？ 調子悪いの？」

一転してひばりの顔が心配そうに曇る。

「だ、大丈夫なのじゃ！ 明久も戻ってきたし、そろそろ行くのじ

「や」

「うん、無理しないでね」

「う、うむ。後は任せるのじゃ」

「うん！ 行つてらっしゃーい」

ひばりは明久たちを送り出すと、両手で頬をたたいて気合いを入れようとした。

「~~~~~（泣）」

とっても痛くて半泣きになった。

「ん、まずいかも……」

一時的に戦力が減じたせいか、戦線が膠着しかけている。

「そ、そうですね。どうしましょう」

後を任されたひばりと瑞希だが、ふたりとも戦闘指揮などには慣れていない。とっさの判断に迷うことが多く、素早い指示が出せないのだ。

と、二人に声がかかる。

「支倉！ 数学の手が足りない！ 何とかしてくれ」

「物理側にいた島田の姿が見えないんだ。いまは、藤堂と近藤が持ちこたえているが」

「総合科目も戦力が足りない」

次々に声がかかる。

「あゝん、どうすればいいのよ」

ひばりはパニック状態になった。

そんなひばりの肩に手がおかれた。「数学へは姫路さんが行ってください」

長い黒髪の少女だ。

「く、来島さん？」

ひばりは目を丸くする。前回のDクラス戦では、加藤武とともに不参加だったからだ。

今回もクラスミーティングにすら参加してなかった二人は参加しないものと思われていた。

「支倉さんは総合科目へ。ただし無理はしないでください」

「う、うん」

周りの疑問など、どこ吹く風で指示を出し続ける。

「英語Wの前田君もそろそろきつくなと思います。新田君と手塚君、それに斉藤君も行ってください。ここで前田君に戦死されるのは大きな損失です」

淡々と指示を出すアキ。クラスメイトたちは戸惑いを隠せない。

「あと、須川君は島田さんを探してください」

「あ、ああ」

「物理へは私が行きます」

そこまで言うのと、もう用は無いとばかりに移動を始める。

「え、あ、おい」

動きのないクラスメイトたちの中で、いちはやくひばりが復帰した。

「あ、えっと。とにかく、とりあえず来島さんの言ったとおりにして」

「わ、わかった」

今は戦争中。呆けているヒマはないことくらい全員がわかっている。

みなはとりあえず指示通りに動き出した。

『あーあ、冷たい声で指示出しちゃってまあ、どうすんの?』

「だ、だってカオルさん。は、恥ずかしいですよ!」

『やれやれ』

「うっ……また変な子だっと思われちゃう……」

『自業自得だよ、まったく。ほら、物理のフィールドに着いたよ』
そこにはすでに近藤しかいなかった。

「おう、援軍か? すまないが後を頼む」

「ええ」

見ればBクラス生徒が二人いる。

「また、雑魚が来たぜ」

「とつとと倒しましょ木村先生」

「許可します」

「^{サモン}試獣召喚！」

「二年Fクラス、来島アキ。物理勝負を受けます。^{サモン}試獣召喚」

Bクラスの召喚獣に続いて、アキの召喚獣があらわれる。

ふつうの召喚獣と違い、メタリックブルーのメカニカルな鎧を装備している。

手には、四角い筒状の大砲を持ち、左腰にフリスビーのようなものが三枚ぶら下がっている。

「いくぞ！」

Bクラスの召喚獣が斬りかかってきた。

が、それを大きくかわすと、大筒から砲弾が撃ち出される。

ドガン！

という炸裂音とともに相手の召還獣は跡形もなく消し飛んだ。

「へ？」

やられた方は呆氣にとられたまま補修担当講師に担がれていった。もう一人いたBクラス生徒は、アキの召還獣の頭上に踊る数字に呆氣にとられた。

来島アキ 物理 408点

「う……うそでしょ？ 姫路さん以外にFクラスにはろくな高得点者はいないはず……あなたはいつたい……」

「問答……無用！」

左腰のフリスビーを投擲すると、相手召喚獣はそれをかわす。

次の瞬間、アキの召喚獣の両肩のアーマーがバシヤリと展開し、パラボラアンテナのような形になった。

そしてそこから、まばゆいばかりの光の奔流が吹き出す。

「う、うそおおおーっ!!」

召喚獣は、光の濁流に飲み込まれるように消え去った。

「さて、次は誰かしら？」

その頃、美波は廊下を保健室に向かって移動していた。途中で明久の姿が見えなくなったので、心配しながら戦っていたのだが、途中、Bクラス生徒が中堅部隊と交代する際に聞こえてきた会話に絶句した。

『ち、しぶといなバカクラスのくせに』

『まったくだ、さっきなんか姫路瑞希のパンツが見えたって騒いでたバカがいたな』

『確か吉井だったか？ 鼻血が止まらなくなったとかで保健室に連れてかれたらしい』

『バカだな』

『ああ、バカだ』

普通ならあり得ないだろうが、Fクラスであるが故に美波は信憑性を感じてしまっていた。毎度のごとく土屋は大量の鼻血を流しているし、なにより明久はバカだ。

有りうると美波は思ってしまったのだろう。

「あのバカ」

悪態をつくがその表情は優れない。

ついに美波は仲間の注意がそれたスキに部隊を離れてしまった。そのまま走り出す美波の後を三つの影が追跡し始めた。

アキの参戦により、戦況はだいぶFクラスよりに傾いていた。
「これなら押し切れるね」

余裕ができたひばりは戦況を眺めながら瑞希に話しかけた。

「はい、ひばりちゃん」

瑞希もうれしそうに返事をする。

そして、ひばりは、もうひとり、来島アキの方を見ると、

「来島さんありがとうございます」

と言つて、笑いかけた。

「いえ、別に……」

それに対してアキはそっぽを向いてしまう。

「あー？ 照れてる照れ……」

「大変だ支倉！」

アキをからかおうとしたひばりの声を、須川の声が遮った。

「島田が人質に取られた」

「「えええっ！」」

予想外の事態に呆気にとられる。

「とにかく前線に「どうしたの？ みんな」」

そこへ、明久と秀吉が戻ってきた。

「ああ、じつは……」

と、須川が説明する。

明久の顔が見る見るうちに険しくなり、怒りと嫌悪を露わにした。

「くそ、Bクラスめきたない手ばかりつかって……」

「とにかく、状況を見に行こうよ、アキくん」

大変な事態にひばりと瑞希も心配そうである。

「うん。いこう」

明久は大きくうなずいて、みんなと前線に向かった。

前線は膠着状態だった。

目の前のBクラス生徒はたった二人だが、美波の召喚獣に武器を突きつけている。

「そこで止まれ！ それ以上近づくと召喚獣にとどめを刺して補習室送りにするぞ！」

相手の一人が牽制してくる。

「くっ、殺されるわけじゃない……補習室で補習を受けるだけなんだ……」

明久は非情な決断を下すか迷っているようだ。

そこへ、ひばりと瑞希がやってくる。

「ねえ、アキくん！ 美波ちゃんを助けてあげてよ」

「わたしからもお願いします。明久君。美波ちゃんを助けてください」

二人の幼なじみの願い。だが、よい策は浮かびそうになかった。

「ははっ、思えばコイツもバカだよな」

「全くだぜ。吉井、おまえがケガしたって二セ情報流したら、一発で食いつきやがった」

「ああ、おあつらえむきにひとりで部隊をはなれて保健室に行こうとしたんだぜ」 美波はうつむいたまま悔しそうに歯噛みした。

「さ、最低……」

「優しさにつけ込んでダメすなんて許せません」

ひばりも瑞希も怒り心頭のような顔。

そのとき、アキが小声で話しかけてきた。

（木下君、支倉さん、合図をしたらあの二人の気を逸らしてくれませんか？）

（どうするつもりじゃ？）

（少し難しいですが、島田さんを助ける方策があります。わたしを信じてください）

（わかったよ、あたしは信じる）

（うむ、ワシも賭けてみよう）

（いんです）

そして、足音ともにBクラス生徒の声が響く。

「『おいおまえら！ 助けに来たぞ！』」

「『もう時間稼ぎは充分よ！』」

「ああ、待ってた……ぜ？」

「な、なんだ誰もいないぞ？」

ホッとして振り返った二人は誰もいないことにがく然となる。

「いまですっ！」

アキの鋭い声に呼応するように連なるように銃声が響く英語Wのフィールドに干渉しない程度に連なった数学のフィールド。針の穴ほどの接触面を抜けて弾丸が美波の召喚獣に突きつけられていた武器をはじきとばす。

「いまだ！ 突撃っ！」

次々と召喚される召喚獣、そして最後に召喚された瑞希の召喚獣の一撃で、二人の召喚獣は戦死した。

「よかったです、みなみちゃん！」

「無事でよかったよ」

瑞希もひばりも美波の無事を喜んでいる。

「ありがとう、瑞希、ひばり」

明久も喜び合う三人に近づいて声をかける。

「よかったね、島田さん」

「うっん、吉井もありがとう！」

美波は明久にもお礼を言った。

「そんな、ぼくなんかなにもできなかったし、お礼なんて……」
そういう明久に美波は首を振った。

「吉井は、バカやって捕まったウチのこと見捨てなかったじゃない。それがうれしいの」

「島田さん……」

「み、美波でいいわよ、ウチたち、と、友達でしょう？ ウチも吉井のこと……アキって呼ぶから」

「え？ いいのかな？」

「なによ、ウチのこと名前で呼ぶのはイヤだつての？！」

「ひ、ひあゝ」

とたんに不機嫌になった美波に明久はおびえる。

「わ、わかった、わかったよ島田……じゃなくて美波」

半ば脅迫じみたやりとりである。

「うむ。よろしい！（アハッ）」

思うとおりになって、美波は上機嫌だ。

「な、なんかモヤモヤする……」

「み、美波ちゃん、ズルいです……」

二人のやりとりをみていたひばりと瑞希は釈然としない顔であった。

結局、Bクラス戦は午後四時、Bクラスを教室に押し込んだところで中断となった。

先んじて協定を結んでいたせいでもあり、決着は翌日に持ち越された形だ。

「被害は少なくなかったが、これで道筋はできた」

今日の戦果をみながら雄二がつぶやく。

「しかし、おまえさんが参戦してくれるとは思わなかったよ、来島」とつぜん声をかけられたアキは、読んでいた文庫本を閉じて顔をあげた。

「面白そうでしたから」

無表情に続ける。

「そっか、なんにせよ島田のことも助かった。コイツも大事な戦力なんだな」

と、雄二はアゴをしゃくる。

「いえ、うまくいって良かったです」

そう言いつつ、また文庫本を開こうとした。

「そっぴや、よく知ってたな。他人の腕輪の能力なんて」

アキの動きが止まった。

そう、美波を救った銃弾はクリスが腕輪の力を使って放ったものだ。他教科のフィールドをまたいで攻撃できる、超ロングレンジショット。フィールド同士が干渉を起こすか起こさないくらい離れた距離なら、フィールドからフィールドへまたいで攻撃が通るのだ。しかし、消耗も激しく、400点あっても二回ほどしか使えない特

殊能力だ。

そのせいでクリスはテストを受け直している。

「何で知ってた？」

「……」

雄二の問いに、アキは答えない。

「だんまりか。まあ、いい。とりあえず、おまえさんの腕輪の能力も教えてもらえると戦術に組み込みやすくなってありがたいんだが？」

「わたしのは、Vアーマー……あの鎧を使えるようになるだけ」

「装備が追加されるのか。使い方次第じゃ面白いことができそうだな」

と、雄二の肩が叩かれる。

「ん、なんだムツツリー二か。なにかあったか？ ……Cクラスの様子が怪しいだと？」

話を聞いて、雄二が軽く考え込む。

「漁夫の利を狙うつもりか？ しゃらくさい」

「雄二、どうするの？」

雄二は時計をチラリと見やる。

「Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラスを攻め込ませるとでも言うて……」

そこまで言ったところでひばりが声をかける。

「ねえ、坂本君。タイミング良すぎない？」

「どうした支倉。なにが……」

「んー。確証はないんだけど、Bクラスの根本くんが絡んでるってこと、無いかな？」

ひばりの顔は不安そうだ。

「さすがに考えすぎだと思うが、たしかに用心すべきか？」

雄二は考え込んでしまった。

「少し、探りを入れてみるか……」

「どうするの？」

鋭く目を細めた雄二に、ひばりがたずねた。

すると雄二は、

「Ｃクラスの代表と個人的に話がしたくなった」

と言つてニヤリと笑つた。

結論から言えば、罷だつた。根本自身もＣクラスにあり、協定違反を盾に、雄二を打ち取る腹づもりだつたのだろう。

だが雄二は、世間話をしにきたと言つて、Ｃクラス代表の小山と話すあいだにＣクラス内の根本を発見。

堂々と辞去した。

「危なかつたな。協定を結ばうなんて言つたらその場で包囲されかねない勢いだつたぜ」

教室に戻つてはじめて雄二は気を抜いた。

「しつかし、今回は支倉のお手柄だな」

そう言つてひばりの頭をなでる。

「うあ、そんなことないよつて、撫でないでよ！ もう！」

「ハッハッハッ。やっぱり撫で心地いーなー支倉は小さくてちようどいい高さだし」

「うえっ？！ ちっちゃくないもんっ！ あたし、ちっちゃくないよ！」

「よし、Ｃクラスへの方針が決まつたぞ」

「坂本君？！ 撫でながら真剣に話さないでよっ！ あと、あたし！ ちっちゃくないよっ！」

雄二はまじめな顔でみんなを見るが、ひばりの頭を撫でる手は止まらない。

「どうするの？ 雄二」

明久が聞いてくるが、雄二は悪い笑顔を浮かべてこう答えた。

「まあみてる。目には目をつて奴だ」

クツクツクツと悪人顔で笑う雄二。

しかし、その手はひばりの頭を撫で続けていた。
「うわーんっ！ あたしちっちゃくないもーんっ！」

第六問（後書き）

いかがだったでしょうか？美波がダメされるシーンなど盛り込んでみたんですけど、どうでしょうか？なんか普段のFクラスをみると信じちゃいそうな感じしますよね？つぎは、Bクラス戦決着です。
ではまた♪

第七問（前書き）

少し遅れましたが、第七問です。読まれた方が楽しんでいただければ幸いです。

第七問

「昨日言っていた作戦を実行する」

翌日、朝、登校した明久たちを見回しながら雄二は告げた。

「作戦って、まだ開戦時刻には間があるけど？」

まだ、八時半を指す時計を見ながら明久が訊いてくる。

「Bクラスじゃない。Cクラスの方だ」

言いながら雄二はニヤリと笑う。

「うわ、悪い顔してるな」。坂本君

「で、どうするのさ？ 雄二」

「コイツを秀吉に着てもらう」

そう言いながら雄二はカバンからキレイにたたまれた、文月学園の女子制服を取り出した。

「お。雄二がどういう経緯でそれを手に入れたのか、おねーさんはそこが気になるねい」

さすがのクリスも苦笑いしている。

「木下君なら似合いそうだけど……」

「うむ。ワシが女装をしてどうするんじや？」

ひばりも秀吉も意味が分からないという顔になる。

「秀吉には、木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらう。つーわけで着替えてくれ」

雄二は制服を秀吉に渡す。

「む、仕方ないのう」

秀吉は、一瞬、ひばりの方を気にしてから着替え始める。

明久をはじめとした何人かの男子生徒が、若干頬を染めながら凝視している。ムツッリー二に至っては、いつの間にか取り出した力メラのシャッターを切っている。

「ねえ、クリス」

「ん？ どうしたのかにや？ ひばりちゃん」

「なんか今、ナチュラルに男子の着替えを見ちゃったんだけど、ぜんぜん違和感無いんだよね。あたし、おかしいのかな？」

「あつはつは。実はわたしも同じこと思ってたよ。ついが一瞬、男子を追い払おうかと思っちゃったよん」

「あー、そーなんだー。アハハ。おかしいね？ 相手は男の子なのに、なんか負けた気分になるよ？」

「うーむ。たしかにあの色気、艶やかさはおねーさんにも出せないにゃあ」

なりゆきで秀吉の生着替えに立ち会ってしまったひばりとクリスは、言いしれようのない敗北感を味わっていた。

「うむ、着替え終わったぞい。む？ なんじゃ？ どうしたのじゃ？ 皆の衆」

雄二を除いた全員が微妙な表情になっている。

「さてな。俺にもよくわからん」

「おかしな連中じやのう」

「いや、木下君こそ、女子の前で着替えるのは平気なの？」

すかさずひばりがツッコんだ。

すると秀吉は、あ。つとなり、申し訳なさそうな顔になった。

「む。それもそうじゃな。変なものを見せてしまつてすまんのう。次は気分を害せぬよう気をつけるとしよう」

「いや、そういうことじゃなくて……まあ、いいや」

ひばりは釈然としないものを感じながらうなだれた。

「??? 支倉よ、そんなに嫌だったのじゃろうか？ 次は気をつけるから許してほしいのじゃ」

ひばりの様子に何か勘違いしたのか、秀吉が必死にあやまってくる。

これには、ひばりの方があわてた。

「へ？ いや、許すも許さないも、怒ってなんかないよ？ 木下君」
「そ、そうなのかな？」

「う、うん。どっちかというと、木下君が恥ずかしくないのかなー
って思ったただだよ？」

それを聞いて秀吉はキョトンとなる。

「あー。なんじゃそう言うことじゃったか。ならば、平気じゃ、演
劇で大勢の早替えが必要なときなどは、裏で男女の別なく着替えと
るしの。下着の上に薄手の短パンも履いとるから恥ずかしくはない
のじゃ」

「そ、そーなんだ。へー」

ひばりは納得いったような、いかないような複雑そうな表情で相
づちを打った。

そこで、頃合いとみた雄二が声をかけてくる。

「さて、そろそろ良いか？ 時間もなし、Cクラスへ向かうぞ」

「承知したのじゃ」

「あ！ ぼくもいくよ」

「あたしもー！」

秀吉を伴って教室を出た雄二を、明久とひばりが追う。

「わゝ たしもゝ 見にいこーっと」

そのあとを、完全に野次馬根性のクリスがスキップしながらつい
ていった。

「あら？」

かわってAクラスの教室。

三つ編みロングにフレームレス眼鏡の少女、神薙御鳥は、窓の向
こうを、よく見知った少女が、廊下をCクラスへ向かって歩いてい
くのを見かけた。

「あれは……優子？ Cクラスに何をしに行くのでしょうか？」

疑問を口に出し首を傾げる。

と、そのとき肩が叩かれ、振り返った。

「え？」

そこに優子が立っていた。

「え？ え？ あれ？」

優子と廊下を交互に何度も見返して、疑問符を飛ばす。

「どうしたの？ 御鳥」

怪訝に思った優子が、いぶかしげに声をかける。

「い、いえ何でもありませんよ優子。それよりなんですか？ 用事があるのでしょうか？」

御鳥は軽く頭を降って、優子に向きなおる。

「ああ、ええ。次の古文のこの例題なのだけど……」
優子の質問に御鳥が答える。

すでに先ほどの場面は見間違いだと断じたようだった。

明久たちは、Ｃクラス前に着ていた。

「さて、ここからは秀吉一人で行ってもらう。頼んだぞ、秀吉」

「気が進まんのう……」

秀吉自身は気が乗らない様子だ。

「そこを何とか頼む」

「むう」

やはり、どうにも気がすまないという秀吉に、ひばりが助け船を出した。

「だめだよ、坂本君。こんな無理矢理なのは良くないよ。そりゃあ、あたしも木下君の演技には興味有るけど……」

ただし爆弾入りだった。

「む？ 支倉は、ワシの演技に興味があるのかの？」

「え？ う、うん。あたし演劇とか好きだし、木下君で、演劇部のホープって言われてるんでしょ？ だから、どんな演技するのか見てみたいなあって」

「……うむ。気が変わった、やろっぞ」

「でも、無理矢理は良くな……って、ええええっ?！」

突然やる気になる秀吉に、ひばりは驚いた。直前まで渋っていたのが嘘のようだ。

「誰が見ても、疑いようのないくらい完璧に姉上を演じて見せようぞ!」

「よし、その意気だ秀吉!」

ここぞとばかりにあおる雄二。

「うーん、秀吉ちゃんも分かりやすいねい、そして、ひばりちゃんも自分のこととなるとアツキー並に鈍いねい」

「へ? どゆこと?」

ニヤつくクリスに、意味の分かっていない明久。

そして秀吉が、Ｃクラスのドアに手をかけた。

いきおい良くドアが開けられ、堂々と慎ましやかな胸を張った少女が声を上げる。

『静かになさい! この薄汚い豚ども!』

良く通る声と内容に、Ｃクラスの面々が吞まれるのが明久たちにまで伝わってくる。

「さすが秀吉だ」

「おお。秀吉ちゃんとは思えない罵倒っぷり。そこに痺れたり憧れたり?」

「これ以上ない挑発だよね……」

「や、やりすぎじゃない? そもそも木下君のお姉さんってこんな人なの?」

「「「さあ?」」」

「ちよつとーっ?!!」

明久たちがゴソゴソしているうちにも話は進んでいる。

『な、なによアンタ!』

『話しかけないでくれる? 豚臭いわ!』

いきり立った様子の小山が、優子（秀吉）に食ってかかる。

しかし、優子（秀吉）は、顔をしかめながら答える。

その態度に、小山がヒートアップする。

『アンタ、Aクラスの木下よね？　ちよっと点数が良いからっていい気になってるんじゃないわよ！　なんの用よ！』

吠える小山を小馬鹿にするように見ながら、優子（秀吉）は腕を組んだ。

『私はね、こーんな臭くて！　醜い教室が、同じ校内にあるなんて我慢がならないのよ！　貴女たちなんて、豚小屋で充分だわ！』

『なっ？！　い、言うに事欠いて、私たちにはFクラスがお似合いですってえ！？』

『ハッ、手が汚れてしまうから、本当は嫌なのだけど？　今回は特別に貴女たちをふさわしい教室へ送ってあげようとおもっの』

スツと目を細めた優子（秀吉）は、余裕たつぷりに宣言する。

『ちよとど戦争の準備もしているようだし？　遊んであげるわ。近いうちに始末してあげるから、豚らしくブヒブヒ言いながら震えてなさい？』

一方的に通告し、有無をいわず教室を出て、ピシャリとドアを閉める。

秀吉は、そのまま明久たちのところまでくると、「こんな感じでよかったかのう？」と尋ねた。やり遂げた漢の顔だった。

「すばらしい仕事だったぞ、秀吉」

「うむ、そうか。支倉はどうじゃったかの？」

秀吉は、少し不安そうにひばりに尋ねる。

「え？　う、うん。別人みたいですごくかったよ？　すごく自然体だったし、ただ……その」

「む、何か問題でもあったかの？」

言い淀んだひばりに、秀吉の顔が曇った。

「え、演技は良かったよ？　すごく。でも、人間を豚呼ばわりはちよとと」

「む？　そうかの？　姉上ならこのくらい素で言はずなのじゃが……」

「よつぽどスゴいんだね木下君のお姉さんって。でもやつぱりよくないよ。次からはもつと言葉を選んであげてよ」

「ひばりは優しいのう……姉上にも見習ってほしいのじゃ。あいわかった。次があればもつと気を付けて演ずるとしよう」

「うん」

ようやく得られたひばりの笑顔に、秀吉は目を細めた。

そのとき、Cクラスから、優子もともとAクラスをたたきつづけてやるという、小山の叫びが聞こえてきた。

長居は無用と退散する五人であった。

同じ頃。

「やあ、来てくれたね姫路さん」

新校舎四階踊り場。呼び出された瑞希は警戒しながら彼に近づく。

「あなたが持つてるんですか？」

瑞希らしくない堅い声が響く。

「おおっと、怖い怖い」

ヘラヘラ笑いながら、彼、根本恭二はおどけてみせる。

「トボケないでください！」

鋭い声。

しかし、根本は態度を崩さない。ニヤニヤと笑いながら瑞希を見ている。

『捜し物は見つかったか？　見つからなきゃ開戦前に四階まで来い

って、根本くんが』

瑞希がBクラス女子から伝言されたのはそれだけ。

一昨日の楽しい昼食のあと、瑞希はそれが無くなっていることに気づいた

必死に探したが見つからなかった。

「あなたが盗んだんですね？！　この卑劣漢！」

「おいおい。俺は落とし物を拾っただけだぜ？ それなのに卑劣漢だなんてひどいじゃないか、姫路さん」

わざわざオーバーアクションで答える根本。そして手にした封筒を見せる。

「やっぱり……。返して！ 返してください！」

言いながら根本に詰め寄ろうとする瑞希。しかし、根本が両手で破るマネをするだけで足が止まる。

「や、やめて……。やめてください。お願いですから、返してください」

瑞希はすっかり勢いをなくしてしまった。

「ああ、返してやるよ」

その言葉に瑞希の表情が明るくなる。が、続く言葉で突き落とされた。

「だけど俺、今日は忙しいんだよね。全部終わったら返してやるよ」

「そ、そんな……」

瑞希は目の前が真っ暗になる思いだった。

それをみた根本は、イヤらしい笑みを浮かべながら続ける。

「君も落とし物が心配だろう？ 今日、何にも参加しないでおとなしくしている方がいい」

「な?!」

瑞希は二の句が継げない。さらに根本は続ける。

「周りにも黙っていた方がいい。大事な友人に心配させたくないだろう」

瑞希は、その言葉の意味に気づいて、信じられないという顔になった。

「きよ、協定違反です！ 試召戦争に関するすべてを禁ずるって……」

「俺は試召戦争でどうこうしてほしいなんて言ってないぜ？」

口元に笑みを張り付けて勝ち誇る根本。

「あ、あなたという人は……。どこまでも破廉恥な」

「破廉恥ねえ、学のある奴は言うことが違うねえ。だけど、あんまりひどいことを言われると、さすがに悲しくなるね」

オーバーに顔を手を当てながら、天井仰ぎ見る。

そして、瑞希に振り返りながら邪悪な笑みを浮かべてこう言った。
「悲しくて、悲しくて、手にしたものをどうにかしてしまいたいそうだよ！」

「や、やめ……」

両手で引き裂くように動かすと、ビィィッと紙が破れる音がした。

「なんてね」

いつの間にか手にしているのは封筒ではなく、ルーズリーフだった。

しかし、いまの瑞希にはそれで充分だった。

下半身から力が抜けそうになる。

大事な想い人への、大切な気持ちを込めた手紙。それを汚される気分だった。

「約束は守るよ。全部終われば手紙は返す。全部終わればな」

そう言つと、根本は笑いながら、瑞希の脇を抜けて階段を下りていった。

瑞希は、スカートの端を握りしめて立ち尽くしていた。

必死に涙をこらえる。

昔は、イジメられて泣いてばかりだった。でも、いつも笑顔の素敵な男の子が助けてくれた。

そんな彼の隣にいたかった。

一緒に笑顔でいたかった。

だから、嫌いだった、泣いてばかりの自分から笑顔でいられる自分になるうとがんばった。

「だから、負けない……」

瑞希にはどうしたらよいかわからなかった。

ただ、泣かないことが自分にできる精一杯の抵抗だった。

午前九時から再開された、Bクラス対Fクラスの試召戦争は、膠着状態になっていた。

Bクラスを教室にまで押し込んだものの、二つの出入り口で行われる戦闘は、一対一になりやすく、Bクラスに有利だった。

Fクラスも各生徒がこまめに補給することで対処しているが、いずれ限界がくるだろう。

そのなかで、瑞希は動けずにいた。

根本は教室内の奥、ちょうど瑞希から見えやすい角度の位置に陣取っている。

これ見よがしに封筒を手にして、瑞希が何かする素振りを見せるとそれをチラつかせる。

おかげで瑞希は、戦闘どころか、指示すら満足に出せていない。

さすがにメインメンバーは何かおかしいと感じているものの、それぞれ各ドア付近での主戦力として扱われているため、おいそれと離れない。

現状では、アキの的確な指示と秀吉の号令で何とか持っているが、戦線の崩壊は時間の問題だといえた。

「姫路さんどうしたの？ なにかあった？」

「具合でも悪いの？ みつちゃん」

瑞希のそばには、総司令付きとして、明久とひばりがいた。

二人とも再開直後から瑞希の様子がおかしいことには気づいており、なんとか声をかけているのだが、瑞希は「なんでもありません大丈夫です」を繰り返すだけで要領を得ない。

戦闘にも注意を払わないといけないためなかなか瑞希の様子を注意深く観察するヒマがなかった。

ドアの一つが科目を変えられてしまい、突破されそうになる。それをみた瑞希は意を決して援護に走ろうとするが、顔をこわばらせて足を止めてしまう。

明久はその視線の先にいる人物を、そして彼が手にしているものを見て、直感的に理解した。

「やってくれるじゃないか、根本くん」

ひばりの身長（138）では、根本の様子は見えなかったが、珍しく、明久の本気の怒気を込めたつぶやきを聞いた彼女は、ただ事ではないと感じた。

「姫路さん」

「は、はい……？」

明久は瑞希に声をかけると、優しく笑いかけた。

「具合悪そうだね？ 無理に戦線に加わらなくてもいいよ？ まだ、先は長いんだしさ」

「……はい」

「ぼくは、すこし用事ができたから行くね」

「あ……！」

瑞希は明久に声をかけようとするが、彼はすでに駆けだしていた。「アキ、くん、どう、か、したの？」

走る明久に、やっとの思いで付いてくひばり。

「ひばり、姫路さんの手紙、覚えてる？」

「う、うん」

「あれを根本くんが持ってた」

「えっ?! じゃ、じゃあ、みっちゃんは……」

「たぶんそういうことだと思う」

「……」

むごんのひばり。しかし、その表情には怒りがにじんでいる。

「いこう、ひばり。ぼくらのだいじな幼なじみに手を出したことを後悔させてやるんだ」

「うん」

「雄二、頼みがある。根本くんの制服が欲しいんだ!」

「おまえに何があつたんだ？ 明久」

「あきくん、それじゃただのHENTAIだよ……」

雄二はあきれ顔で、ひばりは沈痛な表情でツッコんだ。

そして明久は悶絶している。

「まあいい。戦争に勝てればそれくらいは何とかしてやる。それだけじゃないんだろう？」

雄二はやれやれといった風に了承すると、続きを促した。

「瑞希ちゃんを戦線からはずして欲しいの」

ひばりの頼みに、雄二は目を細める。

「どうしてもはずしないとダメか？」

「うん」

「どうしても」

二人は真剣に答える。

「姫路はこの後の作戦で、重要な役目がある。ある種、姫路にしかできないポジションだ。それでもか？」

雄二の目は鋭く二人を見ている。

「おねがい」

「頼むよ、雄二」

ひばりと明久はそろって、深く頭を下げた。

「条件がある。明久、お前には姫路が担うはずだった役割をやってもらう」

「わかった」

迷うそぶりもなく、間髪入れずに答える明久。

「それから支倉」

「なに？ 坂本君」

「お前には前線を支える役割を頼む」

「わかったよ」

「ぼくはどうすればいい？」

「タイミングを見計らって、根本に攻撃をしかける。攻撃できるんなら科目は何でもいい」

「みんなのフォローは？」

「ない。Bクラス教室の出入り口も今のままだ」

「……難しいね」

「だが、しくじれば負ける。リカバリーは効かんし、二の矢もない」
明久は黙って考え込む。

「じゃ、うまくやれよ。支倉、行くぞ」

「う、うん」

「？ どこかにいくの」

「Dクラスに例の指示を出してくる」

立ち上がった雄二は、ひばりを伴って教室を出ようとする。

明久は、まだ思案中のようだ。

「明久」

と、雄二か足を止めた。

「確かにお前は点数は低い。が、お前にはお前の秀でた部分がある。
秀吉やムッツリー二のようにな。だから、俺はお前を信頼している」

「……雄二」

「うまくやれよ。計画に変更は無しだ」

そう言って、雄二は教室を出た。

「坂本君、あきくんのこと信じてくれてるんだね」

ひばりは雄二に笑いかけた。

「あいつはバカだが、バカだからこそ、たどり着ける場所がある」
「なにそれ？」

雄二はまじめな顔だが、ひばりには意味が分からない。

「常識に捕らわれすぎない発想が出来るってことさ。これは、俺にも支倉にも。たぶん翔子にも出来ない。Fクラス最大のワイルドカードだ」

そう言ってニヤリと笑うとひばりの頭を撫で始めた。

「ちよっ！ 坂本君？！ またなの？！」

「悪いな支倉。俺も少し不安らしい」

いつものおどけた様子はなく、真剣な面もちだ。

「……もうっ！　今回だけだからねっ！」

ふくれっ面のひばりの頭を撫でながら、雄二はDクラスへ急いだ。

Bクラス教室出入り口付近の攻防は一進一退で膠着状態に陥っていた。

Fクラスの損耗も激しく、回復テストもおいつかない。

すでに、雄二率いる本隊までも投入しての総力戦となっていた。

機械の不調から空調が止まってしまったBクラス教室は、戦争の熱気で、室温がガンガン上がっている。

すでにすべての窓が全開になっているが、あまり下がったようには感じられなかった。

「二年Fクラス、支倉ひばりが現国勝負を受けます！　試獣召喚！^{サモン}」
刀を持ったディフォルメひばりが斬り結ぶ。

点数はCクラス程度ではあるが、ひばりの点数には、ある特徴があった。

それは、すべての教科が平均点程度の点数であるということだ。
多少の上下はあるものの、平均点キツカリのことが多く、『平均点の女』などと揶揄する者もいるほどだ。

得意も不得意もないため、どの教科に変更されても安定して戦えるのだ。

したも、不得意がないため、総合科目の点数はCクラス上位に届くくらいだ。

そのため、科目が変わる度に引っ張り出され、火消しにおわれている。

と、雄二と根本の舌戦までもが火蓋を切り始めた。
だが、それと前後するようにドンッ！　と音が響いた。

時刻は午後二時五十七分。

雄二と根本の罵声合戦はヒートアップする。

その間も、ドンッ！　ドンッ！　と音が響き続ける。

『チツ……さつきからドンドンと壁がうるせえな』

『ハッ！ 人望のないお前への嫌がらせじゃないのか？』

『ケツ、言ってる。もうすぐ決着だ。お前等！ ぼさつとしてないで、一気に押し出せえっ！』

『態勢を立て直す！ いったん下がるぞ！』

『ハッハア、坂本お、散々ふかしておいて逃げるのか！』

後退するFクラスを追って、Bクラスが廊下へ飛び出す。
敵に囲まれながら雄二は叫んだ。

『後は任せたぞ、明久』

午後三時ジャスト、叫びとともに轟音が響く。

『だああーっしやあーっ！！！』

ドゴオツ！！！！

壁がぶち抜かれ、明久をはじめとする数人のFクラス生徒が根本に肉薄しようとする。

『遠藤先生！ Fクラス島田が……』

『Bクラス山本が受けます！ 試獣召喚！』

すんでのところで、Bクラス近衛隊が割り込む。

Fクラス奇襲隊メンバーはそのまま近衛隊に取り囲まれてしまった。

突然の出来事に全く反応できなかった根本は、腰を抜かしたように尻もちをついていた。

が、奇襲が失敗したと見るやひきつった顔で笑い始めた。

『ハ、ハハッ、ざ、残念だったなっ！ お前等の奇襲は失敗だ』

内心の恐怖を拭うためか饒舌になっている根本は、近衛隊に囲まれてなお不敵な笑みを浮かべる明久に気づかない。

『壁を壊すとか、バカじゃねーか？ さすがFクラスは常識が……』

ダンッ！
ダンッ！

大きな着地音に根本の声は遮られる。

「Fクラス、土屋康太」

声に振り向いた根本の視界に飛び込んできた二つの人影は。

「Bクラス、根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

ロープを使って屋上から突入してきた、大島教諭とムッツリーニだった。

「き、きさま、ムッツリーニ！」

「^{サモン}試獣召喚」

ムッツリーニと根本の召喚獣が姿を現す。

刹那、忍び装束のムッツリーニの召喚獣の姿が掻き消えた。
一閃。

小太刀を振り切ったムッツリーニの召喚獣の姿が見えたときには、根本の召喚獣の首がはね飛んでいた。

クルクルと舞っていた首は地面に落ちる前に、頭を失った胴体共々消え去った。

そして、Bクラス対Fクラスの試召戦争は、Fクラスの勝利で幕を閉じた。

第七問（後書き）

いかがだったでしょうか。シリアスっぽい展開になりました第七問でした。根本の小悪党っぷりが出せていればよいのですが。それではまた次回お会いしましょう。

第八問（前書き）

第八問です。瑞希が可愛く表現できてるか心配です。それでは、どうぞ楽しんで読んで下さい。

第八問

「アキくん大丈夫っ?！」

終戦後にBクラスへ飛び込んできたひばりは、真っ先に明久の元へ駆け寄った。

「うう……痛いよう、痛いよう……」

戦争中は気が張っていたようだが、緊張の糸が途切れた今は、相当痛いらしく、明久は手を押さえてうずくまっていた。

「もう! 無茶ばかりして! 心配させないでよ!」

ひばりは半泣きで明久の肩をポクポクたたいている。

「うう、ゴメンね、ひばり。でもガンバリたかったんだ。彼女のために」

そう言つて、明久はひばりに笑いかけた。

「アキくん……」

ひばりは、ほんの一瞬、目を伏せたが、すぐに明久に笑つて見せた。

「もう、アキくんは。そんなにみつちゃんが良いなら、すぐに告白すればいいのに」

「えー。無理だよ、ぼくなんかじゃ。アタマもわるいし、強くもないし、顔だつて、カッコよくなんかない」

そう明久は答えて苦笑した。

そんな彼を見て、ひばりは何かを言おうと口を開く。

しかし、それは言葉にはならず、虚空へと消える。

彼女は少しでも嫌悪に満ちた表情になるが、すぐさまそれを打ち消した。

「……じゃ、行こう? 坂本君が戦後交渉始めちゃってるみたいだし、アレ、取り返しておかないと」

「あ。うん、そうだね」

そう言つて明久は立ち上がり、雄二たちに近づく。

それから半歩遅れるように動き出したひばりは、明久の制服の端をつまもつとして……やめた。

明久とひばりが近づくと、イイ笑顔の雄二が、根本に女子の制服を見せるところだった。

「Bクラス代表が、これを着て今言ったことを実施してくれば設備の交換はしないでやろう」

「なっ?! ふざけるな! 何で俺がそんな格好を……」 『わかった! Bクラス生徒全員で責任もってやらせよう!』

『任せて! 必ずやらせるから!』

『そんなことくらいで教室を守るんなら安いものだ!』

「なにっ?! お前ら、なに言つて……」

根本以外の全Bクラス生徒が賛成する。根本の人望のなさがうかがえる一幕だ。

「よし。んじゃ、決定な」

雄二が笑顔でうなずくと、Bクラスの何人かが根本を取り押さえるようにする。

「くっ! よ、寄るな! 変態ど「フンッ!」グフウオッ?!」

抵抗する根本に、容赦のない全力のボディフック。

「とりあえず黙らせました」

自分たちの代表な対して、何の躊躇もない一撃に、さすがの雄二も引き気味に答える。

「お、おう。ありがとう」

「よっぽど人望無いんだね、根本くんって」

途中から成り行きを見ていたひばりは顔を引きつらせながらつぶやく。

「ん? きたか、明久、支倉」

二人に気づいた雄二はそちらに声をかける。

「よし、着付けを始めるぞー。明久、任せるからな」

「りょーかい!」

明久は、グツタリと横たわる根本に近づくと、制服を脱がしかかる。周囲のＢクラス生徒の何人かもそれを手伝い始めた。

「……写真集か。いいなそれ。思い出に残る、素敵な写真集にしてやってくれ」

別のＢクラス生徒と話していた雄二ほうからは、そんな会話まで聞こえてきた。

「女子の制服はよくわからないや」

裸にムかれた根本に、女子の制服をあてがった明久が困惑していると、一人のＢクラス女子がにこやかに近づいてきた。

「あたしがやったげるよー」

戦争中の険悪な雰囲気などはどこへ行ったのか、やたらフレンドリーである。

「そう？　じゃあ、お願いするね」

「まかせて♪」

明久も笑顔で制服を彼女に渡す。

「せっかくだから、かわいくしてあげてね」

「それはムリ。土台が腐ってるからね」

そう言っただけ笑いあう彼女と明久。

平和そうな一幕だ。約一名をのぞいては。

明久は、根本の制服を大事そうに抱えて校舎裏まできた。

瑞希のラブレターのことを、誰にも知られないためだ。

「えーと、どこかなって」

制服をひっくり返して手紙を探す。

「あ、あったあった」

根本の制服のズボンから、瑞希のラブレターを見つけた明久は、それを宝物のようにしまうと、ゴミ（根本の制服）に目をやった。

「後は、このゴミ（根本の制服）か……」

明久は、汚そうにゴミを指先でつまむと、

「汚物は消毒だよね」

と言つて近くの焼却炉に放り込んだ。

Fクラスの教室まで戻ってきた明久は、教室に誰もいないことを確認すると、そおつと瑞希の鞆に近づいた。

「落とし物は持ち主に、つと」 大事にしまつてあつた手紙を、瑞希の鞆へと入れる。

任務完了、とばかりに一息つく明久。

「明久君！」

「ふえっ！？」

突然声をかけられた明久は妙な悲鳴を上げて振り向いた。

「な、なに？」

そこには、瞳を潤ませ、しっかりと握つた両手を胸に押し当てた瑞希がたつていた。

「ど、どうかした？」

突然のことにあわてる明久。

フワリ。

ピンクのウサギが明久に飛びついた。

「明久君！ 明久君っ！ 明久君っ！！」

瑞希は、明久に抱きつくと、彼の名前を呼びながら、顔を胸に押し当てて泣きじゃくる。根本に脅され、戦争ではなにも出来ず、堪えに堪えた涙がすべて溢れた。

強い想いとともに。

「ちょっ！ まっ！？ お、おちついて！ とにかくおちついてよ 姫路さん。そんなに泣かれると、ぼくも困るよ」

「つく、ぐすつ、ふあ、ふあい」

顔をあげた瑞希の鼻先から、明久の胸元に向かって、透明な糸が、にゅーんと延びた。

「……」

「……」

あまりのことに二人とも無言になる。

「……プツ」

「ひにゃあ〜っ！ 見ないで下さい！ 笑わないで下さい！ 見ないで下さい〜っ！！」

たまりかねて吹いてしまった明久に、瑞希は耳から首まで真っ赤にしながら目をグルグルさせた。

「フツ、くくくつ。あははは！ み、瑞希ちゃん、は、はなみずが、にゅ〜んって、あははは」

ツボに入っただのか、笑い続ける明久。

必死に抗議する瑞希。

「ひどいです！ ひどいです！ 明久君ひどいです！ そんなに笑うなん……え、いまなんて……」

と、明久の言葉に気づいて聞き返す。

「あははは、え？ なに？ 瑞希ちゃ……っってしまったああああっ！！」

笑っていて気づいていなかった明久は、ナチュラルに答えてから悶絶した。

「ご、ごめん！ 姫路さん！」

素に戻って謝る明久。しかし、瑞希は首を傾げる。

「？ 何で謝るんですか？」

「いや、なんかなれなれしいかなって……」

そう言いながら、明久は自分のハンカチを瑞希に差し出した。首をかしげる瑞希はかわいいのだが、いまだに鼻から鼻水が出ているため台無しである。

「はう！ 忘れてました……どうもすみません」

また真っ赤になった瑞希は、明久のハンカチを受け取り、顔を拭く。

「ありがとうございます。コレ、洗って返しますね」
そう言ってニコリと微笑んだ。

「いや、いいよ姫路さん」

そう言う明久を、瑞希は不満げにみた。

「もう……」

「え？」

瑞希のつぶやきに明久は聞き返す。

瑞希は拗ねたようを見つめた。

「もう、瑞希って呼んでくれないんですか？」

そう言って頬を膨らませた。

「え？ いや、なんていうか、その……」

瑞希の様子に焦る明久。

「私のこと……瑞希って……呼んでくれないんですか？」

無意識に明久に詰め寄る瑞希。

「ええっと、それは……」

迫力に押されて一歩後ずさる明久。

「美波ちゃんも名前で呼ぶようになりましたし、ひばりちゃんもずつと名前です。何で私だけ名字にさん付けなんですか？」

瑞希らしくもない押しの強さに明久もタジタジだ。

「どうしてですか、明久君。教えて下さい」

明久にぶつからん勢いで迫る瑞希。

「ちょ、姫路さん落ち着いて！」

「ほら！ また！」

密着しかねない勢いに、さらに一歩後ずさった明久は綿のない座布団を踏んづけた。

「と、うわっ！」

「え、きゃっ！」

ズルリと滑った明久は瑞希もろとも転倒した。

一瞬、ホコリが舞い上がって二人を覆い隠すがすぐに姿を現した。その体勢は、瑞希が明久を押し倒した格好だ。

「つうく、大丈夫？ 姫路さ……」

「はい、大丈夫です、明久く……」

思わぬ距離。お互いの顔が鼻先にあった。

「ご、ごめん！ 姫路さん、すぐ退くからって、姫路さんが退いてくれないとうごけないじゃないか！ ひ、姫路さん、わるいんだけどいてくれない？」

明久は顔を背けながら瑞希に訴える。

しかし、瑞希は返事をしない。

「ひ、姫路さん？」

「……中学にあがってからですよ、そう呼ぶようになったのは」
瑞希は明久の胸板に額をつけ、顔を見せないようにしながらそう言った。

「クラスが別々になってしまつて、学校で会う機会が無くなつてきて、このまま疎遠になつて、口をきくことも無くなるのかな、なんて思つてました」

「……」

瑞希の告白に、明久はじつと耳を傾けていた。

「ひばりちゃんのおかげですね、ひばりちゃんが、私と明久君と一緒に引つ張り回してくれて、おかげで私たちは疎遠にならずに済みました。でも、明久君はどこか、私に線を引いているような、少し離れて接してるように感じて、とても寂しいと思いました。私は、明久君に、き、嫌われてるのかとも……」

「そんなことない！」

明久の声に、瑞希が顔をあげる。

「ぼくが姫路さんを嫌いになるなんてこと、絶対にないよ」

明久は真剣な顔でそう告げた。

それを聞いて瑞希は、うれしそうに顔を赤らめた。

「あ、あの、うれしいです。じゃ、じゃあ名前で……」

「それはムリ」

顔をそむけて即答だった。

「えええっ？！ な、なんですか？！」

ガンツ！！ っという音が聞こえたように瑞希はショックを受け、

半泣きになった。

そんな瑞希の様子をチラ見した明久は、どうにも罪悪感に襲われる。

「え、えつとね？ 姫路さん。これには理由があつてね？」

何とかなだめようと瑞希に声をかける明久。

「どんな理由ですか？」

涙目で聞いてくる瑞希。それを見た明久は観念する。

「笑わない？」

「笑つたりしません」

「誰にも言わない？」

「誰にも言いません」

そこまで聞いて、明久は顔を赤らめながら話はじめる。

「その、ぼくも、名前で呼びたいんだけど、みょうなクセがついちやつてて……」

「癖……？」

聞き返す瑞希にうなずく明久。

「その、どうしても、瑞希ちゃんって呼んじゃうんだ。で、それを直したくて家で練習を……」

思いもよらぬ話に瑞希は口を開けていた。

「な、なんというか、高校生になっても、ちゃん付けって言うのは、その、はずかしくて、な、なれるまでまってほしーなーなんて」

「プツ、フ、ク、フフフ」

「ひ、ひどいや姫路さん！ わらわないっていったのに！」

笑いだした瑞希に抗議する明久。

「ご、ごめんなさい、余りに可愛らしい理由だったもので、つい……」

「うつうつ……やつぱり笑われたよ。ひばりにも笑われたしな」

「ばやく明久。しかし、それを聞きとめた瑞希は、とたんに不機嫌になった。」

「ひばりちゃんには話したんですか？」

「へ？　なんで姫路さんを名前でよばないんだーっておこられただだだだだだっ？！　胸ツネったらダメ」

「もついいです。明久君は、もっと乙女心を勉強すべきです！」

そう言つて、顔を明久の胸に埋めると、大きく深呼吸して、明久の上から退いた。

「ふう」

明久も息を吐いて立ち上がった。

「あの、明久君」

「ん？　なに姫路さん」

「手紙、ありがとうございました」

瑞希は、まっすぐ明久を見ながらお礼を言った。

明久は照れくさいのか、身体の向きをそらして頬を掻く。

「いや、なんか根本君の制服から姫路さんの手紙が出てきたからね。持ち主に返そうって……」

「それって、ウソ、ですよね？」

「え？　いやそんなことは」

あっさり看破された明久はあわてる。

瑞希は、両手の指を軽く絡めながら、自分の胸あてる。
頬を染め、うつむき加減になりながら、言葉を紡いだ。

「明久君は優しいです。小学生の頃から変わってなくて。振り分け試験で途中退席したときも『具合が悪くなつて退席するだけです』っての科目の点数が零点になるだなんておかしい」って、私のために先生と言ひ合いまでしてくれて。それに、この戦争も……私のために、やってくれてるんですよ？」

ふと、瑞希が明久に笑いかける。

「あ、いや、それは！」

「ふふっ。誤魔化してもだめですよ、私、自己紹介が中断されたときに、明久君が坂本君に相談しているところ、見ちゃいましたから」

「うぐっ?!」

明久は、自分がドンドン追いつめられている気分になっているようだ。

「すごく、うれしかったです」

明久は、なにやらいたたまれない風になって、無理矢理口を開いた。

「で、手紙！」

「はい？」

「その手紙、うまくいくといいね」

そう言っ て明久は笑った。

「あ……。はいっ！ がんばりますっ！」

答える瑞希も満面の笑みだ。

「で、いつ告白するの？」

不意に気づいたように明久が訊ねる。

「え?! ええと、そうですね……。全部終わったら……」

瑞希は、真っ赤になりながら答えた。

「そっかあ、でもそれなら、手紙よりじかに言ったほうがうれしいかもね」

「そうですね? 明久君はそのほうが好きですか？」

「うん、あくまでぼくはだけど、ちゃんと顔をあわせて言ってもらほうがうれしいなあ」

明久は、優しく笑う。

瑞希はこれを聞いて、少しだけ思案した。

「……本当ですか? 今言ったこと、忘れないで下さいね?」「え? あ、うん」

と返す明久の言葉を聞いた瑞希は金言を得たように喜んだ。

「とにかく、ガンバってね」

「はいっ！ ありがとうございます!」

『はいっ！ ありがとうございます!』

その言葉が終わらぬ内に、教室の外にあった小さな人影は、音も立てずに立ち去った。

「ん？ よう、どうした支倉」

「あ、坂本君。別になんでもないよ」

「何でもないって風には見えんがな」

そういつて雄二は、ひばりの頭に手を乗せる。そして、優しい手つきで軽く撫でた。

「……ありがとう」

素直にお礼を言うひばり。

「なに、このくらいお安い御用だ」

雄二はニカツと笑ってみせる。

「なんか、坂本君って、お兄ちゃんって感じだね」

「ん？ そうか？ 俺は一人っ子なんで、その辺よくわからないんだが」

「アハハ、そーなんだ。まあ、あたしも一人っ子だから、よくわかんないけどね」

「なんだそりゃ？」

言葉を交わして笑い合う二人。その姿は、本当の兄妹のようにも見えた。

「次は、Aクラスだね」

ひばりは表情を引き締めて雄二に訊ねた。

「ああ、そうだ。なに勝つための算段はついている」

雄二はなにも心配はないという顔で答えると、ひばりの頭を、軽くポンポンとたたいた。

「一騎打ちだっけ？ でもみっちゃんでも霧島さんに勝てるかどうか……」

しかし、ひばりは心配げだ。

「いや、やるのは俺だ。科目と点数上限を指定してしかける」

「坂本君が？ 大丈夫なの？」

ひばりの疑わしげな視線に、雄二は心外だと言わんばかりに肩を

すくめる。

「大丈夫だ。俺はこれでも神童と呼ばれてたんだぜ」

少し自慢げな雄二。しかし、ひばりは半眼だ。

「それって、“昔は”って枕詞がつくよね？ 大丈夫かな、ちゃんと予習位しておきなさいよ？」

「ははっ、今度は支倉が姉みたいだな。だがまあ、そうだな、支倉にはCクラスの罾の時に意見をもらって助かったしな、忠告通り、予習くらいはしておくか」

「うむ、善きに計らえ」

ひばりは腰に両手を当て、ボリュームのある胸を張りながら鷹揚にうなづく。

「ははーっ。かしこまりましたお姉さま」

雄二もふざけて慇懃に礼をする。

「ぶ」

「ク」

「うぶぶ、ふ、あはははっ！」

「クク、ふ、ははははっ！」

どちらからともなく噴きだし、笑い合う。

しかし、二人は気づいていなかった。

二人を見つめる、鋭い目があることを。

雄二と別れたひばりは、家路についていた。雄二とのやりとりでいくらか気は晴れていたが、まだ、瑞希や明久と顔をあわせるのはツラかった。

だから二人に声をかけずに出てきてしまっていた。

「はあ、でも二人とも心配しそうだな！。後でフォローしな「おい、支倉よー」」

ぶつぶつと、ひとり言をつぶやいていたひばりに声がかかる。

ひばりが振り向くと、秀吉が近づいてきた。

「木下君？」

ひばりは、歩みをとめて秀吉を待った。

「今帰りの？」

「うん、そうだよ」

二人並んで歩き出す。

「ふむ。しかしひとりとは珍しいのう。いつもなら明久か姫路と一緒にいるからのう」

「ああ、そうかもね」

じつはひばりは、明久と一緒に帰宅するケースは少ない。

家事の都合があるため、買い物に行ったり、早めに帰宅したりしているためだ。

朝はほとんど一緒なのだが。

「で、じゃ。その、なんというか、聞きたいことがあるのじゃが」
「聞きたいこと？」

齒切れの悪い秀吉に、首をかしげるひばり。

「う、うむ。答えたくなければムリに答えずとも好いが……」

「？ なに？」

「支倉は……『カレイドの乙女』と呼ばれた女優、皆口美空を知っておるかの？」

秀吉の質問の内容に、ひばりは仰天した。

「な、なななな？ 何で木下君がその名前を知ってるの？！」

「やはり知っておるのか、自己紹介の時の声帯模写といい、演劇に興味があるという話といい、関係があるのかと……」

「関係あるもなにも、あたしのお母さんだよ！」

「な、なんと！ 皆口美空の娘子であつたか……すまぬ」

秀吉は神妙な顔で頭を下げた。

「ど、どうしたの？！ 木下君。突然、あ。そっか、その名前を知ってるってことはあのことも知ってるんだ」

頭を下げる秀吉に、ひばりは困り顔になった。

「うむ。皆口美空は六年前に……嫌なことを思い出させてしまって

申し訳ないのじゃ」

そういつて顔をあげた秀吉の表情は曇ったままだ。

「気にしないで。ツラくないって言ったらウソになるけど、大丈夫だから。それより！ おない年でお母さんを知っている人に会ったのつて、初めてだよ」 どうやって知ったの？

ひばりは、目を輝かせて秀吉に訊ねた。

「ああ、あれは八歳の頃じゃったか、両親がどこからかチケットを手に入れてきての。家族で観劇に行ったのじゃ」

「おおー」

「あの劇は素晴らしかったのじゃ。子供心に感動したのを覚えておる。特に、ひとり七役を舞台裏に戻ることなく演じたことじゃ。正直魔法かと思つたぞい」

「それは、お母さん喜ぶよ」

「そうかの？ まあ、それ以来、わしは皆口美空の大ファンでの。

あんな舞台役者になりたい思い、精進してきたのじゃ」

少し興奮気味に話す秀吉。そしてひばりも嬉しそうに相づちを打つ。

二人の帰り道は、こうして楽しく過ぎていったのだった。

『私たちCクラスは、Aクラスに宣戦を布告するわ！』

その日、Aクラスにやってきた少女、小山裕香は大きな声で宣告した。

「なに？ どうしたの」

突然の来訪者に、優子が応対しようと進み出る。

「居たわね、木下優子」

「え？ 確かにあたしが木下優子だけど、小山さんだっけ？ どこかでお会いしたかしら」

突然、親の敵を見るようにニラまれ、名前を呼ばれた優子は戸惑う。

「人を豚呼ばわりしておいてとぼける気っ?！」

「な、なに? 知らないわよ?! あたしは!」

「~~~~っ! あげくに忘れた振り?! Cクラスなんて眼中にな
いつての?!」

ヒートアップする小山に、戸惑う優子。

「とにかく! この後開戦よっ! 絶対吠え面かせてやるんだか
ら覚悟なさいっ!」

まくし立てた小山は、ドバン! とドアも砕けよと言わんばかり
に乱暴に閉める。

後には、なにがなにやらさっぱり把握できていない優子を取り残
された。

その肩に、ポンと手が置かれる

優子がフルフルと振り返ると、三つ編みおさげにメガネの少女が
立っていた。

「優子……いくら何でも、人間を豚呼ばわりなんて、良くないです
よ?」

「知らないわよっ! あたしは小山さんに会うどころか、Cクラス
にだって行ったことないのよ?!」

「でもですね……ん? Cクラス?」

ふと、何かに気づいたのか、おさげの少女は眉をひそめる。

「どうしたの? 御鳥」

様子の変わった御鳥に優子は訊ねる。

「優子、Cクラスには本当に行つてないんですね?」

「ええ、行つてないわ」

確認する御鳥に間違いないと答える優子。

「昨日の朝、私は優子がCクラスに向かうのを見ました」

「ウソ! 昨日の朝つて……行つてないわよ」

御鳥の言葉に驚く優子。

「わかってます。そのとき優子は、私に古文の例題について質問し
に来てましたから」

「そういえば……」

「はい、ですから見間違いかと思っていたんですが、心当たりはありませんか？」

真剣に訊ねる御鳥に、優子は顔を伏せたまま黙ってしまった。

「優子？」

「ふ、ふふふ……そう、そういうこと。なるほどわかったわ。考えてみればそうよ、外見で私に見間違えるんだからアイツしかないのよ」

「ゆ、優子？ 心当たりが？」

「ええ……ええ！ あるわ。ありますとも……」

そして、どす黒いオーラを吹き出しつつ顔をあげた。

『ひ……で……よ……し……』

地獄の底から響くような声だった。

ぞわり。

補給テストの最中、秀吉は言いしれようのない悪寒を感じた。

「……なんじゃ？ 風邪かのう……」

しかし、その原因に気づくことはなかった。

第八問（後書き）

いかがでしたでしょうか？各オリジナルキャラクターは原作一巻分終了後に解説をやるうかと思ってます。それではまた次回お会いしましょう♪

第九問（前書き）

第九問です。読まれる方が楽しんでいただければ幸いです。

第九問

カキーン

鋭い金属音とともに振るわれたランスが小山の召還獣の武器を碎きながら、胴体を刺し貫いていた。

「勝負ありました。勝者Aクラス！」

教師の宣言を受け、Aクラス対Cクラスの戦争は終結した。

「く、くやし……」

がつくりうなだれた小山は視線で人ひとり殺さんとする勢いで、自分を倒した相手、木下優子をにらみつけた。

その視線を受け、優子はため息をつく。

「小山さん、信じてはもらえないと思うのだけど、Cクラスを罵倒したのはアタシじゃないわ」

「まだそんなことを……」

「いいから聞いて」

声をあげようとする小山を制して話を続ける優子。

「わたしにはね、弟が居るのよ双子のね。顔なんかホントそっくりで、同じ格好ならまず見分けがつかないわ」

「……」

小山は落ち着いたようで、優子の話しに耳を傾ける。

「で、その出来損ないの弟が、Fクラスにいるのよ」

「F……クラス？」

小山の顔がこわばる。

「わかってくれたかしら？」

「……ええ、わかったわ。私はFクラス、いえ、坂本雄二にかつがれてみたいね」

悔しそうにうつむく小山。しかし、すぐに顔を上げると優子を見据える。

「でも、この戦争であなたたちに負けたことも、絶対忘れないわよ！」

強く言い放った小山を見ていた優子をはじめとするAクラス生徒は、皆一様に、『うわー、めんどくさいのに関わっちゃったな』と、微妙な顔になった。

「やっと終わったわね御鳥」

立ち去る小山たちを見送り、優子は疲れた顔で親友に声をかける。

「ええ。この場合は」

だが、御鳥の表情は晴れない。

「え？　なによ、まだ何か起こるって言うの？」

優子は周囲にバレないように、

「勘弁してよ」

と漏らす。

「勘、ですけど、一連の騒ぎは未だ終息していないように思います。見てください」

そういつてBクラスを見ると、優子もつられてそちらを見る。

そこでは、Bクラスの生徒がテストを受けていた。

「……設備を交換していない？」

「そうです。BクラスはFクラスに負けました。昨日の話です」

御鳥の言葉に優子は考え込む。

「遅くとも、敗戦の翌日には交換していてもおかしくないわよね？」

「ええ、明確な期日は決められてはいないはずですが、戦勝側が先送りをする理由はないはずです」

「Fクラス……いえ、代表の坂本雄二か。なにを企んでいるやら……」

優子は軽く頭を降って、ため息をつく。その様子を見て、御鳥はクスリと笑った。

「そうですね。案外、ウチ（Aクラスに）攻め込むつもりかもしれませんね」

「はあ?!　FクラスがAクラス（ウチ）に？　冗談でしょ、Fク^{クス}

ラスがあたしたちAクラスに勝てるワケないじゃない」

優子は、バカバカしいとばかりに会話を打ち切って教室に戻った。だが、御鳥はしばらくその場から動かずに、渡り廊下向こうにあるFクラスの教室を見つめていた。

翌朝、Fクラスの教室では、明久たちFクラスメンバーが、最終目標である、対Aクラス戦の作戦説明を受けていた。

「まずはみんなに礼が言いたい」

教壇の上で、教卓に手をついた雄二は、開口一番にそう言い始めた。

「周囲には不可能事だと言われていたにも関わらず、ここまで来れたのは、他でもない、みんなの協力があればこそだ。感謝している」そう言つて素直に頭を下げる雄二。その姿は、去年から一緒にいることが多い明久ですら覚えがないものだった。

「ど、どうしたのさ？ 雄二。らしくないよ」

明久は信じられないものを見た、という面もちで、雄二に声をかけた。

「はは、自分でもそう思うんだがな。しかし、これは俺のいつわらざる気持ちだ」

それを聞いたFクラスのメンバーは照れくさそうに、しかし、思いの顔で雄二に応えた。

「ここまで来たら、勝つ。勝つて、勉強だけでは生き残れないってことを、ウチの教師どもに証明するぞ！」

『そうだぜーっ！』

『勉強だけじゃねーっ！』

『うおーっ！』

最後の大一番を前に、Fクラスの気持ちが始まっていく。

「ありがとうみんな。それでは、最後のAクラス戦だが、一騎討ちで決着をつけたいと思う」

雄二の宣言に、教室内がにわかに騒がしくなる。

『どういことなんだ？』

『誰が一騎討ちするんだ？』

『勝てるのか？ それで』

先んじて聞いていた、明久たちメインメンバー以外は驚きが強く、ざわめきは、すぐには収まりそうになかった。

「皆、落ち着いてくれ」

言いながら雄二は教卓をバンバンと叩いた。

「今から説明をする」

雄二の声に、皆が静まる。Dクラス戦、Bクラス戦とその発言力と立場を強化してきた雄二は、代表として、確かに信頼されていた。「やるのは、Fクラス代表とAクラス代表。つまり、俺と翔子だ」

さすがにこの事を聞いていたひばり以外は驚きを隠せない。

「バカの雄二が勝てるわけ「ドスッ」」

叫んだ明久の横の畳にカッターが突き立った。

「次は当て「坂本君！ 危ないじゃない！」わかったわかった、支倉。そんなに睨まないでくれ」

カッターを投擲して明久をにらむ雄二。しかし、猛然と抗議するひばりに、すぐさま降参した。

「もう、アキくんも余計なこと言わないの」

「う。ぼくまでおこられるの？」

「当たり前です」

言われて明久はシュンとなる。

「気を取り直して続けよう。確かに翔子は強い。まともにやり合ったら、勝負にもならないだろうな」

雄二は、そこで言葉を切り、みんなを見回す。

そして続けた。

「だが、思い出してほしい。Dクラス戦はどうだった？ Bクラス戦は？ どちらもまともにやれば勝ち目なんか無かっただろう。だ

が、俺たちは、今ここにいる！ 勝ってここにいるんだ。次も同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる！ 俺たちの勝ち揺るがん！」

力強く宣言する雄二。

勝てるはずがない、そう思っていた二つの戦争を勝利に導いた彼の言葉を否定する者はいない。

「俺を信じてほしい。過去に神童と呼ばれていた、この俺の力。今こそみんなに見せよう！」

『おおーっ！！』

もはや雄二の勝利を疑う者は、どこにもいなかった。

「さて、具体的な方法だが、一騎討ちではフィールドを限定する」

「フィールドを？ 教科は何にするの？」

ひばりが訊ねる。

それに応えるように雄二はニヤリと笑って口を開いた。

「日本史だ。しかも、内容を小学生レベルに限定し、百店満点の点数勝負にする」

「召喚獣バトルじゃなくて？」

「ああ、そうだ」

雄二は自信ありげにうなづく。

それを聞いて、クリスが口を開く。

「注意力と集中力の勝負になるねい。日本史なら翔子ちゃんの集中力を乱せるのかなん？」

口元は笑っているが、目線は真剣だ。

「あるいは、坂本君が、日本史に絶対の自信があるか。ですね。百点満点が前提ですから、おそらく延長戦を繰り返し、集中力が切れた方が負ける……博打ですね。作戦と呼ぶのもおこがましい」

アキは正直ガツカリだと言わんばかりにため息をつく。

しかし、雄二は余裕の態度を崩さない。

「おいおい、あんまり俺を舐めないでくれよ？ そんな運に頼りき

ったやり方、俺だって作戦だなんて言いたくないぜ」

そう言って、野生味あふれる笑みを見せた。

「確かにアイツなら、集中なんてしなくても、小学生レベルの問題くらい完璧にこなすだろうしな。」

「じゃあダメじゃないか」

雄二の言葉に、明久が声をあげる。

「雄二よ。あまりもつたいぶるでない。そろそろ種明かしをせんと不満が出かねんぞ？」

秀吉の言葉に、他のクラスメイトもうなずいてみせる。

「おっと、すまんすまん。前置きが長くなってしまったな。俺がこのやり方を採用した理由はただ一つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

雄二は真剣な面もちで話す。

ひばりは、その言葉の内に、なにか少し違う感情が混じっているのを感じた。

「その問題は……『大化の改新』」

みんな不思議そうな顔をしている。

「うゝみゆ、誰が何をしたのか説明しなさいとかかなん？」

代表するようにクリスが訊ねる。

「そんな掘り下げた問題じゃない。単純に年号を問うような問題だ。これが出れば俺たちの勝ちだ」

皆信じられないという顔だ。

それは当然だろう。学年主席の才女が、そんな基本的な問題を間違えるとは、到底思えない。

「大化の改新は645年。こんな問題、明久ですら間違えん」
なぜか明久が机に突っ伏した。

「だが翔子は間違える。これは確実だ。そうすれば、俺たちの勝ちが決まる。そしてこの教室からおさらばできるってわけだ」

と、瑞希が手をあげる。

「あの、坂本君」

「ん？　なんだ姫路」

「その、霧島さんとは……仲が良いんですか？」

クラス中が思っていた疑問を、瑞希が尋ねた。

雄二は、なんだそんなことかという顔になると、

「ああ、アイツとは幼なじみだ」

と、何でもないように答えた。

「総員！　ねええっ！」

「うおっ！？　なぜ明久の号令でみんな上履きを構える！？　っー

か、クリス！　何でおまえまで楽しそうに構える！　女子はおまえ

だけだぞっ！」

「いやあ、面白そうなんで、つい」

悪びれもせず答えるクリス。

「この男の敵めっ！　Aクラスをやる前に、おまえを血祭りにあげてやる！」

「俺が何をした？！」

「問答無用！　さて、同志須川。靴下はまだ早い。それは押さえつけたあとで口におしこむものだ」

「やるんだつたらムレムレのが喜ばれるよん」

「それだ！」

すでに大半の男子は臨戦態勢。それをクリスが面白そうにあまりまくる。

と、瑞希が明久に近づいた。

「あ、明久君」

「ん？　なに、姫路さん」

瑞希に声をかけられ、にこやかに応じる明久。

「明久君は……霧島さんが好みなんですか？」

「へ？　うゝん、好みとはすこしちがうけど美人だしね……って、なんで姫路さんがよくに攻撃態勢をつ？！　そして美波は、なんで掃除用具いれをかついで、よくに近づいてくるの？！」

それをみた雄二はチャンスとばかりに口を開く。

「おまえ等、幼なじみがどうか言うなら、明久は、姫路と支倉と幼なじみだぞ！　しかもアイツは、支倉に毎朝起こしてもらってるらしい！」

『『『『なにいいーっ！っ！』』』』

標的が明久に切り替わった。

「ひいつ？！　どうしたのみんな、敵はむこうだよ？！」

『たまれ裏切り者！』

『俺だってかわいい女の子の幼なじみが欲しかったんだぞ！』

『全男子の夢、幼なじみに起こしてもらうを味わうなんて、許せん！』

『姫路さん結婚して！』

『ひばりタン、ハアハア』

「ひえゝ、た、たすけてよ、ひばりゝゝ」

思わずひばりに助けを求める明久。

しかし、ひばりは明久を半眼で見つめるだけだ。

「ひ、ひばり？」

様子のおかしいひばりに、明久が声をかける。

「……そんなに霧島さんがいいんだ……」

ひばりにしては珍しい、ブリザードヴォイス。

「へ？」

「アキくんなんか知らない」

頬を膨らませ、プイツと横を向くひばり。

もはや先ほどまでのまとまりが、カケラも残っていない。

そこに、パンパンと手を叩く音が割り込む。

「まあまあ。落ち着くんじゃ皆の衆。思いっきり脇へ逸れとるぞい」
教室内で冷静だった数少ない人物の秀吉だった。

それで落ち着いたのか、雄二も一息つく。

「とにかく、俺と翔子は幼なじみだ。で、小さい頃に間違えて嘘を教えてしまった」

ひばりは、雄二の声に固いものを感じた。

「アイツは一度教えたことは絶対忘れない。だからこそ、今、学年トップの座にいる。しかし、今回はそれが仇になるわけだ。俺はそこを利用して勝つ。そうすれば俺たちの机は」

『システムデスクだ！』

Fクラスみんなが声を上げた。

しかし、ひばりは釈然としないものを感じて、それにのれなかった。

「一騎討ち？」

「そのとおりだ。Fクラスは、試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

宣戦布告。

雄二は、明久、ひばり、瑞希、秀吉、ムッツリーニの六人でAクラスを訪問。

宣戦を布告した。

「……何を企んでいるのかしら？」

そう訊ねるのは交渉役として出てきた木下優子。彼女は訝しげに雄二たちを見る。

しかし、それに動することなく、雄二は答えた。

「Fクラスの勝利。それ以外に狙うものなど無い」

優子はスキを探すかのように目を細める。

が、雄二はそれを受け流すことなく堂々と受け止めた。

ツツと優子は目をそらす。

「面倒な試召戦争を、簡単お手軽に済ませられるのはありがたいけどね」

そして射るように雄二を見つめた。

「だからと言って、わざわざリスクを背負う必要はないかな」

緊張感あふれる言葉のやりとり。

誰知らず、唾液を嚥下した。

雄二も、優子の言葉を聞いて目を閉じる。

「賢明な判断だ」

その言葉に優子の口端があがる。

雄二は腕を組み、アゴに手を当てた。

「ところで…… Cクラスとの試召戦争はどうだった？」

何でもないように訊ねる雄二。

「…… 時間を取られたけど、それだけね。問題ないわ」

余裕を見せて肩をすくめる優子。しかし、雄二は間髪を入れずに口を開いた。

「Bクラスとやり合う気は？」

言われて優子の顔がひきつる。

「Bクラスって…… こないだ来ていたあの……」

優子は、先日ここに現れたBクラス代表の姿を思い出したのか、しかめっ面で口に手を充てる。

その様子を見て、雄二はニヤリと笑う。

「そうだ、あれが代表をやっているクラスさ。幸いなことに、まだ宣戦布告はされていないようだ？ さて、この先はどうなるやら」

「…… BクラスはFクラスに敗戦したんでしょ？ なら、三ヶ月は宣戦布告できないんじゃない？」

優子は、一応、試召戦争のルールを持ち出してみた。

「知ってるだろう。実際はどうだろうと対外的な公式発表では、あの戦争は『和平交渉にて終結』となっている。規約には何ら抵触しない。Dクラスもな」

優子の顔は苦りきった。

「脅迫するつもり？」

牽制するように言葉を放つ。

「人聞きが悪いなあ」

雄二は肩をすくめた。そして優子に顔を近づける。

「ただの、お願いさ」

そうして邪悪な笑みを浮かべた。

「……ふう。わかったわ。何を企んでいるかはわからないけど、その提案、受けても良いよ」

優子は肩の力を抜くと軽く笑った。

「え？　ほんとに？」

思わず明久が声をあげる。

「ええ。本当よ。代表が負けるなんて有り得ないしね。それに」

「それに？」

「それにあんな格好の代表が率いるクラスと戦争なんてお断りだしね。そのかわりこちらからも提案」

「なんだ？」

譲歩しつつも新たな提案を出す優子。

「代表同士ではなくて、お互い五人ずつ選んで一騎討ち五回。そのうち三回勝った方の勝ちつて「いえ七対七です」御鳥……？」

優子の提案に、三つ編みメガネの少女が割り込んだ。

「あんたは？」

雄二が警戒するように聞く。

「大事な交渉に割り込んでしまい申し訳ありません。わたしは二年Aクラス、神薙御鳥と申します」

折り目正しく礼をする御鳥。

「そうか。だがな神薙さんよ、学生同士とはいえ、これは正式な交渉の場だ。余計な口は挟まないでもらいたいな」

雄二に牽制される御鳥。が、ここで優子が口を挟む。

「彼女はオブザーバーみたいなものよ。私が先走ったのを止めてくれたのよ。ね？　御鳥」

明らかになでっち上げ。しかし雄二は動じない。

「オブザーバーね、まあいい。七対七だったか？　いいだろう。ただし、科目の選択件はもううそ」

雄二のさらなる提案。優子がチラリと御鳥を見ると、軽く首を振るのが見えた。軽く思案し、口を開く。

「全部はさすがにダメよ。七回中四回選ばせてあげる。これでどう？」

言い放つ優子。雄二は軽く目を閉じて思考する。

「いいだろう」

「交渉成立ね」

そういつて優子は緊張を解こうとした。

「……待つて」

いきなり静謐な気配が現れる。

霧島翔子。

Aクラス代表である。

「翔子か……」

「代表……？」

突然のことに、雄二も優子も動けなくなる。

翔子は、音も無くひばりに近づいて見つめた。

「な、なに？」

ひばりは動揺しながら聞いてみる。

が、翔子は答えず、ひばりから目をそらすと雄二に向き直った。

「……雄二、私と個人的な賭をして欲しい」

「断る。俺にメリットが無「メリットならある」……」

無視して立ち去ろうとした雄二の足が止まる。

「あなた達が勝ったら、私は諦める」

その言葉に雄二が振り向く。

「おまえたちが勝ったら？」

「家にきて、両親に挨拶してもらう」

雄二の顔がひきつった。

「おまえ……やっぱ、まだ諦めてなかったのか……」

「……私は諦めない。ずっと雄二のことが好き」

電撃告白だ。

「何度も断ったはずだ。ほかの男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二だけ。他の人に興味はない」

「……頑固な奴だ。いいだろう。ただし、俺たちが勝ったら必ず諦めてもらう」

「……わかった約束する」

「勝負は十時からでかまわないか？」

「……かまわない」

完全に周りをおいてしまっている二人。

「交渉は成立だ。教室に戻るぞ」

雄二はもう用は無いとばかりにきびすを返した。

ほかのメンバーも戸惑いながらもそれに習って、Aクラスの教室から立ち去った。

「……みんなすまん俺たちの問題に巻き込んだしまった」

教室への道すがら雄二が口を開く。

明久達はなんと答えて良いかわからず、顔を見合わせる。

「悪いんだが、俺と翔子の約束については、みんなには黙っていて欲しい」

「それはかまわないけど……」

明久は言葉を見つけられずにいた。

と、突然、ひばりが雄二の前に回り込む。

「と……、どうした？ 支倉」

「坂本君はそれでいいの？」

「なにがだ」

「霧島さんのことだよ！」

「翔子か。正直、つきまとわれて迷惑「嘘だよ」何……？」

ひばりの言葉に雄二が詰まる。

「あたし、解るもん。坂本君は、本当は霧島さんのこと」

「何をバカな」

かぶりを振って、ひばりの言葉を否定する雄二。

しかし、ひばりは諦めない。

「声ってね？ 人の心を映すものなんだよ」

「……何の話だ？」

意味が分からず訊ねる雄二。

しかし、ひばりはかまわず続ける。

「坂本君はごまかしてるけど、霧島さんのことを話している声に感じたのは、後悔、自己嫌悪、憧憬と深い愛情」

「ッ！」

「細かい事情は解らないよ。でも、このままでいいわけがないよ…

…」

「……」

ひばりの言葉に黙ってしまう雄二。

「ねえ、坂本君。もっと霧島さんに向き合ってあげなよ」

「……俺にはそんな資格はない。この話は終わりだ」

そう会話を打ち切って、雄二はふたたび歩き出す。

ひばりは肩をふるわせると、走って、雄二の前に出る。

雄二はそれを無視しようとして、膝下から脳天に突き抜ける衝撃に悶絶した！

ひばりに向こうずねを蹴り上げられたせいだ。

「○●×~~~~っつ！?!」

声も出ない悲鳴を上げて、雄二はうずくまる。

「逃げるな！ 坂本雄二！」

そんな雄二の前に、ひばりが仁王立ちになる。

「どうしてわかんないの？ 霧島さんの声には、坂本君への強い想いがこもってた。これだけ強い想いを持つてる人が、こんな賭みたいなやり方で想いを消し去れるわけ無いじゃない！ 坂本君は、霧島さんに不幸になって欲しいの？」

「ちがう……俺は、俺みたいなのバカのせいで翔子が不幸になるのを防ぎたいだけだ」

雄二の独白。しかし、ひばりはため息をついて苦笑いする。

「やっぱり坂本君だって霧島さんのこと大事に思ってるんじゃない」「い、いや俺は……」

「言い訳しない！」

「ぐっ」

「ね、坂本君。誰かを想う気持ちって、スゴい力があるんだよ？
そんなに簡単に消えたりしないんだ。そしてそれは、呪いのように
その人を縛ってしまう……」

ひばりは目を伏せる。

「もし仮に坂本君が賭に勝ったとしても、霧島さんは、きっと坂本
君を忘れない。想いを抱えたまま生きていくことになるよ。それで
もいいの？」

「……じゃあ、俺はどうしたらいいんだ？」

つぶやくようにひばりに訊ねる雄二。

「はあ、そんなの知らないよ」

「な、なに？」

思わず聞き返す雄二。それに対してひばりは、堂々と胸を張って
答えた。

「知らないって言ったの！」

その答えに呆然となる雄二と周囲の者達。

「知らないって、おまえな……」

雄二は額を押さえた。

「じゃあ、聞くけど、あたしがこれが答えだって言ったら、坂本君
はそれを、唯々諾々と認めるの？」

雄二の態度に、ひばりが聞き返す。

言われて雄二はハッとなった。

「そうか……そうだな。これは俺が、いや、俺と翔子が見つけなき
やいけない答えか」

「そういうこと」

ひばりはしたり顔でうなづく。

「やれやれ、難解な宿題を押しつけられた気分だ」

「あ、それいーねー♪ ひばりおねーさんからの宿題ってことで」
「ハッ、言ってる」

雄二は立ち上がると、ひばりの頭を押さえてグリグリかき混ぜる。

「うにひゃあゝゝ?! やゝめゝてゝよゝ、やめてゝ?!」

「ハッハッハ、相変わらず小さくて撫でやすいなあ? おい」

「ふえっ! ちっちゃくないよっ! あたし、ちっちゃくないからね!」

「よし、おまえら、とつとと戻るぞ。まずは試召戦だ」

そう言つと、雄二は歩き始めた。堂々と、胸を張つて。

「う、うん」

なんだか置いてけぼりになっていた他のメンツもそれを追いかける。

Aクラスとの決戦はすぐそこまで近づいていた。

第九問（後書き）

今回、ひばりが言ってることに對しては、賛否が出るかなと思ってます。

次回はいよいよ決戦。バトルだらけのAクラス戦です。
楽しみにしていてください。

第十問（前書き）

第十問です。長くなったので切りました。読んでくださる方が楽しんでいただければ幸いです。

第十問

「では、両名とも準備は良いですか？」

Aクラスの担任であり、学年主任でもある高橋教諭が立会人となり、ここ、Aクラス教室で、Aクラス対Fクラスの試召戦争は幕を上げた。

声をかけられた両クラスの代表は、ふたりとも肯定の意志を告げる。

「それでは一人目の方、前へどうぞ」

高橋教諭にうながされ、Aクラスから一人歩みでる。

「アタシから行くよっ」

出てきたのは気の強そうな美少女、木下優子。

Fクラスを威圧するかのように仁王立ちになっている。

それを見たFクラスから、一人名乗り出る。

「ワシがやろう」

優子と同じ顔でより温和そうな表情の男子（？）が進み出る。

木下秀吉。優子の双子の弟だ。

対峙するふたり。

と、優子が口を開く。

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ？ 姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「……あ。す、すまぬ姉上。あれは正直やりすぎた思ったのじゃ」

問いただされ、素直にあやまる秀吉。

「ふーん。悪いとは思ってるんだ。じゃーいいや。その代わり、ちよつとこつち来てくれる？」

少し意外そうな顔をしながらも、優子は秀吉の手を取って廊下へ出た。

「なんじゃ？ ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

『姉上、勝負は……どうしてワシの腕をつかむ？』

『悪いと思っっているってことは、折檻される覚悟はできているのよね？ 秀吉』

『あ、ああいや、次はもつと気をつけて演じるゆえ、今回はみのがだだだだっ！ あ、姉上っ！ その間接はそっちには曲がらなっ……！』

『あんたが謝ったくらいで！ 地に落ちたアタシの評判が回復することなんて無いのよっ！ どうしてくるんのよ！』

『ひ、人の噂も七十何とやらというあだだだっ？！』

『んなに、むうあてえるうくぁーっ！』

『んのおぁうーっ！』

『ちよつとーっ？！』

皆が呆気にとられる中、いち早く回復したひばりが廊下に飛び出す。

『やりすぎですっ！！ 木下君のお姉さんっ！』

『だれよ？ あなた』

すでにモザイクがかかっている秀吉だったものに馬乗りになっていた優子は、ゆっくり立ち上がると汚物を払うように手に着いた付着物を払った。

『あたしは木下君のクラスメイトで、支倉ひばりといいます。お姉さん、木下君は、ちゃんと謝りました！ こんな暴力を振るう必要はないですよ？！』

強い語調で優子に食ってかかるひばり。

しかし優子は小揺るぎもない。

『ふん！ アタシは、このバカのおかげでCクラスの人間を豚呼ばわりしたことになってんのよ？ これくらい当然の権利よ』

『ふつうに注意すればいいでしょ！ 木下君だって悪いと思っっていたから謝ったのに、これはひどすぎます！』

優子のさも当然という態度に、ひばりは嫌悪を覚えた。

「支倉さんだったかしら？ アタシはね、努力して今の地位を得たのよ。なのに、この出来損ないの弟は、なんの努力もしないで、やりにもよってFクラス行きになんかなって、恥ずかしいったらありやしない。こんなのが弟だなんて、屈辱以外のなにものでもないわよ」

優子は怒りのあまり、言動が制御できなくなっていた。

もともと気が強く、苛烈な性格である彼女は、普段それを隠している。

しかし、今の彼女はタガが外れてしまっていた。

「だいたい演劇なんて下らないものに入れ込んで、勉強が疎かになっっていれば世話はないわよ。あんなもの、なんの役にも立ちはいわ」

聞こえた言葉に、ひばりの顔がゆがむ。

歯ぎしりと共に、少しうつむいた。

『演劇をつ！！ バカにするなああああつつつ！！！！！！』

だいおんじょう
大音声。

ガラスが鳴動でヒビが入り、プラズマディスプレイをはじめとする、各種モニターが、一瞬ノイズまみれになる。

そして、Aクラスどころか、二年のすべての教室から誰かしら廊下を覗いていた。

突然のことに、優子は耳を押さえ、目を閉じてうずくまることしかなかった。

その前で、肩で息をする小柄な女の子。

「な、なんなのよ」

未だ耳鳴りのやまない優子はしかめっ面で立ち上がる。

と、目の前の少女が自分を見つめているのに気づいた。

「あ、あなたねえ「訂正して下さい」はあ？」

ひばりに文句を言うつもりが遮られた。

「それから、木下君に謝って下さい」

抑揚のない声。

普段のひばりを知る者なら、それがどれだけ異常か解る。

だが、優子はそんなことは知らなかった。

「なんでアタシが謝んなきゃならないのよ！ アタシは被害者よ！」

「演劇を下らないって言ったことを訂正して、木下君に謝って下さい」

感情の無い声音でひばりは繰り返した。

感情の入らない声。だからこそ彼女を知る者達には判る。

ひばりの中に渦巻く感情が。

「お断りよ。なんでアタシがFクラスなんかに関心を持ちたいのよ！
ないのよ！」

なにも気づいていない優子は、はっきりと拒絶する。

それを聞いたひばりは、少し間を空けてから口を開いた。

「じゃあ、勝負して決めましょう」

その言葉に、優子は片眉を上げた。

「勝負？」

「そうです。一回目の勝負、木下君に代わって、あたしが出ます。

あたしが勝ったら、演劇をバカにしたことと、木下君に行き過ぎた暴力を振るったことの二つをこの場で謝って下さい」

「ふん、いいわよ。その代わりアタシが勝ったら、そうね、明日からランドセルでも背負って登校してもらいましょうか」

優子はニヤリと笑って宣告する。

「わかりました」

教室内に戻るふたり。彼女らが話している間に、片づけと点検は終わったようだった。

「ひばり、だいじょうぶ？」

「ひばりちゃん……」

心配した明久と瑞希のふたりが駆け寄る。

「うん、大丈夫だよ？ 二人とも。心配させちゃってごめんね？」

そんなことはないと言を振る明久と瑞希。と、そこへ雄二が歩み寄る。

「大丈夫か？ 支倉」

「大丈夫だよ？ 坂本君。勝手に決めちゃってゴメ」

ガシ。

「え？」

言い終わる前に頭を両手で挟まれた。

ワシヤワシヤワシヤワシヤワシヤワシヤワシヤ……。――

雄二は両手でかき混ぜるようにひばりの頭を撫でた。

「ひあにやゝゝゝっ?!?!?! やめてよしてかきまぜないでゝゝゝゝゝゝゝゝ?!?!?!」

「んゝ。相変わらず、ちっちゃくて撫で心地のよい頭だなゝゝゝ」

「ちっちゃっ?! ちっちゃくないよっ！ あたし、ちっちゃくないからねっ！」

まわりは呆然とそれを見ている。

「ふう。堪能したぜ」

雄二はやり遂げた漢の顔で汗をぬぐった。

「もうっ！ ひどいよっ！ 坂本君っ！」

「はは、らしくなったじゃないか」

雄二はイタズラっぽくひばりに笑いかけた。
ひばりも、もう自然体だ。

「あ……うん！ ありがと！ 坂本君！」

「おう。その調子で一勝もぎ取ってこい」

「りょーかい！」

そう言つてひばりはフィールドへと駆けだした。

「すいません。遅れました！」

ひばりは、対戦相手の優子と、立ち会いの高橋教諭に頭を下げる。
「アタシを待たせるなんていい度胸ね。ま、いいわ始めましょう？
科目は選ばせてあげるわ。支倉さん、あなたCクラスぐらいの点数はあるらしいけど、その程度じゃ、どうやったってAクラスにはかなわないってこと、教えてあげるわ」

自信満々に言い放つ優子。しかし、ひばりはそれに答えず、高橋教諭に向き直る。

「高橋先生、科目はほんとに何でも選んで良いんですか？」

「構いません」

簡潔に答える高橋教諭。

「わかりました。じゃあ、特別科目召喚、家庭科をお願いします」
ひばりの宣言に、周囲がざわつく。

『家庭科勝負だつて？』

『特別科目って、そんなのあるのか？』

『基本的に総合科目に計上されない教科のことだ。家庭科を始め、美術や音楽などが入っている』

『本来試召戦争で使用する事なんて無いはずの科目です』

『へえ〜』

『だが、しっかりテストだけはあつただろ？』

『そういえば……』

『だから、教科の先生を連れてきて承認をもらえば召喚はできる。
できるんだが……』

『？……もんだいあるの？』

『特別科目は試召戦争での使用が禁止されてるんですよ。明久君』
『その通りだ。だから高橋先生が許可しなければ召喚はできない』
『ひばり……』

ひばりからの召喚許可要請に、高橋教諭は目を閉じて黙考。

しかし、すぐに口を開いた。

「許可します」

周囲から息が漏れる。

「ふん、考えたわね。特別科目ならそう点差はでないと考えたんでしょ？ でも、おあいにくさま。アタシはAクラスなのよ！ 試獣^{モシ}召喚！」

優子の声に応えて魔法陣が展開される。そして、騎士鎧とランスを装備した、ディフォルメ優子が姿をあらわした。

その頭上には379と表示されている。

「379点だと?!」

「特別科目ならいけるかと思ったのに」

「Aクラスにスキはないのか!?!」

Fクラス側から次々と声が挙がる。雄二も焦り気味だ。

しかし取り乱すことのない者もいた。

「おおよ？ アッキーと瑞希ちゃんも落ち着いてるねい。心配じゃないのかなん?」

「心配は心配ですけど……」

「家庭科だからね……」

「試獣^{サモン}召喚！」

ひばりの声にあわせて魔法陣が展開され、プレストアーマーに刀を装備したひばりの召喚獣が姿を顕す。

その左腕には金色に輝く腕輪があつた。

「う、腕輪?! まさかアンタ！」

驚愕する優子。そして見た。

ひばりの召喚獣の頭上に輝く503の数字を。

「さ、やろっか」

ひばりはニツと笑って宣言した。

「くっ、先手必勝！」

叫びと共に、優子の召喚獣がランスを構えて突撃する。

その速度は尋常ではなく、当たり前どころが悪ければ、この点差でもひっくり返すことは可能だ。

ランスの切っ先が、ひばりの召喚獣届こうとした瞬間、突風にあおられて、優子の召喚獣は突進を止められてしまふ。優子はあわてて召喚獣に距離をとらせる。

見れば、ひばりの召喚獣は竜巻に包まれており、手前にはライトグリーンのCのインシタルが浮いていた。

「腕輪の能力？」

見極めようと目を凝らす優子。その目の前でCの文字が竜巻に吸い込まれたかと思うと、竜巻は破裂するように消え去った。

後には、刀を横に振りきったひばりの召喚獣。その姿は先ほどとは違い、鎧装束と髪の毛がライトグリーンに染まっていた。

「姿が……変わった？」

優子は油断無く召喚獣にランスを構えさせる。

「行け！」

ひばりの声に反応し、切りかかる召喚獣。その速度は速く、鋭い。右下から切り上げるように刃が向かう。

キャリイーン。

刀は派手な音と共に、ランスで弾かれた。

ついで突き出されるランス。

ひばりの召喚獣は、これを、体をひねって避けた。

「やるじゃない！　ならこれはどう！」

言葉に続くように繰り出されるランスの連続突き。

「！」

驚いて目を見張るひばり。

だが、その驚きとは裏腹に、召喚獣は風のような早さでランスの先を避け、受け流していく。

そしてすり抜けるように移動しながら、相手の肩口をすべるよう

に切り裂いた。「くう?!」

優子は召喚獣に無理矢理ランスを振り回させると、長大なランスの腹が、ひばりの召喚獣の胴を打ちすえる。

一連の攻防で双方共に点数が削れたが、点差の割にダメージに差がなかった。

そのことに気づいた優子はニヤリと笑う。

「その召喚獣、確かに早いけど、攻撃力も防御力も低いみたいだね？　なら攻め立てて追い込んであげるわ！」

そう言つて、優子は召喚獣を突進させる。

そのとき、ひばりの召喚獣の腕輪から、メタリックシルバーのMのイニシャルが飛び出し、その胸に吸い込まれる。

そのとき、ランスが召喚獣の胸に突き立った。

「……！」

誰もが息を呑む。だが、ランスの先端は相手の鎧に、一ミリも食い込めなかった。

そして、召喚獣の鎧装束と髪の毛が銀色に染まる。

手にした刀も、金属製の棒に変化していた。

「な?!　また姿が?!　複数の特殊能力があるっていつの?!」

ひばりの召喚獣の新たな姿に驚愕する優子。そして、ランスが直撃したにも関わらず、ひばりの召喚獣の点数はほとんど減っていない。

「なによこれ?!」

優子の召喚獣の攻撃力なら防御していない相手など点差があつても倒せたはずだ。しかし今、そのランスの直撃を受けたはずの敵はピンピンしている。

と、ひばりの召喚獣が動く。右の手首を返しながら右足を後ろに引き、相手に自分の左側を見せるように半身になる。

力を込めていた優子の召喚獣は、力の流れをそらされたことで、たたら踏むようにつんのめった。

「あー！」

優子が声を上げたときには、すでに左手を添えた棍が背中を打っていた。

優子の召喚獣が地面にたたきつけられ、バウンドして浮き上がったときには、ひばりの召喚獣は体を反転させ、棍を大きく振り回しながら優子の召喚獣の前に回り込み、力の乗った先端をその体に突き込んだ。

次の瞬間、鎧が粉々に吹き飛び、棍が胴体を貫いた。

軽く痙攣した優子の召喚獣は、そのまま動かなくなり、かき消えた。

「勝者、Fクラス」

高橋教諭がコールする。それを聞いて優子は膝から崩れ落ちた。

「そ、そんな……アタシが……Fクラスなんか」

悄然とする優子の前に人影が近づいた。

「約束です。謝ってください」

ひばりだ。

優子はひばりを見上げて力無くにらんだ。

が、すぐに視線をはずした。

「……分かったわ」

優子はなんでもないように立ち上がり、背を伸ばし、まっすぐ顔を上げて秀吉の元へ来た。

「……秀吉……ひどい暴力を振るってごめんなさい……」

力無く謝罪し、頭を下げる。

「姉上、ワシも悪かったのじゃ。次があれば気をつけるのじゃ。今回のことは、お互い様と言うことでな、手打ちにしようぞ?」

秀吉は、優子に軽く笑いかけた。

「うっん、それだけでなく、秀吉と、後、支倉さんだったかしら。

演劇を悪く言ってしまったってごめんなさい」

「うむ、良いのじゃ」

「うん、わかったよ」

二人は優子の謝罪を受け入れた。

こうして、一回目の勝負は終了したのだった。

つづけて、二回目の勝負が始まる。

「では、次の方どうぞ」

「私が行きましょう」

黒髪おさげに、フレームレス眼鏡の少女、神薙御鳥が前にでる。それを見たアキが一步踏みだそうとすると、目の前に腕が伸びてきて遮られた。

「ここは、おねーさんに譲って欲しいかなん」
言いながらウインクをするクリス。

「……わかりました」

そう言って、アキは足を引つ込めた。
代わりにクリスが一步踏み出す。

「アキが出てくるものだとは思っていましたが、ままならない
ものですね」

「およ？ アキぴんのお知り合いかなん？ もしかして、おねー
さん、デートの邪魔しちゃったのかなん？」

クリスのしゃべりに、御鳥が眉を寄せる

「……ふざけた方ですね。今度はこちらが選ばせていただきますが、
構いませんね？」

「おっけいだよん」 優しくしてねい」

クリスはヘラヘラ笑いながら手をひらひらさせた。

「高橋先生、日本史でお願いします」

「承認します」

フィールドが日本史に変わる。

「クリス！」

「外人に日本史を当てるなんて……」

「卑怯だぞ！」

Fクラスから声が挙がる。

しかし、御鳥は動じない。

「これは戦争です。勝つための手段と方策があるならば、ためらわずに実行すべきでしょう。そちらの代表も同じ意見かと推察しますか？」

「全く持つてその通りだ。だが、下手な細工はかえって自分の首を絞める結果となることも考えた方がいいぞ」

水を向けられた雄二は、一応同意しつつも御鳥にニヤリと笑ってみせる。

それを見た御鳥の表情が固まった。

「……まさか?!」

「そのまさかなんだにゃ」サモン 試獣召喚！」

クリスの声に応じて、魔法陣が展開。

そして召喚獣が姿を顕す。

白銀の甲冑をまとい、手には槍のようなライフルを持つディフォルメされたクリスが顕れた。

その背中には一対の白い翼が生えている。

そしてその頭上には、403の数字が表示されていた。

「おねーさん、日本史得意なんだよねい」

御鳥は思わず身構えた。

「……自分の足を掬ってしまいましたか。慣れないことはするものではないですね。試獣召喚！」サモン

自嘲気味に笑いながら、御鳥も召喚した。

和弓を持った巫女服姿のディフォルメ御鳥が顕れる。

その頭上には412と表示されている。

たった9点差。

五分と言つてよい差しかない。

しかも、双方、腕輪持ち。

どちらに軍配が上がるか、誰にも想像がつかなかった。

第十問（後書き）

第十問でした。7戦全部書くと、結構分量があるので切りました。特別科目に関しては本作ではそういう扱いである。ってくらいのもりでお願いします。

実際、総合科目の点数って、単教科の12から13倍位なんですけど、『バカテスト』で使われてる科目の数も同じくらいなんですよね。なので、家庭科、音楽、美術は特別科目扱いとし、基本的には使えないとさせていただきました。

次回もまた、よろしくお願いします。

第十一問（前書き）

第十一問です。あまり進んでません。長さは普段より少し短いのですが。

それでは、読んで下さるみなさんが楽しんでいただければ幸いです。

第十一問

「行きます！」

「行くよん」

ふたり同時に召喚獣を動かす。

ばさり、羽音を立ててクリスの召喚獣が宙を舞った。

「飛行もできる能力ですか」

御鳥は、召喚獣に素早く矢をつがえさせ、立て続けに三本の矢を放った。

「あちしの召喚獣の特殊能力、ロングレンジショットは狭いフィールドじゃあ無意味だしねい。飛行能力はおまけらしいよん」

解説しながらも、クリスの召喚獣は、中空をくるくる回りながら矢をかわしていく。

ついで手にしたライフルを御鳥の召喚獣に向けると、三発の弾丸を撃ちはなった。

御鳥は、召喚獣を横っ飛びさせながら矢を射る、かなり高度な操作能力だ。

『召喚獣ってあんなに動けるのか』

『すげえな』

『吉井はできるのか？』

『ん？ できると思うけど』

『すごいです！ 明久君』

外野はすっかり御鳥とクリスの召喚獣の動きに魅せられていた。

「やるねい、御鳥っち」

「そちらもたいしたものですよ、ウエストロードさん。それから妙な呼び方をしないでください」

「おおっ、御鳥っちは厳しいねい。おねーさん、こまっちゃんぐ」

言いながらポーズを取るクリス。

「よそ見をしている暇が！」

低い姿勢で疾走しながら矢を放つ御鳥の召喚獣。

しかし、そのことごとくを、ひらひら避け続ける。

「あれを避けますか?! なら!」

御鳥は召喚獣の動きを止める。

「わお、いい的めっけ」

言うが早いか立て続けに二発撃ち込む。

「あまい!」

ヒュッyun。

パパキyun!

素早く放たれた二本の矢は、二発の弾丸に命中し、相殺された。

「あれま、やるもんだねい」

これには、さすがのクリスも驚きを隠せない。

「今です!」

ヒュ、ヒュ、ヒュ、ヒュ、ヒュ、ヒュ、ヒュ、ヒュ、ヒュ、ヒュ

……。

御鳥の召喚獣の右手がブレて見えないほどの連射。

「うげっ!」

クリスの召喚獣に回避行動をとらせないための飽和攻撃。

数十本の矢が、クリスの周囲を押し包むように飛来する。

クリスはとつさに召喚獣を矢に向かって飛翔させる。

タン!、タン!、タン!、タン!

確実に当たるであろう矢を撃ち落とし、そのまま、矢の群をくぐ

り抜ける。

「焦ったにや」

「終わりじゃありません!」

召喚獣から放たれる矢。

「ッ!」

反射的に撃ち落とすクリス。

ドスッ。

クリスの召喚獣の左腕に矢が突き刺さった。

「えっ?!」

撃ち落とした矢の影に、もう一本隠れて放たれていたのだ。

「わお。やるねい、御鳥っち」

「神薙流武弓術、参の射、裏手『闇羽』を召喚獣用にアレンジした技です。まさか彼女以外に使うはめになるとは思いませんでした」
言いながら攻める手を休めることはない。疾駆しながら矢を射続ける、御鳥の召喚獣。

クリスの召喚獣は刺さった矢をそのままに、空を駆ける。

「ん、つまり御鳥っちは、アキぴよんのライバルって訳だねい。
くあゝっ、おねーさん萌えちゃうよん」

「変な呼び方はやめてくださいと言ったはずです！ それから最後
の方の発音が間違っている気がするんですがっ！」

素早く矢を射る御鳥の召喚獣。

ばさり。

大きな羽音とともに、クリスの召喚獣の姿が消える。

「な?!」

次の瞬間、御鳥の召喚獣が大きくはね飛ばされた。

「およ？ しゅっちゃんたねい。おねーさんとしたことが、焦って
カードを切っちゃったよん」 楽しそうに笑うクリス。

反対に御鳥の顔は緊張にまみれた。

「いま、なにがあったの？ アキ」

「いや、ぼくにも見えなかったよ」

「……いきなりトップスピードで高度を変えたからみんなには
見えなかった」

「ほう。おまえには見えたのかムツツリー」

「……動態視力には自信がある」

「ああ、パンチラゲットするのに必要だもんね」

「……!! (ブンブン)」

「……なるほどそういうことですか」

「おねーさんの的には、ネタバレは勘弁して欲しかったかなん」

得心のいった顔の御鳥と苦笑いのクリス。

対峙する二人の攻防は止まらない。

「ならば、こちら奥の手を使うとしましょう」

走りながら御鳥の召喚獣は手にした弓を背負うと、合掌し、クリスの召喚獣に向き直る。

「させないよん！」

クリスの声とともに彼女の召喚獣がライフルを撃つ。

吐き出された三発の弾丸は正確に御鳥の召喚獣へ飛翔し、手前で碎けた。

御鳥の召喚獣の正面には、数十本。

いや、百にも及ぶ光の矢が静止していた。

弾丸はそれらに当たり、碎けて消えたのだ。

「わ、わぁーお……」

この光景に、さすがのクリスも声がない。

「行け！」

御鳥の声に応じてすべての光の矢が放たれる！

「いくらなんでもシャレになってないよん！」

あわてて下降する、クリスの召喚獣。

矢は頭上を越えた。と、矢が空中で向きを変えた。

「にゃ、にゃに〜い？！」

左回転のバレルロールで避けたクリスの召喚獣は、ライフルを矢の群に向けて撃つ。

「焼け石に水だねい！」

言いながら次々矢を撃ち落とすが、追いつかない。

「くっ！」

ばさり！

力強い羽音ともに急降下をかける。

まだ60はくだらない矢の集団もそれを追う。

地面に向かう決死のダイヴ。

だれもが、クリスの召喚獣の頭が地面に叩きつけられると思った。
ばさっ！！

ドドドド！！ ド！ ドンッ！！

矢の群も着弾し砂煙が舞う。

それが晴れたとき、クリスの召喚獣は、そこにはいなかった。
にもかかわらず、終了のコールはかからない。

「……………上」

「なるほどな」

「どうしたの？ ムツツリー二も雄二も、って、ああ！」

クリスの召喚獣はフィールドの限界点、天井付近に滞空していた。

「でも、ボロボロだよ」

「なにがあつたんだ？ いったい……………」

「……………激突直前で真横へ無理矢理トップスピードで飛んだ」

「おいおい、だからって力のベクトルはそう簡単にかわりやしないぞ」

「……………だから、左側面が地面と擦れてヒドいことになっている」
言われたとおり、クリスの召喚獣は、左半身がズタズタになっていた。

左腕などはちぎれかかっている。

これを見て御鳥は口を開く。

「そんな方法でかわすなんて、バクチすぎませんか」

「おねーさんもそう思うんだけどねい」

御鳥は油断無く構える。対するクリスは笑みを浮かべて彼女を見ていた。

「んじゃ、こんどは、おねーさんから行こうかねい」

言ってからウインク一つ。手にしたライフルを御鳥の召喚獣に向けた。

ドン！

弾丸が撃ち放たれる。

と、クリスの召喚獣の姿がかき消える。

次の瞬間離れた場所に現れ、ライフルを撃つ。そしてまたかき消え、現れては撃つ。

幾度も繰り返され、徐々にスピードが上がり、残像がのこりはじめる。

すでに十数体の残像が発生し、弾丸を放っている。

御鳥の召喚獣に、雨あられと銃弾が降り注いでいく。

御鳥の召喚獣は、それらをかいくぐりながら弓を射る。

だが、単発で放つ矢程度では、クリスの召喚獣を捉えるのは至難だった。

それでも、クリスの表情はさえない。

「ん、ちよつちキツイねい」

軽くつぶやく。

それが聞こえたのか、御鳥は召喚獣を大きくバックステップさせる。

「なら、終わりにしてあげます！」

召喚獣に距離を取らせた御鳥は、そのまま腕輪を起動させ、十数本の光の矢を精製する。

それらは出現と同時に飛翔し、クリスの召喚獣に迫った。

しかし、クリスはそのすべてを迎撃していく。

「このくらいの数なら、なんとでもってうええっ?!」

余裕を持ってすべてを撃墜したクリスが見たのは、100では効かないほどの数の光の矢。

クリスが迎撃している間に素早く精製したものだ。

「これで、終わりです！」

叫びとともにすべての矢が射出される。

「わーお。分の悪い賭けって奴に賭けましょうか！」
ばさり。

羽音を響かせ、クリスの召喚獣が動いた。

刹那。

かき消える姿。しかし、矢の追尾機能は正確に起動している。

ぼふっ！

と、地面が破裂したように煙が舞う。

それを貫き、地面スレスレを飛ぶクリスの召喚獣。

その先には御鳥の召喚獣。

一秒に満たない瞬間にたどり着き、胸に押し当てたライフルのトリガーを、

ドス！

右腕に光が突き刺さる。

ドス！ ドス！ ドス！ ドス！ ドス！

翼に、肩に、背中に、足に、頭に、次々と光が突き刺さる。

全身、あらゆる場所を光の矢に貫かれ、地面に叩きつけられるクリスの召喚獣。

出来損ないのハリネズミの置物になってしまったそれは、儚く消

え去った。

「勝者、Aクラス」

高橋教諭のコールで勝負は決した。

重い足取りで帰ってくるクリス。

「およろ、みんなゴメンよ。おねーさん負けちったよ。ひばりん、慰めておくれよ」

「ハイハイ」

座り込んで自分の腰に腕を巻き付けてきたクリスの頭を、ひばりは優しくなでてやった。

「今度こそはって、思ったんだけどねい」

「ん？ なに？ クリス」

クリスのつぶやきはだれにも届かなかった。代わりに、

「何でもないよん」 はあ、なごむにや」

などと言ってゴロゴロとノドを鳴らす。

「ご苦労だったな、クリス」

雄二が声をかける。

「お、もっちゃん、おひさ」 いやあ、負けちったよ。悪いねい」

クリスはひばりから離れて立ち上がった。

「だれがもっちゃんか。いや、あの相手に、あそこまでやれたんだ。上出来の部類に入るだろう」 言いながらひばりの頭に手を置く雄二。

「確かにねい。言い訳するつもりじゃあないけど、あの操作能力は異常だよん」

クリスは珍しくまじめな顔になる。対する雄二も真剣だ。

「ああ、姫路が明久並の操作能力で戦っているようなもんだ。ウチのクラスで対抗できそうなのは、お前と」

「アキぴょん……だねい」

ふたりでアキの方をうかがう。

「ああ。ライバル視していた以上、少なくとも五分にはやれるだろうが……」

「勝てる札とは言えないねい」

「そういうことだ。なににせよ今は保留だな」

「もう少し積極的に来てくれると、おねーさんはうれしいんだけどねい」

苦笑するクリス。

「まあな。俺としてももつと有効活用したいんだが……」

雄二は軽く頭を振る。

「あまり自分を出さない子みたいだしねい。今回は待機組かなん？」「そうするとするか。この7戦でウチの中核戦力は軒並み使えなくなるだろうしな」

「動きのないEクラスの奇襲だね？」

クリスは軽く笑って目を細める。

「そうだ。可能性は低いがゼロじゃない。なら、ある程度の戦力は残しておいた方がいいだろう」

雄二は軽く思案する。

「ままならないねい。ウチのクラスに余裕なんてないのに」 相好を崩しながら、雄二に笑いかけるクリス。だが、その顔に余裕はない。

「ともかく、この7戦を乗り切る。ここで勝てなくては本末転倒だしな」

「だねい」

うなずき合う二人。

と、下から声がする。

「真面目っぽい話をしてるみたいだから遠慮してたんだけどさ、坂本君」

「……どうした、支倉」

雄二が下を向くとふくれっ面でひばりが見上げてきた。

クリスがむこうを向いて、小さく吹き出した。

「な・ん・で！　ずっと！　あたしの頭を！　なでてるの！！」

そう、雄二はクリスとの会話中、ずっとひばりの頭をなでていたのだ。

「……おお！　悪い悪い」

言いながらクシャクシャと、乱暴にひばりの頭をなでる雄二。

「そこは、撫でるのやめて謝るところだよね？！　ふつつー！」

「いや、丁度いい高さにあるもんでな」

「そんな理由？！」

ひばりの扱いの悪さに、全ひばりが泣いた。

クリスは我慢できなくなってきたのか、口とお腹を押さえてうずくまる。

と、Aクラス陣営がざわめき出す。

そちらからはとてつもなく黒く凶々しいオーラが吹きあがっていた。

『ヒツ？！』

『な、なんだこのオーラは』

『だ、代表、落ち着いて！？』

『……大丈夫、私は落ち着いている』

「ったく支倉は撫でやすいなあ。ちっちゃくて」

「ちっちゃいってゆーなーっ！　あたしちっちゃくないもーん！！」

ミシィッ！！

『ひいつ？！　机があっ！！』

『代表っ！　落ち着いて？！　ほんとにつ！　まじで！』

『……優子はおかしなことをいう。ワタシハオチツイテイル』

『あ、あははは……』

『愛子っ！ 笑ってないで手伝ってっ?!』

Aクラス陣営の様子に気づくこともなく、雄二は思案げになった。
「さて、先行しておいてプレッシャーを与えておきたかったんだが

……カードの切り時か？ ムツツリーニ」

雄二に呼ばれてムツツリーニが振り向く。

「頼めるか？」

「……………問題ない」

答えて進み出るムツツリーニ。

『おっと、彼が出てきたみたい。ボクがやるよ』

『あ、愛子?』

『ごめーん、優子。そういうことだから、代表のことよろしく』

『につ、逃げる気っ?! 待ちなさい愛子！ お願いだから待つて

く』

『がんばってね』

『は、薄情者くくくっ!!』

「向こうは騒がしいな」

「なんか、奥で揉めてるみたいだよ……そろそろ撫でるのやめない

?」

「お？ すまんな」

Aクラス側の騒ぎの原因の二人はなにも気づいていなかった。

「準備はよろしいですか？ では、両者前へ」

高橋教諭に促されて進み出るムツツリーニと愛子。

「……………2年Fクラス、土屋康太」

「一年の終わりに転校してきました、工藤愛子です」 よろしくね

」

薄緑のショートカットに、すっきりとしたボディラインのボーイ
ッシユな少女だ。

「……胸は勝ってるよね」

密かにガッツポーズを取るひばり。

「胸だけだな」

轟沈した。

「教科選択はどうしますか？」

空気なんか読まない高橋教諭がムツツリー二に訊ねる。

「……………保健体育」

「ふーん。土屋君だっけ」

愛子は意味ありげに微笑みながらムツツリー二に話しかけた。

ぴくりと反応するムツツリー二。

「ずいぶんと保健体育が得意みたいだね？ でも、ボクだってかなり得意なんだよ？ ……君と違って」

愛子は妖しく笑う。

「実技でね」

ザッ！

Fクラス男子ほぼ全員の動きが止まった。

「その君」

愛子は視線を移し、明久に声をかける。

「勉強苦手そうだし、ボクが教えてあげようか？ 保健体育。もちろん…………」

コケティッシュな笑み。

「実技でね」

Fクラス男子の大半が中腰になった。

何か想像したらしい。

明久が前髪を払いながら前に一歩踏み出す。

「フツ。望むところ」アキにはそんな機会、永遠に来ないから必要ないわよ！ 保健体育の勉強なんて」

横から美波が吠える。

「そうです！ 私が教えますから必要ありません！」
瑞希のは爆弾だった。

「瑞希あんだ……」

「み、みっちゃん……」

「わお、大胆だねい」

みんなに注目されて、瑞希は自分がなにを口走ったか気が付いた。ピンクのウサギが真っ赤に染まる。

「ふ、ふわあゝっ?! ち、違うんです違うんです! そうじゃないんですっ! いえしたくなくもなくなはないですけど、そうではなくて。勉強を教えるという意味で、そりゃ将来的にはとか思わなくはないですけど、今はまだ早いというか、なんというか、恥ずかしいですし、学生ですし、興味は確かにありますけど、まだこれからにご期待というかなんというか」

目をぐるぐるさせながら、誰にというわけでもなく言い訳をする瑞希。

大混乱である。

「みっちゃんが壊れた……」

「うちも瑞希に負けてらんない……」

「いやあ、青春だねい」

みんな、なま暖かい目になっていた。

「とにかく!」

ビシッ! と効果音入りで瑞希が愛子を指さす。

「明久君にはまだ必要ありませんっ!!」

キリッと凛々しくにらみつける瑞希。

その頬は、まだほんのりと赤い。

シ　　ン・・・・・・・・・・。

教室内は静まり返る。

「あ、あの……以上です……」

恥ずかしくなつて、縮こまる瑞希。

「姫路さん」

明久が声をかける。

「あ、明久君……」

恥ずかしくて顔も合わせられない。

「ゴメン気づかなくて」

明久は真剣に話しかける。

「え……」

瑞希は、まさか！ という顔になる。

「もつとはやく気づくべきだったんだね」

明久の言葉に、瑞希の顔が、期待に満ちて、キラキラしはじめた。

「も、もしかして明久君気づ」

「そんなに心配してくれていたんだね！」

あれ？ という顔になつて首を傾げる瑞希。

「だいじょうぶ！ ぼく、ちゃんと勉強するよ！ 保健体育の参考

書を片手にもつて、ひとりで！」

・ ・ ・

ポテリ。

瞳からハイライトが無くなつた瑞希が倒れる。

「ひ、姫路さんっ？！ だいじょうぶ？！ ねえ？！ 姫路さん？

！」

その様子を見ていた教室内の全員の顔が、

『うわあ、バカだこいつ……。』

となつたのは言うまでもなかった。

第十一問（後書き）

瑞希が壊れた〜っ！！

でも気づかないのが明久クオリティ。

第十一問いかがだったでしょうか？

それでは、また次回お会いしましょう。

第十二問（前書き）

第十二問です♪ よろしくお願いいたします。

『バカと天使と超能力者』のJACK様に本作を紹介してもらった
ちやいました！ ありがとうございます♪

JACK様の『バカと天使と超能力者』も、とても面白いので、
ぜひ、ご覧になって下さい♪

それでは、『バカひば』（略称命名もJACKさまです。ありがとう
やありがたや）、第十二問をお楽しみ下さい♪

第十二問

「あいつは時々スゴい奴になるよな……」

うつるな目でつぶやく雄二。

「しかも、あの流れで、保体の参考書片手に一人で勉強って……」
ひばりの顔もほんのり赤い。

「まあ、ソロプレイを想像しちゃうよねい」

クリスも苦笑いするしかなかった。

「下品だよ、クリス……」

ひばりはやるせない顔になった。

「そろそろ召喚を開始して下さい」

あれだけのハブニングにも関わらず、高橋教諭は冷静だった。

「はい。試獣^{サモン}召喚つと」

「……………試獣^{サモン}召喚」

ポトポトポト……。

比重の高い液体の落ちる音。

ムツツリー二の鼻血だ。

それに気づいた雄二が顔色を変える。

「マズイ！ ムツツリー二の奴、姫路の爆弾発言で妄想状態に入っちゃった！」

「えええーっ！」

「おお。さすが伝説の性職者。そこにシビレるあこがれる？」

ひばりは心底驚き、クリスは楽しそうに笑う。

「おそらく、奴の脳内では、白衣姿の姫路に迫られ、為すすべもなくあれやこれやリードされたあげく、夜明けのコーヒーと一緒に飲むくらいのストーリーが展開されているはずだ」

「ええー…………」

真剣に解説する雄二とは対照的に、心底微妙な表情でげんなりするひばり。

「さすがムツツリー二！ エッチな妄想にかけては右にでるものはいないね！」

あちらでは、明久がムツツリー二に尊敬のまなざしを送り、美波が真っ赤になってうつむいていた。

その横では瑞希が、ピンクに染まった両頬を両手で押さえ、ぶつぶつ言いながら妄想を暴走させていた。

彼女の名誉のために、ぶつぶつとつぶやいている内容に関しては割愛する。

「…………… 大丈夫だ、俺は、まだやれる」

拳を握って宣言するムツツリー二。

しかし、力んだ分、鼻血の勢いが増した。

その様子を見て、愛子が笑う。

「フフツ、もうフラフラみたいだね？ ムツツリー二くん？」

「…………… 俺は、負けない！」

不敵な態度の愛子に負けじと、胸を張るムツツリー二。

その胸元は、すでに鮮血で染めあがっていた。

「…………… もう降参したら？ その状態の君に勝ってもうれしくないし」

「…………… 断る！」

毅然とした口調。鼻血が無ければさぞかし凛々しく見えるだろう。鼻血がなければ。

「ツ！…………… なら、打ち倒して、保健室送りにしてあげるよっ！ ムツツリー二くんっ！！」

言葉とともに、手にした巨大な斧を軽々掲げる愛子の召喚獣。

その巨大さは、愛子本人の背丈と変わらないほどだ。

そして、その腕にはめられた腕輪が輝くと同時に、天空より剛雷が斧に降り注ぐ。

耳をつんざく轟音とともに舞い上がる砂煙。

それが突然吹き散らされると、雷を纏った斧を、肩に担いだ愛子

の召喚獣が姿をあらわす。

その頭上には446と表示されていた。
対するムツツリーニは572。

本来なら、ムツツリーニが圧倒的に有利だ。

「おおう、たいしたもんだねい」

「土屋君すごい」

ひばりやクリスを始めとするFクラスの面々はムツツリーニの点数に感嘆する。

「まずいな……」

だが雄二は、焦りの表情でつぶやいた。

「どうしたの？ 坂本君」

雄二の様子に気づいたひばりが見上げる。

「ムツツリーニの奴、軽い貧血を起こしかけてやがる」

「ええーっ！」

「場合が場合だ。支倉、養護教諭を呼んできてくれないか？」

「わかったよ！」

言うつが早いか駆け出すひばり。

そちらを彼女に任せ、雄二はムツツリーニに声をかける。

「おい、ムツツリーニ。棄権しろ」

「…………断る！」

「ムツツリーニ！」

珍しく焦った声を出す雄二。

「…………この戦いだけは、負けられないんだ！」

真剣な表情で言い切るムツツリーニ。その顔色はすで血色を失いつつある。

「じゃあ！ 遠慮はしないよっ！」

巨大な斧を棒きれのように軽々振り回しながら、愛子の召喚獣が突撃する。

「…………クッ、加そ……」

ムツツリーニは何かしようとして、体勢を崩した。膝から力が抜

けそうになつたのだ。

振り降ろされる斧を何とかボックスステップで避けるムツツリー二の召喚獣。

しかし、着地と同時に片膝を着いてしまう。

点数が150点ほど減っていた。

「……………クッ」

「フフッ、ぼくの召喚獣の腕輪は、攻撃力の強化と攻撃範囲の拡大の効果があるんだよ。ちよつと避わしたくらいじゃ、影響範囲から逃げられないよ」

愛子は自慢げに語る。対するムツツリー二は応えることなく召喚獣に構え直させた。

「まだ、やる気？ たしかに点数はスゴかったけど、まともに操作できないその状態じゃ、ボクには勝てないよ？」

愛子の挑発するかのような笑み。しかし、それでも、ムツツリー二の目から戦意は消えない。

その目に気圧される愛子。

「…………ど、どうしてそんなにガンバるんだい？ 棄権しても誰も文句は言わないと思うけどな？」

思わず愛子は訊ねていた。

「……………仲間のため、友の願いのため」

瞑目するムツツリー二。

「……………そして、俺の信念のため、ここは引くことはできない」

今、彼は間違いなく格好良かった。あふれる鼻血と、鮮血に染まった制服と、足下の鼻血溜まりが無ければ。

ムツツリー二の気迫に怯む愛子。しかし、体を奮い立たせ、召喚獣に構えさせる。

「カッコいいね、ムツツリー二くん。ボク惚れちゃいそうだよ。でもね！」

天を貫く剛雷が、再び轟音とともに降り注ぐ。それを受けた愛子の召喚獣は、全身に雷を纏った。

「ボクだつてクラスのみんなや、自分の信念を背負ってここに立っているんだ。負けるわけにはいかないっ！」

愛子の言葉を受け、ムツツリー二の召喚獣が構え直す。そして愛子の召喚獣は姿勢を低くしながら構えた。

次の瞬間、弾丸のように飛び出す、愛子の召喚獣。

「バイバイッ！ ムツツリー二くんっ！！」

「……………加速！」

刹那、十七の斬閃が、愛子の召喚獣を包んだ。

一瞬、かき消えたムツツリー二の召喚獣は、愛子の召喚獣のはるか後方に出現する。

「……………加速終了」

その言葉を受け、愛子の召喚獣が全身から血を吹き出してバラバラになりながら消える。

しかし。

「ムツツリー二！」

声を上げたのは、Fクラスの誰だったか。

愛子の召喚獣が消え去ると同時に、ムツツリー二の召喚獣もかき消えてしまった。

それと同時にムツツリー二も血の海に沈む。

「ム、ムツツリー二くん?!」

対戦していたせいで、一番近かった愛子が駆け寄り、血にまみれるのも構わず抱き上げる。

「ちよつと！ 大丈夫?!」

愛子に声をかけられ、うつすらと目を開けるムツツリー二。

「……………工藤愛子」

「な、なに？ ムツツリー二くん」

突然声をかけられて動揺する愛子。

「……………パンチラを狙っておきながら、スパッツを履いているのは邪道」

「……………あ、あはは。気づいていたんだ」

「……………当然」

少し妙な雰囲気になりかけていた愛子は、そのやりとりで普段の調子を取り戻す。

「なーに？ スパッツの中のボクのパンツが気になるのかな？」

それとも……………な・か・み？」

「……………クッ（ブシヤアッ）」

すでに貧血気味だったムツツリーニから、最後の赤い噴水が吹きあがった。

その後、ひばりが連れてきた白衣姿に禁煙パイプをくわえた、シヨートボブの女性養護教諭は、片手でムツツリーニの襟首をつかみ、引きずるようにしながら保健室へと連れていった。

また、愛子は、『面白そうだから』と喋ってくつついていった。そして、なぜかひばりが先頭に立ってムツツリーニの鼻血の後を片づけている。

Aクラス、Fクラスを問わずに指示を出し、血痕をきれいに片づけていった。

「ねえ秀吉」

騒動の片づけのため一時中断されている戦争。

その合間に、優子は秀吉に声をかけていた。

「むっ？ なんじゃ？ 姉上」

少し警戒したように応じる秀吉。

優子はそれを気にした風でもなく続ける。

「あの支倉って子のことだけど」

「支倉？ 支倉がどうかしたのかのう」

「さっきのことよ。たしかにアタシの言ったことも酷かったんだけど、彼女のあの怒り方は普通じゃなかったように思うのよ。何か知らないかしら？」

優子は真剣に訊ねている。秀吉は少し思案してから困ったように

眉を寄せた。

「……心当たりはなくてもないのじゃが、ワシの口から言うのははばかられるのう」

「何か知ってるのね？ 教えなさい」

優子は秀吉の肩に手を置いた。

「いや……これは、他人がべらべらしゃべって良いことではないのじゃ。姉上、すまんが」

あきらめてほしいと続くはずだった秀吉のセリフは、彼の肩から発せられた異音に遮られた。

「あ、姉上、肩が痛いのじゃ」

「アタシが無理矢理聞き出したってことで構わないから、教えて頂戴？」

「いや、すでに無理矢理になって……あ、姉上、その間接はそっちに……さ、再開するようじゃぞ？ 姉上。もうクラスの方に戻った方がよいのじゃ」

秀吉に言われて、優子が会場を見ると、清掃が終わり、再開しようとしていた。

「しかたないわね。戦争が終わったら、ちゃんと聞き出すからね」
そう言ってAクラス陣営に戻っていく。

「ふう。この場は何とかしのげたのじゃ。しかし、どうしたものかのう」

秀吉は憂鬱そうにため息をついた。

それをたまたま目撃したFクラス男子数名が撃沈されたのは、全くの余談である。

「では、再開します」

高橋教諭の合図で再開したが、雄二は思案気だ。

「どうしたの？ 雄二。つぎの人選はないの？」

雄二の様子に気づいた明久が声をかける。

「まだ、さっきの勝負の結果がコールされてない」

「そういえば……」

明久も気づいて高橋教諭に向き直る。

その横で、雄二が厳しい顔をしていた。

「先ほどの試合ですが……」

高橋教諭が機械を操作すると、プラズマディスプレイに先ほどの試合が表示される。

そして、二人の召喚獣の点数がほぼ同時にゼロになった。

「えっ！？ ムツツリー二が勝ったんじゃないの?!」

明久が声を上げると同時に周囲がざわめく。

スローモーションでの確認画面になると、スローですらかすんで見えるムツツリー二の召喚獣が愛子の召喚獣を切りつけていた。

「切りつける度にムツちゃんの点数も減っているねい」

「恐らく向こうの召喚獣の纏っていた雷のせいだろう。だが、それほど大きなダメージじゃないな……」

画面を見ながらつぶやく、クリスと雄二。

「あっ！」

美波が声を上げる。

最後の一太刀を浴びせたムツツリー二の召喚獣のわき腹を、斧がかすめていた。

次の瞬間、ムツツリー二の召喚獣の点数が一気に下がる。

最後にコンマ以下のタイミングまで同時に点数が無くなった。

「攻撃強化だったか、重ね掛けで累積していたんだろうが、かすめただけで200点以上減るとはな……」

雄二が嘆息すると同時に、高橋教諭が結果を告げる。

「ただいまの試合、引き分け！」

正式に引き分けがコールされる。

双方から息が漏れる中、雄二は天井を見上げて目を閉じる。

「計算が狂ったかにや？」

「……確実に穫れる札として計算していたからな。しかし、この勝負は予想外のことばかりだ」

ため息をついて頭を振る雄二。

「それはひばりんの事かなん？ それとも、おねーさんかにゃあ」
ニヤニヤしながら訊ねるクリス。しかし、雄二は動ずることもなく、軽く肩をすくめた。

「両方だ。支倉の家庭科は知っていたが、ふつつ、試召戦争に無縁の科目だしな、承認されると思わなかった」

「ほうほう。で？」

クリスは興味深そうに雄二を下からのぞき込む。

「あんたは去年の蓄積があるからな。『白銀の墮天使』さんよ」
何でもないように言う雄二。

「……よく調べたね。事件のことも？」

クリスの声音は堅かった。

「ムツツリー二がこういうのに強いんだ。おかげで諜報戦には困らん。例の件は、俺とムツツリー二くらいしか知らん。安心しろ秘密は守る」

「わーお、おねーさん秘密を握られちゃったねい。これからはおもっちゃうの、まる奴隷として生きてくしかないよん」

「人聞きの悪いことを言うな！ それに何だ？！ その、まる奴隷つてのは！ 伏せ字じゃなくて『まる』って言っちゃまってるなんて初めて聞いたぞ？！」

「『まる』い奴隷かなん？ おねーさんもよく知らないよん」
楽しそうに笑うクリス。

「雄二、さっきからなんのはなしをしてるのさ」

フィールドを見ていた明久が雄二たちを振り返る。

「バカには関係のない話だ。気にするな」

「おねーさんと、もっちゃんの、ひ・み・ちゅ」
「なんだよん、アツキー」

一刀に切り捨てようとする雄二だが、クリスがキャラキャラ笑いながら付け足す。

「なにいつてやがる！」

あわてて怒鳴りつける雄二。

明久は半眼になった。

「……雄二、女のひとの秘密をにぎって、おどすなんて最低だね…

…」

「ちげえっ!!」

明久にも食ってかかる雄二。

「三人とも、どうしたの？」

と、そこへ、掃除用具を片づけてきたひばりが戻ってきた。

「およろ、ひばりん、助けておくれい」

「な、なにになに？ なにがあつたの？ アキくん、坂本君」

事情がわからないひばりは、クリスに泣きつかれて大混乱だ。

「ひばり、雄二にちかづいちゃダメだよ。こいつは変質者なんだ」

「えええーっ?!」

「なにを言い出しやがる！ このバカ！」

明久の言葉に驚くひばり。

そしてキレる雄二。

「え？ え？ なにがどうなっているの？ クリス」

もう訳が分からないひばりは、クリスに説明を求める。

「うう、もっちゃんはおねーさんの秘密を握って、まる奴隷にする

気なんだよん。そして、毎夜毎夜、おねーさんに白スク水着せてパ

ラパラ踊らせて眺める気なんだよよ」

「まで！ どんだけ変態なんだ俺は！ 誤解しないでくれ支倉、俺

は……」

雄二は疲れた顔でひばりの頭に手を伸ばそうとしたが、その手が

空を切った。

「……」

ひばりが一步下がったからだ。表情はない。

「お、おい？ 支倉？」

ひばりに手を伸ばす雄二。

するとひばりは、二歩遠ざかる。

そのまま明久の後ろに隠れると、顔を半分だけ出して警戒するように雄二をみた。

「……」

あまりのことに、真っ白になる雄二。

「……なんか……すげーショックだ……」

そのまま地に伏す雄二。

「アッハッハッハ、冗談、冗談だよん。ひばりん、アッキー」

「そうなの？」

きよとんとなる明久。

「ちよつと、もっちゃんをからかったただけだよん」 ほら、ひばりんも出ておいで」

「ほんとに大丈夫？」

ひばりは警戒したまま明久の後ろから出てきた。

「大丈夫大丈夫、おねーさんのいつもの冗談だよん」

いつものイタズラっぽいクリスの笑顔にようやく納得するひばり。

「もう！ ダメだよ？ クリス。こういう冗談は！」

「ごめんね」 まさか、こんなに落ち込むとは思わなかったよん」

そう言つてクリスは苦笑いする。

「まったく、クリスは……坂本君大丈夫？ ごめんね？ 疑っちゃつて……」

雄二を介抱しようと近づくひばり。

と、頭を何かに押さえられる。

「えっ？」

雄二の手がひばりの頭を押さえたのだ。

「さ、坂本君？」

ワシワシと、ひばりの頭をなで始める雄二の手。

「ひ、ひやあああ、ごめんってばあ、坂本君」

雄二を傷つけたと思っているひばりは強く出れない。

そのまま立ち上がった雄二は満足気な顔だった。

「次の人は前に出て下さい」

高橋教諭から声がかかる。

「次は私です」

Aクラスからは眼鏡の少女が進み出る。

雄二は腕を組んで軽く思索した。

「科目は？」

高橋教諭が彼女に聞いている。どうやら、科目の選択順は交互で決定のようだ。

「物理でお願いします」

それを聞いた雄二は、決心して明久に声をかけようとした。

だが、その横を、長い黒髪の少女が通り抜ける。

「お、おい来島？」

「ここは獲っておくべきでしょう？ 坂本君」

振り向きもせずに答えるアキ。

「確かにそうだが、おまえは防衛の力ギ……」

「負けてしまつては意味がないでしょう？ それに、島田さんやほかの方々は無傷です。その戦力で何とかするのも、あなたの采配ですよ？」

「……わかった。だが、必ず勝つてくれ」

懇願するような雄二の声。

そこで初めてアキは振り向いた。長い黒髪が、軽く広がる。

「指揮官がそんな弱気ではいけませんね。胸を張って、堂々と『勝て』と命令すればいいんですよ」

そう言つて、アキは軽く微笑んだ。

言われて雄二は、笑いながら頭を掻く。

そして、顔をあげると不敵な笑みを浮かべて宣言した。

「よし、来島、勝つてこい。それ以外の結果は不要だ」

力強い言葉。雄二のこの力強さがFクラスを牽引してきた。言葉には、そういう強さもあるのだ。

アキは、その言葉を受けて、初めて破顔した。

「わかりました、我らが代表殿。完膚なきまでに叩き潰し、勝利して見せましょう」

芝居がかった調子で答え、フィールドに立つ。

「二年Fクラス、来島アキ」

「二年Aクラス、佐藤美穂」

対峙する二人の対決が始まる。

第十二問（後書き）

『バカひば』、第十二問、いかがだったでしょうか？

愛子対ムツツリー二は引き分けとなりました。対Aクラス戦はどこへ行くのか？

また、次回を楽しみにして下さいね♪

第十二問（前書き）

第十三問です。楽しんでいただければ、幸いです。

第十三問

「「試獸召喚^{サモン}」」

同時に召喚する、アキと美穂。

巨砲を抱え、メタリックブルーの機械的な鎧を纏ったアキの召喚獣と鎖で繋がられた二丁鎌に武者鎧姿の美穂の召喚獣が姿を現す。

美穂の召喚獣の頭上には389、アキの召喚獣の頭上には415と表示される。

点差そのものは大したことはなかった。せいぜいが26点差だ。もんだいは。

「さすがは来島さんですね」

「佐藤さん、おひさしぶり」

言葉を交わす二人。

「おやおやん、あの二人は知り合いなのかねい」

クリスが不思議そうな声を出す。

「ああ。だが、ダチって言うよりはライバルだな」

雄二が答えた。それを聞いてひばりが見上げる。

「ライバル？」

「そうさ。物理の佐藤と来島っていえば、点数を気にするする連中の間では、わりと有名だ。どっちもだいたい400点前後をコンスタントにとっているんだが、佐藤は不調だったみたいだな」

雄二の解説に周囲が感心する。

「不調みたいですね？ 佐藤さん」

冷静に訊ねるアキ。美穂は答えることなく、召喚獣に構えさせる。美穂の顔には余裕はない。点差が26点なら、召喚獣のパラメータ補正值としては、大した差はない。

問題は、ブレイクポイントである400点を越えたか否かだ。

試召戦争において、400点オーバーは特殊能力解禁の目安だ。その証として、召喚獣は腕輪を追加装備した状態で召喚される。

この特殊能力は召喚獣ごとに異なっており、驚異的な力を発揮する。

これが使えるかどうかで勝負が決まることも珍しくないのだ。

そして、今、美穂とアキは点差はあまりないが、片方は腕輪持ち、片方は腕輪無しだ

もはや、戦うまえから勝負は決しているといっても過言ではない。にも関わらず、美穂はあきらめた様子もなく、アキは油断なく身構えている。

ライバルとして、お互いのことをよく知っている二人ならではの緊張感だ。

動かない二人。だがしかし、Aクラス、Fクラスともにその雰囲気

に飲まれたのか、誰一人として口を開かない。

汗が滴り、水滴が……落ちる。

滴が床で爆ぜるのを合図にしたように、二体の召喚獣が動いた。

双方とも時計回りに駆け出す。

二度の轟音。アキの召喚獣が持つ大砲から、二発の砲弾が吐き出された音だ。

弾速のゆるいそれらを加速してかわした美穂の召喚獣は、軽く跳躍しながら、左手に持った鎌の一つを投擲する。

鎖を引っ張る金属音を引きながら飛翔する鎌。

アキの召喚獣は足を止め、大砲で鎌を上にはじいた。

するどい金属音と共に跳ね上がる鎌を狙って砲撃するが、美穂の召喚獣は鎖を思い切り引いて鎌を回収。

同時にアキの召喚獣へと低い弾道で跳躍する。

一閃。

腹を狙ってふるわれた鎌を、間一髪で避けるアキの召喚獣。いや、点数が2点減少していた。刃先がかすめていたのだ。

そして距離をとる二体。

静かに繰り広げられる攻防に、周囲はシンプと静まる。

戦う二人だけの息づかいだけがその場を支配した。

今度は、アキの召喚獣が先んじて動いた。

左腰のディスクを左手で取り外し、フリスビーのように投げると、今度は右手へと走る。

美穂はディスクを無視するように召喚獣を左手へ走らせた。

不意にディスクが炸裂すると、美穂の召喚獣に向かって、次々に火柱があがる。

軽いステップでそれを避けて、アキの召喚獣をみると、そこには両肩のパーツをパラボラ状に展開して構える、アキの召喚獣がいた。肩にあふれる光を目にしながら、とっさに美穂は床に鎌を突き立て思い切り引いた。

ホログラム状の召喚獣は、特別のものをのぞいて、物理干渉は行えない。

しかし、床は“あるもの”として処理され、通常の召喚獣でも干渉が発生する。

それを利用したのだ。

急ブレーキ、そして跳躍ベクトルを変更することで、アキの予測射撃を避けてみせる美穂。

光の奔流は、むなしく空間を灼いただけだった。

双方共に、なかなかアクロバティックな行動を取っているが、その実、単純な行動の組み合わせにしか過ぎなかった。

ジャンプ、走る、投げるなど。

美穂の見せた鎌を地面に突き立てる行為も、その実、地面を対象に攻撃したに過ぎない。

しかし、単純な行動も使い方と組み合わせによって、精密操作に劣らない動きを作ってみせられるという、紛れもない実演であった。お互いの手を読み筋を選択し、相手の手をつぶす。

アキと美穂は、フレキシブルなチェスを興じていた。

そして、美穂は一つの詰め筋を見つける。

手を打ち、捌き、攻撃し、その一手を打った。

アキの召喚獣の首に、鎌が押し当てられる。

「勝った！」

無音の世界に、美穂の小さな声が響いた。
それが油断だ。

鎌を引くより早く、アキのブルーの鎧のパーツが浮き上がり、爆発する。

「あつ?!」

至近距離から、はじけとんで来る鎧のパーツを無防備に受けた美穂の召喚獣はボロボロになりながら大きくはね飛ばされた。

地面に叩きつけられ、バウンドしながら転がる召喚獣。

追撃を警戒させようと立ち上がらせた美穂だが、召喚獣はヨロヨロとゆっくり立ち上がるのみだ。

追撃は来ない。が、警戒は解かない。

爆心地にたたずむ影。

砂煙が薄れていくと、長い黒髪をたなびかせた召喚獣が立っているのが見える。

その赤い瞳が見えたかと思った瞬間。

疾風のごとく疾走し、美穂の召喚獣へと大砲の砲身を叩きつけた。
ろくに防御もできずその一撃を食らう召喚獣。

そして大きく広がる黒髪の間から足が飛び出し、美穂の召喚獣は、真上に大きく蹴り上げられた。

「あ、ああ、あ……」

とつさに何もできない美穂。

そんなことはお構いなしに、両肩のパラボラを展開したアキの召喚獣は真上に向かって、その破壊の光を解き放った。

光に灼き尽くされ、美穂の召喚獣が消え去り、勝敗が決した。

「勝者、Fクラス」

高橋教諭のコールに歓声がわくFクラス。
対するAクラスは呆然としていた。

両足から力が抜け、へたり込む美穂。

その目には涙が溜まっていた。

そんな美穂に手が差し伸べられる。
アキだった。

「良いバトルでした。佐藤さん」

につこり微笑むアキ。

「また……勝てませんでした」

美穂は弱々しく笑うと、アキの手を取った。
引っ張り上げられるように立ち上がる美穂。
左手で涙を拭うと強気の笑みを浮かべた。

「……次は勝ちます！」

力強い言葉に、アキは笑顔で応えた。

美穂と別れ、颯爽とFクラス陣営に戻るアキ。

「ご苦労だったな、来島」

ねぎらいの言葉をかける雄二に応えようとした瞬間。
前に踏み出そうとした右足が、なぜか左足を掬った。

ビタンッ！

そんな音と共に、顔面から床にダイヴした。

・ ・ ・

軽くケイレンするアキ。

「うつつ、痛いよお」

顔をあげ、涙目で鼻の頭を押さえる。

「……えっ？」「……」

それが、その場にいる者たちすべてに共通する気持ちだった。

「カオルさん、鼻が痛いです」

『我慢しな。それよりいいのかい？ みんな見てるよ？』

「へっ？」

間拔けな顔で周囲を見渡す。

呆然としたクラスメイトたちが自分に注目していた。

ボフンツ！ つと音が聞こえそうなくらい赤くなつたアキは、あわてて立ち上がると、表情をクールに引き締めた。

鼻血が垂れた。

「わーん！ 台無しよーっ?!」

その場で突っ伏して泣き始めるアキ。

Aクラス、Fクラス共に呆然とするしかない。

先ほどまで対戦していた美穂など、目が点になり、口をあんぐりと開けていた。

可愛く理知的な顔が台無しである。

こういう時、復帰が早いのがひばりの特徴だ。

「だ、大丈夫？」

あわてて駆け寄ると、アキの顔をあげさせ、ハンカチで拭ってた。つた。

「鼻血は軽いものだったみたい。もう止まってるね。さ、行こう？」

「……うん」

半泣きなアキは、ひばりに手を引かれて戻ってきた。

ちなみに、アキの身長は170近く、長身だ。それが、ちっちゃな(138cm)のひばりに手を引かれる様は、

『『『うおおーっ！ ギャップ萌えーっ!!』』』』

Fクラスはバカばかりだった。

「ひうつ?!」

突然の歓声に、アキが縮こまる。すでにひばりの背中に隠れるほどだ。

「ちょっとみんな！ 来島さんが怯えるでしょ？ 奇声を上げないの！」

ひばりに注意されるFクラスの面々。何かすでに逆らえない雰囲気になっていく。

「改めてお疲れさん、来島」

雄二が苦笑いしながら声をかける。しかし、アキは涙目で黙るばかりだ。

「勘弁してくれ……」

雄二は困り顔で頭を掻いた。
すると、

『この子は恥ずかしがり屋だね。一度仮面がはずれると、マインドセットし直すまでこの調子だよ』

と、声が聞こえてきた。

「!……だれだ?」

するどい誰何の声。雄二の睨むような視線に体をすくませながら、アキは胸元からペンダントを取り出した。

透明なプラスチックケースらしきものに、銀色に輝くディスクが封入されている。

アキが手のひらに乗せると、CDやDVDくらいの大きさの銀色の円盤が現れ、高速で回転し始めた。

すると、円盤の上に、召喚獣のようなディフォルメされた白衣姿の人物が出現する。

『よう、ゴリラボーイ。あたしがAI召喚獣の“カオル”だ。この来島アキが創った』

「ど、どうも……」

恐縮したように、頭を下げるアキ。

「……言ってくれるじゃねえか、このちび召喚獣モドキが」
顔をひきつらせた雄二がカオルに手を伸ばす。が、すり抜けてしまった。

「くっ?! 触れねえ」

『召喚獣なんだから当たり前だろ? 脳筋ゴリラ。頭使えよ』
雄二をせせら笑うカオル。

「だ、だめですよ、カオルさん。坂本さん怒らせちゃあ。ご、ごめんなさいね？ 坂本さん」

アキがカオルに注意すると、仕方ないという風に、器用に肩をすくめた。

それをみた雄二は、こめかみを押さえて、ため息をつく。

「……いや、いい。しかし、さっきまでとはえらいギャップだな」

「あ、はい。さ、さっきは自己暗示を掛けてあったので……」

「つまり、今が素ってことか」

「は、はい。スミマセン」

少しおどおどしながら答えるアキ。先ほどのクールなイメージは、カケラも残ってはいない。

「しかし、AI召喚獣だったか？ なんで来島がそんなものを……？」

『簡単だ。アキは召喚システムの開発スタッフの一人だからな』

「……えええーっ?!」

カオルの言葉に、一同が驚いてアキに注目する。

「ひうっ?!」

いきなり注目されたアキは、おののいて首をすくめる。

『ついでに言うと、向こうの神薙つてのもそうだ。アキがサイエンス側、神薙がオカルト側最年少スタッフだな』

それを聞いてクリスが目を細める。

「ははーん、御鳥っちがアキぴょんをライバル視してるのはその辺の繋がりがなん？」

『そのとおりだ、パツキンねーちゃん。この二人は試験召喚システムのテストプレイヤーも務めてたからな』

うなずいて答えるカオル。

「でも、そんなすごい人がなんでFクラスに？」

ひばりが疑問を投げかける。

『いい質問だちびっ子』

「ちっちゃくないよっ?! ていうか、あなたに言われたくないよ

っ！！」

『本来なら、コイツはAクラス確実の成績だ』

「確かにね。戦力把握のために全員分のテスト結果を見たが、来島はAクラス確実だったはずだ」

カオルの言葉を受け、雄二がテスト結果表を思い出しているようだ。

これを聞いて明久が首を傾げる。

「それじゃなんでFクラスに？」

『ああ、コイツはな……』

「言わないで、カオルさん」

弱々しく抵抗しようとするアキ。カオルはアキに対して、にっこり笑って見せた。

それをみたアキの顔が明るくなる。

『……明け方までゲームやってやがったんだ』

「なんでバラすの?!」

アキは半泣きになった。

『コイツは、三度の飯よりゲームが好きでな。おかげで、振り分け試験はヒドい点数だったんだ……』

「だって、降魔の杖がなかなかでないんだもの」

必死で訴えるアキ。周りは微妙な空気だ。

しかし読まない奴もいる。

「降魔の杖って、『ドラゴンファイナル』の？」

「！　そうっ！！　吉井さん知ってるの?!　アルティン火山でネクロ狩りしたんだけど、もう、全然、出てこなくて参っちゃうのよ」

「あれはね、アルティンよりグランド神殿のイーヴルブリストの方がドロップしやすいよ」

「でも出現率が……」

「いや、実はスケルトンアーチャーを13体倒すと必ず出現するんだ。すぐ近くの墓地ならスケルトンアーチャーの出現率が高いから

……」

盛り上がる明久とアキ。

蚊帳の外になったみんなが微妙な表情をするなか、恋する乙女たちは微妙に危機感を感じていた。

「うつつ、ゲームの話は分かりません」

「ウチも全然ダメ。ひばりは？」

「『ドラゴンファイナル』ってゲームの話だとはわかるけど……さすがにディープすぎてついていけないよう」

三人とも悔しそうに二人を見つめる。

さすがに脱線が過ぎると思った雄二は、二人の間にはいる。

「おら、ゲーム談義は後にしろ。今は試召戦争中だ」

言われて二人は、あつとなる。

「ごめん、雄二」

「すみません、坂本さん」

謝る明久とアキ。

『程々にしなよアキ。それにアイツは意外と競争率高そうだし』
カオルも茶々を入れてくる。

が、しかし、アキはきよとした顔で首を傾げる。

「カオルさん、なんの話？」

『こういう方面ではからかいがない子だよ』
ため息をつくカオル。横ではクリスが大きくうなづく。

「たしかに。ボケ殺しはあちしたちの天敵だねい」

『わかつてくれるか?! パツキンねーちゃん!』

「わからいでかつ! カオルんっ!」

そしてお互いの手を握ろうとして、空を切った。

「ホログラムには触れないと自分で言ってたろーが」

つつこむ雄二。しかし、クリスとカオルは、満面の笑みだ。

「こうでないかねい」

『まったくだ』

「次だ次。次行くぜ」

喜ぶ二人をスルーする雄二。

「次の方、準備を始めてください」

あくまで冷静な高橋教諭。

その声に応じて、一人の少年が進み出る。

目つきは鋭く、髪はバサバサ。なんとなく、野生的な印象を受ける少年だ。

「高遠祐介だ。早くやろうぜ」

挑むようにFクラスを見る。

しかし、雄二は決めあぐねていた。

「おおっ、もっちゃん悩んでるねい」

『単純に札がないからな』

そう、あと残された切り札は一枚。姫路瑞希のみ。ここで切るか否か。

ほかに存在する有効かもしれないカードは島田美波と前田俊夫の二枚。

どちらも勝てるとはいえない。

むしろ、無駄な消耗になりかねないのだ。

「……ワイルドカード、試してみるか？」

実際、賭ではある。

と、雄二に近づく影。

「坂本、明久を使ってみんか？」

俊夫だ。

「……勝算は？」

横目で見ながら訊ねる雄二。

「そつだな、有るとも言えるし、無いとも言える」

「曖昧だな」

「その通りだ。だが、次はおそらく久保が出てくる。今の明久にやあ、ちと荷が重いな」

ふと、雄二が俊夫に顔を向けた。

「高遠が相手なら目があるのか？」

「ある。ただし博打だ」

「……よし、明久！」

雄二は意を決して明久に声をかけた。

「ん？ どうしたのさ？ 雄二」

「出番だ。おまえの本当の力を見せてやれ」

不適に笑いながら明久に声をかける雄二。

明久も調子に乗ってあわせる。

「やれやれ、僕に本気を……」

「明久！」

軽口を遮る、太い声。

俊夫だ。

「俺が教えたことを、思い出せ」

そういうと、男臭い笑顔を見せながらサムズアップした。

「……うん！ わかったよ俊夫！」

そんな俊夫に笑顔で応える明久。

「吉井さん！ 彼は暗記ものが苦手だったはずですよ」

「来島さん？」

「知り合いなんですよ」

ちよつと困ったような笑みを浮かべるアキ。

「いいの？」

心配そうに訊ねる明久。しかし、アキは頭を振った。

「今は、私もＦクラスです。仲間を応援したいんですよ」

「わかった。ありがとう、来島さん」

笑顔を交わす二人。

「アキ、ウチの分までがんばんなさいよ！」

「アキくん、がんばって！」

「アッキー、ファイトだよん」

美波、ひばり、クリスもエールを送る。

と、瑞希が駆け寄った。

「あ、明久君！」

「姫路さん」

「あ、あの、がんば……」

瑞希は応援の言葉を紡ごうとしてやめると、一端口を閉じてしまった。

「姫路さん？」

応援されると思っていた明久は、いぶかしげに声をかける。

瑞希は軽く頭を振ってから、顔を上げ、明久の顔をまっすぐ見た。そして、軽く微笑みながら、ゆっくりと口を開く。

「……明久君、行つてらっしゃい」

その言葉を受けて、明久も笑顔になる。

「うん、行つてきます。瑞希ちゃん」

そう言つて、明久は戦いの舞台へ足を向けた。

第十三問（後書き）

第十三問、いかがだったでしょうか？

バトルパートは来島アキ対佐藤美穂。

佐藤さんには頑張っていたきました。

そして、グダグダパートはアキの本性とパートナーの紹介。

そして、原作主人公の出陣です。

それではまた次回、お会いしましょう♪

第十四問（前書き）

第十四問です。今回、少し試してみたい書き方を試したので、読みづらいかもかもしれません。

余りに不評なら書き直すかもしれません……。
それでは、どうぞお楽しみ下さい♪

第十四問

フィールドに立つ、明久と祐介。
互いに睨むように対峙する。

「……おまえ、観察処分者なんだってな」
祐介が口火を切る。

「……そうだよ、それがどうかした？」
堅い口調で答える明久。

それに対して祐介は肩をすくめてみせる。

「いや？ 観察処分者は強いのかな？ ってね」
そう言つてニヤリと笑う。

「科目はなんにしますか？ 吉井君」

高橋教諭は自分のペースを崩さない。

「世界史でお願いします」

明久の宣言に、祐介が顔をしかめる。

「チッ、よりにもよつて世界史かよ」

どうやら当たりを引いたらしい。

世界史のフィールドが展開され、準備が整った。

「それでは、召喚を始めて下さい」

高橋教諭の言葉に応えるように、二人が言霊を紡ぐ。

「「試獣^{サモン}召喚！」」

それによつて、二人の足元に幾何学模様の魔法陣が広がる。

そしてそこに、小さな人影が現れた。

召喚者を模した、身長80センチほどのディフォルメ人形のような姿。

これが召喚獣だ。

そしてその装備は、奇しくも全く同じ、学ランに木刀だった。

『明久と同じ装備だとっ?!』

『これは有りなのかなん? カオルん』

『無い、とは言えねーな。点数が高けりや豪華な装備になるのが普通だが、召喚者の特色もかなり影響する』

『点数が高くてあの装備ということは、あのスタイルが彼に合っているということの証左です』

『それって……』

『はい。召喚者と召喚獣の相性が良いってことです』

お互いの武器を構えて向き合う、祐介と明久の召喚獣。

その頭上には、点数が表示されている。

285と91。

それが二人の点数だ。

『なんだ? 明久の奴、ずいぶん点が取れてるじゃないか。一体どうしたんだ?』

『昨日の補給テスト前に、あたしとみっちゃんて教えたんだよ』

『はい。集中している明久君は素も、こほん。すごく頑張ったんですよ?』

『えっ?! 何それウチ聞いてない!』

『アキくんが、あたしに頼んできてね。まあ、ついでにみっちゃんも呼び出してみたんだ。みっちゃん教えるのうまいよね』

『ずるいつ! 何でウチも呼んでくれなかったの?!』

『えっ。そう言われても、あたし、まだ美波ちゃんの連絡先って知らないんだけど……』

『あつ……そうだったわ。ゴタゴタしてて忘れてた』

『ちなみにおねーさんは、すでに交換済みだぜい』

外野の騒がしさも二人の耳には届かない。

極限まで集中しているためだ。

「……では、始めて下さい」

高橋教諭の声がかかると同時に祐介の召喚獣が飛び出す。

「先手必勝つてな」

対して明久の召喚獣は動かない。

「終わりだぜっ！」

祐介の声とともに振り下ろされる木刀。

明久の召喚獣は、右足を一步引きながら、木刀の先に左手を添え、柄を引くと、刀身を立てながら、相手の斬撃をすべらせ、軽く押すように逸らした。

「なに?!」

驚く祐介、そのスキを逃さず、明久の召喚獣が左足を右方向へ出しつつ、左手で木刀の刀身の先を持ち、柄の方で相手の背中を打ち据えた。

その一撃で、30点近く点数が減る。

背中に衝撃を受けたことでたたら踏む祐介の召喚獣。

そこへ追撃の一打が突き込まれた。

明久の召喚獣がさらに踏み込みながら木刀の柄先をたたき込んだのだ。

さらに30点ほど減少する。

一連の攻防で冷静になった祐介は、召喚獣の体勢を立て直し、木刀を構えて明久をみた。

ほとんど姿勢は変わらない。

祐介の顔から、余裕が完全に消え去った。

次いで、祐介の召喚獣が明久の召喚獣へと素早く近づき、木刀をコンパクトに振るう。

木と木がぶつかり、こする音を立てながら両者が脇を抜ける。

動きがコンパクトになった分打撃力は低下しているが、スキは小

さい。

今度はカウンターが入れられなかった。

それを見て祐介は、召喚獣を反転させ、連続で木刀を打ち込む。

パラメータ補正のためか、その一撃一撃が鋭く早い。

明久の召喚獣は防戦一方となり、少なからずダメージを受けていく。フィードバックのせいかな、明久の顔も苦痛にゆがむ。

「アキくんっ！」

「防戦一方じゃないっ！ アキ！」

悲鳴を上げる美波やひばりをはじめとするFクラスの面々。

アキもクリスも表情が堅く、手は白くなるほど握りしめられていた。

雄二も厳しい表情で戦場を見つめ、思わずつぶやく。

「ダメなのか？ 明久……」

そんな中でも俊夫は笑みを崩さない。

それに気づいた美波が噛みつく。

「?! 前田！ どうして笑ってられるのよっ！ アキがヤバいのにつ！」

「大丈夫だ。今の明久はそう簡単に負けんさ」

「どうして、そう言いきれんのよっ！」

美波が爆発する。

さすがの雄二もこれに同調した。

「行かせておいて俺が言うのもなんだが、島田に賛成だ。何でそう言いきれぬ。確かに明久は召喚獣の操作になれている。だがそれは、三倍の差を覆せるほどじゃない。おまえは、明久に何を教えたんだ？ 前田」

周囲の目が俊夫に集まる。

「……坂本よお、まさか、おまえまで気づいてないとは思わなかったぜ？」

「?……なにがだ？」

意味が分からず聞き返す雄二。

「観察処分者の利点だ」

俊夫の言葉に、明久を注視しているひばりと瑞希以外が首をひねった。

「観察処分者の利点は、物理干渉能力と操作時間の長さからくる操作精度。この二つだろ？」

雄二は判りきったことを言わせるなどといわんばかりに頭を振る。

それをみた俊夫はやれやれと苦笑し、口を開いた。

「もう一つあるだろう？」

「もう一つ……？ フィードバックか？ あれは利点じゃなくて欠点だろ」

何をバカなと雄二が一蹴する。

しかし、俊夫はそれで間違いないとばかりに笑ってみせる。

「おいおい、本気で言ってるのか？ フィードバックが利点だなんて……」

雄二があきれた顔になる。

しかし、俊夫は大まじめだ。

その間にも攻防は続いていた。

防戦一方だった明久だが、祐介の召喚獣の攻撃が疲労で緩んだスキに反撃に転じる。

「だあああああっ！」

流れるような三連撃を、肩、腕、足にたたき込む。

「ちいいいっ！？」

重要部の防御を重視していた祐介の召喚獣はあっさり三発とも食らってしまう。

しかし、点数は一桁程度しか減らない。

お返しとばかりに木刀を振るうが、するりとかわされ、また腕に一撃をもらってしまった。

祐介の召喚獣はすでに220点ほどにまで点数が減少している。

だが、明久の召喚獣も63点まで減じてしまっていた。

「アキくん……」

「……………」

心配そうに見つめるひばりの横で、瑞希は祈るように戦いを見ていた。

「説明してもらおうか、前田。フィードバックのどこが利点なんだ？」

険しい顔で訊ねる雄二。

「その前にだ。島田、おまえ、召喚獣にどう武器を持たせている？」

「どうって、普通に手に持たせてるわよ？」

質問の意味が分からない美波。

「手で、どうやって持ってるんだ？」

「？ どうって、普通に……」

戸惑う美波。

それにかまわず俊夫が口を開く。

「明久は五本の指で握りしめて持ってるそうだ」

「指？ 召喚獣に指ってあったの！？」

驚く一同。

「明久に言わせるとあるそうだ。しっかり五指をイメージしないと、荷物を落としやすいんだとさ」

「明久の操作精度はそんなレベルなのか……」

これには雄二も度肝を抜かれる。

その向こうでは、明久の召喚獣が、祐介の召喚獣の攻撃のスキについて、木刀を投げつけていた。

「なんだとっ？！」

祐介はあわてて召喚獣に、飛んできた木刀をはじかせた。

と、明久の召喚獣が、一息で懷に飛び込む。

素早い拳の三連打。それは、きれいに相手の顔面に吸い込まれた。たまらず後退する祐介の召喚獣。明久は追撃はさせずに、落ちている木刀へ飛びつかせた。

油断なく構える明久の召喚獣。

顔面への打撃は有効で、またもや30点ほど削り取っていた。

その様子を見ながら、俊夫が口を開く。

「だが、あいつの真価はそこにはない。ところで坂本、お前、どれだけ動いたら召喚獣が疲労で動けなくなるか知ってるか？」

「そんなもん判るわけ……おい、まさか」

俊夫の言いたいことに気づく雄二。

「そのまさかだ。明久の奴はそれさえ解っている。反対に言やあ相手がどれだけ動いたら疲れてくるかも解ってる」

俊夫は笑いながら説明する。

「そ、そうなのクリス？」

まだ、いまいち判っていない美波がクリスに訊ねる。

「……確かに召喚獣には疲労がある。でも完全に見極めるのは難しいねい。見た感じで判断しなきゃいけないしねい」

「だが、明久は体感で解っているってことさ」

クリスの言葉に続けて俊夫の解説も続く。

雄二は考え込んでしまった。

「同じことがダメージにも言える。明久はどこへ攻撃を受けるとダメージがデカいか、どこなら最小かも体感で解っている」

「あ！じゃあ、アキは相手のどこに当てればダメージが大きいかわさいか解ってるってこと？」

美波が得心がいったように声をあげた。

大きくうなづく俊夫。

「ビンゴだ、島田。明久の奴はどう攻撃したら高いダメージを与え、どう捌けばダメージがないか知ってるんだ。こいつは、戦いを制する上で大きな要素だ」

俊夫の解説は続く。

明久と、祐介の戦いは、その点差にもかかわらず、一進一退を繰

り返していた。

明久は、繰り出される攻撃を最小限のダメージで捌き、相手のスキを突いてダメージを与えていった。

一方で祐介も、戦いの主導権を、完全に明久に握られていることに気づいていた。

「くそっ、埒があかねえっ！」

思わず大振りになる。そのスキを、明久は見逃さない。

喉元に突き込まれる一撃が決まり、80点近くも減らされた。

「く、そお」

悪態をつく。すると、

「祐介えっ！」

Aクラス側から響く声。

御鳥だ。

普段の静かな雰囲気からは考えられない、大きな声。

「がんばれえっ！」

それを皮切りにAクラス側から声があがり始める。

「いけっ！ 高遠ーっ！」

「がんばってー！」

「負けるなーっ！」

次々にわき起こる声援。

「へっ！ こりゃあ負けらんねえなあ！」

構えて、ニヤリと笑う祐介。

その空気に、一瞬明久は飲まれてしまった。

そこへ切りかかる祐介。

間一髪、すり抜ける明久の召喚獣。流れるようにカウンターを叩き込もうとして、明久は腹にハンマーを叩き込まれたような衝撃を受けた。

「げ、ふううつ？！」

はね飛ばされる明久の召喚獣。胃の腑からこみ上げるものをこらえ、受け身をとらせる明久。

召喚獣は三回ほど転がってからヒザ立ちになると、祐介の召喚獣に木刀を向けた。

苦し紛れの一撃だった。

背後をとられた！ そう思った祐介は、無理矢理足を後ろに向け、伸ばした。それだけだ。

そう、攻撃の意志はなかった。牽制くらいになればと思ったのだ。それが功を奏した。

相手の勢いもあつて、30点ほど削っている。

初期パラメータの違いが、如実に現れた結果だ。

その差にくじけそうになる明久。しかし。

「吉井っ！ 負けんじゃねーっ！」

「そうだぜっ！ 底辺の底力を見せてやれっ！」

「そんな奴、ぶっころしちまえっ！」

「Fクラス魂だっ！」

Aクラスだけでなく、Fクラスからも声があがる。

物騒な内容も混じっているが、紛れもなく、明久への声援だ。

級友たちの声に、明久は笑う。

「へへっ。ばくもまけらんないや……」

そう言つて祐介をにらんだ。

対峙する二体の召喚獣。

それぞれ、89と31が表示されている。

無論、前者が祐介。後者が明久だ。

静寂が場を支配する。

と、

二匹の召喚獣が同時に動いた。

激突するように打ち合う。

いや、明久が受け流した。

流れに乗って、カウンターを放つ。

それを食らってなお、祐介の召喚獣が攻撃を繰り返す。

とつさに避ける明久の召喚獣。しかし、切っ先がかすめている。

舞台の中央では、そんなぎりぎりの攻防が繰り返されていた。

「明久……」

圧倒されるようにつぶやく雄二。

「明久の奴あ、強くなれる。こと召喚獣での戦いなら、あいつの右に出る奴あ居なくなるだろう。だが、それは先の話だ」

誰に聞かせるでもなく、俊夫が話し始める。

舞台では、明久が祐介の攻撃を丁寧に捌いて反撃を入れている。

しかし、さすがに祐介も急所への攻撃は警戒しており、有効打がなかなか出ない。

逆に祐介は、急所以外への打撃は完全無視。相打ち覚悟で攻撃を繰り返す。

これが、実に有効だった。

双方ともに点数を削っていった。

「明久の奴には経験が足りない。操作じゃねえ、戦いのだ。それでも良くやってるぜ」

「なるほど、お前が教えたのは明久自身の特性と、戦い方か」

「ああ。随分と真剣な顔で頼まれてな。まあ、一朝一夕には無理だが、自分の特長をしっかりと認識させて、戦いのレクチャーをしただけだね」

「それでこんなに変わるのか？」

「いや、それはないと思うな。だが、あいつは俺らより召喚獣の動きを、明確にイメージできてるんだろう。その証拠に、自分でできない技も召喚獣でなら完全に使えてたしな」

「未恐ろしいなあいつの召喚獣は」

雄二と俊夫はそんな会話を交わす。それでも、目は戦場からそらさない。

削られる点数、引かない召喚獣。

打ち合いの流れが途切れ、お互いが相手の脇をすり抜けた。

同時にターン。

「だあああーっっ!!」

「うおおおーっっ!!」

雄叫びとともに、お互い、相手に渾身の突きを見舞った。

「アキくんっ!!」

「祐介っっ!!」

ひばりと御鳥の声が響く。

そして、瑞希の、

「明久君っ!!」

祈るような声。

祐介の召喚獣の木刀は、明久の召喚獣の首筋を皮一枚えぐった。
そして明久の召喚獣の木刀は、祐介の召喚獣の喉笛に突き込まれていた。

刹那の間。

祐介の召喚獣が弾丸のごとき速度で吹き飛ぶ。

そして、それを見届けるように、明久の召喚獣が消え去った。

「ウソ……」

誰の声だったか。

ディスプレイに表示される双方の点数。

世界史勝負

吉井明久 VS 高遠祐介

0

VS

1

「ウソでしょ……」

「そんな……」

「こんなの有りかよ……」

「信じらんねえ……」

呆然とした声の中、祐介の召喚獣が立ち上がる。

「勝者、Aクラス」

高橋教諭の冷徹な宣告が響き、第五戦が終了した。

第十四問（後書き）

いかがだったでしょうか♪

明久、負けちゃいました。

フィードバックに関する考察は私の推測です。

しかし、これが解るか解らないかは、戦いにおいて非常に大きな意味を持ちます。

明久の持つアドバンテージは、そのくらい評価されてもおかしくないはずなんですけどね。

賛否はあるかもしれませんが、本作のみの設定くらいのつもりで解釈していただいて結構ですよ？

この先どうなるか、次は久保君対瑞希です。

お楽しみに♪

第十五問（前書き）

第十五問です。楽しんでいただければ幸いです。

第十五問

「くっそおおおーっ!!」

床にひざをつき、床を殴りつけて叫ぶ明久。

よほど悔しかったのか、それを繰り返そうとする。

「アキく……」

飛び出そうとするひばりより早く、桃色ウサギが飛び出した。

「明久君!」

瑞希だ。

普段からは考えられない早さで走った彼女は、彼の元にたどり着くと、後ろから背中に抱きついた。

「う? わあっ?!」

抱きつかれて驚いた明久は、立ち上がろうとしてバランスを崩す。瑞希もそれに逆らうような動きもなく、流れのまま後ろへ倒れ込むように、ふたりで、しりもちをついた。

「…………ハッ!」

「あゝ 気がついた? ムツツリーニくん」

「…………今、最高のシャッターチャンス逃した気がする」

「? なんの話?」

「…………工藤愛子、お前には関係ない(プイッ)」

「あ、そーゆーこと言うんだ、なら…………えい」

「…………! 胸チラとは卑怯な! (ぶしゃああ)」

「ボクだって、寄せて上げれば、谷間くらい作れるんだよ (抱き)」

「……………! (ブシャアアアア)」

「ハッ?!」

何かを感じたかのように顔を上げる美波。

「およ? どしたの? なみなみ」

隣のクリスが気づいて声をかける。

「……今、ウチに対する挑戦があつたような気がするの」

そう言いながら、脇から集めるように胸を寄せてみた。

長い橋が架けられそうな溪谷ができた。

「……うう、神はいないの?」 四つん這いになってうなだれる美波。

「なみなみのそれは希少価値があると思うけどにやあ。まあ、一種のステータスだと思えば……」

「あんただっておつきじゃないの! 所詮、持たざる者の気持ちなんて、持つてる奴には分からないのよーっ!」

叫びながらクリスの胸を鷲掴みにする美波。

クリスはイヤがる素振りも見せない。

しばらく手をわにわに動かしていた美波は、絶望に満ちた顔で床に突っ伏した。

「自分がダメージを受けるくらいなら、やらない方が良かったのでは?」

冷静に突っ込むのはアキ。そんな彼女に美波はかみつく。

「来島は悔しくないの?! このままじゃウチら負け組よっ!」

「ひうつ?! 島田さん怖いですっ?!」

美波の剣幕に驚いたアキは、手近にあった大きな陰に隠れる。

「おいおい、俺は盾か何かか?」

盾代わりにされて苦笑いする俊夫。

声を聞いてビビるアキ。

「えうつ?! ご、ごめんなさ……」

涙目で謝るアキ。

「ん? ハッハッハッ。特段、怒つとりやせんよ。クラスメイトとこのついうやりとりだって楽しいもんだと思ったくらいだからな」

そう言つて、アキの頭に、ポンと手をおいた。アキは一瞬、体をこわばらせる。その気配に気づいた俊夫はあわてて手を除けた。

「おっと、すまんすまん。つい妹にやるようにしてしまった」

「あ……、い、いえ別にいいです……。前田さんは妹さんがいらっしやるんですか？」

アキは、うつすらと頬を染めて俊夫に尋ねる。

「ああ、今は小学五年生だ」

答える俊夫。それを聞いた美波の眉がはねる。

「あら、葉月と一緒にね。案外同じクラスだったりしてね」
軽く思案してからイタズラっぽく笑う美波。

そこにクリスも参戦する。

「んにゃ〜。おねーさんを省くにや、イタズラするぞ〜」
そう言いながら美波にしなだれかかる。

「ちょ、ちよつとクリス、重いわよ!? って、どこ触つてんのよっ!」

みれば、クリスが美波のお腹や腰をまさぐっている。

「……なみなみ、スタイル良いね。意外と着物とか似合うかも」

「い・い・か・げ・ん・につ!! しなさーいっ!」

叫ぶと同時に、クリスにコブラツイストをかける。

「んによおおおっ?! ギ、ギブギブギブっ!? ほんとに極まつてるよんっ?! へ、へるぷみー!」

珍しく全く余裕無く根を上げるクリス。それをみて俊夫が声をかける。

「島田」

「なによ前田。ウチ、今、忙しいんだけどっ!」

「いや、ここはもう少しこうしてだな、こっちに体重をつまかけつつ、そうそう、その方が痛いぞ」

「んなに言っちゃってるかな俊ぽんはっ!? だだだだだだだだだだだだっ! これはほんとに痛いよんっ?!」

「ああ、そっか、これでこう捻ればいいのね？ アドバイスありがとう前田」

「いやいやかまわんさ。それより島田は筋が良いな。うちの同好会に入らんか？ もっと効率的な技の掛け方を教えてやるぞ？」

「それは魅力的な提案ね？ 考えとくわ」

「んのおおうーっ！？」

悲鳴を上げるクリス。だが、それも向こうの二人には聞こえないようだ。

「……どうしたの？ 姫路さん」

座ったまま後ろから瑞希に抱きしめられた明久は、意外に落ち着いた声で問うた。

「明久君……私、私のせい……」

瑞希は泣いているようだった。

「……姫路さん、違うよ。これはぼく自身が決めたことなんだ。だから、泣かないで」

「でも……」

そこで明久は瑞希に振り返る。その顔はスッキリしたものだ。たしかにくやしかったよ。もちろん、昨日今日、ちよつとばかり努力したからって、急に強くなれるなんて思ってたよ。でも

……」

そこで明久は、Aクラス側を見る。そのさきには、いまだ立ち尽くした様子の祐介がいた。

「高遠君は強かったよ。ほんとなら勝負にもならなかったとおもうんだ。そんな彼と、こんなに良い勝負ができた」

視線を落とす明久。

「そしたらさ、気づいちゃったんだ。ぼくはいままでなにをしていたんだろうつて」

そしてまた、瑞希に振り向く。

「そして、もつと前から、少しでも努力してれば、この結果はちがつてたかもしれないって」

そのまま軽く笑い掛ける。

「それが、くやしくてさ」

「明久君……」

「大事な人たちのために、なにかしたいって思ったのに、言い出しっぱ一番役に立ってないしね。なさけないなあ」

笑顔が曇る。瑞希は、それが見ていられないようで、頭を振ると明久に笑顔を向ける。

「そんなことはありません。みんなのために頑張る明久君は、とても素敵でした」

「姫路さん……」

驚いたように瑞希を見つめる明久。

「だから情けないなんて言わないで下さい」

「うん、ありがとう、姫路さん！」

そんな二人を、祐介はじっと見ていた。

「祐介……」

不意に声がかけられる。おさげに眼鏡の少女、御鳥だ。

「……御鳥か」

力無く答える祐介。

「大丈夫？ 祐介」

「わりい、無様な戦いを見せちまったな……」

自嘲する祐介。それに対して御鳥は首を振る。

「ううん。祐介、頑張ったじゃない。ちゃんと勝ったじゃない」

「システムの裁定に助けられたただだ。それに、始め、俺はあいつを侮っちまっていた。木下に偉そうなこと言っておいてこのざまだ」

「祐介……」

祐介は心配そうな御鳥から離れて、明久の前へ歩み出た。

「吉井って言ったか？ 観察処分者」

突然声を掛けられ、驚く明久と瑞希。

「うん、そつだよ。ぼくは吉井明久」

戸惑うように答える明久。

「そうか。俺は高遠祐介。祐介で構わない。俺も明久って呼ばせて貰うからな」

「う、うん」

明久は頷くことしかできなかった。

「今の勝負、俺は納得がいかない。お前もそうじゃないか？」

「……うん」

祐介の言葉に、力強く頷く明久。

「よし、それじゃあ今日から、俺とお前はライバルだ。お互いに修行し直して、またやろうぜ」

そう言って、明久に手を差し伸べる祐介。

「……今度は、負けないよ？ 祐介」

笑いながらその手を握る明久。

「ぬかせ、次は完勝してやるからな？ 明久」

そして明久を引つ張りあげる。

立ち上がる明久にならって瑞希も立ち上がった。

そこへ御鳥もやってくる。

「じゃ、またな明久。そっちの彼女さんもな」

そう言ってAクラス陣営に戻る祐介。

御鳥も二人に軽く会釈してから、祐介を追った。

「ち、ちがうよ?! 姫路さんは彼女じゃないよっ!」

必死に否定する明久。それを見て瑞希は軽くへこんでいた。

「そ、そんなに否定しなくても……」

「なに言ってるんだよ姫路さん。そんな事実はないってちゃんといっておかないとっ!」

「あっ……」

舞台中央でそんなやりとりをしていて目立たないはずもない。Fクラスの面々は、そんな二人をなま暖かく見ていた。

「あれは良いのかなん？ なみなみ？」

ようやく解放されたクリスが美波に問いかける。

腕組みしながら二人を見る美波。

「ウチだって、空気くらい読むわよ。それに……」

つ、と視線を動かす美波。その先にたたずむ小さな影。

二人の幼なじみを見ている、その後ろ姿は、普段より小さく見えた。

「次の勝負を始めます。出場者は、前へ」

空気を読まない学年主任の声が響く。

その声を受けて瑞希が顔を上げる。

「あ、はい。Fクラスからは私が、姫路瑞希が出ます！」

そう言つて、一歩踏み出す瑞希。

すると、Aクラスからも一人の人影が歩み出る。

「なら……ここは僕が出るとしよう」

左手で眼鏡の位置を直しつつ進み出る男子生徒。

久保利光。

学年次席の男。

男子生徒の最高成績保持者である。

「姫路さん、気を付けて……」

明久は警戒しながら瑞希に声を掛ける。

「大丈夫です。私を信じてもらえませんか？」

振り向かずに進む瑞希。

明久は心配そうに声を掛けようとして、頭を降ると、改めて笑顔で口を開いた。

「うん。いつてらっしゃい。瑞希ちゃん」

そう声を掛けられて、初めて瑞希は振り返った。

「あ、はい！ 行つてきますね、明久君」

その顔には不安も緊張もなく、ただ笑顔だった。
中央で対峙する久保と瑞希。

「科目はどうしますか？」

高橋教諭が尋ねる。

「総合科目でお願いします」

すかさず久保が答える。

フィールドから離れてひばりの横まできた明久は、心配そうに戦場を見る。

ひばりは、そんな明久を横目で少しうかがってから、一瞬、目を伏せた。

しかし、すぐさま顔をあげると、大きく口を開く。

『みつちゃん！ がんばれえっ！！』

よく通る、大きな声。

ひばりは、全身を使って声を上げていた。

それを火種としたか、Fクラス中から声があがり始める。

『いけえー姫路さん！』

『頑張ってくださいーい！』

『姫ちゃん、ファイトだよーん！』

『姫路さん結婚してえっ！』

一部、間違った内容も見られるが、それは、まぎれもなく瑞希への声援だ。

だが、久保は動ずることなく召喚を開始する。

「試獣^{サモン}召喚」

静かに呼び出される召喚獣。

どちらかといえば軽装の出で立ちに、二本の大鎌を持ったディフォルメ久保が顕現する。

その頭上には、3997の数字が輝いていた。

『な、なんだあの点数は』

『学年次席って、あんなに点数があるの？！』

『か、勝てるのか？』

Fクラス陣営が浮き足立つ。

「姫路さん……」

「みつちゃん……」

瑞希の大事な幼なじみである、明久とひばりも心配そうに見ていた。

と、ひばりの頭に手が置かれる。

雄二だ。

「このカードが一番の懸念だ。向こうとしても、姫路には久保を当てたかっただろうしな」

いいながらひばりの頭をなでる。

ひばりは抵抗する素振りもない。

「なんにせよ、ここを獲られたら勝ちはなくなる。久保も姫路もそれは理解しているだろうし、かかっているプレッシャーは想像を絶するな」

雄二の表情は堅い。

「大丈夫。きつとみつちゃんなら大丈夫」

自分に言い聞かせるようにつぶやくひばり。

そして、瑞希の口から、言霊が紡がれる。

「試^{サモン}獣召喚！」

力強い言葉とともに顕現する姿。

白銀の鎧に、赤いスカート。ピンクの髪に、白い鳥の羽の髪飾り。肩に長大な大剣を担ぎ、凛々しい表情で立つディフォルメされた瑞希の姿の召喚獣。

そして、その頭上に輝く数字は。

4705

会場中の人間が息をのんだ。

その点数に後ずさる久保。

「な?! ひ、姫路さん、そ、その点数は一体?!」

久保は、衝撃のあまり、言葉がでてこない。

そんな彼に、堂々と胸を張った瑞希が、凜と声を張る。

「わたし、決めたんです！」

同時に走る瑞希の召喚獣。それに対して、腕輪を起動し、牽制の衝撃波を放つ久保の召喚獣。

「決めたっ？！ 何をつ？！」 避ける瑞希の召喚獣。すかさず大

鎌で切り込ませる久保。

「私は、Fクラスが好きです。人のために一生懸命なみんなのいるFクラスが！」

斬撃を受け止め、相手をそのまま弾き飛ばす瑞希の召喚獣。

「いつも誰かのために頑張っている、わたしの、一番大切な人がいるFクラスが！」

そのまま腕輪を起動して熱線を放つ。

久保の召喚獣は、それを大鎌で払いのけるように弾くが、同時に鎌も砕ける。

それに構うことなく、紫の衝撃波を放つ。

「だから、がんばるって！ 決めたんですっ！！」

迫る衝撃波に避けもせずに構える瑞希の召喚獣。

その姿が飲み込まれると同時に、衝撃波がまるで木が割り裂かれるように四散していく。

見れば、瑞希の召喚獣が、大剣を突き出しながら衝撃波の中を走っていた。

「う、うわあああっつ？！」

迫る刃に恐怖し、鎌で防御する久保の召喚獣。

「やあああああっ！！」

普段の瑞希からは考えられないような裂帛の気合いとともに振るわれる大剣。

防御など無意味。

そんな光景だ。

大剣は、防御のために突き出された鎌ごと久保の召喚獣の胴体を両断していた。

剣を振るった勢いのまま走り抜けた瑞希の召喚獣がクルリと振り向くと、両断された召喚獣の上半身がズルリと落ち、それは地面に落ちることなく消え去った。

「勝者、Fクラス」

高橋教諭の声が響き、第六戦の勝負が決した。

それを聞き、がつくりと膝を突く久保。

肩で息をしていた瑞希も、ほっと一息つく。

そして、Fクラスを振り向くと、うれしそうに手を振りながら駆けだした。

第十五問（後書き）

第十五問、いかがでしたでしょうか？

久保対瑞希は原作通りの結果になりました。

最後はどうなりますやら。

次回をお待ち下さい♪

第十六問（第一部最終話）（前書き）

少し遅れてしまいました。すみません。第十六問、原作第一巻分最終話です。バトルはないです。それでは、楽しんで読んでいただければ幸いです。

第十六問（第一部最終話）

Fクラスへ走りよる瑞希。

と、その体が小さく揺らいだ。

「あっ?!」

膝から力が抜け倒れ込む。

しかし、そこに手が差し出され、瑞希を支えた。

「大丈夫? 姫路さん」

明久だ。

「あ、はい。大丈夫です、明久君」

「そう、よかった……あ、そうだ」

瑞希の言葉に安堵した明久はなにか思いだしたようになる。

それをみた瑞希は、明久につかまりながら不思議そうな顔になる。

「どうしたんですか? 明久君」

明久は、思わず訊ねる瑞希に笑いかけると、彼女をゆっくりと立たせてやり、半歩ほど離れた。

瑞希がどういうことか分からずに立ち尽くしていると、明久は柔らかに笑いながら口を開いた。

「お帰り、瑞希ちゃん」

それを聞いて、瑞希はあつとなる。そして頬を染めながら、表情が溶けるように笑顔になった。

「はい、ただいま戻りました。明久君」

それは、とても幸せそうな笑みだった。

そんな二人のピンク色の結界をモノともしない人物がいた。

「おう、姫ちゃんお疲れだねい」

クリスマスだ。

二人に近づいたクリスマスは、そのまま瑞希に声をかけた。

「あ、はい。とても緊張しました。負けられない勝負だって、分かっただけだから」

瑞希は、疲れたような顔で答える。

「ほんじゃ、向こうの席に、ごあんなーい」

言いながら、クリスは瑞希と明久を引っ張って歩きだした。そんな様子を、ひばりは、胸につかえるものを感じながら、ただ見ることにできなかった。

「ご苦労だったな、姫路。これで俺たちの負けはなくなった」

陣営に戻った瑞希に、雄二が声をかける。

「あとは俺がきっちり締める。期待してくれ」

自信に満ちあふれた表情で、雄二は笑った。

それを見た一同は、ほ、っと一息つく。

そんな皆から、少し距離をとった者がいた。

アキだ。

彼女の顔はすっきりとはしていない。いまだ、心配ことがあるようだ。

そこへ静かに近づく人影があった。

「アキびよん、不安そうだねい」

クリスはニコニコしながらアキに近づいていった。

「ウエストロードさん……」

顔を上げてクリスに向き直るアキ。

「クリスで良いよん」で？　どったの？」

「いえ……別に……」

視線を逸らし、言いよどむアキ。

それを見ながら、クリスが口を開いた。

「『まだ決着は着いてない。気を抜くべきではない』かなん？　それとも……」

ギクリとなつてクリスを見つめるアキ。

「まあ、もっちゃんが勝ってくれば丸く収まるんだけどねい」

つ、と視線を雄二に向けるクリス。その目は射抜くように鋭い。視線の先には、固く握りしめられた拳があった。

「どうなるかなん？」

「……気づいてますよね？ クリスさん」

その言葉を聞いて、クリスは笑顔に戻る。

「何かなん？」

いつもの調子の彼女に、アキは真剣な表情で向き直った。

「……すこし、打ち合わせておきませんか？」

言葉を交わす二人。ひばりは、そんな彼女たちに気づいたが、何を話しているかまでは分からなかった。

ただ、真剣な面持ちでクリスに話しかけるアキの姿に、首を傾げるだけだった。

そんなひばりの頭に手が置かれる。

「どうした？ 支倉」

雄二だ。みんなへの話が終わったところで、ひばりの様子に気づいたのだ。

「ううん。なんでもないよ？ 坂本君」

そう言って頭を振り、雄二を見上げながら笑うひばり。しかし、

その顔に元気はない。

その姿に、雄二は痛ましさを感じた。

「……なあ、支倉」

雄二は、ひばりの頭を軽く撫でる。

ひばりは、一瞬くすぐったそうに目を細めたが、すぐに頬を膨らませ、雄二をにらみながら口を開こうとした。

雄二は、それに合わせるように、視線を巡らせ、楽しそうに談笑する明久と瑞希を見た。

つられてひばりもそちらを伺ってしまふ。

「俺が言うのもなんだが、少し、自分の気持ちに素直……」

「なんのこと？」

遮った声は、無機質で平坦な声だった。

その声に驚いた雄二は、思わずひばりを見た。

ガラス玉が、こちらを見上げていた。
気圧されたように、手をどける雄二。

「……支倉、お前……？」

しかし、次の瞬間、ひばりはいつも通りの愛らしい笑顔になっていた。

「どうしたの？ 坂本君」

軽くひばりを観察する雄二。

だが、いつも通りの彼女だとは思えなかった。すこし、自嘲してから、イタズラ小僧のような顔になる。

「いや……なんでも、ねえよ！」

言いながら、ひばりの頭を鷲掴みにし、ワシユワシユ撫でる。

「なっ？！ なにすんの坂本君？！ やめてやめてやめて~~~~っ
！？」

しかし雄二はやめようとはしない。

「はっはっは。やっぱ、このくらい小さいと、撫でがいがあるなあ」
「ちいさっ！？ ちっちゃくないよっ？！ あたし、ちっちゃくないからねっ！？」

いつものやりとり。

だがそれは、どこか、言いしれようのない不安をかき消そうとするかのようだった。

「最後の一人は、前へ出て下さい」

準備が終わったのか、高橋教諭の声がかかる。

その声に反応して、雄二はひばりを撫でるのをやめた。

「出番か。ちよっくら行つてくるとするか」

そう言いつつ中央へ歩き出す。

「もう！ 後が大変なんだからねっ！」

雄二を見送りながら、リボンをほどいて、軽く櫛を通す。

不思議なことに、あれだけ乱暴に髪をイジられたのに、折れたり傷んだりしていない。

よほど髪の扱いに慣れているのだろうか？

ともあれ、それを理由に止めさせられないと知ったときのひばりの心中やいかばかりのものだろうか。

とりあえず髪を整え直し、再度リボンを結んだひばりは、中央を見やる。

そこには、雄二と、Ａクラス代表の霧島翔子がいた。

ふと、ひばりは翔子と目があつたような気がした。

それは思い過ごしてもなく、見つめられていたのだが、ひばりは翔子の深い黒瞳に吸い込まれるような感覚におちいり、戸惑った。

「……黒くて、深くて、綺麗な……。目……。あたしなんかより、ずっと、純粹で、美しい……」

つぶやいた言葉は誰にも届かなかった。

中央に立つた二人は、お互い名乗りを上げる。

「……二年Ａクラス代表、霧島翔子」

「二年Ｆクラス代表、坂本雄二だ」

お互いに、よく知る名前。

幼い頃より親しみ合った名前。

なのに、二人の挨拶は、どこか他人行儀で、寂しかった。

「では、坂本君。教科の選択を」

高橋教諭が、雄二に促す。

「はい。科目は日本史限定の純粹テスト勝負、点数は１００点満点の上限有り。ただし、問題のレベルは小学生レベルでお願いします」

一気に言い切る雄二。これを聞いたＡクラス側からはざわめきが広がった。

『なんだ？ 召喚獣勝負じゃないのか？』

『小学生レベルで上限有り？ 満点確定じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ？』

一方で、あらかじめ説明を受けていたFクラス側は、落ち着いたものだった。

双方の温度差にも関わらず、高橋教諭は冷静に対応する。

「判りました。問題を用意しますので、お二人はこのまま待っていて下さい」

そう告げて退席する。

高橋教諭が出て行くのを確認して、両陣営の生徒が、おのれの代表へとエールを送るために集まってくる

「雄二、あとはまかせたよ」

明久は、雄二に近づき、拳を突き出す。

「ああ、任された」

答えて軽く拳をあわせる雄二。

と、背中に衝撃が走る。

「抜かるなよ？ 坂本！」

俊夫に背中を思い切り叩かれたのだ。

「ぐ、をお、前田、てめえ、ちつとは加減しろ！ 馬鹿力が……！」

雄二が、思わず涙目になってがなる。しかし、俊夫は大笑いするだけだ。

「ふんっ……！」

振り向きざまに、俊夫のボディへ右フックをたたき込む。

拳がめり込む一撃だったが、俊夫は軽く顔をしかめたただけだ。

「鈍ってねえな、悪鬼羅刹」

「けっ、未だ現役の皇餓にや負けるよ」

それだけ言っ、顔も合わせず手を打ち合わせる。乾いた音が響いて消えた。

「坂本君、あのことを教えてくれて、ありがとうございました」

「明久のことか……。気にするな」

笑顔の瑞希に、雄二は複雑そうな笑みを浮かべた。

「……ま、後はお前たちの問題だ」

それだけ言って踵を返す。すると、目の前に小さな影が進み出た。
「坂本君？ ひばりおねーさんとの約束通り、予習復習はしてきたかな？」

雄二の正面で仁王立ちになり、得意げにボリユームのある胸をそらすのはひばりだ。

もう、先ほどの危うさは消え去っていた。

「ああ、支倉のアドバイス通り予習しておいて正解だったぜ。なにせ小学生向けの問題集が半分くらいしか解けなかったからな」

雄二は楽しそうに笑う。

「ちよつ！ だいじょうぶなのっ？！」

そんな答えは予想外だったのか、あわてるひばり。

そんな彼女の頭に、軽く手を置いて優しく撫でる。

「なんとかな。復習もやれるだけはやった。後は全力を尽くすのみだ」

安心させるように笑う雄二。

その心中を察したか、ひばりも笑う。

「……そっか。うん、がんばってね」

輝くような笑顔だった。

「お待たせしました。では、最後の勝負、日本史勝負を行います。参加者の霧島さんと坂本君は、視聴覚室へ移動して下さい」

準備を終えたらしい高橋教諭が戻ってきて、二人に声をかける。

「……はい」

「じゃ、行くとするか」

翔子が静かに教室を出ていくのを追うように雄二も歩き出す。

「坂本君！」

ひばりの声が、雄二の足を止めた。

「行つてらっしゃい！がんばって！」

「おう。任せろ」

雄二は、右手を軽く挙げて笑って見せる。

そして、その足を戦場へ向けて踏み出した。

「皆さんは、この教室でモニターを見ていて下さい」

高橋教諭が教卓の端末を操作すると、巨大なプラズマディスプレイに視聴覚室の様子が映し出された。

すでに翔子は着席しており、遅れて雄二が入室する。

ディスプレイの向こうで、日本史の飯田教諭が問題用紙を配りながら説明していた。

『では問題を配ります。制限時間は五十分。満点は100点です。不正行為等は即、失格となります。いいですね？』

飯田教諭の声に、二人が了承する。

教諭はそれを聞いて軽くうなずくと、開始の合図を出した。

二人が問題用紙をひっくり返し、最後の対決が始まった。

「いよいよですね」

「うん」

瑞希も緊張気味に隣の明久に声をかける。

AクラスもFクラスも、その場にいる全員がモニターに釘付けとなった。

そのとき、参考のためかモニター下部に問題が表示される。

Fクラスの面々は、食い入るようにそれを見ていた。

「これで、あの問題が出ていなかったら坂本君は……」

「集中力や注意力では劣るだろうしね。たぶん延長戦で……」

不安げな瑞希に明久が答える。瑞希の不安は晴れない。

「でも！ あの問題が出ていれば！」

そう言って瑞希を見る明久。

その言葉に、瑞希はうなずく。

だれもが、固唾をのんで見守る。時間が刻々と過ぎていき、問題の表示も終わった。

「出て……ない？」

「そんな……」

「なんてこった……」

「負けるのか？ 俺たち……」

件の問題が出なかったことで、Fクラス側に動揺が広がる。そんな彼らに活を入れるかのように声が響く。

『まだだよっ！ まだ、結果は出ていないよっ！』

ひばりだ。ディスプレイから目を離すことなく、ただ食い入るように見つめている。

テストが終了し、飯田教諭が答案用紙を回収。採点に移る。しばらくして、採点と確認が終わり、二人の点数を入力した。

「採点も終わったようですので、結果を発表します」
落ち着いた声で、高橋教諭が宣言した。

『Aクラス、霧島翔子……』

ディスプレイに表示された点数は。

Aクラス 霧島翔子 100点

Aクラスからは、さも当然という空気が流れてきた。
対するFクラスはお通夜状態だ。

『Fクラス、坂本雄二……』

声にあわせて、ディスプレイに点数が表示される。

Fクラス 坂本雄二 100点

Fクラスから安堵の息が漏れる

「首の皮一枚……だねい」

「延長戦ですね」

クリスとアキの表情は硬い。

「同点となりましたので、五分後に延長戦を行います。みなさんは、引き続きこの教室で待機となります」

結果を受けて、高橋教諭が宣言する。

画面上では、飯田教諭が次の問題の準備をしていた。

翔子も雄二も身じろぎひとつしない。

瑞希は不安を隠すことができなかった。

「お互い100点だなんて……」

「まずいね。これじゃあ、仮にあの問題が出てもダメかもしれない

……」

隣の明久の顔も、苦渋に染まっている。

「もう、祈るしかないよ」

ひばりの声も覇気がない。

画面の向こうで、新たな問題用紙が配られる。

そして、緊張感に満ちた延長戦五十分が開始された。

先ほどと同じように、画面下に問題が表示される。

「お願いです、出て下さい……」

祈る瑞希。

「雄二……頑張れ」

明久も画面から目を離さない。

「坂本君……」

ひばりも目をつぶって祈っている。

「さあて、どうなるのかねい」

クラスの命運が決まるというのにクリスはいいつも通りだ。

『万にひとつくれーじゃねーか?』

カオルは興味なさげにモニターを眺めている。

「……」

アキはすでに諦めてしまっているようで、うつむいたままだ。

「ウチら、どうなつちやうの？」

美波は、もうダメだとばかりに頭をかきむしる。
と、その時だ。

「……出た……」

その声はFクラスの誰だったかは判らなかった。

声が聞こえた瞬間、Fクラスの全員がディスプレイを注視したからだ。

そしてそこには……。

（ ）年 大化の改新

そう映し出されていた。

「……出た」

明久は呆然とつぶやいた。

表示される問題から、延長戦の問題のレベルは明らかに上がっているのは見て取れていた。だから出題されるとは思っていなかったからだ。

「出ましたよ！ 明久君」

画面から目を離さずに明久に抱きつく瑞希。しかし、明久はその感触を味わう余裕など、全くなかった。

「あとは坂本君！」

ひばりの声も弾む。

そして、五十分が過ぎ去り、飯田教諭が解答用紙を回収し、採点を始める。

そして、結果が入力された。

その結果を見た、高橋教諭の、形の良い眉が跳ねる。

「結果を発表します。Aクラス、霧島翔子」

一泊の間。

ディスプレイに表示される結果。

Aクラス 霧島翔子 97点

その結果を見て、打ちのめされるAクラスの生徒たち。
対するFクラス側の表情は明るい。

「Fクラス、坂本雄二」

両クラスともディスプレイに釘付けだ。

Fクラス 坂本雄二 97点

表示された結果に全員が凍り付く。
見れば、ディスプレイの向こうで、雄二が悔しそうに顔をゆがめながら机を殴りつけていた。

結局、もう一度行われた延長戦の結果、翔子が100点をとったが、集中力の途切れてしまった雄二は88点しかとれず、第7戦は、Aクラスの勝利となった。

「終わった……」

「もう、無理だ……」

「ちくしょう、あと少しだったのに」

Fクラス側は、すでに敗戦ムードが漂っていた。

視聴覚室から戻った雄二も、いつもの覇気がない。

クラスのみんなの前に立ち、頭を下げる雄二。

「みんなすまん。偉そうなことを言っておきながらこのざまだ。何

で俺は、肝心なところでいつも……」

悄然となる雄二。

そこへ一歩踏み出すのは小さな影。

「お疲れさま、がんばったね」

そう言って、雄二の頭を撫でたのは、

「……ひばり」

その様子に驚く明久。

「しかたないよ。もう結果も出てしまっているし。それより、この後だよ。どうするの？」

ひばりに促されて顔を上げる雄二。

「ああ、このままなら戦争続行か和平交渉かだが、和平に応じるとは思えん。十中八九戦争続行になるだろう。さてどうしたものか……」

……

「7対7の対戦結果は、三勝三敗一引き分けとなりました。」

クールヴォイスの高橋教諭の声が響いた。

「この後どうするのか、双方の代表者で話し合い、決めてください」とにかく行こう。みんな来てくれないか？」

雄二は、主だったメンバーを伴って、中央へ向かった。

「待たせたか？」

「大して待つてないわよ。で？ どうするの？ 続ける？ それとも降伏する？」

開口一番に挑発してきたのは優子だ。

どうやら、また交渉役として出てきたようだ。

「やれやれ、攻撃的だなAクラスは」

雄二はあきれたように肩をすくめる。そして射るように優子をにらんだ。

「降伏はしない」

「じゃあ、続行ね」

優子も強気に出る。

「それは……」

「Fクラスは、Aクラスに和平を申し込むよん」

「おい、クリス」

言葉を遮られた雄二が、クリスをにらむ。

しかし、クリスはそれを無視した。

「この提案は、双方にとって意味があると思うよん」

「はあ？ そんなものないわよ。こつちが譲歩する必要なんて……」
「ほんとに良いのかなん？ よく考えた方が良いと思うよん？」

クリスの態度にイラつく優子。

金髪の少女はそれすら楽しんでいるようだ。

と、そこで声がかかる。

「少しいいですか？」

御鳥だ。

「なぜ、和平交渉を？」

クリスに問いかける。

「この状況での戦争続行は、お互いにデメリットしかないからない」
そう言ってケラケラ笑うクリス。

「デメリットですか。参考までに伺っておきたいのですが？」

御鳥は慎重に、探るように訊ねる。

「御鳥つちは、判つてると思うけどない。まあ、ウチの連中にも説明する必要があるかもにやあ」

言いながらアキを振り返る。

「現状で戦争を続行した場合、高確率であなた方Aクラスが勝つでしょう」

マインドセットが終わったのか、アキが淡々と述べる。しかし、その内容に優子が噛みついた。

「高確率？ フン、うち（Aクラス）が勝つに決まってるでしょ？」
なにをバカなと鼻で笑う。

「よく分かってらっしゃらないようですので詳しく説明しましょう」
しかしアキは動ずることもなく続けた。これに優子は腹を立てる。
「なっ？！ バカにして！！」

「優子。少し静かにしてください」

ついに御鳥にたしなめられてしまい、口をつぐんだ。

「まず、木下優子、工藤愛子、佐藤美穂、久保利光、クリスティーナ」
「ウエストロード、土屋康太、吉井明久」

アキは先ほどの勝負に出場したAクラス、Fクラスの一部の人間

の名前を挙げた。

「……その人たちが何か？」

落ち着いた声で御鳥が聞いた。

アキは、特に感慨もなく答える。

「いま挙げた七人は戦死者です。つまり、戦争が終わるまで補習室行きです」

「あ……」

優子は声が出ない。

「加えて、来島アキ、高遠祐介、神薙御鳥は一部点数を消費し過ぎています。戦争が始まって即座には戦えないでしょう」

言われて、何かに気づいたように口を開く優子。

「ひ、姫路さんや支倉さんは……」

優子は突破口を開こうと言い募る。

「姫路さんは総合科目でした。点数はまんべんなく減っていますが、単科目あたりの消耗は小さいですし、支倉さんは主力となる教科は全くの無傷です」

しかし、アキはバツサリ切った。

「ア、アタシだって家庭科以外は……」

往生際悪く口を開くが、

「確かに家庭科は、総合科目に抵触しませんが、0点には違いありません」

アキには通じない。

「ぐ……」

なにも言えなくなる。

「そして、一番致命的なのはそちらの代表さんです」

「代表が？　なんで……」

いまいち掴めず聞き直すが、そこで御鳥が口を挟んだ。

「優子、代表の日本史の点数は何点ですか？」

「え？　さあ、暗記ものは得意だって聞いたから400点くらいは

……」

軽く思案して答える優子。

「……優子」

「代表？」

ここで初めて翔子が口を挟んだ。

「……今の私の日本史の点数はそんなにない」

「だ、代表？ 何言って……」

優子は意味が分からないように、首を傾げる。

見かねた御鳥がヒントを出す。

「優子、代表が受けた最新の日本史のテストはいつでしたか」

「振り分け試験の……」

「いえ、さっき受けていたでしょう？」

「……あ」

優子の顔が青くなる。

「……今の私の日本史の点数は100点。総合科目も300点ほど減っている。たぶん、今の姫路と、あまり差はない」

翔子も淡々と述べる。

「わかったかによ？ いまならウチにも、ほかのクラスにも勝機があるねい。よしんばウチのクラスに勝ったとして、さらに戦力を削られた状態でB、あるいはD。下手をすればEクラスにすら負けるかもねい」

「DやEに負けるわけ……！」

「優子！」

御鳥の大きな声に圧倒され、優子は黙った。

「そう言って、Fクラスにここまで追い込まれたんですよ？ 私たちは」

御鳥もうなだれる。

それを見たクリスの目が光った。

「まあ、ケンカふっかけておいて、不利になったから止めましょうじゃ納得いかないよねい？ そこでおねーさんから、そっちの代表にプレゼントだよん」

ヘラヘラ笑いながらそんなことを言い出すクリス。

雄二は怪しい気配を感じ、しかめっ面でクリスに訊ねる。

「なんだそりゃ。俺は聞いてねーぞ」

「言ってないしねい」

クリスは悪びれもせず言い放った。

「……プレゼントって、なに？」

意外にも翔子は興味を持ったように訊ねる。

「ああ、プレゼントの内容だね？」

そう言っただけクリスは雄二の首に腕を回した。

「こちらの男子高校生一名を好きにしたいいよん」

その言葉に、ピクリと翔子が反応する。

「はあっ?! おい、クリス、てめっ、何勝手に……きゅ」

最後まで言えずに一瞬でオトされる雄二。

「どうかなん？」

ニコニコ笑いながら翔子に訊ねるクリス。

翔子はだいぶ迷っているようで、黙ってしまった。

それを見て優子はひとつ息を吐いた。

「はあ。代表。代表の好きにしたいですよ？」

その言葉に翔子が振り向く。

「優子……でも……」

「代表、アタシたちは代表の決めたことなら従いますよ? アタシ

たちは代表のことを、霧島翔子を信じてますから。ねえ!? みんな!

な!」

優子の声に、次々賛同の声をあげるAクラス生徒。

「……ありがとう、みんな」

翔子はお礼を言っただけ、小さく微笑んだ。

頃合いを見て、クリスが口を挟んだ。

「交渉成立で良いかなん？」

「……それでかまわない。あと、雄二から離れて」

「おっと失礼」

言われてひよいとどく。

「雄二、起きて」

「む、なんだ？ 翔子か。いま、イイ笑顔の堕天使にとっつかまっ
て、悪魔への供物にされる悪夢を……」

まだ、血が回りきらないのかしきりに頭を振る雄二。

「……雄二、好き」

突然、翔子に抱きつかれた。

「な、なんだ？ どうした？」

「……これで二人は恋人同士」

「は？ いやまで。何が起きている？ 誰か説明を……」

「……今からデートに行く」

訳も分からず引きずられていく雄二。

「たっしやでな」

クリスは楽しそうに二人を見送ってハンカチを振っていた。

それを見ていた優子がため息をつく。

「これで和平は成立ね。でも、できれば、今後こういうバカ騒ぎは
止めてほしいわね」

「保証はできないねい」

そういつてクリスが笑おうとしたとき、教室のドアが乱暴に開け
られ、ひとりの人物が入ってきた。

学園長だ。

彼女は、その場の全員を見渡すと口を開いた。

「お前たち、いつまでやってんだい！ 今何時だと思ってる」

見れば、すでに五時になるうかという時間だ。

「事後処理、伝達事項は月曜にまわしてやる。いつまでもウロウロ
されると邪魔だからね、とっとと帰んな！ まったく土曜は調整に
当てるつもりだったのにねえ……」

ぶつぶつ文句を言いながら出ていく学園長。

みんなが顔を見合わせ、ため息をつく。

「なんかグダグダだね」

明久がが疲れた顔で、瑞希に話しかけた。

「アハハ、そうですね」

瑞希も苦笑いしながら答える。

と、明久の右手を誰かが掴んだ。

美波だ。

少し頬を染め、目線を合わせないようにしている。

小さな声で、「がんはれウチ、積極的に、積極的に」とつぶやいている。

「どうしたの？ 美波」

「ううん、何でもないわよ。じゃなくて。ねえ、アキ。明日の日曜、暇？」

「あした？ とくに予定はないけど……」

少し考えて答える明久。

それを聞いて、美波の表情が明るくなる。

「ほんとに？！ じゃ、じゃあ、う、ウチと一緒に、クレープ食べにいかない？ おいしいところ知ってるから」

「へっ？！ ま、まあ、いいけ……」

「だめですよ？！ 明久君は、私と映画を見に行くんです！」

なし崩し的に了解しようとした明久を遮って、瑞希が声をあげる。

「ええっ？！ ひ、姫路さん？ そんな約束したっけ？」

突然の事態に混乱する明久。

「どうしたの？ アキくん、みっちゃん、美波ちゃん」

そこへ、ひばりがやってくる。

「ひ、ひばり、助けてよ！ みんながぼくのサイフに大打撃をあたえようとしてるよ！」

「クレープよ！」

「映画です！」

カオスなやりとりをしばらく見ていたひばりだったが、ひとつ咳払いをすると、大きく口を開いた。

「『こらあっ！！ お前らっ！ なにやっとなるかあっ！！』」

飛び出したのは、鉄人、西村教諭の怒声。

これには、騒いでいた三人も身をすくめておとなしくなる。それを見て、ひばりはひとつうなずいた。

「よろしい。じゃあ、みんなで行けばいいじゃない。映画とクレープ。アキくんは二人をきちんとエスコートすること」

腰に手を当て、胸を反らしながら三人の予定を決める。

「あれ？　じゃあ、ひばりはどうするの？」

無邪気に訊ねる明久。

「え？　あたし？　あたしはいいよ。三人で楽しんできなよ」

ひばりはそう言っただけだと手を振る。

ふと、瑞希と美波がアイコンタクトを交わした。

まず、瑞希が口火を切る。

「ひーちゃんも一緒に行きましょう」

瑞希の言葉にひばりは驚く。

「い、いや、いいよ。邪魔しちゃう悪いし……」

珍しく歯切れの悪いひばり。

「そういえば、ウチもまだ、ひばりと出かけたことないのよね。良い機会だし、行きましょうよ」

「で、でも……」

困った様子で指を合わせてぐにぐにさせているひばり。

少しずつ行きたくなってきたようだ。

「そうだよ、ひばり。みんな一緒なら、きっと楽しいよっ！」

瑞希と美波の言葉に、明久がのっかってきたが、その言葉で、瑞希と美波の表情が微妙になる。

それを見て、ひばりは小さく吹き出した。

「な、なんで笑うんだよ？　ひばり」

訳も分らず明久が？を飛ばす。

その様子に、瑞希と美波も笑い出す。

「え？　あれ？　姫路さんも美波も、なんで笑うの？　ぼくだけわからないの？　ねえっ！？」

春の日差しが沈む夕刻、少女たちの笑い声が響いていた。

第十六問（第一部最終話）（後書き）

いかがだったでしょうか？

今回あるシーンを入れるか否かで一日も悩んでしまいました。

また、解説も多いため、読み物としてはどうなんだろう？ と、考えることしきりです。

つぎは、原作二巻、の前に番外編と、キャラ紹介をやるつもりです。

楽しみにしててくださいね♪

オリジナルキャラクター紹介1（前書き）

お疲れさまです♪

今回は『バカと雲雀と召喚獣』に登場する、オリジナルキャラクター達の設定紹介となっています。

今回は、『支倉ひばり』『クリスティーナ』『ウェストロード』の二人です。

書いていてこんなに長くなるとは思っていなかったのですが、結構な分量になったので、面倒だと思う方はスルーしても大丈夫だと思います。

それでは、ご覧になってください♪

オリジナルキャラクター紹介1

支倉ひばり（はせくらひばり）

身長：138cm

体重：ひ・み・つ

外見：お尻が隠れるくらい長い黒髪をポニーテールにしている。髪質は柔らかいが、若干くせつ毛で、ところどころ跳ねているのが悩みのひとつ。

眼はタレ目がちで、鼻と口はコンパクト。全体に童顔で、低い身長と相まって小学生にしか見えない。

じつは、非常にプロポーションがよく、グラマラス。胸もFカップ近くある。

ただし、これらの要素により、小学校、中学校と虐められた経験があり、隠す傾向にある。

実際、現在も胸を抑え目にしてCからD位にしか見えないようにしている。

本作の主人公キャラ。

吉井明久の幼なじみで小柄な女の子。

明久とは、同じ病院で、同じ日に生まれたため、誰よりつきあいが長い。

体力が無く、運動が苦手だが、わりと行動派で世話焼き気質。

暴力的なことや信頼を裏切ることが心底嫌いで、とくに嘘や裏切り行為に対しては怒りを見せる。

基本、ツツコミ体質だが、常識人な為、Fクラスでは気苦労が絶

えない。

十歳の頃に母親を亡くしており、現在父親と二人暮らし。

親子仲は良好だが、生活リズムが合わないため、顔を合わせる機会は少ない。

父親は作家で舞台劇を中心に、ドラマ脚本、小説執筆など多方面で活躍中。

故人である母親は、『カレイドの乙女』とまで言われた、知る人ぞ知る女優だった。

潜在的にファンが多く、可愛らしい外見と世話焼き気質のおかげで、実は結構モテている。のだが、本人が自分の容姿にコンプレックスを持っているせいか、自分は可愛くないと思いこんでいる節がある。

そのせいか、自身への好意、特に恋愛感情に対して、非常に鈍感である。

仮に告られても、冗談かからかわれているとしか感じないらしい。明久のことを漠然と好きみたいだと思っているが、実際はかなり深く愛している。だが、複雑に絡み合う、様々な理由により、それを表にだせていない。

特技は、声帯模写と家事全般で、とくに炊事が得意で、スイーツ関係はプロ並み。

料理に関しては妥協を許さず、瑞希の毒料理すら矯正した実績がある。将来は管理栄養士の資格を取り、食に携わりたいと考えているらしい。

声帯模写は、一度聞いた声は大抵再現できるほどで、音感も優れている。

また、足音など、ただの音を再現するのも得意で、足音やサイレンなどをステレオで再現できる。

勉強は得意、不得意が無く、家庭科をのぞく、全教科が学年平均

点びつたりという平均点算出機。

だいたい140点前後でCクラス並。

じつは、家で勉強をする時間があまりとれない（家事をやったり、明久の面倒を見たりしている）ため、このレベルにとどまっている。得意科目の家庭科は500点前後取れており、総合科目に合算されないのが悔やまれる。

召喚獣

ひばりの召喚獣はディフォルメひばりな外見で、青いブレストアイマーに黄緑色の貫頭衣のような装束に腰巻きを巻いた姿となっている。

装束は左右側面が大きく開いており、腰の辺りまで地肌が見えていてセクシー。のはずだが、召喚獣なので色気もへったくれもない。武器は倭刀で、振りの早さは特筆に値する。

基本的なパラメータは、速度と精度が高くなっており、点数が高くなるほど、速く、精確に武器を振れるようになる。

反面、防御力は低く、鎧を着てないタイプの召喚獣よりマシな程度。

○特殊能力

ひばりの召喚獣の特殊能力は、『フォームチェンジ形態変換』。

状況に応じて形態を変更できる能力。召喚者の意志をトリガーとして、フォームのイニシャルが腕輪から飛び出し、胸に吸い込まれて変化する。

ただし、イニシャルが浮かんだ時点で能力が変更されるため、ほとんど瞬時に変更できる。

変更した際、召喚獣の装備と髪がフォーム独特の色になる。

また、召喚獣の眼が赤くなる。

各フォームはそれぞれ特筆すべき力を持つ。

J (Joker)

ジョーカーフォーム。“切り札”を意味する。武器が無くなり、両手足に手甲、脚甲が装着される。

武器が無くなった代わりに、各パラメータ補正が高くなる。

加えて、ジョーカーの特性としてパラメータ補正が入るため、二重に補正される。

そのため、同等の点数の召喚獣に比べて、30%ほどパラメータが高い。

全体に運動能力が向上し、操作に対する反応が非常に良くなる。

召喚者の経験値がダイレクトに戦闘力に繋がるため、最終的には真に“切り札”と呼べるフォームとなる。

欠点は、完全に無手扱いな為、打撃力が著しく低下する。

パラメータ補正により、並のダメージが出るようではあるが、決定力不足は否めない。

フォームカラーは黒で、アクセントとしてヴァイオレットの縁取りなどが表れる。

M (Metal)

メタルフォーム。“鋼鉄”を意味する。

全フォーム中最高の硬度を誇る。

召喚システム内の設定では、10t近い質量となり、吹き飛ばしや打ち上げるタイプの効果を無力化する。

また、同等の質量を破砕できるほどの威力でなければダメージらしいダメージにならない(約二十分の一)。

武器は、鋼鉄の六尺棒に変化し、攻防に使用する。

これも数トンの質量があり、これを操る筋力と、相まって高い打撃力を誇る。

欠点は、全体の行動スピードが低下し、特に移動力が壊滅的に低くなる。

また、操作に対するレスポンスも低下しているため、敵の攻撃を

避けるのが難しい。

フォームカラーはメタリックシルバー。

T (Trigger)

トリガーフォーム。“引き金”を意味する。

射撃を得意とするフォームで、鋭い感覚を備えている。

サーチ機能があり、召喚者の眼の辺りに青い半透明のホログラムスクリーンが表れ、情報が提供される。

照準は、召喚者の網膜による、網膜照準で、召喚獣の視界と連動した、スクリーンの映像をもちいて照準する。

武器は大型のハンドガンに変化し、強力な破壊光弾を撃ち出せる。破壊光弾はシングルフォーム中、トップクラスの威力を誇るが、弾体が大きく、味方を巻き込む恐れがあるため、乱戦で使いづらいつづつ欠点がある。

また、狙撃タイプに変形させることで弾体を小さくできるが、発射するまでにチャージタイムが必要となる。

遠距離戦で強力なフォームではあるが、癖が強く、使いづらい。操作性は悪くはない。

フォームカラーは青。ハンドガンを狙撃タイプに変形させると、右目から青い炎が吹き出す。

この時、召喚者の右目にも狙撃用のターゲットサイトが現れる。

C (Cyclone)

サイクロンフォーム。“疾風”を意味する。

空気の流れをコントロールして気流、風を操ることができる。

武器の変化は起こらない。

武器に風を纏わせたり、攻撃に風の属性を付加できる。

竜巻を起こしたりすることも可能で、相手を吹き飛ばしたり、弱い飛び道具を無力化したりと応用しやすい。

また、行動速度や移動力、反応速度が大幅に向上し、全フォーム

中、もつとも素早く動ける。

欠点は、攻撃性や防御性が低いため、格下の召喚獣並の攻撃力や防御力しか持たない点である。

フォームカラーはライトグリーン。

H (Heat)

ヒートフォーム。“熱”を意味する。

温度を上昇させて、高熱を操る。

武器の変化は起こらない。

武器に炎を纏わせたり、攻撃に火の属性を付加できる。

ひたすら温度を上昇させることで、物質を融解させたりできる。

また、生体を活性化させて、治癒力を増進させたり、生命力を強化することも可能。

また、筋力が大幅に向上し、全フォーム中、もつとも力持ちである。

欠点は、攻撃性が強すぎるため、全く加減が効かない。しかも、熱の伝搬で広範囲に影響を与えやすく、調整が難しい。

フォームカラーはレッド。

L (Luna)

ルナフォーム。“月”を意味する。

光を操り、不可思議な現象を引き起こす。

武器の変化は起こらない。

このフォームは特殊で、召喚獣のパラメータはまるで変化しない。代わりに光を操ったり、実体を伴う幻像を作ったりできる。

武器も、奇妙な影響を受けるのか、伸縮自在となり、召喚者の思うとおりに動かせる。

ほかにもオートホーミングさせたりも可能で、召喚者のイメージーション次第で無限の可能性がある。

欠点は、その高すぎる自由度で、操作難度が異様に高い。

かなり慣れた人間でなければ、この自由度を生かしきれないのが最大の欠点。

フォームカラーはゴールド。

B (Blade)

ブレードフォーム。“刃”を意味する。

刀を操り、すべてを斬り裂く。

倭刀が日本刀に変化する。

斬ることにすべてを捧げたフォームで、召喚獣の攻撃速度と踏み込みの速度が異様に強化される。

武器も、最高の切れ味を持っており、生半可な防具など紙切れ同然である。

ほとんどの攻撃が抜刀術となり、避けることは非常に困難。

欠点は、速度を重視しすぎたことによる非力さで、ダメージが低いこと。

フォームカラーはスカイシルバー。

F (Fang)

ファングフォーム。“牙”を意味する。

すべてをかみ砕く意志を発露するフォーム。

全身に、牙をモチーフとした棘や角が現れる。高い攻撃性を発揮するフォームで、力、早さ、感覚などあらゆるパラメータが強化される。

ただし、常時暴走状態となり、武器があっても使用することがなく、敵味方の区別なく暴れ周り、召喚者の操作を受け付けなくなる。このため、シングルフォームで使用されることはなく、ダブルフォームで制御力に優れたJフォームで使用されることが前提とされる。

フォームカラーは白。

X (eXtream)

エクストリームフォーム。このフォームの情報は解禁されていないため、閲覧できない。

シングルフォームとダブルフォーム

フォームチェンジはシングルと、ダブルの二種類の発現方法がある。

シングルフォームは各フォーム単独のみのチェンジで、そのフォームの特性が色濃く表れる。

また、シングルでのチェンジでは点数の消費が5点程度で済むため、使いやすい。

ダブルフォームは二つのフォームを同時に発現させ、両方の特性を得られる。

右サイドと左サイドで発現出来るフォームが決まっているので、注意が必要。

右側は、C、H、L、Fで、左側が、J、M、T、Bとなっている。

組み合わせ次第で欠点を補ったり、特性を強化したりすることが可能。

ダブルでのチェンジは、一回当たり10点の消費となっている。

このように、利便性に富んでいる特殊能力ではあるが、フォームごとの効果は、他の召喚獣に劣る。

例えば、最大火力を発揮できるHTフォームの高熱破壊弾の威力は、同じ点数で放たれる、瑞希の召喚獣の熱線攻撃の威力の半分くらいしかない（後述する、MAXIMUM DRIVEでも同等程度）。

このことから、この特殊能力は決戦などに使うには不向きであり、使いどころが難しいと言える。

MAXIMUM DRIVE

ダブルフォーム時に使用可能な必殺技的な攻撃。

使用時に100点消費されるため、おいそれと使用できないが、通常の二倍ほどの威力や、強力な特殊効果が発揮される。

禁じ手として、TWIN MAXIMUM DRIVEというものが、さらに二倍の威力でありながら点数消費が120点ほどで済むという、強力なものだが、なぜか強制的にフィードバックが発生してしまい、召喚者も大きく消耗するという不具合を持っている。

ひばりは一度だけこれを試して昏倒したことがあり、学園長に使用禁止令を出されている。

▲ネタばらし？

わかる人にはわかる、『仮面ライダーW』の能力です。

ガイアメモリもダブルドライバーもないですし、リボルギャリも出ません。

まあ、ネタの一つとも思ってください。

ちなみに、B、ブレードフォームはオリジナルフォームです。

クリスティーナ「ウェストロード

身長：167cm

体重：おねーさんの秘密を知りたいのかなん？

外見：セミロングの金髪に、碧眼の少女。スタイルは抜群で美人。

顔立ちは美人系だが、薄くソバカスがあるのが悩みの種。

胸は93cmのFカップ。

肌は白く、キメが細かい。

明るくお祭り好きな少女。アメリカ人。

実は生まれも育ちも日本で、国外に出たことがない。

そのせいか英語が大の苦手科目。

明るく社交的で、人を食ったような発言をする。楽しいことに眼が無く、快楽主義者。

言動はふざけたものがあるが、発言内容は意味深だったりする。

実は留年しており、去年の所属は2年Bクラスで、代表を務めるほどの才女だった。

ある事件によって、約半年ほど学園に通うことが出来ず、留年したらしい。

その事件の前までは、清楚なお嬢様だったらしいが、いまは欠片もそんな雰囲気はない。

特技は特にないが、場を盛り上げるのがうまく、ムードメーカー。雄二と並んで、Fクラスを支配する黒幕でもある。

好きなものは、楽しいことと、クラスメイトや仲間。

嫌いなものは、仲間やクラスメイトを傷つけるものすべて。

去年は、様々な理由から、クラスメイトたちを助けることが出来なかったことをとても後悔している。

そのため、今の仲間であるFクラスを守るためなら、なりふりを構わない。

両親は健在。あと兄がいるが、何らかの病気のため、外国で静養しているらしい。

彼女の家、ウェストロード家は、巨大企業を運営しており、文月学園にも出資している、重要なスポンサーのひとつでもある。

彼女自身は、その影響力を使う気はないためバレてはいない模様。ただし、クラスを守るためなら躊躇はしない。

このウェストロード家というのは、世界の暗部につながる、セブンスドラゴンという組織の中枢を担う四家の家の一つであり、彼女自身、基本VIPではある。

一応、重要度は低い身分らしいが、危険がないわけではないらしい。

い。

成績は、英語以外は軒並み高く、去年勉強した蓄積もあるため、本来ならAクラス並の成績。

特に、現国、古文、日本史は400点オーバー確実。

数学や化学なども調子が良ければ400点前後穫れるらしい。

他の成績はわりと普通で100点前後。

英語は壊滅的で、一桁しか穫れない。

総合科目で2700点くらいあるが、単科目でのバラつきがひどいため、戦力としては微妙。

召喚獣

クリスの召喚獣は、デIFOオルメされたクリスの髪を長くした容姿。

背中に白い大きな翼を持ち、白銀の鎧を纏う。装飾も装束も、基本的に白に青の縁取りがなされており、清潔かつ高級な印象を受ける。

武器は槍の形をしたライフルで、射撃を得意とする。

パラメータはスピード重視の遠距離志向で、接近戦に弱い。

鎧は防御性能より装飾としての意味合いが強く、防御力は低い。

翼は腕輪起動時にのみ付加される飛行能力用のもので、普段は装飾的な意味しかない。

○特殊能力 クリスの召喚獣の特殊能力は、『ハイパーレンジスナイプ超遠距離狙撃&飛行能力』である。

この特殊能力は、実は最長で1000メートル先まで狙えるが、そんなに広いフィールドは生成できないため、無駄な性能になっている。

狙撃モードに移行することで、召喚者の顔に、ホログラムのゴーグルが装着され、照準出来る。望遠機能もあるため、一キ口先の映像もクリアに見ることが可能。

特筆すべき点は、特殊能力使用時の弾体は召喚フィールドから召喚フィールドへと跨いで射撃できる点である。

フィールドとフィールドの間が、だいたい50cmくらいまで跨いで攻撃が通る。

攻撃の威力は並だが、状況によっては非常に有効。

欠点は狙撃モード時は移動が出来ない点と、このモードで射撃すると、180点ほど消耗するという点。

▲召喚獣の、ネタばらし？

中には気づいた人もいるかもしれませんが、『スーパーロボット大戦OG』のヴァイスリッターが元ネタです。

ビームは撃ちませんが。

オリジナルキャラクター紹介1（後書き）

いかがだったでしょうか？

さすがに主人公のひばりの設定や召喚獣の能力を紹介したら、すごい分量になりました。

そこで、お読みになっている方にお尋ねしたいのですが、キャラクター紹介、こんなに分量あって平気でしょうか？

どのキャラクターも少なくとも、クリスの解説くらいの長さはあるのですが、もっと短くて、簡潔な方が良いですかね？

ご返答願います。

番外編 1 三人娘とデート。あるいは倒錯娘のこと（前編）（前書き）

番外編です。長くなりそうなので、切りました。
楽しんで読んでいただければ幸いです。

番外編 1 三人娘とデート。あるいは倒錯娘のこと（前編）

「ほら、アキくん。起きないと遅刻だよ？ 早く起きてよ」

Aクラスとの試召戦争から明けて、翌日の日曜日。

本日は、四人で出かける予定だ。

明久を起こすのが習慣化しているひばりが吉井家に来てみると、明久が未だに惰眠をむさぼっていた。

「もう！ デートに遅刻なんて言ったら、極刑ものだよ？！ ほら、早く、おーきーてー」

ひばりは、明久がかぶっている布団を奪い取ろうとするが、まるで動かすことができない。

「むー！ むー！」

うなりながら引き続けるが、ビクともしない。

「あと10分」

寝ぼける明久。それを聞いてひばりの頭に赤い十文字が浮かぶ。

布団を放して二歩離れ、仁王立ちになりながら咳払い。大きく息を吸って、口を開く。

「『コオラ！！ 吉井っ！！ むあた、お前かつ？！』」

飛び出したるは、鉄人西村の声。

「補習室はゴメンだっ！！」

叫ぶと同時にベッドから飛び出し前回り受け身から体制を整え窓へと走る。

「……って、ぼくのへやじゃないかつ？！ なんで鉄人が……ひばり？」

「O H A Y O U ! !」

振り向けば、背後に『ゴゴゴゴ……』の効果音を背負ったひばりが、イイ笑顔で朝の挨拶をしてきた。

「……お、おはよう」

16年来の幼なじみの怒りゲージの溜まり具合に、明久は引きつ

りながら朝の挨拶を返した。

「じゃあ、あたしは先に行ってるから。今日の予算は、テーブルの上だからね」

そう言ってひばりは玄関に向かう。

「あれ？ いっしょに行けばいいのに」

洗面所から出てきた明久が、不思議そうに首を傾げる。

「はあ。そういうわけにもいかないでしょ？ とにかく！ 先に行ってるからね。時間に遅れちゃダメだよ？」

靴を履いて、玄関を開けながら言うひばりに、明久は、

「わかったよ」

と返事をして支度を始める。

それを横目で見ながら、ひばりは玄関をくぐった。

「やつほー、みっちゃん、美波ちゃん、おはよー」

「おはよー、ひばり」

「おはようございます、ひばりちゃん」

待ち合わせ場所である、噴水広場に着いたひばりは、ふたりに挨拶する。

案の定、早めに来ていたようだ。

「二人とも早いねー。いつから居たの？」

ひばりは、少し苦笑いしながら二人に尋ねる。

「ウチはさつきよ？ 瑞希はもう居たわね」

「はい、なんだか楽しみで、早めに来てしまいました」

言いながら笑う瑞希。

「今ですら30分前なのに……」

「退屈はしませんでしたよ？ 待つのも楽しいと言いますし」

あきれ顔のひばりに平然と返す瑞希。

それを聞いて美波は眉を寄せる。

「でも、ウチが着いたとき、変な男の人に絡まれていたじゃない」

「そうなの？ 大丈夫だった？ みつちゃん」

心配そうに見上げるひばり。

「道を聞かただけですよ？ 変なことはされてません」

ひばりの様子に、あわてて弁解する瑞希。だが、ひばりは美波の方を見てみると、ため息をついて首を振っていた。

「あれは、明らかにナンパ目的でしょ？ 瑞希は気付いてなかったみたいけど、ウチが着くの遅れてたら、肩に手を回されて、引つ張ってかれてたわよ？ 瑞希から見えない位置で手が妙な動きをしてたから」

そう言つて、美波は手の動きを真似てみせる。

「ええっ?!」

これには、さすがの瑞希もイヤそうな表情になった。

「でも、珍しいね？ この辺でそういうことする人、ぜんぜん見ないんだけどなあ」

ひばりは不思議そうに首をひねる。

「そういえば、見かけたことのない方でした。道を聞いてきた位ですから、郊外からいらっしやったのかも知れません」

瑞希も思案顔だ。

それを聞いて、美波も首を傾げる。

「ウチは、ここに来て一年くらいだからわからないけど、この辺りで、そういうのってないの？」

その問いにひばりは首を縦に振る。

「繁華街から離れた所とかだと分らないけどね。あたしもみつちゃんもこの辺はよく来るけど、ナンパって見たこと無いなあ」

「ですよ。少なくとも、この辺りで見たことはないです」

瑞希も同意見のようだ。

「ふーん。割と治安がいいのね、この辺って」

美波は感心したようにうなづく。

「そうだね。確か、文月学園に融資している会社とかが率先して開発してるんだと言ってたかな？ 企業のイメージもあるから、清

潔な街づくりを念頭に置いてうんぬんかんぬんって」

ひばりは、なんとか思い出すようにしながら説明する。

「なるほど、まあ、たしかにナンパ君が多いような街じゃ、イメージ良くないわよね」

そう美波が答えたところで、明久の姿が見えた。

約束の時間まで、15分ほどある。

「あのあと、そんなに手間取らずに出てきたみたいだね」

ひばりは嬉しそうにうなずいた。

「ひばり、アキのとこ寄って来たの？　いつしよに来れば良かったのに」

美波が不思議そうに訊ねると、ひばりはため息をついた。

「意中の人が、自分以外の女の子と一緒に待ち合わせ場所に現れたのを見て、美波ちゃんが平気ならね」

「瑞希、イチキューってなに？」

分からない単語が出たせいか、いまいち意味がとれなかった美波は、分からない単語を瑞希に聞く。

瑞希は、少し間をあけて答えた。

「……好きな人ってことですよ？　美波ちゃん」

その類はうつすらと赤く染まっている。

「なっ？！　ち、違うわよっ？！　ウチは別にアキのことなんかっ」

美波は真っ赤になってひばりに噛みついた。

しかし、ひばりは肩をすくめて見せると、

「まだ、そんなこと言ってるの？　素直になった方が良いと思うけどな」

と言ったため息をついた。

「だっ！　だから、違っ……！？」

「ほら、アキくんが到着だよ？」

タイミング良く、明久が到着し、ひばりに指摘されると、美波は口をつぐむしかなかった。

「おはよう三人とも」

ニコニコしながら挨拶をする明久。

「おはようございます、明久君」

「おはよー、アキくん」

それに対して、瑞希とひばりも挨拶を返すが、先ほどのひばりのやりとりのせいか、美波だけ顔を赤くして、口をパクつかせてしまった。

その様子に気付いた明久が、心配そうに口を開く。

「美波どうしたの？ 顔が赤いよ？ 調子が悪いなら帰った方が…」

…

「な、なんでもないわよっ！！」

思わず怒鳴りつけてしまう美波。一瞬後には、やってもうたと、後悔した表情になる。

明久は、また自分が美波の機嫌を損ねるようなことをしたのかと、申し訳なさそうな顔になる。

「あ、ゴメン……。またなんかやっちゃったみたいだね。何かは分からないけど、ごめんね？」

「ち、ちがつ？！ ウチは怒ってなんか……」

あわてて弁明しようとする美波。しかし、明久の顔を見ただけで、思考が停止し、舌が回らなくなる。

その様子を見ていた瑞希は苦笑い。

ひばりもあきれたようにため息をついた。

「アキくん。美波ちゃんは怒ってるんじゃないくて、ビックリしたんだよ。今日の映画何がいいかって、考えてたみたいだし」

フォローするひばり。しかし、先ほど三人そろって近づいてくる明久に気付いていた手前、少し苦しい。

「あ、そうなの？ ぼく、またなんかマズいことしたのかと思うちゃったよ」

だが、ここでも明久の鈍感力がいかになく発揮された。安心して、息をひとつ吐く明久。

「（ひばり、ありがとう）。もう、ウチ頭ん中こんがらがっちゃっ

て、とつさに日本語が出てこないのよ)」

「（美波ちゃん、テンパリすぎだよ。落ち着いて……とつさに出てこない？）」

小声で美波と話していたひばりは、あれ？ となる。

向こうでは、瑞希と明久が談笑を始めていたが、それは置いておこう。

「（美波ちゃんって帰国子女だっけ？ もしかして、とつさに日本語が出てこない？）」

「（そうなのよ。とつさに出てくるのは全部ドイツ語で、日本語に訳して話すんだけど、言い回しとか難しくくて……）」

流暢に話すのでお忘れかもしれないが、島田美波は帰国子女だ。

それも、特に日本語が得意である。

そんな彼女が、たった一年で流ちょうに会話できるようになるには相応の努力が必要だったに違いない。

数学が得意なことから分かるように、本来、頭の回転は早いであろう彼女をして、言い回しに悩む。

日本語の難しさ、ここに極まりだ。

「（それがあのヴァイオレンスなツンデレの正体か。仕方ないなあ、なるべくフォローするよ）」

言われて美波の顔が、パアツと明るくなる。

「（ありがとう！ ひばり！）」

「（でもっ！）」

嬉しそうな美波を遮るひばり。

「（な、なに？）」

なんだろう？ と不安げになる美波。

「（でも、一番良いのは、自分の口で、キチンと伝えることかな？）」

「

（でも、ウチ、ちゃんと話せるか分からないし……）」

表情を暗くする美波。しかし、ひばりは軽く笑って告げる。

「（つたなくったっていいんだよ。重要なのは、伝えようとする気

持ちだよ。今までだって、日本語が下手でも、アキくんたちはキチンとお話聞いてくれたんじゃないかな」

「(う、うん)」

うなずく美波。

「(特に、アキはいつも辛抱強くウチの言葉を聞いてくれたわ。あれがなかったら、こんなに話せるようになれなかったかも……)」
頬を赤らめ、優しく笑う美波。

ひばりは、いったん瑞希と明久の様子をつかがい、ふたりの会話が終わってないのを確認して、美波に向き直る。

「(ねえ？ 美波ちゃん。ほんとにアキくんのこと、好きなんですよ？)」

ひばりの問いに、大きく目を見開く美波。

口を開けて、叫びそうになるが、素早くひばりに塞がれた。

「(おっきい声出したら、気付かれちゃうよ？ 落ち着いて？ いい？)」

美波の口を塞ぎながら、ひばりは美波を落ち着かせる。頃合いを見計らって、手をどける。

「(落ち着いた？)」

「(う、うん)」

すると、そこへ近づく影が。

「ふたりともなに話してるの？」

明久だ。

「わひゃうあつ?!」

過剰に反応した美波は、明久に振り返りながら、その鳩尾にヒザをぶち込み、九の字になって無防備にさらされた後頭部へ、ヒジをたたき込んだ。

その、電光石火の早業に、瑞希はおるか、ひばりも止められなかった。

「あつ?! アキ、ゴメンっ! う、ウチそんなつもりじゃ……」
グツタリとなった明久を抱き抱える美波。

「美波ちゃん……」

「あ、あう。ひ、ひばり。ウチそういつつもりじゃ……信じて！」
泣きそうな顔の美波。

その顔に怒れなくなるひばり。

ほどなくして目を覚ました明久に、美波が平謝りする場面もあったが、彼は笑って許した。

「少し時間をとられちゃったけど、まだ余裕あるね。そろそろ行くか」

ひばりは、時計を見ながら皆にに向かってそう言った。

「はい」 行きますよ？ 明久君」

ひばりの言葉にいち早く反応した瑞希は、自然に明久の腕をとって歩きだした。

「よし！ さあ、行くわよ？ アキ」

遅れて美波も、反対側の腕に飛びつくように掴まる。

歩きだした三人に少し遅れるようにして、ひばりも歩き出す。

早くもなく、遅くもなく、静かに、とつとつと歩くひばり。

三人との距離が離れる。

それでも。

歩みを早めるでもなく、足を止めるでもなく、ただ、とつとつと歩く。

ふと、明久が足を止めた。

「どうしたの？ ひばり」

振り返って訊ねてくる明久。

その言葉に、一瞬、ひばりは足を止めた。

「遅いわよ？ ひばり」

「早く行きましょう？ ひばりちゃん」

ついで、美波と瑞希も声をかけてくる。

「はやく行こうよ」

明久が笑う。

ひばりは少しだけ戸惑うように瞳を揺らしたが、すぐに笑顔になつて、軽く走つた。

「待つてよ！ 三人とも！」

前の三人に追いつき、ひばりは、三人と歩きながら談笑し始めた。

映画館では、手かせを掛けられ、鎖でつながれた雄二と、翔子の二人に出会い、ひきつった笑みを浮かべなければならぬ場面もあったが、四人で鑑賞した恋愛映画は、少し泣かせる良い作品で、三人娘はおるか明久までも危うく涙腺決壊を引き起こすところだった。そして、喫茶『ラ・ペデイス』。

映画を見終わつた四人は、美波オススメのこの店で、午後のひとときを楽しんでいる。

「あそこでキスは反則だよねえ」

軽く苦笑しながらひばりが指摘する。

瑞希も反芻するように目を閉じた。

「はい……あう、思い出したらまた涙が……」
と、涙があふれてきた。

となりの美波が、瑞希にハンカチを差し出す。

「はい瑞希。きれいなシーンだったわよね？」

そして、はす向かいの明久に訊ねた。

明久は笑顔で、ウンとうなずくと、となりのひばりに声をかける。

「あのシーンは、ぼくも、ウルツて来ちゃったよ」

それを受けてひばりも笑う。

「そうそう、映画館出るときも、アキくん、目、ウルウルだったしね」

イタズラっぽくウィンクしてみせる。

明久は、不覚をとつたように眉を寄せた。

「うわ、見られてたのか……恥ずかしいなあ」

「あれは、男の子でもクるでしょ？」

美波が助け船を出す。

「そうですね」

瑞希も同意してみせる。

「確かにね」

ひばりも異論はないようだ。

そこで瑞希が動いた。

「あ、あの！ 明久君！」

「ほえ？ なに？ 姫路さん」

唐突に声をかけられて、きよとなる明久。

「あの、わたしのストロベリークレープ、とってもおいしいんですよ？ その、味見してみませんか」

そう言つて、瑞希はフォークに一切れ乗せて差し出した。

「え？ でも……」

「代わりに、明久君のマロンクリーム、一切れくださいね？」
躊躇する明久にかまわず、交換条件を出す。

すると明久は、得心がいったようで、笑顔になった。

「あー、食べくらべだね。うん、いいよ」

快く了承する明久。

「じゃ、じゃあ、ウチのチョコバナナも食べてみない？」
遅れじと美波もフォークを突き出す。

それには、チョコバナナクレープが一切れ乗っていた。

「え？ あ、ありがと……」

ふたりからフォークを向けられ、戸惑う明久。

「アキくんアキくん」

不意に横合いから声がかけられる。

「？ なに？ ひばり？」

「あーん」

「？ あーん」

ひばりの言葉につられて口を開けた明久の口に、ひょいとブルーベリーのクレープが乗ったフォークが入る。

思わず口を閉じた明久は、そのままクレープを租借する。

フォークを戻したひばりは、特に気にせず、そのまま明久のクレ
ープの端を切り取った。

「じゃ、マロンもらうねー」

フォークで切れ端を刺し、口に運ぶ。

ニコニコしながら、味わうひばり。

「マロンもおいしいね♪ みっちゃんも美波ちゃんも食べてもら
んよ」

「ブルーベリーもいいかんじじゃない？ 姫路さんも美波も分け
てもらいなよ」

楽しげな明久とひばり。

ごく自然な、一連の流れを見て、瑞希と美波は固まっていた。

「なんでしよう、この敗北感」

「すごく自然にやりとりしてたわよね。16年の長さは伊達じゃな
いってこと？」

なにやらつぶやく二人に首を傾げる、明久とひばり。

「つ、つぎは私です！」

「う、ウチの方が先よ！」

競うようにフォークを突き出すふたり。

「わ、わかったよ」

二人の剣幕に押されて、明久はがくがくと首を縦に振る。

意を決して、二人のクレープに口を近づけ、大きくあける。

そのとき、鋭い金属音が響いたかと思うと、美波のフォークから、
クレープが弾かれていた。

そして、さらに飛来する銀光。

固いモノに何か突き立つ音がいくつか響き、明久がテーブルを
見ると、フォークが三本突き立っていた。

「ちよっ……」

何事かと、席を立ちながらフォークが飛来した方を見るひばり。

そこには、ドリルロールツインテの修羅が一匹。

「お姉さまから離れなさいっ！ この豚野郎っ！！」

そう叫んで、両手の五指の間に挟んだフォークを構える。

「美春！ あんた何でここにっ？！」

驚愕と嫌悪に、顔を歪ませる美波。

「お姉さま！ 早くその豚野郎から離れてください！」

美春は必死に美波に訴える。

「イヤよ！ 美春、もうウチに付きまとわないで！」

美波は美春を拒否するように言うが、美春には届かない。

「嘘です！ お姉さまは美春を愛しているはずですよ！ それをその豚が誑かしているに決まっています！」

「いい加減にして！」

美波は強く言い放つが、美春には効果がない。

「お姉さま、ご安心を。すぐにその豚を始末して差し上げます。

そうすればお姉さまも目を覚ますはずです！」

もはや我が事しか眼中にない美春はフォークを投擲しようとする。

しかし、そこへ小さな影が立ちはだかる。

「ちよつと！ 清水さん、危ないでしょ！」

ひばりだ。

「なんです？ あなたは？ 私はその豚を処刑……」

『アキくんを豚呼ばわりするなあっつ……！！』

凄まじいまでの声量。

グラスが割れ、窓にヒビが入る。

そんな音量を、いきなり正面から浴びせられた美春は、瞬時に意識を刈り取られた。

「逃げるよ！」

明久が立ち上がってひばりを小脇に抱えるとレジに向かい、店員に一万円渡す。

「おつり、いらないよ」

そういつて走り出す明久。

美波と瑞希もそれに続く。

店を飛び出して走る三人と抱えられた一人。

と、前方に見覚えのある、二人。

「えっ?!」

「うそっ?!」

「まさかっ?!」

「なんでっ?!」

四者四様に驚いた彼らの前にいたのは、腕を組んで歩く、須川亮とクリスだった。

番外編 1 三人娘とデート。あるいは倒錯娘のこと（前編）（後書き）

番外編 1 でした。

いかがでしたでしょうか？

三人娘の恋模様、うまく表現できていれば良いのですが。
そして、まさかの、あのふたりがっ！

番外編 2 三人娘とデート。あるいは倒錯娘のこと。(後編)(前書き)

番外編の後編がありがとうございました♪
楽しんでいただければ幸いです♪

番外編 2 三人娘とデート。あるいは倒錯娘のこと。（後編）

「よ、吉井っ?!」

「おおっ、アッキーに、ひばりとなみなみ、お姫ちゃんまでとは……やるね!」

目の前にいるのは、Fクラスの須川亮と、同じく、クリスティーナ・ウエストロードの二人。

仲良く腕を組んでいる姿は……全く釣り合いがとれていない。

クリスは自然体でニコニコしているのだが、亮はガチガチに固まっていた。

「須川、アンタ……」

「須川君……」

「……須川くん」

「須川くん、きみってやつぁ」

四人はショックが抜けきらないのか、言葉を切る。

「い、いやあこれはだなあ」

ニヤつく顔を止められないまま、亮は弁解しようとする。

「実は……」

「アンタ最低よっ!」

「って、はいいいいっつ?!」

叫ぶ美波に目を剥く亮。

見れば三人娘は自分をニラんでいる。

「女の子の弱みを握って、無理矢理デートさせるなんてっ!」

美波が柳眉を逆立て、亮に詰め寄る。

「そうです! クリスちゃんがかわいそうですっ!」

さらには瑞希が悲しそうな顔で訴えた。

さらに、シャツの裾を引っ張られてそちらを見ると、ひばりが哀れむように見上げてきた。

「須川くん……脅迫は犯罪だよ? 悪いこと言わないから、自首し

よ？」

「ま、待ておまえ等！ 俺がクリスを脅しているのは確定事項なのかっ！？」

「当然よ！」

「そうです！」

「犯罪だって、わかんなかったんだよね？ 大丈夫、情状酌量の余地はあると思うよ」

美波と瑞希はヒートアップし、ひばりは軽くうなずきながら亮の背中を軽くたたいてやる。

「お、おまえらそこまで……そして支倉の同情が地味に一番キツい……」

すでに亮はグロッキー状態だ。

その横で、クリスがケタケタ笑う。

「で？ 真相は？」

一部始終を見ていた明久がクリスに訊ねる。

「ん？ 真相？」

聞かれてきよとしたクリスの顔が、イタズラっぽく笑う。

シナを作ってヨヨヨと泣き崩れるクリス。

「そーなの、実はあちし、すがっちに弱みを握られて、毎晩のようにこの体を貪られるの……」

『『『『！……』』』』』

靴裏が地面をこする音ともに、クリスをのぞいた全員が亮から距離をとった。

なに言っちゃってんのー？！ と顔に表示された亮の動きが止まる。

「す、須川くん……きみってヤツは……」

「よ、よらないで……」

「ひ、ひどいです……」

「須川くん、もう警察呼ぶね」

「なにこのアウェイ感っ！！ つーか、クリスっ！ 冗談でもやめ

てくれっ?!」

もうほとんど半泣き状態で訴える亮。

それを眺めて、クリスがケラケラ笑う。

「うはははは、すがっち、おもしれー♪ ああ、さっきの冗談だから。握られて困る秘密なんて……」

笑うのをやめ、腕を組んで考え込むクリス。

しばらくして、まじめな顔になる。

「いっぱいあるにゃあ」

「あるのかよっ!!」

全力でつつこむ亮。

「冗……談?」

呆然となる明久。

「え? うそ? なんで?」

美波も頭を抱えて混乱する。

「ク、クリスちゃん」

瑞希も信じられないという風にかぶりを振る。

「で? 本当は?」

なぜか、ひばりだけは冷静で、クリスに真偽を聞いたです。

「いやあ、昨日の戦争引き分けだったよねい」

「そうだね、わりと惜しかったよね」

笑顔で答えるクリスに、うなづくひばり。

「で! おねーさん負けちったよねい?」

「うん、ギリギリ負けちゃったよね」

「そうだねい。で、それまで頑張ってくれた男子諸君に悪いなあと思っただよねい」

「それで?」

キラキラ笑って話すクリス。ひばりは続きを促す。

「おねーさんは思ったね! ここはあちしが身体を張って癒してあげられないと!」

「ふーん」

盛り上がるクリスにうなずくひばり。

「しかし！ ああ、しかし！ 悲しいかな、おねーさんの身体は一つしかない。癒してあげられるのは誰か一人……」

「ふんふん」

「そこで！ 公平を期すために開いたのがコレっ！」

と、クリスの後ろに横断幕が広げられる。

“ 第一回 おねーさん杯 チキチキ デート権争奪 ボウリング大会 ”

横断幕の左右には、黒子とネズミ色の黒子が幕の端を持ってたっていた。

「みんな静かだと思ったら、こんなことしてたのっ？！」

「いえーす、おふこーす？ だったっけ？」

発音の怪しい和製英語で肯定するクリス。

合っているか判断できないため、ひばりに正しいか訊ねる。

「一応合ってるけど……クリス、もしかして、英語ダメなの？」

余りに発音が日本語じみていたため、思わずひばりは聞いていた。

「うむ。おねーさんは日本で生まれて日本で育ったのにや！ だから英語なんて、全く分からんっ！」

胸を張って宣言するクリス。

「だのに、この金髪と碧眼、そして、だいなまいつばでいを見た人はみんな口をそろえて言うのさっ！ あめりかんだから英語は得意だろうって！ いいじゃん！ あめりか人が英語苦手だって！」

珍しく、変な方へヒートアップするクリス。

ひばりはちよつと付いていけなくなつて、立ち尽くした。

「まあそれはそれとして」

言いながら何かを横によける動作をするクリス。

急な転換に、付いていけない人間続出である。

「とまあ、その大会の結果として、すがっちとデート中なんだよねい」

「つまり、須川くんが優勝したと。須川くんボウリングうまかったんだ？」

無邪気に訊ねるひばりに対し、亮は下手な口笛を吹きながらそばをむく。

その様子に首を傾げるひばり。

「大会そのものはのーこんですとだねい。すがっちが勝ち残ったのは確かだから、ご褒美つてところかなん？」

笑いながら説明するクリス。

「どゆこと？」

眉を寄せて首を傾げるひばり。

「ひばりんにもちこつと関係あるから教えてあげようねい」 実は

……」

「くつ、横田のヤツ、ロリコンのくせに、なんでこんなにボウリングかうまいんだ？」

「！ またストライク決めやがった！ くそ、このままじゃ金髪美女とのデート権がっ！」

「いいペースだな横田」

「須川か、いまいちテンションはあがらんがなー」

「どうしてだ？ このままいけば、クリスとのデート権はおまえの手に……」

「いや、ボウリングは好きだからな、手を抜く気はないが……ご褒

美がな……」

「何言ってるんだっ?! おまえはっ!」

「デートの相手がな」

「な、何言ってるんだおまえはっ?! あれだけの美人、この先お近づきになれるチャンスなんてほとんど無いんだぞ?!」

「いやでも、俺、支倉が良かったな。デートの相手。吉井にべったりだから、話すチャンスもなくてよお。くそ、吉井め」

「この場でそれを言うのかっ?! おまえはっ!」

「だからテンションあがなくてさ。うし! ストライク!」

「『『『』なら参加すんじゃねーよ!』』』」

「うおっ! なんだおまえ等殺気立って……」

「おれたちゃ、おまえのせいで勝つ目がねーんだよ!」

「やる気ねーなら帰れよ! 誰も止めねーから」

「いやでも、俺、ボウリング好きだからさ」

「『『『』知るかーっつ!』』』」

「で、そのまま大乱闘に突入。見事生き残ったのがすがちつてわけだね」

ちなみにクリスは、離れたところでケタケタ笑いながら乱闘を眺めていたらしい。

「……横田君つて、どんな人だっけ？」

首を傾げるひばりを見ていた、ネズミ色の黒子の肩が落ちた。

「まあ、そんなこんなでデート中な訳だよん♪ アッキーたちは何してるのかなん？」

イジる気満々で訊ねるクリス。

「あー、ぼくたちは……」

と、明久が説明しようとしたとき。

『みいつけましたわあああああつ！！！！』

地獄からの使者の声が響いた。

「危険人物に追われてるんだった！！」

声に驚いて、八人の視線が向かう先、砂煙の向こうから飛び出した人影が、彼女に向かう。

『美波おねえええすあまあああああつ！！』

音を引く勢いで美波に飛びつこうとする美春。

「須川バリヤーっ！！」

声と同時に引つ張られた亮は、何が何やらわからないまま盾にされる。

勢いがつきすぎ、そのまま亮に抱きつく美春。

「ぬあつ？！ クサッ！ キモッ！ 気持ち悪いですっ！！ この汚物っ！！ 豚にも劣る抱き心地ですっ！！ 呼吸をするのをやめなさいっ！！ 汚らしいっっ！！」

美春は亮をさんざん罵倒し、アゴを力チあげ、鳩尾に肘を打ち込み、流れるように踏み出しながら彼の足を刈って、アスファルトに叩きつける。

頭をかばいながらかううじて受け身をとった亮だったが、美春の追撃ストンピングの嵐に沈黙せざる終えなかった。

「チッ、ゴミクズの処理に手間取いました……。ハッ！ お姉さまっ？！ お姉さまはいずこっ？！」

気づいたときには、七人は影も形もなくなっていた。

「なんということっ？！ 美春がゴミ虫の処理に手間取ってしまったばかりに、お姉さまが、あの豚野郎にさらわれてしまいました」
絶望に天を仰ぐ美春。

「お姉さま、美春の不徳をお許し下さい……そして、待っていて下さいまし！ 必ずや、あの豚を抹殺し、お姉さまを助け出して見せますわっ！」

目を見開き、太陽に誓う美春。

そして、美波が居たあたりに移動（進行上に存在する須川亮だったものを踏み越え）し、目を閉じて鼻をヒクヒク動かす。

「……ムッ！ お姉さまの香り！ こちらですわねっ？！ 待って下さいまし？ お姉さま」

風のように走り去る美春。

後には、須川亮だったものが転がるだけだった。

その後、二度にわたる美春の襲撃を、『横田シールド』と『福村ウォール』で切り抜けた一行は、公園まで来ていた。

かなりどうでもよい余談だが、横田はひばりをかばって撃破されたことで名前と顔を一致してもらえたらしい。

ほんと、どうでもよい話だが。

ともあれ、体力のない瑞希とひばりは、すでに限界だった。

隠れる場所を探していた一行は一人の少女を見つける。

木下秀吉だ。

「ワシは男じゃっ！！」

誰ともなく主張する秀吉。

「ど、どうしたのさ、秀吉。いきなり」

「いや、主張せねばいかん気がしたのじゃ。それよりおぬしらどうしたのじゃ？」

青息吐息で汗みどろの五人を見て、秀吉が尋ねる。

「そ、その前に、こっちへ……」

明久に促されて茂みに入っていく一行。

彼らが隠れたタイミングで、美春が公園に現れた。

「……って訳なんだよ、秀吉」

「また、難儀なことになつとるのお。そうじゃ！」

秀吉は手にした紙袋の山を差し出し、明久に変装を勧める。

そして着替え終わった明久と秀吉は、メイドドレスを身に纏っていた。

「って！ 女物じゃないかつ！」

「うーむ。ワシ用の衣装を受け取ってきたはずなんじゃが……」

身をよじって恥ずかしがる明久を見た女性陣は、ぽかんと眺めていた。

「な、なに？ この……なに？」

「……明久君……かわいいです……」

「いやあ、アッキーはかわいい系だとは思ってはいたけどない」

「……」

ひばりは、おもむろに無言で明久に抱きついた。

「ひばり……？」

いぶかしげに見下ろす明久。

ふと、明久を見上げるひばり。

その頬は赤く染まり、瞳は熱く潤んでいる。

見たことのない幼なじみの顔に、明久の心拍数が跳ね上がった。

「ひ、ひばり？」

「アキくん……」

熱い吐息とともに紡がれる声。

「ど、どうしたの？ ひばり……なんか変だよ」

「アキくんっ！ ううん、アキちゃんっ！！」

「へっ？」

明久が間抜けな声を出す。

「ステキっ……」

感極まったように明久を抱きしめるひばり。

「えええ〜っ?!」

「ずっとそのままですわっ?!」

ひばり、大暴走である。

「そこですわっ?!」

ドリルツインテが茂みに突入してきた。

明久と目が合う美春。

「す、姿だけでも女になれば、お姉さまに釣り合うともお、思っているのですか?! ふ、不潔ですっ!!」

構えると同時に、まるで魔法のように、両手の指の間にフォークが出現する。

それが投擲される瞬間、一行は逃げ出した。

その日、彼女は上機嫌だった。

試召戦争に敗北し、交換条件付きとはいえ情けを掛けられたことは、未だ記憶に新しい。

そんな鬱々とした気分を払拭するため、彼女は行きつけの、ちょっと特殊な本屋で、やたら薄くて高額の本を買い漁った。

結果は上々で、良作を何冊かゲットできた。

早速家に帰って楽しもうと上機嫌で歩いていた彼女の進行方向から、走ってくる集団がいた。

みたところ、全員女性……その中でも、メイド姿の娘に見覚えがあった。

全力疾走しているため、メイド服のミニスカートがまくれて、トランクスが顔をのぞかせている。

「え? フクラスの……吉井君?」

その姿に、彼女の頬は染まり、胸は早鐘を打っている。

集団が走りすぎたとき、彼女は、お宝本の入った紙袋を落としていることにも気づかず、ただ呆然と、メイド姿の彼を見送った。

「か、かわいい……」

その日、彼女……玉野美紀は、天使に出会った。

いい加減埒が明かなくなったことを感じた一行は、一計を案じ、文月学園に逃げ込んだ。

廊下を走っていると、部活のためか、教師を発見する。

現国の木内教諭だ。

「こおら、廊下は走っちゃいけませんよ？」

「スイマセンでした」

明久が頭を下げて謝る。

ついで瑞希が声を上げた。

「あ、あの！ 模擬試召戦を行いたいのので、召喚許可をいただけませんか？」

「日曜に自主トレーニングですか？ いいですよ。承認！」

現国のフィールドが展開され、明久たちが次々と召喚する。

そこへ美春が到着した。

「なっ？！ よってたかって、美春の恋をじゃまする気ですか？

！ 試^{サモン}獣召喚！！」

五対一の状況にも恐れず突撃する美春。

その執念からか、異様な集中力で攻撃をかくぐり、美波の召喚獣だけを討ち取る。

次の瞬間には、自身も討ち取られ、美波と一緒に補習室へと連行されていた。

騒動が終息して、一息付いた残りのメンバーは、それぞれ動き出す。

携帯で連絡していたクリスは、それを閉じると動き出す。

「んじゃ、おねーさんはすがっち拾って、デートの続きだよん」

ひばりんもお姫ちゃんも頑張るんだよん」

そういつてウインクしながら立ち去るクリス。

続いてひばりも動き出す。

「じゃあ、あたしは夕飯の買い物があるから先帰るね」

「あ、じゃあぼくも……」

学園まで戻ってきた秀吉から私服を返してもらい、着替えのすんだ明久がひばりに同調しようとする。

「こおら、みっちゃん一人にしたらダメでしょ？」

「そ、そっか」

言われて納得する明久。

「まったく、アキくんは……」

すっかり調子の戻ったひばりが、ニツコリ笑う。

「ちゃんとエスコートするんだよ？ それからみっちゃん！」

ひばりは瑞希に声をかける。

「はい、なんでしよう？ ひばりちゃん」

「（がんばってね♪）」

「（あ……はい♪）」

それだけ言つて、二人から離れるひばり。

「じゃ、また明日、学校で！」

小さな影は、二人から離れていく。ひばりは、我知らずのうちに、右手を小さく握って胸に当てていた。

その姿は、何かから、逃げるようにも見えた。

番外編 2 三人娘とデート。あるいは倒錯娘のこと。(後編)(後書き)

番外編、いかがでしたでしょうか？

番外編を、後2エピソードこなしたら本編に戻ろうと思います。

それでは次回もよろしくお願いします♪

番外編 3 ドキドキクラブレター?あるいは暴徒共のこと(前編)(前書き)

番外編 『ドキドキクラブレター?あるいは暴徒共のこと』の前編をお送りします。

楽しんで読んでいただければ幸いです♪

番外編 3 ドキドキラブレター？ あるいは暴徒共のこと（前編）

「うーん……あり得ない登校時間だ」

Aクラスとの試召戦争が終わって少したった。

あの戦争の影響は、決して小さくはなかった。

ドタバタした四人でのデートの翌日。

Fクラスの担任が変わったことが伝えられた。

鉄人こと、西村教諭に変更になったのだ。

この措置に、Fクラスから不満が噴出し、雄二と明久を中心とするメンバーが抗議に向かった。

が、学園側は新学期早々のこの戦争にある意味感心したらしい。

いわく、Fクラスでありながら、学習設備を向上しようとする、学習意欲の高さは特筆に値すると。

そこで、文月学園でも優秀な教師をつけ、その学習意欲を大いに満足してもらうことが決定されたらしい。

ちなみに断ると、新学期早々、率先して学校中を騒ぎに巻き込んだとして、みかん箱とゴザにグレードダウンさせると脅さ、こほん説得された。

しかし、悪いことばかりではなかった。

ひばりが率先しておこなっていた教室の衛生環境改善運動のほとんどが認められ、教室は隙間が埋められ、窓もちゃんとしたものになり、ロッカーや黒板も新品となった。

畳、ちゃぶ台、座布団は相変わらずだが、これらも新品となり、実質Eクラスレベルには改善されている。

明久自身の努力も続いている。

勉強の時間を増やし、身体づくりの自主トレも始めていた。

本日はかなり早くすつきり目覚めてしまったので、なんの気無しに登校してきたのだ。

「ほんとに早いよね、おかげで助かった」

隣でニコニコ笑うのはひばりだ。

今朝はひばりが吉井家を訪れたときには、すでに明久が起きており、朝一の家事を分担して素早く終わらせられたのだ。

「ううん。ひばりはいつもこんなに早くから色々やってくれてたんだなって、あらためて知ったよ……」

そう言っ て申し訳なさそうにする。

ひばりは苦笑いしながらも顔を振ってみせる。

「あはは、あたしはこのサイクルで馴れちゃったからね。大変だとは思わないけどね」

「それでもだよ。これからは早く起きれるようにがんばってみるよ」
そう言っ て明久は、拳を握っ て決意を示してみせる。

それを見たひばりは感心したような顔を見せてからイタズラっぽく笑う。

「ふーん？ でも、アキくんのことだから三日坊主なんじゃないかな」

言われて自覚があるのか、しょんぼり顔になる明久。

「ですよー！。つくづくダメなヤツだなーぼくっ て」

それを聞きながら、ひばりは明久の前に一歩出ながらくりとまわる。

長いポニーテールが、綺麗な弧を描いた。

「ウソウソ」 きっ と出来るよ、今のアキくんなら」

そう言っ て笑うひばり。

「そうかな？」

「そうだよ、自信を持っ て？」

まだ自信無さ気な明久を励ますひばり。

明久は、その言葉に顔をほころばせる。

「ありがとっ、ひばり。どこまでできるかわからないけど、ぼく、がんばるよ」

「うん！ がんばっ て」

明久の答えがうれしくて、ひばりは大きくうなずいた。

やがて、学園の校門が見えてくると、近くに見知った姿もある。

刈り揃えられた短い髪に、浅黒い肌。

無骨というイメージがしっくりくるシルエツト。

生徒指導兼Fクラス担任の、鉄人こと、西村教諭だ。

「西村先生、おはようございます」

「おはようございます、先生」

ひばりと二人で挨拶する明久。

「おう、おはよう！ 支倉、吉井。今朝はずいぶんと早いじゃないか」

爽やかな笑顔で挨拶を返す西村教諭。

「吉井は最近、遅刻どころか余裕を持って登校してきているな。感心なことだ。これからも続けられるよう、がんばれよ」

西村教諭は感心したように軽く笑って明久を激励する。

「あ……ハイっ！！」

珍しく褒められた明久は、少し紅潮しながら元気に返事を返した。

「うむ。ん？ そうだ吉井、一つ頼んでもいいか」

「あ、雑用ですか？ 任せて下さいよ！」

雑用の依頼にも、嫌な顔ひとつしない明久に、西村教諭は面食らう。

「そ、そうか？ 最近は雑用ひとつにも文句を言わなくなってきたな吉井は」

「召喚獣操作の訓練にもなりますし、色々試行錯誤するのが楽しくなってきたんですよ。ゲームみたいで」

そう言ってイタズラ小僧のような顔になる。

「……ハッハッハ！ コイツは一本取られたか。罰作業をゲームに例えるとはな。見たところ不真面目から来る言葉ではなく、ポジティブな思考の結果のようだ。本当に吉井は変わってきたな」

楽しそうに笑う西村教諭。ひばりもうれしそうに笑う。

「で？ なにをやればいいんです？」

「おっと、すまんすまん。こっちだ」

三人で校門をくぐる。

「奥の古いサッカーゴールを業者が回収しやすいように、校門前に置いてきてくれ。邪魔にならないようにな」

「ゴールネットはどうします？」

「ネットは別口で処分するからな。まとめて体育用具室にでも置いておいてくれ」

作業の指示を出す西村教諭。明久は、それをまじめに聞いている。明久のそんな姿を見ながらひばりはニコニコしていた。

「ちょっと掛かつちやったね？ アキくん」

「ひばりは、無理してつき合わなくても良かったのに」

二人で昇降口をくぐる。

ゴールとネットはなかなかの難敵だったが、明久がゴールを運び終わった頃には、ひばりがネットを畳んでしまっていた。

さらに、西村教諭が、これ以上はHRに差し障るとネットを持っていってくれた。

彼には怒られたことしかない明久は、改めて西村教諭を見直した。
「西村先生に優しくされたなんて初めてだよ」

複雑そうにつぶやく明久。それを聞いてひばりが苦笑いする。

「クスクス。西村先生は良い先生だよ？ いつも生徒のこと気にかけているし。相談にも乗ってくれるし」

「へえ。ぼくには怖いイメージしかないけど？」

「それは去年、アキくんが問題起こしたからじゃないかな？ 色々聞いているよ？」

そう言つて、イタズラっぽく笑いながら見上げるひばり。

明久は、なんだか照れくさくなって、鼻の頭を掻く。

「いや、まあ。たしかにいろいろやらかしたっけ」

「まあ、大半はなんか理由が有ったみたいだね」

照れてる明久をからかうように言いながらげた箱前に立つ。

二人同時に戸を開け……閉めた。

そして、二人同時に首を傾げて、また、同時に戸を開いた。
げた箱の中の上靴の上に、封書が載っていた。
二人同時に手に取り、同時に宛名を確認した。

吉井 明久様

支倉 ひばり様

二人同時に裏返し、差出人を確認しようとする。
差出人は空白だった。

数瞬の後、二人は同時に口を開く。

「ひばり」

「アキくん」

お互い、同時に顔を向ける。

「「ラブレター貰っちゃった……」」

呆然と異口同音に言葉が紡ぎ出された。

「どうした？ 二人とも。早く行かねえとHRはじ……」

げた箱で立ち尽くす二人に声をかけたのは雄二。

その視線の先には、二人が手にした封書がある。

「ゆ、雄二……」

「坂本君」

動揺する明久と、困惑気味のひばり。

そんな二人を見て、雄二はおもしろそうに笑った。

「工藤」「はい」

「久保」「はい」

「来島」「はい」

三人そろって教室に入ると、ちょうどチャイムが鳴り、西村教諭も間髪を入れずに入室する。

教壇に立つと、すぐさま出席を取り始めた。

「近藤」「はい」

「斉藤」「はい」

返事をするFクラスの面々の声に覇気はない。

暖かい日差しが差し込む中、平穏な日常が

「坂本」「明久がラブレターを貰ったようだ」

『殺せええっ!!』

やってこなかった。

「ちよつと坂本君！　なんでそんなこと言い出すの！」

「おもしろそうだからな」

明久が声を上げるより早く、ひばりが雄二に噛みつく。

しかし、雄二はイタズラが成功した子供のような笑みを浮かべるばかりだ。

『ありえん!?　吉井がそんな物を貰うなんて!』

『それなら俺たちが貰っていてもおかしくないはずだ!』

『きつと、奥ゆかしい美少女が恥ずかしがって隠したに違いない!』

『なるほど!　探せ!　自分の席の周りを探すんだ!』

『ダメだ!　腐りかけのパンと食べかけのパンしか出てこない!』

「捨てなさい!　そんなの!」

『よく探すんだ!』

『……あつた!　未開封のパンだ!』

『なにを探してるんだ!　おまえは!』

怒号飛び交う教室。

室内は、嫉妬と狂気に支配されつつあった。

「静かにせんか!　バカ者ども!」

一喝。

ただの一言で静寂が戻る。

「それでは出欠確認を続ける。手塚」

「吉井コロス」

「藤堂」「吉井コロス」

「戸沢」「吉井コロス」

「うっ、みんなの返事が『吉井コロス』に変わってるよ……」

一人さめざめと泣く明久。それを感じてひばりはチラリと後ろを見る。

「新田」「吉井コロス」

「布田」「吉井マジ殺す」

「根岸」「吉井ブチ殺す」

淡々と続けられる出欠確認。

「支倉」「アキくんを殺す発言した人はオヤツ抜きです」

ザワツ。

ひばりの返事（？）にクラスの空気が変わる。

ここ数日、ひばりは掃除の手伝いや、クラスの雑用をしてくれた人に、お礼としてスイーツを振る舞っており、好評を博していた。

ただでさえ貴重な、クラスメイト女子との機会。しかも手作りスイーツ付きとなれば、女に飢えたFクラス男子陣が見逃すはずもなく、意図せずしてひばりは彼らの餌付けに成功していたのだ。

その機会が失われると知った者たちの動揺は計り知れない。

「よし。遅刻欠席は無しだな。本日も、一日勉強に励むように」

出席簿を閉じる西村教諭。彼が退室すると同時に、教室内の男子がひばりに土下座した。

「……どうもすみませんでしたーっ！」「……」

嫉妬による殺意より、クラスメイト女子の手作りスイーツの誘惑が勝ったようである。

「まったくもう！」

両手を腰にあて、プリプリ怒るひばり。

その姿は、怖いと言うより、愛らしい。

「なんだつまらん。騒ぎにならんじゃないか」

企みを阻止され、雄二はつまらなさそうに言う。

「坂本君！」

「へいへーい」

ひばりが雄二をにらむと、雄二は肩をすくめて気のない返事をした。

その向こうで美波が明久に近づく。

「アキ、それ中身はもう見たの？」

彼女は少し不安そうに明久に訊ねる。

「ううん、まだだよ。後で読んでおくよ」

明久は少し困ったように答えた。

「……な、なんて返事するの？」

美波は恐る恐る訊ねる。

訊ねてしまってから後悔した。

「ゴメン、今の忘れて」

そう言っで美波はトボトボと離れていった。

瑞希も気にはなっているようで、横目で明久をチラチラ見ている。だが、明久は他のことが気になっていた。

「ねえ、ひばり。大丈夫？」

「そついや、支倉も貰ってたな」

明久がひばりに声をかけたのを聞いて、雄二が付け足した。

「……ナニッ！！」

クラスの男子が反応する。

「くそっ！ 一体誰が！」

『我らの小女神を狙うとは不届き千万』

『必ず見つけ出し火刑にしてやる！』

暴走は止まらない。

「さ、坂本君！　なんて事するのよ！」

ひばりは真っ赤になって雄二の胸板をぼこぼこ殴りつける。

「やはりこうじゃないとな、うちのクラスは」

雄二はニヤニヤ笑いながらクラスの喧噪を眺める。

「もう！　大騒ぎじゃない！　どうするのよ！」

ひばりがキャンキャン吠えるが、雄二はどこ吹く風だ。

そこへクリスがやってくる。

「まあ、とりあえず二人は、手紙をトイレ当たりで読んでくことをお勧めするよん。じゃないと、後の行動も決められないしねい」
そう言って、明久とひばりにウィンクする。

二人は、なんだか恥ずかしくなってお互いの顔をみやった。

「うん、そうするよ」

「もうすぐ授業が始まるからその後だね」

そうやって話していると、一限目の担当教諭が入室してきた。

授業中も暗闘は続く。

雄二から男子たちに向けて密書が回されていた。

おかげで、Fクラスには珍しく、授業が終わるまで全員がまじめに受けていた……。

ように見えた。

授業が終わり、担当教諭が珍しくスムーズに授業を終えられた喜びを噛みしめながら教室を後にすると、ひばりが黙って席を立った。彼女が教室を出て、姿が見えなくなった瞬間。

明久はクラスメイトに取り囲まれた。

「え……えっと？　みんなどうしたの？」

「なあ吉井。やっぱ納得いかねえんだよ、おまえがラブレターを貰うなんてな……」

クラスメイトの誰からともなく声が聞こえてくる。

「え、っ？！　みんな、ぼくを殺すのやめたんじゃ……」

明久の顔に、焦りが浮かぶ。

「あれは、『クロス』発言に対する謝罪だ。肅正そのものに対しては、支倉はまだ何も言っていない……」

周囲から殺気が膨れ上がる。

「坂本に言われて気づいたんだよ。俺らの小女神リトルゴッデスに気づかれなきゃ問題ないってな……」

すべて屁理屈である。

「みなさんやめてくださいっ！」

割り込む声は、姫路瑞希。

「その手紙には、出した人の想いが込められてるんですよ？ それをこんな……！」

瑞希は真剣な顔である。

「姫路さん、君は味方なんだね？ ありがとう」

「いえ、そんな……」

明久に笑顔でお礼を言われた瑞希は、顔を赤らめ、体をもじもじ動かす。

そのALフィールド（Absolute Lovelove Field）に全員がたじろぐ。

「これでゆつくり読めるよ」

そう言って、手紙を取り出し、席を立とうとした。

その封書と、宛名を見た瞬間、瑞希が固まった。

「……明久君、手紙って、ソレですか？」

さび付いた人形のように首を動かし、明久に訊ねる瑞希。

「え？ うん。差出人が書いてないから、誰がくれたかわからないんだけどね」

そう言って立ち去ろうとする明久の肩がつかまれた。

瑞希だ。

「明久君」

「な、なに？ 瑞希ちゃん」

瑞希の雰囲気の変化に気づいた明久は思わず名前を呼んでしまう。
「その手紙……読んじゃダメですっ！！」

瑞希は真っ赤になり、目を潤ませながら叫ぶ。

「ええええっ?! 君は味方じゃなかったのっ?!」

「と、とにかくダメなんですっ! こっちに渡して下さいっ!」
瑞希の態度の変わりように、クラスの全員がついていけない。

「ご、ごめんっ! 瑞希ちゃん」

明久は、少し迷ったが、謝りながら瑞希の手を振り払うと、走り出した。

「ハッ?! ターゲットが逃げたぞ! 追うんだっ!」

いち早く復帰した雄二が叫ぶと、男子たちは即座に再起動し、雄叫びをあげて追跡を開始しはじめた。

「逃がすな! 追撃隊を組織しろ!」

「手紙を奪え!」

「サーチアンドデースっ!」

「ああ、読まないで、読まないでくださあゝい」
泣き崩れる瑞希。

その言葉が追撃軍に届いたかは定かではない。

番外編 3 ドキドキクラブター?あるいは暴徒共のこと(前編)(後書き)

いかがでしたでしょうか?

後編は、まだ少し時間がかかるかもしれません。

次回もよろしく願います♪

番外編 4 ドキドキクラブレター？あるいは暴徒共のこと。後編（前書き）

お疲れさまです！

『ドキドキクラブレター？ あるいは暴徒共のこと』の後編をお送りします。

みなさんが楽しんで呼んでくれれば幸いです♪

番外編 4 ドキドキラブレター？ あるいは暴徒共のこと。後編

手紙を広げて、ひばりはため息をついた。

ひばりにしてみれば、ラブレターの類を貰うのは初めてではない。文月学園に来てからも二度ほど貰ったし、中学時代も何度か貰ったことがある。

そのたびに丁重にお断りしているのだが、この際、それはおいておく。

問題は、差出人不明のこの文である。

『会って、お話したいことがあります。放課後に校舎裏まで来て下さい。待っています』

ラブレターなのだろうか？

ひばりは顔をしかめた。

気分が優れないのか、その顔色も良くない。

目をつむり、こめかみを軽く指で押さえながら、天を仰ぐ。

「……大丈夫。もう長月中じゃないんだし、文月にそんなことする人、きつといない……」

つぶやいて手紙をしまうと、ひばりは重い足取りで教室に戻っていった。

教室に戻ると、大半の人間がいなかった。

アキや加藤といった、あまり積極的に他人と関わろうとしない人間だけしか残っていない。

ひばりはぼんやりとした様子で席に着くと、頬杖をついてため息

を吐いた。

予鈴が鳴り終わった頃、明久をはじめとする、Fクラスの面々が戻り始める。

結局、全員が戻ったのは授業も半ばに差し掛かった頃だ。

ひばりは授業中もぼんやりとしており、教師に指されても返事をしない場面があった。

ふだん、ハキハキと返事をする彼女しか見たことのなかったクラスメイトたちは、一体どうしたのかと首を傾げる。

授業が終了し、教師が引き上げると、クラスメイトたちが一斉にひばりの周りに集まり始めた。

ここ数日で親密度が高まっている美波がすぐさま声をかける。

「ちよっとひばり、どうしちゃったのよ」

「……………心ここに在らず」

康太も横合いからのぞき込んでつぶやく。

さらにひばりの正面に回り込んだクリスが目の前に手をかざして振ってみた。

「ひばりーん、おーい。だめだねい目の焦点も合っていないみたいだよん」

「ラブレターが嬉しかった……………て感じではないな。明久、姫路、おまえ等……………」

ひばりの様子を見て取った雄二は、長年のつき合いがある二人なら何か知っていると思い、そちらに顔を向けた。

しかし、二人は困ったように顔を見合わせるだけで口を開こうとしない。

「……………なるほど、ラブレター関連で何かあったわけか。それも、支倉以外が口にするにははばかられるような何かだな？」

雄二は二人の様子から推測をたて、問うてみる。

効果はてきめんで、明久も瑞希も動揺するように体をふるわせた。「答えなくてもいい。沈黙こそが答えを語ってるようなもんだ。しかし、どうするか……………」

さすがの雄二も打つ手が見つからずに考え込む。

『支倉さん大丈夫か？』

『こんな支倉さん初めてだぞ？』

『どうするよ？』

『どうするって言ったって』

たちまちFクラス中に動揺が広まった。

しかし、それを治める声がある。

「落ち着くのじゃ皆の衆。ワシが声をかけてみようぞ」

そう言って秀吉が進み出た。

「『支倉、支倉よ。聞こえるか？　ワシじゃ秀吉じゃ』」

妙に存在感のある声が響いた。

「……木下……くん？」

今度は声に反応するひばり。

「『そうじゃ、木下秀吉じゃ』」

「木下……秀美ちゃん」

ひばりはぼんやりしながら答える。

「待つんじゃ、今さらって言うつつたが、語感が違う気がするぞい」

ひばりの返答に困惑する秀吉。

『なに言ってるんだ、合ってるじゃないか秀美』

『そうだぜ秀美』

『我らが小女神リトルゴッドデスを起こせる巫女はお前だけだ秀美』

『頼んだぜ秀美』

「おぬしら待つんじゃ！　それは地味に“ひでよし”とも読める分、質が悪いぞい！　ワシの名は秀吉じゃ！　そしてワシは男じゃ！

巫女ではないぞい！　せめて御子か神子にしてほしいのじゃ！」

名前を改変されそうになり慌てる秀吉。

「みんなどうしたの？」

不意に問いかける声が聞こえた。

ひばりの声だ。

全員の注意が秀美、もとい、秀吉に向いている間に覚醒したらしい。

「……えっと？ 取り囲まれて注目されると困るんだけど……」
困惑気味のひばり。

しかし、そのいつも通りの様子に、周りから歓声上がる！

『我らが小女神がリトルゴッデスお目覚めになられたぞ！』

『おお！ さすがは秀美だ！』

『小女神万歳』

『姫路さん、結婚して！』

大混乱である。

「……………えーい、うるさああああいつー！」

スパパパアアアン！

電光石火の早業で騒ぎ続ける数人の男子をハリセンではなく。

『お。』

『か。』

『ぺ。』

『ぶ。』

そして仁王立ち。手にしたハリセン、【小烏丸】を突きつける。

「いったい何の騒ぎ？ 事と次第によっては……」

「ひばりん覚えてないのかなん？ ずっとぼんやりしてるから、みんな心配してたんだよん？」

クリスが苦笑いしながら教える。

「え？ ぼんやり？ ……あ」

そこで己の状態に気づいたひばりは、あ。となった。

「あー、ごめんね？ ちよっと考え事してたんだ」

決まり悪そうに笑うひばり。

「みんなもごめんね？ 心配してくれたのに、はたいちゃって……」

『あー、だいじょぶ、だいじょぶ』

『このくらい何ともないよ』

『うちの業界じゃあご褒美です』

『支倉が元気になったんならそれでいいさ』

一部に間違った返答があったような気もするが、とりあえず笑って水に流すクラスメイトたち。

女子に対しては異様に寛容だ。

「よし。支倉の調子も戻ったことだし、続きを始めるぞぉ」

様子を見ていた雄二が、皆に声をかける。

「へっ？ なんかあったっけ？」

なんのことやらわからないという風に明久が疑問の声を上げる。すると、雄二は、こともなげに言った。

「決まっているだろう」

クラスメイトたちが一斉に振り向き、目を光らせる。

「お前の処刑だ」

その瞬間、明久は教室から飛び出した。

雄二はそれに加わらず、横目でひばりをみる。

いつもなら真っ先に明久をかばうひばりが、まるで動かない。

「（これは、重傷かなん？）」

いつの間にやら、雄二の隣に立っていたクリスが小声で聞く。雄二は嘆息して答えた。

「（そのようだ。さて、どうしたものか）」

「（話してくれない事にはない。アッキーやお姫ちゃんに聞くのも一つの手だけれども、最後の手かねい）」

「（なに、いざとなったら俺が明久から聞き出そう）」

「（ふむん。それじゃ任せるよん）」

小声でのやりとりを終えたクリスは、そのままひばりへ近づいてふざけ始める。

それを注意しながら笑うひばり。

スパアンツ！

いい音とともにハリセンが振り切られた。

『ていうか、そのハリセンどこから出したのなんっ？！ さっきも使い終わったら、もうどこにも無かったよんっ？！』

『企業秘密です』

そんなやりとりをしている二人をみて、雄二はクスリと笑った。

授業が終わる度、明久の逃亡と、Ｆクラス男子の追撃は繰り返されていった。

そして昼休み。

雄二の罠にかかり、おびき出された明久は、屋上で雄二、瑞希と対峙する。

「くっ、雄二。どこまでもぼくのじゃまをするつもり？」

悔しげにつぶやく明久。

「当然だ」

雄二は余裕を見せながら答える。

「どうしてさ？！ そんなことをしても、雄二にメリットなんて！ 思わず叫ぶ明久。その言葉に雄二は瞑目する。

「たしかに、お前の言うとおりだ。俺にとってメリットは全くない」「ならっ！」

明久は雄二の言葉に声を上げる。

「だが！」

遮るように力強い言葉が放たれ、明久が息をのむ。

「俺は、お前が幸せになるのが、この上なくム力つくだけだ」

「キサマ最低だっ！！」

明久の言葉を涼しい顔で受け流す雄二。

「さてと。明久、手紙をよこせなんて野暮なことは言わねえ」

上着を脱いで、ネクタイをはずす。そして、野生味溢れる獰猛な笑みを浮かべる雄二。

「本気で来いよ」

余裕たつぷりに言い放つ。その肉体は、武道家のように絞り込まれ、野生の肉食獣を思わせる体つきをしていた。

「姫路。すまんが上着を預かってくれんか？」

「あ、はい。いいですよ」

上着を受け取り、二歩下がる瑞希。

軽いウォームアップのつもりか、シャドーを始める雄二。

その拳からは、鋭い風切り音が鳴り響く。

それを見た瑞希は、不安げに明久に近づいた。

「明久君、やめましょう？ ケガしちゃいますよ？」

その表情は、かなり真剣に心配している。素人目に見ても雄二が喧嘩慣れしていることが見て取れたからだ。

しかし、明久は首を振る。

「心配してくれてありがとう。でも、手紙をだしてくれた子の想いを、きちんとうけ止めたいんだ」

真剣な顔で話す明久に、瑞希は思わず見とれる。

「だから、ぼくは逃げるわけにはいかないんだ」

明久らしい、素直でまっすぐな言葉。

そしてそれは、知らないとはいえ、瑞希のための言葉でもある。もう、瑞希は感極まってしまい、胸が張り裂けんほどに想いがいっぱいになってしまった。

「あ、あきひしゃくん……私、私……」

「下がっていて、あぶないから。それから、ぼくのも持っていてもらえるかな？」

「ひゃ、ひゃい」

もはや、湯気を吹き出し始めた瑞希は噛み噛みだった。

明久の上着を受け取ると、力一杯抱きしめたい衝動に駆られ、こちらの腕だけ、ぎゅっと胸に押しつけるように抱きしめる。

ふと、違和感を感じた。

布より固めのそれは、封筒だ。

取り出してしげしげと眺める。

やはり見覚えのある封筒と宛名の筆跡に、確信したような顔になる。

そんな彼女をみて、雄二はあきれた。

「……明久、お前バカだろう」

雄二の言葉にきよとなる明久。そして彼の視線を追って振り返ると、瑞希が封筒をしげしげと眺めているところだった。

「み、瑞希ちゃん?! 戦わないでそれを見るのははんそくだよ!」

思わず声を上げて瑞希に駆け寄ろうとする明久。

それを雄二が後ろから羽交い締めにする。

「よし! 姫路っ! その手紙を始末するんだっ!」

もがく明久を押さえ込んで叫ぶ雄二。

「えっ?! あっ?! えっ?!」

思わず手に入れてしまった急展開に戸惑う瑞希。

とつさに、明久はかかとで雄二の足先を思い切り踏み抜いた。

「ぐあっ」

たまらず悶絶する雄二。明久は間髪入れずに思い切り頭を後ろに振った。

堅いもの同士がぶつかるような音がして雄二がのけぞり、拘束が解ける。

「つゝ、み、瑞希ちゃん! それをこっちにっ!」

そのまま瑞希の元へ行こうとして、足をすくわれた。

雄二が当てずっぽうで出したローキックが、明久の足を刈ったのだ。

勢いついて瑞希にせまる明久。

瑞希も避けようとはするが、即座に反応できるほど、運動神経がよいわけではない。

「へっ?! わあっ?!」

「あっ?! きゃあ?!」

必然的に、明久が瑞希を押し倒すように倒れ込んだ。

瑞希が預かっていた二着の上着とネクタイ、そして封書が宙を舞う。

上着とタイは、そのまま落ちたが、封書は風に吹かれ、そのまま校舎裏に落ちていく。

その先には、焼却炉で作業する年配の用務員がひとり。

「ん? なんじゃあ、こりゃ」

落ちてきた封書を、興味無さげに拾い上げると、そのまま焼却炉に放り込んだ。

燃え盛る炎の中へ。

雄二はそれを見届けながら鼻をさする。

「ま、おかげでいい目も見れたんだ。諦めも付くだろ。おー、いて」

目を開いたら雪景色だった。

明久の目の前には白い空間が広がり、甘くて良い匂いがする。

「ふわああ」

柔らかい、羽布団に包まれるような、心地よい暖かさに、思わず安堵する明久。

「はふう」

軽く息を吐くと、睡魔が襲ってきた。

「あ、あのっ! 明久君。さ、さすがにこのまま寝られてしまうと、す、少し……ほんの少し困ります……」

心地よい天使の歌声が聞こえる……。

明久の顔を、胸で抱き止めるように仰向けになった瑞希は、軽く寝息をたてる彼の抱き枕と化していた。

その顔を幸せそうに眺めながら、瑞希はそつと髪をなでる。

「姫路……。お前、大胆だな」

「さ、坂本君っ?! これはその、ラッキーハプニングと言いますか、なんと言いますか……」

すっかりその存在を失念していた雄二に声をかけられた瑞希は真っ赤になって身を起こそうとするが、寝ている明久を起こすのもためられて途方に暮れる。

「はは。ま、いいさ。明久が幸せそうなのは癪だが、姫路の幸せタイムをぶち壊すほど無粋じゃないつもりだ」

そう言って、自分の上着とネクタイを拾って担ぐ。

「ま、ほどほどにな」

「ひゃ、ひゃい!」

軽く笑って立ち去る雄二を見送ってから、瑞希は昼休みの終わる五分前まで、暖かい時間を過ごした。

放課後。

授業もHRも終わったFクラス。

リトルゴッデス

小女神が陣頭指揮を執る掃除タイムも終わり、めいめいが帰り支度をする……。ように見せかけ、ほとんどの人間がひばりの動向を気にかけていた。

「じゃ、アキくん。あたしちょっと用事があるから……」

ひばりは荷物を手にして明久に話しかける。

「あ、うん。……もしかして手紙の?」

思わず訊ねた明久に、ひばりは苦笑いしながらうなずく。

「だいじょうぶ?」

気遣わしげに聞いてくる明久。

「大丈夫。ここは文月で、長月じゃないんだし。悪いけど、夕飯の買い物頼めるかな？」

ひばりは、明久を安心させようと笑う。

そして、彼に買い物を頼んでメモを渡すと、

「じゃあ、また明日ねっ」

と、クラスメイト達に挨拶をして教室を出ていった。

ひばりを見送った瑞希は、心配そうな顔で明久に近づく。

「ひばりちゃん、大丈夫でしょうか？」

「……うん」

明久はそんな返事しかできなかった。

「明久、姫路」

不意に声をかけられ、振り向くと、まじめな顔をした雄二や、美波とクリス。そして秀吉と康太、俊夫、アキの七人が二人を見ている。

「二人とも、教えてくれないか？ 支倉になにがあったか」

「そっ、それは……」

皆のまじめな顔に、瑞希は口を開こうとして、やはりうつむいてしまう。

対して明久は、何か考えていたようだが、決意を秘めた表情で顔を上げた。

「……うん、わかった」

「……あ、明久君、でも！」

明久の言葉に驚く瑞希。だが、彼の決意は変わらない。

「やっぱり、みんなには知っておいてもらった方が良いと思うんだ。たしかにここは長月中じゃあないけど、根本くんみたいな人もいるしね。いざとなったらみんなでひばりの力になってあげられるだろうし。ひばりには、ぼくから言っておくから安心して」

そう言って明久は笑う。

「わかった。おまえの決意は無駄にしないさ。ここで話すのもなん

だろうから、隣の空き教室へでも行くか」

そう言う雄二を先頭にして、一同は教室を後にした。

放課後の校舎裏は、人の姿もなく、さみしい雰囲気を出していた。そんな中で、ひばりは一人、ぽつねんと立っていた。

相手はまだいないようだ。

放課後、という指定以外は無かったはず。

ならば、遅れているのだろうか。

30分、一時間と時間が経つ。

一時間と30分がたった頃、不意にひばりの肩が叩かれた。

「ごめんなさい、先生の言いつけで書類整理の手伝いをしていたら、遅くなっちゃって……」

可愛らしいクラスメイト男子と同じ顔の少女がそこにいた。

「木下君の……お姉さん」

「え、ええ。こんなところに呼び出してしまったって……」

ひばりの顔を見た優子は、最後まで言えなかった。

振り向いた彼女の双眸からは、とめどなく涙が溢れていたからだ。そして、優子の顔を見た瞬間、感情の爆発が一気に始まり、もはや止められないほど涙が溢れた。

「ふ、ぐっ、う、くずっ、うつ、ひっく、う、あ、ああ、うあああ」

目の前で本格的に泣き出したひばりに、優子は慌てふためく。

「え?! なにっ?! なんで泣くの? と、とにかく落ち着いて」

少し経った校舎裏。ひばりと優子は校舎に寄り添うように座り込んでいた。

「……落ち着いた?」

「……うん」

頃合いを見計らって訊ねる優子に対して、体育座りで顔を伏せた

ひばりは弱々しく答えた。

そして沈黙が始まる。

どの位そうしていただろうか？

不意にひばりが口を開いた。

「ごめんね、びつくりさせちゃって……」

「それはいいわよ。でも、どうしたの？」

「……昔ね、中学の頃。同じような内容のラブレターをもらったんだ……」

三階の空き教室。明久たち九人はそこに集まっていた。

「中学の頃なんだけどね、ひばりはちよくちよくラブレターを貰っていたらしいんだ」

明久のそんな言葉で話は始まった。

明るくて快活、小柄ながらも、周りを引っ張る行動力。

特に成績が悪いわけでもなく、誰にでも公平に世話を焼く。

それでいて、可愛い容姿。

本人は気付いてはいないが、人気が出ないはずはなかった。

ラブレターもだが、告白されるケースも少なくなかった。

彼女はその一つ一つに、真摯に対応し、丁重に断っていた。

その日、彼女は一人の男子に告白された。後で聞いた話だが、一

つ上の学年で、モテていた先輩だったらしい。

ひばりは、いつものように丁重に断ったが、その彼は断られるとは思っていなかったようで、しつこく食い下がった。

結局、断り続けるひばりに、男は諦めた。

ここで終われば、問題はなかったのだろう。

だが、そうはならなかった。

数日後、ひばりのげた箱に、差出人不明のラブレターらしきものが入っていた。

彼女は、何とも言えない、複雑な表情でそれを鞆にしまった。

中身は『会って話したいことがあります。放課後、校舎裏で待っています』と書かれた手紙が一枚。

ひばりは、なにやら罪悪感を感じたような顔で、待ち合わせ場所に向かった。

相手は、まだ来ていないようだった。

ひばりは思案気な顔をしながら相手を待つことにした。

30分……一時間……二時間……。

相手への申し訳なさも手伝って、ひばりは待ち続けた。

校舎から人の気配が消え、周囲が薄暗くなってなお待ち続けた。

結局、見回りをしていた教師に見つかり、心配して迎えにきた明久と帰る頃には夜の帳が降りてきた。

相手は現れなかった。

翌日になって、彼女は、その理由を思い知らされる。

掲示板に張り出されている写真。

少し暗めの校舎裏でたたずむ女の子。

その顔には不安が張り付いている。

それは、紛れもなく、昨日校舎裏で待ち続けた己の姿。

そして、写真を彩る、中傷の数々。

『かん違い幼女、待ちぼうけの図（笑）』

『一晚三万円でお』

『自意識過剰しやうがくせー』

『乳にしか栄養いつてない↓バー力』

『チビ巨乳小。生はオタとでもネろ』

e t c . e t c .

それだけでなく、自分と談笑する明久や瑞希の写真まで張り出さ

れている。

『バカと少女のカップル』

『ボクはロリコンです』

『凸凹巨乳コンビ乙！』

『お互い吸い合ってデカくしました！』

それを見たひばりは、自分の意識を閉じた。

話の内容に唾然となる優子。

「どうも気絶したみたいで、目を覚ましたら保健室で寝かされてた。アキくんやみっちゃん、クラスみんなが心配そうにしてたっけ。

もう申し訳ないやらなんやらで、泣き出しちゃって……、泣きながら、アキくんとみっちゃんに謝ってたなあ」

言いながら顔を上げるひばり。空はすでに赤く染めあげられていた。

空き教室では、明久の話を聞いていた一同が暗い顔をしていた。

「（なるほどねい、あの子が時折見せる、あの顔の理由のひとつつてそこかねい）」

「（なんだ、気付いていたのかクリス）」

「（そりゃあね、あんな表情する子なんて滅多に見ないしねい）」

「（ああ。だが……）」

「（まだ、ほかに理由はありそうだねい）」

クリスの言葉に、軽く頷く雄二。

明久の話はまだ続くようだった。

「幸運だったのは、朝一で見つけられてすぐさま撤去できたことと、見た人の大半が、ひばりの味方をしてくれたことかな。おかげで、

犯人はすぐ見つかったよ」

ひばりの独白はつづく。

「アキくんやクラスのみんながね、犯人探しまでしてくれて……でも」

ひばりの顔はまだ泣いているようにも見えた。

明久は、そのときのことを思い出したのか、彼には珍しく厳しい表情だ。

「犯人は、例の先輩と、その取り巻き連中だったんだ」
拳を握りしめる明久。

「名のりで、あやまってほしいって頼んだけどだめだった。それどころか、あのくそ野郎」

『珍しい女がいるって言うからよ。味見しようと思っただけさ。お前だって女くいてえだろーがよ？』

「そう言ったらしいよ？ その先輩」

ひばりの声には、なんの感情もこもっていなかった。

「それがきっかけで、乱闘騒ぎになって、その場にいた全員が先生たちに取り押さえられたって……」

優子はもうひばりを見ていらなかった。

「あはは、あたしなんか珍しい体型してるからね、みんなきつと、物珍しく感じるんだろーね。きつと、みんなそんな理由だったのかも」

悲しさを通り過ぎて、虚ろな表情を浮かべるひばり。

優子は思わず彼女を抱きしめる。

「き、木下君のお姉さん？」

「……優子でいいわよ」

照れくさそうな言葉に、ひばりが苦笑いをする。

「ありがとう。優しいんだね？ 優子ちゃんは」

そうつぶやいたひばりは、また少し涙があふれてきて、少し泣いた。

「乱闘騒ぎのおかげで、ボクとクラスの連中は一週間の停学になっちゃって、かえってひばりに心配かけちゃったっけ」

明久は申し訳なさそうにうなだれる。

「（というよりは……）」

「（ああ、恐らく支倉のほうも明久に迷惑をかけたと思ってるだろうな……）」

「（これは……難しいねい……）」

「（何とかしてやりたくはあるが……）」

雄二とクリスの小声でのやりとりに気付く者はおらず。

そのまま明久の話は終わった。

「これが、こんかい、ひばりが元気がない理由だともう。みんなこのことは……」

「ああ、誰にも言わない。そうだなお前ら」

雄二は廊下に声をかける。すると、須川をはじめとするFクラスの面々が顔をのぞかせた。

「み、みんな聞いちゃったの？」

「すまんな吉井。だが、俺たちだって支倉のことが心配なんだ」

「……わかったよ。でも、ないしょにしてね」

明久は困り顔になりながらも苦笑した。

ひばりは、自分を抱きしめる優子の背中を叩く。

「優子ちゃん、ありがと。もう落ち着いたから大丈夫だよ」
そう言って離れようとするが、優子はなかなか離れない。

「優子ちゃん？ どうしたの？ まさか、泣いてるの？」

優子が小刻みに震えてることに気付くひばり。

優子はビクリとなってから、顔を見られないように素早く離れる。
「ごめんね？ 突然変な話しちゃって……でも、聞いてくれてありがとう。なんだか、楽になっちゃった」

言いながら笑ってみせるひばり。

「別にいいわよ。支倉さん」

「ひばりで良いよ？ 優子ちゃん」

「え？」

優子は面食らってひばりを見る。

そこには、自分を見上げるひばりがいた。

「……う、あ、ああ、うん」

自分でも妙だと思ふ返事をしてしまう優子。
そんな彼女を笑顔で見つめるひばり。

耐えきれなくなって、優子が顔を逸らした。

「そ、それで、アタシの用なんだけど……」

取り繕うように言う優子に、ひばりも、あ。となる。

「そう言えばそうだね、何の用だったの？」

不思議そうに訊ねるひばり。

優子はそれに答えずにひばりの前に立って、まっすぐ顔を見た。

「優子ちゃん？」

声をかけるひばりに構わず、頭を下げる。

「ご免なさい」

簡潔な一言。

ひばりはなんのことやら得心がいかず、目を白黒させた。

「え？ なに？ どうしたの？ 優子ちゃん」

「……秀吉から、あなたのお母様のこと、伺ったわ
頭を下けたまま言う優子。」

それを聞いてひばりは合点がいった。

「うつん、知らなかったことだし、あたしも怒鳴っちゃったしね。
もういいよ」

困ったように笑うひばり。

「でも！ アタシ、知らないとは言え、あんなことを……」

顔を上げて言い募る優子の口を、ひばりの人差し指が押さえた。

「もういいよ。優子ちゃんは、真摯に謝ってくれた。それで、あ
たしは十分だよ」

「でも！」

それでも気が済まない優子は声を上げる。

「じゃあ、こうしよう」

「え？」

「罰として、今度『ラ・ペディス』のクレープ奢ってよ
イタズラっぽく笑うひばり。」

「えええっ?!」

女友達との軽い約束のように言われて戸惑う優子。

「む。まだ足りないかな？ じゃあ、あたしとアキくん勉強教
えてくれない？」

「え、いや、その……」

邪気のない笑顔を向けられた優子はしどろもどろとなり、それを
振り払うように頭を振って、やれやれと苦笑いした。

「わかったわよ。クレープと勉強ね？ ひばり」

そう言った優子に、ひばりは、輝くような笑顔を向ける。

「うん！ お願いね」

その顔には、もう陰りは見えなかった。

番外編 4 ドキドキクラブター？ あるいは暴徒共のこと。後編（後書き）

いかがでしたでしょうか？

シリアスな部分が多くなっていて楽しんでいただけたか、ドキドキです。

今回から、ひばりの装備として、烏丸印のハリセン【小烏丸】が追加されました！

これは、クロさん作『バカとテストと召喚獣』文月学園のカラスの主人公、烏丸大貴こと、ヒロさんに戴きました。

クロさん、ヒロさん、ありがとう！

ヒロさんの持つハリセンとお揃いとのことで、ひばりも早速振り回しております♪

さて、次の番外編が終了しますと、ようやく清涼祭編に突入します。

みなさん、これからも、『バカと雲雀と召喚獣』の応援をよろしくお願いしますね♪

番外編 5 オリエンテーリング！ あるいは腕輪のこと。 前編（前書き）

番外編5『オリエンテーリング！ あるいは腕輪のこと。 前編』
を更新しました♪

よろしく願いますね♪

「『文月学園お宝争奪オリエンテーリング大会』？」

張り出されたポスターを見て、ひばりがつぶやく。

「豪華賞品が多数隠されてるらしいよ？」

明久はそう言いながら賞品リストを眺めていた。

「ゲーム大会みたいな感じなのかな？」

首を傾げるひばり。その頭に手が乗せられ、ひばりは首をすくめた。

「宝さがしを利用して、学校の設備などの場所を覚えさせようって魂胆だろ」

Fクラス代表の坂本雄二だ。

そのままワシワシとひばりを撫でる。

「……坂本君、朝っぱらから人の頭で遊ばないでよっ！」

言うが早いのか、手の中に忽然と表れたハリセンを振るうひばり。

「おっと、危ない」

それをスウエーバツクの要領で避けてみせる雄二。

「はは、まだまだ甘いみたいだな……？！」

ひばりをからかうように笑っていた雄二は、突然、背後から吹き付けた殺気に硬直する。

「……雄二、浮気は許さない」

Aクラス代表の霧島翔子。

雄二の妻である。

「そんな事実は無えっ！」

叫ぶ雄二の顔面に、美麗な五指が食い込む。

「……握力には自信がある」

「ぐおおおっつっ？！ 砕けるっ？！ 頭蓋がつ？！ 砕けっ？！」

悶絶する雄二。突然のことに呆気にとられていたひばりだが、雄二の悲鳴に我へと返る。

「き、霧島さんっ?! ダメだよっ! 坂本君死んじゃうよっ?!」

「……大丈夫。雄二は丈夫だから」
「スパアアンツ!!」

翔子の頭に炸裂するハリセン。

衝撃で雄二を放してしまった翔子は、ひばりに向き直る。

「……痛い」

「丈夫とかそういう問題じゃないでしょっ!!」

声を上げるひばりにも翔子は動じない。

「……夫を折檻するのは妻の義務」

「そんな義務無いよっ!? まずキッチンと話し合っべきだよ? 霧島さん」

「……あなた、雄二のなに?」

ひばりは翔子を落ち着けようとするが、翔子はひばりをにらむように見つめる。

その刃物のような気配に動ずることなく、ひばりは胸を張った。

「あたしは支倉ひばり。坂本君のクラスメートです!」

「……なら、口を挟まないで欲しい。これは、夫婦間の問題」

「たとえ夫婦であろうとも、目に余るようなら仲裁に入ります!」

「……あなたには関係ない」

「関係あるよ! 坂本君は友達だもの!」

にらみ合うひばりと翔子。

「う、つゝ。頭蓋骨がきしむ音が聞こえたぞ? 翔子、お前いい加減に……って、何でこんなことになってやがるっ?!」

復帰した雄二の目の前に広がるのは、自分には無縁のはずの修羅場つばい展開。

「あ、雄二、お帰り。今日は川まで行かなかったんだね?」

「おい、明久。一体どうしてこんなことになってる? こっこののはお前の領分のはずだろーが」

雄二は状況を把握しきれず明久に訊ねた。

「あはは、雄二はおかしなことをいうね? ぼくがいつこんなおい

しいめにあつたっていうのさ」

「……お前のそういうところは断罪されてもおかしくないと思うがな。おい、支倉、翔子、いいかげんにしろ」

そう言いながら、二人の間に立つ雄二。そのまま彼女らの頭に手を載せる。

「ああう」

「……」

そして軽く撫でてやると、二人から怒気が雲散無消した。

「ったく。おい翔子。俺と支倉は浮気を勘ぐられるような仲じゃねえ。それから支倉、こいつのはじゃれてるようなもんだ。そんなに目くじら立てるな」

そう言つて仲裁する雄二。

二人はしばらく撫でられていたが、不意にひばりが口を開く。

「……坂本君つて、撫でるのうまいよね……」

「……雄二のナデナデは世界一」

「なんの話だ、なんの」

二人の会話に、雄二は苦笑いする。

だが、翔子は少し表情を曇らせた。

「……でも、最近、雄二は撫でてくれなくなった」

すこし寂しそうな声。

「そうなの？ 坂本君」

ひばりは、頭ひとつ半、上にある雄二の顔を見上げる、

「ん？ ん、まあ、そうだな。そういうのは小学生くらいまでだろ」

言い訳じみたことを言いながら、目をそらす雄二。

それを見たひばりの視線が、じっとしたモノになる。

「あたし、ほとんど毎日撫でられてるんだけど……」

「……うらやましい」

翔子にも恨めしげに見られ、雄二は逃げ場を無くす。

「俺にどうしろと……」

「撫でてあげればいいじゃない。霧島さんを」

途方に暮れたような声を出す雄二に対して、ひばりは事も無げに言い放つ。

「しかし、俺はともかく翔子は高校生……」

「アタシモコウコウセイダヨ？ サカモトクン？」

「……すまん、支倉」

雄二の失言に、ひばりが珍しく、まがまがしくドス黒いオーラを放つ。気圧された雄二は、二人から手を放して後じさった。

「霧島さんもそれで良い？」

「……わかった」

素直にうなづく翔子。

「うん」 よかったね？ 霧島さん」 でも、いきなり折檻はやっぱりダメだよ？」

「……でも、世の中には誘惑も多いし、雄二は素敵だから、他の子が放っておくとは思えない」

ひばりの注意に反論する翔子。

「うーん。確かに浮気はダメだね。そこは同意できるよ？ でも、証拠も無しに折檻したらダメだよ。もっと坂本君を信じてあげななきゃ」

「……」

ひばりの言葉に、悩む素振りを見せる翔子。そんな彼女に、ひばりは顔を近づけた。

「（大丈夫、きっと坂本君は霧島さんの事が好きだよ。それでも心配なら、浮気できなくなるくらい惚れさせちゃえばいいんだよ。あたし、応援するよ？）」

そう言ってウインクするひばり。しかし、翔子は不安そうにしている。

「（……でも）」

「（自信ない？）」

「（……うん）」

力なく答える翔子に、ひばりは笑ってみせる。

「（大丈夫、大丈夫。霧島さんの、好きって言う気持ちを、言葉と行動に乗せて坂本君に届ければいいんだよ）」

「……気持ちを、言葉と行動に……」

「うん、がんばって」

ひばりに言われたことを、口に出して反芻する翔子。

それに対して、ひばりは応援しながら、笑顔でうなずいた。

翔子はそれに勇気をもらったように顔を上げる。

「……雄二」

まっすぐ彼を見つめる翔子。

「な、なんだ？ 翔子」

雄二は少し警戒したように応じる。

と、虚を突くように翔子の両手が首にまわされ、驚く間もなく顔が近づき、雄二の頬に柔らかいものが押しつけられた。

ほんの数秒もたたずに、翔子の顔が離れる。

雄二の視界一杯に、ほんの少し頬を赤らめ、はにかむように笑った翔子の顔が映った。そのくちびるが、生々しく動く。

「……雄二、好き……」

それだけ言って離れる翔子。

明久をはじめとする、少なくともギャラリーは呆気にとられるばかりだ。

「やったね、霧島さん」

「……がんばった」

心なしか照れているような翔子は、とてもうれしそうだ。

「うん、これからもがんばってね？」

ひばりも満足げにエールを送る。

「……うん、がんばる。支倉はとてもいい人。私のことは翔子と呼んで欲しい」

「いいの？ じゃあ、あたしのことも、ひばりって呼んで欲しいな」

「……わかった、ひばり。いつかお礼をする」

こうして、翔子とひばりは親交を深めた。
このやりとりをしている間、雄二はフリーズしたまま還ってこなかった。

「でも、賞品が豪華だよね」

商品のリストを見てひばりがつぶやく。

「学食のデザート券一年分、新作ゲーム引換券、CD券などなど、大したもんだ。シークレットアイテムなんてあるぞ？」

余りにフリーズが長かった雄二は、ひばりの【小烏丸】の一撃で復帰させられていた。

「ルールは、三人ひと組でチームとなり、なぞをといて座標をわりだすと、引換券入りのカプセルがみつかるらしいね」

明久もおもしろそうに眺めている。

「……私はこれが欲しい」

そう言って翔子は指さす。

「お前がこんなものに興味を示すなんざ珍しいこともあるもんだ。なにに、『如月グランドパークプレオープンチケット』か。誰と行くんだ？」

「……もちろん、雄二と」

物珍しげに訊ねた雄二に即答する翔子。

それだけで、雄二はダメージを受けた。

「ぐうふおあつ?!」

ボディブローを受けたかのように、体を折り曲げる雄二。

どこにダメージを受ける要素があったのか全くわからない。

と、そこを金髪の少女が通りがかる。

「おやおやん？　そこにいるのはひばりにアッキーかなん？　それにもっちゃんとキリキリかねい」

Fクラスのクラスメイト、クリスティーナこと、クリスだ。

「……キリキリ？」

今まで呼ばれたことのない呼び方をされて、翔子はきよとな
る。

「おやおやん？ 気に入らなかつたかなん？ んじゃ、きりっち、
きりりん、しょたん、しょしょこ、なんてどうかなん？」

クリスはニコニコ笑いながら、いくつも呼び方を揚げていく。

翔子はそれらをひとつひとつ復唱し、語感を確かめているようだ。

「……おもしろい、好きに呼んで構わない」

「おー、お墨付きがたよん」 出なくても使うけどねい」

ヘラヘラ笑うクリス。

しかし、翔子は問題ないという。

「……ウェストロードは面白い人。よければ今度相談に乗ってほし
い」

「相談？ 別に構わないよん」 なんの相談かなん？」

「……雄二と私の子供の名前」

「「ぶふうおお？！」」

近くで聞いていた明久とひばりが同時に吹く。

「まて、翔子。そんな心配は今もこの先も必要ないぞー！」

雄二も痛痒を押さえるように額に手を当てながら突っ込む。

しかし、それを見た翔子は、形の良い眉をしかめて、ため息を付
く。

「……我が家の家長はのんびりやさん」

「そうだねい。早くから決めておいても罰は当たらないよん」 十
ヶ月なんてあつという間だしねい」

「雄二、男なんだから責任とらないと……」

「坂本君、認知してあげなよ、霧島さんが可哀想だよ？」

「いや、まてまてまて？ 何で俺が責められる風なんだ？ そもそ
も、そんな覚えは無えし、そういう予定も無え！！」

四人から責め立てられ雄二は頭を抱える。

「おまえらー、早く教室へ入れよ。もうすぐオリエンティングの
説明があるからな」

通りがかった西村教諭注意される五人。

それぞれ返事をしながら移動する。

「くそつ、鉄人に助けられる日が来るとは思わなかったぜ。おい、翔子、さっきの件は後で二人でじっくり話し合うからな」

「……わかった」

雄二に返事をした翔子の頬は、薄紅色に染まっていた。

教室にはいると、大半の人間はオリエンテーリングの話をしていた。見れば、教室の黒板にもポスターが貼られている。

「おはよう姫路さん、美波」

「おはよ」 みっちゃんに美波ちゃん」

明久とひばりは、瑞希と美波の姿を認めて挨拶した。

「あ」 おはようございます明久君」 ひばりちゃん」

「アキ、ひばり、おはよ」

瑞希と美波も挨拶を返す。

そのまま瑞希は、嬉しそうに二人に近づいた。

「？ みっちゃん、なんだか嬉しそうだね？」

「はい？ ああ、なんだか楽しそうな催し物のようなので、楽しみてつい……」

言われて初めて、自分が子供のようににはしゃいでいることに気づいた瑞希は、赤くなった頬を、両手で押さえながら顔を逸らした。

そこへ美波もやってくる。

「瑞希ったら、興奮しっ放しなのよ。楽しい思い出になりそうだって」

美波が笑いながら言うと、瑞希はさらに赤くなった。

「み、美波ちゃん、言わないでください」。は、恥ずかしいですよ」

少し涙目になって抗議する瑞希。その様子に、明久とひばりも軽く笑みをこぼす。

「大丈夫だよ、みつちゃん。あたしも楽しみだし。良い思い出になると良いね」

「あ、はい」

ひばりの言葉に満面の笑みで応える瑞希。

明久は、一瞬それに目を奪われた。

「おお？ こつちでもおもしろイベント開催中かなん？」

そこへ、横合いからのぞき込むようにクリスが現れる。

「あ、おはようございます。クリスちゃん」

「おはよークリス」

クリスに挨拶する瑞希と美波。クリスも応えるように笑いながら手を挙げる。

「そつえば、一緒に教室まで着たのになにしていたの？」

「もっちゃんで遊んでたー」

不思議そうに訊ねたひばりに、クリスは胸を張って応えた。

「あ、あはは」

苦笑いする瑞希。見れば向こうでは、雄二が卓袱台に突っ伏していた。

「何をやっているんだか……」

その惨状を見て、ひばりはため息を吐いた。

「よーし、お前等、席に着けー」

程なくして表れた西村教諭に促され、席に着くFクラスの面々。

手早く出欠の点呼をとると黒板に張り紙を張り出した。

「これがチーム分けだ。きちんと確認しておけよ？ この後は男女ともに体操着に着替える。そうしたら再度、教室に集合だ」

西村教諭の言葉にそれぞれ返事をするFクラスの面々。解散の合

図とともにチーム分けを確認する。

「えーつと、ぼくは雄二と秀吉のチームだね。よろしく」

「うーん、みつちゃんは土屋君と美波ちゃんのチームかー。あたし

はつと須川君と新田君だね。おーい須川く〜ん」

「おねーさんは、としぴーにあきぴょんだねい。よろしく頼むよん」

それぞれチームメイトと集まって相談する。

「確認が終わったなら更衣室に移動しろ！ 着替え終わったら教室に戻るんだぞ？ それから坂本！ 騒ぎは起こすなよ！」

西村教諭からの指示に動き出すFクラス生徒たち。

程なくして着替え終わった者から戻ってきた。

「よし、全員戻ったな。これが宝の在処を示す『問題集』だ。がんばって解くように」

「……は？」「……」

異口同音に聞き返すクラスメイトたち。

「この『問題集』の答えが宝の座標になっている。もちろん正解でなければ、間違った座標になるということだ。しっかり解かないと、宝は手に入らんぞ？」

『『『『えええええーっつっ？！？！？！』『』『』』』』

西村教諭の説明を聞いたFクラスは、悲鳴を上げた。

番外編 5 オリエンテーリング！あるいは腕輪のこと。 前編（後書き）

いかがだったでしょうか？

オリエンテーリング開催直前くらいまでですが、ひばりと翔子が仲良くなりました。

後編はオリエンテーリングの模様をお送りしますね？

それでは次回もよろしく願いしますね♪

番外編 6 オリエンテーリング！あるいは腕輪のこと。 後編（前書き）

お疲れさまです♪

番外編 6 を更新しました。

読んでくださる方が、楽しんでいただければ幸いです。

「宝を示す謎ってこういうことだったんだね……」

純粹に謎解きだと思っていたひばりは軽く肩を落とす。

「まあ、勉強至上の学校だからな。こんなもんだろ」

予想していたらしい雄二は軽く肩をすくめるだけだ。

「問題をとかなきゃ宝が手にはいらんじゃ、雄二なんて戦力にならないじゃないかあつ！」

思わぬ事態に、明久は雄二を指さして叫ぶ。

雄二のこめかみに、青い十字が浮かんだ。

「その言葉、そっくりお前に返してやんよ！ 明久！」

「ワシも戦力になれなそうじゃのう。すまぬ」

やりとりを聞いていた秀吉は明久に頭を下げる。

「あ……ひ、秀吉はいいんだよ？ 秀吉は、ぼくに元気をくれる大事な存在なんだからっ！」

そんな秀吉に、明久は満面の笑顔で答える。

「ウチたちは瑞希がいるから、だいぶ有利ね」

「……………（コクコク）」

そう言ってチームメイトに振り向く美波。

康太も肯定するようにうなづく。

「あ、はい。がんばりますっ」

瑞希は頼られたのが嬉しいのか笑顔だ。

「んむう。おねーさんのチームはわりとバランスは悪くはないかなん？」

「そうですね、私とクリスさんの得意不得意は似通っていますが、前田さんがフォローできますから」

「おう。任せろ」

クリスとアキの二人は、自チームの戦力確認をしている。

「えっと、須川君と新田君は得意科目と不得意科目は？」

これまであまり接点が無く、ほとんど話したことのない相手にも積極的なひばり。

その問いに、須川は軽く思案しながら答える。

「おれの得意なのは、数学だ。調子が良ければ、400点近く採れるが、他はまるでダメだな。せいぜいが30から60点でとこか」

「オレは生物が特に得意ですよ。200点近くは固いですかね？」
他は須川と似たようなもんです」

新田も須川に続くように答える。

「そっか、じゃあ数学と生物を中心にやっていこう！」

方針を決めたひばりは、握った拳を突き上げ、体を一杯に伸ばす。

「おう！」

「……」

須川は力強く返事をするが、新田は惚けたようにひばりを見つめている。

「どうした？ 新田」

その様子に、須川は訝しげに訊ねる。

「……ちっちゃくて、可愛い……」

「新田、お前もか……」

「あたし、ちっちゃくないよっ!!」

ぼろりと飛び出た新田の言葉に頭を抱える須川と、全力否定するひばり。

「目を覚ませ！ 新田！ お前までもが《LO教》に入っちゃった
ら、おれはどうすればいいんだ！」

新田に詰め寄る須川。しかし、その言葉に新田の顔がゆがむ。

「オレを、あんなの（横田）と一緒にするんじゃないっ！」

言葉とともに繰り出された拳が、須川の腹に食い込む。

「ぐうおおお……」

突然のことに悶絶する須川。

「オレはちっちゃいものが好きただけだっ！」

堂々と胸を張る新田。そして、その発言に反応するひばり。

「あたし、ちっちゃくないよっ?!」

「か、かわんねーだろーが!」

何とか持ち直した須川が、声をあげる。

「ひどいよ! 須川君!」

ひばりが涙目になる。

「いや、支倉に言つた訳じゃないからな?」

あわててなだめる須川。

もはやグダグダである。

「あゝ、おまえら」

突然声をかけられ、身を震わせる三人。

西村教諭の声だ。

おそろおそろ振り返ると、あきれた様子の西村が三人を見ていた。

「もう、お前等しか残つとらんぞ」

「「「えっ?!」「」」

見れば教室には、須川、新田、ひばりの三人しか残っていない。

「「「で、出遅れたっつ?!」「」」

「お前のせいだぞっ?! 新田っ!」

「なに言ってるっ須川! お前がぐだぐだやってるからだろ!」

擦り付け合いを始める二人。

その間でひばりが肩を震わせていることにも気付かない。

ギャー

ギャー

ギャー

騒ぎは収まらない。

次の瞬間、太い紐が引きちぎれる音がしたかと思うと、二人の頭がブレた。

スパパアアンツ！！

後から音が響く。

ひばりが目にも止まらぬ速度で【小烏丸】を振るったせいだ。脳を揺らされ、その場に崩れ落ちる二人。

「いい加減にしなさいっ！！ だいたい二人とも……」

そこから始まる、ひばりの説教。

しかし、二人の耳には届いていなかった。

目を覚ますと、天井が目に入った。

須川は顔をしかめながら身を起こす。

「……つと、なんだっけ？」

「あ、起きた」

ぼんやりと声のした方を見ると、ちゃぶ台で問題集に取り組んでいる小柄な少女が目に入った。

「だいじょうぶ？」

不意にのぞき込んでくる少女。

「……うあ？！ は、支倉か」

思わぬ距離まで顔を近づけられてのけぞる須川。

「ああ、だ、大丈夫だ」

軽く頭を振って周りを見回す。いつものFクラスの教室に、自分とひばり、そして新田の姿をとらえる。

「あー、起きましたか？ 須川」

問題集に取り組んでいた新田が、須川を一瞥する。

「スマン、どの位経ってるんだ？」

にがりきつて訊ねる須川。

「……一時間くらい経ってますよ。まあ、オレも目を覚ましたのは10分くらい前です」

「……スマン、支倉」

正座し、両手を畳につけながら頭を下げる須川。

「ううん、二人が気絶したのは、あたしのせいだしね、こっちこそ、ごめんね？ やりすぎちゃって……」

「いや……そもそも、おれと新田が……」

謝り合う二人。

そこで新田が軽く息を吐いた。

「ふたりともその辺にしときましょう。三人とも悪かったんですから。それよりオリエンテーリングです。完全に出遅れましたが、一つくらいは確保したいでしょう？」

新田はそう言って苦笑いする。

「そうだね」

「はあ、わかったよ」

ひばりと須川も苦笑して席に着く。

「よし、今からおれが、徹底的に数学を解く。他の問題を、二人で解いてくれ」

「わかったよ、がんばろうね二人とも」

本格的に問題集に取り組むため、ちゃぶ台に向かう須川。

ひばりも追従するように自分の使っていたちゃぶ台に向かい、二人に笑顔を向ける。

「ああ……やっぱ可愛いなあ」

その笑顔に、新田がうつとりとなった。

「ど、どうだ？ 支倉、見つかったか？」

聞きながら須川は胸の動悸が止まらなかった。

「ううん、と。あ、あった！」

思い切り身体を伸ばそうとするひばり。

彼女を肩車した須川は、頭の上のマシュマロの柔らかさを強く感じながら、顔を両側から圧迫された。

須川の顔は真っ赤になり、腰のあたりをモジつかせている。

体育準備室の天井近くに設置された戸棚。

割り出した座標はそこを示していた。

すでにふたつの『ハズレ』を引いており、三度目の正直とばかりに勇んでやって来たわけだが、位置が高い。

おまけにいくつかの用具が邪魔で、須川はおるか、身長のある新田でも軽く覗くのがやっとだった。

そこでひばりが言い出したのが、軽い自分を男子二人のどちらかが肩車する方法だ。

正直揉めた。

軽く興奮し、鼻息が荒い新田にやらせるよりはと、須川が立候補し、にらみ合いになったが、ひばりの鶴の一声で須川に決まった。

さすがのひばりも興奮している新田に頼む気はしなかったらしい。改めて肩車してみても、須川は軽く後悔した。

それは、ひばりの行動だ。

異性に触れることに対して、全く頓着しないのだ。

自分を意識する男性など居ないとばかりに身体を密着させている。しかも、体格の関係で体操着越しとはいえ、ボリウムのある双丘が須川の頭に乗った。

ラッキーと思う部分もあるが、新田より自分を信頼してくれたひばりに対して申し訳ない気持ちもあった。

「ホラ、須川君！ あったよ」

上からのぞき込むように須川を見るひばり。

上下逆さまの笑顔が、体操着の山向こうから見えて、須川はドキリとする。

頭にかかる二つの水風船の圧力まで増してしまい。

もう、どんな顔をして良いかわからずにあわてて彼女をおろした。

「うわわっ？！ あわてなくても大丈夫だよ、須川君」

「わ、悪い、ちょっとトイレっ！」

言うのが早いか、準備室から飛び出す須川。

「あゝ、トイレか。中身が早く見たいのかと思っちゃった。ね？

新田君」

ひばりは少し恥ずかしそうに笑いながら新田を見るが、新田は訝しげに準備室入り口を見つめていた。

しばらくして戻ってきた須川を交え、賞品チケットの入ったカプセルを開けるひばり。

「あ！ 引換券だよ？！ ふたりとも！」

見れば、『如月グランドパーク プレオープンチケット引換券』と印刷された紙が出てきた。

「おお、グランドパークのチケットか。遊びに行つて良し、売りに出しても良しのお宝だな」

「オレら独り身には縁がないですけどね」

単純に喜ぶ須川にクギを刺す新田。言われた須川は肩を落とした。「解りきつてることをいちいち言うなよ新田。改めてへこむ……」

「あはは、でもそれならこの三人で行けばいいんじゃない？」

「へ？」

ひばりの言葉に間拔けな声を出す二人。

そんな二人を見て、首を傾げるひばり。

「どうしたの？ 二人とも。三人のチームに配られるんなら、三人分は確実だと思うよ？」

「いや、なんというか……」

「オレたちと三人で行つてくれるんですか？」

男子二人は半信半疑の様子でひばりに聞き返す。

「？ この三人でがんばつて手に入れたんだから、この三人で行くのが良いんじゃないかな？ あ！ 他に一緒に行きたい人がいた？

なら、あたしは遠慮するけど……」

「い、いや、そんな相手は居ないが……なあ」

曖昧に新田へと同意を求める須川。

「え？ ええまあなんと言いますか……」

振られても困るとばかりに言葉を濁す新田。

そんな二人の様子に、ひばりは首を傾げるばかりだ。

さんざん迷った須川は、意を決して口を開く。

「支倉は、その……吉井と行きたいんじゃないか？」

「アキくん？ うゝん。まあ、行きたくないこともないけど、このチケットは、あたしたち三人で見つけたものだし、優先するべきはこっちじゃないかな？」

まさに正論である。

須川は何とも言えない気分で新田の顔を見る。

彼もまた、複雑そうな顔をしていた。

と、そのとき。

「律子、あつたよ準備室」

「待ってよ真由美。あれ？ 開いてる……まさか！」

準備室の戸口に現れたのは、Bクラスの菊入、岩下、山本の三人だ。

「まずい！ はち合わせたぞ」

突然の鎮入者に須川が声をあげる。

「出入り口は一つ。逃がさないわよ？ おとなしく手に入れたお宝を渡しなさい」

「あ、長谷川先生丁度良いところに。召喚許可を願います」

通りがかった巡回中の長谷川教諭に山本が声をかける。

「わかりました。承認しましょう」

長谷川教諭の声とともに、数学のフィールドが形成される。

「……試験召喚サモン！」「……」

かけ声に答えて、三体の試験召喚獣が姿を顕した。

「やるよ！ みんな！」

「おう！ 数学なら任せておけ！」

「がんばりましょう！」

受けて立つ姿勢を見せるひばりたち三人。

三つの声が唱和される。

「『試獣召喚！』」^{サモン}

いつもの軽装備に倭刀を携えたひばりの召喚獣。その両隣にも召喚獣が顕れる。

右手には、大きな盾を持った黒衣を纏った新田の召喚獣が。

左手には、六尺棍をもった道着着込んだ須川の召喚獣が顕れた。

そして、表示された点数に、Bクラス勢が驚愕する。

「な、なんだ？！ あの棒を持った召喚獣の点数は！」

「わ、わたしの二倍だなんて……」

「ほかの二人は大したこと無いわ！ 周りを排除して全員で掛かるわよ」

須川の召喚獣の頭上には373の数字が表示されていた。

対して、ひばりは142、新田は58と表示されていた。

Bクラス勢は、岩下が187、菊入が156、山本が179である。

「須川君は岩下さんをお願い。新田君は菊入さんを押さえて防御に徹して」

そこまで言って、ひばりは召喚獣に倭刀を抜かせた。

「山本君は、あたしが相手をするよ！」

「おう！」

「了解！」

ひばりの指示に返事をした二人は、それぞれの相手に向かう。

菊入は、向かってくる新田の召喚獣に剣を振るった。

鋭い斬撃はしかし、大きな盾に阻まれる。

「くう！ その盾、邪魔よ！ 武器も無いくせに！」

「この盾こそが、オレの召喚獣の武器ですよ。邪魔だと思っなら崩してみればいい、この不破の城壁をね！」

言いながら盾を押し出すようにして菊入の召喚獣を突き飛ばす。

「く？！ ダメージなんてほとんど無いのに！」

悔しそうに歯噛みする菊入。

「攻撃力をほとんど犠牲にしていますからね。点数が低くてもこのく

らの防御性能はありますよ」

肩をすくめてみせる新田。

「さて、周りの戦いが終わるまでお付き合い願ひましょうか！」

叫ぶ新田の向こうでは、ひばりの召喚獣の剣閃がひらめいていた。

「フツ」

集中して斬撃を放つ。

鏑鳴りの音を残して振るわれる銀閃が、山本の召喚獣を斬り裂いていく。

「くそっ！」

悪態をついて召喚獣に武器を振るわせる山本。

しかし、ひばりの召喚獣は、持ち前のスピードを生かしてするりするりと避ける。

さらには、交差法で相手に一撃を入れていく。

「何で当たらないんだよっ？！」

苛つきと焦りから、召喚獣の動きが鈍る。

そのスキを、ひばりは見逃さなかった。

「！」

目にも止まらぬ三連撃。

三度の鏑鳴りとともに放たれたそれは、山本の召喚獣の首、胸、腹に吸い込まれる。

そして、ひばりの召喚獣が、山本の召喚獣に背を向け納刀した。

最後の鏑鳴りとともに山本の召喚獣は血を吹き出して崩れ落ち、そのまま消えた。

一方、須川と岩下の戦いは、須川が一方的に攻め立てていた。

「きゃっ！」

流麗に振るわれる棍が、岩下の召喚獣の攻撃を受け流し、反対に身体のおちらこちらに打ち込まれる。

切り込んでも流され打ち据えられ、防御しようにも変幻自在の棍の動きに付いて行くことすらできない。

なにをしてもだめだとあきらめた瞬間。

クルクルと回転する棍が、まっすぐ岩下の召喚獣の水月に突き込まれた。

「え？」

岩下自身反応できないほどの速度で突き飛ばされた岩下の召喚獣は地に着くこと無く掻き消えた。

「や、山本君？ 律子？」

あつと言う間にチームメイト二人を倒された菊入は、呆気に穫られる。

「スキあり！」

いつさいの迷い無く、新田は、己の召喚獣を突進させた。

盾の先端を突き出すように菊入の召喚獣にぶつかっていく。

「あつ？」

あわてて召喚獣に防御させようとした菊入だったが、間に合わずに盾は召喚獣の胸元あたりに突き込まれた。

しかし、減った点数は20点ほどで、菊入は安堵の息を付く。

「まだですっ……！」

新田が叫んだ瞬間、重い炸裂音と共に、衝撃が菊入の召喚獣を貫いた。

大きく痙攣した召喚獣が二度、三度とふるえ、その身から力が抜けると、グツタリとなる。

見れば、その背中からは、巨大な杭の先端が顔を覗かせていた。

菊入の召喚獣は胸を貫かれたまま消えてしまった。

「わ、わたしの召喚獣が……ハッ？！」

うなだれるBクラスの三人の背後に、鋼鉄の気配が表れる。

「戦死者は補習……！」

「ひい！ て、鉄人」

「補習は嫌あああつ！」

「り、律子……」

三人を軽々と抱え、鉄人西村は補習室へと去っていった。

「……こんなイベントでも、補習を受けさせられるんだね……」

「みたいだな。途中で降伏勧告してやれば良かったか」

「南無」

ともあれ、ひばりたち三人は危機を脱した。

「それにしても、須川君も新田君もスゴいね」 須川君、何であるに動けたの？」

ひばりが無邪気に聞いてくる。

「ああ、Aクラス戦の時に前田が言っていたのを思い出してな」

「へえ」。新田君の最後のアレは？」

「あれはパイルバンカーという武器ですよ。まあ、杭打ち機みたいなもんですね」

ひばりに関心を持って貰えてうれしいのか、新田も笑顔で解説する。

「一回の召喚に一回しか使えない上に、射程も短く、効果範囲も小さいですが、点数に関係なく、大ダメージを与えられます。まあ、ロマン武器ですね」

「それより支倉だ。すくなくめらかに召喚獣を動かしていたじゃないか！」

須川は、ひばりの召喚獣の動きが気になったらしく、新田を押し退けるように訊ねた。

「あー、あれは操作経験の差かな？ Bクラス戦の時はいっぱい戦ったし。あと、許可をもらってアキくんの雑用手伝ってることがあるから……」

ひばりは照れたように笑う。

だが、須川と新田は、ひばりの言葉に首を傾げた。

「吉井の手伝いですか？ でも、支倉さんは観察処分者じゃないですよ？ どうやって手伝うんです？」

新田が不思議そうに訊ねる。

それに対して、ひばりは笑って答えた。

「物理干涉がないからね、物を持つたりは出来ないけど、アキくんの召喚獣は触れるでしょ？ それを利用して、支えてあげたり、後

ろから押してあげたりするんだよ」

結構難しいんだよ？　と言いながら、準備室の戸口へ向かう。

「一旦、教室に戻ろうよ。時間も無いし、うろつろして狙われるよりはね」

そう言って、ひばりはウィンクしてみせた。

『ただいまを、持ちまして、オリエンテーリングを、終了いたします。引換券を、お持ちの、生徒は、職員室まで、おいでください』
校内放送が掛かりオリエンテーリングは終了した。

「『シークレットアイテム？』」

西村教諭に言われ、三人は異口同音に聞き返した。

「そうだ。いくつかの賞品には、シークレットアイテムとして、召喚戦争用の腕輪が隠されていたんだ」

西村教諭の説明に、三人は目を丸くした。

「でだ。お前たちが手に入れた如月グランドパークプレオープンチケットには、シークレットアイテム“朱金の腕輪”が隠されていたというわけだ。腕輪と説明書は、チケットと一緒にその箱の中だ」

そう言って、小さめの段ボール箱を三人に渡す西村教諭。

ひばりたちは、顔を見合わせながら箱を受け取った。

「ちなみに、ほかにどんなシークレットがあつたんですか？」

気になって訊ねるひばり

「詳しくは言えんが、“黒金の腕輪”、“蒼金の腕輪”というのがある。取得者は誰かは言えんし、効果も教えてやれん。まあ、名前だけは取得者全員に教えてあるがな」

そう言って、西村教諭は息を吐く。

「わかりました。ともあれ、あたしたちが使う分には自由だという

ことですね」

「まあ、そうだが、ハメを外さんようにな。あと、貴重品扱いでもあるから気をつけるように」

西村教諭の注意に三人は姿勢を正した。

「「「わかりました」」」

「よし、行つていいぞ」

西村教諭に促され、三人は退室する。

「「「失礼しました」」」

三人そろって教室に戻ると、明久に雄二、秀吉の三人が集まっていた。

「あ、アキくん！ アキくんたちも、何か手に入れたの？」

ひばりはうれしそうに声を掛ける。

「こっちはストラップに食券、シークレットの腕輪だな」

それに対して、雄二が答える。

「こっちも腕輪、手に入れたよ、あと遊園地のチケットだね」

「そっちも腕輪を手に入れたのか。うん？ 遊園地のチケットだと

？！ まさか如月グランドパークのプレオープンチケットか？！」

ものすごい勢いでひばりに迫る雄二。

あまりの迫力にひばりは後ずさる。

「う、うん。一応、あたしたち三人で行くつもりなんだけど……」

恐々話すひばり。それを聞いた雄二は、満面の笑みを浮かべる。

「そ、そうか、ならいいんだ。くれぐれも、誰かに売ったり、譲渡したりしないでくれ。頼んだぞ」

必死で頼む雄二。

「わ、解ったけど……。あ、そう言えば翔子ちゃんが欲しいって言うってたっけ」

思い出したようにつぶやくひばり。

それを聞いて雄二はひばりに掴みかからんばかりに迫る。

「頼む！ 翔子には！ 翔子だけには渡さないでくれ！ この通りだっ――！」

もはや土下座をせんばかりの雄二。

ひばりも須川も新田もドン引き状態だ。

「わ、わかったよ。まあ、あたしたち三人で行くつもりだし」

「そうか、くれぐれも頼んだぞ」

「いったい、何が彼をそこまで追いつめるのか？」

キスされたことで、精神的に追いつめられたのかもしれない。

「ふう。済まないな、取り乱しちゃった」

やっと落ち着いたのか冷静な態度に戻る。

「で、腕輪を手に入れたんだったか。何の腕輪だ？」

「“朱金の腕輪”だ。そっちは？」

雄二の質問に須川が答え、さらに雄二へと訊ねる。

「ブーストアップ“黒金の腕輪”だ。強化のコマンドワードで、召喚獣の武装、あるいは防具が強化されるらしい。そっちの効果は？」

「少し待ってください。えっと“朱金の腕輪”の効果は」と

ひばりの持つ箱から、説明書を引っ張りだした新田がパラパラめくる。

「リミットブレイク限界突破のコマンドワードで、召喚獣の特殊能力が使えるようになるみたいですね」

説明書を読みながら新田が解説する。

「ただ、リミットブレイクした時点ですべての科目から30点が引かれ、召喚科目ではなくとも0点の科目が発生したら、強制的に戦死扱いになりますね」

「なるほどな。使いづらい能力だな……」

新田の説明を聞いて、雄二が眉根を寄せる。

「？ どうしてだよ、雄二」

明久はいまいち使いづらい理由がわからなかったのか、雄二に訊ねる。

「はあ、例えばだ。“朱金の腕輪”をお前が使ったらどうなる？」
「えっと、つよくなる？」

雄二に言われて軽く思案した明久が答える。

「まあ、間違ってはいない。ところで明久、お前、30点以下の科目はいくつある？」

「え？ 四つくらいはそうかな？」

「なら、使った瞬間、戦死だな」

「え？ あっ?!」

それで気づいたようで、あっとなる。

「ウチのクラスの奴らじゃ、ペナルティがキツすぎる。かといってムツリー二のように得意科目に偏りがある奴にも使えんしな。逆に姫路のような高得点で安定しているやつに持たせてもつまみは少ない。本来なら、BクラスかCクラス向けの腕輪だな」

雄二は軽く肩をすくめながら言葉を締めた。

「て、ことはだ。支倉のような点数が高すぎずに安定している奴なら使いやすいってことか？」

雄二の言葉を聞いて、須川が声を上げた。

「ふむ。確かに支倉の点数なら使いやすいか。なら、ひとつは支倉用だな」

「残り二つはどうするの？」

ひとつはほぼ専用扱いと言われたひばりが、雄二に質問する。

「ひとつは俺に使わせてくれ。クラス代表の自衛能力を強化するのは悪い策じゃない。残り一つは、まあ、クラス共有くらいか？」

「“黒金の腕輪”の方はどうするのじゃ？」

雄二の言に、秀吉が声を上げる。

「一つは俺が使わせてもらおう。理由はさっき説明したとおりだ。残り二つはクラス共有でよいだろ？ “黒金の腕輪”のペナルティは使用時に10点消費するくらいだしな。しかし、思わぬ戦力強化が出来たぜ」

腕輪を見ながら雄二が笑う。

「また、戦争仕掛けるの？」

ひばりが不安そうに問いかける。

「いや、今、戦争を起こすのは得策じゃあない」

雄二がひばりに答えると、明久が首をひねった。

「どうしてさ？」

「いいか明久。前は、奇策を用いた上に奇襲を仕掛けてうまくいったんだ。現状では、どのクラスもウチのクラスを警戒しているハズだ。そんな状況で仕掛けるのは自殺行為だ」

「じゃあ、あきらめるの？！」

明久が声を上げる。しかし、雄二はかぶりを振った。

「いや、かならずやる。Aクラスをな。だが、今は耐えるときだ。

作戦も練っている、安心しろ」

そう言って、力強くうなづく雄二。

明久は、それを見て表情を和らげた。

「わかった。ぼくもまだ、勉強も修行も中途はんぱだしね。雄二が作戦を思いつくところにはいつぱしの戦力になれるようにがんばるよ」
言いながら笑う明久。

「頼むぜ？ 《観察処分者》」

いたずらっぽく笑う雄二。

ひばりは、笑い合う二人を、優しい表情で見ていた。

番外編 6 オリエンテーリング！ あるいは腕輪のこと。 後編（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回からようやく清涼祭編に入ります。

がんばって書きますので、これからもよろしくお願いします！

第十七問（清涼祭編）（前書き）

第十七問を更新しました。

いよいよ、清涼祭編に突入です。

読んでくださるみなさんが楽しんでいただければ幸いです。

第十七問（清涼祭編）

「……雄二」

「なんだ？」

「……如月ハイランドって知ってる？」

「ああ。今、建設中の巨大テーマパークだったか？ もうすぐプレオープンらしいが……」

「……とても怖い幽霊屋敷があるらしい」

「廃病院改装したらしいな。面白そうだな」

「……日本一の観覧車とか」

「かなりデカいらしいな。聞いた話だけでも凄そうだな」

「……世界でも三番目の速さを誇るジェットコースターも」

「速いだけでなく、いろんな方向に向いたり、ぐるぐる回ったりするんだったか？ どんなモンか知らんが、想像するだけでもワクワクするな」

「……ほかに面白いものがたくさんある」

「なるほど凄いな。きつと楽しいぞ」

「……それで、今度そこがオープンしたら、私と」

「ああ、お前の言いたいことはよくわかった。そこまで行きたいなら……」

「……うん」

「今度友達と行って来いよ」

「……握力には自信がある」

「ぐうおあああつ?! ア、アイアンクローはよせえつ!?!」

「……私と雄二の二人で、一緒に行く」

「オープン直後は込み合ってるだろう!? 俺はイヤだからなぐうおあぐあああつ?!?!」

「……それなら、プレオープンのチケットがあつたら行ってくれる?」

『プ、プレオープンチケット？ 相当入手困難らしいぞ？ おー痛』
『……行ってくれる？』
『んー。そうだなー、手には入ったらなー』
『……本当？』
『んあー、ほんとほんと』
『……それなら約束。もし、破ったら……』
『おいおい、俺が約束破るように見えるのか？ 翔子』
『……この婚姻届けに判を押してもらっ』
『天地神明に掛けて必ず約束を守ろう』

学園に続く坂道から、桜色の其れが姿を消し、新緑芽吹くこの季節、文月学園では、新学年最初の学校行事でもある『清涼祭』の準備が始まりつつあった。

お化け屋敷のために教室の改造を始めるクラス。
焼きそばのために調理道具を手配するクラス。

この学園ならではの『試験召喚システム』について展示を行うクラス。

どの教室も、学校祭準備のためのLHRの時間は、活気に満ちていた。

そんな中、Fクラスの面々は……。

「こい！ 新田！」

「ふん、勝負です、須川！」

「ほざけ！ お前の球なんぞ、場外までかつ飛ばしてやるぜっ！」
校庭で、野球に興じていた。

「言いますね！ ですが、そう簡単に打てると思わないことです！」
マウンドに立つ新田が構える。

ミットを持つは、神童、坂本雄二。

そのサインを見て、新田の顔がひきつる。

新田がセツトに入り、須川が気合いを込めて構える。

「『貴様等！ 学園祭の準備をサボって何をしておるか！』」
突然校庭に響きわたる怒声に、全員が一斉に逃走態勢に入る。

「くっ?! 鉄人かつ?!」

「みんな! 散れっ!」

「いやまて! あれは……」

Fクラスの面々が注目するグラウンドの端に、小さな影がある。
小学生と見間違うばかりの小さな体格に、長く流麗でポリリウム
のある黒髪ポニーテール。

手にしたるは、烏丸印のハリセン、銘刀【小烏丸】。

威風堂々たる佇まいで仁王立ちになっているのは、Fクラスの小
ルゴッデス
女神。
支倉ひばりである。

「『全員教室に戻りなさい! この時期になってもまだ出し物が決
まっていないなんて、うちのクラスだけなんだから!』」

鉄人西村の声音でしゃべるひばり。

「ぐ、ぐっつ?!」

「わ、わかったから鉄人の声で喋らないでくれっ!」

「せ、精神的にキツイ……」

声が西村教諭で、顔と口調がひばりのものな為、とんでもなく違和感がある。

「『だつたら、早く教室に戻りなさいっ！』」

『『『『 YES!! my little Goddess!!』』』』

明久は、その様子を瑞希や美波と一緒に、教室から眺めていた。

「やってるなあ、ひばり」

人事のようにつぶやく明久。

「何言ってるのよ、アキ。あんただって、参加しようとしてたでしようが」

そのつぶやきを聞いて、あきれたように声を上げたのは、隣に立つ美波だ。

「あははは、ひばりに【小鳥丸】ではたかれて、諦めたけどね」

苦笑する明久。

素行は良くなってきているものの、やはり、たまには羽目を外しなくなるらしい。

「でも、どうしましょう？ 学園祭の出し物。もう時間もあまりありませんし……」

不安げに言うのは、美波とは反対側に立つ瑞希だ。

その言葉を受けて、明久は腕を組んで軽く思案する。

「雄二か音頭を執ってくれればなあ。あいつの統率力は凄いけど、興味の無いことには、とことん冷たいから……」

「今はひばりが奔走してくれているけど、あの子、オーバーワークじゃない？ 大丈夫かしら……」

美波が心配そうに外を見ると、昇降口へ向かうクラスメイトに号令をかけるひばりが見えた。

瑞希も心配そうに見ている。

「ええ。誰が頼んだわけでもないのに、教室の備品チェックや衛生管理もやってるようですし……」

「うん。ぼくが自分の家のことを自分でやるようになってからは『楽になった』とは言っていたけど、その分クラスの雑用を増やすようになったちゃったからなあ」

明久は不安げにひばりを見ていた。

「ん？」

不意に立ち止まるひばり。

何か見つけたのか、走り出す。

その先を見ると、スケッチブックを広げた少年が座り込んでいた。

「おい、加藤くん」

ひばりが声をかけながら近づくと、スケッチブックに目を落とし、
ていた少年が顔をあげた。

「やっとみつけたよ、いつも教室にいないんだもの」

話しかけるひばりに、少年は訝しげになる。

「君、だれ？ 小学生に知り合いは居ないはずだけど？」

「な？！ 小学生じゃないよっ！ クラスメイトの支倉ひばりだよっ！ 同年だよっ！」

少年の言葉にシヨックを受けて言い募るひばり。

「そうか、僕は加藤武。まあ、忘れてくれていて構わないよ」

淡淡と言う武に、ひばりは面食らう。

「……だめだよ、そんなこと言ったら。寂しいよ……」

ひばりは悲しげに、武に言った。

「……はあ。で？ 何の用？ 支倉さん」

武は、面倒そうに息を吐いて、ひばりに訊ねる。

「学祭の出し物を決めるから、参加してほしいんだけど」

武の態度に慥然となるひばり。

「学祭？ 騒がしいと思ったら、それが……」

「気付いてなかったのっ？！」

「ああ、スケッチしているときは、集中してるからね。あまり外界の雑音は入ってこないんだよ」

そう言っただけ伸びをしようと、立ち上がる武。

「教室でいいの？ 支倉さん」

「参加してくれるの？」

「面白いモチーフが見つかりそうだからね」

そう言っただけ、少年は眠たげな顔に笑みを浮かべた。

「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たわけだが……」

教壇にあがり、どうでも良さそうに話す雄二。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。まあ、そいつに全権を委ねるから、後は任せるぞ」

生あくびをかみ殺しながら宣言する雄二。

試召戦争のときのような、エネルギーシユさは欠片ほどもみられず、やる気の無さが、ありありと表れていた。

そんな彼を見て、瑞希は明久に小さく声をかけた。

「明久君。坂本君は、学園祭ってあまり好きじゃないんでしょうか？」

「楽しみにしてるってことはないかな？ 興味があるなら、率先して動くだろうしね」

瑞希に声をかけられた明久は、視線を下に動かさないように気をつけながら答える。

その答えを聞いて、瑞希の表情が曇る。

「そうなんですか……。なんだか寂しいですね。明久君はどうですか？」

少し上目遣いになった瑞希に、明久の胸が大きく弾む。

「そ、そうだね。とくにこれがやりたいっていうのは無いかな？」

ただ」

「ただ？」

「みんなと騒いで、良い思い出は作りたかな？」

明久は照れたように答える。

すると、瑞希の表情もみるみる明るくなり、眩しいくらいの笑顔になった。

「あ、はい♪ 私も明久君と一緒に、二人で学園祭の思い出を作りたいです」

「ほえ？」

瑞希の直球に、明久は思わず間抜けな声を出す。

「あ……その、明久君は知ってますか？ 文月の学園祭では、とても幸せなカップルが出来やすいって噂が……」

「アキ、瑞希、何の話をしてるの？」

明久と瑞希が話し込んでいるのに気付いたのか、美波が割り込んでくる。

「え？ ああ、みんなでいい思い出作りたねって話していたんだよ」

瑞希との会話を簡単に説明する明久。

「ふ〜ん。でも、そうよね。いい思い出作りたいわね」

明久に、訝しそうな視線を送っていた美波だったが、軽く破顔して同意した。

「おーい、島田。学祭の実行委員はお前で良いか？」

不意に声をかけられ、顔を上げる美波。

「え？ ウチ？ う〜ん……、ウチは召喚大会に出るからちょっと難しいかしら」

突然の指名に、困ったように眉を寄せる。

「雄二。姫路さんはどうかな？ 適任だと思うんだけど」

「え？ 私ですか？」

話題を振られて、瑞希が小首を傾げる。

「いや、姫路では時間が掛かり過ぎるだろ。全員の意見を丁寧に聞

くだろうしな」

あくびをかみ殺しながら返事をする雄二。

「それにね、アキ。瑞希も召喚大会に出るのよ」

「そうなの？ 姫路さん」

美波に言われて驚く明久。

「はい！ 美波ちゃんと組んで出場するつもりなんですよ」

軽く握り拳を作って、小さくガッツポーズする瑞希。

「学校の宣伝行事みたいなものだよね？ 姫路さん、そういうの興味無いと思ってたんだけど」

瑞希の言葉を聞いて、明久が不思議そうに首を傾げる。

「ウチは瑞希に誘われてんだけどね。お父さんを見返したいんだって瑞希」

「お父さんを見返す？」

美波の言葉を聞いて、明久は軽く驚いていた。

「だって、Ｆクラスだという理由だけでバカにされたんですよ！ みんなのこと、なにも知らないくせに、許せません！」

珍しくヒートアップしている瑞希に明久は苦笑いする。

「で、Ｆクラスのウチと組んで、大会で優勝してお父さんの鼻をあかそうってワケ」

「なるほどね」

得心が言ったようにうなづく明久。すると、向こうからメンドクサそうに声がかかる。

「三人とも、こっちの話、続けていいかあ？」

雄二だ。早くほかの誰かに投げてしまいたい雰囲気を感じそうでもない。

「ウチは瑞希と召喚大会に集中したいから、ちょっと無理ね。ていうか、坂本、あんたがやりなさいよ」

「めんどクセー」

美波に言われるも、やりたくない旨を隠そうともしない雄二。
「なら、あたしがやるよ！」

そこへ勢いよく声が挙がる。

ひばりだ。

だが、雄二は顔をしかめた。

「支倉。おまえは働きすぎだ。他の奴に……」

「なら、副実行委員ってことで、須川君に手伝ってもらっよ」

「おれか？」

さすがにひばりの仕事量を把握している雄二は断ろうとするが、ひばりも譲る気はない。

こうなると頑固なひばりが引くわけもないことを、ここひと月あまりで思い知らされている雄二は、ため息をついて折れた。

「わかった、ただし、無理はするなよ？ 須川、支倉が無茶しないように頼んだぞ」

「ああ、わかった」

軽い後悔の色を見せながら、雄二は須川に頼んだ。

「じゃあ、はじめるよー」

ととつと教壇までやってきたひばりは、鉄人謹製“支倉専用踏み台”を教卓まで運んで立つ。

須川も黒板前までやってきて、ひばりの横に並んだ。

「じゃ、意見のある人々？ ハイ土屋君」

数人が手を挙げるなか、早かった康太を【子烏丸】で指す。

「……………写真館」

それを皮切りに、いくつか候補が挙がった。

そうしてひと段落したところで、須川がひばりに声をかけた。

「なあ、支倉。おれも意見があるんだが、言っていいか？」

「須川君も？ 良いよ、言ってみて」

許可をもらって須川が開陳したのは、中華喫茶というものだった。それもイロモノ的なものではなく、本格的なお茶と飲茶を提供するというものだ。

「…………おそらくメイド喫茶などのイロモノ系は多いだろうから、本格的なもののほうが勝負できると思うんだ」

須川の熱の入った説明に、みんな聞き入っていた。

「……すごいよ、須川君。それも候補に入れよう！」

ひばりは、須川の含蓄に感銘を受けたようで、乗り気になった。須川は軽く照れたように笑いながら、『中華喫茶』と書いていく。そこで、教室の戸が開き、巖のような男が入ってきた。

「みんな、清涼祭の出し物は決まったか？」

鋼鉄の生活指導担当にして、Ｆクラス担任の鉄人、西村教諭だ。

「あ、西村先生。いくつか候補が出たので、これから決を採るところです」

「お、支倉が進行役か。お前がやってくれとまとまりが良いな、このクラスは」

教卓に立つひばりを認めて、西村は微笑んだ。

「じゃあ、決を採るよ」

「うん、決まりだね。僅差だけど、Ｆクラスの出し物は、『中華喫茶』に決定しました！ みんな協力してね」

そう言っただけで笑うひばりに、Ｆクラスのみんなが声をそろえて返事をした。

それを聞いてから、須川がひばりに声をかける。

「よし、それじゃあお茶と飲茶はおれが引き受けるよ」

「……………手伝う」

いつの間にか近づいていた康太も名乗りを上げる。

「そうだね、厨房班とホール班に分けた方が良いか。じゃ、厨房班の責任者は須川君おねがいできる？」

ひばりの頼みに、須川が軽く胸を叩いた。

「ああ！ 任せとけ」

「ホール班は、アキくんお願いね？」

ついでひばりは明久に声をかける。

「え？　ぼく？　うん、わかった！」

少し戸惑いを見せたが、明久は力強くうなずいた。

「木下君と、女の子チームはホールね？　それから男子でホール出来そうな子を新田君とクリスで選んで」

「わかりました」

「おっけーだよん」

ときばきと指示を出していくひばり。

眠気が飛んでしまった雄二は、そんな彼女を見つめていた。

第十七問（清涼祭編）（後書き）

第十七問、いかがだったでしょうか？
これからよろしくお願いします♪

第十八問（前書き）

第十八問、更新しました。

読んでくださる方が楽しんでいただければ幸いです♪

第十八問

「坂本君」

H R 終了後すぐに、ひばりは雄二に声をかけていた。

「んあ？　なんだ？　支倉」

先ほど眠れなかったせいか、すこしかつたるそうに感じる雄二。その様子に、ひばりは軽く息を吐く。

「もう。しゃっきりしないとダメだよ？　クラス代表なんだから…」

…」

「へいへーい。用事があるんじゃないのか？　そうじゃなきゃ、俺は帰るぞ」

ひばりの注意を軽く流しながら、鞆を手に立ち上がる。

「じゃなくて！　学園長室までつき合って欲しいんだけど」

「ババアんとここにか？　めんどくせえな」

「売り上げを使って、どこまで設備向上していいか聞きに行くんだよ。机と椅子とか、空調欲しくない？」

学園長との面会と聞いて、イヤそうな雄二に理由を説明するひばり。

「エアコンなんて設置するほど儲かるか？」

すこし興味が沸いたか、聞き返す雄二。

「うっん、無理」

即答だった。

「無理なのかよ……」

「学校向け業務用だからね。工事費まで考えると一番安くても五、六十万くらいかな？　意外と広いからもつとかかるかも」

軽く思案して答えるひばり。

「文化祭で稼げる額じゃあないな」

「当たり前です」

「判ってて提案するって事は、なにか考えでもあるのか？」

すでに帰ることより、ひばりの話が気になっているようで、先を促す雄二。

「考えて程じゃないよ。ただのアピール。本命は椅子と机だもの。ただ……」

「？　ただ、なんだ？」

ひばりは迷うように視線をさまよわせてから雄二を見る。

「坂本君は代表だし、良いかな？　ちょっと、ここじゃあ話せないから、道すがらにね」

そう言っただけでウインクするひばり。

雄二はため息をついて鞆を置いた。

「仕方ない、ババアの根城まで、エスコートするのでしょうか」

「うむ、良きに計らえて、学園長先生をババアなんて言っちゃダメだよっ?!」

雄二の言葉に、鷹揚にうなずくとして、ひばりはツツコミを入れた。

「いいじゃねえか。ババアには違いがないだろ」

ひばりのツツコミを流しながら、雄二は歩き出す。

「もう、坂本君っ！　あ、須川君！　材料費の見積もりと、調理用具の調達費の見積もり、だしといてね！　後で見るからっ！　って?!　坂本君待ってよっ?!　エスコートしてくれるんじゃないのっ?!　コラアっ!?!」

須川に指示を出しながら、教室を飛び出して行くひばり。

「おー、わかったー、って、居ねえしっ?!」

須川が返事をする頃には、影も形もなかった。

「予算が結構ある？」

ひばりの言葉をオウム返しにする雄二。

「そ。備品管理の関係で、西村先生に聞いたんだけどね、いま、う

ちのクラスに割り当てられている設備予算って、Aクラスと折半でBクラスレベルなんだって」

「ほう」

「で、改装工事や備品の交換をやってなお、かなり余ってるらしいんだよ」

「なるほど、それでアピールか」

「そう。なにも言わなかったら、うやむやにされちゃうんだよね。たぶん中間考査辺りの結果を理由にして」

「あり得る話だな。一応、学習意欲が高いクラスってことになってるからな、ウチは。それが成績が下がってでもいたら……」

そういつて苦笑いする雄二。

ひばりはそれを見て、軽くため息を吐く。

「笑い事じゃないよ……設備予算、Fクラスレベルまで落とされたら、今の教室ですら維持できないよ……」

「はは、すまん。だがそうかBクラスレベルの予算があつたのか」
グチるひばりに、雄二は軽く笑ってみせる。

が、すぐに思案気になった。

「悪いことに使っちゃダメだよ？」

雄二の顔つきに、一抹の不安を覚えてしまい、釘を刺すひばり。
だが、雄二は肩をすくめてイタズラ小僧のように笑う。

「心外だな。俺はクラスのためになるように使うつもりだぞ？」

「どうだか……」

ひばりは、やっぱり話すんじゃないかと、後悔に顔をゆがめる。
「どっちにしたって、決済するのは鉄人あたりだろう？ 多少無茶を言っても、あの人外の所でハネられるさ」

雄二がそう言ったところで、学園長室に着いた。

「しかし、支倉もババアの元へ直行とはな」

「坂本君と一緒にじゃあ、結局前みたいになるからね……？」

雄二の言葉に応じていたひばりの表情が変わった。

『……賞品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月ハイランドに……』

ドア向こうから、ひばりの耳に言い争う声が聞こえてきのだ。

「どうした、支倉」

「中で話し合ってる最中みたい。後にした方が……」

中の様子に、ひばりは動きを止める。

しかし、雄二は遠慮することなく扉をノックし、ドアノブに手をかける。

「学園長は在室中というわけか。無駄足にならなくてなによりだ」
返事を待つことなく開け放つ雄二。

「失礼しまーす！」

「ちよつとおーっ?!」

止める間もなかったひばりは、大慌てである。

「やれやれ、ほんとに失礼なガキどもだね。ノックしたら、返事を待つのが礼儀ってもんだよ」

不機嫌そうに言い放つのは、文月学園の学園長、藤堂カヲル。

試験召喚システムを作り上げ、この文月学園を立ち上げた女傑だ。
「すみません、学園長先生」

必死で頭を下げるひばり。

その隣で、雄二はどこ吹く風とばかりに澄ましている。

そんな彼らを、学園長と話していたとおぼしき男が一瞥する。

「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね？ 学園長」

眼鏡を軽くいじり、学園長を睨みつけた。

「これでは話を続けることも出来ません。……まさか、貴女の差し金ですか？」

鋭い視線に疑念を乗せる男。

「た、竹原教頭先生も、すいませんでした。大事なお話中に……」
竹原教頭にも頭を下げるひばり。

しかし、竹原は見向きもしない。その態度に雄二は少なからず苛立ちを覚えた。

「馬鹿を言わないでくれ。どうしてこのアタシがそんなセコい手を使わなきゃいけないのさ。アホくさい」

「貴女は隠し事が得意なようですね」

学園長は、教頭の言葉にため息をつく。

「……さっきから言っているように隠し事なんざありやしないよ。まったく」

「この場はそういうことにしておきましょうか」

あくまで疑いを捨てる気のない教頭に、学園長がまたしても息を吐く。

「……何かあるはず、あってくれないと困るみたいですね？ 教頭」
突然声をかけられ軽く驚く教頭。

「なんだね？ 君は。藪から棒に」

「失礼しました。私は二年Fクラス代表の坂本といいます」

「……………Fか」

本人は小声のつもりだったようだが、三人にははっきりと聞こえていた。

「な……………」

声を上げようとするひばりを。片手で軽く制する雄二。

「はい、Fクラスです。馬鹿クラスの代表なんで、教頭先生の狙いが判らないんですよ。教えて貰えませんかね」

珍しく下手に出てお願いする雄二。

「ふん。お前などには話す価値もない」

教える気のない教頭は、きびすを返す。

「今回はこの辺にしておきましょう学園長。この件に関しては、後日改めて話すとしましようか」

そのまま振り返りもせず戸口へ向かい、出ていった。

「うっ、教頭先生、怒っちゃったよ……………」

しょんぼりとうなだれるひばり。

トレードマークのポニーテールも、心なしかしんがりしている。

「……気にする必要なんかないぞ、支倉」

教頭が出ていった戸口を見ながら、雄二が声をかけてくる。

「え？」

「教頭に見てみたら、俺もお前も不良品のガラクタだってことさ。

俺の一番嫌いなタイプだ」

不快そうに鼻を鳴らす雄二。

「さ、坂本君、なに言って……」

ひばりは戸惑いを隠せない。

「何もかも、数字で判断する合理的な経営者の目だな。およそ教育者らしくない。教頭に見れば、Fクラスの人間なんざ商品価値のないガラクタ同然ってことだろ」

「ま、まさか……先生だよ」

「支倉、文月は私立だ。いろんなタイプの教師が居ても不思議はない。大方、経営手腕を見込んで引つ張ってきたんだろうが、頭が二つあるようなもんだ。そうだろ？ ババア」

自身の推測を述べ、学園長に確認する雄二。

学園長は、両肘を着き、手を組みながらため息を吐いた。

「頭も口も、よく回るクソジャリだよ。その赤猿の言つとおり、竹原は学園の経営を任せるためにスカウトしたのさ。その手の手腕に長けていたからね。だがまあ、最近は随分とうるさくなってきた、やり難いことこの上ないさね」

「……」

雄二の言葉を肯定する学園長に、開いた口が閉じられないひばり。
「で。お前さん達の用件はなんだい？ こっちは、忙しい身の上なんだ。早く言いな」

その部屋で、男は執務机に着いて、イヤホンの音声に耳を傾けいた。

「盗聴器は問題なく作動しているか……ふん、馬鹿な子供と言い争うなど、藤堂の底が知れるな」

冷笑を浮かべながらイヤホンをはずすのは竹原教頭。

その視線の先にある応接セットでは、一人の男がくつろいでいた。「で？　俺はこの写真の二人を動けなくすりゃいいのか？」

「そうだ。やり方は任せるが、派手にするなよ？　清涼祭当日は楽に出入りできるよう手を打ってやる。それまでは大人しくしている」強い口調で言い放つ竹原。しかし、男は調子を崩さない。

「へいへい、スポンサーの前で事故を起こさなきゃなんねーってんだろ？　何度も聞いたし、前金も貰ってるからな。大人しく祭りを待つさ。しかし、こりゃあ大した偶然だ」

懐かしむように顎をさする男。

「何がだね？」

「いやなに。この吉井ってヤローにゃ借りがあるだけだ。念入りに返しておかないとな」

男はイヤらしく笑いながら、明久の写真を握りつぶした。

学園長室は、不思議な空間で満たされていた。

「こ、これって？」

「召喚フィールドか？」

突然の事態に、ひばりも雄二も驚きを隠せない。

「ったく、出てきな！　このフィールドは、おまえさん専用なんだ、すぐにバレルよ！」

唯一落ち着いていた学園長が声を挙げると、部屋の中央付近に、CDくらいの銀色の円盤が現れ、高速で回転し始める。

そして、虹色の光が漏れ出たかと思うと、白衣をまとった召喚獣が顕れた。

『いよう、ちびっ子に赤ゴリラ。ひさしぶりだな』

アキが連れていたAⅠ召喚獣のカオルだ。

「テメエツ！？ クソ召喚獣！！」

「か、カオルさん？！ っていうか、あたしちびっ子じゃないよっ！！ 召喚獣に言われるほどちっちゃくないよっ！？」

カオルの挨拶に声を挙げる二人。

しかし、当のカオルは意に介した様子もなく、学園長に向き直って手を上げながら口を開いた。

『よーカラルちゃん。この部屋盗聴されてんぞ』

その言葉に学園長の顔が強ばる。

「本当かい？ なら会話は……」

『大丈夫だ。少し前からダミーの音声を流すよう細工した。今頃あんたと、その赤ゴリラの罵り合いを聞いているはずだ。誤差は一秒くらいだが、つじつま合わせはしときたいな……。ゴリラにチビ助、何の話をしにここ来た？』

「清涼祭の売り上げで、どこまで設備更新していいか聞きに来たんだよ。机に椅子、それにできればエアコンも。あと、あたしちっちゃくないからねっ？！」

二人が学園長室を訪れた理由を問うカオル。

それに対してひばりが答える。

『じゃ、それと交換条件で召喚大会で優勝し、賞品を手に入れる方向で音声作つとくぞ』

「……勝手にしな」

マイペースなカオルに、ため息を吐く学園長。

「いまコイツが言った取引で手を打つとくれ。とにかく賞品を回収したいんだよ。それから、吉井も引つ張りだしな」

「アキくんを？ なんです？」

唐突に明久の名前が出て、疑問符を飛ばすひばり。それに対して

学園長が答えるよりも早く、カオルが割り込んだ。

『優勝賞品の“白銀の腕輪”に欠陥があつてな。平均点くらいから上の人間が使うと暴走するのさ』

「このとんちきAIっ！！ 何でバラすかねっ?!」

カオルの言葉に学園長がいきり立つ。しかし、カオルは涼しい顔だ。

『この子等は、アキの友達だからね。あんたのプライドなんかと比べる必要も感じないよ。それに、頼むんなら情報は開示すべきだ。イレギュラーを減らすためにね』

AIに諭され、学園長は顔を右手で覆いながら天井を仰ぐ。

「自分の恥をさらすみたいでイヤだったんだがねえ。仕方がない」
嘆息し、二人を見る。

「そのポンコツAIの言うとおりさね。賞品は如月グランドパークのプレオープンプレミアムチケットと白銀の腕輪なんだが、腕輪の方は新技術なせいか不安定だね。入出力の関係で高得点取得者が使用すると暴走する。召喚フィールド作成用はある程度まで耐えられるんだがね、同時召喚用は平均点程度で暴走するはずさね」

観念して説明する学園長。

しかし、雄二はもう一つの賞品を聞いて目をむいた。

「な、何だとババア、如月グランドパークのプレオープンチケットが賞品なのかっ?! しかも、プレミアムっ?! な、何か違いがあるのかっ?!」

チケットの方に、異様な食いつきを見せる雄二。

ひばりを始めとする三人はドン引き状態だ。

「あ？ ああ、通常のもの違って、カップル専用のウェディング体験が出来るらしいね。なんでも、希望すればそのまま入籍の手続きまで如月グループがやってくれるらしい。パークの目玉にしたいんだらうね」

「クソっ、あいつの目的は初めっからプレミアムの方だったに違いない。オリエンテーリングの時に妙に大人しいと思ったら、こうい

うことか！ こっちが安心した隙にチケットを手に入れてそのまま入籍…… まずい、まずいぞ。完全に出遅れた。こうなれば、召喚大会に優勝して確実にこっちでチケットを押さえなければ……俺の人生は……。よ、よし引き受けようじゃないか。明久を引っ張り出すのは何とか手を打とう」

ひとしきりつぶやいていた雄二は学園長に向き直り、引き受ける旨を伝える。

「やってくれるかい？！ そりゃあ助かるね。あんたと吉井なら二つの腕輪は十分使えるはずさね。デモンストレーションも十二分に行えて万々歳さね。もし完遂できるなら、机と椅子、エアコンまで全部こっちで持ってやるよ」

珍しく満面の笑みを浮かべる学園長。

「ほ、ほんとですか？」

思わぬ事態にひばりも声を挙げる。

「ああ、約束してやるよ。そのかわり、必ずやり遂げな！」

「ああわかった。ただし、こちらからも提案がある。大会はタッグマッチでトーナメント制。一回戦は数学、二回戦は化学と進めるらしいな」

「そのとおりさね」

「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」
その提案に、ひばりが驚く。

「ちよっと！ それって不正行為じゃ……」

「支倉、事は学園全体の問題でもあるんだ」

ひばりを諭すように言う雄二。

「……どういうこと？」

「腕輪のお披露目は、スポンサーへのアピールが目的だ。うまく行けば資金援助も増えるだろう。だが、反対に失敗したり、新技術を公表できなかつたら？」

「あつ……？」

言われて声を挙げるひばり。

「失敗すれば、スポンサーからは資金が出ない。それどころか支援を打ち切られる可能性もある。そうだったら、スポンサーの金で成り立っているこの学園は終わりだ」

「そういうことさね。支倉、お前さんのような子をこんなことに巻き込んでしまって、本当に済まないと思っている。この通りだよ」

そう言っで学園長はひばりに頭を下げた。

「そ、そんな、頭を上げてください学園長。あたし、誰にも言いませんから。ううん、ここまで聞いたら、あたしも黙っていられます。あたしも大会に出ます。チームが複数ある方が、優勝の可能性がありますし」

「……いいのかい？」

学園長は、珍しく心配そうな顔になる。

それに対して、ひばりは笑顔で答えた。

「はいっ！ あたし、文月学園が、好きですから！」

第十八問（後書き）

第十八問、いかがだったでしょうか？

さて、少し前にこの小説の、PV累計が100,000を、ユニ
ークの累計が10,000を越えました。

読んでくださった方々、本当にありがとうございます♪

これまで書いてこれたのは、読んで下さるみなさん在ればこそで
す。

そこで、お礼の意味も込めまして、清涼祭編終了後に、特別編を
お送りしたいと思います。

こちらで吟味はさせていただきますが、リクエストを受け付けま
すので、感想欄かメッセージでリクエストしてみてください。

受付期間は清涼祭編終了までとします。

細かく書かれないオリキャラたちのストーリーや、if物（笑）
などでも受け付けますよ？ まあ本編のネタバレにならない程度に
なりますが。

それではみなさん、これから、『バカと雲雀と召喚獣』をよろ
しく願います♪

第十九問（前書き）

第十九問更新しました。読んで下さる方が楽しんでくれれば幸いです。

第十九問

「お？ 坂本に支倉。やつと戻ってきたか」

二人が教室に戻ると、須川が一人で待っていた。手にした携帯ゲームの電源を切り、二人に近づく。

「ごめんねー？ 遅くなっちゃって」

「……もう、お前だけか？ 明久はどうした？」

周りを見回し、みんなの手荷物がないことを確認した雄二が、須川に尋ねる。

「吉井？ 吉井達ホール班なら体育館だ。木下と新田に頼んで接客とウォーキングの練習をするらしい」

「わかった、体育館だな？ じゃあな、支倉、須川」

雄二はそう言って鞆を手にとつて教室から出ていった。

「なんだ？ 坂本の奴。えらく急いでるみたいだが、吉井に大事な用でもあるのか？」

須川は、教室を出ていく雄二を見送りながら、ひばりに訊ねる。

「あはは、坂本君、召喚大会に出ることになっちゃってね、アキくんを相棒にエントリーするんだって」

苦笑いしながら答えるひばり。

だがすぐに眉を寄せた。

「あたしも参加することにしたんだけど、誰と組もうかな？」

悩むようにアゴ先に人差し指をあて、軽く思案気になりながら呟くひばり。

「は？ 二人とも召喚大会に出るのか？ そりやまた急な話だな。エントリーは三日後までだったか？」

ひばりの話に驚く須川。だが、疑問を感じてひばりに訊ねる。

「だけど良いのか？ 支倉。吉井と組みたいんじゃないのか？ というか、坂本とお前が組めば良かったんじゃないか……」

須川の言葉にギクリとなるひばり。

本来ならそれでも良かったのだが、最近の雄二は勉強をやり直しているらしく、いくつかの科目がすでにBクラスレベルにまで到達している。

一ヶ月という短期間でここまで学力アップしたことは、さすがは元神童の面目躍如ではあったが、今回は裏目に出た。

ひばりも元々Cクラスレベルな為、二人が組むと暴走の可能性が高い。

そう指摘されてしまい、組むのを断念したのだ。

後は点数のバランスを考慮し、雄二が明久を勧誘して組むことになったのだが、ひばりの相手は決まっていない。

ともあれ、腕輪回収の件はおいそれと打ち明けられるものではなく、ひばりは誤魔化しにかかった。

「う、うん、そうしたかったんだけどね？ さ、坂本君がどうしてもって言うから……」

なんとも歯切れが悪く言うひばり。ウソをつくのが苦手な彼女には、うまいいいわけが思いつかなかったようだ。

だが、須川には、ひばりが言いたがってないことは伝わったので、「ふーん、そうか」と誤魔化されてくれた。

「そ、それより！ み、見積もり！ 見積もりはどうなったの？」
居たたまれなくなったひばりは、無理矢理別の話題へと話を逸らそうとする。

「あ、ああそうだな。そのことで話があったんだ」
「？」

一連の会話で、自分の用件を忘れていた須川は、見積もりの話を振られて、それを思い出していた。

体育館のドアが開かれ、背が高く、赤い髪の少年が入ってきた。
Fクラスの代表、坂本雄二である。

館内を見回し、隅に固まっている見知った一団を見つけると、片手を上げながら近づいていった。

「ういーっす、みんなお疲れ。明久、いるかあ？」

「雄二、どうしたの？　こんなところに。ひばりの用事は終わったの？」

よく知る声をかけられて振り向く一同。

Fクラスホール担当班だ。

その中から、明久は名前を呼ばれて進み出る。

「ああ、それなら済んだ」

雄二の言葉にふと周りを見ると、雄二と一緒にだったはずの幼なじみの姿を探すが見あたらない。

「あれ？　ひばりは？」

「支倉なら、今は須川と打ち合わせじゃないか？　それよりだ」

雄二は、話しながら明久の元までやってくると、彼の肩に手を置いた。

「明久……お前に大事な話があるんだ」

真剣な眼差しを向ける雄二。

「え……」

その瞳に、明久の胸が、大きくひとつ鐘を打つ。

その様を見て、一同はどよめいた。

「あ、明久君……わ、私、信じてます！　明久君のこと、信じてますから！」

「あ、アキ……あんた、やっぱり坂本と！」

「おおっ、ドキドキだねい。おねーさんはアッキーのヘタレ攻めとみたよん」

「……むっ、なんじゃ？　なにやら嬉しいような、悲しいような複雑な気分じゃ」

「吉井はそっちの趣味でしたか。こちらに害がないなら構いせんが」

瑞希、美波、クリス、秀吉、新田が口々に勝手なことを言い始め

る。

「って、ちよつとみんなっ?! なに勝手なこと言っちゃってるのっ?! ぼくは、ちゃんと女の子が好きだからねっ?! 姫路さんや美波や秀吉がっ?! って、ナニ言ってるんだあっ?! ぼくはあっ?!」

皆からの同性愛疑惑を否定しようとしたあきひさは、爆弾を炸裂させて、頭を抱える。

「あ、明久君……う、嬉しいです、私」

「あ、アキ、あんた、ウチのこと、ウチのこと、ちゃんと女だと認めてくれていたのねっ?!」

「あ、明久よ、き、気持ちは嬉しいのじゃが、ワシらの間には色々障害があると思うのじゃ。その、ホラ。歳の差とか……」

明久の爆弾発言により、瑞希はトリップ、美波は感無量、秀吉は恥ずかしがっている。

それを見たホール担当のFクラスメンバーは、殺意を垂れ流した。

「……く、吉井め……」

だがそこでクリスがわざとらしく崩おれた。

「おおっ、おねーさん捨てられりんぐ、みんな慰めてほしいヨヨよんよん」

明らかな泣きマネで周りにアピールすると、殺意が雲散無消し、Fクラス勢がクリスの周りにひざまずく。

「……喜んで!」

バカばかりである。

これを見ていた新田は、一人ため息をついた。

「まったく、これじゃ練習になりませんよ。せめて支倉がいてくれれば思う様、愛でられたのに……」

真面目な発言かと思えば、最後の台詞で台無しである。

「さすがは我がFクラス。一石を投じるだけで、ここまで混沌と化すとはな」

「雄二! どうするんだよ! お前のせいで大混乱じゃないかっ!」

ニヤニヤ笑って成り行きを眺めている雄二に明久が噛みつく。

「まあ、ほっとけ。それより真面目な話だ。召喚大会、俺と組んで出てみないか？」

「ふえ？ 何でまた急に？ あんな見せ物みたいな、もよおし物に出ようなんて」

雄二からの、突然の話しに目を白黒させる明久。

しかし、すぐに難色を示す。

「うーん、遠慮するよ。姫路さんや美波には悪いけど、ああいう見せ物に出る気にはならないなあ」

「そうか……ちなみに支倉も出るんだが」

「ひばりもっ？！ おっかしいなあ、こういう見せ物みたいなイベント、嫌いなはずなんだけど……」

雄二からひばりも出ると聞いて首をひねる明久。

ひばりは外見にコンプレックスがあるため、普段から人前でパフォーマンスするようなイベントを苦手としている。

今回開かれる召喚大会などはまさにそれであり、ひばりが率先して参加するところなど、明久には想像もつかなかった。

「おおかた、優勝賞品狙いじゃないか？ 如月グランドパークプレオープンプレミアムペアチケットも賞品らしいからな」

「へー。まあ、でも、ぼくはいいかな？ ペアチケット手に入れても、一緒に行く人なんていないし……」

「あ、明久君！」

「あ、アキ！」

突然背後から声をかけられ驚く明久。

「な、なに？ 姫路さん、美波」

女子二人の勢いに圧倒される明久。

「ペアチケット手に入ったら……」

「ウチか、瑞希か、ひばり行って欲しいんだけど……」

「「いいですか？！」」

「う、うん」

あまりの迫力に思わずうなずいてしまう明久。と、背中に二つの柔らかいふくらみが押しつけられた。

「おやおやん、アッキーはモテモテだねい♪ にゅふふん♪ 誰を選ぶのかなん？」

いままで様子をうかがっていたクリスが。明久の背後に忍び寄り、いきなりしなだれかかったのだ。

「おねーさんは誘ってくれないのかなん？ アッキー」

背中から腕を回し、右手で明久の胸をまさぐる。

そして左手でアゴ下をくすぐり、顔を耳に近づけた。

「ねえん、アッキー……アムっ」

耳たぶを、甘噛みするクリス。明久は、未知の感覚に悶絶した。

「○ ■ ▼ ● □ ? ! ? !」

赤くなりながら声にならない悲鳴を上げる明久。

クリスは、調子に乗って、軽く歯を立てたりしながら、明久の反応を楽しんでいる。

瑞希と美波は突然のことに真っ赤になりながら、金魚のように口をぱくつかせ、新田を除くFクラス男子三人も顔を赤らめ中腰になる。

さすがの雄二も少し赤くなりながら、口を手のひらで覆いながら目を逸らす。

「おおう、アッキーのせーかнтаい、はっけーん。では、本格的に……」

目を爛々と輝かせたクリスがさらにイタズラをしようと、口をあけた瞬間。そのまま固まった。

「……あ、あー、じょーだんだん？ おねーさん調子に乗っちゃったねい。ごみんよ？ お姫ちゃんに、なみなみ？」

そう言いながらクリスは明久から離れた。

彼女の視線の先では、瑞希と美波が竜と虎を背負ってオーラを吹き出していた。

「あ……ふう、ん……た、たすかったよ……瑞希ちゃんに美波……」

「大丈夫ですか？ 明久君」

「無事だった？ アキ」

明久に駆け寄る瑞希と美波。

そのまま二人で介抱し始める。

「おぬしは、調子に乗り過ぎじゃぞ？ クリスよ」

明久から離れたクリスの横に並んで注意する秀吉。

さすがに調子に乗りすぎたと思ったらしいクリスは苦笑いを浮かべた。

「いやあ、面目ないよん？ ひでつち。アッキーの反応が可愛らしすぎて、興が乗っちゃったよん」

「まあ、確かに官能的ではあったがのう」

クリスがやり過ぎた理由に呆れる秀吉。

あまり反省していないようだ。

しばらくして明久が落ち着いてきた頃、雄二が話を再開し始めた。

「脱線しまくりでアレだが、そういうわけで俺と組んで召喚大会に参加してくれ」

「……なにがそういう訳だかわからないけど、やっぱり見せ物になるのは気が進まないなあ」

うやむやのうちに引き受けさせたかった雄二だったが、やはり明久は難色を示す。

「どうしてもダメか？」

「うん、悪いけど……」

「そうか……」

雄二は食い下がるが、明久はやりわりと断る。

それを聞いて雄二は残念そうにしながら懷に左手を忍ばせた。

「残念だよ、明久……おっと」

頭を振り、右手で顔を押さえながら天井を向く雄二。

そして、かなりわざとらしく左手を懷から抜くと、ハラリと何かが落ちた。

「雄二……なにか落とし……ってぬうおおおおっ！！」

雄二が落とした写真に写るものを認めて、明久はスライディングするようにそれを回収した。

「ゆ、ゆゆ、雄二っ！！ 貴様、どこでこれをつー！！」

写真をポケットにねじ込みながら雄二に詰め寄る明久。

その鼻先に、新たな写真が突きつけられた。

そこに写るのは、メイドドレスを纏い、恥ずかしげに身をよじる明久の姿だった。

「え。う」

絶句する明久。しかし、雄二は追い打ちをかけるように指をスライドさせると、さらに数枚の写真が現れる。

すべて明久のメイド姿だが、一枚たりとも同じものがない。

「~~~~~っ?!?!」

声にならない悲鳴を上げて引つたくる明久。雄二は何の抵抗もない。

「俺たち親友だろ、協力してくれないなんてツレないこと言うなよ、つととと」

肩をすくめて頭を振る雄二。

その拍子に袖口からさらに数枚バラバラと落ちる。

「ぬうおおおーっ?! わかった、わかったからネガを寄越して……」

「優勝できたらな」

「くううう。とにかく今ある分だけでも回収を、って何でみんなで漁ってるのっ?!」

「大丈夫です。一生の宝物にしますから」

「ひ、ひばりにも渡してあげないと、不公平だからね」

「おおっ、アキちゃんのお宝生写真だよん、なみなみ、それとこれトレードしようぜい」

「ハッハー、お宝だあ」

「（い、一枚だけ、一枚だけじゃからな?）」

混沌となる場。

「やれやれ、何をやってるんですか？　あなたたちは……」
呆れたように呟く新田。

しかし、その手には、目を潤ませたひばりに抱きつかれた、メイド姿のアキちゃんの写真が握られていた。

「材料費を安くできるかもしれない？」

ひばりは、須川の言葉を、オウム返しに聞いた。

「ああ、実は俺の家は中華屋でな。親父にそのあたりを聞いてみたら、問屋に口きいてくれるって言うからさ……」

ひばりに対して、簡単に答える須川。その返答にひばりの顔が綻ぶ。

「へえ、須川君ちつて中華屋さんなんだ。ん？　須川、須川、ねね、須川君。お父さんの名前つて、もしかして亮介？」

軽く思案したひばりは、もうひとつ訊ねる。

「な、何で支倉が親父の名前を知ってるんだよ？」

いきなりクラスメイトの口から父親の名前が飛び出して、目を剥く須川。

「ふっふん」このあたりの中華屋で、須川って言ったら、『中華料理屋　花泉』でしょ？」

「み、店の名前までっ？！」

須川は驚きすぎて、開いた口が閉じられなかった。

「結構有名だよ？　須川君ち。この辺の中華屋では、五指に入るはずだし。でも、そっかあ、須川君は花泉の跡取りなんだね」がんばってね」

「お、おう」

もはや須川は曖昧に返事をするしかなかった。

「あーっと、それでな、支倉の了承を得てから見積もりを出そうかと思ってたんでな、まだ手を着けてないんだ。わりい」

「そうなの？ メールなりTELなりしてくれれば……って、そっか、須川君、あたしのアドレス知らないっけ」

そう言くと、ひばりはポケットから携帯電話を取り出した。

「はい赤外線♪」

「へ？」

一瞬須川は何のことかわからなかった。

「実行委員と厨房班のリーダーなんだから、連絡取れた方が良いでしょう？ ケータイ、持ってるよね？」

ひばりは軽く首を傾げながら、須川に訊ねる。

「あ、ああ！ ちょっと待っててくれ」

あわてて取り出そうとするが、うまく出てこない。

焦りが焦りを呼んで、須川はイヤな汗をかいてしまった。

「よ、よし！ おっけーだ！」

「あはは、須川君、変なの♪」

そうしてアドレスを交換。

番号も教え合って確認のために掛けてみたりした。

須川は顔のニヤケを抑えきれなかった。

この16年で親類縁者を除いた、二人目の異性の携帯番号とアドレスだ。

もう死ぬかもとさえ思っているようだった。

しかし、次のひばりの一言に耳を疑った。

「じゃあ、行こうか。須川君ち。おじさんにお礼を言わなきゃね♪」
本当に魂が抜けた。

第十九問（後書き）

第十九問をお送りしました。じかい、ひばりの須川家ご訪問です♪

第二十問（前書き）

遅くなりましたが、第二十問を更新します。
読んで下さるみなさんが、楽しんでくれれば幸いです。

第二十問

「へえ、支倉は管理栄養士を目指してるのか」

「うん、お料理とか好きだしね」

「でも、結構大変じゃないか？」

「うーん、栄養学を始めとして、いろいろな知識が必要だしね。でもがんばろうって思うんだ」

お互いのことを軽く話しながら『花泉』へと向かうひばりと須川。須川の方は、緊張を隠すので精一杯のようではあるが。

ともあれ、そうして話していると、『花泉』の看板が見えてくる。その扉を開けて須川が帰宅を告げる

「ただいま、親父、帰ったぜ」

「おじやまします」

少し遅れてひばりも挨拶をした。

二人で連れ立って入ってくると、店の掃除をしていたらしい女性が顔を上げた。

やわらかそうなクセのあるクリーム色の髪を一本に結わえた優しいような顔立ちで、大きな瞳のタレ目が印象的で、可愛らしいかんじの女性である。

それが、二人の姿を認めて、二、三度瞬きすると、その特徴を台無しにするかのように、みるみる顔に三つの丸を作って声をあげた。
「りよ、亮介さん！！ た、大変よっ！ 亮が、亮がつ？！」
「なんだ、どうしたんだ？ 春香。亮の奴がどうかした……」

女性に呼ばれて、奥から調理服姿の男性が出てきた。意志の強そうな太めの眉と、あまり大きくない目と、突っ張るような頬骨が特徴的だ。

その男性が、これでもか！ というほど目を見開き、須川とひばりを見て、固まっている。

「支倉、この二人が俺の両親だ。ただいま、親……」

「……こんの、バカ息子があつ!!」

いきなり怒鳴られる須川。何が何やら、訳も分からず目を白黒させる。

「な? なななな、な??」

「いくらてめえがモテねえからって、しょ、小学生騙くらかして連れてくるなんざ、男のする事じゃねえっ!!　そこまで落ちぶれやがったかっ?!　亮!!　このトンチキがっ!!」

父親から罵倒されて我に返る須川。

「ハ、ハアツ?!　てめ、この、くそ親父っ!!　何勘違いしてやがるっ!　こいつはクラスメイトの……」

「バカ言ってんじゃねえっ!　どこをどう見たって小学生だろうがっ!　バカだバカだとは思っちゃいたが、ここまでだったとは、呆れ果ててもとも言えねえわっ!」

「なんだとっ!」

「おう、やるつてのか?　上等だっ!　返り討ちにしてやるわっ!」

言うが早いか、表に飛び出す二人。

その剣幕に圧倒されて、ひばりは仲裁に入ることも出来なかった。
「大丈夫だった?　ご免なさいね?　うちの子が……」

「あ、いえ……その、あたしは……」

親子喧嘩の衝撃を引きずってか、なかなか言葉が出てこない。

それを見て、春香は、ひばりを優しく抱きしめる。

「あ……」

「怖かったの?　本当にごめんなさいね?　でもね?　悪い子じゃないのよ?　それは信じてあげてね?」

優しく諭すように言う春香。

ひばりは、その優しい包容に身をゆだね……ようとして、ハツとなる。

あわてて自分の上着をまさぐり、目当てのものを引っ張りだした。
「あ、あの、おば……須川君のお母さん、こ、これを」

「？ なあにこれ。学生証？ 『文月学園 高等部二年 Fクラス 支倉ひばり』？ まあ！ 亮と同じクラスなの……え？」

ひばりが提示した学生証を音読し、息子と同じクラスだとわかった春香は、学生証の写真とひばりを交互に見比べた。

その様子にひばりは苦笑いする。

「……すいません。あたし、16なんです」

「え、えええ……っ？」

衝撃の事実には声をあげる春香。そして、何かに気づいたように店の外を見ると、あわてて飛び出していった。

「ふう」

ひばりは一つため息をついてそれを見送ると、自分の手のひらを見つめた。

「……お母さん」

そうつぶやいて手を握りしめる。

久しく感じていなかった温もりに、ひばりは眉をしかめた。

「本当にすまなかった！」

取っ組み合いの喧嘩をしていた須川親子を、春香が押しとどめたが、亮介は未だ半信半疑 だった。

仕方なしに春香は、亮介をひばりの前まで引っ張ってきて、もう一度、学生証を提示してもらうと、亮介は、信じられないという顔つきで、学生証の写真とひばり本人を見比べていた。

しばらくして、やっと納得がいったのか、ひばりに学生証を返すと、即座に頭を下げてきた。

「すまねえ！ この通りだ！」

もう土下座せんばかりの勢いである。

「い、いえ構いませんよ？ いつもの事ですし……」

普段と勝手の違う状況に戸惑うひばり。

「いや、本当にすまねえ。てつきり、うちのバカ息子が小学生を騙くらかしてしてきたもんだとばかり……」

「亮介さん」

「あ、いやすまねえ。つい……」

さらに重ねた失言を春美にたしなめられる亮介。

「重ねて、お詫び申し上げます。この通りだ」

今度は夫婦そろって頭を下げてきた。

「わかりました、わかりましたから、頭を上げて下さい。すが……

亮君のお父さん、お母さん」

困ったような笑顔を浮かべながら言うひばり。

それで夫婦は顔を上げた。

「許してくれんのかい？ えーと」

「支倉です。支倉ひばり……あつ、自己紹介どころか、ご挨拶もまだでした」

そう言いながら居住まいを正すひばり。

「改めまして、初めまして。亮君のクラスメイトで、支倉ひばりと申します。どうぞ、よろしく願います」

丁寧にお辞儀するひばり。

「ああ、こりやどうも、ご丁寧に。亮の父親の亮介です」

「母の春香です」

ひばりの挨拶に面食らったか、亮介は必要以上にペコペコしている。

反対に春香は堂に入ったもので、丁寧に頭を下げた。

「この度は、あたしたち、文月学園高等部、二年Fクラスの出し物、中華喫茶にご協力、ありがとうございます。本日は、ご挨拶と、クラスの者に代わりまして、お礼を申し上げますに参りました」

続くひばりの言葉に、今度は親子三人が呆気にとられる。

「？ どうされたんですか？」

「こいつは驚いた。まだ若いのに、随分と堂に入ったもんだ」

「ほんとにねえ」

亮の両親はしきりに感心する。

亮自身も、初めてみるクラスメイトの一面に面食らっていた。

「人前で挨拶するってえのは、それなりにハードルが高いもんだ。ましてや、初対面で年上が相手となりやあ、緊張するのが当たり前だ。だか、このお嬢さんは、平然とやり遂げた。わかるか亮？ この娘さんは、おまえさんとは比べものにならないはど場数踏んでるって事だ」

「……」

父親の解説を聞き流しながらひばりを見つめる亮。

その目には、いつもの幼い少女の姿ではなく、毅然とした、大人の女性の姿が映っていた。

「じゃあ、これ以上はお邪魔になるといけませんから、これでお暇させていただきますね？ 材料費などの見積もりは、亮君に任せてありますので、そちらにお願いします」

「あら、もう少しゆつくりしていけば良いのに……」

春香が残念そうに声を挙げる。

彼女はひばりが気に入ったようで、声をかけているが、そのスキに亮介は亮の首に腕を回し、端っこへ引っ張っていった。

「（おい、亮）」

「（なんだよ、親父）」

声を潜めて言葉を交わす二人。

「（おめえ、あの娘さんとは、良い仲なのか？）」

「（は？ 違うよ、支倉はただのクラスメイトだ）」

いきなりなにを言い出すんだと、父親をにらむ亮。

だが、亮介は気にした風でもなく、逆に我が子に残念そうな視線を向ける。

「（我が息子ながら、女を見る目が無えなあ、おめえはよ。ありやあ、飛びっきりのイイ女になる。つかまえとけ）」

「（いや、おれの趣味からはハズレるし、支倉には好きな奴が……）」

「

「（付き合ってたのか？）」「

「（へ？）」「

「（だから、嬢ちゃんはその、好きな相手と付き合ってたのかって聞いてんだよ）」「

「（ああ、いや。付き合ってたはいないはずだけど、結構べったりだよ）」「

父親の、いつにない剣幕に押され気味になる亮。

「（ならいける。きつちりアピールしつ振り向かせりゃOKだ）」「

「（いや、だからおれは……）」「

「（亮、理屈じゃあねえ。あの娘さんは、大した女になる。おめえじゃ釣り合わねえかもしれねえが、この際それはどうだっていい。問題は、あれだけの女に出会える機会は滅多にねえってことだ）」「

真剣に話す父親の言葉に、思わず耳を傾ける亮。

「（それとも、その相手には絶対に勝てそうもないのか？）」「

「（それは……）」「

そんな事はないと、言いたかった。

だが、それを口に出すことはできなかった。

Aクラス戦の、あの勝負。

あれを見てから、亮の中で、明久の評価が変わった。

それまでは、自分より頭が悪い、ただのバカだと思っていた。

一年の頃には同じクラスで、彼がバカをやるところを散々見てきたが、自分はおそこまでひどくない。

そう思っていたのだ。

だが、Aクラスとの対決で、高遠と対戦する明久を見て、正直勝てるわけがないと思った。

だが、戦う彼を見ていて、自然と声が出た。

『負けんじゃねー！！』

底辺のFクラス。

そのなかでも、明久は最底辺に位置する成績だ。だが、あの戦いっぷりはどうだ。

己も武の道の端に身を置くものとして、彼の戦いに、感じ入るものが確かにあったのだ。

あの日から、情性で学んでいた一条流棍術に真剣に打ち込むようになった。

腕前も徐々に上がってきている実感もある。

だが、それでも、自分が明久に勝てるとはとても思えなかった。黙り込んだ息子に、亮介は、軽くため息をつく。

「（相手は大した野郎らしいな。だがよ）」

堅い手のひらが、亮の頭に乗せられる。

「（俺は、おめえならそいつに勝てると信じてやるぜ）」

「（は？ な、なにを根拠に……）」

父の言葉に、亮は面食らう。

そんな息子を見て、亮介はニヤリと笑った。

「（根拠なんざネエ！）」

小声ながら、力強く言い切る父に、亮はずっこけた。

「（あ、あのなあ……）」

「（根拠はネエが、おれあ、おめえを信じる！ 父親だからな）」
続いた言葉に、亮は紅潮した。

しかし、先ほどの騒ぎを思いだし、ジト目になる。

「（つて、さつきあれほど疑っておいて言う言葉かよ……）」

「（オメエもたいがい、しつつけえなあ、オイ。まあ、いいや。とにかく、がんばってみろや）」

「（あ、ああ）」

亮は照れたように視線を逸らしながら返事をしてしまう。

と、そのとき悲鳴が上がった。

「ひ、ひばりちゃんっ?!」

引き上げようとするひばりに、春香は声をかけていた。

挨拶の仕方といい、しつかりしているが、どこか気になる。

いろいろ話しかけてみると、律儀に答えてはくれるものの、どうも、春香に対して壁を作ろうとしているのが感じられた。

さらに言えば、徐々に顔色が悪くなってきたようにも、春香には見えた。

「ねえ、ひばりちゃん？　あなた、顔色が……」

そう声をかけた瞬間、ひばりの足から力が抜けた。

当の本人も、なにが起きたかわからないという顔のまま床へと崩おれる。

「ひ、ひばりちゃんっ?!」

突然のことに春香が声を挙げる。

「どうしたいっ?!　春香っ!!」

「お袋っ?!」

春香の声に飛び上がった亮介と亮が、あわてて近づく。

「りよ、亮介さん、どうしましたっ?!　わ、私のせいで……」

「落ち着け、春香!　亮!　救急s y

「だ……だめ、びよ、病院は……い、イヤ……」

亮介の言葉を遮るように腕を持ち上げたひばり。

絞り出された言葉も終わらぬうちに、その腕が床へと落ちる。

「は、支倉!!」

「ひ、ひばりちゃんっ?!」

声を挙げる、亮と春香。

「お前等、落ち着きやがれ!」

一喝。

亮介の声に、亮と春香が身をすくませる。

「春香、奥に布団を敷いてくれ。亮はお嬢ちゃんを運ぶんだ」

「は、はい!」

「あ、ああ。親父はどうするんだ?」

亮介の指示に、亮はうなずき、春香はあわてて奥へと姿を消す。

「おれあ、源さんに電話してくらあ」

亮の問いに答えた亮介は、春香の後を追うように奥へと姿を消した。

そこで亮はハツとなる。

少しだけニヤケそうになったが、ひばりの苦しそうな顔を見て、自分の顔面を思いっきり殴りつけた。

軽く鼻血が出た。

「過労じゃな」

聴診器を外しながら、初老の医者が春香に告げる。

「無理をし過ぎたんじゃろう。体格相応の体力しかないようじゃし、周りが気をつけてやらねばな」

「すいません、平賀先生」

「なに、構わんよ。見れば、孫の源二と同じ、文月の生徒のようじやしの。親御さんには連絡が付いたのかね？」

「ええ。亮がお友達伝に連絡したようなんだけど、すぐには来れないようなんです」

「なんじゃと？ 娘の大事に……」

春香の言葉に、平賀源三郎は声を挙げかけるが、春香が首を振って、それを制する。

「亮も知らなかったようなんですが、ひばりちゃん、支倉さんのお母様は亡くなられているんだそうです。それで、お父様はタイミン
グ悪く、海外出張だそうで……」

「なんと……」

源三郎は額をぴしゃりと打って押し黙った。

「で、隣家のお子さんが、懇意にされているという話ですので、こちらに迎えに来てくれるそうなんです」

話を聞いて、源三郎は重く息を吐く。

「やれやれ、どうしたものかのう」

奥ではそんな話が為されていたが、中華料理屋『花泉』には関係ない。

本日もなかなかの客の入りで、亮も手伝いに駆り出されていた。と、店の戸が開けられた。

「いらっしや……っと、吉井、着いたか。親父！」

「おう！ 裏に案内してやんな！」

亮に声をかけられた亮介は一瞥しただけで、用件を察したらしい。中華鍋を振るう手を休めずに指示を出す。

亮も心得たもので、邪魔にならぬように明久を連れて店を出る。

「こつちだ、吉井」

そのまま明久を裏手に案内する亮。

「ありがとう、須川君」

明久は、案内してくれる亮にお礼を言う。

「……いや、いいさ」

しかし、亮は、胸中に複雑な思いが膨れ上がることを自覚していた。

裏に位置する、生活用の玄関をくぐる二人。

「お袋、平賀先生、吉井を連れてきたぞ」

三和土から声をかける亮。

「あがつて貰ってちょうだい」

春香は手を離せないのか、声だけ返す。

「じゃ、吉井。おれは店の手伝いに戻るから」

「うん、本当にありがとう、須川君」

明久の声を聞きながら、亮は逃げるようにその場を後にした。
「失礼します」

軽く会釈しつつ、一声かけてから須川家にあがる明久。

「おう、小僧っ子、こつちじゃ」

白衣姿の初老の男性に声をかけられ、明久はそちらに向かう。
廊下を歩いて奥まで行くと、開いた障子戸の部屋に着く。

戸は開いており、部屋に敷かれた布団に、ひばりが寝かせられていた。

そのそばに、女性が一人座っている。

明久は軽く頭を下げて挨拶した。

「お邪魔します。須川君のお姉さん。ぼくは吉井明久と言います」

明久の言葉に、女性の顔がほころぶ。

「あら、お上手ね。初めまして、亮の母です」

丁寧に頭を下げる春香。

その言葉に明久は驚きの声を挙げる。

「す、すいません。お若く見えたのでてつきり……」

「はっはっは、春香ちゃんはまだ女子大生くらいで通用するからな」

明久の勘違いに、源三郎が笑い声を挙げるが、すぐに春香にたしなめられる。

「源さん、お静かに」

「おおっと、こりやすまん」

注意された源三郎はばつが悪そうに頭を掻く。

その様子に、明久は小さく笑みをこぼす。

それが目に入ったか、源三郎は取り繕うように咳払いした。

「うおっほん。とりあえず診察の結果を伝えるから、中にへえれ」

促されて入室した明久は、そのままひばりの眠る布団の横に正座した。

源三郎は、明久の正面に、どつかと腰を下ろし、あぐらをかく。

「結論から言やあ、ただの過労だ。栄養剤も打ったし、じきに目を覚ますだろうよ」

「そうですか、ありがとうございます」

明久は、正座のまま頭を下げる。

「大事は無えと思うが、気になることがあってな。お前さんを待つ

てたんだ」

「気になること？」

源三郎の言葉に、首を傾げる明久。

「亮介……亮の親父さんな、最初は救急車を呼ぼうとしたらしいんだが、このお嬢さんは朦朧としながらも拒否したらしい。オメエさん、なんか知らねえか？」

聞かれて渋面を作る明久。

「たぶん……ですけど、死んだ母親を思い出すんだと思います。ひばりのお母さんの美空さんは、自分が入院して大変なのに、ひばりのことをいつも心配していて、ひばりもそれが分かっていたから、心配かけないようにって、いつも言っていましたし。朦朧として、混同したのかも……」

とつとつと推論を述べる明久。

「なるほどなあ、母親を思い出していた訳かい」

源三郎は得心がいった顔で春香の方を見る。

つられて明久がそちらを見ると、ひばりの小さな手が、春香の着物の裾を、しっかり掴んでいるのが見えた。

ひばりは、夜遅くに目を覚ました。

源三郎はすでに帰ってしまっていたが、須川家の面々に、ひばりは何度も頭を下げていた。

明久と共に、タクシーで帰途につくひばりを見送る亮。

それに亮介が声をかけた。

「なるほど、あれがライバルってわけだ。確かに強敵かもなあ」

「そんなんじゃないよ」

亮はぶっきらぼうに言うが、その顔を見て、亮介は意味有りげに微笑んだ。

第二十問（後書き）

第二十問、如何だったでしょうか。

ここで大ボカの謝罪を……須川の父親の名前ですが、前話でなぜか亮平と表記してましたがこれは間違いです。今回の話で出てきた、『須川亮介』の方が正しいです。

原作未登場キャラの名前に正しいも間違いもないと思われるかもしれませんが、『バカひば』では、こういう設定でいきますので、ご了承ください。

第二十一問（前書き）

第二十一問、更新しました。

読んで下さるみなさんが、楽しんでいただければ幸いです。

第二十一問

「ふっ、せいっ！」

朝日が昇り、河原で棍を振るう少年を照らす。

棍が風を切る音が響き、足が、砂利を力強く踏みしめる。

「はっ、せいっ！」

気合いと共に、手にした棍を、軽く旋回させながら踏み込む。

鋭い風切り音が響き、砂利をこする音と共に空を貫く音が突き抜けた。

突き出された棍の先端を睨みながら一泊の間。

ゆっくり引き戻し、残心。

「っ……ふう」

練習用の棍を振り回していた少年、須川亮は、朝一の練習メニューをこなし、手ぬぐいで汗をぬぐった。

「支倉の奴、あれからどうしたかな……」

爽やかな朝日を受けながら、晴れ上がりそうな青空を見上げ、軽くつぶやく。

クラスで一番小さいながらも、一番目立つクラスメイトの女の子。明るく、活達で、なんにでも率先して行動を起こす。

誰に対しても公平で、優しく、頭も良い。

クラス内には本気で女神扱いしている奴まで存在する。

そんな彼女が倒れた。

それも、亮の自宅で。

気にならないわけではない。

取りも直さず、クラス代表の坂本と担任の西村教諭、少女にもっとも近い少年、吉井明久に連絡した。

坂本は、いつになく真面目な声で『わかった』と答えていた。

西村には連絡したことにお礼を言われ、後は任せるようになされた。

そして吉井は、彼女を迎えに来た。

そこまで考えて、亮は胸がざわめいていることに気づいた。

「……はあ、なんだかなあ」

自身の好みの範疇に、あの小さな少女は入っていないはず。

何ともいえない気分で視線を落とす。

と、声がかけられた。

「おーい、須川くん」

明るい声に振り向くと、バカみたいに晴れ晴れとした笑顔で、手を振りながら近づいてくる、ジャージ姿の少年がいた。

「吉井……？」

普段の彼のイメージに似合わぬ、ランニング姿に軽い驚きを覚えつつ、棍を握った右手を挙げて答える亮。

軽く汗をかいている明久は、彼のそばまで来て、足を止めた。

「おはよう、須川君」

「お、おう」

予期せぬ、朝の邂逅に戸惑う亮。

「須川君、朝からなにしてるの？」

屈託のない笑顔で訊ねる明久。

「おれか？ 見てわかんねーか？」

言いながら、少し格好を付けて棍を構えてみせる。

それ見た明久は、少し考えて答えた。

「……ふっふっふ、いつもの僕なら、ここに洗濯台がないことにも気づかずに『洗濯物』と答えるところだけど、今日の僕は、ひと味違う！」

握り拳を握って力説する明久。

「今日の須川君は、その11フィート棒を持って、トラップを探す訓練と見た！ フッフ、我ながら冴えわたる推理だ……」

「いや、思いつきり明後日どこで済まない回答なんだが……」

どこをどう推理したら辿りつく回答なのか、さっぱり理解できない答えが飛び出し、亮はげんなりとする。

「こいつは六尺棍だ。11フィートじゃねえ。で、おれがやってるのは」

言っが早い、素早く棍を旋回させ構える。

「棍術の練習だ」

「こんじゅつ？」

今一わからなかったらしい明久は、首をひねる。

亮は、軽く苦笑して構えを解き、六尺棍を肩に担いだ。

「こういう長い棒を使う武術だよ。一条流って流派なんだが、まあ、マイナー所だからな。聞いたこともないだろうが……」

「へえ」

「本来は杖術っていつて、この半分ほどの長さの杖を用いる流派だったんだけどな。槍術に通ずる棒術と組み合つて、棍術になつたらしい。ほかにも木刀や剣術、拳闘術への派生まであるんだが……つて、着いて来れてるか？」

自身の習う流派に興味を持たれて嬉しかったのか、亮が饒舌になる。

が、明久は着いていけないようだった。

「……よ、要するに、すごい棒を扱う武術ってことだね」

「もうそれでいいぞ……」

あきれたように息を吐く亮。だが、気になることも有るため、話題を振ってみる。

「しかし、吉井が早朝ランニングとはな。今まで見かけなかったが、始めたばかりか？」

「いや、もうひと月くらいになるかな？ 体力作りのためにね。今

日は気分を変えようかと思つて、コースを変えてみたんだ」

「ふん」

話題を振っておきながら、明久の返答に気のない返事を返す亮。

だが、明久は気にした風でもなく、話を続ける。

「俊夫に頼んでさ、いろいろ教えてもらつてるんだ。僕にあったトレーニングメニューとか作ってくれてね。僕、そういうのダメだ

からさ、すごい助かってるんだよ。感謝してもしきれないなあ」

ニコニコしながら話す明久。

その顔に、軽い苛立ちを覚えなくもなかったが、俊夫にアドヴァイスを貰っていると聞いて驚いた。

Fクラスのクラスメイトでもある前田俊夫は、武に身を置く者の間では、そこそこの有名だ。

天才的な武のセンスを持ち、中学時代はストリートファイトでならしていたらしい。

非公式で、何人かのプロ格闘家や武術家との試合をして、その大半に勝利したとか。

噂の域を出ないので、眉唾ではあるが、本人に聞いてみたところ。『はは、さてな』

などと誤魔化された。

そんな彼は、彼自身が主催する自由格闘同好会においても、何かを教えたりすることはないらしい。

だが、俊夫は明久のことが気に入っているらしく、よく声を掛けている。

そのうえ、彼にだけ助言を与えており、なぜ、そこまで明久に肩入れするのは、亮にはわからなかった。

「で、どんなことを教わってるんだ？」

何気なく聞いてみる亮。

それに対して、明久は軽く思索して答える。

「結構、いろいろ教わったよ？ 木刀の握り方や振り方。相手と対峙した場合、全体を見据えて、行動を予測する。体で打撃を受ける場合、どう受けるのかな」

意外に地味ではあるものの、高度でテクニカルな事を教えられているようだ。

「……なんか、技とかは？」

探るように訊ねる。

「一個だけ、簡単な教わったよ」

そういうと、明久は構えてみせる。

「ほんと、変わった踊りみたいなのを覚えなきゃいけないんだけど、僕は覚えが悪くてね。出来るのはこれだけ」

苦笑いしながらピタリと構えが決まる。

この時点で、亮は軽い驚きを感じていた。

構えが安定していたからだ。

習いたての頃などは、大概構えがブレたりするものだが、今の明久の構えは悪くない。

スイッチも入ったらしく、集中しているのが分かる。

左足を軽く前に出し、右足に重心がかかる。

腰を落として、軽く前傾しながら正面を見据え、両の手は、軽く五指を揃えた状態で左をやや上に、右をやや下に、軽く突き出すように持ちあげた。

その左足が前へ出ると同時に、両手が軽く握られ、左手は外へ巻き込むように回転しながら、腰の旋回に合わせて引かれ、右手は捻り込むように前へ軽く突き出される。

すべての土台となった右足は、最後に踏み切られ、最初に着地した。

業を見せられた亮は、呆気にとられた。

わずか一ヶ月で、これだけ動けるとは、到底思えなかった。

「……吉井、それ、どれだけ練習したんだ？」

亮は思わず訊ねていた。

問われた明久は、キョトンとした顔になったが、すぐに答える。

「暇があれば練習してるよ？ このひと月で教えて貰ったのはこれだけだから、これしか練習できないしね」

おそらく、ひと月の間、バカ正直にこれだけを練習したのだろう。無論、妙な癖がつかないように、俊夫がその都度矯正したのだから、恐るべき集中力、恐るべきバカさ加減、恐るべき素直さである。

「そうか……まあ、がんばれ」

そう言いながらも、棍を握る手は白くなっていた。

「うん！ がんばるよ！」

屈託のない、子供のような笑顔。それを見て、眉をしかめたことを自覚した亮は、軽く棍を振り回す。

「さて、おれはまだここで練習を続けるんだが、吉井はランニングに戻らなくていいのか？」

「え？ あ、うわしまった！ じゃあ須川君、また学校で！」

亮に指摘されて、慌ててランニングに戻る明久。

少し見送って、亮はしまった？！ という顔になり、軽く嘆息する。

諦めるように頭を降り、棍を振ろうとしたとき、彼に声がかかった。

「おい、須川くん。昨日はありがとうー！ ひばりもお礼を言っていたよ！」

亮に向けて、大きな声で話す明久。

その行動に苦笑して、亮は棍を持ち上げる。

「それから、昨日、鉄人と話して、大事をとって、ひばりは今日、学校を休むことになったから！ じゃあ！」

言うべき事は言ったとばかりに、亮に背を向けて走り出す明久。それを見て、亮は棍を構えて、突きを放った。

明久の背に向けて。

しかし、距離もあったため、明久はそれに気づくことなく走り去っていった。

「……はあ。何をやってるんだ？ おれは」

構えをほどこき、深く息を吐いた亮は、棍を両手で持って、軽く自身の頭を叩いた。

そして、雑念を払わんとばかりに棍を振り始めた。

朝の学園。どのクラスも祭りの準備で大わらわだ。

Fクラスもその例に漏れなかった。

明久が戸をくぐると、教室には、半分以上のFクラス生徒が作業をしており、雄二が指揮を執っていた。

「……ゆ、雄二？ どうしたのさ？ 学園祭には興味ないって……」

「おお？ 明久、流石に早いな。早速で悪いんだが、その畳の山を空き教室まで運んでくれ」

「って、何枚有ると思ってんだよっ？！ バカ雄二！」

「冗談だ。怒るな」

雄二はイタズラが成功したと言わんばかりに破顔する。

「ほかの連中と協力して運んでくれ。今日はまだ授業があるから、半分は残すが」

指示を出した雄二は、明久がまだ動かない事に気付く。

「どうした……」

「どういう風の吹き回しだよ」 明久は、鋭く雄二を見つめる。

「……支倉に……」

「え……？」

視線を逸らしてつぶやく雄二に聞き返す明久。

すると雄二は、あわてて明久に背を向ける。

「支倉に全部押しつけたような格好だったしな……その……なんだ」
歯切れの悪い雄二に、明久は何か思いついたらしく、雄二に声を掛けた。

「もしかして責任感じてる？」

「……」

押し黙る雄二。

明久はニヤリと笑った。

「へえ……」

珍しいこともあるとばかりに口に手を当てる。

雄二は、心底イラついた表情で振り向くと、明久の尻に向けて、容赦のない蹴りを見舞った。

「ぎゃうんっ?!」

明久は、犬のような悲鳴を上げて飛び上がる。

「ボケツとしてないで、とつとと運べ! このバカ! もたもたしてつと、もう一発食らわすぞ?!」

凄みをきかせた雄二にビビった明久は、あわてて畳を運びに走った。

「……たあく」

雄二は軽く息をついて明久を見送った。

すると、入れ替わりに亮が教室に入ってきた。

「なんだ? 坂本。結局陣頭指揮か?」

「ま、そうだな。やらないわけにはいかんだろ。昨日の一件を聞いてしまったらな」

そう言つて息を吐く雄二。

その顔には、わずかに後悔がにじんでいる。

「まあ、そうだな。今日は全員、早めに登校してくるんじゃないか?」

「かもしれん。俺もかなり早く来たつもりだったんだが、横田あたりはもう居たからな」

雄二は、今朝のことを思い返しながら言う。

亮は、それを聞いて苦笑いした。

「そうか。それで吉井から聞いたんだが、支倉は今日休みらしいぞ? 大事をとつてということらしいが……」

「ああ、鉄人に提案したのは俺だからな」

その言葉に亮は驚いた。

「お前が? 一体どうして……」

「支倉のことだ、今日登校してきたら、また、いろいろやり始める。それじゃあまた倒れるかもしれん。なら、いつそ一日休ませて、明日から頑張ってもらえばいい」

それを聞いて顔をしかめる亮。

「しかし、それじゃあまた……」

「なんだ？　ずいぶん気にかけるじゃないか須川。惚れたか？」
亮の様子に気付いたか、雄二がニヤニヤしながら訊ねてくる。
「バカ言うな。昨日はおれの家で倒れたんだぞ？　心配す……」

『『『ナニイツツ?!』『』』』

突如周囲から吹きあがるオーラと怒号。

『我らが小女神リトルゴッドネスが須川ごときの家に?!』

『おのれ許すまじ！　鬼畜須川亮!!』

『こ、殺せええっ!!』

『ひばりタソ、ハアハア』

「し、しまった……」

思わず後ずさる亮。

『しねえええーっ!!』

『サーチアンドデエースッ!!』

『ケエッヒヤッヒヤッヒヤッ!!』

襲い来るクラスメイトをかくぐり、脱兎のごとく逃げ出す。

「おまえらー、程々にしとけよー」

そんな集団を見ながら、雄二はどうでも良いと言わんばかりの顔で見送る。

『ちつくしよおおおおー……っつつつつ!!……!!……!!』

彼方から、亮の叫ぶ声が聞こえてきた。

生徒指導室。

明久は、西村教諭にひばりの様子を伝えに来ていた。

「……というワケなんで、今日一日休めば大丈夫そうです」

「そうか。それは良かった。すまんな吉井。支倉は進んで手伝いをしてくれるものだから、俺たち教師陣も、なんやかやと細々したことを頼んでしまっていたからな。俺だけでなく、ほかの先生達も心配していたぞ」

済まなそうに言う西村教諭の前に、紅茶が出される。

そんな西村教諭に明久はかぶりを振った。

「いえ、僕も近くにいたのに気づけませんでしたから。幼なじみ失格です」

そう言っつてうなだれる明久。

その前にも、ティーカップに入った紅茶が出された。

「まあ、何にせよ、これからはみんなで気を付ければ良いよん」

うむん、良い香りだよん」

そう言っつて、配膳をしていたクリスは席に着きながら紅茶の香りを楽しむ。

「……」

「……」

黙り込む明久と西村教諭。

「おおう、お茶受けを忘れてたよん」 確か、こっちの棚にクッキーが……」

手慣れたように戸棚を開けて、クッキーの入った箱を取り出すクリス。

「うむん」 あったあった」 ほう、アッキー。クッキーだよん」

「あ、どうも……」

戸惑うように返事をする明久。

クリスはニコニコしながらクッキーを頬張った。

「うむん♪ ベりい、でりいしやす♪ だよん♪」

「……随分馴染んでるね、クリス」

明久は思い切って訊ねた。

「うむん？ おねーさん、暇なときはにしもーの所でくつろいでるんだよん♪ 紅茶も良い葉っぱ使ってるしねい」

「それじゃあ先生。僕はこの辺で」

「待て、吉井。お前、なんか勘違いしとらんか？」

「……やだなあ、西村先生とクリスが、道ならぬ関係だなんて、これっぽっちも思ってますんよ」

逃走する構えを見せながら、顔を逸らして言う明久。

それを聞いて、西村教諭が慌てて立ち上がる。

「それは勘違いしているだろうがっ！ ウエストロード！ お前も何とか言わんか」

「うむん？ そーなんよ、アッキー。ああ見えて、にしもーってば、ナカナカ夜は激しくっ」

鋼鉄製のハンマーで、石を殴った音がした。

「い、痛いよん？！ げんこで殴るっ！？ 女の子をつ？！ 普通っ？！」

「やかましい！ ウエストロード！ お前はふざけすぎたっ！ そして吉井っ！ 逃走準備をするな」

「ちくしょうっ！ こうなったら、放送室に立てこもって、鉄人とクリスが、教師と生徒の垣根を越えた、男と女の付き合いをしているって、全校放送してやるっ！」

「待たんか吉井！ それはお前の誤解だ！ 俺とウエストロードは、教師と生徒の関係だ！ それ以上でもそれ以下でもない」

「ウソだっ！！」

「ええい、最近良くなってきたと思えば、これかっ！ そもそもお前は……」

生徒指導室の騒ぎは終わりそうになかった。

クリスは、涙目で頭をさすると、カップに口を付けて喉を潤す。

「（ちえー、割とマジなのになあ……）」

カップを離すと同時につぶやかれたクリスの言葉は、喧噪にかき消され、誰の耳にも届かなかった。

「し、死ぬかと思ったぜ……」

「よお、ごくろーさん」

追撃部隊を撃破して教室に戻ってきた亮を、雄二はどうしても良さに迎えた。

「さ、坂本……冷たすぎないか？」

「ん？ おお、悪いな。明久が居ないもんで、ついな……」

亮の言葉に、雄二が苦笑いする。

「おれはアイツの代わりかよ……」

どこことなく無然としてつぶやく亮。

「？……どうした？ 須川」

そんな亮の様子に気付いてか、雄二が声をかける。

「いや、何でもない。それより坂本に用事があつたんだよ」

「俺に？」

「ああ、中華喫茶で使う機材とか、材料費のことな。お前に言っていた方がいいだろ？」

「ふむ。聞こうか」

亮の話に、雄二はまじめな顔になる。

「……てな訳で、器具にしろ材料にしろ安く出来そうだ」

「そいつは何よりだ」

雄二は満足げにほえむ。

「あとな？ ウチで使ってた、古いテーブルとイスを譲ってくれるってよ」

続いた亮の言葉に雄二は驚いた。

「本当か？」

「ああ。補修は必須になるだろうが、まだ使えるはずだ」

「そいつは大助かりだが、いいのか？」

「ウチの両親が支倉を気に入っちまってな。なるべく協力したいんだとさ。それに処分待ちのものだからな」

それを聞いて雄二が納得する。

「なるほど、今時処分するにも金がかかるしな。祭りで出たゴミの処分は学園もちだからそれに便乗か」

「そういうことだな。まあ、運ぶのは俺たちでやらなきゃならんが、それでも助かるには違いない」

「リヤカーは俺が手配しよう」

「で、もうひとつ。これは俺からの提案なんだが、屋号を決めないか？」

亮の言葉に、雄二の眉がはねる。

「中華喫茶なんて珍しいもん他にやってるとは思えんし、必要は…」

「いや、要、不要の問題じゃなくてな、まあ、クラスからあいつへの礼みたいなものかな？」

「……なるほど、そういうことか。なら候補は、……じゃないか？」

亮の言わんとすることを察した雄二はニヤリと笑って、ソレを拳げる。

「げ……先に言われた。安直かとは思ったけどさ」

「いや、割と良いと思うぞ？ そーかそーか、ならあれも題材を変えるか。おーい加藤」

だんだん雄二はノリノリになってきて、その顔は、イタズラを思いついた子供のようになっていた。

「お、おい、坂本？」

亮は不安になって、雄二に声をかけるが、雄二はすでに聞く耳持たずに、武に指示を出す。

「……ということなんだが、今から大丈夫か？」

「大丈夫です。まだ、さっきの題材も構図すらありませんでしたから」

「そうか。じゃあ頼んだぞ？」

「ええ。しかし彼女、驚くでしょうね？」

「ああ、今から楽しみだぜ……」

「おいおい、アイツをからかうために提案した訳じゃないぞ？ 坂本」

「わかってるって。きつと喜ぶさ」

そう言った雄二はイイ笑顔をしていた。

翌朝。

ひばりは、明久とともに教室に入った瞬間、呆氣にとられた。そこには、Fクラスのメンバーが大きめの看板を構えて待っていたからだ。

そして、看板には、こう書かれていた。

“ ようこそ！！ 中華喫茶 『雲雀』 へ！！ ”

「え？ え？ え？ えええええー！ つつつ？！？！？！？」

その日、文月学園にちっちゃな少女の大きな声が響きわたった。

第二十一問（後書き）

第二十一問、いかがでしたでしょうか？

ついにクリスの本命がつ！！

まあ、あきらめ気味ですけどね。

あと、中華喫茶の名前ですが、Fクラスの面々は“うんじゃく”
と言っています。

でも、本当の読みは“ひばり”（笑）。

第二十二問（前書き）

第二十二問、更新しました。

読んで下さる方が楽しんでくれたら幸いです♪

第二十二問

「うー」

「ひばりったら、まだ唸ってるのね？」

「だって、美波ちゃん。恥ずかしいよ」

そう言って、ひばりは少し涙目になった。

準備期間を終え、清涼祭当日の朝。

二年Fクラスの出し物、『中華喫茶“雲雀”』も準備が終了していた。

古い木造の教室は、中華風に装飾されており、なかなか清潔な印象を受ける。

室内の各所には雲雀が舞い踊り、さえずり、遊ぶ姿を描いた絵も飾られている。

廊下に面した壁には、美術部所属の加藤武の手による、梅の枝をくわえた、二羽の雲雀の描かれた、大きな絵が張り出されていた。

室内の雲雀の絵も、彼と彼に頼まれた、手すきの美術部員たちの手で描かれた、逸品である。

入り口の上には、『ようこそ！ 中華喫茶“雲雀”へ』と書かれた看板が取り付けられている。

床置き看板も設置されており、後は開始の合図を待つばかりだ。「それにしても、坂本の統率力はすごいわね」

「うん、坂本君が陣頭に立ってくれたからは、あたしはサポートに専念できたしね」

美波とひばりが話す通り、雄二が指揮を執り始めたFクラスの準備は、急ピッチで、かつクオリティを落とさず進化した。

ひばりもそのアシストでかなり動いてはいたものの、倒れたときと比べれば、大したことはないレベルだ。

「うん。やっぱり坂本君はすごいよ。カリスマ性もあるけど、仕事の振り分けとか、手配したりとか、一人で全部やれちゃうんだもの」

「そうね。ウチじゃ、絶対に無理ね。そういえば、その坂本は？」
「えっ?! な、なんか学園長に話があるとか言っていたような…」

…」
本当は例の件で科目指定しに行っているのだが、そんなことを言えるはずも無く、ひばりは何とか誤魔化そうとする。

美波も、特に思うところがあるわけでもなく、『ふん』と返しただけだった。

しかし、ウソが苦手なひばりは、内心の焦りがヒドいらしく、やや引きつり気味の笑顔を浮かべながら、冷や汗を流していた。

「ちーっす、明久いるか?」

不意に声をかけられて振り向く二人。

すると、そこには、小柄な少年が立っていた。

美波の視界には、バサバサの髪の手つちよくらいしか入らず、思わず視線を下げていた。

少年は、ひばりの顔を見ると、浅黒い顔に笑みを浮かべ、左頬に張られた絆創膏も持ち上がった。

「おっす、支倉」

軽く手を挙げて挨拶をする少年。

ひばりは彼の顔を見ると、軽く驚く。

「あ、牧野君だ」

「知り合い?」

ひばりの反応を見て、美波が聞いてくる。

「え? うん。おなチュー……じゃなくて、あたしやアキくんと同じ長月中でクラスメイトだった子だよ。久しぶり、元気だった?」

「あつたりまえだぜ! このバスケット部のホープ、牧野慎吾様は風邪すら引いたことがないからな!」

胸を張る少年に、美波の目が憐れむようなものになった。

「……こ、琴代ちゃんは元気?」

「おう、元気だぜ? つーか、俺も琴代も、隣のEクラスなのに、覗きにもこねーのな。薄情な奴」

「い、いや忙しくて……」

「冗談だよ。俺や琴代が、ソレぐらいで怒る訳無いだろ？　ただ、琴代は寂しがっていたけどな」

「少しだけ怒っている風な慎吾に、ひばりは申し訳なさそうにする。う。こ、琴代ちゃん、泣かなかった？」

「……我慢してたけどな。お前、少し前に倒れただろ？　アレ聞いたら泣き出しちまって、一日中泣き通しだったぜ。おかげで学祭の準備にまで影響が出て、ウチの代表に俺が怒られたぜ」

と、ため息をつく慎吾。

それを聞いてひばりは青くなる。

「そ、それは……ほんとにゴメン」

そう言って頭を下げるひばり。

美波はその様子を苦笑しながら見ていたが、不意に差した黒い影にたじろぐ。

ひばりはそれに気づいていないが、慎吾は影の方を見て、ニヤリと笑いながら指さした。

「ま、それはお前の後ろにいる奴にも行ってやるんだな」

「え……ま、まさか……」

「ひばりちゃん!!」

「ッ?!」

突然の声に振り向くと、癖のある、長い黒髪をオールバックのようにしてヘアバンドで留め、おでこを出した、大柄な女の子が、涙目で自分を見ていた。

「こ、琴代……ちゃん？」

顔から血の気が引くひばり。

「ひ、ひばりちゃん……」

ぐすぐすと鼻をすすりながらひばりを見つめる、大きな少女。

「げ、元気そうだね……」

軽く視線をはずしながら声を掛けるひばり。

「ひ、ひばりちゃん……」

涙目で繰り返す。

「ご、ごめんね？ 顔見せらんなくて……ちよつと色々やることがあつて……」

美波は、その様子を訝しんで見ていた。

いつもと比べて、**歯切れも悪く、拳動も不審だ。**

「え、え、え、つと、琴代ちゃん？ 聞いてr……」

反応が鈍い琴代が気になり、彼女へ一歩近づくひばり。

その一歩が、デッドラインだった。

「ひばりちゃああゝゝゝん!!」

叫ぶと同時に、両手を広げてひばりに飛びつく琴代。

「みぎあつ?！」

避けようとしたひばりだったが、一步の差で抱きすくめられてしまふ。

全力で。

[illegible]

「じゅどよんぐるじい」

身長が188cmある琴代に抱きしめられたひばりは、ほとんどその姿が見えなくなるほどに彼女に覆われる。

わずかに、じたじたしている両足と、長いポニーテールだけが見えていた。

その様子に呆気にとられるFクラスメンバー。

慎吾はやれやれといった調子で方をすくめた。

と、彼らに近づいてくる声が聞こえてきた。

「ほら、やっぱりだよ姫路さん」

「ほんとに慎吾君と琴代ちゃんです！」

優しいながらも、どこかネジが一本抜けたような顔の少年と、ピンク色の髪に優しい表情と自己主張の激しいお胸の少女だ。

「よお。明久に姫路もか？ 久しぶりだな」

「久しぶり、慎吾」

「お久しぶりです、慎吾君」

親しげに会話を交わす、慎吾と、明久な瑞希。

それを近くで聞いていた美波は、少し驚いていた。

「アキ、瑞希、二人ともこの子たちと知り合いなの？」

「はい」 同じ長月中の出身なんですよ？」

「うん。中学の時の“仲間”さ」

その言葉で、美波はピンときた。

「（てことは、例の乱闘の時も？）」

「（あ？ なんであんたが知ってたんだ？ おい、明久、姫路）」

声を潜める美波に合わせて、慎吾も小声になる。

その慎吾の問いに、明久が口を開いた。

「（その件に関しては、Fクラスは全員仲間だよ）」

そう言つて軽く笑い掛ける明久。

その笑顔をうけて、美波が口を開いた。

「ウチの名前は島田美波よ。よろしくね？ 牧野」

「おう、牧野慎吾だ。改めてよろしくな！」

慎吾も不適に笑い、サムズアップしてみせる。

「おぬしら、なにをしておるのじゃ？」

「騒がしいですよ？ 何事ですか？ って、支倉っ？！ その君

！ なんて羨ましいこと……ではなく、支倉が潰れますっ？！ 解
放しなさい！」

「いやあああっ！！」

騒ぎを聞きつけて、秀吉と新田もやってくるが、ひばりの惨状を
見て、新田が声を挙げる。

それに対して琴代は、嫌々をする子供のように泣きじゃくった。

これを見ていた慎吾は、一つため息をつく。と琴代の前まで移動する。

「オラ、琴代！」

言うが早いか、軽い調子で跳躍する。

琴代の身長は188cm。

対する慎吾の身長は148cm。

その差40cmをものともせず、水平に伸ばした右腕が、琴代の額辺りの高さにまで届いた瞬間。

デコピンをかました。

「っおあふ」

その衝撃で、思わずひばりを取り落とす琴代。

いきなりだった為、体制を整えることも出来ずにしりもちを着くひばり。

「わひゃう」

などと、妙な悲鳴も挙がる。

「あうううう、いたいよあゝシンくん」

琴代もしりもちを着いて額を両手で押さえていた。

その目の前で、ひばりがへたり込んだまま、目を回している。

「あゝえゝいゝうゝえゝおゝあゝおゝ」

ぐるぐると目を回したままのひばりを見て、一同が苦笑いした。

「あー！ 瑞希ちゃんと明久ちゃんだゝゝ 久しぶりゝゝ」

瑞希と明久を見つけた琴代は、半泣きになっていたことも忘れて笑顔になる。

それを見て、二人は軽く苦笑いしながら顔を見合わせた。

そして、揃って琴代を見ながら、懐かしそうに笑う。

「うん、久しぶり。如月さん」

「お久しぶりです。琴代ちゃん」

二人に挨拶されて、琴代は嬉しそうに立ち上がると、両手を広げて二人に飛びかかる。

「えっ?! ひゃうぐ?」

「うわっ?! しまつぐえ?!」

「瑞希ちゃんと明久ちゃんだあゝ」

不意をつかれて二人は琴代に抱きしめられる。

『おい! 吉井がおいしい目に遭つてるぞ』

『なんだとっ?! 吉井め! 煮えたぎった油で顔を洗わせてやる!』

『いや、屋上から紐無しバンジーだ!』

『くそおっ! 俺も抱きしめられたい!』

『オレは支倉を抱きしめたいですね』

周囲から声が挙がるが、とうの明久と瑞希はそれどころではない。二人揃って万力に挟まれたように身動きもとれずに、彼女の胸に押しつけられており、感触がどうこう言う以前に、呼吸もままならない。

「みゝずきちゃゝんゝ あつきひさちゃゝんゝ」

二人を抱きしめて、琴代はご満悦だ。

だが、息が出来ない二人の命の火は、風前の灯火と化していた。

「……琴代、もう一発いつとくか?」

その声に、琴代はビクリと体を震わせ、二人を抱えたままそちらを振り向く。

遠心力で浮き上がった明久と瑞希の足は、すでにぶら下がっているだけに見えるが、気にしてはいけない。

「シ、シンくん。デ、デコピンは痛いからやめようよ」

「じゃ、二人を放せ」

「で、でもでもでも、瑞希ちゃんなんだよ?! 明久ちゃんなんだよ?! ふわふわのふにふにでゆるゆるすべすべなんだよ」

「！」
ジト目でデコピンの構えをとりながら近づいてくる慎吾に、琴代は涙目で訴える。

「……こ・と・よ？ 俺の言うことが聞けないのか？」

「は、はうはうあうあう……ごめんなさい……」

小さな体から発せられた怒気に、大きな琴代が身体をちぢこませる。

そして、瑞希と明久の二人が解放された。

「し、死ぬかと思いました……」

「ゆ、油断した……如月さんの抱きつき癖、忘れてたよ……」

ふたりとも床にへたり込んで、思う様空気を吸い込んでいる。

「……つたく、お前は」

「ご、ごめんなさい……」

怒られてしょんぼりとなる琴代。

それを見ていて、慎吾は、何か思いついたような顔になる。

「……琴代、お手」

「わふ」

出された慎吾の手に、軽く握られた琴代の手が置かれる。

「お座り」

「わふ」

ぺたりと床に座り込む琴代。

「伏せ」

「わふ」

躊躇無く伏せの姿勢をとる琴代。

というか、スカートがヤバいことになっている。

「チ……」

スパアンツ！！

小気味の良い音と共に、慎吾の頭がブレる。

「琴代ちゃんに何させようとしてんのよっ！！ このバカ慎吾っ！
！」

【小鳥丸】片手に、慎吾を怒鳴りつけるひばり。

「おうぐおおおお、は、支倉、復活したのかって言うか、そのハリセンはなんなんだ……さっきまで無かったはずだぞ……」

「企業秘密です。っていうか、用事があつたんじゃないの？」

【小鳥丸】を肩に担いだひばりが呆れたように言うと、慎吾は、ポンと手を打った。

「お？ おー、そうだった明久に話があつたんだ。明久！」

「？ なに？ 慎吾」

呼ばれてやつてくる明久。

明久を見て、慎吾は真剣な顔になって口を開いた。

「お前に、話しときたいことがあるんだ」

「僕に？ いったい何？」

ただならない雰囲気を感じ取り、明久も表情を引き締める。

「ああ、ここじゃ、なんだから向こうでな」

そう言つて、明久を連れ立って移動しようとする、当然のように、ひばり、瑞希、美波、琴代がゾロゾロと着いてくる。

慎吾は、顔を引きつらせながら足を止めて振り返る。

「悪いな、二人きりで話したいんだ」

「……えっ？」「……」

驚く四人。

「悪いな、支倉。明久借りてくぜ」

「あ、アキくん、慎吾君、信じていいよね」

明久と慎吾に、謎の言葉を投げかけるひばり。

「あ、明久君……私、信じてますから」

「ア、アキはもっと女の子に興味を持つべきよ。そっちへ行くなんて、美春と変わらないじゃない！」

「????」

妙に悲壮感漂わせる、三人娘。

琴代だけがなんだかわからないと言った顔をしている。

「なあ、明久。こいつら何言ってるんだ？ 俺にはさっぱり意味不明なんだが……」

「気にしない方がよいよ。というか、お願いだから気にしないで……」

明久は半泣きになって、慎吾に訴えた。
と、そのとき。

「はいはい、飲茶とお茶の準備も終わったよん♪ 味見用のていーせつとも持ってきたから、試食してみると良いよん♪」

「……………どちらも完璧」

「つーか、さつきからなんの騒ぎだ？」

衝立の向こうで、飲茶とお茶の準備をしていた、クリス、康太、亮の三人が試食、試飲用のものをトレーに乗せて現れた。

「ひばりんに、おひめちゃんとなみなみ♪？ 早く来ないと無くなるよん♪ って、そのおっきな娘はどちらさん？」

にこやかな顔でひばり達に近づくクリス。

が、琴代に気づいて足を止める。

「ああ、その子はあたしと同じ長月中の子で……」

と、ひばりがクリスに説明している隙に、慎吾は明久を引っ張って、廊下の隅に移動した。

「で？ 話って何？ 慎吾」

明久に聞かれると、慎吾は一端、周囲を見回し、声を潜めた。

「（……明久、落ち着いて聞いてくれ）」

「（？ う、うん）」

「（……大春の奴が、こっちに戻ってきてるらしい）」

「大……」

思わず声を挙げ掛けた明久の口を、慎吾の手がふさぐ。

「（でけえ声を出すなよ！ 支倉にばれるだろうが）」

言われて明久はコクコクうなずく。

「（たく。まあいい、続きだ。別の高校に行った、卓二の奴が、町中で見かけたらしい。その様子じゃ、お前等は、まだ遭遇してねーみてえだな）」

「（う、うん。でも、何で今頃になって大春先輩が……）」

「（……それは、わからねえが、支倉とアイツを合わせるわけにはいかねえ）」

「（うん）」

「（明日は一般解放日だしな。気を付けていて損はしねえはずだ）」

「（わかってる。今度は、ちゃんとひばりを守ってみせる！）」

「（その意気だぜ！ 明久。なんかあったら、すぐに連絡してこいよ？ すぐに駆けつけてやつから）」

「（頼むよ、慎吾）」

「（任せとけ）」

そう言って、二人はお互いに笑みを浮かべると、拳を持ち上げて打ち合わせた。

第二十二問（後書き）

第二十二問、いかがでしたか？

新たなキャラクター、“牧野慎吾”と“如月琴代”の二人が登場しました。

あまり頻繁に登場する予定はありませんが、中学時代のひばりや明久、瑞希を知る者として、ある種、重要なキャラクターです。

ちなみに、二人は恋人同士♪

凸凹カップルです♪

それでは、次回もよろしく願いします♪

第二十三問（前書き）

第二十三問を更新しました。

楽しんで読んでいただければ幸いです
♪

第二十三問

「明久、ここで何やってる？　というか、このチビ誰だ？」

通りがかった雄二が、明久と慎吾に声をかける。

が、その内容に慎吾の目が、うるんげになる。

「明久、赤ゴリラが喋ったぞ？　珍しいな」

その慎吾の言葉をきっかけに、二人はメンチを切り始める。

「あ、あはは……」

期せずして二人の間に挟まれた明久は、乾いた笑みを浮かべるばかりだ。

「何やってるんですか坂本さん……」

不意に横合いから声がかけられる。

黒髪ストレートロングの少女、来島アキだ。

「あれ？　来島さん、雄二と一緒にだったんだ」

滅多にない組み合わせに、明久が声を挙げる。

「……いえ、途中で遭っただけですよ？　吉井さん」

軽く慎吾を見てから答えるアキ。それに雄二も同調する。

「ああ、たまたまな。そろそろ始まるぞ、教室に戻れよ？　明久」

「やっべ、俺も琴代回収しねーと」

言いながらＦクラスに入っていく慎吾。

明久、雄二、アキの三人も続いて入っていく。

するとそこでは、女性陣がトリップ状態になっていた。

「なんだこりゃ」

思わず声を挙げる雄二。

その目の前に、トレーに乗せられたゴマ団子が差し出された。

「……………試食用」

康太だ。

「なるほど、味見か…………ほう。これはなかなか」

「…………へえ、凄いや。お店で出てくると、遜色無いよ」

「ああ、こりやうめえや」

雄二、明久、慎吾の三人も一つずつ頬ばり、口々にほめている。
そのトレーが、アキの方にも向けられる。

「……………遠慮するな」

「ありがとう、土屋さん」

出されたゴマ団子を手に取り、軽やかじる。

「！？……………お、おいしい？！」 半眼だった目が見開かれ、珍しく
口を大きめに開けて残りを放り込む。

「ふわああ……………」

普段はクールに引き締まっているアキの顔が、恍惚となって緩む。
頬を赤らめ、焦点の合わぬ目を潤ませながら虚空を見るアキ。

その様に、見惚れる者が続出した。

「これならいけそうだな」

ニヤリと笑いながら言う雄二。

「坂本」

と、そこへ声がかかる。ディスプレイされている雲雀の絵を描いた少年、加藤武だ。

「僕はこれから美術部の方に行くから、例のもの、頼むよ」

「おう、無料優待券だったな。六枚だったか？」

武の言葉にうなずいた雄二は、ポケットから紙束を取り出す。

「しかし、これだけの物を用意してくれるとは、思わなかったぜ？
ほれ、六枚だ」

優待券と印刷された紙を六枚抜き出して、武に渡す雄二。

それに対して、武は、彼にしては珍しく、顔全体を笑顔にした。

「ああ、ありがとう。いや、こちらも良い刺激になったよ。普段は
人物画専門なんだが、こうして動物を描いて見るもの楽しかった」

「そうか？ まあ、おまえが居なかったら、ここまで飾れなかった
だろうしな。クラス代表として、礼を言わしてくれ」

「よしてくれ。僕もFクラスの一員。そうだろ？」

そう言って、女子の一団に目をやる武。

その視線の先では、小さな少女が楽しそうに談笑していた。

「……不思議な子だな、彼女は」

不意につぶやく武。

声に気づいた雄二が視線を追うと、彼女の姿が目映った。

「支倉か？ 確かに。他人のために一生懸命で、自分のことは二の次。まったく、アイツのおかげで、俺は振り回されっぱなしだ」

「でも坂本、君はそれを嫌だとは思っていないだろう？」

「……………」

思わず愚痴った雄二だったが、武に見透かされて言葉に詰まる。

「なんと言ったろうね？ あの一生懸命さに、思わず手を差し延べてしまう。そんな魅力に満ちているね、彼女は」

ぐうの音も出ない雄二を尻目に、武の人物評は続く。

「けれどどこかに危うさを持っている。なかなか隠すのが得意なようだけど、時折、漏れ出ているのを見かけるよ」

「……加藤、おまえ……………」

武の人物評に、雄二の目がスウツと細くなる。

「怖い顔をしないでくれるかな？ 代表。言ったらう、人物画が専門だと。おかげで、人間観察力には多少の自信はあるんだよ」

雄二ににらまれ、苦笑する武。

「まあ、彼女にはあんな苦しげな笑顔ではなく、本心からの笑顔を浮かべて欲しいね」

「……なんでだ？」

「……そうでない困るんだよ」

真剣に訪ねた雄二に、武は頬を掻きながら苦笑し、答える。

「？」

その答えの意味を、元神童は測りかねた。

「オラ、琴代！ クラスに戻っぞ！ また、中林の奴に怒鳴られた

「かあねーぞ？ 俺あ」

慎吾は琴代を移動させるべく奮闘するが、惚けきっていた琴代はなかなか動こうとしない。

あきらめた慎吾が、教室から出ていこうとすると、半惚け状態の琴代が、宙を流されるように彼を追いかけ始めた。

「はう~~~~、待ってよ~~~~、シンくう~~~~ん」

挙がる声もぼけぼけのゆるゆるで、かわいい事この上ない。

「じゃあな！ 明久に支倉、それに島田」

「はう~~~~、また後で遊びに来るよ~~~~」

そう言つて、二人は自分のクラスに帰っていった。

「さて、みんな。喫茶店はいつでもいけるな？」

「バッチリじゃ」

「………… お茶と飲茶も大丈夫」

雄二の声に、秀吉と康太が代表して答える。

それにうなづく雄二。

「よし、少しの間喫茶店は秀吉とムツツリー二に任せる。頼んだぞ？ 召喚大会参加者は会場入りだ。いくぞ明久、姫路、島田、支倉、

前田」

「よし、がんばろう！ みんな！」

「はい！ がんばりましょう！」

「アキ、ウチ達と当たるまで負けるんじゃないわよ？」

「頑張ろうね？ 前田君」

「ああ、よろしくな」

口々にエールを送り合う面々。

それを眺めて、雄二は口の端を持ち上げるように笑う。

「よし、大会に殴り込みをかけるぞ！ 最低クラスの底力、見せつけてやれ！！」

「~~~~ おうつ！~~~~」

雄二の声に、唱和する一同。

「うむ、ファイトじゃぞ？ 皆の衆」

「……………（グッ）」

「厨房は任せておいてくれ、支倉」

「おねーさんもマジメに頑張るからねい、こっちは任せておいて欲しいよん」

「坂本さん、みなさん、頑張つて下さい」

『しつかりやれよ？ ジャリンコども』

「前田、しつかりと支倉を守つて下さいよ？ 君はどうでも良いですけどね」

クラスに残つて喫茶店を運営する面々からも激励の言葉が掛けられる。

その言葉を背に受け、六人は出陣した。

文月学園正門。

清涼祭一日目は、生徒や教師の身内などの招待客のみが入場できるようになっており、正門で警備員と教師の立ち会いの元、生徒会役員が招待状を確認している。

そんななか、それまでの来客とはある種、異質な集団が正門を通過しようとして呼び止められた。

「すみません、招待状はお持ちですか？」

呼び止めた役員の少女、高見優香は、その集団の風体をみて、心底後悔した。

だらしなく着崩したシャツ。

ピースだらけの顔。

無遠慮に自分をねめつける澀んだ眼。

下卑た笑みを浮かべた口元。

七人ほどの集団だが、ほとんどがそんな感じだ。

その中では異彩を放つ、爽やかそうな男が前に進み出てくる。

「やあ、すみませんね？ 見てくれは悪いですが、みんな気のイイ

奴なんで、そう怖がらないで下さい」

「あつ、すみません。大変失礼しました」

あまり擦れていない優香は、外見だけで判断するのは良くないと思っただけ、丁寧に頭を下げる。

「いえ、いいですよ。これが招待状七人分です」

男は笑みを浮かべながら優香に招待状を渡した。

「ああ、教頭先生のご親戚でいらつしやいましたか」

責任ある立場の人間の名前が入った招待状を見て、優香は警戒を解く。

だが、他の六人分の招待状も竹原の名前が入っているのを見て訝しく思っただけ、形の良い眉を寄せながら口を開いた。

「でも、後ろの方々は？」

その疑問に、男は苦笑しながら優香に近づいて耳打ちした。

「（すみません、叔父に頼んで、友人の物も都合して貰ったんですよ。内緒にして下さいね？）」

そう言って、男はウインクしてみせる。

「えう、あ……は、はい」

優香は耳元にかかる息のくすぐったさと、彼の体から漂うコロンの香りに、頭をクラクラさせ、頬を染めながらうなずく。

最後のウインクなど、本気で胸が跳ねたかのような錯覚を覚えたほどだ。

「じゃあ、僕はこれで」

「あ？！ は、はい楽しんで下さい」

名残惜しそうな優香に見送られ、七人は堂々と学園に入り込んだ。「へっへっへ、ハルよう、あれも美味そうな女じゃねえの？ その辺に連れ込んで食っちゃいやいーのによお」

一人の男が腰を前後に往復運動させながら、先頭の男に声をかける。

「ヤス、そりゃあ後だ。仕事を終わらせりゃあ、上玉喰い放題だからな。今は我慢しろよ」

先ほどは爽やかそうに笑っていた男の顔が、下品な笑みを浮かべている。

「へへ、にしてもよ、この文月学園ってのは、美味そうな女ばかりだなあ？ 見てるだけで勃ちまうぜ？ なあ、おまえら」

ヤスの言葉に、他の男どもも下品な笑みを浮かべる。

「そこまでにしとけよ？ ヤス。用意した兵隊三十人分の招待状が無いからこそこの選抜メンバーだぜ？ はしゃぎ過ぎんなら、金田がタケと交代させてもいいんだぞ？」

ハルと呼ばれた男が、凄みをきかせると、ヤスは慌てて謝り始める。

「わ、わかったよハル。大人しくすつからよ」

「わかりやあ良いんだよ。うん？」

そのとき、ハルの視界の端に、見覚えのある黒髪が踊った。

見れば、数人の男女が向こうへ走っていくところだった。

その中の一人がハルこと、大春の目を奪う。

一本に束ねられた黒髪を大きなリボンで彩った女の子だ。

小学生のような体格に、不釣り合いなほどのボリウムのある胸が弾む。

「は、はは。そうか、吉井の奴がいるくらいだ。アレも居たっておかしくはねーな。ククク」

遠目に見たが間違いはない。

自分に恥をかかせた、巨乳少女。

「ど、どうしたんです？ ハルの兄貴」

「いやいや、昔食べ損なった珍品を見つけちゃってなあ。仕事の後の楽しみが増えたぜ。ククク」

そう言って笑う大春の迫力に、ヤス達は言葉を失う。

「おまえら、ボサつとしてんじゃねえ。竹原んとこ行くぞ」

いつのまにか、普段の調子で話し始めると歩き出す大春。

ヤス達はそんな彼に戸惑いを隠せなかったが、すぐに後を追いつめた。

「今度は逃がさねえ。念入りに味わって喰ってやるよ、支倉あ」
そう呟く大春の顔は、先ほどの爽やかそうな笑顔からは到底想像も出来ないような邪悪な笑みが浮かんでいた。

第二十三問（後書き）

第二十三問、いかがでしたでしょうか？

教頭の雇ったチンピラ軍団が登場。

Fクラスの運命や如何に？！

そーいえば、記念作リクエストですが、まだまだ募集していますので、リクエストしてみてください♪

裏話系とかも有りですよ？

それとも、こちらでいくつか提示して、選んで貰った方が良いかしら？

どうなんでしょうか？

第二十四問（前書き）

第二十四問、投稿しました。

いつもと、少し違う趣ではありますが、楽しんでいたければ幸いです。

第二十四問

「えー。それでは、試験召喚大会の第一回戦を開始します」

校庭に設置された特設ステージ。そこで召喚大会が催される。

「三回戦までは一般公開ありませんので、リラックスして全力を出して下さい」

立会人を努める、数学の木内教諭がステージに立つて、2対2で向かい合う、4名の生徒に声をかける。

数学のフィールドが展開され、四人が同時に身構えた。

「律子、頑張ろうね」

「うん」

片側の女子二人が頷き合う。

それに対するは、180cmの体躯に、逆立った赤毛の野生味溢れる少年と、容姿は整っているにも関わらず、どこかネジが一本抜けているような、緩い空気を纏った少年、二年Fクラスの坂本雄二と吉井明久の二人だ。

「さて、やるとするか明久」

「足を引っ張らないでよ？ 雄二」

お互い目配せしながら笑い合う二人。

そして、四人があの子の言霊を唱和する。

「サモン 試験召喚！！」

四つの魔法陣が広がり、四体の召喚獣が顕現する。

女子二人の足下には、それぞれの容姿をデフォルメした姿に、パーツを減らした板金鎧に、長剣を持った召喚獣が顕れる。

その頭上に表示された数字は、岩下が179、菊入が163と表示されている。

その一方で、明久の足下には、改造制服に木刀を装備した召喚獣が姿を顕した。

そして、雄二の召喚獣もその姿を顕す。

「……素手？」

その姿を見た明久は、眉間にシワを寄せてつぶやく。
「なに言ってるやがる。よく見る」

雄二がそう言うと、召喚獣が、明久に見せるように拳を掲げた。

「メリケンサックを装備しているだろうが」

「……………」

それを見た明久の顔は、微妙なものだった。

そして表示される二人の点数は、雄二が179、明久が85だった。

「！？ ゆ、雄二！ どうしてそんな点数になってるの！？」

「前回の試召戦争の敗戦以来、Aクラスに勝つために、本気で勉強しているからな」

そう説明する雄二の顔は、酷く苦々しいものだった。

「……な、なにがあったの？」

勉強なんて出来なくてもやっていけると証明したがっていた雄二。その彼が、理由を覆した事に疑問を感じたのか、明久は訊ねていた。

「前に、翔子に聞かれたんだ」

「何を？」

「……………」 式は、どこで挙げたかったな……………」

明久が雄二を見る顔が、生暖かいものになった。

「もうっ！！ 負けられねえっ！！ 次、負けたら俺の人生は……」

俺の人生は……！！ 婿入りなんて御免だ！ 霧島雄二なんて嫌だっ！！」

「ゆ、雄二、落ち着いて！」

取り乱し始めた雄二を羽交い締めにする明久。

その様子を見ていた木内教諭も心配そうに声をかけてくる。

「吉井君、坂本君は大丈夫なんですか？」

「ああ、大丈夫です、憤ッ！！」

木内教諭に答えながら、明久は雄二の腹に軽く握った拳を宛て、

震脚と共に剄を打ち込む。

「ごぼおはああっ?!」

無警戒に打撃を受け悶絶する雄二。

しかし効果はてきめんで、正気に返った。

「う、ぐっ? お、俺は……?」

「ほら、試合が始まっちゃうよ? 雄二」

「あ? ああ……」

雄二は軽く頭を振って気を取り直すと、召喚獣に身構えさせた。
ついで明久も身構えさせる。

「若干不安はありますが、始めて下さい」

木内教諭の合図で、四体の召喚獣は駆けだした。

「おおっ、おにーさん太っ腹だねい♪ あちしはかんどーしたよん」

軽妙なトークを交えて接客するクリス。

くるくると回りながらトレーを運ぶ様は、ある種、流麗な舞のようにも見える。

と、急に席を立ったお客にぶつかりそうになる。

「あ、あぶないのじゃっ!」

思わず秀吉が声を上げる。

が、クリスは体を回転させながらトレーを頭上に掲げて、避けてみせる。

そのまま軽く沈み込みながら前へと滑り、伸び上がるように立ち上がって、姿勢をピタリと静止させてポーズを取る。

「いえあっ♪」

声が拳がると同時に拍手が始まり、店内に広がっていった。

「冷や冷やしたぞい? クリスよ」

「いやあ、おねーさんも驚きだったよん? ブランクがあっても動

くもんだねい」

ぶつかりそうになったお客に謝罪しながら、秀吉がクリスに近づく。

当のクリスは笑ってはいたが、秀吉から見たら、盛大に引きつっているのが見て取れた。

「珍しく焦ったようじゃの」

「おお。ひでみんなにはバレバレだねい。かなりやばかったよん」
笑みを崩さず答えるクリス。

「とはいえ、まだまだ通用するんじゃないやありませんか？ ティナ」
背後からその声をかけられたクリスは、全身が硬直した。

恐る恐る振り向くと、そこには雅さと妖艶さを兼ね備えた、女性が一人。

クリスを見つめていた。

「お久しぶりですね？ ティナ」

「あ、あおちゃん……」

クリスの顔から、いつもの余裕さが完全に消えていた。

その表情に微かに脅えの色を見て取った秀吉が、二人の間に割って入る。

「……お客様、失礼ですが、あちらで案内をお待ちいただけますか？」

その様子は、普段の愛らしさからは想像もつかないほど堂々としたものだった。

「……失礼しましたね。旧友を見つけた喜びにあわててしまったようです。ティナ、また後でね？」

そう言って歩み去ろうとする女性。

「……あおちゃん」

不意にクリスが声をかける。

「はい？」

女性は笑顔でクリスに振り向いた。

そんな彼女に、クリスは泣き出しそんな顔で、言葉を紡いだ。

「……まだ、友達って、言ってくれるんだね？ あおちゃん……うん、小暮葵先輩」

その言葉を聞いて、葵は息を一つ吐く。

「はあ、無粋なことをおっしゃらないで下さいな？ ティナ。あなたと私は親友同士にしてライバル。そうでしょう？ クリスティーナ！ ウエストロード」

言いながら、口元に手をやり、フフフと上品に笑う葵。

それにつられるようにクリスも小さく笑いだした。

「ありがとう、あおちゃん。たとえ本心からではなくても嬉しいよ」
「まだそんなことを言っているのですか？ あなたは。ちよつとこっちにいらっしやいな。あー、あなた。少しの間、ティナを借りていきますので、よろしくお願いしますね？」

葵はクリスの手を取り、出口に向かう。一方で、クリスはまるで抵抗しようとはしない。

その様子に、まだ、状況が把握できていない秀吉が慌てる。

「……は？ あ、いや待つのじゃ！ クリスを連れて行ってどうするつもりじゃ！？」

回り込んで止めようとするが、クリスが遮った。

「大丈夫だよん、秀吉くん。ちよつと古い友達と話してくるだけだから、心配する必要は無いよん」

諭すように言いながら笑うクリス。

「じゃ、じゃが……」

しかし、秀吉はなおも食い下がろうとする。

「心配してくれてありがとうね？ 秀吉君。私は大丈夫。しばらくはお店よろしくね」

そう言って、クリスは葵と共に退室していった。

「……クリスよ」

秀吉は、最後に彼女が浮かべた、壊れそうな程に儂い笑顔に思いを馳せた。

「ねえ、あおちゃん。どこまで連れていくの？」

普段からは考えられないほどしおらしいクリス。

そんな彼女を、葵は黙って引つ張っていった。

階段を上がり、屋上への出口となる踊り場にたどり着いたふたり。

葵は怪訝そうなクリスに向き直ると、口を開く。

「ティナ、いつまで逃げるつもりです？」

「……なんのこと？ それから、ティナって呼ぶの、やめてくれな
い？」

顔を逸らしながら答えるクリス。

それを見て葵はため息をつく。

「あの方を、あなたの兄上を思い出すからですか？」

「！」

その言葉に、クリスの体が、跳ねるように震える。

「……………うん」

絞り出すような声。

その様子に、葵はまたもやため息一つ。

「……はあ、分かりました。では、なんと呼びましょうか？」

「クリス……で、良いよ？ あおちゃん」

蚊の鳴くような声に、葵はうなずく。

「わかりました、クリス。あなたをここまで連れてきたのは、ある
人に会わせるためです」

「ある人……」

葵の言葉に、怪訝そうに首を傾げるクリス。

そんな彼女の後ろに、影が立つ。

「俺だよ、ティナ。いや、クリスカ」

その声に、クリスは身を強ばらせ、振り向いた。

「……っ、努君」

その視線の先には、かつて彼女の隣にその姿のあった男。

栗田努の姿があった。

踊り場で向かい合う二人。

すでに葵は階段を下りて、誰も来ないように見えてくれている。クリスは、去り際に葵が言った言葉を考えていた。

『ちゃんと話していないのでしょうか？　しっかり話し合いなさいな』確かに努とは、あの一件以来、顔を合わせていない。

クリスが身動きも出来ず、暗い部屋の中で蹂躪されている間に、兄によって一方的に縁を切らされたからだ。

以来、見舞いにすら来たこともないし、来て欲しいとも思わなかった。

県外へ転校したとも聞いており、もう、会うこともないだろうと思っていた。

だからこんな形で再会するとは露ほども思っていなかった。

「……元気、そうだね」

努は、やつとの事でそれだけ言えたようだ。

「うん、元気よ？　あなたは少し痩せたかしらね？　努」

クリスは、不思議なくらい自分が落ち着いているのに気づいていた。

「ク、クリス、俺は……」

意を決したかのように口を開いた努は、クリスの顔を見て何も言えなくなった。

クリスは、ただ優しく微笑んでいたからだ。

「ねえ、努。あの頃は楽しかったね？」

「ああ……」

「みんなでふざけて、笑い合って、いつしよに戦って……」

「ああ、そうだな……」

「でも、私が全部壊してしまった」

「違う！ それは違うぞ？ クリス！ あるとき、俺がもつとしっかりしていれば、おまえの手を離さなければ……」

血を吐かんばかりに、苦しい言葉を吐き出す努。

「うん。そんなこと無いよ。そんなこと無い……」

クリスは、優しく努を抱きしめた。

「うやむやの内にそうなっていたけど、きちんと言葉にするわ」

「ティナ……、あ、いやクリス」

慌てて言い直す努から、二歩、三歩と離れたクリス。

軽く目をつむり、一拍の間をおいて、口を開く。

「努、ごめんなさい。もう終わりにしましょう。私たちの関係は、もう終わってしまっているの。だから……」

そこでクリスは顔を上げ、柔らかに微笑んだ。

「さようなら。今までありがとう、私の大好きだった人」

彼女の言葉を聞き、その顔を見て、努は憑き物が落ちたかのようにになった。

「そっか……。最後までふがないな俺は。別れの言葉まで、君に言わせてしまった」

「いいのよ、努。そういうあなたが好きだったんだから。早く良い人を見つけて、今度こそ、その人の手を離さないでね？ 努」

「ああ、君も良い人を見つけてくれ。ありのままの君のすべてを受け止めてくれる人を……」

「うん……」

クリスが頷き、自然に二人の唇が重なった。

しばらくして、クリスが体を離し、階段へ向かう。

「じゃあね？ 努。バイバイ……」

クリスが階段を降りると、葵が待っていた。
「もう良いのですか？」

「うん……ありがとう、あおちゃん」

クリスはお礼を言ってニッコリ笑う。

その笑顔を見た葵は、安堵するように息をひとつ吐いた。

「礼には及びませんよ？ ティ、クリス。なんだか慣れませんか」
呼び間違えしそうになり、顔をしかめる葵。

それを見てクリスは小さく笑う。

「んんっ。それはそれとして、部には戻る気はないんですの？ あなたなら、茶道部も新体操部も歓迎しますよ？」

照れ隠しに咳払いしながら、自身の用件を伝える葵。

「……ごめん。今は無理かな？ しばらく考えさせてくれない？
あおちゃん」

軽く顔を伏せて答えるクリス。

そんな彼女の姿に、肩の力を抜き、先ほどから何度目になるか分からないため息をつく。

「……ふう。わかりました。紹介したい子も居たのですが、次の機会にいたしましょう」

「本当に御免ね？ あおちゃん。今度茶道部の方にも顔出すから……」

「……約束ですわよ」

「うん。じゃあ、私、もう行くね？ 模擬店任せっきりにしちゃってるから」

そう言って、走り出すクリス。

その姿を、葵はただ見つめていた。

「行っちゃったか……」

背後から聞こえた声に、振り向く葵。

そこには、どこか吹っ切れたかのような顔をした葵が立っていた。

「……あなたも良かったんですか」

「……正直、未練はあるよ。けど、会ってみて改めて分かったんだ。俺の心にあるのは、彼女への想いなんかじゃなく、後悔や後ろめたさといったものだと思う。それじゃあ、あいつを救えない、癒して

やれない。きつともう、俺の出る幕じゃないんだろうね」

「……この後はどうします？」

努から顔を逸らしつつ、訊ねる葵。

「帰るよ。たぶん、もうこの辺りに来ることはないだろうと思う」

努は肩をすくめて答えると歩きだした。

「そうですか。ではご機嫌よう」

葵の声に、努は振り返ることもなく、片手を挙げて歩み去った。

「いやあ、御免ねい？ ひでっち。おねーさん、復活だよん」

言いながら教室に入るクリス。

それを見て秀吉が寄ってくる。

「大丈夫じゃったか？ クリスよ。なんなら少し休んでも……」

言い募る秀吉の唇を、右の人差し指で押さえてウインクするクリス。

「おねーさんは大丈夫だよん」 心配してくれてありがとうねいひでみー」

クリスの言葉に、秀吉は頬を赤らめてうなずいた。

横合いから、カシヤカシヤ音がするが、それも気にならない。

と、大きな声が聞こえてきた。

『おい！ ふたりだっ！ 早く案内しやがれ！』

「お？ お客だよん」 ちよつといって来るねい」

言うが早いか、お客の元へ向かうクリス。

「いらっしやいませ」 二名様で……って、あなたたち？！」

「ア？ なんだ……って、てめえウエストロードっ！」

「なにっ？！」

「っ、常村に夏川……」

波乱の清涼祭は、まだ始まったばかりである。

第二十四問（後書き）

第二十四問、いかがでしたでしょうか？

今回、クリスの過去に連なる話ではありますが、細かくは書きません。

正直、気分の良い話ではありませんから。

まあ、何があったかは、想像してみてください。

リクエストはまだ募集中ですよ〜

現在、三つ、四つ出てます。

組み合わせたりして書けるだけ書くつもりですので、遠慮せずにリクエストして下さい。

多少の無茶振りもOKですよ〜

第二十五問（前書き）

第二十五問、更新いたしました。
読んで下さるみなさんに、楽しんでいただけたら幸いです。

第二十五問

貫頭衣の裾と腰巻きをはためかせ、青い召喚獣が、目にも留まらぬ早さで踏み込む。

三度の鏑鳴りの音と共に放たれる倭刀の三連斬。

しかし、それを苦ともせず、槍で捌ききる、中華装束の召喚獣。そのまま突き出される槍に、倭刀の召喚獣は大きく飛び退いた。その向こうでは、革製の鎧をまとった召喚獣が、分厚い刀身の両手剣を振り回し、目の前の召喚獣に叩きつけようとしている。

しかし、相手は素手でそれを受け流す。

轟音とともに床に叩きつけられた巨剣の衝撃で、砂煙が舞い上がり、それが晴れると、手甲と脚甲を装備した召喚獣の姿が見えた。

Bブロッカー回戦、数学のフィールド上で、ひばりと俊夫は苦戦していた。

相手は三年のBクラスで、点数は183と190。

Bクラス上位といえる。

対してひばりは163、俊夫は61である。

彼らは、受験を控えた三年でありながら、このような大会にエントリーしているような猛者であり、その操作力の高さに、ひばりも俊夫も驚愕した。

それは、おそらく二学年中でもトップクラスの戦闘経験を持つひばりや、天才的戦闘センスを持つ俊夫といえど、易々と勝てる相手ではなかった。

「やるじゃないか、二年坊」

「今年は初日から戦争起こしたクラスがあるって聞いたが、君らのことか」

召喚獣を操作しながら問いかける三年生の二人。

「だったら、なんだって、いうんで……すっ！」 答えながらもひばりは召喚獣に、鋭く突き出された槍をかい潜らせ、倭刀を抜きつけさせる。

しかし相手もさるもの、突き出した槍をしならせ、ひばりの召喚獣の肩口を叩く。

体勢を崩された一撃は、相手の脇を掠めただけに終わり、そのまま弾かれた。

その方向には、手にした巨剣を振り回して、俊夫の召喚獣を吹き飛ばした相手召喚獣が、破壊力抜群の巨剣を振りかぶり、待ちかまえていた。

その状況を見てとった俊夫は、召喚獣の体勢を強引に変更し、器用に着地させると、震脚の音を響かせ踏み切らせる。

「チイイツッー！」

舌打ちの音を引っ張り、遠間へ追いやられていた俊夫の召喚獣が弾丸のように突き進む。

金属が激突する甲高い音が響き、突き出された拳によって巨剣が弾かれた。

「！」

すかさずひばりは、飛ばされた召喚獣の勢いを殺さぬように、片足を刹那だけ接地させ、踏み切って加速する。

その技量にあいては目を見張る。

「なっ?!」

驚愕のあまり姿勢が固まる。

加速したまま抜き放たれた倭刀の刃が、相手召喚獣の胴をなぎ払い、両断。

ひばりの召喚獣は勢いを殺しきれず、転がるように地面に激突した。

と、そのとき。

「危ねえ！」

突然あがった俊夫の叫びに、ひばりはとっさに召喚獣をそのまま横へ転がした。

すると掻き消える巨剣の召喚獣の向こうから、風切り音と共に槍が飛来し、ひばりの召喚獣の居た辺りに突き刺さった。

「……外したか。先生、投じます」

手を挙げて、立ち会いの教師に宣言する槍の召喚獣の三年生。

「わかりました。勝者、支倉、前田ペア！」

立ち会いの教師が宣言し、フィールドが解除された。

「……勝った……の……」

信じられないという面もちでへたり込むひばり。

「なんとかな」

俊夫も軽く息を吐く。

「大丈夫かい？ 二人とも」

「いやあ、強いな。君たちは」

三年の二人は、まだ余裕がありそうな顔でひばり達に近づく。

「あ……いえ、必死だっただけで……」

ひばりはあわてて立ち上がりながらそう言うが、相手は首を振りながら苦笑いする。

「そんな事はないさ。俺たちだって去年一年間は、結構戦争漬けたんだ。操作経験には自信あったんだぜ？」

「ああ、一学期に、もう少してAクラスを倒せるところまで行ったんだけどな。最終的に代表同士しか残らなくて、一騎打ちになって……僅差。ああいうのを惜敗って言うんだろうな」

三年生は懐かしむように語る。

「へえ」

ひばりは、二人の話を聞きながら立ち上がり、感心したように声

を挙げた。

と、そこへ立ち会いの教師から、ステージから降りるよう指示がかかった。

四人はうなずいて、左右に二人ずつ分かれ、見合うように並んで礼をし、ステージから降りていった。

「じゃあ、二回戦頑張れよ！　ちびっこ！」

「負けるなよ」

遠間から声をかけられたひばりと俊夫は、手を上げて応え、会場を後にした。

「なんで、てめーがここにいるんだ？　ああ？！　ウエストロード
！！」

「てめえが逃げたせいで、俺たちや散々な目にあつたんだぜ」

Fクラスの教室では、騒ぎが加速しつつあった。

入り口でクリスと鉢合わせた常村と夏川が、彼女を罵り始めたからだ。

「ゴメン。そうとしか言えない。でも、わたしは……」

クリスはいつもの彼女らしくもなく、必死で二人をなだめているが、彼らは聞く耳を持つこともなく、声を挙げる。

「ウルセー！！　お前が逃げたから、俺たちはゴミ溜めみたいなの、このFクラスの教室に押し込まれたんだぞ？」

「そうだぜ！　Bクラスだった俺たちが小汚い教室で散々悔しい思いをしたのによお！　どうせこの飾り付けを剥がしゃ、カビまみれの壁が出てくるに決まってるぜ！」

わめき続ける、常村と夏川。

そんな彼らを見て、クリスはたまらなくなつた。

「やめて……、もうやめて……　ツネ……、ナツ……。」

クリスの目に、涙が溜まり始め、弱々しい声で二人に懇願する。

一方で常村と夏川は、クリスの言葉に動揺を見せた。

「！ その呼び方……」

「くそが！ もう、俺達はあるの舎弟じゃねえんだっ！ そんな呼び方すんじゃない！」

動揺のあまり、声を上げた夏川は、思わずクリスの肩を突いてしまふ。

すると彼女は為す術もなく床に尻餅をついた。

常村と夏川は、一瞬だけ顔を歪めたが、すぐに強気の笑みを浮かべた。

「……へっ！ ざ、ざまあみやがれ！ 俺達はもう昔の俺達じゃねえんだ！」

「そ、そうさ！ ゴミくずみたいな教室で悔しさをバネにして、Aクラスにまでなったんだ！ 俺たちやエリートになったんだ！」

気分が乗ってきたのか、いい調子で話始める常村と夏川。

それを聞いて、クリスは呆けたようになる。

「……あんなたち、Aクラス入り出来たの……？」

その様子に気づくことも無く、常村も夏川も偉ぶるように胸を張った。

「そうだぜ！ 俺達は、もうあんたより優秀に……」

「どうした？ 常……村……」

二人は、クリスの様子に気づいてギョツとなる。

クリスが呆けた顔で涙を流しながら泣いていたからだ。

ばつが悪くなり、目を逸らす二人。だが、間髪入れずに、二人の頭が抱きすくめられた。

「やったじゃない、あんな達っ！！ つねやんもなつつんも、がんばったのね？！ おめでとうっ！！」

嬉しそうに声をあげるクリス。

これには常村と夏川の二人だけでなく周囲も呆気にとられた。

「……クッ」

「……てめ！ 離れろよっ！」

声を上げる常村と夏川に、ハツとなるクリス。

あわてて二人から離れる。

「ご、ごめんね？ あのつねやんとなつつんが、がんばってAクラス入りしたんだって思ったら嬉しくて、つい……」

「うるせえっ！ 俺達を見捨てやがったくせに、慣れ慣れしくするんじゃねえ」

「そ、そうだぜ！ それにその呼び方を辞めやがれ！ 俺達はもうあんたには……クソツッ！」

吐き捨てるように言う夏川。

それを見たクリスは、悲しそうに俯いた。

「ツネ……、ナツ…… 本当にごめん……」

弱々しく謝るクリス。

その姿に、夏川が苛ついたように声をあげる。

「うるせえって言ってるんだろ！」

「もう行こうぜ、夏川。こんな奴のいる店で飲み食いしたくねえぜ」
夏川が激高した分、常村の頭が冷えたようで彼の肩に手を置いて提案する。

夏川もそれに同意するように、「ああ」と言って店から出ていった。

クリスはそれを悄然と見送ることしかできなかった。

そこへ雄二が声をかける。

「すまん。割って入るべきか迷っちゃった」

騒ぎの途中で、明久と二人、戻ってきていたのだが、話の内容から仲裁するかの判断に迷ってしまったのだ。

「うつん、構わないよ。むしろありがとって感じかなん」でも、ゴメンね？ 騒ぎになっちゃったよ……」

そう言いながらクリスが店内を見回すと、一人のスーツ姿の男性が、お茶にも飲茶にも手をつけることなく、席を立つところだった。吊られて何人かのお客も、微妙な表情になって席を立とうとする。

「あっ？ お客さん……」

それを見た明久が、声を掛けようとするが、雄二に手で制された。そして一步前に出ると丁寧な頭を下げた。

「皆様、お騒がせして申し訳ありませんでした。お詫びとして、今、店内におられるお客様、ならびに、店外にお並びいただいているお客様に限り、代金不要とさせていただきます！ 我々、中華喫茶「雲雀」は、皆様を精一杯おもてなしさせていただきますので、改めまして、よろしく願います」

「……よろしく願います」「……」

雄二の言葉に合わせ、整列したホールスタッフ一同も頭を下げる。

『そつだな、せっかくお茶も飲茶もうまいし』

『そつだよな。テーブルやイス、窓も綺麗だし、なんかの間違いだろ？』

『すいませ〜ん。注文いいですか？』

雄二達を始めとするホールスタッフの対応に、席をたとうとしていたお客は座り直しはじめた。

最初に立ち上がったスーツ姿の男、竹原教頭以外は、模擬店内を一瞥した彼は、何も言わずに出ていく。

その様子を、雄二は横目で鋭く見ていた。

「あれ？ なにかあったの？」

そんなときに、後ろから女子の声がかかる。

振り向いた明久は、女子二人の姿を認めて、笑顔で言った。

「あ、おかえり。美波に姫路さん。どうだったの？ 一回戦」

「はいっ。何とか勝てました」

「ウチの得意な数学だったからね。二人で協力して勝ちをもぎ取ったわよ」

美波が不敵に笑い、瑞希がVサインをする。

美波はともかく、勝ちにこだわるように見えない瑞希がこんなポーズを取るのには珍しく、いかに嬉しいかが伝わってくる。

「そんなことより、なにがあつたの？ アキ」

「うん、ちよつとした騒ぎがあつてね」

「「騒ぎ？」」

明久の言葉に、美波と瑞希が首を傾げる。

「……あとはおねーさんが話すよん」

と、クリスが声を掛けてくる。

だが、その言葉に明久の顔が曇る。

「え？ でもいいの？」

「お姫ちゃんや、なみなみならねい。と？ ひばりんとトッシーはまだかなん？」

クリスはふと気づいたように周りを見回した。

「そついえばそうね？ でもそろそろじゃないかしら」

「そうですね」

そう言つて、美波と瑞希は入り口の方に目をやった。

「ちよつと時間がかつちやつたね」

「さすがに三年生は強かつたからな」

廊下を歩く二人。ひばりと俊夫である。

試合が終わつて、教室へ戻る最中だ。

「お客さん、たくさん入っているといいね」

「そうだな」

ニコニコしながら話すひばりに、俊夫が柔らかく笑う。

「よし！ 早く戻つてみんなの手伝いしなくっちゃ！」

ひばりは、両の拳を握りしめ、気合いを入れて上に突き上げると、走りだそうとした。

その腕に手が伸びる。

「！ 支倉っ！！」

「えっ」

俊夫の鋭い声に、ひばりが足を止めると、腕を何者かに捕られ引っ張られる。

「あうっ」

腕と肩に軽い痛みを覚えて声を上げるひばり。

助けを求めようと、俊夫の方を振り向くと、それが目に入った。

俊夫の背後から迫る人影。

その手には、金属製の特殊警棒を持って、振りがぶっている。

「前田くんっ！」

ひばりが叫ぶと同時に、警棒が、俊夫の頭に振り降ろされた。

第二十五問（後書き）

第二十五問、いかがでしたでしょうか？

クリスと常夏の意外な関係に、みなさんがどんな反応をするのか戦々恐々です。

補足しますと、クリスは一年の頃から、問題児でもあった常夏の面倒をみており、慕われていた設定です。

しかし、二年になって事件に巻き込まれたクリスは音信不通となり、彼女が代表を務めていたBクラスは空中分解。

そこを各クラスにつけこまれ、連戦連敗。

BクラスでありながらFクラスの教室に押し込まれてしまい、結局そのまま三学期を迎えることとなります。

その後も、ギスギスした空気のまま、苦汁をなめ続けた。ということになっています。

これを理由に、常夏はクリスを恨んでいますし、彼女も甘んじて受ける覚悟です。

さて、最後にひばりと俊夫にピンチが訪れました。
どうなるっ？！

第二十六問（前書き）

第二十六問を投稿しました。

読んで下さるみなさんが、楽しんでくれましたら幸いです♪

第二十六問

俊夫の頭上に振り降ろされる警棒に、ひばりは目を背けた。が、想像していた打撃音はやってこず、上空から何かが当たる音が響く。

「……ま、まじかよ」

頭上から男の声が聞こえてきたのを聞いたひばりは、何事かと訝しんで俊夫の方を見ると、警棒を振りかぶっていた男が悶絶しているところだった。

「お……グ……」

俊夫は後ろから近づいていた男に振り返るように踏み込み、鳩尾に右肘を叩き込みつつ、左の拳でかち上げるように金属製の警棒を真上に弾いていた。

天井にぶつかって、落下してきたそれは、針金細工のようにひしやげており、廊下に乾いた音を響かせる。

「……て、ためこの！ こいつがどうなっべくおっ？！」

ひばりを捕らえていた男は、彼女を押さえつけ、人質にしようとするが、口上を最後まで言いきることが出来なかった。

相方の懐に入っていた俊夫が、まるで瞬間移動のように目の前に現れ、男の顎を正面から驚掴みにしたからだ。

それは、男がまばたきしたのに合わせて俊夫が歩法で移動したから起きた現象なのだが、男にしてみれば魔法と変わらない。

混乱して俊夫の手を引きはがそうとするが、万力か何かのようにビクともしない。

あわてて、人質のひばりの腕を放し、両手を使って必死な様子で引き剥がしにかかる。

すると、徐々に男の足が廊下から離れ始めた。

男の顎をがっちり保持したまま俊夫が徐々に持ち上げたからだ。

男は完全に混乱しきって目を白黒させる。

「……奇襲の上で、弱い相手を狙うのは常道とはいえ、こいつあいだけねえな。誰に頼まれた？」

俊夫から放射される殺気と、物理的圧力を伴っていそうな視線に、男は完全に怯えきる。

「ま、前田君！」

不意にひばりが大きな声を上げ、俊夫は躊躇せず男を振り回して、背後に忍び寄ろうとしたもう一人に叩きつける。

「げっハアっ?!」

「ぐ……う!?」

人間一人分の体重を叩きつけられた、もう一人の男はたたら踏みながらもそれを受けきると、仲間を抱えて階段へ飛び込んで行く。

「チッ、それなりに鍛えてやがるかつ！」

言いながら俊夫は追おうとしたが、すぐに足を止めてひばりの方を振り向いた。

「？」

その意味を計りかねてひばりは首を傾げる。

理由はわからないが、相手はひばりを連れ去ろうとしていた。

最初から俊夫に対して人質として使うなら、俊夫に対して同時に奇襲をかける意味はない。

ゆえに、相手の目的は、ひばりの連れ去りだろうと俊夫は見当を付けた。

ならば、自身が追撃に入れば、その隙にひばりが狙われるかもしれない。

俊夫はそれを懸念したのだ。

「……なんだったの？」

「随分行儀の悪い連中が紛れ込んでるみたいだな」

催し物など無い旧校舎一階だったためか、騒ぎに気づいた者も居ない。

「支倉、大丈夫か？」

俊夫がひばりに声をかける。

彼女は顔色も良くなく軽く震えてさえ居たが、気丈に頷いて見せた。

「大丈夫。ありがとう前田君……」

「保健室に……」

「それはダメ！」

心配して保健室へと促す俊夫の言葉を鋭く遮るひばり。

「すぐ、落ち着くから……少しだけ……」

そう言つて、彼の腰にしがみつくように手を回し、巖のごとき下腹部に顔を押しつけた。

「お、おいっ?!」

これには俊夫もアワを食う。

「……お願い……ほんとに少しだけ……震えが収まるまで……」

震えるひばりの声に、俊夫は嘆息する。

そして、馴れた手つきで彼女の頭を撫で始めた……。

教頭室。

部屋の主以外に、七人の男の姿があつた。

そのうちの二人が正座させられていた。

「この！ バカがつ！」

二人の男に、大春の叱責が飛ぶ。

「す、すまねえハル。あのチビ女を押さえりゃ、うまく行くと思つてよ……」

男二人は体をちぢこませて弁明する。

彼らは、トイレに行つたついでにひばりと俊夫を見かけ、二人で押さえられると踏んで、先走つたのだ。

「ちつ、これで警戒されちまつたか。まあ、仕方ねえ。次の手を考えるか……」

くわえたタバコをはなして、紫煙を吐き出すハル。

その顔は、苛立たしげだ。

「すまねえハル……」

「うるせえよっ！」

大春は謝罪を続ける男の一人に怒鳴りつけると、その額にタバコを押しつける。

「ぎいあああああつつつ！?!?!?!」

悲鳴が上がりのたうち回る男。

他の連中は、その様を見てへらへら笑う。

成り行きを興味無さげに見ていた竹原教頭は、ため息をついて口を開いた。

「少し静かにしてもらえんかね？ 防音が効いていて、外に漏れないとはいえ、耳障りの良い音では無いのでね」

「すまないね？ 竹原さん。そういや、あんたの使い捨ての駒はうまくやってるのかい？」

「あの二人か。直接的な妨害はうまく行かなかったようだが、今は間接的な方法に切り替えてやっているよ。ま、大して期待はしていないがね」

「ククツ。それでも、俺らの隠れ蓑には丁度いいさ。せいぜい派手にやって欲しいもんだね」

竹原の言葉に、大春がニヤリと笑う。

「ふん。召喚大会に専念させる手もあるがな。まあ、大会に潜り込ませた駒はあれだけではないしな。せいぜい暴れて貰うとしよう」

竹原も、どうでもよいと言わんばかりに言い捨てる。

それを見て男たちは、さらに笑い声を上げた。

「おお！ そうだ竹原さんよ」

「何かね？」

「食中毒なんか発生すりゃ、模擬店どころじゃねえよなあ」

そう言って、大春は暗く笑ってみせる。

「……そうだな。営業は中止、代表を始めとした幾人かは事情聞かなければならんだろ。大会への参加より優先されるな」

大春の言葉を受けた竹原の顔にも、嫌らしい笑みが浮かんだ。

「奴らの食材がどこにあるか判るかい？」

「ふむ。細かいところは判らんが、調べておこう。しかし、薬でも使うのかね？ 薬物反応は避けて欲しいものだが……」

竹原が自身の抱く懸念を指摘すると、大春は笑いだした。

「ク、クク、ハアツハツハ！ クスリなんて上等なもんいらねえよ」

そう言つて、手下の一人に指示すると、その男は数本の小瓶を取り出した。

「こいつを使うさ」

大春は、楽しそうにそれを指さす。

「それは？」

竹原は小瓶の中身の見当がつかず、大春に訊ねる。

すると彼は、とてもすがすがしい笑顔を浮かべた。

「ただの……汚水さ。ま、正確にやあ毒性のある細菌入りの水だがね？」

「……死人は出すなよ？」

竹原はしかめっ面でクギを刺す。

「ひひひ、そこまでの毒性はねーよ。せいぜい軽い嘔吐と下痢だな。知り合いに、細菌を研究している、後輩思いの良い先輩がいてね。オネガイしたらあっさり寄越したぜ？ 顔は三倍に膨れ上がって、かわいい後輩ちゃんはキズモノにされちまったけどなあ。ひゃっひゃっひゃ」

大春の笑いにつられて、周りの男たちも下品な笑い声をあげる。

「……」

さすがの竹原も言葉が出てこない。

「んで、その先輩くんで実験済みさあ。まあ、学校中に広がるようなやり方はしねえよ。それも契約の内だからな。しかしアレだな」「なにかね？」

「その二人さ。推薦欲しさにやってんだろ？ てめえらが困だとも

知らねえで、がんばってんだってな。傑作だねえ」

大春は楽しくて仕方ない様子だが、竹原は表情を崩さなかった。

「何のことかと思えば……。まぐれでＡクラス入りしたような輩だ。虚栄心だけのとるに足らん連中だよ」

竹原はどうでも良さに嘆息する。

「せいぜい暴れ回って、吉井と坂本を引きつけてくれりゃあいいさ」

「そうか、そんなことがあったのか……」

二年Ｆクラスの教室から、少し離れた場所。

雄二と俊夫が顔をつきあわせて話をしている。

内容は、先ほどひばりと俊夫が襲われた一件だ。

「支倉からは、みんなに心配かけたくないからと、口止めされたんだが、さすがにお前くらいには報告せんとな」

「イヤ構わない。よく教えてくれたな前田。しかし、支倉を狙ってきたか……」

俊夫の報告に、雄二は眉を寄せて考え込む。

その様子に、俊夫は口を開いた。

「腑に落ちんって顔だな。例の腕輪の件は、支倉から軽くは聞いている。その絡みで襲われたんだろ？」

俊夫の言葉に、黙考していた雄二が顔を上げる。

「確かにそうだが……支倉だけを連れ去ろうとした理由が判らん。

本当に連れ去りたいなら、あいつが一人で居るところを狙えばよい。なにもお前と一緒にの所を狙う必要はない」

「……確かに。じゃあ、別件か？」

「いや、その線も薄い。女性を狙うはあり得るが、支倉を二人で狙った時点でおかしい。特殊性癖の持ち主が、ワザワザ二人組で学園に忍び込んで、支倉を狙う意味はないからな」

「ふむ。となれば、やはり腕輪の件か……。支倉が関わっていると

判って狙った。が、よりリスクな選択をしている理由が判らん」
「180を越える、むさい男二人が額を寄せあつて悩む姿は、かなりシニールだ。」

「……埒があかな。前田、なるべく支倉に付いていてくれ。お前の戦力なら、まず大丈夫だろ」

「わかった。お前はどうするんだ？」

「俺は明久と、島田、姫路に付く。まあ恐らくこの二人は狙われないだろうがな」

方針を決め、二人が教室に戻ろうとすると、明久が声をかけてきた。

「雄二なにやってんのさ。そろそろ二回戦だよ。俊夫もひばりが待ってるよ？」

「っと、すまん」

「わかった、おい支倉！」

俊夫の声に、中で待っていた、美波、瑞希、ひばりの女子三人が振り向く。

「早くしなさいよ、坂本に前田」

「早く会場入りしましょう！」

「二回戦もがんばろうね？ 前田君」

「ああ」

六人で連れ立ち、出陣していった彼らを待ち受ける者は、はたして？

「でさ、雄二。二回戦の相手って？」

Dブロックの特設ステージに向かいながら、明久が雄二に訊ねる。それを聞いて、雄二はあきれ顔になった。

「ちゃんと確認しておけと言ったろうが」

「ホ、ホールが忙しかつたんだよ！」

あわてて言い訳する明久。

雄二はそれを聞き流しつつステージの階段を上がる。

そして上がりきる前に明久に振り返った。

「心配しなくてもすぐ判る。ほら見てみる」

そういつて、顎をしゃくる。

促された明久が、軽く駆け上がるようにステージに上がると、すでに二人の人物が待ちかまえていた。

「あれ？ BクラスとCクラスの代表の……」

「げえっ？！ 吉井に坂本！？ ま、まさかお前らが相手なのか？！」

明久と雄二の顔を見て青くなる根本。

そんな彼の様子を見て、小山は訝る。

「なにビビっているのよ、恭二。相手はFクラス。それもバカコンビの方じゃない。この勝負は貰ったようなものね」

明久と雄二を完全に見下す小山。

一方で根本は完全に吞まれていた。

「それでは、試験召喚大会二回戦を始めて下さい」

立会人の遠藤教諭から、声がかかる。

「……試験召喚！（サモン）……」

この場の四人が、言霊を解放し、四体の召喚獣が顕現する。

その頭上に数字が表示され、武器を構えた。

根本は199、小山は165だ。

対する明久と雄二の点数は、79と83。

いかに勉強をやり直している元神童の雄二と、ようやく向学心に目覚めたばかりの明久とはいえ、まだあまり時間が経っていないため、すべての科目がいきなり高くなったりはしない。

彼我の戦力差は大きいようだ。

と、雄二が懐に手を入れる。

そこから取り出したるは、根本恭二個人写真集『生まれ変わった

ワタシを見て！』である。

「そ、それは……！」

根本の顔が凍り付いた。

「さて、根本の彼女だかＣクラス代表だか知らんが、その女」

雄二が小山に声をかけたのを見て、明久が不思議そうな顔をする。

小山は写真集が気になるようで、訝るようにそれを見ていた。

「こいつを見てくれ。これをどう思う？」

雄二が１ページ目を捲って見せると、小山の形のいい眉がピクリと跳ねた。

そこには恥ずかしげにポーズを取った、スカート姿の根本が写っていたからだ。

「さ、坂本！ わかった！ 降参する！ だ、だからその写真だけは……！」

根本は死にそうな顔で叫び、懇願する。

「根本を押さえる、明久」

「らじゃー」

そんな彼を、明久に命じて拘束させる雄二。

がつちり羽交い締めになれもがく根本。

雄二は、そんな彼を無視して、小山を見る。

「この写真集に興味はないか？ Ｃクラス代表。中身を確認したければ、俺たちに負けるんだ」

「さ、坂本おっ！ 貴様、鬼かつ？！」

「……いいわ。私たちの負けよ」

「交渉成立ってな」

雄二はニヤリと笑って、小山に写真集を渡した。

「ゆ、友香！？ 見ないでくれ！ 頼む！ 友香あああっつ！！」
ステージ上に哀れな男の声がこだました。

変わってBブロック。

ひばりと俊夫の前に、二人の少女が立っていた。

「……。」

「……。」

少女たちを見たひばりと俊夫は、声もなく立ち尽くす。

一人は二年Aクラスの佐藤美穂。

そしてもう一人、赤毛のショートヘアで幼い感じの女の子だが、

その体はゆらゆら揺れている。

「起きて下さい！ 公園さん！ 公園さん！ 公園さん！」

彼女の肩を揺する美穂。

そう、美穂の相方の日和は、立ったまま寝ていた。
大きな鼻ちようちん膨らませながら……。

第二十六問（後書き）

第二十六問、いかがでしたでしょうか？

とんでもないことを企む大春。

凶行を止められるか？！

次回を楽しみにして下さい。

第二十七問（前書き）

第二十七問、更新しました！
よろしく願います♪

第二十七問

「日和さん！ 代表のために頑張るのではなかったんですか?!」
美穂がよりいっそう大きな声を出す。

すると鼻ちようちゃんが割れ、日和はうつすらと目を開けた。

「う……ん、がんばるですよー。しょーこちゃんのためにがんばるですよー」

目をコシコシとこすり、自らの頬をぺちぺちと叩いて、日和は目を覚ます。

「あはー、おはよーだよー。試合をはじめようー」

ようやく身構えた彼女に満足して、美穂も身構える。

「お待たせしました。始めましょう」

そういわれて、ひばりと俊夫は顔を見合わせ、苦笑してから身構えた。

双方の準備が整ったと判断した立ち会いの英語教師が、一つ頷いて、声を上げる。

「それでは、試験召喚大会、二回戦を開始してください」
それを受けて、四人があの子の言葉を唱和する。

「……試験^{サモン}召喚!」……」

言霊が解放され、四つの魔法陣が広がり、回転する。

そこに顕現するは、四人の分身たる召喚獣。

貫頭衣に青いブレストプレートと倭刀を携えたひばりの召喚獣。

両の手足に手甲、脚甲をつけただけの俊夫の召喚獣。

和風鎧に、鎖で繋がれた二丁鎌を持った美穂の召喚獣。

そして、黒く体にフィットするレザースーツに、蒼いロングスカ
ートと銀色のレザージャケットを纏い、全身に鎖を巻き付けた日和
の召喚獣。

計四体の召喚獣が姿を顕す。

その頭上には、それぞれの英語Wの点数が表示されていた。

数字は、ひばりが166、俊夫が241。

対して、美穂が230、日和が218だ。

「前田君、すごい！」

ひばりは思わず声を上げていた。

「はは、もともと外国語は得意だからな。明久を見習って、勉強してみたんだ」

少し照れくさそうにする俊夫。

どちらかというと言臭い顔立ちで、オヤジ系の顔をした彼だが、今は年相応の少年のような表情だ。

「くっ、あなたの得意分野でしたか。でも負けません！」

「むー。数学なら負けないのにー」

俊夫の点数に、美穂と日和のAクラスコンビも声を上げる。

「いくぜっ！」

雄叫びにも似た、俊夫の声を合図に、四体の召喚獣は、一斉に飛び出した。

「たっ！」

美穂の召喚獣が、走りながら手にした鎌をひばりの召喚獣に向けて投げ放つ。

ひばりは、召喚獣を走らせながら倭刀を抜き放ち、鎖を引きながら飛来する鎌を弾いた。

と、すぐさま次の鎌が飛来する。

弾かれた方の回収動作ではなく、もう一つを投擲することで攻撃をしながら鎌を回収しているのだ。

アキとの激戦を経験した美穂は、操作能力が向上している為、このような芸当ができているようだ。

しかし、相対するひばりも召喚獣による戦闘経験の蓄積は、二年でもトップレベルだ。

加えて、明久には劣るが操作技術も高い。

次々飛来する鎌を弾き、避けしながらも、落ち着いて相手との距離を詰めていく様は堂に入っていた。

一方で俊夫と日和の戦いは、かなり一方的なものになりつつあった。

「ひーん、はなれてよー（泣）」

二本のチェーンウィップによる、中距離戦能力に秀でる日和の召喚獣だが、初撃をあっさり捕まれ、逆に俊夫の召喚獣の間合いに引っ張り込まれた。

操作経験の乏しい日和には、距離を詰めての近接戦闘は荷が重すぎたのだ。

「せえっ！」

「うにやつ?!」

繰り出される剛拳をかるうじてチェーンで受け止めるが、反撃に移れない。

チェーンの長さや重さが、ここでは裏目に出てしまっているのだ。

「！ チイツ?!」

突然舌打ちしながら召喚獣を日和の召喚獣から飛び退かせる俊夫。すると俊夫の召喚獣が居た辺りに鎌が飛んでくる。

ひばりと戦いながら美穂が飛ばしたものだ。

「おー。みほちゃん、ありがとー」

さらに日和の召喚獣がチェーンを振るって俊夫の召喚獣を追い払う。

俊夫は、さらに召喚獣を後退させ、体勢を整えた。

「前田君、ごめん。抑えきれなかった」

操作に集中しているため、俊夫を見ることが無く謝罪するひばり。その召喚獣は、嵐のような連続斬りで美穂の召喚獣を足止めしている。

むしろ、この状態で日和への援護攻撃を行えた、美穂の技量を褒めるべきだろう。

一方で窮地を脱した日和だったが、そこで迷いが生じてしまった。全体を見る余裕が生まれたことで、美穂を助けるか、俊夫を攻撃するか、どちらを優先すべきか判断できなかったのである。

これは、単純に戦闘経験の浅さによるものであるうが、致命的なミスでもあった。

二本のチェーンウィップによる連撃の牽制に隙が出来てしまっていた。

こと、戦いにおける俊夫のセンスは並外れており、この隙を逃すことは、全く無かった。

「でえいつ!!」

地面が破裂する音が響いたかと思うと、俊夫の召喚獣が弾丸のとき速さで進撃する。

「えええっ?! うそっ!?!」

このときばかりは、のんびり口調ではなく、まっとうに悲鳴を上げる日和。

瞬く間に距離を侵され、勢いのままに拳を打ち込まれる。

日和の召喚獣は弾き飛ばされた。

が、ここで今度は、俊夫が驚くことになった。

「なにっ?!」

突如として伸びてきた鎖が、彼の召喚獣に巻き付いて引き寄せたからだ。

そして声が響く。

アウェイクン
「覚醒!!」

言葉とともに、日和の召喚獣から黄金の闘気が溢れ出す。

日和の左腕に輝く、蒼い腕輪。 “蒼金の腕輪”の力だ。

“蒼金の腕輪”!?!

俊夫が声を上げると同時に、彼の召喚獣が鎖によって宙を舞う。鎖がしなり、派手に金属音を響かせ、地面に叩きつける。

三十数点のダメージ。

しつかり受け身をとらせたにも関わらず、このダメージ。明らかに腕輪の力だ。

「えへー、すごいでしょー。 “蒼金の腕輪” は一時的に召喚獣の能力が二倍になるんだよー」

「何バラしてるんですか?! 公園さんっ!?!」

自慢げに語る日和に声を上げる美穂。

それを聞いて日和は慌てた。

「あわわ、そういえば内緒にしなさいって、ゆーちゃんに言われていたんだっただけ! どーしょー! ゆーちゃんに怒られるですよー」

えぐえぐと泣き始める日和。

美穂もそちらに気を取られる。

俊夫とひばりはその隙を見逃さなかった。

ブーストアップ
「強化!!」

コマンドワードを叫ぶと同時に、“黒金の腕輪” が光を放った。すると、ひばりの召喚獣と、俊夫の召喚獣の武器が光を放つ。

「えっ?! 腕輪?!」

「にやーっ!? 向こうももっていたですよーっ!?!」

その様子に美穂と日和が慌てる。

ひばりの召喚獣の武器は、倭刀から日本刀に変化し、俊夫の方は、竜の頭をモチーフにした、赤い手甲と脚甲に変化していた。

しかし、それぞれ武器の変化が終了するのを待たずに飛び出していった。

「くっ」

避けられないと踏んだ美穂は、とっさに二本の鎌を交差させて防御した。

だが、抜き手を見せずに放たれた斬撃は、鎌そのものを両断。流れるように刀が振るわれ、美穂の召喚獣を袈裟掛けに切り捨てる。

その一方で、強化された日和の召喚獣は、俊夫の召喚獣の攻撃を、きっちり受け止めていた。

「うわーんっ！？ みほちゃんがやられたですよーっ?! 2対1なんて無理ですよーっ!？」

騒ぎながらもチェーンウィップを振り回す日和。

その威力は尋常ではなかったが、すでにパニック状態の日和には、意味が無かった。

程なくして、日和の召喚獣から闘気が消え失せると、能力強化の効果が失くなり、あっさりと倒されてしまった。

「勝者、支倉、前田ペアー!!」

勝者がコールされ、フィールドが解除される。

四人でステージを降りると、美穂がひばりたちに声をかけてきた。「参りました。そちらもシークレットの腕輪を持っただけですね」

「うん。まさか二回戦で使う羽目になるとは思わなかったけどね」
そういつて苦笑いするひばり。

「うー。ゆーちゃんに怒られるですよー。かえりたくないですよー」

赤いショートヘアの日和もとぼとぼ歩いてくる。

「まあまあ、私も一緒に謝ってあげますから。すいません、もう少し話をしたかったです……」

声をかけた手前、決まり悪く苦笑いする美穂。

それを見て、ひばりは軽く笑いながら頭を振る。

「ううん、いいよ別に。機会があったら、また話そうよ」

「そうですね」では三回戦、頑張ってください、支倉さん、前田さん。さあ、いきましょか、公園さん」

「わかったんだよー。あ、そーだふたりとも、時間があつたらAクラスまで遊びに来てほしいんだよー」よろしくなんだよー」

そう言つて、美穂と日和は去っていく。

「さあ、あたしたちもクラスに戻るうよ」

「おう！」

そうして二人は、教室へ戻っていく。
少し寄り添うようにしながら。

行列すら出来ていたはずのＦクラス前に戻ってきた明久は、少し不思議そうに模擬店、中華喫茶‘雲雀’の戸をくぐりながら明久は声を上げる。

「ただいま。って、お客さん少ないなあ」
言いながら店内を見回す。

店内には、数えるほどしかお客が居らず、ホールスタッフは暇そうにしていた。

と、秀吉が明久に気づいて近づいてくる。

「おお、お帰りのじゃ明久。首尾はどうじゃったのかの」

「うん、勝てたよ。それより、お客さん少ないね？ どうしたんだろ？」

首を傾げる明久。

その言葉に、秀吉も眉を寄せる。

「うゝむ。取り立てて問題は起きておらんのが……。そう言えば雄二はどうしたのじゃ？」

「ああ、トイレに行くって、途中で別れたよ」

明久がそう答えると、声が聞こえてきた。

『お兄さん、すいませんです』

『いや。気にするな、チビツ子』

『チビツ子じゃなくて葉月ですっ』

『そうだぜ！ 葉月をバカにしたら承知しないぞ?!』

『ふ、二人とも落ち着いて……』

聞こえてきたのは、雄二と小さい女の子と思われる声が三つ。

「雄二が戻ってきたようじゃな」

「……あ、うん。そうみたいだね……」

秀吉に返事をするも、何か考え込むような素振りを見せる明久。その様子に気づいた秀吉が、明久に問いかける。

「どうしたんじゃ？ 明久」

「うん……。どこかで聞いたような声が……」

そう言ううちに、雄二と、腕白そうで、天然パーマが鳥の巣のような女の子と、勝ち気そうな目に、ツインテールの女の子。

そして、保護者なのか、手足が細長く、長身の黒髪ポニーテールの美少女が、戸を開けて現れた。

「んで、探しているのはどんな奴だ？」

言いながら教室を見回す雄二。

「お、坂本。妹か」

「お嬢さん、是非、僕と結婚を前提としたお付き合いを……」

「可愛い子だな。ねえ、五年後にお兄さんと付き合わない？」

「てめえ、抜け駆けスンじゃねえ！」

「俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなあ」

暇なのか、ホールスタッフの男子がわらわらと集まってくる。

「あ、あの、葉月たちはお兄ちゃんを探しているんですっ」

代表してか、ツインテールの子が声を上げた。

「お兄ちゃん？ 名前はなんて言うんだ？」

「あう……。わからないです……」

「？ 家族の兄じゃないのか？」

「アタイとゆきなは家族の兄だぜ」

「はい、はづちゃ……葉月ちゃんは、知り合いのお兄さんらしいんです」

黒髪ポニーの子が答えると、そこへ声がかかる。

『お？ ゆきな。来たんですね』

長身の少年、新田だ。

彼を見つけた、ゆきなという少女は、顔をほころばせながら、そちらへ近づいていく。

『あゝ 兄さんゝ 来ちゃいましたゝ』

『そうか。まあ、ゆつくりしていきなさい』

『はい』

うつすらと頬を染めたゆきは、嬉しそうにうなづく。

『アタイの兄貴は、俊夫って言うんだ。前田俊夫』

『葉月の探しているのは、バカなお兄ちゃんでした！』

残る二人の女の子からそれを聞いて、雄二は顎に手をやる。

『そうか、前田の妹か。あいつならそろそろ戻ってくるだろうから待っている。それからチビツ子。バカなお兄ちゃんは一杯居るんだが、他になにかないのか？』

『えっと、とつても優しいお兄ちゃんでした！』

拳がった声に、秀吉が反応する。

『うむ、明久のことではないかの？』

『うゝん、どうだろ？ あんな小さい子に知り合いは……』

苦笑いしながら否定しようとする明久。

『あつ！ バカなお兄ちゃんだつ！』

しかし、そんな声が聞こえてきたかと思うと、小さな女の子が駆けきて、明久に抱きついた。

『うわつと。あれ？ 君、どこかで……』

女の子を受け止めた明久は、その子を、そつと引き剥がして顔を見やる。

『え？ おにいちゃん……。葉月のことを忘れちゃったですか？』

満面の笑顔だったのが、一気に曇る。が、明久の方は、葉月の言葉が呼び水となったようだ。

『ああ！？ あの時の、ぬいぐるみの子だね？』

『はいです！ 葉月です！』

思い出してもらえて嬉しいのか、再び笑顔になる葉月。

「久しぶりだね。あのぬいぐるみたちは元気かな？」

「はいです！　きれいなお姉ちゃんとひばりちゃんにもらった子も元気です！　??」

そこまで言つて、葉月は不思議そうに周りを見回した。

「どうしたの？　葉月ちゃん」

その様子が気になって、葉月に訊ねる明久。

すると、葉月は首を傾げながら明久に聞いてきた。

「ひばりちゃんはいないですか？」

「ひばり？　もうすぐ帰ってくると思うよ」

そうやって話していると、三人の女子が教室に入ってきた。

「さすがはお姫ちゃんと、なみなみだねい」　二回戦も余裕で突破だよん」

「瑞希のおかげよね」

「いえ、美波ちゃんのリョウがなかったら、危なかったですよ」
Fクラスの綺麗どころの三人。

クリス、美波、瑞希だ。

ちなみに美波は、暴力的な部分が形を潜めた結果、“彼女にしたランキング”が上がったらしい。

「あ、おねえちゃん。遊びに来たよっ！」

美波の姿を見つけた葉月は、嬉しそうに走っていく。

「あ、葉月。いらっしやい」　迷わずに来れたかしら？」

「うん」

仲睦まじい姉妹のやりとりに、クリスと瑞希も微笑む。

そこへ明久がやってきた。

彼は、仲良さげな美波と葉月の姿に、不思議そうにしながら声をかける。

「美波、葉月ちゃんと知り合いなの？」

「知り合いも何も、ウチの妹だもの。アキこそ葉月と知り合いなの？」

「去年ちよつとね。でも姉妹が、確かに目の感じや、髪の色が似てるね」

そう言いながら、葉月を撫でる明久。

「おお、この子がなみなみの妹なのかなん？ 可愛いねい」

「葉月ちゃん、こんにちは」 あの子、可愛がってくれてる？」

「はいですっ！ 毎日一緒に寝てますです！」

元気よく答える葉月に、瑞希も微笑む。

「よかった。気に入ってくれたんだ」

「良かったね、姫路さん」

嬉しそうな様子の瑞希を見て、明久も優しく微笑む。

と、戸口の方から声が聞こえてきた。

「ただいま」

「戻ったぞ」

ひばりと俊夫だ。

「あゝ 兄貴！ 遊びに来たぜっ！」

「お！ 楓じゃないか。ちゃんと来れたんだな、偉いぞ？」

飛びついてきた楓を受け止め、俊夫は少し乱暴に、鳥の巣頭を撫で回した。

「アキくん、ただいま」 って、葉月ちゃん？！」

「ひばりちゃんです！ こんにちはです！」

妹とじゃれる俊夫を置いて、明久の元までやってきたひばりは、そこにいた葉月の姿に目を丸くした。

「ウチの妹と、ひばりも知り合いなの？ えーと、世間は狭い……だったかしら？」

「え？ 葉月ちゃんって、美波ちゃんの妹なの？」

「はいですっ！ 島田葉月です！ よろしくです、ひばりちゃん！」
元気よく挨拶する葉月。

「そうなんだ。改めてよろしくね？ 葉月ちゃ……ん？」

葉月に目線を合わせたひばりは、愕然となる。

なぜなら、目線を合わせようとしたら、若干上向きになったか

らだ。

「……葉月ちゃん、背、伸びた？」

「はいです！　一センチ伸びたので、139センチになったです！」
聞いた瞬間、ひばりは白くなった。

第二十七問（後書き）

第二十七問、いかがだったでしょうか？

新田と俊夫の妹、新田ゆきなど、前田楓は端役ですので、あまり出番はないでしょう。

要望があれば、出番は増えるかもしれませんが！。

次回もよろしく願います♪

第二十八問（前書き）

第二十八問、更新しました♪

今回は、特別ゲストとして、蒼様作『バカとテストと召喚獣 5
帝の学園生活』より、小田高名さんに出演していただきました。

蒼様、出演許可をいただきましたまして、ありがとうございます！

蒼様や5帝のファンの方に怒られないよう、一所懸命に書きま
したので、よろしく願います。

第二十八問

「ところで、この客の少なさはどういうことだ？」

教室内を見回して雄二が言う。

それに対して、秀吉も明久も明確な答えを持ち得なかった。

と、そこで声が挙がる。

「そういえば葉月達、ここに来る途中で色々なお話聞いたよ？」

「おう、そうだぜ！ 中華喫茶はゴミ溜めみたいに汚いとか、接客の態度が悪いとか」

葉月に追隨する形で、楓も思い出したかのように声を挙げる。

「え……？」

思わず声を挙げたのは誰だろうか？

明久達を探しながら移動していた葉月たちが耳にするほど噂になっ
っているのか？

なぜそんな話題が飛び交っているのか、明久達には分からなかった。

ただ一人、雄二だけは何か考え込むようにしながら、ヒザを折ると、葉月に目線の高さを合わせて、軽く微笑んだ。

「なあ、チビツ子。それはいろんな人が言っていたのか？ それとも一人か二人くらいで言っていたのか？」

「チビツ子じゃないです！ 葉月です！ えっと、意地の悪そうな二人のお兄さんが、おっきな声で言っていたです」

雄二の問いに、葉月は元気良く答える。

「そうなのですか？ ゆきな」

「あ、はい。厭らしい顔で笑う二人組でした。たしか、おひとりは髪を剃ってらして、もう、お一方は前髪を逆立ててらした様です。どちらも品が無くて見るに耐えませんでした」

新田の妹、ゆきなが説明すると、クリスの顔が強ばった。

「……ツネ……、ナツ……。何でそんなことを……。私の、私のせ

いななの？」

「やりかたに品が無いな。何の意図があつて営業妨害を仕掛けてくるのかは分からないが、とつとと取り押さえるか」

雄二は口元に手を当て、思案氣に言う。

「まさか。学祭の模擬店に営業妨害なんてする人いないでしょ」

「どうだかな」

雄二の言葉を聞きつけたひばりが声を挙げるが、雄二は肩をすくめる。

そして周囲に目をやり、口を開いた。

「どちらにしても、ひとまず様子を見に行く必要はあるな。明久」

「うん。少なくとも、噂がどこから流れてきて、どのくらい広まっているのか確認しないとね」

雄二の言葉に、明久が応じる。

と、その手が小さな手に握られた。

葉月だ。

「お兄ちゃん！ 葉月と一緒に遊びに行きましょうです！」

葉月は天真爛漫に、笑顔を向けてくるが、明久は困り顔だ。

「ごめんね？ 葉月ちゃん。お兄ちゃん、お店があるから、あんまり一緒に遊べないんだ」

申し訳なさそうに言いながら、葉月の頭を撫でる明久。

その様子を見て、軽く肩と眉を落とすひばり。

心なしか、ポニーテールも、しんなりとして元氣がない。

「むう。せつかく会いに來たのに、遊べませんですか？」

一方で葉月は、明久の言葉に、軽く頬を膨らませている。

「それなら、そのチビツ子も連れていけばいい。飲食店をやっている、ほかのクラスを偵察する必要もあるからな」

その様子を見ていた雄二が、フオローする。

「そっか、そうだね。それじゃ、一緒にお昼ご飯を食べに行こうか？」

「うんっ」

膨れ顔が一転して満面の笑みになる。

すると、成り行きを見ていた美波も声を掛けてきた。

「良かったね、葉月。じゃあ、お姉ちゃんもお邪魔して良いかな？」

「もちろんです！」

美波の言葉に、元氣良く返事をする葉月。

今度は、うれしそうに美波に抱きついていた。

「ふむ。ならば姫路と雄二、支倉と前田も一緒に行くといいじゃろ。

召喚大会もある事じゃし、早めに昼を済ませてくると良い」

その様子を見ていた秀吉は軽く笑いながら提案する。

「え？ 大丈夫？ 木下君」

その提案に、ひばりが心配そうに訊ねる。

「大丈夫じゃ。幸か不幸か、お客も少ないしの」

そう言つて、秀吉は苦笑い。

「ん。じゃあ、お言葉に甘えるね」

それを見て、ひばりは、少し困り顔で承諾した。

「悪いな、秀吉」

「ありがとうございます。木下君」

雄二と瑞希の二人もお礼を言う。

「悪いな木下」

妹の楓の相手をしていた俊夫も、秀吉に声を掛ける。

すると楓も飛び上がり、んばかりの勢いで声を上げた。

「あ？！ アタイも！ アタイも兄貴と飯を食う！」

そう言つて、休憩チームに加わる楓。

一方で、ゆきなはその様子を見ていた。

「ゆきな」

そんな彼女に、新田が声を掛ける。

「兄さん……」

「あなたも一緒に行ってきたらどうです？」

「でも、兄さんは……」

ゆきは迷っているようだった。

「……さすがにホールチーフのオレまで抜けることは出来ませんからね。でも、お友達と一緒にご飯を食いたいんでしょう?」

「……はい」

「なら、行つてきなさい。オレはここでゆきなを待つてますから」

「……はい」 兄さん、待つて下さい、はづちゃん、楓ちゃん。私も行きます」

パタパタと走つていくゆきな。

それを見送つて、新田は軽く笑つた。

と、そこへ男どもが集まつてくる。

『新田! お義兄さんと呼ばせてくれ!』

『ぜひ! 妹さんのお付き合いを!』

『いや、妹さんどこの高校だ? 女の子を紹介して……』

「……ゆきなは小学五年生ですよ?」

新田は、残念なモノを見るような目で、彼らを一瞥すると、そう言い放つた。

『『『は?』』』

言われた方は、一瞬、何を言われたのか解らないという風だ。

「前は、支倉よりちっちゃくて、可愛らしかったんですが、去年、急激に成長しまして、あつという間に168cmになったんですよ。出るところも出て、顔つきも大人びてきたせいで、高校生くらいに見えますが、毎朝ランドセル背負つて登校しますよ」

『どうなつてゐるんだ? この世の中は?』

『小学生にしか見えない高校生と、高校生にしか見えない小学生、だ……と?』

『もはや、何がなんだか……』

すでにFクラスレベルの処理能力では、処理しきれずに混乱する男子勢。

それを後目に、休憩チームは出発した。

「それで、チビッ子。さっきの話の厭らしい変態達が騒いでいたの

歩き出しながら、雄二が葉月に訊ねる。

葉月は軽く思案すると、ニコニコしながら答えた。

「はいです、えつとですね……短いスカートを穿いた、綺麗なお姉さんが一杯居るお店……」

「なんだって！？ 雄二、それはすぐに向かわない！」

「そうだな明久！ 我がクラスの成功のために、（低いアングルからの）綿密な調査が必要だな！」

そう言うって、二人で全力ダッシュ。

「アキくん？ 何をしているのですか？」

しようとしたが、突然聞こえてきた、女性の声に、明久は廊下の隅に縮こまって震え始めた。

その隙に雄二は一人、走り去る。

「姉さんごめんなさい姉さんごめんなさい姉さんごめんなさい姉さんごめんなさい姉さんごめんなさい姉さんごめんなさい姉さんごめんなさい姉さんごめんなさい姉さんごめんなさい姉さんごめんなさい……」

その様子に、ひばりがため息をつく。

今の声は明久の姉、玲の怒ったときの声を真似たのだが、効きすぎたようだ。

「アキくん、ごめん。今はあたしの声帯模写だよ？ 玲姉はここにはいないよ？」

そうやって、明久に優しく声を掛けるひばり。

すると、明久は涙目で顔を上げて周りを見回す。

そして、玲が本当に居ないことを確認すると、大きく安堵の息を吐き、へたり込んだ。

「ひ、ひばり、そういう不意打ちはやめてよ」

「だからごめんってば。ほら、これで鼻水拭いて？」

差し出されたティッシュで鼻をかねで立ち上がる。

ほかの面々は、苦笑いしている瑞希を除いて、呆氣にとられたままだ。

「相変わらず玲さんが苦手なんですネ？ 明久君は」

そういう瑞希に、美波がひどく真剣な顔で振り向く。

「だ、誰なの？ その玲って」

「明久君のお姉さんで……」

言い終わる前に、瑞希は美波に両肩を捕まれた。

「何で瑞希が知ってるわけ？」

とてつもない迫力で迫る美波に、瑞希は厭な汗をかき始める。

「……あ、明久君のお家で、何度かお会いしたことが……」

迫力に負けて、そう漏らす瑞希。

それを聞いた美波は、驚く。

「み、瑞希、アキの家にお邪魔したことあるのっ？！ ず、ずるいわよ！ ウチだって、アキの家の中、見てみたいのにつ！」

取り乱すように叫ぶ美波は、瑞希の肩を掴んで前後に揺する。

「ええあ、おおあ、みいなみ、ちゃああん、おおち、つつういてえ、くうら、はいいいい」

揺すられて目を回す瑞希。

「きゃーっ！ みっちゃんが！？ 美波ちゃん落ち着いてっ？！」

結局その騒ぎは、取り乱した美波の頭を、ひばりが【小烏丸】ではたいて正気を取り戻させるまで続いた。

いくつものモニターが据え付けられた部屋で、その少女、来島アキは、三つのキーボードを同時に叩いていた。

いくつかのモニター上で、同時にコードが打ち込まれ、数値も入力される。

部屋は肌寒いほどに冷房が効いており、その中で、大小さまざま
な機械類が稼働しているのが見て取れる。

と、一つのモニターが切り替わり、一人の少年が映し出された。

「アキ、大丈夫ですか？」

「高名？ もう連絡の時間ですか？」

映し出された少年、小田高名は、それを聞いて、苦笑いする。

「相変わらず集中していると、他のことは一切入ってこないんです
ね」

そう言われて、アキは珍しく口をとんがらかす。

「高名には、すぐ気づけるんですから、いーんですー」

アキのその態度に、モニター向こうの少年は笑みをこぼす。

「そうですか？ まあ、それはヨシとしましょう。それより、腕輪
のプログラムの修正はうまくいきましたか？」

「ええ、おかげさまで何とか。高名が解析を手伝ってくれなかった
ら、向こう半年はこれにかかりきりだったかも知れません。やつぱ
り、高名は頼りになります」

会話を続ける間も、指はせわしく動き続ける。

「そうですか、お役に立てて何よりです。そうそう、例の件、だい
ぶ情報が集まりましたよ。金の流れから、人との接触までね？ は
つきり言って、隠蔽は下手ですね、彼は」

「お金の扱いがうまいだけです。三流ですね。すいません高名、
裏仕事なんて頼んでしまつて……」

指を止めることなく、謝罪するアキ。

そんな彼女に、高名は首を振ってみせる。

「いいんですよ、アキ。僕は君の助けになれることが嬉しいんです。
だから、謝らないで下さい」

「……そうですね、高名。ここは、こう言つべきでした。ありがと
う高名」

そう言つて柔らかに笑うアキ。

その笑顔は、彼以外に向けられたことはない。

「……／＼／＼」

思わず見惚れてしまう高名。

その顔は、普段シニカルな彼から想像もつかないくらい真っ赤である。

「……と、ともかく、今日中には情報をまとめて、そちらに送ります。彼を追い込むには、十分な証拠資料になるでしょう。学園長あたりに渡せば、効果的に使ってくれるでしょうね」

「そうですね。その辺りは、お任せするのが妥当でしょう。本当に助かりました、高名」

と、そこで、初めてアキの手が止まる。

「……高名、次はいつ、こちらに来れますか？」

「……いま動いているプロジェクトが軌道に乗れば、時間は作れそうですね？ アキ」

「ほんとですか！ 楽しみですよ」

軽く頬を染め、嬉しそうにはしゃぐアキ。

その様子をモニター越しに見ながら、高名は優しく笑う。

「そうですね、そのときは、また、あそこへ行きましょう」

「ええ、楽しみです……。高名……。早く会いたいです……」

「僕ですよ……。アキ。じゃあ、また、連絡します」

「はい 待ってます」

その言葉を交わして、モニターの映像が切れた。

アキは、しばらくモニターを見つめ、不意に自らの唇に、右手の人差し指と中指の二本をそろえて当てると、そのまま唇から離してモニターへと当てる。

彼の唇が映っていた辺りに。

「……高名、会いたいよ高名。あなたに触れたいよ……」

アキの双眸から、光が溢れてこぼれる。

輝きを引いて落ちるそれは、しばらく止まることはなかった。

第二十八問（後書き）

第二十八問、いかがでしたでしょうか？

来島アキと小田高名のやりとりは、蒼様の『バカとテストと召喚獣 5 帝の学園生活』にて、詳しく書かれたものがございます。

どんな経緯でふたりが恋人になっていったのかも書かれていますので、ぜひ、お読みになってみて下さい♪

第二十九問（前書き）

第二十九問を更新しました。

あまり話しは進展していませんが、楽しんで読んでいただければ幸いです♪

第二十九問

「こつちです！ バカなお兄ちゃん！」

葉月に引つ張られ、明久たちがやってきたのは、Aクラス。

その出入り口付近で、雄二が立ち尽くしているのを、明久たちは発見する。

「おい雄二！ そんなところにボーツと突っ立って、どうしたのさ？」

「明久か。短いスカートの出し物は、ここしかなくてな……」

立ち尽くす雄二に、声をかける明久。

それで休憩チームに気づいた雄二は、苦虫を噛み潰したような顔で答える。

「坂本君、まだうじうじしてるの？」

「男らしくないわよ？ 坂本」

「そうですね？ 女の子から逃げ回るなんて、良くないですよ？」

「なー、兄貴ー。こいつ見てくれよりヘタレなのか？」

「ヘタレって何です？ バカなお兄ちゃん」

「ハア、兄さんと食事したかったです」

女性陣からの集中砲火に、雄二はグロッキー状態だ。

「ハッハッハ。悪鬼羅刹も形無しだな、坂本」

「チ、ほつときやがれ、この皇餓が！」

ぐだる雄二を後目に、入室していく休憩チーム。

見てみると、指が残像しか残らないような所作で、シャッターを切っている男子が一人。

スパアアンツ！！

電光石火の一撃で、【小烏丸】をたたき込まれた少年は地に伏した。

「なにやってるのっ?! 土屋君はっ!!」

クラスメイトの小柄な少年を、【小烏丸】で、はたいたひばりは、そのまま声を上げる。

すぐに復帰して立ち上がった康太は表情を崩さず口を開く。

「…………… 敵情視察」

「あきらかにウェイトレスさんの足元から写していたでしょっ!!」

「…………… 不正はなかった(ブンブン)」

直前の大胆な盗撮行為すら否定してみせる。

ムツツリー二のムツツリー二たる由縁か。

その様を見て、説教する気力を削り取られたひばりがため息を吐く。

それを見て、明久が一步進み出る。

「ダメだよ、ムツツリー二。そんなことをされたら、ウェイトレスの女の子たちが…………」

「…………… 一枚二百円」

「ニダースもら

スパパアアンツ!!

康太と明久の頭がブレ、二人とも地に伏した。

「なに自然に注文しようとしてるのっ!? アキくんはっ! 土屋君も変な商売しないでっ!!」

倒れた二人に、【小烏丸】を突きつけ、説教するひばり。

「…………… そろそろ当番だから戻る」

ムクリと顔を上げ、そそくさと逃げ出す康太。

「ああっ?! 僕を見捨てて逃げるつもりなのっ!? ムツツリー二ッ!!」

半泣きの明久を見捨てて立ち去ってしまった。

「入り口でなにをしているのよ、あなた達は」

横合いから声をかけられ、ひばりがそちらに目をやると、メイド

服をまとった優子が、慣れた手つきでトレーを持って立っていた。

「あ、優子ちゃん。うわあ似合ってるじゃない」

「そ、そうかしら？　こういうのって、瑞希さんやひばりみたいに、胸のボリウムがあつた方が良いと思うのだけど……」

ひばりに褒められた優子は、少し頬を染めながら、軽く身をよじるように恥ずかしがる。

それでもトレーが平衡を保っている辺り、妥協を許さない彼女の徹底振りがうかがえる。

「そんなことないよ、優子ちゃんや美波ちゃんみたいに、手足も長くて、ほっそりとした美人なんて、あたしあこがれちゃうよ」

「そ、そう？　ありがとう」でも、うちの代表には負けるわね」
そう言つて優子は苦笑すると、そつと指を差した。

つられてそちらを見ると、いい加減観念したのか、しぶしぶ入ってきた雄二の元へ、翔子が歩み寄つたところだった。

「お帰りなさいませ。旦那様」

優雅に礼をする翔子。

そして、雄二に軽く笑いかけてみせる。

「ッ……！」

思わず息をのむ雄二。

手で軽く口を押さえながら、翔子から視線をはずすと、「お、おう」とだけ答える。

その様子を見ていた一同からは、ため息が漏れた。

「翔子ちゃん……綺麗……」

ひばりは同姓ながらも、その美しさに感嘆せずにはいらなかった。

すると、ひばりに気づいた彼女は、Fクラスの面々に近づいてくる。

「……優子、早くお客様のところへ」

「あー？　いつけない！　ごめんねひばり。ゆっくりしていつて」
翔子に注意されてしまった優子は、ひばりにウインク一つ飛ばし

ながら、急いで歩いていった。

「……それでは、ご主人様にお嬢様、お席にご案内させていただきます」

流麗に礼をし、歩く所作一つとっても、一切の澱みも乱れも見せずに行方を案内する翔子。

彼女の後ろについて移動していると、不意に葉月が明久の袖を引っ張った。

「ねえねえ、バカなお兄ちゃん。凄くいっぱいお客さんがいますです」

「そうだね。男の人が多いかと思ったけど、女の人も多いみたいだね」

明久も周囲を見回してつぶやく。

「きつと、食事や飲み物がおいしいんだね。女性はそういうのに敏感だから」

明久のつぶやきに、ひばりが自分の考えを述べる。

そうこうしているうちに、団体向けと思われる、複数人掛けの大きなテーブルに案内され、思い思いの席に座った。

「……では、メニューをどうぞ」

そう言いながら渡されたメニューは、なかなか凝った装丁のメニューであり、Aクラスが、どれだけ真面目に取り組んでいるかが伺い知れた。

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれがいいです」

「葉月もそれにします！」

まずは美波が声を上げ、瑞希、葉月が同調する。

「アタイはミートソースのスパでいいや。ゆきなは？」

「そうですね、この抹茶のケーキに紅茶のセットでお願いしますね」

次いで、楓が促し、ゆきなが決めると、俊夫がピラフを頼んだ。

「アキくんは何にするの？ あたしはチーズケーキとコーヒーのセットにするけど」

「じゃあ、サンドウィッチと紅茶かな」

ひばりといっしょにメニューをのぞき込んでいた明久も注文を決め、翔子に告げる。

そして、雄二も口を開いた。

「翔子、お勧めはどれだ？」

「……ケーキならガトーショコラがお勧め。飲み物は紅茶、食事ならカレーがお勧めできる」

雄二の質問に、淀みなく答える翔子。

「ほお、そうか。んじゃカレーな」

「……ご注文を繰り返します。『ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『ミートソースパゲッティ』を一つ、『抹茶ケーキと紅茶のセット』を一つ、『ピラフ』を一つ、『チーズケーキとコーヒーのセット』を一つ、『サンドウィッチと紅茶のセット』が一つ。そして、『カレーとメイドとの婚姻届けのセット』が一つ。以上でよろしいですか？」

「ああ……って、うおおい！ 何か妙なものとセットになってなかったか？！ 俺の注文！！」

思わず流しそうになってから、動揺した叫びをあげる雄二。

「……では、食器をご用意します」

それぞれの前に、フォークやスプーンが並べられ、最後に、雄二の前に実印と朱肉が用意される。

困惑した顔で実印を手に取り眺めていた雄二だったが、その表情が次第に強ばる。

「しょ、翔子！ コレ本当にうちの実印じゃねーか！ どうやって手に入れたんだ！？」

「……理由を話したら、お義母さんが快く貸してくれた」

「おふくろー！ っつつつ！！！！」

思わず叫ぶ雄二。

「もう、堀は埋められてるんだね」

「みたいだね。雄二も観念すればいいのに」

もはやツツコむ気力もないのか、なま暖かい目で雄二を見るひばり。

そのつぶやきに、隣の明久もうなずく。

「……それでは、しばらくお待ちください」

翔子は優雅な所作でお辞儀をすると、キッチンらしきスペースへと歩いていく。

「……明久、俺はどうしても召喚大会で優勝しなくちゃいけないんだ……！」

「あー、うん。まあ、がんばろうね」

悲壮な決意をみなぎらせる雄二に、明久も引き気味だ。

そんな二人を置いておいて、ひばりは本題を葉月に訊ねる。

「葉月ちゃん、さっき話していた、中華喫茶の悪口を言っていた嫌な人が居たのはここで良いの？」

「はいです！ あの前中辺りの席でお行儀悪く騒いでいたです！」
そう言って、中央付近を指さす葉月。

すると、新しいお客が入ってきて、応対する声が聞こえてきた。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

「おう。二人だ。中央付近の席は空いているか？」

聞き覚えのある、下品な声だ。

「あー！ あいつ等だぜ、でっかい声で『中華喫茶は汚い』って喚いてたのは」

お客の姿を見て、楓が声を上げる。

先ほど、Ｆクラスでクリスを散々罵倒して騒ぎ立てた二人。

常村と夏川だ。

二人は席に着くと、注文するより先に大きな声で騒ぎだす。

「やっぱりこの喫茶店は綺麗でいいよなー！」

「全くだぜ。さっき行った二年Ｆクラスの中華喫茶は最悪だったからなー！」

「テーブルは廃材同然だったしな。特に、ウェイトレスの態度が最

悪だつたぜ!』

次々に飛び出す誹謗中傷。

それを聞いて、明久が顔を陰しくしながら腰を浮かせる。

が、雄二がそれを手で制した。

「さて、明久」

「なに？ 雄二。早いとこあいつらを殴り飛ばして黙らせなきゃいけないんだけど？」

明久にしては珍しく、怒りを現している。

だが、雄二は常村と夏川の二人を鋭くにらみ付けながら首を振った。

なおも声を上げようとした明久の袖を、二人の間に座るひばりが引っ張りながら口を開く。

「アキくん落ち着いて？ そんな暴力を振るったら、さらに悪評が広まっちゃうよ？」

「う……」

ひばりに諭され、言葉に詰まる明久。

「だけど、このまま指をくわえて見ていただけなんて……」

悔しさを滲ませながら座り直す明久。

「アキくん……。坂本君、何とかならないの？」

明久の様子に、ひばりは雄二に訴えかける。

すると雄二は、ひばりに軽く笑いかけて、その頭に手を置くと、軽く撫で始めた。

「大丈夫だ、支倉。こういう場合は、ここを使うんだ」

そう言つて、自分の頭をつつきながら、悪ガキのような笑みを浮かべる雄二。

「おーい、翔子おー!」

「……なに？」

気配も感じさせずに、姿を現す翔子。

「あの連中がここに来るのは初めてか？」

雄二が顎で中央付近で騒ぐ二人組を差す。

つられるように翔子がそちらを見る。

その端正な顔に、さざ波が走った。

「……さっき出ていって、また入ってきている。話していることも全く同じで変わらない。ほとんど同じ事を言っている」

「ほお。何回くらい出入りしている？」

「……都合二回目。正直迷惑している」

「……そうか、迷惑か。まあ、そうだろうな。騒音のような声で、汚いだの何だの連呼されれば、近場に座ってる奴はたまったもんじやないしな」

雄二の言葉に、コクリとひとつ肯く翔子。

雄二の言うとおり、今もまた不快そうに席を立つお客が一人出たところだ。

「よし、俺たちが撃退してやろう。協力してくれないか？」

「……わかった。どうすればよい？」

雄二の言葉にうなずく翔子。

「よし。そうだな、まずメイド服を一着貸してくれないか？」

「……わかった」

雄二の頼みに、うなずきながら返事をする、おもむろに自らが着ているメイド服のエプロンはずし、背中の中のホックを外す。

素早い所作でそこから腕を抜いてリボンを外し、シャツのボタンを外していくと、白い肌が露わに……。

「つて、待つて待つて?! 翔子ちゃん! なんで着ている奴を脱ごうとしているの?!」

あまりの出来事にフリーズしていた一行からいち早く復帰したひばりが声を上げた。

「そ、そうです! こんなところで脱ぎ始めちゃダメですっ!」

「そうよ! 何考えてるのよ!」

メイド服を脱ぎ始めた翔子をひばり、瑞希、美波の三人であわて止めにかかる。

しかし、翔子は不思議そうに首を傾げるのみだ。

「……だって、雄二が欲しいって言ったから」

そう言いきる彼女に羞恥の色はない。

これには明久と雄二も顔を赤くして背けるしかなかった。

ちなみに、俊夫は苦笑いひとつ浮かべたきりである。

「ったく、おまえの着ている奴じゃない。予備分があれば貸して欲しいという意味だ」

赤くなつた顔を片手で覆いながら雄二が言う。

その言葉に得心が言つた表情でうなづく翔子。

「……今、持ってくる」

素早く制服を着直した翔子は、バックヤードとして区切られた場所へと歩いていく。

その騒ぎもあつて、Ｆクラスの面々が座るテーブルは、注目されていた。

しかし、騒ぐのに夢中な二人は気づいた様子もない。

『あんな店、出してる食べ物もやべえんじゃねーか？』

『ちがいねえ。きつと食中毒騒ぎとか起きるぜ！』

『二年のＦクラスにや、気を付けろって事だな！』

そう言つて、大きな声で下品に笑う二人組。

「ひどい……今日のために亮君だつて一所懸命に練習したし、新田君達ホールのみんなだつて失礼の無いようにがんばってる。教室の衛生状態だつて、きちんと検査までパスしたのに……！」

「ひばり……。雄二、早く何とかならない？　こんなの酷すぎるよ」
怒りと悲しみが無いまぜになつた表情のひばりを見て、明久が声を上げる。

「……わかつてる、もう少し待ってる。姫路に島田、それに支倉も、櫛を持ってないか？　それから身だしなみ用の物を持っていたら、全部貸してくれ」

「え？　う、うん。良いけど……」

「何に使うんですか？」

雄二に答えて、ひばりと瑞希がポケットの中にあつた小さなポーチを取り出す。

「悪いな、後で必ず返す」

「……雄二、これ」

と、そこへ、きれいに畳まれてビニール袋に入れられたメイド服を抱えた翔子がやってくる。

「おう、さんきゅな」

「……貸しひとつ」

「だ、そうだ明久」

「仕方ないね。今度雄二を一日自由にして良いよ。今日のお礼」

「……ありがとう。吉井は良い人」

「ちよつと待て、何で俺が取引材料になってるんだっ?！」

喚く雄二を後目に歩み去る翔子。

心なしにその足取りは軽やかだ。

「で? これをどうするの?」

「……着るに決まってるだろう」

惘然としながら答える雄二。

すると明久は、手にしたメイド服を瑞希に向ける。

「だってさ、姫路さん」

「ふえ? 私が着るんですか?」

そのやりとりを見て、雄二はため息をつく。

「おまえは、姫路を危険にさらす気か?」

「え? じゃあ美波? でも、美波も危ないことには変わらないんじゃない?」

明久は考え込むように言う。

だが、雄二はそれにも首を振った。

「島田や姫路じゃあ、面が割れるしな。小学生に危ないことはさせられん。だから着るのは」

「着るのは?」

まだ気づかない明久は、首を傾げる。

「お前だ。明久」

その言葉を聞いた明久は、少女のような悲鳴を上げた。

第二十九問（後書き）

第二十九問、いかがでしたでしょうか？
次回もよろしく願いしますね♪

第三十問（前書き）

第三十問を更新しました。

よろしく願います♪

楽しく読んでいただければ幸いです♪

第三十問

「この上ない屈辱だ」

あれから誰が着るかで揉めはしたものの、雄二や俊夫では見てくれでバレルかもしれないなどの説得もあったが、明久自身がひばりの憂いた顔にやられてしまい、半ばヤケクソ気味に引き受けていた。「明久よ、存外似合っておるぞい」

着付けとメイクを担当した秀吉から、感心したような声が出る。

男子トイレで着替えた明久は、普通に可愛いメイドさんと化していたが、本人は肩を落とすばかりだ。

「ありがと。不本意だけどね」

褒める秀吉に、ひきつった笑みを返す明久。

「では、ワシは喫茶店に戻るぞい。おお、そうじゃ、明久よ」

戻りかけた秀吉が、何か思い出したように明久に声をかける。

「ん？ どうしたの？ 秀吉」

「クリスを見かけんかったかのう。先ほどから姿が見えんのじゃ」

「クリスが？ 休憩じゃないの？」

首を傾げて答える明久。しかし、秀吉は首を振る。

「いや、クリスの休憩はお主らの前じゃったからのう。ほれ？ 姫路らと戻ってきたじゃろ？」

「そうだっけ？ じゃあ、見かけたら声をかけておくよ」

「うむ。頼むぞい。しかし珍しいのう、あれでなかなか時間や約束ごとをきちんと守っておる御仁なんじゃが……」

言いながら去っていく秀吉に続いて男子トイレから出てくる明久。その様子に周囲はざわめいた。

それはそうだろう。

男子の制服を着てはいたが、可愛い子が男子トイレから出てきた直後に、可愛いメイドさんまで現れたのである。

おもわずトイレの表示を確認する者が続出した。

しかし、当のメイドさん。

すなわち明久は気にした風でもなく、大股でAクラスの教室へ近づいていた。

入り口からのぞき込んでみると、Aクラスの教室内中央では、モヒカンとハゲが、中華喫茶の誹謗中傷を垂れ流し続けていた。

『とにかく汚い教室だったよな』

『ああ、あの教室のある旧校舎自体、小汚ねえからな。当然だろ？』
そんなことを言つて、ゲラゲラと下品に笑う。

明久はその様子を見て、憤りを感じ、一步步きだそうとして、歩みを止めた。

視界の端に、ある光景が引つかかったからだ。

彼がそちらを振り向くと、先ほどまで自分が居た席。

すなわち、Fクラスのメンバーが座る席が視界に入る。

そこで起きていることを目の当たりにして、明久は、全身の血液が逆流するかと錯覚した。

ひばりが泣いていた。

遠目であるにも関わらず、悔しそうに俯きながら涙をためているのがハッキリ見て取れた。

それを瑞希や美波、優子らが慰めている。

明久は噛みしめた奥歯が立てる音を聞きながら、下品な笑い声を止めるために中央の席に向かった。

怒りで乱れそうになる歩調をなんとか抑えて近づき声をかける明久。

「お客様」

その声に気づいて振り向くハゲ。

「なんだ？　へえ、こんなコも居たんだな」

「結構可愛いな」

無遠慮な、イヤらしい視線が明久を舐め回す。

本来なら、吐き気を催すほどおぞましいだろう行為を、明久は完全に受け流した。

そんな感情は怒りがすべて洗い流してしまったからだ。

「お客様、足元を掃除させていただきますので、少々よろしいでしょうか？」

作り笑顔とは思えないほどにまばゆい笑顔で明久が告げると、二人は締めりのない顔で了承しながら立ち上がる。

「ありがとうございます。それでは……」

明久は屈み込むようにしながら、ハゲの腰にしがみつくように手を回す。

「お？ な、なんだ？ 俺の腰に抱きついて……、まさか俺に惚れて……」

言いながら肩越しに見下ろすハゲ。

下から見上げる、笑顔の明久と目が合い、顔がだらしく弛む。

次の瞬間。

「くたばれええっ！」

かけ声にあわせて、きれいな弧を描くハゲ。

堅い床に、重い石か何かが落ちる鈍い音が響く。

「ごばあぁっっ?!」

脳天を痛打したハゲは、思いの外頑丈だったのか、死ぬことなく頭を抑えて転げ回った。

すかさずその手を取り、自分の胸に押し当てる明久。

「キャアアッ！ こ、この人、今私の胸を触りましたあ！」

バックドロップの騒ぎに我関せずを決め込んでいたお客も、これには全員振り返った。

「ちょ、待てやコラ！ バックドロップかけた上に、俺の手を取って自分に押し当ててきたのはそっち……。て、てめえまさか、Fクラスの吉井かつ?! バカの上に女装趣味が……げぶあっ！」

「こんな公衆の面前で痴漢行為とはね。三年生も暇なもんだ」

大義名分を得た雄二が、ハゲを殴りとばしながら登場。

これにはモヒカンが声を上げる。

「なに見てやがる！ 被害者はこっちだろうが！」

「だまれ！ たった今、コイツはこのウェイトレスの胸を揉みしだいていただろうが！ みなさん！ そうでしょう！？」

雄二が周りに問いかけると、周辺のお客から同意の声があがる。

ちょうど明久が悲鳴を上げた辺りからしか見ていない人が大半なのだから、そうとしか見えないだろう。

「さて、ウェイトレス。そっちで倒れている方は任せるぞ」

「判りました」

雄二が、指を鳴らしながらモヒカンに近づき、明久が、なぜか懷から取り出したブラに瞬着を塗ってハゲの頭に装着。

そのまま取り押さえようとした明久は、突然、腰の辺りに衝撃を受けた。

「グフツ？！ な、なに？」

何事？ と思い、下を見ると、一人の少女が目をキラキラさせながら見上げてきた。

「見つけた、私の天使ちゃん♪」

「き、君はたしか…… Dクラスの玉野さん？」

「うん♪ 覚えていてくれたのね♪ 天使ちゃん♪」

明久の腰に飛びついたのは、三つ編みの少女、玉野美紀だ。

突然のことに明久は戸惑いを隠せない。

「え？ な、なに？ なんなの？」

女子に抱きつかれて嬉しいはずなのに、その異様な目の輝きに、悪寒が走る。

近くにいる雄二も、少し引いていた。

「い、今だ、夏川！ ずらかるぞ！」

「く、くそっ？！ これ外れねえじゃねえか！ 畜生！ おぼえてやがれ変態めっ！」

落ち着いた派手さのない美少女だと思っていた明久にとっては、酷い打撃である。

「怖っ！？ 本気で怖いんだけどっ?!」

涙目になって雄二の下半身にしがみつく明久。

それは、かなり危険な部位に顔を押しつけんばかりであったが、よほど焦っているのか明久は気づかない。

雄二は焦りと、怒りと、気持ち悪さが同居したなんとも言えない顔で明久を引き剥がそうとしている。

「だから俺を巻き込むなっ！ くそっ！ 逃げられたっ！ ！？

ま、まて翔子。これは浮気とかそういうのではなくて、うわっ!？」

「へっ？ どうしたの雄二……」

突然あがった声に、雄二の方へ首を巡らせる明久・

するとそこには、長い黒髪の美しいメイドの胸に顔を抱かれた雄二の姿があった。

「……雄二、浮気はダメ。そんなに触りたいのなら、私のを触らせてあげるから」

そう言うのと、翔子は雄二の頭を胸に押しつけながら、エプロンを外し、メイド服の胸のボタンを外すという離れ業を披露する。

「もがつ?! ば、ばが、やべろ、こんふあとこほで……」

「……ンンッ」 雄二くすぐりたい。暴れちゃダメ。ここは敏感だから……」

少し頬を上気させた翔子に抱きつかれた雄二は、すでに耳まで真っ赤だ。

「お、おのれ雄二、なんてうらやましい……」

雄二の腰にしがみつきながらつぶやく明久。

すると、自分の足の方から衣擦れの音が聞こえてきた。

「ん？ なんか涼しく……って、ギヤアアアアアッ?!!」

見れば、顔を赤くして、鼻息の荒い美紀によってスカートがはぎ取られ、おのれの履くトランクスに手が掛かったところだった。

「さあ、アキちゃん、ぬぎぬぎしましよーねー」

もう、それはそれは嬉しそうに明久のトランクスをずり下げようとする美紀。

「いやあああつつつ!？」

少女のような悲鳴を上げる明久。

スパアアンツ!!

派手な音とともに美紀の頭がブレ、そのまま地に伏した。

「アキくんになんてことすんのよ! この変態っ!」

珍しく罵倒の言葉を放ちながら仁王立ちするのは、我らが小女神、リトルゴッドデス支倉ひばり、その人だ。

もっとも、罵倒の相手は一撃で失神しており、全く聞いてはいなかったのだが。

さらにひばりは、翔子の方へ振り向くと、【小烏丸】で軽く頭をはたく。

「……痛い」

「翔子ちゃん、それはやり過ぎだよ。そういうのは、学校を全部卒業して、お家で二人っきりの時にやるものだよ」

少し不満そうな翔子を諭すひばり。

「……学生の内はダメ？」

「ダメ」

ひばりの言葉に、少し思案した翔子は、雄二の頭を解放して口を開く。

「……雄二、一緒に退学しよう」

斜め上の発想だった。

スパアアンツ!!

今度こそ本気で放たれる【小烏丸】。

「そう言うことじゃないよっ! 年齢的にもまだダメだよっ!」

「……ひばりがそう言うのなら我慢する。雄二楽しみにしていて？
一所懸命奉仕するから」

その発言に、鼻血を吹いた野次馬、数知れず。
当の雄二も、真っ赤になったまま口をパクつかせるだけだ。

「ま、まあ、その辺りは個人の趣味嗜好かな……」

顔を背けるひばりも、鎖骨まで真っ赤になっていた。

「ハアハア、あいつ等、よくも俺たちに恥をかかせやがって……」

「くそお、マジで取れねえ！ どうすりゃいいんだよ……」

ところ替わって四階への上り階段。

そこを上りながらブツクサ言っているのは、常村と夏川の二人だ。
雄二と明久によって捕らえられそうになった二人だが、突発的に
起きたアクシデントを利用して逃げてきていた。

追跡してくるものがないことを確認し、四階へと向かう。
と、そこへ一つの人影が現れる。

金髪壁眼の少女、クリスティーナウエストロードだ。

「見つけた！ ツネ、ナツ、あんた達何をやって……」

クリスは、二人の姿を認めると、大きく目を見開いて動きを止めた。

「ゲッ？！ ウエストロード！」

「てめえも追いかけて来やがったのか！」

対峙する常村、夏川も声を上げて、彼女を睨みつける。

「……」

にらみ合う三人。

静寂が、その場を支配する。

「……………プッ」

沈黙を打ち破ったのは、吹き出した音。

クリスが耐えかねて吹いてしまったのだ。

「……………??」

突然のことに、常村も夏川も呆氣にとられる。

「く、クフ、く、くくく。ふ、くく」

クリスはなんとか堪えようと頑張るが、すでに最初に吹き出した時点で、それは無駄な努力でしかなかった。

「ため！ 何笑ってやがる」

「そ、そうだぜ！」

たまらず声を上げる二人。

クリスは、笑うのを堪えながら夏川の方を指差した。

「く、くく、だ、だって……、な、なつつんの、そ、その、あ、あたま……、プー」

改めて指摘するためにマジマジと見てしまった結果、クリスは派手に吹き出し、体を丸の字に折る。

「う？ うおおおっつ？！ わ、忘れてたあっ！！！！ よりによってウェストロードに見られるなんて、最悪だあっ！？」

一見猫ミミチックに見えないこともない頭のブラを押さえて、夏川がもんどり打つ。

その様をみたクリスは、ツボに入ったのか、腹を抱えて笑い始めた。

「プー、ぶっはっ！ あーははははははっ！？ ひーっひひひひ。くうっははははっ？！ ゲエホゲホ、ふおっひゃっひゃっひゃ」

「ち、ちくしょうっ！ い、一番見られたくない奴に見られたーっ？！」

半泣きになって叫ぶ夏川。

その肩に、そつと手が置かれる。

「……夏川」

「常村……」

絶望しきつた顔の夏川に、常村が優しい表情を向ける。

「……イキロ」

そう言つて常村は顔を背けると、小さく吹き出す。

「ちきしょーっっっ！！！！ 吉井の野郎覚えておきやがれーっっ！！」

第三十問（後書き）

第三十問、いかがでしたでしょうか？
また次回もよろしく願いしますね♪

第三十一問（前書き）

第三十一問を更新しました。

今回は全般にシリアス調で、笑いの要素はほとんどありません。

しかしながら、重要なオリジナル設定などが開陳されていますので、じっくり読んで下さい。

この設定、受け入れてもらえるといいなあ……。

第三十一問

生徒指導室。

部屋の主は、清涼祭期間中は常時学園内を巡回中で不在だった。なぜか合い鍵を所持しているクリスとともに、常夏コンビも侵入する。

「あゝ、こりゃあ、瞬着だねい。剥離剤じゃないと厳しいよん」
クリスは夏川の頭にくつついたブラを調べながら言う。

「くっそ、吉井の野郎……」

「ちよつと待つておいてねい？ たしかこの辺に……」

そう言つて、戸棚を漁るクリス。

その間、常村は落ち着かない風に辺りを見回していた。

「なあ、なんで生徒指導室の鍵なんて持つてるんだ？」
何気ない質問。

しかし、クリスの体は動揺したように軽く跳ねた。

「……西センに色々相談に乗って貰つていてねい。まあ、その過程で預かったただだよん。おつとあつた。ナツ、ちよつとこつち来なさい」

「う？ あ、いやいい。自分で……」

「だあめ。剥離剤だつて、取り扱いに注意しなきゃいけないんだから。ほら、早くしなさい」

てきぱきと準備しながら手招きするクリス。

夏川は、しばらく躊躇していたが、観念したように彼女が用意したパイプ椅子に座った。

「でも、何でこんなことになつての？ 吉井がつて事は、彼にやられたわけ？」

作業しながら訊ねるクリス。

しかし、夏川はもちろん、常村も答えない。

「……私を恨んでやつてるんだつたら、Fクラスの子を巻き込まな

いで？ 私を狙いなさい」

「チツ、うつせえよ。そんなじゃねーよ」

クリスの言葉に夏川はふてくされたように言う。
それを聞いて、クリスの顔が訝しげになった。

「おい、夏川」

「わあつてるよ」

クリスの様子に気づいた常村は、夏川に釘を差す。
しばらくは三人。

黙ったまま作業が続いた。

「……終わったわよ。あとは水できれいに流してね？ ……ねえ、
もしかしてあんたたちヤバいことに首突っ込んでるんじゃないの？」
ブラを取り終えたクリスは、心配げに訊ねる。

しかし、夏川はうるさそうにしながら口を開いた。

「うつせーよ。あんたには関係ねー」

「あるわよ！」

夏川の言葉を切り裂くようにクリスが鋭く声を上げる。

その迫力に、常村と夏川はたじろいだ。

「たしかにあの時、私は果たすべき責任を果たせなかった。そのせいで、あなたたちは辛い目にあってしまった。それは、謝っても謝りきれないかもしれない……。そんな私にこんなこと言う資格は無いのかもしれないけど、あなたたちが心配なのよ！ 友達だものっ！」

そう言う、クリスの顔を見て、常村と夏川は息を飲む。

彼女の蒼い双眸から光るものが溢れるものを見てしまったから……。

「ねえ、覚えてる？ 一年の時、この容姿にみんな寄りつかなくて、
クラスで独りぼっちだった私に、最初に話しかけてきたの、ナツだったよね？ 変な踊りを踊りながら、英語で話しかけてきて……」

「あ、ありゃあ、ボディランゲージって奴だよ。そうでもない」と

伝わらないかと思ったんだよ」

そのときを思い出したのか、顔を軽く赤らめ、夏川がそつぽをむく。

「でも、私が日本語で応対してるのに、踊りも英語もやめなくって……」

「ああ、俺が指摘してやったんだよな。『日本語で喋ってるぜ』ってよ」

クリスの言葉に常村が追隨しながら笑みを浮かべた。

それを見た夏川が声をあげた。

「うつせ！ き、緊張してたんだよ！ 悪いかっ！」

「うつん。あの騒ぎのおかげで、私はクラスにとけ込むキツカケを作れた。それでも、ふたりには感謝しているのよ？」

赤くなつてがなる夏川に、クリスは柔らかな笑みを見せた。

それを見た夏川は、一瞬呆氣にとられ、相好を崩した。

「やっぱその方が良いな」

そう言つて笑う夏川。

それ様子を見て、軽く息を吐く常村。

クリスは、そんな二人の様子に、きよとなる。

「ん？ なに？ ナツ」

「いや、その笑顔に惚れたんだよなあって、思つてよ……」

流れに任せて、さらつと告白してしまう夏川。

「へっ？」

「あっ！？」

その言葉に、完全に不意をつかれたクリスは、間抜けな声を上げて赤くなり、常村は、呆れたように首を振る。

「おいおい……」

そして、当の夏川は、完全に固まっていた。

「え、えーと、あ、ありがとう……？ かな？ この場合……」

困惑気味に答えるクリス。

そして、その言葉をかけられた夏川は、完全に頭を抱えていた。

「うーご、よりによってこんなタイミングで、こんな勢いみたいな告白をしちまった……」

「……まあ、知られっちまったんなら仕方ねーんじゃねーか？」
落ち込む夏川を、薄ら笑いを浮かべながら慰める常村。

「ひとごとだとおもって、軽く言ってんじゃねーよ！」

そんな常村を、夏川が怒鳴りつけるが、彼はどこ吹く風で肩をすくめる。

そんな二人を見ていて、クリスは無性に楽しくなって、笑い始めた。

つられて二人も笑い出す。

不意に、どちらからともなく笑い声が止んだ。

「なんだか、昔に返ったみたい。あんた達がバカやって、私や静香が笑って、あおちゃん首をすくめて、努が呆れて、あんた達が食ってかかる。それを私と静香が止めて……」

「……辞めろよ」

クリスの呟くような声を、常村が遮る。

「……うん。ごめん。今更だものね。もう失われた光景。……ねえ、ナツ。こんな私を好いてくれてありがとうね？ でも、ゴメン。私はあなたに好きになって貰う資格なんてないの。私は……誰かに愛されるには、汚れすぎてしまっているから……」

「な、何言っ……！？」

クリスの言葉に、夏川が声を上げるが、その表情を見て、二の句が継げなくなる。

そこにあっただのは、空虚。

とても、虚ろな顔だった。

それを見て、常村が意を決して口を開く。

「……なあ、何があっただんだ？ 去年の夏休みだ。あんたに連絡が取れなくなって、新学期になっても顔を出さない。その内、努の奴も登校しなくなって、クラスはバラバラになっちまった。Bクラス次席だった谷井が必死でまとめようとしちゃあいたが……。いや、

それはこの際置いてくぜ。問題は、俺たちをはじめとするBクラスの連中全員が、おまえに何があったか知らないんだ。教えてくれ、あの夏に何があったのか？ 俺たちには知る権利があるんじゃないかねえか？ 頼む、姐さん」

真剣な顔で頭を下げる常村。

「……俺からも頼む。教えてくれ」

さらには夏川も真面目な顔で頭を下げてきた。

「……………」

クリスは迷うように視線をさまよわせる。

常村も夏川も黙ってクリスを見つめていた。

どのくらい経ったのか。

長いような、短いような時間を経て、クリスは軽く息を吐く。

「……多くは言えない。ただ、あの時、私は全く身動きも連絡も取れずにいて、色んなことをされた。助けられてからも、入院生活が長引いて、とてもじゃないけど……学園に戻るなんて出来なかった」
クリスの顔色は真っ青で、無理に話しているのは明白だった。

一方で、常村も夏川も、聞いたことを後悔するように、顔を強張らせていた。

話の内容から、おおよそ何が起きたのか想像できた。
出来てしまったのだ。

「な……んだよ……そりゃ……」

夏川の絞り出すような声。

常村の苦渋に満ちた顔。

しかしクリスは、顔色は優れないものの、静かに目を閉じて笑みを浮かべた。

「もう……済んだことよ。割り切らなきゃ、やってられないわ。まったく、女の秘密を聞きたがるなんて、最低ね？」

『ぐっ？』

最後に茶化すように言うクリス。

その言葉に、常村も夏川も詰まってしまふ。

が、その雰囲気は、幾分か和らいだ。

「で？ あなた達はどんなことに首を突っ込んでるの？」

「いや、俺たちや教頭に頼まれて……」

「ちょ！ おま！ 何バラして……」

「あ……」

流れるように秘密をバラしてしまう夏川。

常村があわてて止めるが、時、すでに遅しだ。

クリスの目が、スウツと細まる。

「……教頭に、何を頼まれたの」

底冷えのするクリスの声を聞いて、常村も夏川も、腰のあたりが持ち上がるように縮み上がるのを感じた。

「ここが例の連中の店で出す食材置き場か？」

「らしいな。とっとと済ませようぜ？」

空き教室の一つ。

そこには、Ｆクラスの中華喫茶で使用する餡子や茶葉。ゴマなどが積み上げられている。

それを前にして立つ人影が二つ。

教頭室にたむろしていた、大春の手下のうちの二人だ。

その手には、例の細菌入りの水が入った小瓶と、注射器が握られている。

「しっかし面倒だな」

「ああ、手つとり早くばらまきやいいのかわかったら、外気に弱いから、注射器で注入しなきゃならんとは……」

「ボヤくなよ、とっとと済ませようぜ」

そう言って、食材に近づく二人。

「……そこのお二人さん？ 何をしようとしてるんだい？」

唐突に声をかけられ、二人はあわてて振り向く。

すると、そこにはいつのまにやらスケッチブックを持った、一人の少年が立っていた。

中肉中背で特徴らしい特徴はない。

強いてあげるなら、どこを見ているのかわかりづらい糸目であるうか。

軽く微笑みながら二人を見ている少年、加藤武は口を開く。

「そこにあるのは、うちのクラスの食材だね。妙なイタズラをされると困るんだよね」

その言葉に、二人の男は武を挟み込むように移動して構えた。

「とつとつ片づけて、仕事を済ますぞ」

「ああ、わかつてる」

その返事を合図に、二人は飛びかかった。

「やれやれ、荒事は好きじゃないんだけどな」

口をへの字に曲げながら武が呟く。

そして、その瞬間……………。

空き教室の戸が、いささか乱暴に開けられ、フレームレスのメガネを掛けた、メイド服姿の少女が息を切らせながら現れた。

二年Aクラス所属、神薙御鳥だ。

「何をやってるんですかっ?! あなたはっ!」

言いながら、右手の人差し指と中指で挟むように持ったお札を彼に向けた。

そこには、倒れ伏す二人の男と、一人の少年が立っていた。

「いやあ、緊急事態でしたから……」

言いながら振り向く、中肉中背で糸目の少年、加藤武。

振り向いた拍子に、羽音が響いた。

彼の背中からのびた、大きく黒い翼が動いたからだ。

「……妖力の行使は協定違反ですよ? 【天狗】さん……」

油断無く構える御鳥。

「妖怪は、妖力をみだりに使用しないことが、学園にとどまる条件です。事と次第によつては……」

その目が鋭くなる。

「待った待った。本当に緊急だったんだよ」

武はあわてて男達から取り上げた小瓶と注射器を持ち上げてみせる。

「……それは？」

それらを、御鳥は訝しげに見た。

「薬じゃあ無さそうだけどね、中に肉眼じゃあ見えない位小さな生命体がウヨウヨしてるね。人の手が加わっていて、毒性を持っているみたいだ。理由は判らないけど、食材に注入しようとしていたみたいだったからね」

武が肩をすくめると、大きな翼が羽音を立てて動く。

「早く翼を仕舞って下さい。人払いしてますが、見られないとは限らないですよ？」

「おっと、ゴメンゴメン。まあ勘弁してよ、妖力を解放しないと、非力な人間と変わらないんだからさ」

武が済まなそうに言うのと同時に、大きな翼が背中へ引つ込み、消えて無くなる。

「事情はだいたい判りましたが、監視役として、委員会への報告させていただきます。あなたにも説明責任がありますので、一緒に来て下さい」

「……仕方ないね。祭りを楽しみたかったんだけどね」

武は肩を落として歩き出す。

御鳥はそれを見送ってから、男二人に目をやる。

「……屋上あたりで寝ていたことにしましょうか」

そして、懷から別の札を二枚取り出し投げると、印を切った。

するとその札はひとりでに飛び出し、大きく広がり、男二人を包み込むと消え去った。

「これでよし」

術による記憶の誘導で事を隠蔽するのも彼女の仕事だ。

だから、この対処は彼女にとっては当然のものだった。

だからこそ、この日に起きる事件を、後に彼女が知ったとき、この二人を確保して詳しく調べなかったことを、大いに悔やむことになる。

どちらにしろ、現時点では、彼女は事のあらましを知ることにはなかった。

ところ変わって、グラウンドに設置された特設ステージ。

召喚大会三回戦が開始されようとしていた。

そして、Fクラス各チームの前には、それぞれ強敵となる三年生が立ちはだかった。

受験を控えた彼らが率先して参加する理由は何なのだろうか？

その様子を教頭室の窓から見下ろしている竹原の口元が、大きく歪んだ。

第三十一問（後書き）

第三十一問、いかがでしたでしょうか？

クリスの過去への言及。

そして、文月学園にかかわる、オカルト関連の独自設定が開陳されました。

そんなわけで、『バカひば』では、本物の妖怪が隠れて文月学園に通っていたりします。

この設定が受け入れてもらえるかは見当がつきませんが、オカルト話がメインになることはありません。

それでは、次回もよろしく願いしますね♪

第三十二問（前書き）

第三十二問、更新しました。
全編バトルです。

またもや笑いが無いですが、楽しんで読んでいただければ幸いです。

第三十二問

召喚大会、第三回戦。

特設ステージ上で相對する者たち。

明久と雄二の目の前には、三年と二年のペアが立っている。
その所属クラスを聞いて、雄二は眉を寄せる。

「三年のBクラスと二年のCクラスか。なかなかの強敵だ」

「うん。どうするの？ 雄二」

呟くような雄二の声に、明久が問いかける。

雄二は真剣な顔で目を細めると、口を開いた。

「まず、明久が三年を引きつけ……」

「引きつけ？」

「その隙に明久が二年を倒す」

「それ、両方、僕の仕事になってるんだけど？」

明久がジト目になって雄二を見る。

そうこうしているうちに、相手が召喚してしまった。

三年Bクラス、竹本浩二 現代社会 171。

二年Cクラス、原田宗一 現代社会 134。

竹本の召喚獣は、板金鎧にモーニングスターと呼ばれる、短柄と
トゲ付き鉄球を鎖でつないだ武器。

これを二刀流で二つ装備している。

相方の原田は、丸い金属片を鱗状に着けたスケイルアーマーに、
戦斧と円形盾を装備している。

「……ずいぶん強そうな装備だね」

「そりゃそうだ、どっちも俺らより上位のクラスだしな。さて、こ
ちらも行くぞ？」

明久に答えながら雄二が不敵に笑う。

「オッケー、サモン試獣召喚！！」

「サモン試獣召喚！！」

相づちを打った明久が、その言葉を口にするのに合わせて、雄二も同じ言霊を紡ぐ。

そして、二人の相棒が、いつものチンピラ装備で召喚された。

二年Fクラス、吉井明久 現代社会 82。

二年Fクラス、坂本雄二 現代社会 163。

「お？ 明久、ずいぶん点が取れてるじゃないか」

「まあね。ひばりと一緒に、秀吉のお姉さんや姫路さんに勉強教えてもらってるからね。雄二もこの教科は勉強済みみたいだね」

「まーな」

軽口をたたく二人。

しかし、相對する者たちは、露骨に動揺した。

「おいおい、片方の点数。なんだありや！？ Fクラスの点数じゃねーぞ」

「くっそ、詐欺じゃねーか！ チンピラみてーな装備のくせに！」

「高得点の方は俺が相手をする。原田、お前は弱そうな方を速攻で潰せ」

「了解！」

手早く言葉を交わす竹本と原田。

身構えた彼らの召喚獣を見て、雄二は獰猛に笑う。

「作戦会議は終わったようだな。行くぞ明久」

「了解つと！」

言葉も終わらぬうちに飛び出す明久の召喚獣。

それを見た相手召喚獣は丸い盾をかざして身構える。

ところが明久は、フェイントを駆使して、相手の左側。

つまり盾を持った方へ回り込む。

「え？」

フェイントに慌てた原田は、無理矢理召喚獣に攻撃させようとするが、盾が邪魔をしようように武器が振るえない。

そんな風に、相手がもたついているのを見て明久が何もしない訳もなく。

「ちえあつ！」

気合いと共に、己の召喚獣の木刀で、相手召喚獣の後頭部を強打。相手はつんのめって、顔面から地面へとダイブした。すかさず明久は、鎧で守られていない部位を召喚獣の武器で連打する。

二年Cクラス、原田宗一 現代社会 0。

「は？」

わずか数秒。

原田の召喚獣は、速攻で倒された。

「よそ見をしている暇は無いぜっ？！ 先輩っ！！」

その隙を雄二が見逃すはずもなく、メリケンサックをはめた召喚獣が猛ラッシュを仕掛ける。

しかし。

「舐めるなっ！ 二年坊がつ！」

そのすべてが、板金鎧の装甲によって弾かれた。

「くっ？！ 硬えっ！？」

高得点による攻撃力とラッシュで決めようとした雄二は、まるでダメージが与えられていないことに驚愕する。

「お返しだぜっ！」

ラッシュを仕掛けた隙を突いて相手はモーニングスターを、雄二の召還中に叩きつけた。

何とか身をそらす雄二の召喚獣。

だが、モーニングスターは、その打撃部から生えた、無数の棘による広範囲への高い攻撃性が特徴だ。

必然、雄二の召喚獣は右腕の肩口から腕全体をザックリ挟まれてしまった。

「くっっ？」

この攻撃で、雄二の点数は70点ほども減少した。

竹本は、トドメとばかりにもう一方のモーニングスターを振るわせる。

が。

「うりゃあっ！」

自分の相手を倒してフリーになった明久が傍観するはずもない。かけ声と共に、竹本の召喚獣の膝裏へ、木刀を全力で叩き込んだ。「何だとっ！！」

驚愕に声を上げる竹本。

彼の召喚獣は、その一撃の衝撃で姿勢を崩し、ヒザを着く。

モーニングスターの軌道もズレて、雄二の召喚獣には当たらなかった。

竹本は、明久の操作能力に恐怖を覚えた。

二年時に、一年間を通して、戦争の回数もそれなりにあった。

その経験をひっくり返しても、ディフォルメされた召喚獣の膝裏など、今まで狙われたことはない。

一部、武闘派の連中は生身で戦うような動きをしてみせる事がある。

そんな強敵と戦い、ある技術を身につけた。

それを駆使しても勝てる気がしなかった。

「ふう、助かったぜ明久」

「油断しないでよ、雄二。この人、かなり操作技術が高いよ」

冷や汗を拭って礼を言う雄二に、明久は竹本から目を離さずに言う。

その顔に、雄二は何かを感じた。

「……何か気づいたのか？」

「さっきの雄二のラッシュ。あれは防御力で弾いたんじゃないよ」「なに？」

「雄二のラッシュに合わせて、体を反らしたんだ。だから、攻撃は全部鎧の表面を撫でただけだよ」

雄二の問いに解説する明久。

その内容に、雄二は戦慄した。

そんな神業レベルの操作をする相手の技量もさることながら、そ

れを見切った明久に対してもだ。

「ついでに言うと、あの武器、モーニングスターって言うんだけど、かなり操作が難しいはず。それを両手に一本ずつ持って、何の問題もなく振り回してる。かなり操作に慣れてる証拠だよ」

明久の解説に聞き入る雄二。

「（……なんとまあ、こいつがこんなに頼もしく見える日が来るとは……）」

小さく呟いた雄二は、破顔した。

「よし、明久。勝ちに行くぞ」

唐突に雄二にそう言われてキョトンとなる明久。

しかし、すぐに不敵な笑顔を浮かべてうなずいた。

「当然！ 足を引く張らないですよ？ 雄二！」

「ぬかせ」

雄二も不敵な笑みを浮かべて応じる。

そんな二人を見て、竹本は舌打ちをした。

「ちっ、木刀の方が操作がうまいか。だが！」

声を上げた竹本は、召喚獣に二本のモーニングスターを、地面に引きずるようにしながら突進させる。

「来るよ！ 雄二！」

「応っ！」

二人は、それぞれの召喚獣に身構えさせて迎撃しようとする。

その様子を見て、竹本は軽く笑みを浮かべて召喚獣を操作する。

「ふんっ！」

あがった声と共に、竹本の召喚獣が、軽く跳躍し、右腕を大きく振り回した。

鎖の擦れる音を響かせ、モーニングスターが振るわれる。

その一撃は、二人の召喚獣の頭上へ迫り、彼らは左右へ散った。

地面に叩きつけられた、棘だらけの鉄球をそのままに、左腕のモーニングスターを雄二に向かって振るう。

今度は警戒して、召喚獣に大きく跳躍させていた雄二。

距離があるため、届かない。

誰もがそう思った。

虚しく地面にめり込んだ、棘付き鉄球。

それを利用して、勢い良く右腕を振るう。

地面にめり込んでいた棘付き鉄球が、引っこ抜かれ、その勢いのまま恐るべき速度で雄二の召喚獣へと放たれた。

「なっ?!」

雄二は、驚愕しながらも、召喚獣に左腕で防御させる。

赤い花が弾けた。

雄二の召喚獣は大きくはね飛ばされ地面にバウンドした。

「くそ」

かろうじて戦死を免れたものの、雄二の召喚獣は満身創痍だった。その左腕は、粉々に消し飛ばされ、全身を朱に染めている。

「雄二!」

声を上げた明久は、召喚獣を突進させる。

それを見た竹本は、勝利を確信した笑みを浮かべた。

「見え見えだつての!!」

大きくモーニングスターを振るい、明久の召喚獣の頭を狙う。

誰もが、新たな赤い花が咲くと思った。

不意に、召喚獣の頭が掻き消える。

「なっ?!」

完全に虚を突かれる。

見れば、明久の召喚獣は、地面にべったり張り付くように伏せていた。

素早く身を起こし、竹本の召喚獣に片手突きをみまう明久の召喚獣。

その一撃は、相手の喉へと正確に突き込まれていた。

大きく点数を減らされ、たたらふむ。

「明久！ 使え！」

突然雄二が声を上げ、自分の腕のものを外して明久へと投げた。それが何かを認めた明久は、キャッチと同時に自分の腕にはめて、

「コマンドワードを叫ぶ。

フーストアップ

「強化っ！！」

明久の腕に収まった腕輪、黒金の腕輪が光を放ち、明久の召喚獣の武器が輝く。

長く伸びたそれを振るい追撃する明久の召喚獣。

「くっ？！」

竹本は、かろうじて召喚獣にその一撃を防がせ、大きく後退させる。

そして見た。

明久の召喚獣の武器が、長大で肉厚な刀身を持った野太刀に変化しているのを。

「……どんなトリックだそりゃ？」

竹本は、苦虫を噛み潰したような顔で呟く。

そして、召喚獣に油断無く構えさせた。

明久も、長さの変わった得物に戸惑うことなく、召喚獣に構えさせる。

緊張が場を支配し、静寂が訪れる。

未だ一般公開はされておらず、見学は出場者や関係者のみであるが、その誰もが、固唾を飲んで見守っていた。

雄二も、もはや自分の召喚獣が戦力足りえないことを察しており、同じステージにいながらも、見ることもしかできないもどかしさを感じていた。

「（くそ、俺も明久ほどでなくとも、もっとうまく操れれば……）」

彼の呟きは、誰にも届かず、宙に舞って、霧散した。

その間もにらみ合う明久と竹本。

どれだけ時間が過ぎたのか？

それとも、瞬き程度なのか？

それは、誰にも判別できなかった。

だが、誰かの顎を、その滴が伝い、ひとつ、輝きを放って落ちる。それが、地面で跳ねて、王冠を作った瞬間。

二匹の獣が疾駆した。

勢いを利用し、モーニングスターを振るう竹本の召喚獣。

明久は、召喚獣をコントロールし、それを冷静に野太刀の柄頭で叩いて弾く。

しかし、竹本の召喚獣の攻撃は、そこで終わらず、もう一つの棘付き鉄球が飛来する。

だが、明久は、召喚獣にそれを丁寧な野太刀の峰で払わせる。

ここでモーニングスターの大きな欠点をあげよう。

モーニングスターは、恐ろしく攻撃性の高い武器だ。

その重量を、鎖によって振り回すことで得られる遠心力によって強化し、その威力で全体に配された棘による甚大な被害を発生させるのだ。

だがしかし、この攻撃性は、時として、致命的な欠点となりうる。重量と遠心力を利用するが故に、取り回しが最悪であり、次の攻撃に移るまでに致命的なラグが発生する。

モーニングスターは、引き戻して振り被らねば使えないのだ。

それを見越しての二刀。

しかし、三段目はない。

あわてて得物を引き戻させる竹本。

そのラグに乗じて、明久が切り込む。

本来、このような場合に備えるための、鎧のコントロールで技術。だが、明久は野太刀でもって、恐るべき技術を披露した。切り込むように振った野太刀を素早く水平に引き戻す。

召喚獣が半身に構え、前へ振り出された脚を追うように、全身が前へとスライドする。

腰が半回転し、野太刀を構えた両腕が伸びる。

大地を叩き割る震脚の轟音と共に突き出された野太刀は、目にも

留まらぬ速度で竹本の召喚獣の首に吸い込まれる。

これを見ていた俊夫は口笛を吹く。

「やるじゃないか、明久の奴」

「どういうこと？ 前田君」

俊夫の隣で見学していたひばりは、一体なにが起こったのかわからずに首を傾げた。

「いま、明久の奴は、俺が教えた技を、野太刀の突きに応用したんだ。本来は拳打。つまり、拳で殴るための技だが、それを野太刀の突きで使ってみせたんだ」

「それって凄いことなの？」

俊夫の説明に、ひばりは期待するように身を乗り出す。

「そうだな、まだまだ未完成な技だが、力の流れも澱み無い。構えてから突くまでの動作も自然だし、速度も申し分なしだ。ああいう応用を利かせる事が出来るのは、達人級の人間だな。つまり、今、明久が繰り出した技は、世界レベルって事だ。無論、未完成だから欠点はしこたまあるが……」

「でも、凄いことなんだよねっ！」

俊夫の説明を聞いて、ひばりは目を輝かせた。

嬉しくて仕方ないという様子がひしひしと伝わってくる。

明久が認められた気がしていてもたってもいられないのだ。

そんなひばりの様子とは裏腹に、ステージ上の竹本は、信じられないものを見たようにへたり込んでいた。

「……そんなばかな」

呟いて己の召喚獣を見つめる。

彼の召喚獣は、うなじの辺りから、血に染まった切っ先をのぞかせたまま、二度三度と痙攣すると、両の手から得物を取り落とし、それが地面に落ちる刹那の間に掻き消えた。

「勝者、坂本、吉井ペア！」

立ち会いの教師から宣告されると同時に、歓声が上がる。

そのムードに、明久は気圧されたが、その背中を軽く叩かれて、

我に返る。

「……おまえへの歓声だ。応えてやれよ」

雄二だった。

言われて明久は、少し照れくさそうに周囲を見回してから、右の拳を突き上げた。

それに応えるように、一際大きな歓声が上がった。

第三十二問（後書き）

第三十二問、いかがでしたでしょうか？

『明久強化計画』の、小さな芽が出ました。

いまだ未完成ながら、明久の召喚獣に、必殺技が加わります。

これの完成型の登場は、まだまだ先ですが、楽しみにしていてください♪

完成型の名前も決まっていますが、まだ内緒です♪

しかし、またバトル小説って言われそうだ（笑）♪

それも目指してますから、言われると嬉しいんですけどね♪

それでは、次回もよろしくお願いしますね♪

第三十三問（前書き）

第三十三問、更新しました。

若干短めですが、またもやバトル（苦笑）。

読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第三十三問

明久がステージを降りると、ひばりが飛びついてきた。

「やったねアキくん」 凄かったよ！」

嬉しそうにはしゃぐひばりを見て、明久は照れくさそうに笑った。

「おめでとうございます、明久君」

「アキ、やるじゃない」

瑞希、美波も明久たちのところへやってきて、彼を讃える。

「あ」 お疲れさま、坂本君」

次いで降りてきた雄二に気が付いたひばりが声をかけてきた。

が、雄二は険しい顔でステージ上を振り返っていた。

決着が付き、ステージからの去り際に竹本らが呟いた言葉が気になつていたのだ。

そう、彼らは……。

「『これで報酬はパアかよ』か……」

その言葉を反芻するかのように呟く雄二。

それを聞き止めたひばりが首を傾げる。

「？ なに？ どうしたの？ 坂本君」

「……みんな、聞いてくれ」

一同に振り向いて声をかける雄二。

それに対して、明久ら五人が彼に注目する。

「……例の件に関する敵かもしれねえ」

‘例の件’。

雄二とひばりによって、大会参加者にのみ明かされた、腕輪の話を指していた。

「……今の対戦相手か？」

軽く思案して瑞希が口を開く。

その言葉にうなずいてみせる雄二。

「なんらかの報酬目当てらしい。この分だと、三年が絡んだチーム

は要注意かもしれんな」

いつになく真剣な面持ちで言う雄二。

それに対して、ノドを鳴らしたのは誰だったのだろうか？

「ともかく警戒してくれ」

雄二は、みなに警戒を促し、五人がうなずく。

『次のペアはステージに上がって下さい』

ステージ上の教師から声がかかり、瑞希と美波がそちらに顔を向けた。

「つぎは、ウチ達ね」

「はい、頑張りましょう！ 美波ちゃん！ じゃあ、行つてきますね？ 明久君、ひばりちゃん」

美波の声に、瑞希は勢い込んで頷くと、明久とひばりに声をかけた。

先ほどの雄二の話から不安なのか、ひばりの顔色は優れない。

「気をつけてね？ みつちゃん」

そう言つて、瑞希達を見上げるひばり。

その肩に、優しく手が置かれた。

ひばりが振り向くと、明久が優しい笑顔で立っていた。

「ひばり、心配するより、二人を応援しようよ。きっとそれが、二人のためになるよ。落ち着いて頑張つてね、美波、瑞希ちゃん」

ひばりに言つてから、二人にエールを送る明久。

その言葉に、二人は破顔し、頷いてみせる。

その様子を見て、ひばりは眉を力強く持ち上げた。

「うん。二人とも頑張つて！」

ひばりのエールにも応え、瑞希と美波は、ステージ上へと足を見た。

そこに待ち受けるは、男女のペア。

「これより、Dブロック三回戦第二試合、大原、若竹ペアと、姫路、島田ペアの試合を開始します。では、召喚を」

教師の言葉に構える四人。

「……試獣召喚っ（サモン）！！」「……」

四つの声が唱和し、解放された言霊に応じて、魔法陣が四つ広がる。

そこに顕るるは、四人の分け身たる、使役獣。

三年Cクラス、若竹容子 現代社会 141。

二年Bクラス、大原海 現代社会 170。

二年Fクラス、島田美波 現代社会 61。

二年Fクラス、姫路瑞希 現代社会 403。

表示された数字に、若竹と大原がうなる。

「聞いてはいたけど、目の当たりにすると滅入るわね」

「どうでしょう？ 部長」

「どうもこうも無いわね。部費獲得のため！ やるわよ、海！」

その言葉を合図に、左右へ散解する若竹と大原。

細長い板金を何枚も張り付けたラメラーマーを纏い、縦に長い菱形の縦と厚みのある刀身の片手剣ブロードソードを持った若竹の召喚獣は軽快に移動するが、鎖を編んだチェーンメイルの上にブレストアーマーを付け、長い竿に斧頭を取り付けたポールアックスを携えた大原の召喚獣の動きはぎこちない。

すぐさま散解したのは、瑞希の腕輪対策であろう。

これを見て取った瑞希は、熱線攻撃をあきらめ、召喚獣に大きな両手剣を、しっかりと握らせた。

「私が三年生の相手をします！ 美波ちゃんは、Bクラスの相手をお願いします！」

「わかったわ！」

相手に合わせて左右に分かれる瑞希と美波。

「逃がしません！」

高得点によるパラメータ補正によって、素早く移動した瑞希の召

喚獣は、若竹の召喚獣の前に回り込んで大剣を振るう。

しかし、若竹は、落ち着いた様子で召喚獣の足を止めながら盾でその一撃をそらす。

そのまま突き出したブロードソードが、瑞希の召喚獣の左腕を掠めた。

「神経使う戦いになりそうだね……」

点差からくる力の差に、苦々しい表情を浮かべる若竹。

その間も、瑞希の召喚獣は、その豪剣を嵐のように繰り出している。

「攻撃なんかさせませんっ！」

息つく暇もない剣戟の嵐を、若竹はかるうじて盾でいなし続ける。本来なら、盾で武器を押さえ込み、剣でカウンターを決めたいところだが、パワーが違いすぎて抑えるのが難しい。

かといって、まともに盾で受け止めると、一撃で粉碎されそうな威力がこもっている。

だから若竹は、勝機が訪れるのを待つことにした。

一方で瑞希は焦りを感じていた。

三年生の操作技術に迫れるほど、召喚獣操作に慣れていない自分は、高得点によるパワーでのごり押ししかないと判断した。

素早く終わらせなければ、四人の中で、もっとも点の低い美波が危険だ。

それを踏まえての速攻のはずだった。

しかし、相手が悪かった。

盾を持つ召喚獣はそう多くない。

そして、その扱いがうまい者に攻め込むのが、これほど難しいとは知らなかったのだ。

操作技術の高い者に点差は有効に働かない。

明久やひばりを見ていて知っていたはずのことを、瑞希は失念していたのだ。

その一方で、美波もギリギリの戦いを強いられていた。
お互いに操作技術の高くないもの同士。

その動きは、どちらも大味だ。

長い得物を大きく振り回す大原の召喚獣に対して、美波は避けることに専念していた。

身軽な装備をしている分、動きの良い美波の召喚獣は、大きく振り回されるポールアックスを紙一重で避けし続けている。

その特性上、大きく降りかぶって使用する竿状武器は、高い威力を誇るが、軌道を見切られ安い。

きちんとした用法を知っていれば、隙はなくなるのだが、あいにく大原はその方面に疎かった。

おかげで、美波の召喚獣は、何とか攻撃を避け続けることが出来ていた。

こうして、ステージ上で繰り広げられている、二つの一騎打ちは膠着状態に陥っていた。

「まずいね」

「ああ」

明久のつぶやきに、俊夫が頷く。

それを聞きたがめたひばりは、二人を仰ぎ見る。

「どういうこと？」

「一見、拮抗しているように見えるけど、姫路さんが焦りすぎだよ。あれじゃあ……。姫路さん！ 落ち着いて！」

ひばりに説明しながらも、明久はたまらなくなって瑞希へ声をかける。

しかし、瑞希の耳には届いていないようで、召喚獣は剣を振るい

続けていた。

「む、いかな。召喚獣が疲弊してきたようだ」

聞こえてきた俊夫の言葉に、瑞希の召喚獣を見ると、剣を振るいながら肩で息をし始めているのが見て取れた。

いかに高い点数による補正で、スタミナが豊富だとはいえ、それは無尽蔵ではない。

徐々に剣速が衰え、剣先が乱れ始めた。

「う、くっ」

目に見え始めたそれを目の当たりにして、瑞希の集中が乱れる。

「ッ！」

それを若竹は見逃さなかった。

力が乗らなくなった剣先を、盾で思い切り弾かせる。

消耗した瑞希の召喚獣は、それを抑えることが出来ず、大きく体勢が乱れた。

「トドメ！」

勝機を見て取った若竹は、召喚獣に突きを放たせる。

大きな両手武器は、高い威力を誇る強力な武器である。

両手で保持した大質量が、大きな破壊力を生み出すのだ。

しかし、その反面、盾のような防御性のある装備を持ってないという欠点がある。

必然、防御するには、武器そのものによって攻撃を受け止めることが一般的だ。

だがいま、瑞希の召喚獣は、大きく武器を弾かれ、体勢を崩してしまっていた。

それをフォローするためのスタミナも枯渇し、瑞希の召喚獣は、突き出されたブロードソードの剣先に、防御はおろか、避けることすらままならなかった。

「みっちゃん！」

「瑞希ちゃんっ！」

「ああっ?!」

ひばりと明久が悲鳴を上げ、諦めてしまった瑞希が、両手で顔を覆う。

「瑞希！」

不意に横合いから拳がった声に、瑞希はハッとなる。

瑞希の召喚獣は、無事だった。

若竹の召喚獣が、ブロードソードを持った右手に、針のような刀身のレイピアが命中し、軌道がそれたのだ。

瑞希のピンチを見て取った美波の、とっさの機転だ。
しかし。

その代償は大きかった。

レイピアを投じた召喚獣の頭上には、凶悪な斧頭が降り降ろされていたからだ。

それは、美波の召喚獣の顔の側面と耳を抉りながら肩口に叩き込まれ、そのまま股下まで引き裂き、ステージにめり込んだ。

そのまま霞のように消え去る美波の召喚獣が軽く笑んだように瑞希には見えた。

「くっ、邪魔をしてえ！でもこれでっ？！」

若竹は、勝ち誇ったように召喚獣に武器を振るわせる。

ブロードソードは、瑞希の召喚獣の左肩に叩きつけられたが、鰐に近い根本部分が食い込んだに過ぎなかった。

瑞希の召喚獣が大きく踏み込んだため、うまく斬撃を振るえなかったからだ。

その、若竹の召喚獣の胸に、瑞希の召喚獣の左手が押しつけられる。

そして若竹は見た。

瑞希の召喚獣が、歯を食いしばり、怒りの形相を浮かべているのを。

「ヒッ？！」

若竹が、その気配に飲まれた瞬間。

瑞希の召喚獣の左腕が輝き、すさまじい熱量が放射され、若竹の

召喚獣を貰いた。

その胴体には穴が空き、融解したラメラアーマーの向こうに炭化した穴が見える。

そのまま力なく、仰向けに倒れながら、若竹の召喚獣は掻き消えた。

「部長くっ?!」

その様子を見た大原は、己の召喚獣を突進させる。

大上段から降り降ろされた一撃を、瑞希の召喚獣はあっさりと避け、そのまま片手で突き出した大剣の先が、大原の召喚獣の胸板を、鎧ごと貫いた。

信じられない。

そんな表情を浮かべながら、大原の召喚獣は、その体を霞に変じた。

「勝者、姫路、島田ペア」

立ち会いの教師がコールし、決着が宣される。

「ふう、やったわね? 瑞希」

精神的な消耗が大きかったせい、大きく息をつく美波。

そして、瑞希へと笑いかける。

と、その体が、柔らかく包み込まれた。

瑞希が美波に抱きついたのだ。

「えっ? ちょっ? 何??」

突然の事態に、目を白黒させる美波。

その耳に、蚊が鳴くような声が聞こえてきた。

「……めんなさい、美波ちゃん……、ごめんなさい、ごめんなさい

……」

瑞希だ。

どうやら泣いているようで、体が震えているのが分かる。

美波は、やれやれという風に息をつき、彼女の背中を軽く叩いてやる。

「いいのよ、瑞希。どのみちあのままじゃ、ウチは足手まといでし

かないもの」

「でも、でも！ 私がきちんと出来なかったから、美波ちゃんの召喚獣が……」

か細く、弱々しい声で謝る瑞希。

そんな彼女の両の肩に手を添え、優しく身を離す美波。

そして、優しい笑顔を浮かべながら口を開いた。

「ね？ 瑞希。せっかく勝ったんだから、泣かないで？ そして謝らないで？ かわいい顔が台無しよ？ ね、笑って？」

言われて瑞希は、両の手のひらで目を拭いさる。

そして、美波から一步離れて、きれいに笑って見せながら、その言葉を口にした。

「……はい、ありがとうございます」

その言葉に応えるように、美波も笑った。

そのとき、新校舎の一角から、悲鳴が上がった。

「いーやーっ？！ 美春のお姉さまがーっ！？」

などと聞こえたとか何とか。

なお、この一件のせいか、『文月学園 姉にしたい女子生徒ランキング』のベスト3に、島田美波の名前が乗ったのは、完全に余談である。

第三十三問（後書き）

第三十三問、いかがでしたでしょうか？

あまり見あたらない、瑞希、美波コンビの戦い。
主に瑞希でしたが。

そのあたりを書いてみました。

操作技術に乏しい二人ががんばって戦う様は、みなさんの目に、
どう映りましたでしょうか？

そして、深まる二人の友情♪

オチは要らなかったかなと、思わなくもない（苦笑）。

第三十四問（前書き）

第三十四問、更新しました。

読んでくださるみなさんが楽しんでいただけたら幸いです♪

第三十四問

明久たちの、白熱した三回戦が行われている頃、新校舎内の教頭室。

「……おい、こいつは一体どういうことだ？ 俺はお前等に、アレを奴らの食材に仕込むように言っただけだぜ？ それが仲良く屋上で昼寝してたってか？」

大春は、ソファーに座り、両の膝に肘を寄せ、軽く組んだ両手に額を付け、下を向きながら言った。

その前には、四人の男が正座させられ、うなだれている。

組んだ手の両側からのぞき見えている大春の眼は、ぞっとする程に冷たく、四人を見つめている。

「す、すまん。俺たちにも何がなんだか……」

「ああ、食材にアレを注入しようとしたところまでは覚えてるのに、その後がブツブツリ途切れてやがる。こんな薄気味悪いことは初めてだ……」

必死に言い募る二人を、射るように見る。

大春には、それが嘘には見えない。

若いながらも、場数を踏んでいる彼は、自分の眼にはそれなりの自信があった。

それをもって見て彼らが嘘を言っていないと判断できた。

「ッ。次の手を考えなきゃなあ。さて、どうするか……」

舌打ちしつつ呟き、窓の外を見ている教頭の背中を見る。

その顔は、大会に参加させた手駒がFクラスの面々に敗れていく姿に焦りを浮かべている。

「そっちは、どうつスカ？ 竹原サン」

その背に、わざわざ声をかける大春。

竹原は動揺するように身体を震わせたが、振り向くことはなかった。

「……まだ本命が残っておる」

それだけ言つて、眼鏡の位置を直す。

「（つまり、他はやられちまったと……）」

大春は、それだけを小さく呟くと、立ち上がる。

「……竹原サン。裏口の警備、買収済んでますかねえ」

「ん？ ああ、なんとかな。外から手勢を呼び込みでもするのかな？」

「いえいえ、確認しただけですよ」

振り向きもせずに答える竹原に、にこやかに応ずる大春。

そして、手下に振り向き、顎に手を当てて軽く思索する。

「さてと、次の手でいくか。面が割れてねーのは……カズ、コン。

吉井のクラス、二年のFだったか。あそこ張ってる。ヤス、外に繋ぎだ。学園の外、目立たねー場所で待機させとけ。今度はしくじんじゃねーぞ？」

「わ、わかったぜハル」

ヤスと呼ばれた男は、カズとコンに続いて教頭室から飛び出す。

「どうするつもりだね？」

そこで竹原が声をかけてきた。

それに対して、大春はニンマリと笑つてみせる。

「いえね、ウエイトレスさん達に同伴を頼もうかと思ひましてね？
しばらくは情報を集めさせるんですよ。そうすりゃあ、吉井も坂本も、お願いの一つ二つ聞いてくれんですよ。まあ、同伴してくれた娘がどうなるかは、あいつら次第。なに、二、三本キメさせて、キモチヨクしてやるだけですしね、一生物の思い出になること請け合いですよ？ アレにはまったら、マトモな行為になんてマンゾクできなくなりますからねえ？」

言いながら楽しげに笑う大春の顔は、薄気味悪い仮面のようにも見えた。

招待客のみゆえか、そこまでの混雑とはなっていないものの、やはり人の密度は高く、そこを走り抜けるのは、少し難しい。

しかし、そこを駆け抜ける一人の少女がいる。

セミロングの金髪をなびかせ、文月指定のスカートが捲れ上がるのも構わずに走る。

人と人との間をすり抜け、風の如く、駆け抜ける。

いつものひょうきんな雰囲気などいっさい感じさせず、その瞳に真剣な光を宿して……。

彼女、クリスティナ「ウェストロードは、常村と夏川から聞き出したことを反芻しながら、ある場所を目指していた。

新校舎の一階、その部屋の戸を開けて飛び込む。

「ん？ 怪我人でも出たか？」

カーテンで仕切られたベッドが並び、身体測定ของ道具がところ狭しとおかれた部屋。

保健室。

そこには部屋の主たる女性が、窓から外の様子を眺めているところだった。

黒いシャツに黒のレザーパンツ。

その上に白衣を羽織っている。

シャギーの入った深緑のショートボブを軽く揺らし、禁煙パイプをくわえた養護教諭は、そう訊ねながら気だるげに振り返る。

彼女を見つめながら、クリスは真剣な顔で口を開く。

「……あなたの、力を、借りたいの……北丘センセ？ いえ……」

一瞬の、間。

そしてクリスはその名を呼ぶ。

「黒き北方の護り手、玄武が属、アストリア「ノースヒル」

その瞬間。

クリスはまるで動けなくなった。

目の前の女性の放つ気配にあてられ、息をすることもできない。

「……その名で呼ぶな、ウェストロード。‘白き西方の求道者’、」
その言葉をきっかけに、クリスの全身から力が抜ける。

へたり込み、喘ぐように空気を胸一杯に吸い込んだ。

「ごめん、なさ、いね。確証が、無かった、から」

「……やれやれ、無鉄砲だな君は。で？ どうしたのだ？」

クリスにベッドへ座るように促し、自身もキャスター付きの椅子に座る。

「実は……」

クリスは、常村と夏川から聞き出したことに、自身の推測を付け加えて話す。

常村達は、召喚大会での優勝。

そして、Fクラスへの妨害を教頭に依頼されていた。

報酬は内申書と有名私立への推薦状。

竹原教頭は金勘定のうまい、経営者タイプの人間。

数字を重視し、人間の価値もそれで判断するはずだと、クリスは推測する。

その上で、Fクラスのような学力弱者などの妨害などという、無駄な行いをするとは思えなかった。

「なら、わざわざFクラスの妨害を依頼なんてしない。するなら理由がある。それは同時に依頼した召喚大会での優勝。つまり、Fクラスの人間に優勝して貰うと困るということ」

「確かに、Fが優勝して困るのはおかしいな。学力弱者でも、努力次第で高い学力の者を越えられるというアピールの好機だということ」

クリスの話に、北丘は一つうなずいて続ける。
それを聞いてクリスは口を開いた。

「そういうアピールが困るというものもあるだろうけど、そのためにクラスの妨害までして優勝させないようにするのはおかしいわ」
クリスの言葉に、北丘は目を細める。

「……つまり、それ以上の何か。おそらく学園全体に関わると、君

は読んだ」

「正直、外れていてほしいわ」

それを聞いて、北丘は椅子から立ち上がると、机の方へ移動し、その上に無造作に置かれたファイルの一冊を放ってよこした。

「……なに？　これって……?!」

ファイルの中身を読んで、クリスの眼が驚愕に見開かれる。

そこには、ここ一月で、急激に増えた竹原の他校訪問の記録が載せられていた。

「学園長さんからの依頼でな。どこも近辺。それも文月に生徒を獲られたと言っても過言じゃないところばかりだ。金回りも別の人間が調べ上げてある」

「なら!」

「が、事は簡単じゃない。竹原を追いつめるにはいい材料が揃ってるんだが、警察沙汰はNGだ。学園の不祥事って話になるからな。だが、なかなか尻尾を出さなくてな。もっと致命的な事をやらしてくれれば、後はウチで処理できる」

北丘は机に寄りかかり、禁煙パイプを右手の人差し指と中指にはさんで、口から放す。

「私が協力を求めなくても、動いていたってわけね……。なんだか損した気分……」

クリスは憮然としながらファイルを閉じる。

「そう言うな。こちらの仕事さ。文月は、一部は‘七龍’が出資しているんだ。最低限のカウンターチームくらいは置いている」

「ウェストロードの本流から外れた私には、縁の無くなった話ね」

少し俯きながら、自重するように呟くクリス。

それを見て北丘は息を一つ吐く。

「そう卑屈になるな。協力はしよう。ただし、後片づけがメインだ。そら」

そう言って、何かをクリスに放る。

「なにコレ？」

「通信機だ。何かあったらスイッチを入れる。こちら人手不足だな。護衛をつけてやることはできんが、それが作動したら優先的につながる。事件性の強いこととしてかしてくれれば……」

北丘の言葉を、クリスは首を振って遮る。

「それじゃあ、巻き込まれるの前提じゃない。それ以前に何とかならないの？」

「ならんな。まだ竹原は事件を起こしていない。金の流れを警察にたれ込めば、それで引つ張れないことはないが……」

「……もういい。結局、組織側の都合でしか動けないってことでしょ。私の時もそうだった……」

クリスは肩を落とし、陰鬱な顔で呟く。

それが耳に届いた北丘は軽く思案して口を開く。

「ああ、君の兄上が引き起こした事件だったか。あれの隠蔽もなかなか……」

「やめてっ!」

鋭く声を上げるクリス。

その顔は、血の気が失せて真っ青だった。

「……すまん。失言だったな。許してくれ……。ともかく、今の所は警察沙汰にせずに、穏便に竹原を押さえることが優先されている。わたしも上の意向には堂々とは逆らえんからな」

「……もういいわ」

悄然とした様子で立ち上がるクリス。

彼女は、そのまま力無い足取りで保健室から出ていく。

北丘は、そんな彼女を、黙って見送った。

「やれやれ、これは嫌われたかな？ まあ、仕方ないか。事件に巻き込まれると言っているんだしな」

北丘は一人ごちる。

「さて、もう少し叩いてみるか。そうすれば多少は埃も出てくるだろうしな」

そう言って、ノートPCを広げて作業を開始する。

と、指が止まった。

「……はあ、部下が欲しいね」

おのれで確認するように呟く北丘。

クリスに言ったカウンターチームその構成員が、自分一人とは到底言い出せなかった北丘であった。

足早に移動するクリス。

その足が止まる。

「いや、知らばつくれられたらどうにもならないよん。ぶっ飛ばす？ いや、最悪こつちが悪人扱いだよん……」

ぶつぶつと呟きながら頭を抱えるクリス。

現状、自身の持つカードで有効そうなものは見あたらぬ。

すでに教頭側は動きを見せているのだが、腕輪の件も、ひばりが狙われた件もクリスの耳には届いておらず、事の全容を判断するには、材料が少なかった。

常村と夏川の話から類推し、北丘に見せられた資料から、確信を得てはいる。

だが、結局はそれまでだ。

「……また、ダメなの？ 私は、また失うの……？」

一年前の悪夢が甦る。

一学期の終盤、クリスのBクラスは、Aクラスに対して戦争を仕掛けた。

結果、双方ともに戦力のほとんどを失い、最終的には代表同士の一騎打ちの形となり、彼女は……敗北した。

「……また、私は守れないの？ 大切な仲間達を……」

呟きながら、廊下の端に立ち尽くすクリス。

胸の奥からこみ上げてくる情動を、必死で堪える。

「……そこで何してんだ？ クリス」

知っている声が聞こえた。

振り向いた先に立っていたのは、……クラスメイトの少年、須川亮。

「（あ、やば）」

彼の顔を見た瞬間、堰がきれた。

青い双眸から溢れるものを感じながら、クリスは彼の胸に飛び込む。

「うわっど?! お、おい?」

突然のことにアワを食う亮。

「いやあ、ごめんねい? 少し見られたくない顔しているもんだからねい。しばらくこのままおーけー?」

いつもの口調でそれだけ告げるクリスに、亮は赤くなりながら、「お、OK」と返すことしかできなかった。

時間にして一分ほど経っただろうか。

亮にしてみれば、その十倍は経ったように感じたわけだが。

亮は、唐突に脇に何かが走るのを感じた。

「?!?!?!! ぶ、わはっ?! わは、わはははははっ?!?!?!!」

両脇腹を、クリスの手が走る。せわしなく動くそれによって、亮は爆笑地獄へ叩き込まれ、酸欠を伴いながら悶絶する。

そのまま一步遠ざかった彼に、クリスはきよとした顔を向けてから、両の眼細め、口を三日月のごとくつり上げる。

その顔を見た瞬間、亮は恥も外聞もなく逃げ出した。

クリスも、さも当然と言わんばかりに両腕を持ち上げ、五指をうにうに動かしながら追いかける。

その顔には、先ほどの憂いなどは、一欠片も残っていなかった。

さて、場所は戻り、召喚大会会場。

いよいよBブロックに出場している、ひばりと俊夫の番となった。喫茶店のこともあるため、明久たち四人は、もう引き上げてしまっており、ひばりは少し寂しげだ。

と、その頭に大きな手が乗せられる。

「不安か？ 支倉」

「……うん。だって強敵だよ。あの二人」

そこに立つのは、銀色のラフなショートヘアに、つり上がり気味の目を半眼にした美人と、それと似たような顔立ちに虚ろな目の、白髪の少女。

「アタシは、桜間狭夜^{おつまさや}。で、こっちは妹の片菜^{かたな}ちゃん。よろしくね？」

そう自己紹介した二人のクラスは。

「三年のAクラスと二年のAクラス……」

緊張に乾く唇を動かし、ひばりがつぶやく。

姉妹揃ってAクラス。

そんな強敵に、どう立ち向かえばよいのか？
ひばりには判らなかった……。

第三十四問（後書き）

第三十四問、いかがでしたでしょうか？

バトルが続いていましたが、ここで裏側の動きを。

またもやシリアス調の解説回……。

コメデイはどこ行つた…… or z

養護教諭の北丘さんのフルネームは、《北丘めぐみ》です。

アストリアなんちゃらは、裏の顔の名前です故、頭の片隅に覚えておくと、後でニヤリとできるかも？

そして、桜間姉妹をやつと出せました。

彼女らがどんなキャラかはこれからにご期待を。

出番は多い……はず。

それではまた次回もよろしく願いします♪

第三十五問（前書き）

第三十五問、更新しました。

ひばり&俊夫ペアと、桜間姉妹の激闘をご覧ください！

第三十五問

「……試獸召喚！！……」
サモン

四つの声の唱和に、門たる四つの陣が顕れ、彼らの使役する召喚獣を顕現させる。

ひばりと俊夫は、いつもの倭刀と手甲脚甲の召喚獣。

それに対する、狭夜の召喚獣は、黒いレザーのボンテージスーツの上に、黒いレザージャケットを羽織り、黒いレザーのショートパンツを履いている。

その足は、やはり黒く、網状のガーターストッキング。

右手には、ストックを短くしたソードオフのショットガン。

左手には、三本の仕込み杖のような刀が、すだれのように連なっている不思議な得物を持っている。

そして。

「獣の耳？」

思わずひばりはつぶやいていた。

そう、狭夜の召喚獣の頭には、ふつうの召喚獣のものとは違う、ケダモノの耳があった。

「狐耳よ？ 可愛いでしょう」

軽く笑ってみせる狭夜。

その笑みに、なぜか寒気を感じたひばりは、答えることもできなかった。

その妹の片菜の召喚獣は、姉と同じく、レザーのジャケットにショートパンツ。

ボンテージスーツも同じだが、その色は、雪のような白銀。脚を包んでいるオーバーニーも白銀という徹底ぶりだ。

手にした得物も、これまた白銀の鞘に入った刀一本。

表情がないことも合わさって、非常に冷たい印象を受ける。

召喚獣が姿を顕し、双方の点数が表示された。

三年Aクラス	桜間狭夜	現代社会	362。
二年Aクラス	桜間片菜	現代社会	276。
二年Fクラス	支倉ひばり	現代社会	171。
二年Fクラス	前田俊夫	現代社会	89。

割と絶望的な差がある。

「……点数も高い。どうしよう？」

狭夜と片菜の点数に弱気になるひばり。

片菜はまだAクラス平均より上程度だが、狭夜の点数はAクラスでも上位の点数だ。

三年ということを考えても、操作技術が低いとは考えられず、容易に苦戦が予想できた。

「どうする？ 前田君。すつごく強そうだよ」

「ああ、まったくだな。こいつはやりがいがありそうだ」

「えええっ?!」

俊夫の考えを聞こうとしたひばりだが、当の俊夫は、強敵との巡り合わせに、胸を躍らせていた。

「それでは始めてください!」

立ち会いの教師から声が掛かり、四体の召喚獣が身構える。

一瞬の間の後。

狭夜の召喚獣の姿が、砂埃を残して消えたかと思うと、派手な金属音が鳴り響く。

「あらすごい。初見であたしの一太刀目を防いだのは、あなたで二人目よ？」

見れば、刀を抜きつけて振るった、狭夜の召喚獣の斬撃を、俊夫の召喚獣が手甲で力を受け流しながら止めていた。

そのまま踏み込み、腕を畳んで肘を突き出す。

素早く、コンパクトに繰り出された肘撃を、しかし、狭夜はあっさりと左へ避けさせる。

だが、俊夫の召喚獣の攻撃は終わっていないかった。

踏み出した足を、基点に体重を移動させ、刃を受け流した腕にくるりと円を描かせて、手のひらを上に向けた状態でのばした腕が、狭夜の召喚獣の頭上に迫る。

手甲のはまった前腕の外側が降ってくるのを見た狭夜は、あわてて召喚獣を前進させてソレから逃れる。

腕を振りきった俊夫の召喚獣は、そこで止まらず、基点としていた脚を相手の方へ踏み出しながら、反対の腕ですくい上げるように拳を突き出し、体を反転させる。

「なっ?!」

流れるような連撃に、狭夜は驚愕の声を上げながらも、己の召喚獣に無理矢理避けさせた。

空を切る拳。

狭夜が笑みを浮かべた、次の瞬間。

重い音が響き、狭夜の召喚獣の脇に肘が突き刺さった。

はね飛ばされる召喚獣に向けて、俊夫の召喚獣が跳躍……しようにして大きく横に飛ぶ。

クラッカーを鳴らしたような音が響き、無数の微少な金属球が、彼の召喚獣の居た辺りを薙払う。

吹き飛ばされながらも武器をショットガンに持ち換えた狭夜の召喚獣から放たれた散弾だ。

そのまま体を入れ替え、きれいに着地する狭夜の召喚獣。

しかし、無防備に受けた一撃の被害は大きく、50点ほど減少していた。

「やってくれるじゃない。少し舐めていたようね?」

狭夜の表情が引き締まる。

「真面目にやっただげる。最終地獄を見せて上げるわ、あの羽付きみたい」

細まった視線の得体の知れなさに、俊夫の表情も引き締まった。

派手な金属音が鳴り響き、いくつもの銀閃が、二体の召喚獣の間の空間に刻まれる。

ひばりと片菜。

奇しくも同タイプの召喚獣だったようで、お互い軽く腰を落としたまま、脚を動かしてはいない。

しかし、その利き腕は肩から先が見えないほどの速度で振るわれていた。

お互いに倭刀と刀を抜きつける居合いの連斬を繰り出し、その斬撃を居合いで切り落とす。

斬撃と斬撃のぶつかり合いで、火花が散り、二体の間に幾つもの花が咲いていた。

「銀」

片菜の呟きに応じるように、召喚獣の放つ斬撃の質が変わる。

スピードの乗った居合いの技ではなく、力任せの剛剣。

その一撃に、ひばりの召喚獣の倭刀が弾かれる。

「剛閃」

さらなる言の葉に合わせて、力強く刀を水平に振るう片菜の召喚獣。

鋭い踏み込みとともに切り込んできたそれを避けて後退するひばりの召喚獣。

だが、白銀の召喚獣の斬撃はそれで止まらず、上へ跳ね上がり、さらなる踏み込みとともに、唐竹割りに振り下ろされる。

「ふっ！」

その、わずかな隙について、ひばりの召喚獣が、相手の懐に向けて、素早く一步踏み出した。

抜き付ける刃の閃きを引きながら駆け抜けたひばりの召喚獣が、相手に振り返る。

同じく片菜の召喚獣も振りきった刀を戻しつつ振り返る。

同時に、ひばりの召喚獣の髪がほどけ、片菜の召喚獣の左脇腹から血が吹き出す。

「死中に活？ 思い切りが良い、強敵」
ポツポツとしゃべる片菜。

それには答えず、ひばりは相手の様子をつかがう。

片菜の召喚獣は、大きくダメージを受けたようで、80点ほど点数が減少している。

だが、その立ち姿に揺らぎはなく、依然として妙なプレッシャーをひばりは感じていた。

と、その間に二体の召喚獣が割り込んできた。

俊夫と狭夜の召喚獣だ。

狭夜の召喚獣から、鋭く放たれる居合いの連斬を、後退しながら受け流す、俊夫の召喚獣。

その二体に向けて、ひばりと片菜の召喚獣も飛び込んでいく！

抜きつけた刃が閃き、狭夜と俊夫の召喚獣に迫った。

俊夫は、片菜の召喚獣の斬撃に、自分の召喚獣をしゃがませて避けさせる。

その目の前で、軽く跳躍してひばりの召喚獣の倭刀をやり過ごす狭夜の召喚獣。

そのまま抜きはなつた刀を俊夫の召喚獣に向けて振り下ろしながら着地。

しかし、彼の召喚獣は、低い姿勢から一挙動で彼女の召喚獣の脇を抜ける。

そこへ、片菜の召喚獣の斬撃が、狭夜の召喚獣の背中に沿って俊夫の召喚獣の後頭部へ打ち込まれる。

だが、その一撃は、ひばりの召喚獣の倭刀によって跳ね上げられ、命中しなかった。

さらに狭夜の召喚獣が体を反転しながらひばりの召喚獣へ、居合いの斬撃を放つ。

胴を薙ぐ軌道のそれは、しかし、止められた。

その刃と、ひばりの召喚獣の間に入った俊夫の召喚獣によって、
召喚獣の両の手のひらで挟み込み、勢いを殺す。

白刃取りの妙技。

「うそ……」

「すごい！」

「……」

啞然とする三人の少女。

その瞬間。

召喚獣の動きも止まる。

その隙を、この男は見逃さない。

刃を脇へ逸らし、相手へ一歩踏み込む。

それに巻き込まれ体勢を崩す狭夜の召喚獣。

そのまま肩を胸板へとくっ付ける。

大地を砕く震脚の轟音とともに、肩がかち上げられ、狭夜の召喚獣が大きく跳ばされる。

「やった！」

思わず声を上げるひばり。

が。

狭夜の召喚獣は、空中で体勢を整え、くるりと一回転しながら座り込むように着地する。

ゆらりと立ち上がったその横へ、片菜の召喚獣も跳躍して降り立つ。

「やっぱりな」

俊夫は得心がいった顔でつぶやいた。

今の打撃で、狭夜の召喚獣の点数は、一点も減っていなかったのだ。

その事実にも、ひばりは動揺を隠せない。

「ど、どうということなの？」

そう訊ねるひばりの頭に、俊夫の大きな手が乗せられた。

「あの一瞬で、武器から手を離し、こちらの打撃に合わせて、自分

から跳んだんだ。すげえ操作技術だな」

俊夫の顔を、冷や汗が伝う。

「あなたもなかなかやるじゃない？ 白刃取りなんて、三年生でも出来る人いないわよ？」

軽く微笑みながら言う狭夜。

その横で、片菜は無表情にひばりたちを見つめるのみだ。

距離を取り、お互いに相手を窺う。

ギャラリーも、その戦いの内容の濃さに、息をするのも忘れていくようだ。

数秒か、数十秒か、あるいは数分か。

緊張をはらんだにらみ合いが続いた。

そして、四体の召喚獣が、同時に駆ける！

片菜の召喚獣が、ひばりの召喚獣へ切りつける。

これを半歩、体をずらして避けると、その向こうから俊夫の召喚獣の拳が飛び出す。

片菜の召喚獣がそれを片手で受け止めると、狭夜の召喚獣が、伸びきったその腕を切り落とさんと、刀で切り上げる。

しかし、そうはさせじとひばりの召喚獣が、前掃腿で狭夜の召喚獣の足を払う。

そのせいで体勢を崩してしまう狭夜の召喚獣。

それを見て取った片菜は、俊夫の召喚獣の手を取ったまま、己の召喚獣が右手で持った刀で、相手の胸を貫こうとする。

次の瞬間、俊夫の召喚獣の右足が跳ね上がり、自分の召喚獣の右手を取っている、片菜の召喚獣の左手首につま先をたたき込んだ。

数点のダメージを与えるとともに、右手をつかんでいた左手の拘束がゆるんで、俊夫の召喚獣は手を引き抜く。

そこを狙うべく、狭夜の召喚獣がすばやくショットガンに持ち換えた。

向けられる銃口に、しかし、ひばりは召喚獣を踊り込ませる。

引かれた引き金が轟音を吐き出し、ひばりの声を遮る。

刹那、大きくMの時が顕れたかと思うと、散弾の弾は、ひばりの召喚獣のメタリックシルバーの装束と肉体によって、完全に弾き返される。

「な?!」

驚愕する狭夜。

その隙について、金属製の棒を展開して狭夜の召喚獣に突き込む。思わぬ怪力にはね飛ばされる狭夜の召喚獣。

「ねえさん!」

そこで、今日初めて片菜の顔に動揺が走った。

「そこだ!」

片菜の召喚獣に、密着する俊夫の召喚獣。

「!」

あわてて飛び退こうとするが、すでに遅い。

腰を落とし、脇を締め、両の拳を腰だめに構える。

凄まじいまでの震脚の衝撃が走り、大きく弾かれる片菜の召喚獣。その速度を遙かに上回る速度で、踏み込む俊夫の召喚獣。

勢いのままにチョップングライト。

そのまま、左フックを放ち、さらに右のブロ―。

そして左のストレートで飛ばし、そこへ追いつきながらショートダッシュアップ―を決め、相手を中空へとかち上げる。

そして、空中へ翔けあがるように飛び蹴りを放ち、片菜の召喚獣の胴体を捉え、貫いた。

着地をして、振り向く俊夫の召喚獣。

その視線の先で、片菜の召喚獣が霧散した。

「すいません、姉さん」

がつくりと膝を着く片菜。

しかし、狭夜はそんな彼女に声をかける暇もなかった。

少し離れたところに立つひばりの召喚獣の猛攻にさらされていたからだ。

「Luna!!」

「Trigger!!」

左半身を青色に、右半身を金色に変化させたひばりの召喚獣は、手にした大型ハンドガンから光弾を連射している。

弾速の遅いそれらを、狭夜は余裕を持って避けていたが、弾道が曲がって召喚獣に殺到した瞬間、顔色が変わった。

『Luna』の特性により、オートホーミング能力を得た弾体は、弾速こそ遅いものの、猟犬のように目標を追い続け、牙を突き立てようと迫る。

そのため、狭夜はほとんど全ての弾体を、刀で切り落としかかった。

おかげで被弾は最小限で済んだが、50点ほどダメージを受けてしまった。

しかし、ひばりも永遠に射ち続けられるわけではなく、大型ハンドガン『トリガーマグナム』がチャージタイムに入ってしまった。

対峙する三人。

と、狭夜が軽く息を吐く。

「ふう。やってくれるじゃない？ 片菜ちゃんの経験値稼ぎのつもりで引き受けた仕事だったんだけど……」

「……仕事？」

「どういうことだ？」

狭夜の言葉に訝るひばりと俊夫。

「あら、口が滑っちゃったわ。うふう」

悪びれた様子もなく、楽しげに笑う。

「でも、やられっ放しというのも、性に合わないのよ。だからね？」

その顔から、一切の表情が消え失せる。

そして、俊夫の召喚獣がいきなり、逆袈裟に切り上げられる。

次の瞬間、その体が炎に包まれた。

一気に点数を持っていかれ、表示が12まで下がる。

「なんだっ?!」

いつのまにか移動していた狭夜の召喚獣に対応できない俊夫。

さらに放たれた斬撃をかるうじて受け流しつつ距離を取る。

一方、ひばりは、Ｔフォームの効果で感覚を強化された己の召喚獣のサポートを得て、かるうじて見えていたが、効果的な行動に移ることは出来なかった。

が、ＬＴではあの速度に対応できないと判断し、ことＪの文字を出現させながら、己の召喚獣をライトグリーンとブラックに変化させながら走らせる。

「そっちもやられたいのかしら？」

その言葉とともに、狭夜の召喚獣の姿が掻き消える。

それを見た瞬間、ひばりは召喚獣に右手を大きく横へ振らせる。

豪。

そんな音が響きわたり、狭夜の召喚獣が弾かれるように吹き飛ばされながら姿を現す。

「なにっ?!」

その現象に驚く狭夜。

見れば、緑と黒の召喚獣が、竜巻を纏っているのが見て取れた。

「これは風!! 風を操っているのっ?!」

思わず声を上げる狭夜。

その召喚獣は空中で回転しながら武器をショットガンに持ち換え、着地と同時に引き金を引かせている。

豪風を引き裂かんと放たれた散弾は、しかし、さらに圧力を増した暴風によって吹き散らされる。

それを見た狭夜は、思い切りよく召喚獣にショットガンを捨てさせる。

「風の防壁とは考えたわね、おチビちゃん。これで飛び道具はかなり相殺できるし、召喚獣の行動も制限される」

言いながら残っていた二本の刀を両手に握らせた。

それぞれ、刃から炎と雷を迸らせている。

それらを構えたまま走り出す二刀流の召喚獣。

「俺も混ぜろよっ！」

そんな声が響いて、俊夫の召喚獣も狭夜の召喚獣に向けて駆ける。三体の召喚獣の超接近戦。

振り降ろされる雷の刃を払いのけ、拳を振るうひばりの召喚獣。

それを膝頭で受け止め、炎の刃を振るう狭夜の召喚獣。

しかし横合いから放たれた蹴りがその軌道をそらし、その隙を狙ってひばりの召喚獣がストレートを放つ。

狭夜は召喚獣に半歩引かせながら半身となり、先ほど払われた雷の刃を、ひばりの召喚獣の腕を狙って振り上げる。

だがそこへ、俊夫の召喚獣がひばりの召喚獣の頭に手を着きながら飛び越え、かかと落としを狙う。

狭夜は飛び退くように召喚獣にバックステップさせてやり過ぎすと、素早く踏み込んで二刀を振るう。

迫る刃を見据えて、俊夫の召喚獣も踏み込む。

肩口とわき腹に食い込む刃。

踏み込んだ結果、刀の根元付近でダメージを受けた俊夫の召喚獣は、一瞬、狭夜の召喚獣の武器を押さえる。

「今だ、支倉！」

俊夫が叫んだときには、すでに竜巻を利用して、召喚獣を高く跳躍させているひばり。

『B』のインシヤルが胸に吸い込まれると共に、左半身がスカイブルーへ。

そして、掌中に顕れた日本刀に風を纏わせながら急降下。

点数がゼロになり、霞のように消え去る俊夫の召喚獣と入れ代わるように日本刀を振るいながら着地。

狭夜の召喚獣の右腕が切り飛ばされる。

刹那、サイドステップで左へ逃げる狭夜の召喚獣をまるで追尾するかのように跳躍し、刀を振るうひばりの召喚獣。

狭夜はかろうじて残った左手の雷刀で受け止め……切れずに弾き

飛ばされる。

突風が吹き、ひばりの召喚獣が狭夜の召喚獣を追い抜きながら刃を振るって着地。

立ち上がりながら、振り切った日本刀を納刀し、響いた鐸鳴りの音を合図にして、狭夜の召喚獣から鮮血を吹き出した。

三年Aクラス 桜間狭夜 現代社会 0。

霞のように消え去る狭夜の召喚獣を見て、立ち会いの教師が手を上げた。

「勝者、支倉、前田ペア！」

第三十五問（後書き）

第三十五問、いかがでしたでしょうか？

常にギリギリだったバトルを感じていただければ、望外の喜びです♪

それでは、また次回もよろしくお願いします♪

第三十六問（前書き）

第三十六問、更新しました♪
読んで下さるみなさんに楽しんでいただければ幸いです♪

第三十六問

「勝者、支倉、前田ペア!!」

教師のコールを聞いて、ひばりは腰が抜けたように座り込む。

「か、勝てた……の？」

信じられないとばかりに呟くひばり。

今回ばかりは俊夫も集中していたため疲労の色が見える。

しかし、狭夜と片菜は、未だ余裕があるようだった。

「はあ、負けちゃったわね？」

「すいません、ねえさん……」

肩を落とし、しよげかえる片菜。

しかし狭夜は気にした様子もない。

「まあ、良い経験になったでしょうしね。わたしも甘く見ていたもの。次があつたら負けないわよ？ おチビちゃん」

いつもなら訂正させたくなる呼び方だが、極度の緊張で疲労困憊しているひばりは何も言えなかった。

そんな彼らを後目に、さつさとステージを降りてしまふ桜間姉妹。ひばりたちは、それを見送ることしかできなかった。

「ま、まさかあの二人が敗退するとは……」

竹原は、信じられないものを見たという風に、悄然としながらイスに座り込む。

「後は、あのクズどもしか残つとらんか。腐つてもAクラスの端に引つかかっている連中だ。期待したいところだが……」

竹原はぶつぶつ言いながら考え込み始めた。

それを見ていた大春は、軽く肩をすくめる。

そして、竹原に視線を送りながら口を開く。

「どうします？ 竹原さん。俺としちゃあまだ続けても構わないんですがね」

ニヤニヤと笑いながら訊ねる大春。

「……無論だ。私とて引けないところまで来ておるのだ。むざむざ諦められるか」

大春を睨むように言い放つ竹原。

そこには、追いつめられた者の、強い意志が宿っている。

大春はそれを確認すると、一つ手を打ち、立ち上がりながら両腕を広げる。

「いやあ、良かった。ここで怖じ気づくようじゃ、何も得られませんからね。俺も安心してお姫さん達をエスコートできるってもんだ」

「……ふん」

大春の言葉に鼻を鳴らす竹原。

しかし、その両手は、口元を隠すように鼻下で組まれていた。

「ん？ あいつは……」

会場から教室へ戻る、ひばりと俊夫。

その道すがら、俊夫は見覚えのある顔を見かけた。

「どうしたの？ 前田君」

不意に険しい顔になった俊夫に気づいて、ひばりが見上げながら訊ねる。

「……いやなんでも」

「おっ？！ 支倉と……前田じゃねーかつ！」

無い、と言いかけた俊夫を遮る声。

それに二人が振り向くと、小さな少年と大きな少女がいた。

「ひーばーりーちゃあぁーんっ！」

ひばりの姿を見るなり、声を上げて突進してくる大きな少女、如月琴代。

涙目になって抗議する琴代。

その、大きくさらされた額の真ん中の赤い跡からは、軽く煙が出ている。

「ほつといたら支倉が死ぬだろーが」

ジト目で言う慎吾に、琴代がショックを受けたような顔になる。だがすぐに、半泣きな顔になりながらも、大きな体を丸め、両手を胸の前で握りしめながら抗議する琴代。

「そ、そんなことないもん！ ハグは親愛のひよーげんだもん！ ひばりちゃんだってうれしいはずだもん！ ね？ ね？ ひばりちゃん？」

ひばりの同意を得ようと、必死に言い募る琴代。

しかし、被害にあったばかりのひばりは、彼女の顔が見られず、視線を逸らす。

「アーウン。ソウダネコトヨチャン」

純粋な好意でやってきているだけに、面と向かって否定しづらい。

ひばりは、あからさまな棒読みで肯いてみた。すると、琴代の顔が、ぱあっと明るくなる。

「だよね？ だよねっ？！ ほらシンくん。ひばりちゃんだって嬉しいって！」

我が意を得たりとばかりに、はしゃぐ琴代。

その様子に、慎吾とひばりはゲンナリとなる。

「……バカ、支倉。琴代のポジティブシンキングっぷり、忘れたのかよ……」

「ごめん……牧野君……」

「はっはっは。お前達はいつも通りだな」

そんな三人の様子を見ていた俊夫が、声を上げて笑う。

と、不意に何か思いついたような顔になる俊夫。

「そつだ牧野、頼みがある」

真剣な調子で慎吾に向き直る俊夫。

慎吾はまじめな様子の彼にかを見上げた。

「？　なんだよ前田」

「支倉をＦクラスまで送っていつて欲しいんだ。頼んだぞ」
それだけ言つて、さっさと移動する俊夫。

「お、おい、前田！」

慎吾が俊夫を呼び止めようとするが、彼はその体軀に似合わぬ素早さで立ち去ってしまった。

「なんなんだ？　前田の奴。支倉、なんかあつたのか？」

「えっ？　ううん、なんだろうね？」

ひばりは齒切れ悪く答えることしかできない。

その様子を訝しんだ慎吾だったが、すぐに表情を切り替える。

「まあ、いいか。行こうぜ？　支倉、琴代」

「う、うん……」

「はい」

慎吾を先頭に歩き出す三人。

不意にひばりは立ち止まり、心配そうに眉を寄せた。

「前田君……」

ひばりのその声が、宙に舞って散った。

素早く移動しながら、一跳びで体育倉庫の屋根に降り立ち、見つからぬように身体を伏せる俊夫。

その視線の先には、周囲を警戒しながら裏門へ向かう男の姿が見えた。

「やはりあいつか……」

その男は、ひばりを狙った男の内の一人。

大春にヤスと呼ばれていた男だ。

「さて、どこへ向かうやら……」

俊夫は、彼に気づかず走り出したヤスを、屋根づたいに追跡し

始めた。

変わってFクラスの教室。

ひばりが慎吾や琴代とともに教室にたどり着くと、なにやら騒ぎが起きているようだった。

「どうしたの？」

近場にいた美波に訊ねるひばり。

すると、彼女は困ったような怒っているような顔で、ひばりの方へ振り向く。

「ああ、ひばり、やっと戻ってきたんだ。あなたからも坂本の奴に言ってやってよ！」

「話が見えないんだけど？」

美波の剣幕に、目を白黒させるひばり。

そこへ雄二もやってくる。

「支倉、お前にも頼みたい」

「な、なに？ 坂本君」

「これを着て欲しいんだ」

そう言っ取り出したのはチャイナドレスである。

「……こういうの着ないって話だったよね？」

思わず半眼で雄二をにらみ付けるひばり。

しかし、雄二は至って真面目そうだ。

「だが、このままでは店の売り上げは伸びん。須川の親父さん達にあれだけ協力してもらって、失敗しましたとは言えないだろう？」

「それはそうだけど……」

しづるひばりに明久も声をかけてくる。

「うちのクラスの女子は、文月でもトップクラスの美少女が揃っているんだし、きつと似合うよ？ ぼくも見てみたいなあ、秀吉やひばりや、美波や姫路さんのチャイナ姿」

「明久よ、ワシは男なんじゃが……」

さらっと、女子に含まれていたことに反応する秀吉。しかし、それをスルーする明久をはじめとする一同。

秀吉の背中に哀愁が漂うのに気づいた者は、どれだけ居たか。そんな彼を置いてけぼりにしながら、話し合いは続く。

「でも、そんなにすぐに全員分は用意できないで……」

「……問題ない」

衣服の調達を指摘しようとするひばりだが、それを遮る声。学園のえろすご意見番、ムツツリー二こと、土屋康太だ。

「……すでに女子全員分のチャイナが用意してある」

力強くサムズアップする康太。

「そういうことだ。店のためなんだ着てくれないか？」

「いや……あたしのサイズなんて、そう簡単には……」

雄二の迫力にたじろぐひばり。

思わず自身の体型まで引き合いに出してみる。

しかし、そのタイミングで康太が、一枚のチャイナドレスを出してくる。

「……支倉用」

「へ……？」

康太の言葉に、間抜けな返事をするひばり。

「……夏実という人から送られてきた。サイズもばっちり」

「いや、待って？　なんでその人はあたしのサイズを知ってるのっ？！」

己のプライバシーが漏れたと知って、声を上げるひばり。

しかし、康太は首を傾げる。

「……スリーサイズくらい、見ればわかる。俺でも出来る」

その言葉に、琴代を除いた女性陣が、一斉に胸を両手で隠す。

「そ、そんな特殊技能を開陳しないでっ？！」

ひばりも両腕で胸を隠しながら抗議する。

だが、康太は頭を振る。

「……一般技能」

スパンツ。

「違うからっ！ そんな一般技能無いからっ！」

片手で胸を隠しながら放たれた【小烏丸】は、しかし、いつもの威力が見られず、康太は倒れない。

「……非常に不本意」

つぶやく康太は、ひばりを見つめた。

「な、なに？ 土屋君……」

先ほどイヤな特殊技能を持っていることを知らされたため、ひばりは胸だけでなく、腰回りも【小烏丸】で隠そうとしながら後ずさった。

「……支倉に前から言おうと思っていた」

「な、なにを？」

「……そのブラの付け方は良くない。型崩れの元」

スパアアンツ！！

今度こそ完全に振り切られる【小烏丸】に、康太は地へ沈む。

「なんてこと言うのっ！？ 土屋君はっ！！」

いきり立つひばり。

しかし康太は、一瞬で復活するとひばりへ迫る！

「……いや、なんと言われようと、その付け方は邪道。そんなことをするのは乳房に対する冒瀆。そもそも、乳房の大きさには貴賤はない。無も微も貧も普も巨も爆も超も、等しく女性の象徴。それは天に羽ばたく、天使の翼。神の与えたもうた、美しき芸術品に他ならない。だから、単純な大きさで判断するのは間違い。そもそも大きさのみで判断することも間違っている。乳房の魅力、形、張り、色、艶など総合的に判断するもの。その上で、一人一人の個性を鑑みて判断する。従って、すべての乳房は美しく、女性は己の乳房を誇るべき。そして、それを蔑ろにすることはしてはいけない。乳房

一つをとつても女性が魅力的なことに変わりはない。しかし、恥ずかしいからと言って、その美しい肢体を歪めるのは罪悪に他ならない。そんなことをするのは、その身体をこの世に生み出してくれた人たちをも蔑ろにすることになる。だから支倉は、もっと自分の身体に自信を持つべき」

「あ……うん」

一気にまくし立てる康太に、その場の全員が呆氣にとられた。

『そ、そうか……大きさにばかり囚われちゃあいけなかったんだ…』

…』

『ああ、乳房は女性の魅力の一部。故にこそ、軽んじてはいけなかったんだ！』

『さ、さすがだぜ！ ムツツリーニ！』

周囲からは、康太を讃える声があがり始める。

そして、康太自身、やり遂げた漢の笑顔を浮かべて立っていた。

「もう、バカなこと言わないでください！ ねえ美波ちゃん……」

瑞希がそう言いながら美波に振り返ると、彼女は神を崇めるような目でムツツリーニを見ていた。

「そう、そうだったんだわ！ ウチは大きさに囚われてばかりで、本質を見謝っていたんだわ……」

「み、美波ちゃん、目を覚ましてくださいっ！ ひ、ひばりちゃん、手伝っ……ひばりちゃん？」

トリップした美波を正気に戻そうと、彼女の身体を揺する瑞希。なかなか戻ってこない彼女に、瑞希はひばりに応援を頼む。

が、ひばりは真剣な顔で何かを考えていた。

「ひばりちゃん？ どうかしましたか？」

「……へ？ あ、なに？ みっちゃん」

瑞希に声をかけられ、顔をあげるひばり。

「大丈夫ですか？ なんだか思い詰めていたような……」

心配そうにのぞき込む瑞希。

ひばりは、手を振って、「心配ないよ」と言うと、一つ咳払いす

ると、康太に向き直る。

「煙に巻こうつたってそうはいかないんだから！　なんとわれよ
うと……」

「……デザインも秀逸」

先ほどひばり用として取り出したチャイナをひろげてみせる。

仕立ての良い、白地のチャイナドレスだ。

その白い布地に、雲雀が舞い踊っている。

思わずそれに見入ってしまうひばり。

「へえ、いいわね？」

「はい、素敵なデザインですね」

「うわあ、いいなあ。私も着てみたいなあ、チャイナ」

他の女性陣も、口々に褒め始める。

「なあ、明久。おまえ、チャイナ好きだろ？」

「え？　大好……愛してる」

本音を言いそうになった明久は、あわてて言い換えたが、かえって酷くなっていた。

「これだけデザインも良いんだ。着てみせれば、きっと栄えるぞ？
支倉」

「えっ？！　う、うん、素敵なデザインだしね……」

雄二に勧められて迷い始めるひばり。

と、そのとき。

一人の少年が、教室に飛び込んでくる。

それを追うように、金髪の少女も飛び込んできた。

「だああああっ！！　勘弁してくれえっ！！」

「逃がさな～いよん」　もう諦めておねーさんに捕まりなさ～い？」

必死で逃げる少年、須川亮を追い回す金髪の少女、クリスマスことクリスティーナ「ウエストロード」。

教室の隅に追い込んだクリスは、とても良い笑顔で、持ち上げた両手の指をワニワニ動かしながら亮ににじり寄る。

「さあ……観念するんだよん」

鼻息も荒く迫るクリスに亮が悲鳴を上げた！

「ツァ~~~~~！　　？　　■×！？！？」

それが爆笑地獄に変わったのは一瞬だった。

「いやあ、たんのーしたよん♪　おや？　皆の衆。鳩ぽっぽがびーんらいふるで撃たれたような顔して、どうしたのかなん♪」

大変満足そーに、やり遂げた乙女のようなツヤツヤした顔でみんなを見回すクリス。

と、雄二が手にしたものをめざとく見つけると、手をのばしたのが見えないほどの早さでひったくる。

「おおっ、チャイナだよん♪　これを着るのかなん？」

「あ、ああ、売り上げを伸ばすために……」

「わかったよん♪　んで、ムッチーはなにをしてるのかなん？」

「え？」

言われて皆が康太の方を見ると、すさまじい勢いで裁縫していた。

「……出来た」

「はやっ？！」

康太が広げたのは、小さなピンクのチャイナドレス。

それを見て、葉月が全身で喜びを表していた。

「わーい、おっぱいのお兄ちゃん、ありがとうございます♪　これはお礼です♪」

ッ
♪

康太の頬に柔らかいものが触れた。

ブシャアアアッ！！

バタンッ！！

ビクンッ！　ビクンビクンッ！！

鼻血を吹いて倒れると、派手に痙攣を始める康太。

「ムツツリイーニイーっつ!!」

葉月のほつぺたチューに倒れた康太に駆け寄る明久。
抱き起こしてみると、その顔には、強い意志が見られた。

「……俺は、大丈夫だ！ 明久」

「で、でも……」

「……俺は死なない。俺にはまだ、支倉たちのチャイナ姿を後世に伝えるという、大事な使命があるからだ！」

「ムツツリーニ……」

「……見届けてくれ、友よ。この俺の雄姿を！」

そう言いながら立ち上がる康太。

足下は定まらず、フラフラしているが、手にはしっかりデジカメを構えていた。

第三十六問（後書き）

第三十六問、いかがでしたでしょうか？

今回出てきた、ひばりのチャイナドレスは、FOOLさんのところ、夏実さんから戴きました♪

FOOLさん、夏実さん、ありがとうございます♪

とても素敵なデザインで、筆者もひばりも大変気に入っております♪

それでは、みなさん、また次回もよろしく願いしますね♪

第三十七問（前書き）

第三十七問、更新しました♪
よろしく願います♪

第三十七問

「ぜひー、ぜひー、ひ、酷い目にあつたぜ……」

両の手を膝に付き、荒い息を吐きながら肩で息をする亮。

そんな彼の周囲に、影が立つ。

「何言つてんだ須川」

「そうだぜ、姐さんとあんなに親しげにしゃがつて」

「ゆるせん……」

「ま、待て、お前ら。あれは、そんないもんじゃ……」

「『リア充は、みんなそう言っただよっ！』」

必死で弁明する亮に、嫉妬まみれの叫びが叩きつけられる。

思わず後ずさる亮。

合わせて踏み出す包囲者達。

一瞬の均衡の後、走り出す亮。

それを追い始める嫉妬まみれの一団。

「待ちやがれっ！」

「コンクリに連続ジャーマンかましてやるっ！」

「いや、ボンベ無しで、拘束重し付きスキューバ、in 日本海溝

だっ！」

「チキシヨオ~~~~~っ！！　こういうのは、吉井の役目じゃねーのかよっ？！」

亮は死に物狂いで廊下を疾駆し始めた。

「うつひゃっひゃ、すがちおもしれー」

亮と追跡者達のやりとりに啞然呆然なひばりたちだったが、クリスだけが腹を抱えて笑っていた。

「もう、お客さんがいないからって大騒ぎするなんて……」

呆れたように息を吐くひばり。

周囲の者達も、苦笑いを浮かべている。

その様子を見て、雄二がひとつ手を打つ。

「さて、時間も無いことだし、着替えてきてくれないか？」

その言葉に女性陣が顔を見合わせ、苦笑しながらうなずいた。

「まったく、しょうがないわね」

「恥ずかしいですけど、仕方ありませんね」

「もう、これで成功しなかったら承知しないからねっ!？」

「んじゃま、みんなで更衣室にれつらご」 だよん」

ブツブツ言いながらも、更衣室へと向かう女性陣。

「ワシはこの場で……」

「葉月も着替えるです!」

「……………?!?! (ブシャアアア)」

しかし、その場で着替え始めた秀吉と葉月に、康太が鼻血を吹く。
あわてて明久が駆け寄り、力無く地に伏した康太を抱き上げ、二人を注意する。

「ム、ムツリーニ! だ、ダメだよ二人とも! ちゃんと女子更衣室で着替えないと!」

「あう。わかったです。おねーちゃん」

「待つんじゃ明久! ワシは男じゃ! この場で着替えても、問題などあるわけ無かるうっ!？」

着替えるのをやめた葉月が、女性陣に着いていくのに対し、抗議の声を上げる秀吉。

しかし、それを聞いた明久が、真剣な顔になる。

「なに言ってるんだよ、秀吉。秀吉みたいな美少女が、公衆の面前で着替えるなんていけないよ!」

「なぜ、ワシがさも常識はずれのように言われねばならんのじゃ?」
「!」

明久に注意されたことが納得のいかないのか、声を上げる秀吉。
見かねてひばりが口を出す。

「木下君、男子更衣室で着替えた方が良いよ？　アキくんの誤解を解くのは手間がかかりそうだし……」

「しかしのう、支倉……」

「スッパリ割り切った方が男らしいと思うよ？」

「さあ！　皆の衆。素早く着替えようぞ！　更衣室で！」

ひばりに男らしくと言われた瞬間、先頭を切って更衣室へ向かい始める秀吉。

その姿に苦笑しながら女性陣も続いた。

それを見送りながら、雄二が明久に声をかける。

「明久、少し付き合え」

「ほえ？　どうしたのさ雄二」

「須川……はまだ戻ってないか。新田！　ムツツリーニ！　少しの間頼むぞ！」

言うだけ言って明久を連れ出す雄二。

「どうしたのさ、雄二。なんかおかしいよ？」

雄二に強引に連れ出された明久は、彼を訝しむ。

そんな明久に、雄二は移動しながら真剣な顔で口を開いた。

「明久、落ち着いて聞いてくれ」

「え？　う、うん」

雄二の真剣な様子に吞まれながらも、彼の後を追う明久。

雄二は、それを横目で見ながら話を続ける。

「……支倉が黙っていて欲しがっていたようだから言わなかったんだが、一回戦が終わった直後、こっちに帰ってこようとしていた支倉と前田が襲われたらしい」

「！　襲われたってどういうこと！　雄二っ？！」

明久は前に行く雄二の肩をつかんで声を荒げる。

しかし、雄二は足を止めない。

「落ち着け！」

「落ち着いてらんないよ！」

声を上げた明久は、雄二の前に回り、行く手を阻んだ。

雄二は軽く額を押さえてため息をつく。そして、強引に明久を廊下の隅へ引つ張り込みながら、視線だけ動かして周囲を窺った。

「襲ってきた奴らは前田が撃退したらしい。で、前田には支倉の護衛を頼んだんだが、三回戦後にはちび助に支倉を頼んでどこかへ行った。十中八九、襲ってきた奴らがらみだ。この状況で、女子だけを更衣室なんぞに行かせらんねーだろーが」

声を潜めながら明久に簡潔に説明する雄二。

「つーことは、俺たちであいつらを密かに護衛すりゃあいいんだな？」

「ああ、そう……」

「え……？」

降ってわいた第三者の声にギクリとなる雄二と明久。

視線を落とすと、そこにはしゃがみ込んだ慎吾が二人を見上げていた。

「ヨオ」

「てめ！ なに盗み聞きしてやがる！」

雄二は声を上げて、慎吾の首根っこを押さえようと手を伸ばす。

しかし、慎吾はそれをスルリとくぐり抜けて歩き始めた。

「とつとと行くぜ？ 明久」

「う、うん」

慎吾に促されて歩き出す明久。

雄二はそれに追随しながら慎吾に声をかける。

「おい、これはFクラスの問題だ。余計なことは……」

「るせーよ、ゴリラ。支倉も、姫路も、島田も、俺のダチだ。ダチ

を守るのにおめえの指図は受けねえ」

慎吾は雄二の方を見向きもせずに答える。

雄二もここで言い合っても無駄と感じたのか、慎吾に並んで歩きだした。

すると、慎吾が歩みを早めて雄二より前にでる。

それを見た雄二も歩きのサイクルを上げ、慎吾の前へ。

しかし、慎吾も負けじと、さらに歩みを早める。

徐々に競争のようになり、お互いの顔をにらみ付けながら、雄二と慎吾は走り出す。

「ちょ？！ 待ってよ！ 二人ともっ？！」

おいて行かれそうになった明久は、あわてて後を追っていった。

教室から出た女性陣は、一階の女子更衣室へと向かっていた。

「なんかうやむやの内に着ることになっちゃったね」

ひばりが苦笑いしながら言うと、瑞希や美波も苦笑する。

「ですね。でも、着てみたいかも？ なんて、少しだけ思っちゃいました。大勢に見られるのは恥ずかしいですけど……」

少しだけ頬を染め、瑞希がはにかむ。

「瑞希は大胆ね？ ウチは流れに乗ったことを後悔し始めてるわ」
反対に美波は少し落ち込み気味だ。

「そんなの堂々としていれば良いんだよん」 なみなみは、健康的なびしょーじょだしない？ 需要はバツチリなはずだよん」

お気楽極楽に、美波に話しかけているのは、金髪の少女、クリスだ。

その腕には、数着のチャイナドレスが乗っている。

「早く着替えて、バカなお兄ちゃんに見せるです！」

美波の横に並んで歩いている葉月も上機嫌だ。

「チャイナ♪ チャイナ♪」

そして大柄な少女、琴代もスキップしかねないくらい上機嫌で歩いていた。

と、その行く手に、見知った少女の姿が見えた。

「おや？ みなさんどちらへ？」

黒髪ロングに半眼の少女、アキである。

目の下に、ベットリと隈を作っており、目も充血しているようだ。

「おおつ、アキぴょん発見♪ 確保だよん♪」

「いえっさ♪」

アキにターゲットロックしたクリスの命を受け、琴代が素早くアキを抱えあげる。

「え？ え？ え？ な、なに？ なんなんですか？！」

突然のことに目を白黒させるアキ。

しかし、女子勢全員が、巻き込む気満々だった。

「にゅふふ、安心して欲しいよん♪ ちゃんとアキぴょんの分もムツチーから預かってるよん♪」

「……私の分は？」

「もちろんあるよん♪」

「「「「いやいやいやいやい！……！」「」「」」

突然現れた翔子と、その分のチャイナがあるという話に、ひばり、瑞希、美波、秀吉が手を振り、ツッコむ。

「美人のお姉ちゃんも着るですか？」

「……うん。雄二に見せる」

屈託無く訊ねる葉月に、丁寧に戻る翔子。

「というか、いつ合流したの？ 翔子ちゃん」

「……ひばりのチャイナが広げられたとき」

「「「「そんな前からっ？！」」「」」」

衝撃の事実を目を剥く四人。

「全く分からなかったのう」

「ウチ、霧島さんのことがよく判らなくなっただわ」

「「あはは……」」

美波の言葉に、乾いた笑いを浮かべるひばりと瑞希。

「うつひゃっひゃっひゃ。まあ、落ち着いて。ほれ、更衣室が見えてきたよん♪」

そう言っクリスの指さした先に更衣室が見えてきた。

競争気味に階段を降りていった、雄二と慎吾。しかし、目の前に二つの人影が表れ、立ちはだかった。

「なんだ？ おまえら！」

人影に誰何する雄二。

しかし相手は答えない。

「なんだなんだ？」

慎吾も声を上げ、さらに明久が追いついてきた。

「俺たちは、その下に用があるんだがな」

語気を強める雄二にも動じない。

「悪いけど、通してもらうよ」

そう言って明久が横を抜けようとする、いきなり殴りかかってきた。

「うわわっ！」

「明久！」

繰り出された拳をかるうじて避わした明久はたたたら踏む。

だが、追撃はされなかった。

「おまえ、吉井明久、か？」

唐突に一人から訊ねられて頷いてしまう明久。

すると、二人の雰囲気が一変した。

「やっぱりか。写真で見たのよりバカっぽいから分らなかったが、丁度いいぜ」

「ああ。それとそっちの赤毛は坂本だろ？ ついでにこいつら潰しときゃ、おっさんも文句はねーだろ」

その言葉と雰囲気、雄二は焦りの色を浮かべた。

「……チッ、雇われが暴走を始めたのか？ マズいな」

「どういうこと？ 雄二」

「……簡単に言やあ、はやくこいつらブチのめさねえと、支倉たちが危ないって事だ」

それを聞いた瞬間、明久の顔が引き締まる。

「一人は俺が受け持つ、おまえらは二人でもう片方をぶちのめせ」
「了解！」

「任せろ！」

言うが早いか殴りかかる二人。

そして雄二も、もうひとりに牽制のジャブを放ち、気を引く。

「お前の相手は俺がしてやるぜ」

「へっ。音に聞こえた、悪鬼羅刹、の噂、確かめてやるぜ！」

女子更衣室。

八人の美少女が、チャイナ服に着替える。

「うっう、敵よ！ 敵が大勢いるわ！ 来島、あんたと葉月だけよ、ウチの味方は！」

周囲のバストサイズ比率に打ちのめされた美波が、アキに泣きつく。

「いや、意味が分からないです。島田さん」

戸惑うように返事をするアキ。それを聞いて、美波はショックを受ける。

「来島！ あんた、ウチを裏切るつもり！？ みなさいよ、この巨乳率を！ 土屋の話を聞いて、大きさが全てじゃないとは思っただ、目の前にこれだけ並んだら、やっぱり悔しいのよー！」

興奮のあまり、アキの体をガクンガクン揺する。

「ま、まま、待って下さい島田さん。わ、私からすれば、島田さんも、ある、んですか！？」

揺すられながらもそう言うアキ。

それを聞いて、美波がいきり立つ。

「来島！ それは、ウチに対する当てっ……け……ゴメン」

逆上しかけるも、ブラすらしてないアキの胸部を見て、済まなそうに目を逸らす。

自身がほんの些細な膨らみがあるのに対し、アキのそれは、僅か
ほども曲面が無い。

美波が微乳とすれば、アキのそれは、まさに無乳であった。

「……いえ、最近まであまり気にしてませんでしたから」

美波の様子に軽く苦笑するアキ。

と、そこへ、オレンジのチャイナドレスを身につけたクリスがや
ってくる。

「なみなみ気にし過ぎだよ。なみなみは十分かわいいからねい？」

「ふええっ？」

いきなりかわいいと言われて真っ赤になる美波。

まとった青のチャイナドレスの端をくにくにしながら照れまくっ
ている。

「そうですよ、そのチャイナドレスも似合ってますし」

そう言うのは、赤いチャイナドレスを着た瑞希だ。

「はいです！ お姉ちゃん、とても似合ってるです！」

「やだ、葉月まで……」

ピンクのチャイナを着た葉月にまで褒められた美波は、もう、ゆ
るゆるな表情になっていた。

その様子を見て、ライトグリーンのチャイナドレスを着終えたア
キがため息をつく。

「どうでも良いですよ……もう」

「みんな、準備できた？」

「……そろそろ」

白いチャイナドレスを着たひばりと、黒いチャイナドレスを着た
翔子が声を掛けてくる。

その後ろには、黄色いチャイナドレスを着た琴代が立っていた。

「えへっ、チャイナチャイナっ」

チャイナドレスが着れたのがうれしいのか、ご機嫌なようだ。

「行こっか」

心なしか、ひばりも上機嫌に促す。

「葉月が一番に、バカなお兄ちゃんに見せるですっ！」

「こら、葉月！」

はしゃぎながら更衣室を飛び出す葉月。

美波は、我に返って注意するが、すでに飛び出した後だった。

「えへへっ わぶ?!」

女子更衣室から飛び出してきた葉月は、誰かとぶつかってしまい、
たたら踏んだ。

と、その肩を誰かが支える。

「おっと、大丈夫かい？」

「す、すいませんです。お兄さん」

あわてて謝る葉月。

「いや、いいんだよ。君こそ大丈夫かい？」

「ハイです！」

優しく聞いてくる男に、元気良く返事をする葉月。

と、ほかのメンツが更衣室から姿を現した。

「あ、お姉ちゃ……？」

振り向いて、美波の方へ行こうとした葉月は、肩を掴まれる。

「い、痛……」

そのまま抱き抱えられ、顎下を押さえられてしまう葉月。

「葉月っ！」

思わず賭だそうとする美波。

「動くなっ！ 首へし折んぞっ！」

「うぐっ?!」

首周りに力を入れられた葉月のうめきに、美波は立ち止まってしま
う。

「止めて！」

青くなつて声を上げる美波。

「そっちの金髪も妙な動きすんな」

「くっ……」

通信機のスイッチを入れようとしたクリスだったが、めざとく見

つけた男によって止められる。

そして、男は、嫌らしい笑みを浮かべながら口を開いた。

「よお、支倉、姫路。ひさしぶりだなあ。味見しに来てやったぜ？」

男の姿を見た瞬間から、ひばりと瑞希の顔から血の気が引いていた。

「う、うそ……」

「な、なんであなたが……」

そして、二人の口から、異口同音に彼の名前が紡がれる。

「大春先輩……」

二人の様子を見た大春の口の端が、大きくつり上がった。

第三十七問（後書き）

第三十七問、いかがでしたでしょうか？

ついに悪党が動き出しました。

果たして、ひばり達の運命やいかにつ！？

第三十八問（前書き）

第三十八問、更新しました。
よろしく願います♪

第三十八問

「さて、おとなしく着いてきて貰おうかな？ お嬢さん方」

大春の声にあわせて三人の男が現れ、少女達を包囲する。

「（マズいねい、人質を解放しないとどうにもならない）」

「（……今は従った方が良い）」

「（仕方ないね……）」

唇も動かさず、声を交わすクリスと翔子。

葉月を抱えた大春は、彼女たちから目を離さない。その狂気にも似た気配に、クリスと翔子以外は真っ青になっている。

「その子を放して下さい、先輩」

青い顔をしながら口を開くひばり。

体の震えは止まっていけないが、目だけは力強く大春を見据えている。

「あ、あたしが身代わりになりますから」

ひばりのその言葉に、大春の表情が、僅かに動く。

「だ、だめよ！ ひばり！」

思わず声を上げる美波。

しかし、大春もひばりも、にらみ合ったまま反応しない。

少しの間の後、大春が口を開く。

「……いいぜ？ まずお前がこつち来な」

言われてひばりは頷き、震える足を一步踏み出す。

「ひ、ひばりちゃん！」

声を上げる瑞希に振り向き、笑ってみせるひばり。

だが、その顔にこびりついた恐怖は拭えていなかった。

大春の元へ近づき、見上げるひばり。

見下ろす大春は、葉月を抱きかかえたままひばりの顎を鷲掴みにする。

「うぐ……」

くぐもった声を上げたひばりに構わず、そのまま引き寄せると、葉月を放り出してひばりの体を反転させながら抱き上げる。

葉月は泣きながら姉の元へ走った。

「お、おねえちゃ……！」

「……葉月！」

葉月を抱きしめる美波。

しかし、地獄はまだ終わらない。

「いいモン持つてるなあ支倉あ……」

言いながら大春は、ひばりの顎から手を離し、白い布地に覆われた胸を揉みしだき、彼女の頬に舌を這わす。

「い、厭……やめ、やめて」

嫌悪と羞恥と恐怖がない交ぜになり、抵抗もままならないひばり。それを見てワラう大春。

「ククク、支倉、お前にはある意味、感謝してるんだぜ？ お前とのやりとりのおかげで、俺は表からは完全に外れたがよ、意外と陰の空気と水が合ってたみたいでなあ。楽しくやらせてもらってるよ」

「な、何言って……」

「……だが、心残りもあってなあ。結構な数の女を喰いやしたが、お前みたいな珍品にやあとんとお目に掛からなくてな。あん時、無理矢理喰つときゃあ良かったって、ほんと後悔してたんだぜ？ 今度こそ、しゃぶり尽くしてやるよ……」

ヘラヘラ笑いながら言う大春の、あまりに気軽な言葉を聞いて、一同は恐怖のあまり声を失う。

「他のお嬢さん達も上玉揃いだ。うちの連中も喜ぶぜ？ ククク。行くぞ、おま……」

「ひばりから離れろっつ！！ このクズ野郎っつ！！」

あがった声に振り向こうとした大春の頬に拳が突き刺さる！

そのまま吹き飛ぶ大春。

取り落としたひばりの腕をとり、優しく引き寄せ、その肩を抱いたのは、傷だらけの吉井明久だった。

時間は少し戻る 路地を走りゆく男。

周囲を軽く警戒しながら走る様は返って怪しいのだが、彼はそんなことには気づかない。

いま、彼の頭にあるのは自身の失点を取り戻すため、リーダーに言われた使いを果たすことしかなかった。

リーダーの機嫌を損ねるのは、良くない。

太鼓持ちのような立場で、徐々に彼に取り入り、お気に入りになつた。

しかし、功を焦り、しくじった今、なんとしても汚名を返上しなければならぬ。

リーダーの機嫌を損ねた連中の末路を彼は間近で見てきたのだ。

その、狂気を伴った仕打ちは見るに耐えなかった。

あぐくに死んでしまった者も少なくない。

そのたびにリーダーは、顔色も変えずに自らの提携者に頼んで処理してきた。

そんな人物が、自分に機会をくれたのだ。

失敗するわけにはいかないという思いが彼の中にはあった。

住宅地を抜け、市街地の外れへと足を踏み入れる。

ビルとビルの間を抜けていくと、歯抜けのように、大きな広場へと出る。

市街地の開発の関係で出来てしまった隙間だったが、モグリの業者が処分に困った資材を放置するのに使われたらしく、さび付いた鉄筋や鉄骨、コンクリブロックなどが無造作に転がっている。

普段は、あまり素行のよろしくない連中の温床となっている場所だが、今日は少し様子が違った。

二十人を越える男たち。

ヤニを吹かし、たむろっている。

その場へ男は飛び込み声を上げた。

「お前ら！ ハルが呼んでる、出番だぜ?!」

その声に男たちは声を上げる。

『待ちくたびれたぜ!』

『ひゃあ、俺、女喰うの一月ぶりだぜ』

『文月ってなあ上玉揃いだって話だが、どうだったんだ？ ヤス』

『巨乳ちゃんはいんのか？ 挟んで貰って思いっきりぶちまけてえんだよ』

『溜まりすぎだろ、お前？ タマ破裂すんぞ』

『俺あ、強気な女を組み伏せて、殴り付けながら突っ込むぜ?』

『かわいい男はいたか？ 後ろの穴を思う存分可愛がってやりてえんだよ』

次々に己の嗜好をあげて、下卑た笑い声をあげる男たち。

もはや、少女達を捕らえ、蹂躪することしか眼中に無いようだ。

「落ち着けて、噂通りの選り取りみどり。喰い放題だぜ」

調子に乗ったヤスが声を上げると、男達から歓声が上がる。

狂った欲望の塊。

狂気の集団がそこにいた。

「んじゃいくぜ?! おめえら。ハルを待たせるわけにやあいかなーからな」

そう言つて、ヤスが先導しようとする、広場の唯一の出口に人影が降り立つ。

あがった砂煙が風に舞い、その姿を一瞬だけ覆う。

「あ? なんだお前」

その人物に誰何するヤス。

「ずいぶんとまあ、下劣な話をしている奴がいるもんだ」

答えるは男の声。

そして、砂煙が晴れた先に立つのは、180cmを越える身長に、分厚い筋肉で覆われた肉体、腕を組んでたたずむ姿。

そしてその頭は。

赤い顔に横たわった半月のような口。

モジャモジャの髪からは黄色い三角が二つほど突き出ており、目は山なりのカーブを描いている。

そう、それは力。ルおじさんを追いかけたりする彼らにそっくりだ。

『『『……………は？』』』

それを見た瞬間。男達の目が、点になった。

腕を組んでこちらをみている男は、セルロイド製のソレ。

つまり、祭りの屋台で売られていそうなお面を付けていたのだ。

しかも、サイズがあつておらず、男前な四角い顎が飛び出ている。

『『『……………ぶ、ぶ、ぶわはははははははは』』』

ソレを認めた男達は、一斉に笑い始めた。

訝しげなヤスを除いて。

『バ、バカだこいつ？！』

『なんだそりや、お面ライダーか？』

『ぎやはははは、それいいわ！』

笑いながら、口々に扱き下ろす男達。

しかし、ヤス一人だけが顔色を青くする。

大春の命令で、この街に先行して入り込み、情報を集めていたのは、彼だった。

そして、その噂を耳にした。

『この街にやあ、不良が少ない。なんでわかるか？ 端から“喰われた”んだよ……。有名どこは、水無月の‘悪鬼羅刹’。しばらく前なら‘白銀の堕天使’だ。だが、一番気を付けなきゃならねえのが、‘皇餓’さ。嘘かホントか知らねえが、こいつに“喰われた”奴らは口を揃えて言うんだ』

雰囲気たつぷりに間をあけられ、喉を鳴らしたことが思い出される。

『「あれは人間じゃ無い、マジモんの化け物だ。信じられるか？ 人が棒きれのように宙を舞うんだぜ？」ってな』

ま、まさか……、と呟くヤスに、噂を教えた人物は笑ってみせる。
『気を付けな。この街で悪さをすると、鬼の面を被ったあいつが“喰らい”に来るってな』

ヤスが其れを思い出しているうちに、男達の何人かがお面の男に近づいていく。

『おう、てめえどけよ!』

『おれたちや、これから文月のおねーちゃんらと、気持ちイーパーティーしに行くんだからよお』

『ひゃひゃ、何人がまともでいられるかわからな……』

最後の男の姿が掻き消えた。

否、お面男に注視していたヤスは見た。

お面男の腰が沈み、その拳が消えた瞬間、消えた男がロケットのように空中へ射出されるのを。

突然のことに、お面の近くにいた二人も呆気にとられる。

その鳩尾に肘が突き込まれ、流れるように繰り出された回し蹴りがもう一人の横面を捉える。

肘を受けた男は、マンガが特撮のように吹き飛び、二、三人を巻き込んで派手な砂煙を上げた。

もう一人、蹴りを受けた者は、まるで風車のようにその場で二回半ほど横回転して地面に沈んだ。

それを見た狂気の集団は、シンと静まり返る。

コミカルな面を被った、‘本物’の鬼がワラウ。

「さあ、喰い散らかして、やろっ」

『ぶっころせえええつつ!』

あげた怒号は誰のものだったか。

それを合図にお面男に襲いかかる。

正面から殴りかかる男の拳を避け、伸びきった腕に、下から拳打

を叩き込む。

朽ち木のように折れた腕を押さえる男の首根っこを掴むと、そのまま振り回して周囲をなぎ払う。

吹き飛んだ四人ほどに、掴んでいた男を投げつけると、背後に迫った鉄筋を頭をずらして致命打を避ける。

鉄筋は、お面を被った頭を逸れ、肩の辺りに叩き込まれたが、まるでゴムタイヤか何かを叩いたように跳ね返された。

「ぬおっ?!」

鉄筋を持った男は思わぬことに声を上げて二、三步下がる。

すると、正面にいた男を前蹴りで吹き飛ばしたお面の背中が、自分の目前に迫る。

「ゲフユツ!」

全身に爆ぜるような衝撃を受け、吹き飛ぶ。

しかし、お面はそれには目もくれず、左右から迫る攻撃を両腕で逸らし、軽く跳躍しながら放った旋風脚で意識を刈り取る。

そこを狙い、正面から掴みかかる男が一人。

着地した瞬間に、タツクル気味にぶつかっていくが、その足は根でも張っているのか、小揺るぎもしない。

しかし、好機と見たか、三、四人が飛びかかり、腕や足を取り押さえようとしがみつく。

「ようし、押さえてろよ!」

またもや、転がる鉄パイプを拾った男が殴り掛かってくる。

金属で堅いものを殴り付ける音が響き、鉄パイプはお面の頭に叩き込まれた。

セルロイドの面の一部が碎けて舞うが。

信じられないことが起きた。

鉄パイプがひしゃげたのだ。

これには殴り付けた男も呆気にとられる。

「……やれやれ、少し油断したか」

無然とした声が聞こえたかと思うと、地を砕く震脚の衝撃餓広が
り、しがみついていた男達がはね飛ばされる。

「さて、ここからは手抜き無しだ」

その声は、理性的な野獣のものだった。

結局、それから数分と掛からずに男達はすべてに地に伏した。

これだけやらかしておいて、誰一人として命に関わる傷が無い辺
りに、彼の本当の恐ろしさが見え隠れしているように思える。

「（ま、これ以上はな。明久や支倉との約束もあることだしな）」

呟いて、一人腰を抜かしているヤスに向き直り、膝を着く。

「……さて、話して貰おうか」

「ヒ、ヒイツ」

ヤスは恥も外聞もなく、涙と鼻水と涎まみれになりながらすべて
を話す。

それを黙って聞いていたお面男から、特大の殺気が放たれ、拳が
地面に叩きつけられた。

「ヒヤアアッ?!」

その一撃に、ヤスはあえなく失神し、股ぐらを盛大に濡らした。

「くそ、早く戻らねえと!」

壊れたセルロイドの面を外した俊夫は、焦りを隠せないまま跳躍
し、その場を立ち去った。

それから数分後、騒ぎを聞きつけた人から通報を受けた警察が駆
けつけたとき、すでにその場には誰も居なくなっていた。

『掃除屋』は間に合ったか。ん？ 校内にも動きがあるか？ 対
応チーム緊急派遣要請は……、よし、通ったな。さて、間に合うか

……」

「ぜはー、ぜはー、くっそあいつら」

物陰で荒く息をつくのは、須川亮だ。

先ほどまで、嫉妬に狂ったクラスメイトに追い回されていたのだ。
「ちきしょー、なんだか最近こういうのが増えてきたよう……」
にがり切った表情で呟く亮。

事実、彼はひばりやクリスとの交流が増えたせいも、他の女子との会話も増えている。

それでも、浮いた話し一つ無い辺りが、彼の立場を如実に表しているようにも思える。

「まったく、こういうドタバタしたことは吉井の担当のはずなんだがな……」

ぶつぶつ言いながら物陰から出てくる亮。

「そろそろ戻るか……」

ため息一つついて歩き出す。

と、頭上で何かが光った。

「なん……」

見上げた瞬間、視界いっぱい、揃えた靴裏が広がり、亮の顔面に何かがめり込んだ。

「ヴオぺらっ?!」

衝撃で鼻血を吹きながらのけぞる亮。

「失敗失敗、アイテムだけ落とそうと思ってあたしまで落ちちゃったよ」

トンガリ帽子にオレンジのセーラーと赤いフレアスカート。

そんな姿の女の子が亮の顔面を両足で踏んづけたまま言う。

「じゃあ、これはあなたに。他作品世界の、泉って子からだよ。じゃ、がんばってね」

そう言いつつ、竹刀袋を亮の掌中に収めると、軽く跳躍し、宙空の光に飛び込んだ。

すると光は、より一層強い光を放ってから消えてしまう。

突然の出来事に、亮も開いた口を閉じることができなかった。

「な、なんなんだ？ いったい……」

一瞬の出来事で、夢か幻のような錯覚に陥る。

だが、掌中に収まった竹刀袋の確かな感触に戸惑いを隠せなかった。

「……（ゴクリ）」

竹刀袋を見つめる亮の喉が鳴る。

おそろおそろ開けてみると、中から一丈ちよつとほどの赤い棒が出てきた。

「なんだこりゃ？」

棒の両端には金色の飾りが着いているが、全体には素朴な印象だ。しかし。

「持ち安いな、コレ」

取り出したときは太く感じたが、握ってみると悪くない。

重さも、重すぎず軽すぎず、取り回すのに丁度良さそうだ。

周囲を確認して、軽く振り回す。

「お？ おお？」

その使い心地に技が冴える。

「こりゃいいや、ありがたく使わせて貰うか」

しばらく振り回してから、竹刀袋に棒を戻すと、思わぬ贈り物に、亮は上機嫌でそれを担ぎながら教室を目指した。

階段付近で争う男が五人。

明久たちと、大春の手下二人だ。

雄二はタイマン。

明久と慎吾は二人がかり。

しかも明久はこの一月あまりで、多少なりとも強くなっていた。始まってすぐに状況は優勢になり、すぐに決着が付くかと思われたが。

「こいつ、しぶてえっ！」

思わず声を上げる雄二。

そこまで強くないが、タフさもあるらしく、防御に徹しているため、倒れる気配がない。

雄二は、途中から相手に勝つつもりが無くなっていることに気づいていた。

つまり……。

「時間稼ぎかよ……！」

苛ついたような雄二の声に相手がニヤリと口の端を上げてみせる。その様子が苛ついた雄二は、左右のジャブで顔を狙い、ガードを上げさせる。

ついで左のボディフック……と見せかけガードを弾く！

「！」

驚愕する相手の顔を見据え、きれいな弧を描いて振り上げられた脚を頭へ振り降ろす。

「うおっ?!」

雄二の踵落としを、頭を振って直撃を避ける。

肩口へ叩き込まれた一撃によるけるが踏みとどまった。

「！　いいかげんに！」

相手のしぶとさに声を上げ、大振りの一撃を繰り出す雄二。

が、それを狙った相手にかい潜られ、タックルを受ける。

「ぐっ?!」

壁に背中を打ちつけ、声を上げる雄二。

その向こうで、明久が相手の拳を受け流して拳打を打ち込む。

その一撃を受けた相手はたたら踏む。

そこを狙って殴りかかる明久。

それは、技も何もないただの大振りの一撃。

簡単にいなされ、殴り返される。

「明久、落ち着け！」

相手を攪乱しながら慎吾が叫ぶが、明久の耳には入ってはいない。
「早く倒れるよ！ 瑞希ちゃんとひばりが危ないんだっ！」

怒鳴りながら、さらに殴りかかる。

殴り、殴り返されぼろになる明久。

慎吾も相手の脚にかじり付こうとして蹴りを受ける。

明久は、思い出したように、技を出そうとするが、うまくいかな
なっていた。

顔面に一撃を受けて一步後退。

殴り返そうと相手を見ると、すでに相手は拳を繰り出していた。

「くっそおっ！」

声を上げた明久の、顔の横から赤いものが飛び出し、相手の鼻面
を打つ。

それが、赤い棒だと気づいたときに、後ろから声かけられる。

「……何やってんだ、お前ら」

赤い棒の一撃を繰り出した少年、須川亮。

その目は、油断無く相手を睨みつける。

「須川君……細かいことは後で。早くこいつらを突破しないと、ひ
ばり達が危ないんだ！ だから！」

勇んで殴りかかろうとする明久。

スコーンッ！！

その頭に衝撃が走った。

「こぺっ?!」

亮に手にした棒で頭頂部を痛打された明久は、奇声を上げて倒れ
る。

「焦りすぎだ、バカ」

「痛いじゃないか！ このバカ！」

すぐさま立ちあがって叫ぶ明久。

それを無視して亮が一步前に入る。

「……ここは任せて先行けバカ」

「す、須川君」

「早くしろ」

言いながら明久の尻を棒で叩く。

「った！ う、うんっ！」

尻に走る痛みに、涙を滲ませながら走り出す明久。

「行かせるかつ！？」

その行く手を阻もうとする男の脚に、痣だらけの慎吾がしがみつき、眼前に赤い棒が突き出される。

「てめえの相手はこの俺だ」

「チッ」

舌打ちした男は、慎吾の背中を殴りつけて引き剥がすと、構える。それを見て、亮も赤い棒を引き戻して構えた。

第三十八問（後書き）

第三十八問、いかがでしたでしょうか？

今回、須川亮が手に入れた赤い棒。

正式名称はまだ出ていませんが、ウツソ＝エヴィンさんのところの泉こなたさんから戴きました♪

ウツソさん、泉さん、ありがとうございます♪

きっと、亮の相棒として活躍してくれることでしょう♪

それでは、また次回もよろしく願いします♪

第三十九問（前書き）

第三十九問を更新しました♪
読んで下さるみなさんに楽しんでいただければ幸いです♪

第三十九問

階段を下りきった明久が、顔を上げると、視界に飛び込んできたのは、大春に後ろから抱きすくめられ、その胸を驚掴みにされて身をよじるひばりの姿だった。

そして、下毘た笑みを浮かべた大春が舌を伸ばし、彼女の頬を舐め回した瞬間、頭の中が真っ白になった。

「ひばりから離れろっつ！！ このクズ野郎っつ！！」
声を上げて踏み出し、拳を突き出す。

それが、振り向いた大春の頬に突き刺さり、相手を吹き飛ばす！
そして、大春の腕の中からこぼれ落ちた白い衣装の幼なじみの手を取り、引き寄せ、肩を抱く。

ひばりは、普段温厚な幼なじみ少年が見せた精悍な顔つきを、軽く頬を染めて見上げていた。

「ひばり、大丈夫？」

優しくかけられた声に、胸の奥が跳ねる。

「う……うん」

それだけ言うつと、顔を逸らした。

頬と耳が熱い。

いや、顔全体が、火山が噴火したかのように熱いのをひばりは感じていた。

「ど、どうしたのひばりっ！？ 顔真っ赤だよっ！？」

ひばりの赤い顔に気づいた明久は、彼女の顔の前に回り込んでのぞき込む。

「ふえっ?!」

いきなり顔を近づけられ、ますます赤くなるひばり。

「くっそお、ひばりにヒドいことじゃがって……」

拳を握って憤る明久。

そんな彼を見て、ひばりは小さくつぶやく。

「（いや、あたしが赤いのはアキくんのせいなんだけど……）」
一つ息を吐いてうつむく。

「ク、ククク……」

聞こえてきた声に、ひばりをかばいながら身構える明久。

それは、明久に殴り飛ばされた大春のものだ。

その哄笑は徐々に大きくなる。

「ククク、ハハハハ、ハアーツハツハツハ！」

笑いながら身を起こす大春。

殴られた頬は赤くなり、口の端から、赤いものが一筋。

「格好いいなあ？ 吉井明久。ヒーロー登場ってか？」

口元についた赤いものを拭いながら立ち上がると、口の端を歪めるように笑う。

それをにらみつける明久。

「お久しぶりです、先輩。もう二度と会いたくありませんでしたけど」

「吉井に皮肉られるとはな。しかし、おあつらえ向きだ。おまえもふんじばって、目の前で支倉が泣き叫ぶ処を見せてやるよ」

狂喜に染まった笑顔を見せる大春に敵味方を問わず戦慄が走る。

「おい、おまえら。ボケツとすんな。女、押さえる。そうすりゃ大人しくなる」

「させるか！」

「慌てんな吉井。おまえは俺が相手してやるよ」

一歩踏み出した明久の行く手を、大春が遮る。

その向こうで、三人の男が少女達に近づくのが見え、明久は口の奥を噛みしめた。

赤い棒を振り回して攻め立てる亮。

「セイツ！」

槍のごとく突き出された先端を、相手はギリギリで避わす。狭い屋内で長物を振り回すのは難しい。

が、亮の修得している棍術は、その長さの意味を知り、その扱いを知る武術だ。

突き出したままに体を反転させながら腕を交差させて持ち変える。そのまま胴を軸に赤い棒を回転。

肩口まで回して、右手を側端に持ち替え、そのまま左手も添えて上段から相手を打ち据える。

「グウツ?!」

腕を十字に組み、かろうじて受け止める男。

しかし、亮はそこへ一歩踏み込みながら左手を伸ばし、赤い棒の先端を取りながら、右手を突き出し、左手を引く。

棒が反転し、反対側の先端がそのまま鳩尾へ突き刺さる。

「ぐへっ!?!」

体を九の字に折り曲げた男をそのままに、亮は、一歩引きながら体を回転させ、さらに相手を打ち据えようとする。

が、男は転がるようにそれを避け、身構える。

「……タフだな」

それに身のこなしも良い。

そうつぶやく亮。

亮を援護していた慎吾などは、さんざん蹴られたせいか、ぼろぼろで身動きが出来なくなっている。

そして向こうでは……。

「く、離れやがれ!」

壁に押しつけられた雄二が、相手の背中に両手を組んで叩きつけていた。

「じっ?!」

衝撃に奇声を上げる男に、雄二は間髪入れずに、勢いよく膝を突き上げ、膝蹴りを見舞う。

「ぐ、へっ?!」

膝が相手の胸を突き上げ、拘束が弛む。

開いた隙間を見逃さず、腕を突っ込んで、相手の首に巻き付ける。さらに、反対からも腕を回し、フロントネックロック。

「ふんっ」

かけ声とともに雄二は相手を持ち上げる。

「オラ! オラ! オラ! オラッ!」

思い切り上下に揺すって効果を高める。

「がっ?! げっ?!? ごっ?!? ぶ、ぐ……」

妙な声を上げていた男の声が止み、ぐったりとなつて弛緩する。

「やっとオチやがったか」

思いの外苦戦した雄二は、悪態をついたが、すぐに気を取り直し、懷からロープを取り出す。

そして、手慣れた様子で縛り上げていく。

首と両膝も繋いでしまい、ともに歩けなくしてから亮に向き直る雄二。

その視線の先では、相手の足元を払い、流れを切らさず突き込み、赤い棒を叩きつけている亮がいた。

「……こりや、手助けは要らんか」

思つてもみなかった亮の實力に嘆息する雄二。

そして……。

「せいっ! せいっ! せいっ! せいやっ!」

払い、突き、叩き、変幻自在に動く赤き棒。

袈裟、薙ぎ、唐竹、突き。

くるくると動きながら次々に繰り出される攻撃を、相手は捌ききれない。

「……こいつは」

途切れることのない九つの打撃が、相手を追いつめていく様に、雄二は感嘆する。

「せっ!」

一際鋭い声とともに繰り出された突きを受け、男は吹き飛び、壁に叩きつけられて、くずおれた。

「……。ふう〜」

大きく息を吐き、残心を解く亮。

それを見やってから雄二は男を縛り上げる。

それを見届けてから口を開く亮。

「……よし、吉井を追おうぜ」

赤い棒を担いで走り出そうとする亮を雄二が呼び止める。

「まあ待て」

「のんびりは出来ないだろうが」

呼び止めた雄二をにらみ付ける亮。

だが、雄二は動じない。

「まあ、聞けよ……」

そう言つてイタズラっぽく笑つてみせる雄二。

亮は訝しげな顔になりながらも耳を傾けた。

「くつ、卑怯だぞ！」

固まつた女性陣ににじり寄る男たちを見て、明久が声を上げる。

「ハッ！ 勝ちゃあ良いんだよ、勝ちゃあ」

言いながら拳を繰り出す大春。

その先には白い衣装の小さな少女の姿。

「きゃあっ?!」

「くそっ！」

拳の先に体を割り込ませ、その一撃を腕で受け止める明久。

体勢を整える間もなく蹴りを見舞われるが、それも受け止める。

そうして反撃に出ようとすると、ひばりを狙う大春。

すると、明久はひばりをかばい、なかなか攻撃に移れない。

大春は、明久がひばりをかばうことを見越して、それを攻撃のフ

エイントに織り込んでいた。

根が素直な明久は、虚実の見極めが甘く、ひばりを守ろうとあまり離れないため、思い切った動きが出来ないでいた。

ひばりはひばりで離れようとはするのだが、彼女を守ろうとする明久の方から近づいてくるためなかなか距離が開けられない。

そうこうしている内に、向こうから悲鳴が上がった。

「は、放して下さいっ！」

声を上げたのは、腕を取られた瑞希。

「みっちゃん！」

瑞希の窮地に声を上げるひばり。

つられて明久もそちらへ顔を向けてしまふ。

「瑞希ちゃ、ガッ?!」

声を上げようとした明久の顔に、拳が突き刺さる。

「よそ見る余裕なんかあんのかよっ！」

頭を貫くような衝撃に、足から力が抜けそうになる明久が、踏みとどまり、大春を睨み付ける。

すると大春は、笑みを浮かべながら、さらに腕を振りかぶる。

「アキくんっ！」

悲鳴を上げるひばりの声を受け、頭をズラして拳を避ける明久。そして。

何かが弾ける音が響いた。

「ガッ」

悲鳴を上げて尻餅をついたのは、瑞希の腕を取っていた男。

かれは、鼻面を押さえて呻いている。

そして、その前に立ちはだかるは、

「おイタはイケナイよんっ」

ウインクひとつ飛ばす、金髪の少女。

クリスティーナ「ウエストロード」。

突き出された拳にはまるは、白銀に輝くカイザーナックル。

オレンジのチャイナドレスの裾をはだけながらも、余裕の笑みを

浮かべるクリス。

「がつついてると、女の子にモテないよん」

言いながら拳を降ろして、指一本立ててみせる。

「てめえっ!」

「やろっ!」

残る二人がいきり立つて掴みかかろうとする。

次の瞬間。

男二人の顔面が爆ぜた。

「くおっ?!」

「うぐっ!」

目にも止まらぬ早さで繰り出された拳は、きれいに三発ずつ、二人の男の顔面を射抜いた。

「しょーこりん、みんなを更衣室の中へ」

「……うん、わかった。姫路、島田、早く」

「ええ。さ、葉月」

「は、はいです」

「クリスちゃんも早く!」

更衣室に入った瑞希は、振り返りながらクリスに声をかける。

が、彼女は、入り口に背を向けたまま扉の前に立つ。

「ドアを閉めて、鍵をかけておきなさい!」

「で、でも……!」

クリスが発した鋭い声を聞きながらも瑞希はクリスに声をかけようとする。

「いいからっ!」

一際大きく、強く言われて、瑞希は体を縮込ませた。

しかし、ドアは閉めようとはしない。

すると、瑞希の肩に、手が置かれる。

いつのまにか瑞希の後ろに立つのは、翔子だ。

「……言つとおりにした方が良く。今の私たちでは、彼女や吉井の足手まといにしかない」

「……わかりました。クリスちゃん気を付けて下さいね」

「ん。また、後で……ネッ！」

振り向かずに答えながらも、復活した男の一人にジャブを放つ。肩先が見えないほどの速度で放たれたソレは、手に填めたカイザーナックルの銀光を曳きながら、三発、顔面にたたき込まれる。

「ク、アッ?!」

顔全体に跳ねるような衝撃を受けて尻餅をつく男。

男は鼻血を吹きながら顔を押さえる。

「さて、てっちゃんとの約束破ってまでコイツを握らせたんだ。覚悟してもらっようん♪」

またもやウインクしてみせるクリス。

右腕をダラリとさげてユラユラ揺らし、左腕を折り畳んだ独特のフォームでドアの前に陣取る。

その様子を見た大春は舌打ちをする。

「ッ。とんだ隠し玉が入ってやがったか。おい、おまえら！ 見たところ一発一発は軽そうだ。強引に行け！」

そう指示を出して明久に向き直る大春。

「さて、続けるか吉井。ん？ 支倉は離れちまったか。まあいい」「くっ」

大春の言葉に、改めて身構える明久。

ひばりにはその様子を、少し離れた柱の陰から見守ることしかできない。

一方で、クリスも窮地に陥っていた。

「くうっ?! やっぱブランク長いときつい……!」

男らは被弾覚悟でガードを固めたまま突進してくる。

クリスの使う攻撃法は、腕を鋭くしならせて放つフリッカージャブがメインとなる。

スピードとリーチに優れるソレはしかし、パンチの質が軽く、相手の意識を刈り取れない。

それを加味してのカイザーナックルなのだが、いかんせん大春の

部下はタフだった。

「！……マズッ?!」

声を上げたときにはすでに遅く、相手の強引な突撃に迎撃しきれなくなつたクリスの腰に男がタックルを決めて押し倒す!

「クリスッ!」

異口同音に彼女の名を呼ぶ明久とひばり。

「だから、よそ見る暇なんてねーっていったらうがっ!」

「クッ」

意識が逸れた瞬間を狙う大春の攻撃。

ひばりが離れてかばう必要が無くなつた明久は、それを受け流してみせる。

しかし、向こうではクリスを押し倒した男が彼女に馬乗りになり、鼻血まみれの顔を下品に歪ませていた。

そして、残り二人が更衣室のドアを破ろうとしたそのとき。

いきなりドアが開いた。

「アッ?」

突然のことに二人は呆氣に取られ、女子更衣室から飛び出してきたモノを避けられなかった。

「ガッ?!」

「ゲブッ!?!」

中から飛び出した拳と赤い棒を顔面と鳩尾に受け、二人の男は吹っ飛ばされる。

「よお」

「騎兵隊の登場だぜ」

中から現れたのは、雄二と亮。

「まったく、いきなり窓をノックされたときは、生きた心地がしなかったわよ」

呆れたように言う美波へ笑みを送る雄二。

「騒ぎは更衣室近辺らしかったからな。更衣室から飛び出せば奇襲になると思つたんだ」

言いながら男の一人に殴りかかる。

亮も赤い棒を振りかざしてもう一人へ。

「な、なんだ？」

クリスに馬乗りになっている男は、突然のことにそちらへ気を取られる。

と、その顔へ、下から手が伸びた。

「おっ？！」

それに焦った男は、思わずのけぞった。

その瞬間、男の天地がひっくり返る。

「おねーさん、乗つかられるより、乗つかる方が好きなのよん♪」
妖しい笑みを浮かべながら男の胸に手を置くクリス。

それを見た男も、引きつった笑みを浮かべる。

そして、クリスの肩先が、掻き消える。

男の顔が爆ぜる。

爆ぜる。爆ぜる。爆ぜる。爆ぜる。爆ぜる。爆ぜる。
爆ぜる。爆ぜる。爆ぜる。爆ぜる。爆ぜる。爆ぜる。
爆ぜる。爆ぜる。爆ぜる。爆ぜる。爆ぜる。爆ぜる。
爆ぜる。爆ぜる。爆ぜる。爆ぜる。爆ぜる。爆ぜる。

凄まじいまでの乱打。

男は声も上げられず、必死で防御しようとするが、それを交い潜つて拳が突き刺さる。

もはや防御もままなくなつた男にまたがり、笑みを浮かべたクリスは大きく振りかぶる

「あーらっぴと、もうーっ！」

楽しげに拳を振り降ろし、無情にとどめを刺す。

「……さすがは、白銀の墮天使。よしやねーな、と」

凄惨なまでのクリスの攻撃に、呆れたような声を出す雄二。

その隙について放たれた拳を受け止め、殴り返す。

そのとなりで、亮は冷や汗混じりに赤い棒を振り回している。

そんな状況に大春は焦りを感じたようで、ひとつ舌打ちすると、明久から距離を取った。

「ッ！　しゃあねえ、竹原のおっさんにゃあ悪いが、なりふり構ってられねえ」

言いながら懷に手をつっこみ、鈍い光を放つ凶器を取り出す。

「……ナイフ！」

「刃物沙汰はNGだっつーから、舎弟共にや持たせなかったが、備えあれば何とやらってな」

フォールディングナイフを右手に持った大春は、笑みを浮かべる。
「アッキーっ！」

己の相手を制圧したクリスがあわてて立ち上がり、雄二と亮にも緊張が走る。

「アキくん逃げて！」

真っ青になつて声を上げるひばり。

それを合図に大春はナイフを振るいながら明久へ向かう。
大きく振るわれたそれを、バックステップで避ける明久。

しかし、さらに大春はナイフを腰ために構え、突き出す！

「吉井っつー！！」

大春の声とともに、死の匂いを乗せた鋼の輝きが、明久の胸元へ向かう。

「アキくんっつー！！」

悲鳴じみた声を上げるひばり。

そんななか、明久は、妙に落ち着いてその刃を見ていた。

右足を踏み出し、軽く伸ばした左腕が、突き出された大春の腕を回転させながら払いのける。

左足を前に出しながら左腕を引くのと連動し、腰が半回転。

自然、右腕が前へと伸び、腕が絞られるように回転し、拳が大春の腹に突き刺さる。

震脚の衝撃音が廊下に響き、握り込まれた拳に集約された全身力と体重と相手と己の加速が、大春の体内に解き放たれ、内蔵すべて

を吹き飛ばすかと思うほどの衝撃が彼の体を駆け抜ける。

「ウ、ボ……ワァ……」

あまりの威力に、胃の内容物をすべて吐き出し、白目を剥く大春。全身が弛緩し、ナイフを取り落としてひざを着くと、そのまま己が吐いたモノの上に倒れ込んだ。

その顔は、涙と鼻水とゲロにまみれて無惨なものだった。

第三十九問（後書き）

第三十九問、いかがでしたでしょうか？
悪党との戦い、ついに決着。

でも、清涼祭は、まだ終わりませんっ！
次回も、よろしく願いしますね♪

第四十問（前書き）

第四十問、更新しました♪
読んで下さるみなさんに楽しんでいただければ幸いです♪

第四十問

「アキくんっ！」

大春を打ち倒したまま動かない明久の元へ走るひばり。

彼女に飛びつかれた衝撃で、そのままの姿勢で横倒しになる明久。

「アキくんっ?!」

自分が突き倒したような格好になり、焦るひばり。

しかし、明久身じろぎ一つしない。

だいじょうぶ? とあわてて近づくひばり。

すると、明久の口が動いた。

「こ……」

「こ?」

明久に聞き返すひばり。

「怖かった……」

今更恐怖感がよみがえってきたらしく、四つん這いになった明久は、涙目になってつぶやく。

「もうっ! 心配させてっ!」

ひばりも半泣きになりながら、彼の背中をぺしぺし叩く。

と、

「明久君!」

更衣室から飛び出してきた瑞希も両手を広げて明久に飛びついていく。

「うわっ!」

「きゃあっ!」

瑞希の突撃に明久は押し倒され、ひばりも巻き込まれる。

「明久君っ! 明久君っっ!! 明久君っっ!! 明久君っっ

っっ!!!!!! 明久君っっっっ!!!!!!」

明久とひばりを思い切り抱きしめる瑞希。

「ちよっ、まっ、みっ、く、くるし」

「むぐふおう……く、苦し気持ち良い……」

もかくひばりと、苦悶とも恍惚ともとれない顔になる明久。
そこへ、葉月も飛び出していく。

「バカなお兄ちゃん」

大きな声を上げながら、明久の腰へダイヴを敢行する葉月。
「ぐほっ?!」

骨の軋むような音が響いた気がしなくもない。

さらに突進してくる大きな影。

『うわーん、明久ちゃんっ!』

「えっ?」

「げっ?!」

「ひあ!?!」

「です?」

次の瞬間。

すべてを薙ぎ払う勢いで突撃してきた琴代に、四人とも抱きつかれていた。

「……なにやってんだ? お前ら」

そこへ声をかけたのは小さな人影。

牧野慎吾だ。

「あつ?! 慎くん。明久ちゃんが悪者やつつけ……」

聞こえてきた恋人の声に、琴代が顔を上げて、固まった。

そこには、ボロボロな姿の慎吾が立っていたからだ。

琴代の顔が、大きな三つの。に変化する。

「きゃ~~~~~~~~っ!?!」

上がった悲鳴とともに放り出されるひばりたち四人。

そのまま琴代は慎吾の手を取って、猛然と走り出した。

「や~~~~っ?! 慎くんが死んじゃうっ! 慎くんが死んじゃうっ

! 慎くんが死んじゃうっ! 慎くんが死んじゃうっ! 慎くんが

死んじゃうっ! 慎くんが死んじゃうっ! 慎くんが死んじゃうっ

! 慎くんが死んじゃうっ! 慎くんが死んじゃうっ! 慎くんが

死んじゃうつ！ 慎くんが死んじゃうつ！ 慎くんが死んじゃうつ！
！ 慎くんが死んじゃうつ！ 慎くんが死んじゃうつ！ 慎くんが死んじゃうつ！ 慎くんが死んじゃうつ！

叫びながら走る琴代の勢いに、慎吾は風になびくこいのぼりの如く宙に浮かんでいた。

目的の部屋に気づいた琴代は、勢いのまま部屋のドアを開ける。

そのままの勢いで部屋の中に突撃するも、すぐさま主不在に気が付き、そのまま慎吾をベッドの上に。

「つて、保健室かよ！」

ようやく一息ついてからツッコむ慎吾。

「お薬、お薬？ 包帯包帯」

よくわからずに薬棚を漁る琴代。

「よくわかんない……？ 早くしないと慎くんが死んじゃうつよ」

「いや死なねえよ！」

パニックを起こしかけている琴代に、思わずツッコむ慎吾。

しかし、琴代は目をグルグルさせたままだ。

「でも、でもでもでもでも」

「だから落ち着けつて」

手に薬瓶を持ったままわたたしている琴代を落ち着けようと声をかける慎吾。

しかし、涙目で心配している琴代は落ち着く気配も見せずに、大量の薬瓶と包帯を抱えて慎吾の元へ。

行こうとして、振り向きながら踏み出した足が。

ごりゅ

妙な音と共に捻られ、大量の薬瓶と包帯と、琴代の身体が舞った。
「危ねえっ！」

言っが早いか飛び出す慎吾。

琴代を受け止めんと、両手を差し出す。
ここで思い出してみよう。

琴代は188cm。

慎吾は148cm。

身長差は、40cm。

それは必然的に、体重差も生み出す。
従って。

「うぬ、うおっ！？」

「ひゃあっ？！」

慎吾は、琴代の柔らかい身体に押しつぶされることとなった。

「つつつ、大丈夫か？ 琴代。たく、ドジも大概に……」

潰される形で身体をしたたかに打ちつけた慎吾は、痛む頭を押さえながら、自分に覆い被さっている大きな少女を見上げ……。

固まった。

琴代は泣いていた。

悲しげな顔で、両の眼を潤ませ、溢れるモノを堪えることも出来ずに慎吾の顔を見つめていた。

慎吾は、己の顔に降り始めた雨を気にすることもなく、口を開く。

「……どうした？ デコでも打ったか？」

優しく訊ねる慎吾に、琴代は頭を振る。

「んじゃ、ヒザ小僧すりむいたか？」

再度訊いてきた慎吾の言葉に、またも頭を振る琴代。

「なら足首か？ 思い切り捻っていたしな」

しよつのない奴だ。とつぶやく慎吾を見つめる琴代。
その口が、ゆっくり開かれる。

「……死んじゃ、ヤダ」

降りしきる雨が強まる。

慎吾は、軽く苦笑いして身を起こすと、そのまま琴代に口づける。琴代は軽く驚いたが、そのまま慎吾に任せるようにまぶたを閉じた。

いくばくかの時を経て、離れゆくくちびるを名残惜しそうに上気した顔で見る琴代。

慎吾も軽く頬を染めながら、琴代に力強く笑いかける。

「んな簡単に死なねーよ。デッケー身体して泣き虫なお前が心配で、死んでなんかいらねーや。お前の面倒は、お前が死ぬまで俺が見てやるよ」

慎吾のその言葉に、琴代が少し頬を膨らませる。

「えーっ、あたし、慎くん残して死んだりしないもん！」
そう言う琴代に慎吾は破顔する。

「はは、なら二人そろって長生きできそうだな」

そう言うつと、琴代も満面の笑顔となり、大きく頷いた。
そして、慎吾を見つめて口を開く。

「慎くん……好き」

そつと彼に軽く口づける。

「好き、好き、好き、好き」

好きの一言毎に口づけを交わす。

そして、ひときわ長く口づけた琴代は、優しく笑うと、

「慎くん……だあゝい好き」

そう言つて、慎吾に覆い被さつていった。

『つて！ やめる琴代！ 学校でこれ以上は、色々アウトだゝゝつ
！！』

『慎くうゝゝんゝ はにやあゝゝんゝ』

廊下での一騒動を終えた明久たちは、大春らを縛り上げていた。

「さて、楽しい尋問タイムに……」

「……そこはこちらに任せてもらおう」

楽しげな雄二の言葉を切り裂く、女の声。

「誰……養護教諭の北岡先生？」

突然の声に誰何しようとした明久は、白衣姿に禁煙パイプをくわえた女性に見覚えがあった。

「後のことは、こちらに任せてもらおう。君たちは、祭りに戻ると良い」

「そう言われてもな。俺たちは実際に被害を受けている。そんな言葉だけで、納得できるもんじゃないぜ」

雄二の言葉に、皆が頷く。

その様子に、肩をすくめる北丘。

「……それもそうか。だが、こいつらから情報を聞き出してどうする？ 殴り込みでもかけるのか？ そんなことをすればどうなるかぐらい判りそうなものだが」

言われて顔を見合わせる明久たち。

と、一歩前に出る、金髪少女の姿。

オレンジのチャイナドレスを纏ったクリスだ。

北丘を真っ直ぐ見つめるクリス。

その視線を受けて、眼を細める北丘。

ニツと笑みを浮かべると口を開いた。

「悪いようにはせん。北の名に賭けてな」

それを聞いてクリスが目を伏せる。

そして、顔を上げながら振り向き、皆に向かって口を開く。

「……ねえ、みんな。ここは信じてみない？」

クリスの真剣な調子に、肯定のサインを出し始める一同。

最後に残った雄二は、黙って北丘をにらみ続けている。

険悪な雰囲気の流れ始め、クリスがなお口を開こうとした時、雄二がしゃべり始めた。

「……条件がある。事件の流れと真相、そして、最終的に、こいつらがどうなるのか。これらを必ず俺たちに話してもらおう。タイミン
グは清涼祭一日目の終了後、ウチの、二年Fクラスの教室で、あ
んたが説明しろ。クリスの顔も立てて、これで妥協してやる」

「……なんともはや、礼儀とは無縁な物言いだが……良いだろう。
学園長も同席の上で話すでしょう」

雄二の出した条件を、一つ息を吐いて了承する北丘。
それに頷き、雄二は皆に移動を促す。

教室への道すがら、四回戦間近な事に気付く一同。
先ほどの騒ぎで時間をとられたようだ。

「時間か。よし、このまま会場へ向かうぞ、明久、支倉、姫路、島
田」

「えええっ?! この格好で会場入りさせるつもりなの?! 四回
戦は公開されるんだよっ?!」

「ちよつと坂本! 着替えさせてよ!」

「そ、そうです! 恥ずかしすぎます!」

抗議の声を上げる、ひばり、瑞希、美波の三人。

しかし、雄二はそれに構うことなく他の者に指示を出す。

「教室は任せる。ただし、宣伝として、二、三人で校舎内を回って
くれ。その時は、必ずクリスか須川が同伴しろ。それから翔子。邪
魔だから離れろ」

「……嫌。まだチャイナ姿の感想も貰っていない」
雄二の左腕を抱きしめつつ、彼を見上げる翔子。

半袖でむき出しの二の腕が、翔子の柔らかいソコに埋もれている。
「……お前も大会に参加してるんだろ? 早く行かないと失格に
なるぞ?」

「……そうだった。雄二」

「……なんだ？」

ぶつきらばうに答える雄二の腕を引つ張りながら背伸びをする翔子。

そして、彼の頬に己のくちびるを軽く触れさせる。

「んなっ?!」

突然のことに飛び退く雄二。

その顔が赤く染まる。

そんな彼を見ながら、翔子は一步、二歩と踏み出し、振り返って雄二に微笑み掛けた。

「……さっきは助けてくれてありがとう。雄二、とっても格好良かった」

そう言つて立ち去ろうとする翔子。

その時、長い黒髪から垣間見えた彼女の耳は、動きの少ない顔よりも雄弁に、彼女の心情を表すように真紅に染まっていた。

一瞬の出来事に、一同呆氣にとられたまま見送る。

「バカなお兄ちゃん、バカなお兄ちゃん」

「ん? なに? 葉月ちゃん」

制服の裾を引く葉月に声をかけられ、目線を合わせようとしゃがむ明久。

と、その顔に葉月が近づく。

「葉月もお礼ですっ!」

言つが早いか、明久の頬をついばむようにくちびるをくつつける葉月。

その行動に、目を白黒させた明久は、思わず尻餅をつく。

「は、葉月?!」

妹の行動に、姉の美波もアワを喰う。

そんな姉を不思議そうに見上げる葉月。

「お姉ちゃんは、お礼しないですか?」

「ふえっ?!」

妹の言葉に真っ赤になる美波。

それを見ていた瑞希は、少し強めに眉を寄せ、握り拳を作つて明久の横に膝立ちになる。

「あ、明久君！　ありがとうございまひゅっ！」

噛みながらも、真っ赤になって、目を瞑つた瑞希の顔が明久に近づく。

「え？　なに？　姫路さ……」

瑞希の声に、そちらへ振り向く明久。

重なる、くちびるとくちびる。

再度、周りが呆氣にとられる。

瑞希は、予想と違いすぎる感触に、狙いを外したかと恐る恐る目を開く。

外すどころか、クリティカルHITだった。

それを確認した瞬間、瑞希の頭から、噴火のごとき勢いで湯気が噴きだし、くちびるを押さえて飛び退いた。

「あ、え？　わ、きゅ、恥ずかしすぎます……っ！？！？」

叫びながら逃げ出す瑞希。

それは、普段の彼女からは、考えられないほどの速度の猛ダッシュだった。

呆けた顔で取り残される明久。

その顔が、がちりホールドされ、強引に反対方向へ向けられる。首の辺りから、ゴリコンツと、妙な音がした気もする。

明久の頭を固定する手の持ち主、島田美波は、赤くなりながら明久を見つめた。

「アキ……」

「な、なにかな？　美波」

「……アリガト！」

お礼を述べつつ、彼の額へくちびるを付ける美波。立て続けに起きた想定外の事態に、明久の頭は熱暴走を起こしていた。

その様子を一步離れたところで見ると、小さな人影。

手で胸を押さえ、目を逸らす。
彼女、支倉ひばりの周囲は、喧噪から取り残されたように空虚だった。

余談だが、明久のおいしい状況に血涙流して赤き棒片手に殴りかかろうとした亮だったが、真横から聞こえてきた『頑張ったご褒美だよん♪』の声と、頬に触れた柔らかな感触に、フリーズしていた。

少したった、試合会場。

何とか連れ戻された瑞希だったが、明久の顔をまともに見られずにいると、わりと平気な様子の彼に疑問を述べると、明久はショックのあまり、その辺りの記憶が跳んでいることが発覚。

美波と二人で地面に両手を着くくらい落ち込んだ。

「うっ、あんまりです……私、初めてだったのに……」

「ウ、ウチだって、かなり勇気を出して、頑張ったのに……（でも、おでこなら数に入らないかしら？）」

そんなこんなで、グダグダな感じで四回戦が始まるうとしていた。

教頭室。

いまや部屋の主のみとなったこの場で、竹原は‘外’からの電話を受けていた。

「ああ、大丈夫だ。問題ない。まだ駒はあるのだ。ここから逆転も可能だよ。ふん、なにをバカな。失敗などありえん。吉報を待ちたまえ」

そう言つて受話器を置く竹原。

「くつ、馬鹿者どもが。今更後になど……」

幾分か憔悴したかのような竹原教頭。

大春達、金で雇つたチンピラ共も戻らず、自身に残された手駒は、捨て石のつもりだった二人。

成績はAクラスではあるが、一部の科目をのぞいては、下位に属する程度。

Aクラストップレベルの桜間姉妹が敗退した以上、彼らに期待など出来ない。

「だが、今となつては、あの二人に頼らざるおえんか。いまいますい。この私が、あんなクズ共を頼りにせねばならんとは……。だが、デモンストレーションで事故が起これば、システム自体の安全性も問える。まだだ。まだ終わらんよ……」

己を納得させようとぶつぶつつぶやく竹原。

その瞳には、狂気の色が宿っていた。

第四十問（後書き）

第四十問、いかがでしたでしょうか？
ちなみに琴代は慎吾を抱きしめて、キスの雨を降らせてるだけです。

ホントですよ？

そして、竹原教頭は未だ健在！
どうなりますか。

次回もよろしく願いますね♪

第四十一問（前書き）

第四十一問、更新しました♪
読んでくださるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第四十一問

「それでは、四回戦を始めたいと思います。出場者の方は、ステージ上へどうぞ」

マイクを持った、審判役の教師が明久達を促す。

試験召喚大会四回戦。

ここから大会は一般公開となり、会場には見学者用の座席が並べられている。

その座席は、満員御礼で、文月の特色である、試験召喚システムに対する関心の高さが伺えた。

「すごい人だね。これなら宣伝効果バツチりだよ」

「ああ。さらにこの試合はメンバー全員がFクラス。宣伝するにはもってこいだ」

周囲をながめて言葉を交わす雄二と明久。

そして、その相手側に立つのは、チャイナドレス姿の瑞希と美波。二人とも、チャイナの裾を押さえながら顔を赤くし、恥ずかしそうに身をよじる。

「二人とも、宣伝よろしくね」

明久がそちらを見て声を掛けると、二人の顔が、さらに赤く染まる。

「どうしたの？ 二人とも。顔、真っ赤だよ？」

明久が、不思議そうな顔で二人をのぞき込もうとすると、二人そろって顔を背けて半歩離れる。

その二人の様子に、明久は少し傷ついたような顔になり、雄二に振り向く。

「ねえ、雄二」

「なんだ？」

自分に向けられた明久の声に、雄二は見向きもせずには答える。

「僕、二人に何かしたかなあ」

少し涙目になって雄二に問いかける明久。

その言葉に、雄二は呆れたようになり、目だけを明久へ向けながら答える。

「したというより、されたな」

その答えに明久は驚愕の表情を浮かべた。

「えええっ?! な、何をっ?!」

「……つくづく救いようのないバカだな」

呆れたようにジト目で言う雄二。

「なんだと! バカ雄二!」

言うが早いかにらみ合う二人。

美波と瑞希はそのやりとりを見ている内に冷静さを取り戻している。

「なんだか、馬鹿馬鹿しくなってきたわ……」

「はい、この恥ずかしさも空しいものに思えてきます……」

女二人、雁首揃えてため息をつく。

つくづく前途多難な恋路である。

『えー、四人とも? そろそろ良いですか?』

マイクを片手に苦笑いする立ち会いの教師。

「あ、はい。すいません。それじゃあ」

向き直り対峙する四人。

「……試獣召喚! (サモン)……」

綺麗に揃った言霊に呼応して顕れる、四つの魔法陣。

それだけで、観客席からは小さく感嘆の声が挙がる。

この試合が初見の人間なら、普段見ることの出来ないこの光景だけでも十分に珍しいだろう。

そして、本命とも言うべき召喚獣達が顕現する。

召喚者をディフォルメしたその姿は、愛嬌たっぷりだ。

ふだんなら、その頭上に科目の点数が表示されるのだが、観客に見えやすいように大型のディスプレイに表示されるよう変更されていた。

その処理のラグのせいか、未だ点数は表示されていない。

『それでは、試験召喚大会四回戦……』

「ちよつと待つて下さい」

試合開始を宣言しようとした向井教諭を呼び止める雄二。

『はい？ 何か？』

突然のことに驚いている先生に構うことなくそちらへ近づく雄二。

「すいませんが、少しマイクをお借りします」

返事を待たずにマイクを奪うと、観客に向き直る。

『清涼祭にご来場のみなさまこんにちわ』

挨拶を始める雄二の後ろで、明久が女子二人に小さく声を掛け、整列する。

『ここにいる僕ら四人は、本格飲茶を提供する、二年Ｆクラスの中
華喫茶‘雲雀’で働いています。この子たちのように可愛らしい女
子も一所懸命に頑張っていますので、もしよろしければ、ご休憩な
ど、どうぞお気軽に、お立ち寄り下さい』

そして丁寧にお辞儀をする雄二。

それに合わせて明久たちも大きくお辞儀をした。

「……よろしくお願いします！……」

同時に召喚獣もぺこりとお辞儀。

その様に、観客の反応も上々だ。

「先生、マイクお返しします」

軽く頭を下げ、向井教諭にマイクを手渡す雄二。

先生も苦笑いしながらそれを受け取る。

『えー、以上二年ＦクラスのＣＭでした。ご観覧中のみなさまも、
お時間に余裕がございましたら、出場選手たちの働く、二年Ｆクラ
スに立ち寄ってみて下さい』

お祭りという事で大目に見てくれたのであろう。注意する事もな
く宣伝に協力までしてくれる向井教諭。

『さて、試合前のＣＭも終了しましたので、いよいよ試験召喚大会
の開始です！ 二年Ｆクラスの四人とも、良い試合を期待します』

その言葉を合図に、四人は再び対峙する。

「もう腕輪の件は気にしなくて良いんですね？」

「ああ、来島が言うにはプログラムの修正は終わったらいいからな」
瑞希の質問に雄二が答える。

それを聞いて、美波が笑う。

「なら、ウチ達が勝ちあがっても問題ないわけね？」

「そうなるね」

美波の言葉に、明久が答える。

「なら、勝たせて貰うわよ？ アキ、坂本」

自信たっぷりと言い放つ美波。

それに受けて立つは明久。

「僕たちもここまで来たんだ。折角だから勝たせて貰うよ？」

不敵に笑う明久。雄二も余裕の態度を崩さない。

そして、指差す大型ディスプレイ。

そこにはこう表示されていた。

波 6
古典 二年Fクラス 姫路瑞希 399 & amp; 島田美

「こ、古典！？ 四回戦って数学じゃあ……」

科目を勘違いしていたのか、慌てふためく美波。

「ああ、お前らに渡した対戦表な？ アレ、俺の手作りなんだわ」
してやったりと笑う雄二。

「だ、騙したのねっ!？」

「フツ、先を見据えた戦略と言って貰おう」

余裕な態度の雄二。

そんな彼らの点数もディスプレイに。

古典 二年Fクラス 坂本雄二 211 & amp; 二年F
クラス 吉井明久 24

「……………明久」

「こ、これでも点数上がったんだよっ!？」

「……………」

「……………」

対戦相手の美波に憐れみの視線を投げかけられ、瑞希に苦笑いされる明久。

それを振り払うように身構えると、召喚獣も木刀を構える。

「仕方ない、ここは個人戦でいこう。僕は美波の相手をするから、姫路さんの相手を雄二が頼む」

「待て待て待て、それは俺の負担が大きすぎるだろう!？」

「でも、僕じゃあ点数差がありすぎるよ? 何とか頭脳プレイで切り抜けてよ」

「無茶言ってるじゃねーっ!」 ぎゃいぎゃいとわめく男二人に美波がしびれを切らす。

「あーもう! ごちゃごちゃうるさい!!」

突剣を突き出しながら突進する美波の召喚獣。

一瞬、明久と雄二の召喚獣の目が輝いたかと思うと同時に飛び出し、美波の召喚獣に一撃ずつ入れて倒してしまう。

「あうっ?!」

「美波ちゃんっ!？」

一撃で倒され、消えゆく己の召喚獣に、がっくりと肩を落とす美波。

「美波ちゃんの仇は、私がとります!」

「瑞希く、ウチは死んでないわよ」

鼻息も荒く召喚獣を突進させる瑞希。

それを左右に散って避ける、明久と雄二の召喚獣。

「逃がしません!」

叫びとともに、雄二の召喚獣へ向かう、瑞希の召喚獣。

瑞希は点数の高い雄二の召喚獣を驚異と見なしたようだ。

ブーストアップ
「ッ！ 強化っ！！」

己の召喚獣へ向かう瑞希の召喚獣を見て、舌打ちする雄二。
躊躇することなく【黒金の腕輪】を使用する。

雄二の召喚獣が装備しているメリケンサックが光の粒子となって
分解され、盾と見間違えるほどの大きさの腕甲へと変化する。

その先端には、太く長い、凶悪そうな鋭い爪を三本ずつ備えている。

振り降ろされる両手持ちの大剣を腕甲で逸らし、爪で殴りかかる。
それを召喚獣の両手を持ち上げ、大剣の根元で受け止めさせる瑞
希。

激しい金属音が響いて、火花が散る。

と、瑞希に声がかかる。

「姫路さん、ゴメン！」

「えっ？」

聞こえた明久の声とともに、瑞希の召喚獣の膝裏に、木刀が叩き
込まれる。

バランスを崩して膝を着く瑞希の召喚獣。

そこを狙い、雄二が己の召喚獣に得物を振らせる！

「セイアッ！」

「あうっ?!」

かろうじて武器を持ち上げた瑞希の召喚獣は、その防御ごと大き
くはね飛ばされる。

何とか立ち上がり武器を構えようとすると、明久の召喚獣が木刀
を突き込んできた。

瑞希は、慌ててそれを避けさせようと操作するが、避けしきれず
に右肩へ攻撃を受ける。

食らいながらも反撃とばかりに大剣を横薙ぎに薙ぎ払う。

しかし、明久の召喚獣は軽く跳躍して剣の軌道の上に。

空しく振り切られた剣の向こうから、雄二の召喚獣が腕甲を振り
かざして突進してきた。

「あっ?!」

「トドメだ姫路!」

その瞬間を、彼女、姫路瑞希は目を瞑ることなく見ていた。普段なら、終わると思った瞬間、あきらめて顔を伏せてしまう彼女が、あきらめずにそれを見つめたのである。

「負けませんっ!」

鋭い声とともに胴を仰け反らせ、蹴りを放つ。

それは見事に雄二の召喚獣の腕を蹴り上げ、攻撃を逸らす。

そのまま胴をねじって右手の大剣を振り回した。

刃が腕甲に食い込み、その勢いのまま振り切った剣によって切断される。

「なんだとっ!」

「で、出来たっ!」

しかし、彼女の抵抗はそこまでだった。

無理な体勢で放った一撃は、しかし、次の行動につなげられず、明久の召喚獣に右手の甲を打たれた瑞希の召喚獣は武器を取り落とす。

慌てて起き上がろうとした召喚獣の首筋に、雄二の召喚獣が、残った腕甲の爪を突きつけ、彼女が投了した。

負けはしたものの、瑞希は得るものがあつたようで、すっきりとした笑顔だった。

反対に、勝利したはずの雄二は、どこか慄然とした顔をしていた。

「お疲れさま、みっちゃん。残念だったね」

ステージを降りた瑞希に声をかけるひばり。

瑞希は、少し苦笑いをして、負けちゃいました。と、答えた。

「でも……」

「でも？」

聞き返すひばりに笑顔を向ける瑞希。

「少しだけ、召喚獣の操作がわかった気がします」

そういう瑞希に、ひばりも笑顔を向ける。

「そっか……」

「ひばりちゃんはもう少し後ですか？」

瑞希のその質問に、顔を曇らせるひばり。

「うん、B、Dブロックはこの後なんだけど……前田君がまだ来てなくて……」

どうしよう？ と、困り顔でため息を吐くひばり。

そんな彼女に、瑞希も心配そうに顔を曇らせる。

あんなことがあった手前、行方のわからぬクラスメイトのことが、心配にならないわけがない。

と、ひばりのチームに呼び出しがかかった。

その声に慌てるひばり。

「ど、どどど、どうしようっ！？ 前田君まだ戻ってないよっ？！」

その様子に周りも焦りだす。

「と、とにかくステージにあがるのよっ！」

「う、うん」

美波に促されてステージに上がってしまうひばり。

と、そこでなにも考えていなかったことに気づく。

「つて?! この後、どーすれば良いのよっ!？」

思わず頭を抱えるひばり。

後ろを振り返ってみると、手を合わせて頭を下げる美波の姿。

「（美波ちゃんーんっ?!）」

小声で叫ぶという、奇手烈なテクニクを披露してしまうひばり。
その顔色は真っ青だ。

『おや、支倉さん、パートナーの方はどうしましたか?』

立ち会いの教師に訊ねられたひばりは、全身を跳ねさせて振り返る。

「あ、あああ、あのっ！　少し遅れてるみたいでっ！　す、すぐに来ますからっ！」

『しかし……』

教師を何とか説得しようとするひばり。

だが、教師は渋い表情だ。

『やはり定刻にそろわない以上は……』

ひばり達の不戦敗を宣告しようとする教師。
しかし。

『ちよおおおーっつと、待ったあああーっつ！……！』

叫びと声と共に振ってくる黒い影。

ステージ上に轟音が響き、衝撃で砂煙が舞い上がる。

「ひゃあう？！」

真横で発生した衝撃波に、舞い踊る木の葉のごとく吹き飛ばされるひばり。

と、その首根っこを、太い腕で摘まれる。

そこには、太い眉と、男臭い四角い顎の少年、前田俊夫が立っていた。

「よお、支倉。遅れて済まん」

ぽかーんと口を開けていたひばりは、俊夫の言葉で我に返ると、彼を睨みつけた。

「もう！　前田君っ！　どこ行つてたのっ！！」

「ハハ、すこし野暮用でな」

摘み上げられたまま、怒りの声を上げるひばりに、笑いながら答える俊夫。

「笑い事じゃないよっ！　失格になるところだったんだよっ！　あと、早く降ろしてっ！」

「っつと、スマンスマン」

言いながらひばりを降ろす俊夫。

着地してからも、ひばりのふくれっ面は直らない。

『……そろそろよろしいですか？』

「あ……はい！ スイマセン」

突然教師に声をかけられ、慌てて居住まいを正すひばり。

一方の俊夫は、悪びれた風もない。

『よろしいようですね？ では、選手も揃ったようですので、試験
召喚大会四回戦、第三試合を開始します！』

教師の宣言に従い、四人の声が唱和する。

「……試験召喚！！（サモン）」「……」

ドアをノックする音が部屋に響く。

「……誰だね？」

肩を僅かに震わせてから答える竹原教頭。

それを受けてドアが開かれ、文月学園の制服姿の男が入室してくる。

「ご機嫌麗しく、竹原教頭先生？」

「……君かね」

黒髪をオールバックにし、丸眼鏡の向こうに見える糸目からは感情が読みとれない。

「うまくいってないみたいですね？ 手伝いましょうか？」

そう言つて、男は口の端を上げて笑った。

第四十一問（後書き）

第四十一問、いかがでしたでしょうか？

教頭のもとに表れた謎の生徒。

その目的とは？

次回もよろしく願います♪

第四十二問（前書き）

第四十二問、更新しました。

普段より若干短めですが、楽しんで読んでいただければ幸いです

♪

第四十二問

屋上。

試験召喚大会会場を見下ろせるそこに二人の男女。

視線の先には、ひばりと俊夫が召喚獣を操作して戦う姿があった。と、屋上への入り口となる扉が開き、一人の男が表れる。

オールバックにした黒髪に、丸眼鏡。

レンズの向こうの糸目は、狩人のごとき輝きを称えている。

彼に気づいた女、桜間狭夜は笑みを浮かべながらそちらを向いた。

「あら？ 竹原とお話は、もう良いのかしら？ 流真人くん？」

言われて真人は、眼鏡のブリッジを押さえて位置を直すと、肩を竦めた。

「断られましたよ……。まあ、腕輪だけは渡してきましたがね」

「あらあら。あなたに炊きつけられたのに懲りちゃったのかしら？

まあ、企みがうまくいってない辺り、爬虫類の眼力なんて、そんなものよね」

狭夜の言葉に、真人の目の鋭さが増す。

「……人間ごときに後れをとるようなケダモノに言われたくありませんね」

お返しとばかりに言い放った真人の言葉に、今度は、狭夜のまなじりがつり上がった。

「なんですって？ 言うじゃない、トカゲの親玉が！」

「……狐風情が！」

狭夜の背後に九つの金色の気配が立ち上がり、真人の周囲に黒雲が沸き出す。

と。

二人の間に雪の結晶が舞う。

次の瞬間。

轟。

と、肌を切り裂かんばかりの冷気を纏った烈風が疾しり、金色の気配と黒雲を吹き散らす。

「……もめ事はそこまでだ」

文月の男子の制服を着た、白髪の少年が、感情を感じさせぬ、しかし、言いしれぬ迫力を伴った言葉を放つ。

それだけで、真人と狭夜は身動きが取れなくなった。

顔だけで二人を見つめ、蒼い瞳の視線に乗った、絶対零度の気配に、ふたりは、喉を鳴らすことも出来ない。

「……この世界の‘世界律’は強い。我々あやかしのモノ共が棲んでいた闇の領域も、もはや僅かだ。この、文月の地のような、優れた霊地でもなければ、力を振るうことも叶わぬ。だからこそ、ここに楔を打ち、‘律’を壊さねばならん。あやかしのモノの棲み家を取り戻すために」

そう言って、グラウンドに視線を戻す。

「……試験召喚システム。我らが力を得るためにも……」

一年生の教室が存在する二階を、チャイナドレス姿の一行が練り歩く。

ツインテールにピンクのチャイナの女の子に、赤チャイナとシニヨンの美少女。

そして、オレンジのチャイナに金髪の少女の三人組だ。

「中華喫茶‘雲雀’！ 三階旧校舎奥、二年Fクラスで開店中だよん」 みんな寄ってつてねい」

金髪オレンジチャイナの少女、クリスティーナ「ウエストロードが、大きな声で愛想を振りまく。

手を振り、ウインクして、投げキッスを飛ばす。

「お、そこのお二人さん、お似合いのカップルだねい、飲茶のおいしい中華喫茶で休んでいかないかい？」

「ですっ！、甘いゴマ団子がおいしいですよっ！、」

クリスに追従し、雲雀のイラストカードを持った、ツインテピンクチャイナの葉月が楽しそうに宣伝する。

『へえ』

『お嬢ちゃんも手伝ってるの？』

幼い葉月の姿に警戒を解いたカップルが、話しかける。

「ハイですっ！、お姉ちゃん達を、お手伝いしてるですよっ！、」

元気に答える葉月に、女性が相好を崩す。

『そうなの。偉いわねえ』

女性に笑いかけられ、葉月の笑顔も一層輝く。

「中華喫茶、雲雀、を、よろしくお願いしまーす」

二人の後ろで、『中華喫茶、雲雀』と描かれたプラカードを掲げる、赤チャイナシニヨン少女……の秀吉も輝かんばかりの笑顔で宣伝する。

「おお、そこ行く、ないすみどるとおねーさんもどうかなん？

中華喫茶。ウーロン茶も本格的な茶葉から出してるよん、」

クリスは次のターゲットを見定めると、フレンドリーに話しかける。

すると、柔らかそうなクリーム色の髪の女性が隣の男性に話しかける。

「亮介さん、ここかしら？」

「他に無えようなことも言っただけだからなあ。ここのはずだ。

屋号も「雲雀」、つつてたからなあ。しっかし、「チャイナなんざ着ねえ！ 味で勝負だ！」なんて息巻いてやがったのにどうゆうことだ？ 亮の奴」

意志の強そうな、野太い眉をしかめて呟く亮介。

そのやり取りを聞いていたクリスの眉が跳ねる。

「亮？ すがっちの事かなん？ お二人は……」

少しだけ訝しむように訊ねようとするクリスに、女性が微笑む。

「まあ、亮のお友達かしら。初めまして、亮の母の春香です」
そう言って頭を下げる春香に、クリスが慌てる。

「あ、どうも、ご丁寧ありがとうございます。すがっ……亮さんのクラスメイトのクリステイナーナ―ウエストロードです」

思わず、素で返してしまう。

「島田葉月ですっ！」

「木下秀吉と申します、須川君のご母堂」

クリスに続いて葉月が元気よく答え、秀吉が丁寧に頭を下げる。

「まあまあ。あなた見て下さい？ 最近の高校生はひばりちゃんみたいに小さい子が多いのかしら？ それに、男の子みたい名前の女の子ねえ」

おっとり上品に驚く春香。

「……おおっ、すがっちのかーちゃん、上品だねい。鳶が鷹を産むならぬ、鷹が鳶を産んでるよん」

「お姉さん、ひばりちゃんを知ってるですか？」

「ワシは男なんじゃがのう……」

三者三様の反応を見せるクリス、葉月、秀吉。

「亮を知ってんなら話が早えーや。店がどの辺りにあんのか教えて貰えねえかね？」

息子の知り合いと分かって相好を崩す亮介。

その様子に、クリスも調子を取り戻す。

「おおっ、それならあちし達が案内するよん、そろそろ戻るつもりだったからねい」

イタズラっぽく笑いながらウインク一つ。

「おお、頼むぜ金髪ねーちゃん」

はっはっはと笑いながら頷く亮介に、クリスも双丘を強調するよっに胸を張る。

「うむん、任せたまへ」

明るく調子を合わせてくるクリスに、亮介も機嫌を良くする。

「おうおう、この金髪さんは、随分とノリが良いじゃねーか。後で一杯付き合わねーか？」

「おおぅ」 たまにはオジサマの相手も良いよん」 んだば、ちこつと……」

上機嫌の亮介に調子を合わせるクリス。

それを聞いて亮介の鼻の下が伸びる。

「……亮介さん？」

絶対零度の風が、亮介の背に吹き付けた。

「は、春香……さん？ こ、これはその……」

「……すこし、お話をしましょうか？」

朗らかに笑っているはずの顔から感じる威圧感に、秀吉と葉月は抱き合った。

と、その向こうで、猫のようにつま先立ちで背を丸めながら離脱しようとするクリス。

「……その金髪のあなた」

足が止まる。

「あなたもこちらへいらつしゃい？」

その声に、錆び付いたおもちゃのように首を巡らすクリス。

「い、いやー、あちしは遠慮して……」

『イラッシャイ？』

有無を言わさぬ言霊の魔力。

その迫力に、クリスは壊れたように首を縦に振り続けることしかできなかった。

「……ただいまーだよん……」

あれからクリスは、亮介と二人で廊下に正座させられ、春香のお

説教を受けた。

途中で秀吉が取りなしてくれたおかげで、何とか短時間で済んだが、淡々と静かに行われた春香のお説教は、静かな迫力に満ち満ちており、精神的な疲労感が大きかった。

「お帰り〜って、どうしたの？ クリス」

すでに四回戦を終えて教室に戻ってきていたひばりは、やつれた様子のクリスに声を上げる。

「おきゃ〜くさ〜ん、つれ〜てきたよ〜ん」

這々の体でバックヤードへ向かうクリス。

それを見送ったひばりは、クリスに続いて入ってきた人影に驚いた。

「りよ、亮介さんに春香さん!？」

「あらあらあらあら、ひばりちゃん」

ぱたぱたと小走りにひばりの元へ行く春香。

にこやかに近づくと、そのまま軽く抱きしめる。

「わわっ?! は、春香さん?!」

琴代の全力のハグと違い、優しく包み込むような春香の抱擁を受けるひばり。

「ひばりちゃん、お加減はどうかしら？ 無理はしてない？」

抱きしめたまま訊ねる春香の優しさに、ひばりは、胸の奥にくるモノがあった。

「あ、はい。大丈夫です。みんなに迷惑かけないように、気をつけてます」

そう笑いながら言うひばり。

そんな彼女から体を離して、顔をのぞき込む春香。

それに対して、きよとなるひばり。思わず、

「な、なんでしょう？」

と、聞いてしまう。

すると、春香は僅かに表情を曇らせながら口を開いた。

「つらく……無い……？」

「いえ？ 全然」

笑顔で即答だった。

しかし、春香の目には、張り付けられた笑顔の向こうに、彼女の本当の表情がかい間見えたようだ。

もう一度、優しく抱きしめる。

「……無茶しちゃあ、だめよ？ ひばりちゃん」

「は、はい……」

そんな春香に、ひばりは呆氣にとられるばかりだ。

「げえっ?! 親父にお袋、来たのかよ!?!」

教室内の騒ぎに、簡易厨房のしきりの向こうから顔を出した亮は、あからさまにイヤそうに悲鳴を上げた。

「たりめーだ。半端な仕事してねえか、きっちりチェックしてやるから、覚悟しろい」

しかめっ面で息子をにらむ亮介。

それを受けて、亮の顔がげっそりとなる。

と、春香が顔を上げて軽く笑いかけた。

「ふふふ。息子が厨房で頑張るところを見るんだって、朝から息巻いていたのよ？ この人」

そう言ってコロコロと笑う春香に亮介が振り向き、情けなく眉を下げる。

「は、春香あゝ」

情けなく上がった声に、クラス中から軽い笑いが漏れ、亮は頭を手を当てて顔をしかめた。

「あのなあ……」

「まあまあ、亮君。練習の成果、見て貰えば良いじゃない。さ、亮介さん、春香さん、お席へご案内しますね？」

これまた、しかめっ面で声を上げようとした亮を遮るひばり。

彼に笑いかけてから、亮の両親を席へと案内する。

亮は、ひばりの笑顔に軽く赤面したが、すぐに平手で自身の頬を打って気合いを入れ直した。

「よしっ！」

力強くつぶやきながら厨房へ戻る亮。

その背中を見て、亮介、春香の夫婦は優しく微笑んだ。

第四十二問（後書き）

第四十二問、いかがでしたでしょうか？
次回もよろしく願いしますね♪

第四十三問（前書き）

第四十三問、更新しました♪
読んでくださる方に楽しんでいただければ幸いです♪

第四十三問

テーブルに座る男女。

その目の前には、紙コップと紙皿が一つずつ。

コップには烏龍茶が注がれており、皿には三つのゴマ団子が載せられている。

男がゆっくり箸をとり、女がコップを手に取る。

無造作にゴマ団子が持ち上げられ、烏龍茶が注がれたコップが唇に近づく。

周囲の視線が、一様にその様を注視しており、身動き一つできない。

誰かののどが鳴り、汗が顎を伝う。

男がゴマ団子を口内へ放り込み、女がコップに口をつける。

固唾をのんで見守る一同の前で、男はゴマ団子を咥しゃくし、女が烏龍茶をすすった。

沈黙が場を支配し、少年少女が祈るようにみつめる。

そして、男……須川亮介が、女……須川春香にアイコンタクト。

亮介は、春香の笑顔を確認し、口を開いた。

「……ま、良いだろ。ギリギリ合格ってところだな」

その言葉に喝采が上がり、一人の少年、須川亮が安堵した様子で嘆息した。

そんな彼に近づいて、声をかける女の子が一人。

「亮君良かったね、お墨付き出たよ」

「ああ、なんとかな。これも支倉のおかげ……ぐほああっ?!」

笑顔で亮を見上げてきた女の子、支倉ひばりに、苦笑いを浮かべて答えながらそちらをみた亮は、あまりの破壊力に意識を刈り取られそうになった。

まだ幼さを感じさせる、大きな黒い瞳で見上げながら笑顔を向けてくるひばり。

そして、その肢体を包む白いチャイナからは、自己主張の激しい二つの果実が亮の視界に飛び込んできていた。

小さく、コンパクトな身体に似合わないそのボリウムは、彼女の愛らしさとのギャップが相乗効果をもたらし、亮の心理を揺さぶった。

「ど、どうしたの？ 亮君？」

心配そうに見上げながらそばに寄ってくるひばり。

その双丘が、軽く揺れて主張してくる。

「い、いやなんでもない……」

言いながら目をそらす亮。

そんな彼に、不思議そうになるひばり。

「なにやってんだ？ あいつぁ」

「あらあら」

そんな二人の様子に、亮介は呆れたような声を出し、春香が微笑んだ。

「ま、65点つてところだな。ギリギリ人様に出しても良いって所だ」

「……そりゃどーも」

亮を呼びつけた亮介に点数を告げられ、憮然とする亮。

「まあ、もっと精進しろってこった」

そういつて笑う亮介に、亮は眉を寄せる。

「……亮君」

そんな二人を心配そうに見つめるひばり、そこへ春香がそっと近寄り、彼女に耳打ちする。

「（大丈夫よ、ひばりちゃん。あれが亮介さんなりの褒め方なのよ）」

「（でも、亮君が……）」

「（ふふ、ひばりちゃんは優しいわね？　大丈夫。亮もちゃんと分かっているわ）」

そして、父子二人へ視線を転ずると、二人はメンチを切りあっていた。

「（……たぶん）」

「（あ、あはは……）」

メンチを切り合う二人を見て、春香が自信無さげになるのを聞いたひばりは、苦笑いするしかなかった。

「よし、明久、支倉、前田、そろそろ準決勝だ。会場に向かうぞ」
四回戦が終わって一時間も経ったころ、雄二にそう声をかけられて、ひばりは顔を上げた。

「もうそんな時間？　大丈夫かな……？」
そう言いつつ心配そうに教室内を見回す。

四回戦での宣伝や、クリスらが校内を回った結果、客足を取り戻すどころか、午前中に倍するほどのお客がつかけていた。

「大丈夫だろ。姫路や、島田だけではなく、来島まで手伝ってくれてるしな」

言いながらひばりの横にやってきた雄二は、そのままひばりの頭に手を置く。

「それでも人手が追いついてないよ……後、あたしの頭は、坂本君の手を置く場所じゃないんだけど？」

下からにらみつけるひばり。

しかし、雄二は「そんなの関係ねえ」とばかりに、ひばりの頭を撫で始める。

「気にするな。客なんざ待たせときゃ良いんだよ。最終的には、それぞれが判断して列から抜けるさ。……やっぱ支倉の頭は撫でるに限るな」

「あうう、撫でないでよ坂本君……髪が乱れる」

大勢のお客の目があるせいか、ツツコミを入れられずに撫でられ続けるひばり。

その様子にお客もクラスメイトも老若男女を問わずに和んでいた。
「なにやってるのさ、雄二。早く会場入りするよ」

見かねて助け船を出した明久に、雄二は頷いてから、ひばりの頭を軽く二度ほど叩いてから離れた。

やっと解放され、安堵の息を吐くひばり。

「はあ、やっと解放されたよ……」

「ふふ、がんばって下さいね？ ひばりちゃん」

そんな彼女に近づいて声をかけるのは、幼なじみの姫路瑞希だ。

「うん！がんばってくるよ」

そう言って笑顔で教室を飛び出していくひばり。

その様子を、亮の母、春香が心配そうに見ていた。

会場へ向かう道すがら準決勝のことを話し合う四人。

「でさ、雄二。霧島さん達への対抗手段はなんか考えてあるの？」

明久がそう訊ねると雄二は真剣な顔つきになる。

「策は講じてある。後は試合が始まってのお楽しみだ」

そう言って笑みを浮かべる雄二。

その顔に邪悪な意図を感じたひばりは眉を寄せる。

「またズルい作戦？ そんなことばかりしていると、罰が当たるよ？」

そう言って軽く注意するが、雄二は不思議そうな顔になる。

「なに言ってるんだ？ 支倉。『卑怯、汚いは敗者の戯れ言』 勝

てば官軍』と言っじゃないか」

その言葉に顔をしかめるひばり。

明久も軽く苦笑いしている。

「ま、『策士、策に溺れる』とならなきゃ良いがな」

そこで口を挟むのは、全身を筋肉の鎧で覆われた少年、前田俊夫だ。彼の言に、雄二がムツとなる。

「俺の策は完璧だ」

「雄二、それ、失敗するフラグだよ」

「ムゲツ?!」

明久にツッコまれて言葉に詰まる雄二。

それを見たひばりは、右手を額に当てながらため息を吐く。

「……もう、たまには正面からぶつかってみれば良いのに」

「……まだ点数差が有りすぎる。勝負にならねえよ」

ひばりのつぶやきに、ふて腐れたように返事をする雄二。

その様子に明久と俊夫は顔を見合わせて肩をすくめた。

「おい、坂本」

「なんだ?」

俊夫に声をかけられ、不機嫌そうに应じる。

それを見て俊夫はため息を吐いた。

「子供か? おまえは」

「なんだと?」

俊夫の言葉に、彼をにらみつける雄二。

「おまえが策を巡らすのは、霧島から逃げるためか? 違うだろ?」

さらに続いた言葉に顔を歪める。

それを見て、今度は明久が口を開いた。

「雄二。雄二は学力がすべてじゃないって証明したいんだよね?

だったら、点数差を理由にしたら、いけないんじゃないかな?」

「……ち、明久のくせに生意気なこと言ってるな。おら、行くぞ」

雄二は憮然としながらそう言うと、歩みを早めていった。

それを見たひばりが柳眉を逆立てる。

「ちよつと、坂本君っ?! そんな言い方って……」

声を上げるひばりの前に軽く手がかざされ、制される。

手をかざした明久は、ひばりにウインクして見せてから、雄二を

追いかけた。

「待てよバカ雄二！ 一人でさっさと行くな！」

「うるさいバカ久！ タラタラしてつと置いてくぞつ！」
文句を言い合いながら歩いていく二人。

その背中を、ひばりは頬を赤らめて見送ってしまった。

「支倉、俺たちも急ごう」

「ふえっ?! あ、う、うん」

突然俊夫に声をかけられ、飛び跳ねんばかりに驚くひばり。

そして、頬を両手で挟むように叩いて気を取り直すと、明久達を追いつめた。

「それでは、試験召喚大会準決勝を開始します！ 出場選手は舞台へどうぞっ！」

立ち会いの教師のコールを受け、四人の男女が舞台へと上がる。
その名前と画像が、大型ディスプレイに順番に映されていった。

二年Aクラス 霧島翔子

二年Aクラス 木下優子

二年Fクラス 坂本雄二

二年Fクラス 吉井明久

四人が向かい合い、その姿を現すと歓声が上がった。

「って。待て待て待て待て？ 木下がメイド服なのは、クラスの出し物がメイド喫茶だから、百歩譲って良しとしよう。だが翔子。なんでお前はチャイナ服なんだ？」

そう、メイド服姿で苦笑いを浮かべる優子の横に立つ翔子は、康太が用意した、あのチャイナドレスを着ていた。

沈痛な面もちで頭を押さえる雄二。

しかし、翔子は大胆なスリットも気にならないようで、小首を傾げた。

「……似合う？」

そう感想を求める彼女に雄二がため息を吐く。

「はあ、似合う似合わないじゃなくてだな……って！ なにやってんだ翔子っ！？」

顔を上げて彼女を見た雄二は、思わず叫んでしまう。

なぜなら、翔子がチャイナを脱ぎ始めたからだ。

「……雄二が似合わないというなら脱ぐ」

「代表っ?! 早まらないでっ!?!」

これには優子も慌てて止めに入るが、翔子の手は止まらない。

「ま、待て翔子っ！ 似合うっ！ とっても似合ってるぞっ！」

思わず叫んだ雄二の声に、翔子の手が止まった。

「……本当？」

またも小首を傾げて雄二に訊ねる。

「あ、ああ。本当だとも！」

手が止まったことに安堵しつつ、言葉を選びながら答える雄二。

「……誘惑される？」

次に飛び出た言葉に雄二の顔が歪んだ。

「そ、それは……」

言い淀む雄二を見つめる翔子。

その隣から、優子がアイコンタクトで頷くよう要請しているが、雄二は煮えきらない。

「い、いや似合ってはいるし、可愛いとは思うが……はっ?!」

思い悩むようにして口をついた言葉に雄二が赤くなる。

それを聞いた翔子は後光が指したかのようになり、頬に両手を当てながら小さく笑みを浮かべた。

「……雄二、嬉しい」

「い、いや、あの……い、今は……なんというか……」

顔に帯びた熱の増加を感じながら雄二はしどろもどろとなる。
と、その様子を見つめる二対の生暖かい視線が。

「ねえ、聞いた？ 吉井君」

「聞きましたとも、木下さん」

いつの間にやら、雄二と翔子から離れた場所でニヤニヤ笑う明久と優子。

「てめ！ 明久っ！ それに木下姉もその視線をやめやがれっ！」
二人の様子にいきり立つ雄二。

しかし、明久と優子は生暖かい目つきをやめようとはしない。

「くそっ！ 大体お前ら、いつの間に仲良くなりやがったんだ？」
悔しそうに言い放つ雄二を優子が鼻で笑う。

「ひばりさんを通じて、瑞希さんも交えて、よく一緒に勉強してるもの。きちんと努力して結果を出しているなら評価だってするわよ」
「話してみれば、そんなにイヤな人じゃなかったしね」
便乗して明久も笑いながら言う。

「くっ、明久の成績が上がってると思ったら、そういうカラクリか……」

うめく雄二の手が取られる。

「ハッ？！ 翔子、いつのまにっ？！」

「……雄二。私は一緒に如月グランドパークに行きたい」
すり寄るように上目遣いで訴える翔子。

「ぐっ、し、しかし……」

だが雄二はなおも抵抗を続ける。
それを見て翔子の表情が曇った。

「……ダメ？」

「ダ、ダメに……ッ？！」

そのとき雄二は、己に突き刺さる無数の視線に気づいた。
そう、ここは試験召喚大会の会場。

満員御礼の観客席から注がれる視線と、固唾を飲んで成り行きを見守る会場全体の空気を感じて、断れる者がいようか？

「む、ぐぐぐ……だ……」

「……雄二……」

意を決して断ろうとした雄二の視界に、翔子の顔が飛び込んでくる。

その瞳が……、悲しげに揺れていた。

それが溢れるのを見た瞬間。

雄二は全身から力が抜けるのを感じた。

「……………わかった。行こう、行ってやろうじゃねーかつ！
ちくしょーっ！」

血涙流しながら雄二が声を張り上げると同時に、会場すべてを揺るがす大歓声が上がる。

「……雄二っ！」

嬉しそうに雄二に抱きつく翔子。

雄二はすでにされるがままだ。

そんな彼らに、明久と優子が近づいていく。

「良かったね、霧島さん」

「……ありがとう。吉井は良い人」

にこやかに祝福する明久。

優子も嬉しそうだ。

「それで、大会なんだけど……僕らが優勝したら、チケットは進呈するから、ここは……ね？」

そう言って手を合わせてくる明久に、翔子は少し考えると優子を見る。

その視線の意味に気づいた優子は、軽く苦笑いしてうなずいた。

「いいですよ、代表がそれで良いなら」

「……優子、良いの？」

「ええ」

改めて力強く頷いた優子を見た翔子は、立ち会いの教師を見ると、

口を開いた。

「……私たちの負けで良い」

その言葉に、流れに着いていけなかった教師は我に返った。

『え、え〜っと。なにやら、いろいろ納得がいきませんが、坂本、吉井ペアの不戦勝？』という事で良いでしょうか？』

いまいち不安げな様子の教師に対し、観客席からは、割れんばかりの拍手が鳴り響いた。

『……ではそう言うことで、坂本、吉井ペアの勝利です！』

わりとやけくそ気味にコールする教師。

だが、観客からの不満は、一切無かった。

「ふう、何とかなつて良かったよ」

「明久てめえっ！ 覚えてろよっ！」

声を上げながらやってくる雄二に肩をすくめる明久。

「まあまあ、決勝に進めたんだから良いじゃない」

そう言いながら笑う彼を、忌々しそうに見る雄二。

「チッ。まあ、俺の作戦もうまく行つてなかったみたいだからな」

「そういえば、どんな作戦だったの？」

思い出したかのように訊ねる明久。

それに対し、雄二は渋面を作りながら答える。

「……秀吉に、木下姉になりすましてもらい、虚を突いてお前の代わりにムツツリー二に参戦してもらはずだったんだが、本人が来ている以上、秀吉はしくじったんだろうな」

「ふうん。あ、ひばり達だ。次の試合も見ておこうよ」

「そうだな……相手はつと、こいつは……」

明久に頷きながらトーナメント表を確認した雄二の顔が強ばった。そして、明久が声を上げる。

「あ、あいつらはっ！」

その視線の先、ひばりと俊夫の前に立っているのは、ソフトモヒカンと坊主頭の三年生。

常村勇作と夏川俊平の二人だった。

第四十三問（後書き）

第四十三問、いかがでしたでしょうか？

明久と優子のやりとりに違和感覚えるかもしれませんが、ひばり効果と言つことで、ひとつ、よろしく願います♪

第四十四問（前書き）

第四十四問、更新しました♪
読んでくださる方に楽しんでいただければ幸いです♪

第四十四問

戦舞台にて、対峙する四人。
すなわち、

二年Fクラス 支倉ひばり

二年Fクラス 前田俊夫

三年Aクラス 常村勇作

三年Aクラス 夏川俊平

四人の戦人が並び立ち、戦舞の始まる時を待つ。
と、ひばりが口を開いた。

「……先輩方、なぜ、あんなデタラメな誹謗中傷を吹聴したりしたんですか？」

強い視線と共に問う。

彼女の隣に立つ俊夫は、目を閉じ、腕を組んだまま微動だにしない。
い。

鋭く切り込まれたであろう、少女の言葉にも、常村、夏川、共に口をつぐみ、目を背けたままだ。

舞台上の空気をよそに、準決勝に勝ち残った四人の紹介が続く。

その間、四人がともに無言。

と、固いモノがこすれる音が微かに響く。

少女の怒気を表す、小さな小さな音。

その音に、俊夫が眼を開き、常村、夏川の二人が相手に向き直る。

「……今更なにも言うつもりは無え」

「……それでも俺たちに口を割らせたきゃ、勝ってみやがれ」

その言葉に、小さな少女の顔が険しく歪む。

「なら、やってアゲ?!」

拳がった声にあわせて被さるような音が少女の頭上に降ってきた。

「○▲□×●×　つつ?!?!」

口を押さえて声にならない声を上げるひばり。

「ひやにひゆるひよっ!　にやえひやひゅんっ?!」

赤さを増した舌ベロを出しながら、涙目で抗議するひばり。

だが、しかし、大きな少年は、イタズラっぽい顔で笑い声をあげた。

「はっはっはっはあ、なに言ってるか、わからないぞ?　支倉」

「みやえひやくんのへいでひよっ!　ひた、はんだひやはいつ!」

涙目のままぶんすか怒るひばり。

対して大きな少年、前田俊夫は笑うばかり。

と、太い紐が切れるような音がしたかと思うと、宙を舞った、小さな少女の手が鋭く降り抜かれる。

スパアァンツ!!

小気味の良い音と共に繰り出された【小烏丸】の一撃に、少年の大きな体躯が一瞬、揺らいた。

「つとお、なかなかの威力だな、こいつは」

「もうっ!　笑い事じゃないでしょっ!　舌嚙んじやったじゃないっ!」

柳眉を逆立て、トレードマークの馬の尻尾よ立て!　とばかりに俊夫に噛みつくひばり。

「はっはっは。すまんすまん。随分といきり立っていたみたいだからな。落ち着けて、話さ」

そう言って、男臭い顔に、優しい笑みを浮かべる俊夫。

そのまま、鳥の羽毛を載せるかのように、大きな手のひらで、ひばりの頭を二度叩く。

「あ……。う、うん」

そこから伝わる優しさに、ひばりは、猫の子のように目を細めた。
「うん。ありがと、前田君。落ち着いたよ」

「そいつは良かった。本来なら吉井や坂本の役目なんだが、あいつ等が居無いからな」

言いつつ笑い合うひばりと俊夫。

前を向き、ひばりが持ち上げた拳に、俊夫が拳を合わせる。

「勝つぞ、支倉」

「オッケー、前田君」

お互いを見ることもなく交わされる言葉。

それと同時に身構える二人。

『それではっ！ 試験召喚大会、準決勝第二試合を開始します！

両チームとも、お願いしますっ！』

マイクを持った教師のコールがかかり、四人の口から、異口同音の言霊が紡がれる！

「……試験召喚^{サモン}！」「……」

それに応えるように顕れる四つの法陣。

その中央に、彼らの使役する四匹の獣が顕現する。

貫頭衣に腰巻き姿で、倭刀を装備したひばりの召喚獣と手甲と脚甲を装備した、俊夫の召喚獣が並んで立つ。

それに相對するは、質の良さそうな板金鎧に、長剣を装備した、常村と夏川の召喚獣だ。

そして大型ディスプレイに、四人の点数が表示される。

二年Fクラス 支倉ひばり 138 & 二年Fクラス 前田俊夫 103

VS

三年Aクラス 常村勇作 199 & 夏川俊平 208

「やっぱり点数高いね」

三年生二人と対峙しても臆することなく見据えるひばり。そんな彼女の言葉にうなづく俊夫。

「ああ、だが三回戦の時よりはマシか」

ひばりも俊夫の言葉にうなずいてみせる。

そして、二人が同時に笑みを浮かべた瞬間、戦いの幕が上がった。

「ツネっ！ チビの召喚獣は任せろっ！」

「応よっ！」

「あたし、ちっちゃくないよっ?!」

常村と夏川のやりとりに思わずツツコミを入れるひばり。

しかし、四体の召喚獣は止まらない。

俊夫の召喚獣に突進する常村の召喚獣。

勢いのまま振り下ろされた長剣の腹に、手甲を纏った手が吸い付く。

くるんと回った腕に合わせて一歩踏み込みながら腰が回転し、折り畳んだ腕ごと肩を相手に密着させる俊夫の召喚獣。

震脚の重音が戦舞台すら鳴動させ、衝撃が常村の召喚獣を貫く。

硬質の入れ物が、内側から爆ぜる音が響き、召喚獣の鎧が砕け散る。

「は？」

思わぬ事態に間の抜けた声が漏れた。

見れば、点数が129点まで下がっていた。

70点もの大打撃である。

「よ、鎧の上からかよっ?!」

己の召喚獣が血反吐を吐く様を見ながら、常村がうめく。

板金の鎧は斬り裂いたり、突いたりする攻撃に強いが、大きな衝撃を伴う攻撃には効果が薄い。

もちろん、生半可な衝撃程度ならはじき返すくらいは不可能ではないが、相手が悪かった。

「点数しか見ていないからそうなる。相応の技量がありゃあ、この程度は朝飯前だ」

獰猛な笑みを浮かべて俊夫がうそぶく。

それは確かに一面の事実ではあるが、これだけのセンスと技術を含わせ持つのは彼くらいであろう。

また、召喚大会では、桜間姉妹を始めとする強敵難敵と戦い続けた結果、通常の数倍は濃い戦闘をくぐり抜けており、その過程で得た経験は、本来あり得ないほどの速度で彼の操作技術を成長させた。そして、同じことがひばりにも言えた。

「ちつくしょう！？ なんなんだよっ！ この召喚獣？！」

悲鳴を上げる夏川。

点数ではひばりの召喚獣を上回っており、パワー、スピードともに彼の召喚獣が勝っているはずだった。

得物の倭刀を鞘走らせながら、青い召喚獣が疾しる。

踏み込みの瞬間などは、目で追えるような速さではなく、まさに青い閃光。

長いポニーテールをなびかせ、攻撃を当てた瞬間に離脱する。

その一撃ごとに、点数が修正される。

193、191、186、184、180、179、175、170、168、165……。

みるみる減っていく夏川の召喚獣の点数。

その姿を捉えることも出来ず、まるで数体の召喚獣に切りつけられているかのように満身創痍になっていく。

一撃の威力が高くないひばりの召喚獣は、始めのうちこそ、高品質の鎧に手を焼いたが、僅かでもダメージが入ることに気づいたひばりは、すぐさまヒット&アウェイに切り替えた。

その効果はてきめんで、夏川は焦りのあまり、剣をやたらに振り回すだけになっていた。

元々ひばりの召喚獣は、パワーや防御力が低く、スピードと反応速度に特化されている。

あの、桜間姉妹との対決でも、被弾はごく僅かなほどだ。

その上、ひばり自身の操作技量が向上しているため、しっかり集中していれば、被弾はまれだ。

現に、夏川の召喚獣の攻撃は、カスリもなかった。

「ちくしょう、これじゃ俺ら良いとこ無しだぜ」

「くそ、やってらんねーぜ」

常村も夏川も、すでにやる気が失せていた。

受験から逃げるために引き受けた依頼だったが、久しぶりに会えた金髪の少女の姿に、戸惑った。

そして、彼女に子細を話すうちに、自分達が、先輩としてとてもみつともないことをしていることに気づかされたのだ。

「……やめるか」

「そうだな……先生、投ry」

『こらあつ！　なに諦めようとしてんのよっ！』

諦めきつて投了しようとした夏川の声を遮った、よく通る声。

「ク、クリス？」

「なんだ？」

突然のことにひばりと俊夫も呆氣にとられた。

声につられて振り返っている三年生たちの向こうに小さく見える姿。

オレンジのチャイナドレス姿で腕を組んで仁王立ちになっている金髪の少女、クリスティーナ・ウエストロード。

『男なら、最後まで戦い抜きなさいっ！！　ツネっ！　ナツっ！
根性見せろっっ！！　常夏コンビっっ！！』

「ッ！」

会場内に響きわたった声に、息を呑む常村と夏川。

「と、こ……なつ？」

首を傾げる俊夫。

そこでひばりが、あ！　となり、大型ディスプレイを見やる。

「前田君ほら、名字だよ。常村の‘常’と夏川の‘夏’を一字ずつとって……」

「おお！　なるほど。うまいこと繋がるもんだ」

ひばりの説明に、一つ手を打つ俊夫。

そこへ、クリスから声がかかる。

『ひばりん！　とっしー！　悪いけど、おねーさんは今回、この二人の味方だよんっ！』　ツネ！　ナツ！　天使の応援受けてんだから、きばんなさいよっ！』

「「うおっしゃあーっ！」」

クリスの声援を受け、気合いの入った声を上げる常夏コンビ。

その表情からは、力強い精気を感じられた。

「来るぞ支倉！」

「うんっ！」

俊夫の声に、力強くうなづくひばり。

同時に二人の召喚獣も身構える。

そこへ突進する常村と夏川の召喚獣。

「姐さんが見てんだっ！　無様はさらせねえぞ？　ナツ！」

「応よっ！　おまえこそドジ踏むなよっ？　ツネ！」

「はっ、当然！」

明らかに先ほどまでよりテンションが上だ。

勢いに乗った夏川の召喚獣へ、ひばりの召喚獣が牽制の居合いを放つ。

その鋭い斬撃が夏川の召喚獣に吸い込まれ、血しぶきがあがる。
が。

勢いを止めずにそのまま長剣を投げつけた。

俊夫の召喚獣へ。

「前田君、あぶな……！」

「支倉！ よそ見をするなっ！」

「えっ？」

とつさに俊夫へ警告を発しようとしたひばりの注意がそれた瞬間。ひばりの召喚獣へ常村の召喚獣が切りかかる。

あわてて避けさせたその先に……。

「あめえっ！」

叫びとともに拳がたたき込まれ、それを顔面に受けたひばりの召喚獣がはね飛ばされた。

「ああっ?!」

「ツイー!!」

投げつけられた長剣を、召喚獣に払い落とさせた俊夫は常夏ふたりの召喚獣に突っ込んでいく。

一方、素手とはいえ、無防備なところへと200点オーバーバーの召喚獣によるクリーンヒットをもらったひばりの召喚獣は、点数を80点あまり減らされ、片膝を着く。

その様子に、ひばりは思わず口を開いた。

「ごめんね？ がんばって、あたしの召喚獣」

不意に、召喚獣がひばりを見た。

それは、瞬きの刹那に元に戻っていた。しかし。

「……笑った？」

そのとき、確かに彼女の召喚獣は、彼女に笑いかけた。

一瞬呆けたひばりだったが、すぐさま召喚獣を立ち上げらせると、舞台中央で二対一の立ち回りを見せる俊夫の召喚獣の元へ走らせた。

繰り出される斬撃を手甲で弾く俊夫の召喚獣。

そこを狙って拳を繰り出す夏川の召喚獣。

それを持ち上げた膝で受け止めた瞬間、足を払うべく常村の召喚獣が鋭いローキックを放つ。

しかし俊夫は召喚獣を軽く跳躍させやり過ごす。

それを夏川が見逃さずに顔を狙って素早くストレートを放つ。が、俊夫の召喚獣は頭を振って避けてみせる。

だが、夏川の攻撃はそれで終わらず、続けざまにストレートが放たれ、俊夫の召喚獣を追い込まんとする。

その背後へ、長剣を振りかぶった常村の召喚獣が迫り、凶刃がかの使役獣の頭上へ。

鋭い金属音が響き、長剣に交差する刃。

「お待たせっ！」

「すまん、助かった」

間一髪でひばりの召喚獣が間に合い、礼を口にする俊夫。

その間も夏川の召喚獣の攻撃を受け流し続ける。

一方で鏑迫り合いに持ち込まれそうになったひばりは、その勢いを逃がして常村の召喚獣をたたら踏ませる。

その背中へ柄頭を叩き込んだひばりの召喚獣は、左足を前に出し、右足を屈め、腰を低く落としながら、刃を上に向けながら水平に構えて右手を引き、左腕を伸ばして左の手のひらを切っ先に添える。

次の瞬間。

撃ち出された弾丸のごとく突進。

倭刀を振った姿勢で常村の召喚獣の向こうでブレーキングし、刃を返してさらに低く跳躍する。

勢いに流れる貫頭衣の裾を、地面に引きながら斬閃。地を擦りながら着地し、目を閉じながら納刀する。

ッ

堅い、金属の放つ短音が響き、常村の召喚獣の、背中と胸から、真っ赤な噴水があがる。

「くっそお」

その常村の声に合わせるように、彼の召喚獣は。霞のように消え去った。

「ツネ！」

倒された相棒の姿に、思わず声を上げてしまう夏川。
そこヘクリスの声が飛ぶ。

『ナツっ！ 相手から意識を外さないでっ！』

「ハッ?!」

気づけば突進してくる俊夫の召喚獣の姿。
それを見て腕を交差させて防御姿勢をとる夏川の召喚獣。
が。

俊夫の召喚獣は、夏川の召喚獣の脇をすり抜け、背後へ。

「へ？」

攻撃されると思っていた夏川は、その刹那、呆けてしまう。

その間隙を突き、力強く打ち込まれる裏拳。

息つく間もなく体を捻った俊夫の召喚獣から掬い上げるような蹴りが放たれる。

その一撃で、軽く宙を舞う夏川の召喚獣。

俊夫の召喚獣は、そこへ向き直り、腰を落としながら瞑目。

軽く開いた右手を左前に突き出し、心持ち握った左手を、その下を潜らせるように右脇へ。

軽い呼吸とともに両腕を絞りながら両脇へ引きつける。

その目の前に落ちてくる夏川の召喚獣。

大きく目が見開かれ、鋭い呼吸とともに突き出される双掌。

大気が破裂するような音が会場を揺らし、弾き飛んでいく夏川の召喚獣。

そして、フィールドの端から飛び出す直前、空を舞うシャボンの

ようにはじけて消えた。

『勝者、支倉、前田ペア！』

立ち会いの教師の声に、常村と夏川は肩を落とし、クリスは目を閉じながら長嘆息した。

第四十四問（後書き）

第四十四問、いかがでしたでしょうか？
また次回もよろしく願いします♪

第四十五問（前書き）

第四十五問、更新しました。

インターミッシヨンの回になってます。

それでは、読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです。
♪

第四十五問

『勝者、支倉、前田ペア!』

そのコールを受け、肩を落とす常夏コンビ。
それを見ながら、ひばりは大きく息を吐く。

と、負けた二人が顔を上げた。

ばつが悪そうな顔で口を開く。

「な、なあ、あんたら……支倉と前田だったか?」

「そ、その……あれだ。あんな噂を流しちまって済まなかった」

「この通りだ」

二人そろって頭を下げる。

その様にひばりは呆氣にとられてしまった。

素直に頭を下げるようには見えなかったからだ。

「あ、ああ、いえ。わかってくれればそれで良いです。えと、常村

先輩に、夏川先輩」

毒気を抜かれ、苦笑いしながら答える。

そんなひばりの様子に軽く息を吐く先輩二人。

その顔は、憑き物が落ちたようにすっきりしていた。

「じゃあ、決勝も模擬店も頑張れよ?」

「今度はキチンと応援するからな?」

そう言いながら舞台を降りていく二人を見送る、ひばりと俊夫。

「……案外と悪い人たちでもなかったのかな?」

呟くひばりに、俊夫が口を開く。

「さてな。よし、戻るとするか支倉」

「うん」

俊夫に答えて舞台を降りていく。

そして、皆が待つであろう模擬店、中華喫茶、雲雀、へと足を向けた。

戦舞台を降りた常夏コンビ。肩を落とし、俯きながら歩く。
と、下を向いている視界に、誰かの足が入ってくる。

そろって顔を上げたふたりの目の前に立つのは、金髪の少女、クリスティーナ・ウエストロード。

「大の男が二人して、何しよげかえってるのよ？ ツネ、ナツ」

苦笑いを浮かべながら声をかけてくる彼女を見て、二人は力無くうなだれてしまう。

「姐さん……」

「すまねえ、負けちゃった……」

張りのない声でつぶやく二人を見て、クリスは大きく息を吐いた。足を踏み出し、素早い身のこなしで彼らの背後へ回ると、両腕を上げてから二人の首根っこを脇に抱えるように巻き付けた。

「おわっ?!」

「うおっ、なん……」

突然のことに声を上げる二人。

「ほら、うじうじしないのっ！ まったく、二人そろってお通夜みたいな顔して、元気出さない？ うりうり」

笑いながら二人の頭を自分に押しつけるクリス。

オレンジのチャイナドレスに包まれた、二つの大きなマシユマロが常村と夏川の顔へ押しつけられて変形する。

「ちょ?! や、やめ……」

「うぐう、や、やわらけ……」

柔球を押しつけられ、彼女の匂いに翻弄される常夏。
と、クリスの動きが止まる。

そして……。

「頑張ったね、ふたりとも。お疲れさま」

優しく紡がれた言葉に、悪童ふたりの顔がゆがむ。

「姐さん……」

「く、ちくしょう……」

「我慢すること無いよん？ 負けて悔しいのは当たり前。今ならあたししか居ないんだし、思いっきり泣いちゃいなさい？」

クリスの言葉に応えるように、男二人の嗚咽が聞こえ始めた……。

「ただいま♪ 勝ってきたよっ！ ♪ って?! すごいお客さんいっぱいだっ?!」

上機嫌で教室へ戻ってきたひばりは、溢れ返らんばかりの盛況ぶりに仰天する。

列は試合前と変わらない風だが、模擬店内は満杯だ。

テーブルは満席で、立ったまま飲み食いしている者まで居る。

「あわわわ、何でこんなに……」

思わず声を上げると、数人の男女が振り向いた。

「おっ? 白チャイナの子が戻ってきたぞ?」

「きゃあ♪ 近くで見ると、やっぱりちっちゃくて可愛い♪」

「え?」

次々に上がる声にたじろぐ。

すると、その隙に数人の男女に取り囲まれてしまふひばり。

「なんで、あんなに強いんだ?」

「チャイナ可愛いね♪ どこで買ったの?」

「うわ、ほんと小さいね? マジで高校生?」

「写真いいですかー?」

etc . etc .

次々に浴びせられる言葉に、ひばりの顔がみるみる青ざめていく。

「う……あ……」

一歩後ずさり、己に向けられた好奇の視線におびえる。

と、ひばりの前に影が立った。

二年Fクラス代表、坂本雄二。

「申し訳ありませんお客様。彼女は試合を終えたばかりで、大変疲れておりますのでそのくらいで解放してやっていただけませんか？」
『あつ、ごめんなさいっ』

『すいませんね、騒ぎ立ててしまつて……。ほら、あんたも!』

『あー悪い悪い、明日も応援してるからさ、頑張つてな』

雄二の言葉に、謝罪を述べながらお客が散つていく。

それに対して、ひばりは、曖昧な笑みを浮かべることしかできなかった。

「大丈夫だった？ ひばり」

調理場兼バックヤードとして仕切られた狭いスペースで、明久が心配そうに小さな少女へと声をかけている。

それに対して、小さな少女、支倉ひばりは弱々しく笑うことしかできなかった。

先ほどの一件を見ていたFクラスの面々は、改めてひばりの心の傷を見せつけられた格好だった。

「ごめん……。ね？ 手伝えなくて……。視線を意識しちゃったら、急にキちゃつて……。弱いなあ、あたしは……」

申し訳なさそうに謝り、意気消沈するひばり。

そんなことはないという周囲にも首を振るばかりだ。

混雑する喫茶店を放っておくこともできないため、入れ替わり立ち替わり声をかけていくクラスメイトたち。

その声にも反応は鈍い。

と、そこへ、一人の女性が姿を現した。

女子大生と見まごうばかりの若さを誇る、須川亮の母、須川春香である。

「ひばりちゃん？ 大丈夫だったかしら？ 具合が悪そうに見えたのだけれども」

そう言いながら、少女の元へやってくる。

その声に顔を上げるひばり。

春香の顔を認めて、あわてて立ち上がるつとする。

「は、春香さん?! ご心配をおか……」

そつと、優しく抱きしめられ、口にした言葉がほどけてしまう。

「無理しちゃダメよ? 辛かったら、辛いつて言ってしまったて良いのよ?」

「で、でも……」

「いっぱい頑張ったのよね? 偉いわね、ひばりちゃん」

春香の言葉に、視界が揺れ始める。

「いいのよ? 我慢しなくて」

「あ……うあ……あ、ふ、ぐっ」

胸の奥で凝り固まったものが溢れていくのを止められないひばり。春香は、そんな彼女を抱きしめ、優しく髪を撫でていった。

どれ位経ったのか? どちらからともなく体を離していく、ひばりと春香。

「すいません、ご迷惑を……」

謝罪を口にする小さな唇を、細い人差し指が押さえた。

驚く少女に、春香が柔らかに笑う。

「迷惑なんかじゃないわ。大好きなひばりちゃんのためだもの。おはさんね、ひばりちゃんの力になりたいの。悩みがあるのなら、おはさんが相談に乗るわ。いいえ、乗らせてちょうだい?」

「で、でも……」

「『でも』は無しよ? それとも、私じゃあ役不足かしら?」

なおも言い募ろうとするひばりに、春香は拗ねてみせる。

その様に、ひばりはあわてて両手と頭を振った。

「と、とんでもないですっ! その、そう言っていただけで嬉しい

です……」

両手の五本の指のさきつちよ同士を、つんつんと突き合わせ、軽く紅潮しながら視線をはずす。

そんなひばりの様子を見て、春香は嬉しそうに笑うと、その小さな体を抱き寄せた。

「急になんでもかんでも話せということではないのよ？ ひばりちゃんの話したくなったら、おばさんに話してちょうだい？ ね？」
春香の優しい声に、ひばりは小さくうなずいた。

清涼祭一日目も終了し、招待客らが帰路につき、校内が閑散とし始めた頃になつても、中華喫茶‘雲雀’には、多くの人影があつた。二年Fクラスの主たる面々に加え、Eクラスの牧野慎吾、如月琴代のデコボコカップルに、二年Aクラス代表、霧島翔子も居た。
「なるほど、黒幕は竹原教頭だつたってわけだ」

雄二のその言葉に、クリスがうなずく。

「そうなるねい。そっちの腕輪の件を知ってたら、おねーさんの立ち回りも変わってたろうけど……いや、言っても仕方ないねい」

「そうですよ。そんなのは無意味な仮定です。それよりこの後です」
そう言つてアキが雄二を見やる。

雄二は、その視線を受けて顎に手をやりながら思案する。

「……そろそろババアと保険医も来るはずだ。より詳しい情報も得られるかもしれんしな……」と来たか」

廊下で動く人影をとらえ、雄二が皆を促す。

明久、ひばり、瑞希、美波、秀吉、康太、俊夫、アキ、クリス、
亮、慎吾、琴代、翔子。

そして雄二。

十四対の目が見つめる中、学園長と、保険医の北丘めぐみが戸を

くぐる。

「……ずいぶんと人数が居るねえ」

「誘拐未遂の件で巻き込まれた者が大半だな」

学園長の言葉に、めぐみが答える。

「そうだったね。まずはお前達に謝らなきゃいけないね。アタシの見込みが甘かったせいで、怖い思いをさせてしまったね。こんなことに巻き込んでしまつて、本当にすまなかった」

深々と頭を下げる学園長。

それを見て、ひばりや瑞希などはあわてる。

「あ、頭を上げてください学園長」

「そうです、みんな無事だったんですから……」

しかし、この文月を立ち上げた女傑は頭を振った。

「いや、それは結果論さね。竹原が怪しいのは掴めていたんだからね。さつさとしょっぱいちまえばよかったんだが、そこで欲目が出ちまつたのさ……」

「……つまり、竹原から繋がる、文月転覆派をすべて押さえたかった。そのために竹原を泳がしていたんだな」

学園長の言葉を引きついで雄二が口を開く。

その言葉に学園長がしかめっ面になる。

「やれやれ、本当に賢いジャリだねえ。その通りさ。おかげでほとんどの連中は押さえられたよ」

「あの……」

と、ひばりが手を挙げる。

「なんだい？ 支倉」

「大春先輩達つて、どうなったんですか？」

ひばりの質問に、学園長が首を傾げた。

大春の名前に心当たりがないようだ。

「それは私が答えよう」

そこで進み出たのは、保険医のめぐみだ。

「彼とその兵隊、まあ、竹原が雇っていたチンピラ連中だが、とあ

る施設に入って貰うことになってな。そちらへ移送中だ」

禁煙パイプを口から離し、そう説明する。

「まあ、三食昼寝付き各々の個室にはベッドもつくし、衣類も支給される。その上仕事まで貰えるという夢のような施設だ。おそらく施設から出てくることもないだろう」

「……至れり尽くせりか？ 監獄にでもぶち込まれるのかと思っていたんだが」

説明を聞いて、雄二が声を上げる。

その場にいる大半の者も同意見のようだ。

「まあ、聞け。与えられる仕事は六時間かけて穴を掘り、六時間かけてそれを埋めるという簡単な仕事だけだ。監視付きでな。ほかに娯楽もなにも無し。素敵だろ？」

そう言つてワラうめぐみに、その場の大半が寒気を覚えた。

「竹原教頭はどうなつたんですか？」

続く明久の質問に、めぐみが渋面を作る。

学園長も目を伏せ嘆息した。

「……逃げられたか？」

雄二が鋭く切り込む。

それを受けてめぐみが深く息を吐いた。

「そうだな、そう言つてしまつて良いだろう」

「……どういふこと？」

すつきりしない答えに翔子が問いかける。

「消えてしまったよ。比喻でもなんでもなくな」

「は？」

めぐみの答えに、一同が異口同音に声を出す。

「逃げたつて意味じゃなくてなのかなん？」

「おそらく逃げたんだろつな」

ますます訳が分からない、とばかりに頭をひねる一同。

「おい、妙なごまかしをしようっていうのか？」

苛立たしげに雄二が声を挙げる。

めぐみはあえて遮らず、雄二の言葉が終わるのを待って口を開いた。

「……ごまかしなどではないさ。君たちが準決勝を戦っている頃、教頭室へ踏み込んだんだ。彼は驚いて振り向きながら、霞のように消えてしまったんだ。文字通り二のまったく、狐にでもつままれた気分だよ……」

「狐……」

めぐみの言葉に、ひばりと俊夫が顔を見合わせる。

「ともかくだ。『白銀の腕輪』のバグも無くなり、手駒も無い。外との繋がりも断った以上、竹原教頭には打つ手は無いだろう。万事解決とまではいつていないが、竹原教頭の搜索には我々の方で人数を出して行っている以上、君たちにやって貰うことはない訳だ。後は祭りを楽しみたまえ」

そう言われ、顔を見合わせる一同。一部の者を除いて、安堵の表情を見せている。

「さて、そろそろ遅くなるからね、早く帰りな。気を付けて帰るんだよ」

学園長の言葉を受けて、めいめい帰り支度を始める。

その様子を見ながら踵を返すめぐみ。

「もし、竹原を見たら連絡してくれ。頼んだぞ？」

それだけ言っ、教室から出ていってしまう。

ひばりは手荷物を抱え、明久に近づいていって声をかけた。

「アキくん、帰ろう」

「うん」

ひばりの誘いに笑ってうなずく明久。

二人そろって学園長に挨拶をしながら教室を後にした。

暗い、ほの暗い部屋に魔法陣が顕れる。そこに光の粒子が立ち上り、一つの像を結んでいく。

それが、はつきりとした実像を持った時、魔法陣は消え去り、結実した像……竹原は脱力して、その場にヒザを着き、へたりこむ。

「な、なんだ？　なにが起きたのだ？」

呆然とつぶやく竹原。

教頭室へ数人の黒服と、白衣姿の女がなだれ込んで来た次の瞬間、己を光が包み込み、あらゆるものが白に染められた。

塗りたくられた白がひらけた瞬間、視界に飛び込んできたのは、見覚えのない部屋。

「危なかったですね？　教頭先生」

声をかけられ、そちらを振り向く。

暗がりの中から姿を現す文月学園の男子生徒の制服姿。

オールバックの黒髪に、丸眼鏡。

その糸目の奥が読めぬ少年、流真人。

続けて響くは女の声。

「うふふ、教頭センセには、まだまだ頑張って欲しいから、思わず助けちゃいました」

闇の奥に、爛々と輝く金色の目。

その持ち主が竹原に近づく。

「き、君は……桜間君か」

「ハイ」

にこやかに応じるのは桜間狭夜。

彼女に、異様な気配を感じ、竹原は体を震わせる。

精一杯の気力で二人をにらみ付ける。

「わ、私をどうするつもりだね？」

そう言い放つが、語尾が震えているのを自覚する。

ふたりは、竹原の元まで近づき、にこやかに笑いながら口を開い

た。

「例の腕輪、バグの修正が終わったそうです」

「な、なんだとっ？！　そ、それでは事故は……」

「起きませんねえ」

真人から知らされた事実には竹原は呆然とする。

そんな竹原を、狭夜がのぞき込んだ。

「で・も」　逆転できるって言ったらどうします？」

「ほんとかね？」

狭夜の言葉に竹原は掴みかからん勢いになった。

「あん」　乱暴ね？　でも、そういうの嫌いじゃないわよ」

妖しく笑う狭夜。

その瞳が金色に輝き、竹原は徐々に意識が霞んでいくのを感じた。

第四十五問（後書き）

第四十五問、いかがでしたでしょうか？

清涼祭二日目に繋がるインターミSSION的な話でしたので、盛り上がり欠けてますね（苦笑）

代わりに、フラグや伏線がいくつか入ってます。

それでは、次回もよろしく願いしますね♪

第四十六問（前書き）

第四十六問、更新しました♪
読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第四十六問

「ア、アキ、ひばり、おはよー」

「お、おはようございます、明久君、ひばりちゃん」

「おはよう、二人とも」

「おはよ！ みっちゃん、美波ちゃん」

清涼祭二日目の朝、明久とひばりが教室で準備していると、瑞希と美波の二人が揃って登校してきた。

すると明久は、二人に近づき、少し思案しながら声をかける。

「あゝ、その……昨夜はぐっすり眠れたかな？」

「え？ ええ、ぐっすり眠れましたよ」

答えて微笑む瑞希。

「そ、そう。そ、それじゃ……えっと、朝ご飯はきちんと食べてきた？」

「ふふ。きちんと食べてきましたよ？ 明久君」

考えながら訊ねる明久。

瑞希は、少し嬉しそうに苦笑いして、丁寧に答える。

その様に、明久は少し慌てるように考えながら、変な夢とか見なかったか？ などと聞いていた。

瑞希は、その様子がおかしかったのか、軽く笑う。

「ふふ、心配しすぎですよ？ 明久君。確かに大変でしたけど、自分でも不思議なくらい落ち着いてるんです」

「そうね。ウチも葉月も平気よ？ あの娘ったら、またチャイナを着てお手伝いするんだって、張り切っていたわよ？」

「そっか……」

瑞希と美波の言葉に安堵の息を吐く。

すると、そこへ近づく気配。

「ハッ？！」

「アッキー♪ おっはよーん♪ おねーさんは昨日は怖くて眠れな

かつたんだよん♪ このまま保健室でしつぱり慰めて欲しいよん♪
♪ アムン♪♪」

気配を感じた明久が飛び退こうとするより早く、彼の背中にしなだれかかるクリス。

そのまま耳に息が掛かるように喋ってから明久の耳たぶを甘噛みする。

「ンツ？ ♪ ふわあああつ？ ♪？ ♪」

思わず艶っぽい声を挙げる明久。
と。

スパアアアンツ！！

「な、ななな、なにやってるのよっ！！ クリスはっ！？」

【小烏丸】片手にクリスを怒鳴りつけるひばり。

しかし、当のクリスは地に伏して痙攣していた。

「うみゅみゅ、いつにも増して、斬れ味抜群だよん……」

「た、助かったよ……ひばり」

「……！？」

目を潤ませて礼を言う明久を見て、三人娘は息を呑み、頬を紅に染めた顔を逸らした。

「？ どうしたの？ 三人とも？」

その様子を見て、不思議そうに首を傾げる明久。

「な、何でも無いよっ！？」

「そ、そうです！ 何でも無いんですっ！」

「（アキつてば、時々、ものすごく可愛いんだもの……反則よ）」
慌ててごまかすひばりと瑞希。

美波などは顔を背けたまま、ブツブツ言っている。

「ふうん。まあ良いけど……あ！ 特に問題は？」

三人の様子に、不思議そうな面もちだった明久は、瑞希と美波に続いて入ってきた秀吉と康太にも声をかけていた。

「うむ、問題無しじゃ。不審な連中もおらんかったぞ」

「……………異常なし」

軽くうなずく秀吉に、親指を立てる康太。

するとそのとき下方から声が聞こえてきた。

「おお、今日のお姫ちゃんは水色の勝負下着、なみなみはいえろーだない。ひばりんはらいむぐりーんと」

「わわっ?!」

「キャアッ?!」

「な、なに?」

その声に慌てて飛び退く三人娘。

「……………?!?!(ブシャアアア)」

そして凄まじい噴出音が教室中に響きわたる。

「にゅふふ、そして本日のおねーさんは……………」

がばつと立ち上がり、堂々と己のスカートを捲り上げるクリス。

「純な乙女のピュアホワイトだよーん」

『どぶあつしゃあ~~~~~!!』

あり得ない轟音とともに康太と明久をはじめとする、Fクラスの男子生徒が鼻血を吹き出して倒れる。

『ちよつと?! クリス!?!』

『だ、だめですよっ! そんなことしちゃあつ!』

『ななな、なにやってんのよっ! 早く仕舞いなさいよ!』

『うむん? 別に減りやしないよん? 見せパンだしねい』

『『『そういう問題じゃな~~~~い!!』』』

スパアアアンツ!!

「ふわああ、何の騒ぎだ……ってなんだこりゃ?!」

奥からそう言いながらやってくるのは、Fクラス代表、坂本雄二。
「あれ？ 坂本ももう来てたの？」

彼の姿を認めて、床を拭く手を休めずに美波が声を挙げる。

「明久君も、ひばりちゃんも、坂本君も今朝はずいぶん早いんですね」

雄二に気づいた瑞希も輸血作業しながら聞いてくる。

それに対して、瑞希に介抱されていた明久が答えた。

「まあ、朝一番でテストを受けていたからね」

その言葉に、ひばりもうなずく。

「決勝戦、万全の状態で臨みたかったからね。あふう」

思わずあくびがでてしまう。

「随分と眠そうね？ 大丈夫なの？」

雑巾を片づけた美波が、心配そうに訊ねてくる。

「うん。実は坂本君がアキくんちに泊まり込んで徹夜してたみたいなんだよね。で、夜食の差し入れしたり、朝食作ったりしていたから。う、あふう」

答えながらあくびをするひばり。

つられて雄二と明久もあくびをしてしまう。

それを見てひとつ息を吐く美波。

「もう。せっかく決勝戦がFクラス揃い踏みなんだから、シャキッとなさいよ」

「そんなこと言っても、決勝戦対策で遅くまで勉強してばっかだったから、眠くて……」

眠そうに目をこする明久。

それを見て美波が苦笑いする。

「なら、決勝前まで、少し寝ておきなさいよ。喫茶店はウチ達だけで十分まわせるし」

「そうですよ。四人で仮眠でもとっていてください」

やってきた瑞希も美波に賛同する。

しかし、明久は眉を寄せるばかりだ。

「でも悪いよ……」

そう言つてすまなそうにする。

「いや、お言葉に甘えさせてもらつとしようや、明久。無様な試合は見せられんだろ（姫路の父親も見に来てるだろうしな）」

雄二の、特に最後の方のささやくような声に、明久は小さく動揺する。

「そつ、そつだね。じゃあお言葉に甘えさせてもらつて屋上ででも寝てこようかな？」

「オツケー。起きてこれなさそうなら、起こしに行くけど？」

明久の言葉に、美波はそう提案する。

すると明久は、軽く思案してから口を開いた。

「そつだねー。お昼時の混み合う時間くらいは手伝いたいから、十一時過ぎても起きてこなかったら起こしに来てよ」

「十一時ね？ わかつたわ。……ひばりも一緒に寝るのかしら」

明久に承諾の意を伝えつつ、訝しげに訊ねる美波。

その迫力に、明久は気圧される。

だが、その美波の頭に、軽い衝撃が走った。

ひばりが【子烏丸】で軽く叩いたからだ。

「いくらあたしでも、男の子三人に混じって雑魚寝なんで出来ません！ まったくもう、美波ちゃんは……」

そう言つて嘆息するひばり。

言われて美波が顔をひきつらせた。

「そ、そうよね……。ウチだったら、なにバカなこと考えてたんだろ？」

「あたしは保健室でベッド借りるよ。アキくんたちと同じタイミングで起きてこなかったら、起こしてくれる？」

そう言つて笑うひばりにうなづく美波。

「わかつたわ、アキたちと同じタイミングね？」

「んじゃ、頼んだぞ〜ほわぁ」

言いながら口を手で押さえつつ教室を出る雄二。

それに明久、俊夫、ひばりが続いていった。

「よし、そろそろ時間だ。会場へ行くぞ？ 明久、支倉、前田」
結局、気を使ってくれたクラスメイトたちのおかげで、十二時を
回る頃まで仮眠できた明久たち。

店の手伝いも三十分そこで切り上げ、会場へ向かうことにな
った。

「後で私たちも応援に行きますね」

「決勝戦なんだから、しっかりやんなさいよ？」

「ここまで来たんじゃ、双方抜かるでないぞ」

「……………どっちもがんばれ」

「うむん、悔いの残らないように、全力で臨むんだよん」

「まあ、適宜頑張ってください」

主立った面々から声を掛けられながら会場へ足を向ける四人
と、

「支倉、ちょっと待ってくれ」

ひばりを呼び止める声。

Fクラスの少年、須川亮だ。

「亮君？ どうしたの？」

「ああ、俺がつて訳じゃなくてさ…………」

言いながらズボンのポケットをまさぐり、小さな白い巾着を取り
出す。

「お袋からだ」

「春香さんから？」

ひばりの小さな手で受け取ってなお小さく感じるそれは、雲雀が
刺繍されており、首から掛けられるように白くて細い組み紐までつ
いていた。

「お守りだってよ。今日は応援に来れないからって、慌てて作って

「たみたいだ」

亮は苦笑いしながら言うが、ひばりは感極まったようで、目を潤ませ始める。

「お、おい？」

泣き始めたひばりを前に慌てる亮。

そんな彼女の肩に手が置かれる。

「良かったね、ひばり」

そう声を掛けるのは、幼なじみの明久。

「うん！ ありがとう亮君。春香さんにも、そう伝えておいてね？」
顔を拭い、笑顔でそう言うひばりに、亮は曖昧にうなずいた。

そのまま明久と話しながら会場へ向かう彼女の背を見送る。

「……はあ」

ため息を吐く亮。不意にその肩に手が置かれ、地の底より響く声が聞こえてきた。

「すゝがゝわゝ」

「！」

突然のことに跳ねる亮の身体。

ゆっくり振り向くと、血涙流しながら新田が睨んでくる。

「なにポイント稼いでるんですか？」

「いや！ これは！ そう言うんじゃないでなな！」

「問答無用！」

新田の声に、そこかしこから姿を現すFクラスの面々。

『我らが小女神を誑かすとは言語道断！！』
リトルゴッデス

『その罪、貴様の命であがなえ！！』

『サアアーチアンドデエーッス！！』

『あなたのその命、神に返しなさいっ！！』

『さあみんなあっ！ すがっち狩りが、はっじまつるよ〜ん』

『『うおおおお〜っ！！！！』』

「なんでそうなる！ 後クリス！ 煽んじゃねーっ？！」
叫びながら走り出す亮。

それを追撃し始める新田や横溝を中心としたFクラス追撃部隊。
その様を見たクリスは、腹を抱えて、指差しながら大笑いしている。

そこへ美波が顔を出しながら怒鳴りつけた。

「ちよつと、あんたたち！ 交代までには戻ってきなさいよっ！」
止める気は無いようだった。

「つきしょおおおおおっつっ？！？！ 何で俺ばっか！ 吉井だ
つて居るだろうがっ！」

「なにを言う！ そんなことをしたら、小女神の逆鱗リトルゴッテスに触れるではないかっ！」

「そうだ！ おまえならまだ大丈夫に違いない！」

「なにその理不尽？！ くっそ、不幸だあああああっつっ！！！」

追撃戦は、三十分ほどで終了したらしい。

「では時間です。四人ともステージへと向かってください」

さすがに決勝戦と言うべきか、案内役の教師が配されており、簡単な案内や注意を受ける。

「うっつ、すぐく観客が多いよ……」

序々に弱気になり、青くなり始めるひばり。

昨日までは観客自体少なかったため、意識せずに済んだが、今日は違う。

世間の注目を集める学園の完全一般開放日ということもあって、かなりの人数が押し掛けてきているのだ。

そして、この召喚大会決勝戦は、目玉イベント中の目玉だといって良いものだ。

人が集まらないわけがない。

「大丈夫か？ 支倉」

ひばりの様子に珍しく心配そうに声を掛ける俊夫。それに対し、胸元を押さえて弱々しく笑うひばり。

ふと、手に触れるものがあつた。

亮から手渡された、彼の母お手製のお守りだ。

すこし、躊躇してから、両手で包むようにお守りを持ち、目を閉じる。

すると、ひばりの波が引いていくように顔色が戻っていった。

「不思議だ…… すぐく落ち着くよ」

つぶやいて笑う。

「うし。んじゃいくか」

「うん」

俊夫に応えて歩き出す。

『さて皆様。長らくお待たせ致しました！ これより、試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！ それでは、出場選手の入場です！』

明久と雄二の二人がステージ上へ上がっていく。

『二年Fクラス所属、坂本雄二君と、同じくFクラス所属、吉井明久君です！ 皆様拍手でお迎え下さい！』

司会のコールに、割れんばかりの拍手が二人に降り注ぐ。

『なんと、最高成績のAクラスを押さえて決勝に進んだのは、二年でも再下層とされる、Fクラスコンビです！ こうなりますと、Fクラスが最下層であるなどという認識を改めなければならないかもしれないかもしれません！』

司会の言葉を聞いて、明久とひばりが嬉しそうになる。

『そして、相対するも二年Fクラス所属、支倉ひばりさんと、同じくFクラス所属の前田俊夫君のお二人！ 三年のAクラスなどを抑えての決勝進出です！ こちらも拍手でお迎え下さい』

コールを受け、ステージ上へと進み出るひばりと俊夫。

それと同時に、お腹の底まで響かんばかりに拍手と歓声が巻き起こる。

それを受けながら、ひばりはそつと胸元に手をあて、落ち着いた表情を見せていた。

『なんとこの決勝戦！ 二年Fクラスが揃い踏みです！ 成績に問題があるなどと言われるFクラスですが、他のクラスどころか、上級生までも押し退けての決勝進出！ 彼らがこれほどの実力を身につけるのに、どれだけ努力したのか？！ その学習意欲と向上心は疑うべくもありません！』

司会者の熱の入った言葉に、四人は思わず顔を見合わせ、苦笑いする。

『それではルールを簡単に説明しましょう。試験召喚獣とは、テストの点数に比例した――』

アナウンスによるルール説明が始まり、四人はお互い向き合って軽く笑う。

「わくわくするね。ひばりや俊夫とは、一度本気でやってみたかったんだ」

「俺もだぜ明久。観察処分者のお前に武を仕込んだ成果、見させてもらうぜ」

お互いに不敵な笑みを浮かべ合う明久と俊夫。
そこへ横合いから声がかかる。

「おいおい、‘皇餓’さんよう、俺を忘れんなよ。あんまり舐めると痛い目を見るぜ？」

「フ、ならまずはお前から‘喰い散らかし’てやるぜ！ 坂本！」
睨み合う雄二と俊夫。

やる気満々の男子に囲まれ、ひばりは一步後ずさる。

「み、みんなやる気満々だね……」

「ひばりは違うの？」

明久から掛けられた問いに、頭を振る、ひばり。

「やるからには本気で全力でやるよ？ ここまで来たら、あたしも

優勝したいし」

言いながら不敵な笑みを浮かべる。

『それでは試合に入りましょう！ 選手みなさん、どうぞ！』

説明が終わり、両陣営の間に立った審判役の教師から声がかかる。それを契機に四人は異口同音に言霊を紡いだ。

「「「試獣召喚！！（サモン）」」」」

「クツクツク、始まったか。潰してやるぞ、この学園も、私の邪魔をしてくれたガキどもも。クツクツクツク」

第四十六問（後書き）

第四十六問、いかがでしたでしょうか？

次回はいよいよ決勝戦。

どんな戦いになるのか、楽しみにしていて下さいね。」

第四十七問（前書き）

第四十七問、更新しました♪
読んで下さる方に、楽しんでいただけたら幸いです♪

第四十七問

「ッッッ^{サモン}試獣召喚！」「ッッ」

異口同音に、四人が紡いだ言霊に従い、四つの魔法陣が広がる。幾何学模様で構成されたそれは、ゆっくりと回転し、四人が従える使役獣を顕現させるための扉となる。

緩やかな弧で構成された刃が生まれ、刀身を構成する。

次いで中央にスリットが開いた楕円が現れ、刀身の付け根にはまり、鐔となる。

さらに握りが現れ、刀身と繋がって柄となり、倭刀が完成する。

そして、細長く、緩い反りを持った中空の棒が現れ、その中へ倭刀が収まると、鐔鳴りの音を響かせ、回転しながら宙を舞う。

それが向かう先に、黄緑色の細長い布が現れ、その中央に、丸い穴が開く。

柔らかく折れたそれに、黄色い帯が巻き付き、軽い破裂音と共に、ブーツを履いた足。

次いで、布を巻き付けた腕が現れる。

軽く膨らんだ青い金属板が胸を覆って鎧と化し、さらなる破裂音と共に長い黒髪をなびかせた、大きな頭が現れる。

その髪が自然と束ねられ、黄色いリボンが巻き付いて、尻尾をかたどる。

そして回転しながら降ってきた倭刀をしっかりと受け止め、腰に差しながら魔法陣の上に降り立つひばりの召喚獣。

さらには、学ラン姿に木刀を持った明久の召喚獣と、白ランにメリケンサックの雄二の召喚獣。

そして、手甲脚甲を手足にはめた、道着姿の俊夫の召喚獣も姿を顕した。

決勝戦の使用教科は日本史。

それぞれの点数が、名前と共に大型ディスプレイ上に表示されて

いく。

二年Fクラス 坂本雄二 日本史 208

二年Fクラス 吉井明久 日本史 182

VS

二年Fクラス 支倉ひばり 日本史 188

二年Fクラス 前田俊夫 日本史 89

「……明久、カンニングはダメだぞ」

「なに言ってるんだよバカ雄二。そんなことするわけ無いだろ！」

「そうだよ坂本君！ アキくんはやれば出来る子なんだからね！」

雄二の言葉に明久が切り返し、ひばりが柳眉を逆立てる。

「ハッハッハ、しかし確かに大した点数じゃないか、明久も支倉もな」

豪快に笑った俊夫に言われ、明久が不敵に笑う。

「あの話に来てから、雄二に手伝ってもらって日本史を集中的に勉強したからね。さんきゅ、雄二。頭いいじゃん」

「俺があれだけつき合ってたんだから当たり前だ。まあ、おまえの集中力も大したもんだったがな。にしても支倉もだいぶ点を上げてきたな」

明久と軽口を叩き合いながら、ひばりに水を向ける雄二。

それを受けて、ひばりも口を開く。

「あたしも昨日帰ってから勉強したしね。でもほんとにすごいよ、アキくんは。もうすぐ抜かれちゃうかも」

言いつつ、とても嬉しそうなひばり。

明久が点数を伸ばしたことが余程嬉しいのだろう。

しかし、当の明久は首を振る。

「ううん、日本史は暗記物だからね。点数は伸ばしやすいんだってさ。だから僕でもこんな点が採れたんだよ」

そういつて苦笑い。

その横で、雄二が野生味溢れる笑顔を浮かべながら右の拳と左の掌を打ち合わせた。

「とにかく、これが最後の一試合だ。ここまできたからには負ける気は無え。全力でいかせて貰うぜ？　なあ、明久」

「うん！」

雄二の言葉に力強くうなずくと、二人で身構える。

それを見た、ひばりと俊夫は顔を見合わせて笑う。

「それはこつちも同じだよ？　それに、アキくんたちと真剣に戦えるチャンスなんて、そうそう無いからね」

「全くだ。俺なんか楽しみで仕方がないぜ」

言いながらこちらの二人も身構える。

そして、四匹の使役獣も身構え、同時に飛び出していった。

俊夫の召喚獣が、手甲に包まれた右手を突き出しながら、突き進む。その一撃を、木刀が受け流した。

「まずはお前からだ！　明久！」

「クッ？！　俊夫！」

そのままカウンターを狙い、木刀の柄で突き込むが、それを、左手を添えるように押し退けながら体を開く。

そのまま相手の頭めがけて己の頭を振り降ろす俊夫の召喚獣。

しかし、明久の召喚獣は後ろ足を振って体を反らし、頭突きをやり過ぎすと、そのまま木刀を振るった。

それが肩口に突き刺さる瞬間。

「憤！」

俊夫の声と共に震脚の轟音が響き、木刀の一撃を弾き飛ばす！

「うっそお！」

「ち、完全には無理か」

お互いに声を挙げる明久と俊夫。見れば俊夫の召喚獣の点数が数点ほど減っている。

しかし、180点オーバーの召喚獣の一撃。

それも防御姿勢とは言いがたい体勢で受けたダメージにしては、異様に少ないと言える。

お互いに距離を取り、様子をうかがうが、明久は改めて俊夫の戦闘センスを目の当たりにし、己の背を汗が伝うのを感じた。

一方、雄二とひばりも激しい応酬をしている。

その軽装備故か、わりと素早い雄二の召喚獣。

まるで拳の壁が現れたかのようなラッシュでひばりの召喚獣を追いつめんと猛攻をくわえる。

それを丁寧に避けていくひばりの召喚獣。

素早く抜き付けて切りつける。

が、分厚い拳の弾幕に阻まれる。

そのまま伸びてくる拳を、バックステップで避けさせる。

しかし雄二も距離を取らせ無いとばかりに召喚獣を突っ込ませる。繰り出される機関銃の弾丸のごとき拳。

その攻撃に、ひばりは辟易した。

「ハッハア！ どうした支倉。腰が引けてるぜ！」

「うっ……」

さらに拳を避け続けるひばりの召喚獣。

ブーストアップ
強化！」

コマンドワードに反応し、黒金の腕輪が光を放つ。

メリケンサックを巨大な腕甲に変化させる雄二の召喚獣。

「わわっ?!」

雄二の攻撃をタイトに避わさせていたひばりは、突然のことに慌てる。

ラッシュを避けている最中に、相手の拳の大きさが突然変わったのだ。

驚くのも無理はない。

その結果。

大きな衝撃音と共に跳ね飛ぶひばりの召喚獣。

避けきれずに攻撃を受けたのだ。

点数が40点ほど低下する。

「止めだ！」

好機と見て追撃する雄二の召喚獣。

しかし、ひばりの召喚獣は体を入れ替え、着地すると間髪入れずに低く跳躍する。

「なにっ?!」

雄二の声を斬り裂くように倭刀が振るわれ、白ランの脇が大きく裂ける。

そこに紅が染み出し、白ランを主に染めていき、点数が40ほど減少した。

「……やるじゃないか、支倉」「……」

雄二の言葉に、ひばりは応えない。

対峙する二人の召喚獣は再び身構え、突進していった。

時間は少しだけ戻る。

学園の廊下を二人の男が歩く。

一人は纏ったスーツがはきれんばかりの筋骨逞しい漢。

鉄人こと西村宗一教諭だ。

そして、そのとなりを歩くのは、浅黒い肌に野太い眉毛。バサバ

サの髪にバンダナを巻き、頬には十字傷。

皮ジャンにTシャツとジーンズ姿。

しかし、その顔つきは少年と言ってよく、目は子供のように好奇心で輝いていた。

「すまん、高杉。転校手続きがズレ込んだ上に、こんな騒がしい日に足を運んで貰うことになって……」

「ええき！ ええき！ わしゃあ祭りが大好きじゃけんのう」
「こ
が
あ
良
い
日
に
来
れ
て
嬉
し
い
ぜ
よ
！」

すまなそうにする西村教諭に対して、まるで気にする風でもなく、せわしなく周りを見回す。

それを見て苦笑いする西村教諭。

ふと、何かを思いつき、高杉に向かって口を開く。

「なんなら見学していても構わんぞ？ 今日是一般開放日だしな。校庭では、この学園の目玉でもある、試験召喚システムを利用した、トーナメント大会も催されている。後学のためにも見ておくと良い」
「そりゃあ願ってもないことぜよ！ ちくつと行ってくるき！」
言うが早いか走り出す。

と、視界の端に、珍妙な集団が入ってくる。

「ありゃあなんぜよ？」

それは、数人の少女の集団だ。

しかし、全員がチャイナドレスを着用しており小走りに移動している。

『はやくバカなお兄ちゃんたちを応援するです』

『こら、葉月。走らないの』

『島田よ、落ち着くのじゃ』

『はあ、結局高名と回る機会がありませんでしたか……』

『美波ちゃん。ま、待って下さい』

『ほりほり』 お姫ちゃん、がんばるんだよね』

その姿を見た高杉は雷に打たれたような衝撃に見舞われた。

サラサラの金髪。

きめの細かい肌。

すらりと伸びた足。

屈託のない笑み。

オレンジのチャイナに包まれた、大きめの胸。

「……め、女神ぜよ……」

その日、クリスことクリスティナ「ウエストロードは、意図せずして、少年、高杉総司のハートを射抜いてしまった。

戦舞台の上では、四匹の獣による舞踏が続けられている。

倭刀が鏗鳴り、木刀が風を切る。

腕甲がうなり、手甲が火花を散らす。

一進一退、互いに決め手を打てない攻防が続く。

戦闘経験の高いひばりと天才的戦闘センスを持つ俊夫のコンビは、二年でもトップクラスの戦闘能力を誇るコンビと言えよう。

その二人に対し、飛び抜けた操作技術を持つ明久はともかく、雄二が渡り合っているのは賞賛に値するだろう。

事実、その動きは洗練さを欠く。

しかし彼はこの四人の中でもっとも優れたものを持っていた。

それは智。

彼は、知恵を以て蛮勇を征する者だった。

すなわち。

「ヤアっ！」

声とともに振るわれた倭刀をバックステップで避ける。

そのまま振り回した腕甲に足が掛かり、明久の召喚獣が跳躍する。

「た！」

「わわっ?!」

そのまま切りかかれたひばりは召喚獣を横へ飛ばす。

雄二はそのまま腕甲を振り回して俊夫の召喚獣を牽制。

その一撃を受け流す俊夫の召喚獣。

しかし、その時、雄二の召喚獣の影から、木刀が飛び出し、俊夫の召喚獣へ向かう。

「むっ?!」

狙っていたカウンターを明久に邪魔され大きく飛び退く俊夫の召喚獣。

「やあっ!!」

そこへひばりの召喚獣が切り込んでいく。

しかし雄二は巨大な腕甲を盾のように扱ってその斬撃を弾く。

僅かに削れる点数。

だが、腕甲の下から飛び出した明久の召喚獣の一撃が、ひばりの召喚獣を襲う。

「ひゃっ?!」

軽く悲鳴を上げて召喚獣を後方へ離脱させるひばり。

埒があかないと感じた俊夫はひばりに目配せする。

その意図を組み、離脱させた召喚獣が接地した瞬間、飛び出させる。

合わせるように俊夫の召喚獣も突進!

「明久!」

「あらよつと!」

雄二の合図に明久が召喚獣にドロップキックを放たせる。

雄二の召喚獣へ。

明久の召喚獣の蹴りを、両腕の腕甲で受け止め、後方へ跳躍する雄二の召喚獣。

明久の召喚獣も蹴りを受け止めた腕甲を踏み台にして、前方へ跳躍する。

「なっ?!」

「えええっ?!」

相手の思わぬ行動に驚く俊夫とひばり。

二人の召喚獣は、勢いをつけて攻撃を放っており、簡単には止まらない。

「ちいいいつつ!!」

「止まってえええっ!!」

互いの拳と刃が届く刹那。

俊夫の召喚獣が地面を蹴り込み上空へ跳ね飛ぶ!

その下を刃を振り切ったひばりの召喚獣が通過した。

「よ、良かった……」

「まだまだ支倉っ!」

安堵の息を吐くひばりに、俊夫の声が飛ぶ。

ビクリと体を震わせたひばりが見たのは、着地反転して自分の召喚獣へと切りかかる明久の召喚獣と、宙空の俊夫の召喚獣へ殴りかかる雄二の召喚獣の姿。

二つの鈍い打撃音が響き、ひばりの召喚獣が木刀を受けて弾き飛び、俊夫の召喚獣が防御姿勢のまま地面に叩きつけられる。

「チ。良いコンビネーションしてやがる」

「坂本君のあの腕甲がやかいだね。なんとかそれを……」

「させねえよっ! リミットブレイク 限界突破!!」

朱金の腕輪が輝き、雄二の召喚獣に腕輪が出現。

さらにそれが輝いた。

「しまった!」

「腕輪!」

その輝きに一瞬身構える俊夫とひばり。

しかし、なにも起こらない。

「不発？」

「いや、それは無え」

訝しげなひばりに答える俊夫。

次の瞬間、雄二の召喚獣が凄まじい速度で突進してきた。

「はやいっ！」

「くっ！　！？　なんだこいつはっ？！」

いつものように受け流そうとして俊夫が声を挙げる。

見れば、召喚獣の動きが目に見えて遅くなっている。

防御もままならないまま殴り飛ばされた俊夫の召喚獣は、霞のよ
うに宙に消えた。

「前田君！　って、えええっ？！」

俊夫に声をかけつつ、切りかかってきた明久の召喚獣を迎撃しよ
うとするひばり。

ところが召喚獣が思うとおりに動かない。

一方で明久の召喚獣は、先ほどより早く、鋭く切りかかってくる。
抜き付ける暇もなく木刀を打ち込まれたひばりの召喚獣は、何と
か体を逸らしてダメージを減少させていた。

「うっ、こうなったら……」

「明久！　置かけろっ！　腕輪を使わせるな！」

ひばりの次の行動に思い当たった雄二の指示が跳ぶ。

「了解！　だああっ！！」

それを受けて明久が猛ラッシュを始める。

「わ、わっ、わわわっ？！」

動きが緩慢になった己の召喚獣を必死に操り、攻撃をいなそうと
するひばり。

しかし、それは叶わず、少しずつ点数が削られていく。

「もう、何なのよ！」

「落ち着け支倉。おそらく坂本の腕輪のせいだ」

己は戦死したが、まだやれることはあるとばかりにひばりのセコ

ンドにつく俊夫。

「丁寧に操作するんだ。支倉ならやれる」

「う、うん」

俊夫に言われ、落ち着いて操作し始めるひばり。

すると、召喚獣の動きが滑らかになっていき、明久の攻撃を捌き始める。

「チ。シヨックから立ち直る前に倒したかったが……」

言いながら召喚獣を突進させる雄二。

繰り出される腕甲と木刀をなんとか避けさせる。

すでに点数は50を割り込んでおり、クリーンヒット一発で終了しかない。

薄氷を踏んで歩いているかのような顔のひばり。

迫る腕甲を避けた先に木刀が現れ、それをいなせば、また腕甲が襲いかかる。

それを蹴りあげて後退するも、すぐさま木刀の召喚獣が間合いを詰める。

懸命に振るった倭刀を木刀に弾き上げられ、開いた体を狙って腕甲が突き込まれる。

それを倭刀の柄を叩きつけるように振り降ろして逸らすと、横合いから木刀で切りつけられる。

召喚獣の頭を振ってそれをやり過ぎさせるが、次の攻撃が迫ってくる。

「だ、駄目……」

手数に押し負けそうになり、声を挙げてしまう。

朱金の腕輪と形態変化の消耗点数が消費できない以上、逆転の目は無きに等しい。

「……諦めるか？」

「やだ！」

俊夫の問いに、子供のような拒否を返す。

同時に、召喚獣が腕甲を交い潜り、木刀を顔に掠らせながら疾風

った。

鐸鳴りの音を引いて駆けたひばりの召喚獣。

フルブレーキングし、低い姿勢で反転し、突進する。

狙うは、駆け抜け様に切りつけた衝撃で、体勢を崩した雄二の召喚獣。

その首めがけて倭刀の刃が閃く。

その光が首筋に食らいつこうとした瞬間、大きな衝撃がひばりの召喚獣の動きを止めた。

わき腹に食い込んだ木刀の先端。

その一撃に大きく吹き飛ばされ、地面に叩きつけられてバウンドし、そのまま転がるひばりの召喚獣。

それでもなお、立ち上がり、倭刀を構え……。

光の粒子に包まれて雲散無消した。

『勝者、坂本、吉井ペア！』

教師の声が挙がり、勝者がコールされた。

ここに、試験召喚大会の優勝者が決定したのだ。

第四十七問（後書き）

第四十七問、いかがでしたでしょうか？

決勝戦はこんな形で決着が付きました。

そして、今回登場した新キャラ、高杉総司は、海の永帝さん発案の土佐弁キャラクターです。

海の永帝さん、ありがとうございました♪

それでは、また次回もよろしく願いますね♪

第四十八問（前書き）

第四十八問、更新しました♪

いよいよ清涼祭編も終盤です♪

それでは、読んで下さるみなさんが楽しんでいただければ幸いです♪

第四十八問

「はあ。負けちゃったか」

一つ息を吐きながら呟くひばり。

しかし、その表情はさっぱりとして清々しいものだった。

そんな彼女の頭に、大きな手が被さる。

「ナイスファイトだったぞ？ 支倉」

少年、というには親父臭い顔の前田俊夫だ。

試合が終わった四人は、舞台を降りて裏へと歩く。

明久と雄二は、表彰の準備。

戦死した俊夫とひばりは、小テストでの回復試験を受けるところだ。

その間、三位決定戦が行われ、その後の準備中に有志によるアトラクションが催される予定だ。

その後、表彰式が行われ、新たな腕輪によるデモンストレーションが行われる。

別室へ向かって歩いていった四人だったが、別れる直前、思い出したように俊夫が口を開いた。

「そっぴいあ坂本、腕輪の能力って何だったんだ？」

「あ？！ そうだよ、急に動かし難くなっちゃったよ」

俊夫が雄二に訊ねたのに乗っかって、ひばりも声を挙げる。

すると、雄二はイタズラが成功した子供のような笑みを浮かべると、口を開く。

「天軍の箱庭」って能力でな。フィールド全体に効果がある特殊能力だ。効果は、簡単に言えば味方の速度を1.5倍に引き上げ、敵の速度を0.5倍、つまり半分にすることが出来る。ただし、一体につき一秒1点消費だからな。誰に効果を付加するか考えなきゃならん」

「へえ、そうだったんだ」

雄二の説明に、明久が感心したような声を挙げた。

「って、アキくん知らなかったの?!」

「え? う、うん」

どうやら明久は事前に説明されてなかったらしい。

「いきなり反応速度が変わったら、もっと操作に戸惑うはずなんだから……」

さすがの俊夫も苦笑い気味だ。

「まあ、そこら辺は賭だったんだがな。さすがは観察処分者の操作技量って処か」

そう言って笑う雄二。

「はあ、坂本君ってば……。ちゃんとアキくんに説明しておきなよ……」

ひばりは、またもや息を吐きながら呟く。

そうこうしている間に、回復小テストの会場に着いた。

「じゃあアキくん。また後でね」

「うん。ひばりも小テストがんばってね」

言葉を交わして離れるふたり。

そして、雄二も俊夫もそれぞれのパートナーに続いていった。

二年Aクラスと、三年Aクラスの激突となった三位決定戦は、点数で勝る翔子と優子を、やけに気合いの入った常夏コンビが抜群のコンビネーションと操作技術で翻弄し、猪突猛進気味の優子を倒してから、二対一で翔子にあたっていた。

それでも、僅差だった辺り、翔子の強さが伺える。

それが終了すると、三年生有志による、召喚獣の集団パフォーマンスが始まった。

召喚獣が踊り、火の輪を潜り、ジャグリングし、組体操をする。ディスプレイにも大寫しとなったそれらに、会場中から歓声が上

がる。

『すごいすごい！　すごいです！　葉月も召喚獣さん使ってみたいですー！』

『あんなに動けるようになるものなのね？　召喚獣って。ウチも出来るようになるかしら』

『明久君やひばりちゃんにコツを教えて欲しいですね』

『まあ、練習次第ですよ。あそこにおられる三年生みなさんは、操作技術のうまさでは上から数えた方が早い方ばかりですし』

『おおっ、あれに見えるはゆっきーにしまっちだねい、みんな元気そうだよん』』

そして、パフォーマンズのトリは、正装した男子と、ドレス姿の女子の二人と、その召喚獣が同時にダンスを踊るというものだった。それを見たＦクラス女性陣＋１は、一様にうっとりとなる。

『……いいなあ。（ウチもアキと……）』

『素敵ですね……。 （私も明久君と……） 』

『……（ワシも支倉と……）』

『（てっちゃんも踊ってくれそうにないかなん？　いやいや、そこは押せ押せで……）』

『わあ、葉月もバカなお兄ちゃんとおどりたいですっ！』

『はあ。高名と踊れるでしょうか……』

そうしてアトラクションタイムは終了した。

アトラクションも終了し、戦舞台だったそこに、表彰台が設置され、表彰式が始まった。

舞台上には、決勝戦で司会を務めた人物がマイクを持って立っていた。

その舞台袖で出番待ちする六人の男女。
中肉中背で、優しい顔立ちながら、どこかネジが一本抜けているかのような雰囲気少年、吉井明久。

子供のようにちんちくりんな背丈に、長い黒髪ポニーテールと自己主張の激しい胸部を持つ少女、支倉ひばり。

180cmの長身に逆立てた赤毛と肉食獣のごとく引き締まったボディの少年、坂本雄二。

同じく180cmでありながら、全身をくまなく覆う筋肉で一回り大きく見える、男臭い顔立ちの少年、前田俊夫。

坊主頭な夏川俊平とソフトモヒカンな常村勇作の常夏コンビ。
出待ちをしながら言葉を交わす。

「表彰式だなんて、なんだか緊張するね？ アキくん」
少し硬い表情で隣の少年にこえをかけるひばり。

「うん。症状を貰うなんて小学校のかけっこ大会以来だよ」
答える明久も軽く緊張しているようだ。

と、少年を挟んで、反対側から声がかかる。

「まあ、アトラクションの一環みたいなもんだからよ、落ち着いて……ってなんだよおまえら。俺が会話に加わったらおかしいか？」

隣の二人が意外そうな顔で自分を見ているのに気づき、半ば慚然となる夏川。

「ああいえ、なんと言いますか……」

「先輩らしいこと言ってるなあと思ひましてえっと……？ 常川先輩？」

「夏川だ！ たく、少しアドバイスしてやろうと思ったのにお前らは……」

軽く青筋立っている坊主頭に、ひばりが恐縮する。

「あ！ ス、スイマセン夏川先輩。ほらアキくんも」

「あ！？ すいません、えと……村……常夏先輩」

「てめえ！ わざとやってんのかっ？！」

名前が出てこないばかりか、コンビ名で言われていきり立つ夏川。

「……静かにして下さい」

案内役の教師に、三人そろって注意されてしまう。

「す、すいません」

「ごめんなさい……」

「な、なんで俺まで」

縮こまる前三人。

それを見ていた常村がため息をつく。

「つたく、なにやってんだお前は……」

「くく。まあ、いーじゃないですか常夏先輩さん」

隣で聞いている雄二が笑いながら答える。

その横で、俊夫も笑みを浮かべていた。

「はは、こういう方が、俺たちFクラスらしいからな」

「俺は、三年でAクラスなんだが？」

俊夫の言いように、常村が憮然となる。

「くつくつく。笑ったり騒いだりする余裕があるって話さ。肩肘張る必要もないだろ」

「タメ口かよ。まあ良いか。お前らが礼儀知らずなのは分かりきったことだしな」

雄二の言葉に、常村が一瞬眉を顰めるが、すぐに相好を崩した。

「……うう、あたしまで礼儀知らず扱いだよ……」

後ろから聞こえる言葉に、ひばりは少し、泣きたくなった。

と、教師が振り向き、ひばりはまた注意されるのかと身構えてしまう。

しかし、教師はにこやかに口を開いた。

「さあ、出番ですよ。落ち着いて行ってきたて下さい」

そう促され、舞台へ上がっていく六人。

その姿を認めた観客から大歓声上がり、ひばりはおるか明久たちもその雰囲気吞まれてしまう。

「あわわわわ、ど、どうしようアキくん?! 人がいっぱいだよ?!」

「お、おおお、落ち着くんだひばり」

目をぐるぐるさせて、明久の服の端にしがみつくひばり。

しかし、当の明久もテンパリ気味だ。

その後ろの二人、肝が据わっているはずの雄二と俊夫ですら、満員御礼の観客席をみて思わず声を漏らす。

「こ……こいつぁ」

「すごい人数だな……」

そんな彼らの横で、常夏コンビも青くなっていた。

戸惑うように足を止めた六人に、案内役の教師が声をかけ、そのまま表彰台へと案内する。

もっとも高い台に、明久と雄二が上がり、次の台へとひばりと俊夫が上がる。

最後に一番低い台へと常夏コンビが上がって、全員が観客席を向いて姿勢を正した。

『さあ! 皆様お待たせしました! 文月学園清涼祭試験召喚大会トーナメント』の表彰式を始めます! まず三位に入賞したのは、三年Aクラス、常村勇作君と、同じく三年Aクラスの夏川俊平君です! みなさん拍手を!』

司会者の声に拍手が湧き、学園長が二人に近づき、賞状を渡す。

「今回の結果は残念だったね。次があれば三年のAクラスらしい結果を出しな」

「は、はい……」

「あ、ありがとうございます……」

観客を気にしてか、この女傑にしてはマシな物言いだが、表彰台に立ってなおそう言われるとは思っていなかった二人は微妙な表情になる。

『続きまして、二位入賞は、二年Fクラスの支倉ひばりさんと、同じく二年Fクラスの前田俊夫君です!』

三位に続いて、二位入賞の二人が紹介され、会場中から割れんばかりの拍手が送られる。

『学園の特徴でもある、テストによるクラス分け。そして、その底辺であるFクラス在籍ながらも、持ち前の向上心と不断の努力を以て成績を向上し、素晴らしいまでの召喚獣操作でここまで勝ち上がった二人。素晴らしいまでの向学心です』

司会者の言葉が続く中、学園長がひばりたちに近づき、賞状を渡す。

「よく頑張ったね。あんたたちのその頑張りに、これからも期待させて貰うとしようかね」

言いながら、珍しく相好を崩す学園長。

それに応じるようにひばりは頷く。

「ハイ！ 学園長先生。これからも頑張ります！」

ひばりの言葉に学園長も笑いながら頷いてみせる。

そして二人に送られる拍手喝采。

それを聞き、ひばりは軽く上気しながら微笑んだ。

拍手が鳴り止むのを待ち、司会者がマイクを片手に居住まいを正す。

『さて皆様！ お待たせいたしました！ 文月学園清涼祭試験召喚トーナメント、優勝は二年Fクラス所属、坂本雄二君と！ 同じく、二年Fクラス所属、吉井明久君！ なんと、二年Fクラスはワンツーフィニッシュ！！ 途中、予選でFクラス同士の試合があったため、表彰台を独占とはなりませんでしたが、一位と二位を独占です！！ 周囲の成績優秀者や上級生を押さえてのこの結果！』

司会者の言葉を受け、会場が揺れんばかりの拍手で埋め尽くされる。

「…… すごい迫力だな」

「…… 僕、こんな所に立っていて良いのかな？」

冷や汗をかきつつ小声で言葉を交わす雄二と明久。

そこへ、妖怪と見間違うばかりの老女傑、藤堂カヲルがやってくる。

「優勝おめでとう。この調子で、しっかり成績を上げるんだね」

言いながら、賞状を二人に手渡し、笑ってみせる。

その視線が、意味有りげに雄二の視線と絡み合い、お互いに口の端をつり上げた。

一方、その横で明久は会場の雰囲気になされたのか、よく分からない脳内物質を分泌させ、興奮気味に右手を突き上げた。

『つしゃあああああつつつつ……!!!!』

あがった明久の声に呼応するように会場中から大歓声が上がる！

「…… やれやれ、調子に乗って問題を起こさなけりゃいいんだけどねえ」

呟く学園長の言葉に、雄二は肩をすくめた。

『さて、続きましては、試験召喚システム新技術の公開となります。すでに説明がありました通り、試験召喚システムとは……』

表彰式が終わり、拍手とともに見送られた六人が、舞台を降りると、さっそく司会者が進行を始める。

一方で舞台を降りた六人のうち、明久と雄二はデモンストレーションにかり出されるため待機中だ。

「…… それですね、どちらかのチームにデモンストレーションのお相手をお願いしたいんですが……」

呼び止められた、ひばり、俊夫、常村、夏川は、教師からそう説明を受けていた。

四人は顔を見合わせたが、すぐにひばりが前に出る。

「あたしは構いませんよ？ 前田君は？」

「俺も構わん。新しい技術っていうのにも興味有るしな」

ひばりの問いに俊夫が頷く。

常夏コンビからも特に不満や否定意見も出ず、同じFクラス同士の方がやりやすいだろうということで、わりとすんなり決まった。

舞台の中央に立つ、雄二と明久。

デモンストレーションの説明中にスタッフから『白銀の腕輪』を受け取り、説明を受ける。

そして、ついに司会者からデモンストレーションの開始が告げられた。

と、ひばりたちの待機するのとは反対の舞台袖から、一人の男が現れる。

少し神経質そうだが、目つきの鋭い、眼鏡の中年男性。

司会者もスタッフも呆気にとられる中、観客の方へ向き直る。

「……あれって、竹原教頭先生？」

「……ああ。だがなんだ？ この気配は……」

教頭の姿を認めてきよとなるひばり。

俊夫も鋭く彼を睨みつける。

「ご来場のみなさん。これが試験召喚システムの新技術、『黄昏の腕輪』です。さあ、黄昏の宴を始めましょう！」

竹原の声に呼応するかのように、『黄昏の腕輪』が紅く輝く。

そして、会場を紅い空間が覆い尽くした。

第四十八問（後書き）

第四十八問、いかがでしたでしょうか？

ついに現れた教頭。

その紅い空間でなにが起きるんでしょうか？

いよいよクライマックスフェイズですっ！

次回もよろしく願いしますね♪

第四十九問（前書き）

第四十九問、更新しました♪
読んで下さる皆さんに楽しんでいただければ幸いです♪

第四十九問

「な、なにこれっ?!」

「こいつは……」

紅い空間に取り込まれた会場でひばりは思わず声を挙げる。隣
の俊夫も戸惑うような声を出すばかりだ。

一方で、雄二と明久は現れた竹原教頭に向き直り、身構えている。
「教頭先生! いったい何のつもりです!」

「……こいつは召喚フィールドか?」

ふたりが竹原に問う。

「ンツフツフ、くつくつく……」

「なにがおかしい!」

肩を揺らして笑い始めた竹原に、明久が声を挙げる。

と、重い物が放り出される音が響いた。

突然司会者が倒れたのだ。

それを皮切りに、会場中から金属音や何かが倒れる音が立ち始め
る。

「アキくん! 坂本君!」

周りの様子に、あわてて明久の元へ走ってくるひばり。

後れて俊夫と案内役をしていた教師がやってくる。

「竹原教頭! これはどういうことですか!」

食ってかかる教師。しかし、竹原は狂喜じみた笑みを浮かべなが
ら一つの言霊を紡ぐ。

「サモン
試獣召喚」

その言葉に呼応し、魔法陣が展開される。

それは、普段の召喚で使われるモノと違い、赤黒く、まがまがし
い雰囲気のものだった。

そして顕れるは、ディフォルメされた竹原教頭。

しかし、変化はすぐに起きた。

教頭の腕にはまった腕輪が、赤黒い輝きを放つと、召喚獣が苦しみます。

その手足は細く、長く、そしていびつに伸び、装備も砕けていく。口がどんどん裂けていき、幾つモノ牙が飛び出しはじめ、口以外のパーツが潰れていき、その頭は平べったくなってしまう。

手足の先からは、ねじくれた太い爪が伸びていき、額があつたであろう部位の皮膚を突き破って、一本の角が伸びていく。

「な、なにあれ……」

「か、怪獣……？」

そのおぞましい変化に、息を呑む。

「教頭……それはいつたい……う？」

突然、教頭に食ってかかっていた教師が、頭を押さえながら膝を着く。

「先生！」

突然のことに声を挙げて教師の元へと走るひばり。

その体を支えようとするが、力及ばず教師は倒れ込む。よく見れば、多くの一般客が倒れているのが分かった。

「母さん！　しっかりして！」

「祐太郎！」

「どうしたんだよ！　兄さん！」

「葉月！　葉月っ！」

あちらこちらから悲鳴のような声が挙がる。

「な、なに？　なんなのこれ！？　教頭先生、なにをしたんですか！」

思わず声を挙げるひばり。

すると、竹原教頭は軽く笑みを浮かべながら眼鏡の位置を直し、口を開いた。

「特殊結界『亡国の黄昏』というらしい。まあ、召喚フィールドの

一種だな。ある条件を満たす人間以外をすべて無力化できるらしい。その条件とは……」

「召喚獣か？」

竹原の声を遮る言葉。

周囲の様子をうかがっていた雄二の声だ。

「ほう……」

感心したような声を出す竹原。

「で、でも先生も！」

「いや、そのFクラス代表……… なんと叫ぶたかな……… 彼の言った通りだよ」

声を挙げたひばりを遮り、竹原が肯定する。

「クラス代表の名前を覚えてないなんて！」

「すまんね、出来損ないの名前など覚える必要を感じないものでね」
雄二の名前すら出てこないことに腹を立てるひばり。

しかし、竹原は薄ら笑いを浮かべながら肩を竦めるのみだ。

「ともかく、彼の言うとおり、召喚獣と契約している者には効果がないそう。守護霊がどうといったが、まあそれはどうでも良いな。問題は教師どもの召喚獣だったんだが、イベントにかまけていて警備がザルだね。教師は召喚出来なくなるように細工をさせて貰ったよ」

「どうやったんですっ！！ あのセキュリティは、そう簡単に突破できるわけが！」

したり顔で説明する竹原の言葉に、少女の声が響く。

黒髪の少女、来島アキだ。

いつもは眠そうな目を陰ししながら舞台へ上がり、竹原を睨む。その後ろから、瑞希や秀吉、クリスが続き、最後に葉月をおぶった美波が続く。

「……ある人物の協力だね。オカルト側からのアプローチをさせて貰ったよ。それでも教師の召喚獣を召喚不能にするだけで精一杯だったかね？」

イヤラしい笑みを浮かべる竹原に、アキは悔しそうに歯噛みする。
「それに、この方が私にとって都合が良くてね」

竹原のその言葉に呼応し、彼の召喚獣が動き出す。

「え？」

ふつうのものの倍近い身長になった竹原の召喚獣が振り上げる爪を見上げ、ひばりは呆けたように声を出す。

「危ない！ ひばりっ！」

思わず彼女に飛びついた明久。

そして、爪が地面を抉る。

よく見れば明久の制服の一部が裂けている。

「な、なにこれ！」

思わず叫んでしまうひばり。

「おいおい、しゃれになってねえぞ？ こいつは」

その様子を見ていた雄二も、声に焦りを滲ませる。

「くつくつく、さんざん私の邪魔をしてくれたクソガキを痛めつけて、泣き叫ばせることが出来るからなあっ！！ ひゃあーっひゃっひゃっ！！」

壊れたように笑う竹原を見て、呆氣にとられてしまう明久とひばり。

そこを突いて竹原の召喚獣が迫る！

「きゃあ！？」

「く？！ ひばり！」

小さな少女をかばおうと、明久が覆い被さる。

が、予想していた衝撃はやってこない。

恐る恐る顔を上げた二人が見たものは、召喚獣の一撃を、ひどく漢臭い顔の少年が受け流しながら拳を叩き込んだ姿だった。

「ま、前田君！」

「俊夫！」

思わず声を上げる二人。

しかし、それに応える余裕は、俊夫にはない。

「ッ、硬いな」

舌打ちしながら呟く俊夫の顔に向けて爪を突き出す召喚獣。頭を振ってそれを避けながらレバーブローを叩き込む。

が、意にも介さずもう一方の爪を振るう。

それを肘でかち上げながら蹴りを見舞う俊夫。

衝撃が広がり、空間を揺らす。

その一撃で数メートル後退する召喚獣。

「な、なんだと！？ 召喚獣と素手で渡り合うなぞ、貴様は西村かつ？！」

思わず叫ぶ竹原。

一方で俊夫は軽く手を振ってから身構える。

「……やれんことはないが、人間相手とは勝手が違いすぎるな、こいつは」

苦りきって呟く俊夫。

その向こうで、竹原の召喚獣が軽く震える。

その腹が膨らみ、震えながら上を向くと膨らみが上へとゆっくり移動する。

「……なんだ？」

訝しげに見るも構えを解かない俊夫。

一同が見つめる中、その大きな口がゆっくり開いていき、何かをせり出してくる

「な、なにあれ……」

「うえ……」

「気持ち悪いです」

口々に嫌悪を表すも身動きが取れない。

そして、上を向いていた口が下を向き。

中にあつたモノが次々落ちる。

「ヒィッ」

上がった悲鳴は誰のものだったのか。

竹原の召喚獣から吐き出されたのは、白い粘液に包まれた召喚獣

だった。

「ええい、なんだこれはっ?!」

その紅い壁を前にして、筋骨逞しいその漢は声を挙げることにできなかった。

数分前、突如として顕れたこの壁は、校庭に設営された会場を覆ってしまっていた。

その中を伺い知ることは出来ず、通り抜けることも出来なかった。
「駄目です、西村先生。離ればフィールドは展開できますが召喚が出来ません」

他の教師が集まってくる。

「むっ、どうしたものか……」

学園長の指示を仰ぎたかったが、その学園長も閉じこめられており、連絡がつかなかった。

不意に、教師たちの表情が呆けてしまい、三々五々に散り始めてしまう。

「お、おい? どうしたんだ? 一体?」

突然のことに戸惑う西村教諭。

と、そこへ声がかかる。

「西村先生には効果が薄いようですね」

それに振り向くと、メイドドレスを身に纏い、長い黒髪を、水色のリボンでポニーテール纏めたフレームレス眼鏡の少女、神薙御鳥が立っていた。

「君は、二年Aクラスの神薙か? 一体どういうことだ?」

「学園全体に、認識を阻害する結界を張りました。これで外はパニックになりません」

見れば、生徒も一般客も教師も、目の前の異常事態に気付きもせず祭りを楽しんでいる。

その事実には驚愕する西村。

しかし御鳥はそれを気にするでもなく紅い壁に近づいていく。

「かなり強固な結界ですね。今、学園在籍の術者は私一人。一人で破れるでしょうか……」

不安を隠すことも出来ずに一人ごちる。

しかし、不安を振り払うように壁を睨みつけた御鳥は、意を決して身構えた。

「ッ！ こいつはマズいぜ！」

竹原の召喚獣が産み落とした召喚獣モドキは三体。俊夫一人では抑えきれない。

そのことに歯噛みしていると、よく通る声が響く。

「明久！ 召喚獣を召喚だ！ 向こうが喚べたなら、こっちも喚べるはずだ！」

その雄二の言葉に、明久がハツとなる。

「そ、そうか！ よーし！」

身構え、大きく口を開く。

「え？ ちょっと待つ……」

「試獣召喚！^{サモン}！」

ひばりの制止も間に合わず言霊を紡ぐ明久。

すると、いつもの魔法陣とは、少し違う魔法陣が顕れ、召喚獣が召喚された。

「よし！ 問題なく召喚出来るな」

「つて、雄二キサマ！！ 僕を実験台にしたなっ！？」

雄二の言葉に食ってかかる明久。

しかし、当の雄二はさも当然とばかりの顔で笑ってみせる。

「当たり前だ。こない異状状態での召喚がうまくいく保証はないから……（スパアアンツ！！）ぶほあ？！」

したり顔の雄二の頭がブレて地に伏す。

「アキくんで実験しないでよ!!」

【小烏丸】片手に怒鳴りつけるひばり。

そこへ鋭い声がかかる。

「漫才は後だ！ 来るぞ！」

動き出したモドキどもの一匹を迎え打つ俊夫。

それに並ぶように明久の召喚獣が木刀をふるいながら走る。

そして。

「「^{サモン}試獣召喚！」」

二つの声が言霊を唱和し、二つの魔法陣から、二匹の使役獣が飛び出す！

白ランの召喚獣がメリケンサックで殴りつけ、倭刀が鞘走りの音を引きながら、その胴体を斬り裂く。

それだけで、モドキは雲散無消してしまふ。

「？ 思ったより弱い？」

首を傾げるひばりだったが、向こうを見て愕然となる。

「ま、また吐き出してる！」

その声に雄二や俊夫も顔を引きつらせた。

「マジか……」

「マズいな……」

次々にモドキを吐き出す竹原の召喚獣。

倒せど倒せどキリがない。

俊夫や秀吉、クリス、アキ、瑞希も召喚獣を召喚し、武器を振るわせる。

その様子を見ていた他の生徒達も己の召喚獣を召喚し、モドキを牽制していた。

「……雄二」

「ひばり！ 大丈夫？」

召喚獣に日本刀とランスを振るわせながら走ってくるのは、翔子と優子。

その横合いから一匹のモドキが襲いかかる！

「……?!」

「きゃあ?!」

思わず悲鳴を上げる優子。

次の瞬間、モドキが十七に分割され、巨大な斧に叩き潰された。

「……………間一髪」

「代表、優子、大丈夫だった?」

そう言いつつ姿を現したのは康太と愛子だ。

「大丈夫だったか? 翔子」

「……うん。ありがとう雄二」

小走りに走り寄り、翔子に声をかける雄二。

そのことに、わずかに口が弧を描く。

が、すぐに表情が引き締まる。

「……雄二、何かオカシイ」

「気づいたか。さすがAクラス代表」

「……茶化さないで、雄二。何で私たちはパニックにもならずに対処できてるの?」

「俺もそれを考えていたところだ。最初の内こそ身内等が倒れて一定のパニックにはなりかけていたが、今じゃ大半が召喚獣を召喚して対処している。こんな得体のしれない化けもんを相手にしてるのにな」

翔子に答えながら眉をひそめる雄二。

「……そして、その答えはきつと」

「ああ、召喚獣にあるんだろうな」

二人で武器を振るい続ける己の使役獣の背中を見る。

「なんにせよ、今はこの事態を切り抜けることが先だな」

「……うん」

二人に応えるように、白ランの召喚獣が連打で相手を崩し、日本刀を持った翔子の召喚獣が唐竹割りに斬り裂く。

「ナイス連携だ、翔子」

「……夫婦だから当然」

「籍を入れた覚えはねえっ！」

雄二のツツコミに、残念そうにする翔子。

その向こうで幼なじみトリオが戦っている。

「たあ！」

召喚獣に木刀を振るわせ、相手の隙間を駆け抜けさせる明久。

それに対応すべく動いたモドキを倭刀が斬り伏せる。

「や！」

居合いの技で相手を切りつけつつ誘導していくひばり。

「いまだよ！」

「瑞希ちゃん！」

「はい！」

明久とひばり、二人の声に応え、瑞希の召喚獣から熱線が発せられる。

その先には、大量のモドキに混じってひばりと明久の召喚獣もいる。

「Luna!!」

Lの字の出現とともにひばりの召喚獣の倭刀がムチのようにしなりながら伸び、柱に巻き付くと、急速に縮んで明久の召喚獣を抱えたひばりの召喚獣が、モドキの集団から飛び出す。

その一瞬後、十数匹ものモドキが焼き払われ消えていく。

しかし、熱線を放った瑞希と、その召喚獣の背後にもモドキが近づく。

「みっちゃん危ない！」

「！」

ひばりの声を聞いて、背後に迫る気配に気づいて振り向く瑞希。

と、迫るモドキの頭が撃ち抜かれ、霞と消える。

頭上に聞こえた羽音に見上げると、羽を広げたクリスの召喚獣が高速で飛行しながら槍状のライフルでモドキを狙撃していく。

ステージの端では、気を失った葉月を背後にかばいながら美波が

召喚獣にサーベルを振らせている。

「葉月には手出しさせないんだからね！」

「寄るでないわ、この召喚獣モドキめらが！」

秀吉も召喚獣にナギナタを振らせてモドキを斬り裂いて、彼女の援護に回っており、安全は保たれているようだ。

その戦場を風の如く走るものがある。

‘加速’を使った康太の召喚獣だ。

戦場を縦横に走り、手にした小太刀で敵を斬り裂く。

そこへ、巨大な斧が叩き込まれ、モドキを粉碎していく。

「ボク達って結構相性良いみたいだね？ ムツツリーニくん」

「……………そんな事実はない（プイッ）」

「素直じゃないね」

康太と背中合わせに立ちながら、どこか嬉しそうに愛子が言う。

そして中央付近では、俊夫の召喚獣が数十匹のモドキを相手に奮戦していた。

右から襲いかかるモノへ肘を叩き込み、反対から迫る奴を蹴り飛ばす。

その勢いを以て背後のモドキの頭を殴り飛ばしていく。

それでも途切れること無く押し潰そうと迫るモドキの大群。

それを跳躍してやり過ぐすと、溢れんばかりの光の濁流がモドキ共を押し流していく。

アキの召喚獣の肩アーマーが変形したパラボラから放たれたレーザービームの輝きだ。

さらに腰だめに構えた大砲から、砲弾を撃ちだしていく。

特に打ち合わせをしているわけでもないようだが、前衛と後衛がうまく機能しているようだ。

そんな風に倒されていくモドキだが、竹原の召喚獣が次から次へと産み出しており、なかなか数が減ってはくれない。

「チ。このままじゃジリ貧だな」

「……………雄二、どうするの？」

モドキを捌きながら思考する雄二。

翔子はその間の護衛を務める。

と、雄二が顔を上げた。

「やはり、‘親’を何とかしないことにはどうにもならんな。奴ま
での道を作るには……」

素早く戦力を把握し、道筋を立てていく。

「前田！ 来島！ ‘親’までの道を作る。前を頼む」

その言葉にうなずくアキと、拳を突き上げて応える俊夫。

「土屋！ 工藤は攪乱をたのむ！ 秀吉！ 島田！ クリスは召喚
者を守るんだ」

「……………了解」

「任せてよ」

「心得た！」

「みんなこつちへ！」

「制空権はこつちのものだからねい」牽制射撃、いくよん」
応えて動き出す一同。

「明久！ 支倉！ 姫路！ ‘道’を作る、三人で竹原の召喚獣を
落とせ！」

「了解！」

「わかったよ！」

「いきます！」

走り出す三匹の召喚獣。

「……翔子」

「……何？」

「腕輪を使ってくれないか？」

「……わかった」

雄二の頼みに即答する翔子。

「言つといてなんだが、良いのか？」

「……出し惜しみできる状況じゃない。それに、雄二の頼みだから」
「さんきゅ」

言いながら翔子の頭に手を乗せる雄二。
優しく撫でられるその感触に、翔子は頬を紅潮させた。

「天軍の箱庭、起動！」

「……百竜陣、」

二人の言葉に、雄二と翔子の召喚獣の腕輪が輝く。
モドキの数が多すぎるため、味方の速度上昇に務めているが、どれほど消耗するかわからない。

点数の表示がないため、消耗率がわからないのだ。

その横で、翔子の召喚獣の日本刀の刀身に、細く長い、半透明なエネルギーが幾本も巻き付くように旋回しながら現れる。

翔子はそのまま召喚獣に日本刀を振るわせる。

するとそのエネルギーは何十もの絡まりあった蛇のように伸びていき、モドキ達を打ちのめしていく。

そうして穿たれた楔へと俊夫の召喚獣が踊り込み、アキの召喚獣が追撃とばかりに肩を光らせる。

そうして出来た道へと飛び込む三匹の使役獣。

その両脇を俊夫とアキの召喚獣が固め、消耗を軽減させる。

その頭上で、クリスの召喚獣がロールしながら次々と射撃をしていき、モドキに邪魔をさせない。

「天軍の箱庭」の効果を受け、ふつうより速い速度で駆け抜けた、明久、ひばり、瑞希の召喚獣。

「少し遠いね」

ひばりが呟くと、目の前にスクリーンが展開された。

「はあ、はあ。構築完了、やっと……フィールドに干渉できました。それは、召喚獣の視覚データ。すなわち見ているものです。視点が違うことに気をつけてください！」

見れば、アキの目の前の空間に、ホログラム端末が出現しており、

指先だけでそれらをコントロールしている。

しかも召喚獣の操作も同時にこなしているらしく、汗だくになり、肩で息をしながら立っている。

「ありがとう！ 来島さん！」

言いながら召喚獣を走らせるひばり。

‘C’ と ‘B’ の文字が召喚獣に吸い込まれ、その体が緑とスライブルーに染まる。

振るった刃で、化け物と化した竹原の召喚獣を切りつけていく。

ついで瑞希の召喚獣が大剣を叩きつける。

ブーストアップ
「強化！」

声とともに木刀が大太刀に変化し、それを振るう明久の召喚獣。

そんな三匹に切り込まれた竹原の召喚獣は、モドキを産み出すのをやめて暴れ始めた。

その長い爪が瑞希の召喚獣へ迫り、それを横にした大剣で受け止める。

そこへ切りかかる明久の召喚獣。

しかし竹原の召喚獣はそれを爪で受け止め、力づくで弾き飛ばす。

その隙に瑞希の召喚獣はバックステップして距離を開ける。

そこへ、『metal!』の電子音とともに左半身を銀色に染

め、刀を棍へ変化させて打ちかかるひばりの召喚獣。

風を纏った其れは肩口へと叩き込まれ、竹原の召喚獣が体勢を崩す。

「今です！」

珍しく叫びながら、召喚獣に剣を振らせる瑞希。

その一撃が、竹原の召喚獣の腕を切り飛ばす！

それを見て、明久は召喚獣を走らせて大太刀で切り上げた。

その胴体を切り裂かれた竹原の召喚獣は一步、二歩と後退する。

「今だ！ 畳みかけるよっ！ ひばり！ 瑞希ちゃん！」

「わかったよ！ アキくん！」

「はい！ 明久君！」

明久に伝えて召喚獣を走らせる、ひばりと瑞希。
その勢いに、竹原は一瞬気圧される。

『！……舐めるなっ！ クソガキ共がっ！』

竹原の叫びに呼応し、彼の召喚獣が大口を開け、雄叫びを挙げる。
空気が揺らぎ衝撃波が広がって三匹の召喚獣を薙ぎ払う。

「うわあっ?!」

「ひゃあっ?!」

「きゃあっ?!」

召喚獣の視点で戦っていた三人は思わず悲鳴をあげてしまう。

「明久!」

「瑞希!」

「ひばりん!」

三人の悲鳴に雄二、美波、クリスも思わず声を挙げる。

「だ、大丈夫だよ」

「はい、少し驚いただけです」

ひばりと瑞希はすぐに答えるが、明久だけが膝を着いたまま答え
ない。

「ぐ、ぐっ……」

「あ、アキくんっ!? フィードバックが……」

「……大丈夫、いけるよ」

震える足に力を込めて立ち上がる明久。

同時に、装備を砕かれ、ボロボロな三体の召喚獣も、震えながら
立ち上がる。

それを見て、竹原は溜飲が下がったのか、余裕の笑みを見せる。

「ハハハハハ、諦めろ、絶望したまえ。この私の邪魔をした報いを
受けるのだ。ハハハハハ」

哄笑する竹原。

『……諦めない!』

「なんだと？」

その笑いを遮り、声が響く。

気分の良いところへ水を差された竹原は、不快げに肩眉を跳ね上げる。

そんな彼を見据えるのは、小さな少女、支倉ひばり。

「みんな、清涼祭を楽しみにしていた。がんばってきた。あたしは、みんなと、すてきな思い出を、一杯作りたい！ だから、こんな訳の分からないことで諦めない！」

ひばりの言葉にうなづく明久と瑞希。

しかし、竹原は小馬鹿にしたような顔になる。

「……ふん、笑わせる。貴様等は社会という機械へと組み込まれるための部品にすぎん。その精度と品質の高さが、学校という工場の売りなのだ。思い出などというものは必要ない」

言い切る竹原。

だが、ひばりはかぶりを振りながら叫ぶ。

「違うよ！ 思い出は、とても大切なものだよ！ その人の心を育てていくために必要な栄養なんだよ！ それをこんな風に壊そうとするなんて……許せないよ」

その勢いに竹原の顔が歪む。

「子供の分際で……おまえは何なのだ！？」

そう、問うた彼をまっすぐ見つめるひばり。

「あたしは、ただの学生だよ！ この、文月学園の二年Fクラスに所属する、ただの学生だよ！」

その声に応えるように、ひばりの召喚獣の足下から、まばゆいばかりの光の柱が立ちのぼり、その姿を包んでしまう。

そして、その柱を道に、燃え盛る炎で出来た鳥が舞い降り、
'X'の字をかたどった。

『EX TRE AM!!』

電子音が響き、光の柱が左右に割れて、召喚獣が姿を現す。

その衣装は中央のプリズムカラーを挟んで、右が緑に、左が黒く

なる。

青かったブレストアーマーもその三色に分かれ、新たに右肩に緑の、左肩に黒の肩アーマーが追加され、腕にはやはり緑と黒の籠手、腰回りはスカート状で前後と左右に分割されたアーマーになり、前と後ろはやはりプリズムに。

側方は、やはり緑と黒。

そして足を包むグリーヴも緑と黒のものとなっていた。

さらに赤い腰巻きには、‘X’をかたどったメカニカルパーツがあらわれた。

その瞳は赤く、髪は七色に反射するプリズムへ変化しており、それを纏めるリボンの右側は緑。そして、左側は黒になる。

宙空にメカニカルパーツで構成された円盤状のの物体が現れ、その裏にある取っ手を持ちながら円盤を鞘代わりにした剣を引き抜いた。

その立ち姿は雄々しく、バックラーとグラディウスを構えた、古代ローマの剣闘士を彷彿とさせる。
グラディエーター

「おのれ、今一度ぼろ切れのようにしてくれるわ!」

竹原の叫びに、召喚獣が大きく息を吸い込む。

それに対して、バックラーを突き出すように構えるひばりの召喚獣。

その盾に‘X’を描くように四つの文字が現れる。

H

L

M

T

それらが盾の中央に収束し、光輝く。

そこで竹原の召喚獣が、ふたたび雄叫びを挙げた。

次の瞬間、盾を中心として、信じられないほど巨大な魔法陣が出現し、衝撃波を碎き消す！

「な、なんだとっ？！」

思わぬことに、驚愕する竹原。

その隙で十分だった。

彼の召喚獣を挟み込むように移動した明久と瑞希の召喚獣は、それぞれの獲物を腰ために構えて突進する。

二振りの刃が異形の召喚獣を切り裂き、ふたりの召喚獣が駆け抜ける。

と、同時にブレーキングして反転し、大剣と大太刀が切り上げた。声にならない悲鳴を上げる、竹原の召喚獣。

そこに電子音が響いた。

『EXTREAME MAXIMUM DRIVE!!』

それと同時に巨大な竜巻が出現し、長く伸びて天翔る龍となる。

その顎が竹原の召喚獣を飲み込んだかと思うと、竜巻の真ん中を飛翔するようにひばりの召喚獣が突進していき、手にしたグラディウスで竹原の召喚獣を切り裂く。

その一撃を受けた彼の召喚獣は、竜巻によってバラバラに引き裂かれて消え去った。

第四十九問（後書き）

第四十九問、いかがでしたでしょうか？

竹原教頭との対決に決着が着きました！

ちよつと見ない展開になってますが、みなさんはどう思われましたか？

『こんなのバカテストじゃない！』って怒られそうですね。

まあ、この先、このレベルの戦いはあまり起きない予定ですので勘弁して下さい。

それでは、また次回もよろしく願いします♪

第五十問（前書き）

第五十問、更新しました♪
読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第五十問

「うぐああああつつ?!?!」

己の召喚獣が消え去ると同時に声を上げる竹原。

獣の雄叫びにも似たそれとともに、竹原の体から、黒いナニかが抜け出し、はめていた腕輪が砕け散った。

抜け出した黒いナニかが宙空でたゆたうのに対して、ひばりの召喚獣が盾をかざした。

「え？」

思わず声を上げるひばり。

『HEAT MAXIMUM DRIVE!!』

『LUNA MAXIMUM DRIVE!!』

『METAL MAXIMUM DRIVE!!』

『TRIGGER MAXIMUM DRIVE!!』

電子音と共に、H、L、M、Tの文字が円形盾にXを描くように顕れ、最後に真ん中にPが顕れる。

『PRIZUM MAXIMUM DRIVE!!』

最後の電子音と共に、盾が輝き、赤、金、銀、青の光弾と、まばゆい光を放つ光線が撃ち出された。

それは、黒いモノを貫き、それを吹き散らすと、虚空を切り裂いていく。

それで、黒いモノは、完全に消えてしまった。

「……………」

その様子を呆気にとられたように眺めるひばり。

「うわあ、ひばり、あの黒いのなんだったの……? ひばり?」

それを見ていた明久が声をかけるが、ひばりの様子がおかしいことに気付いて首を傾げる。

己の召喚獣の後ろ姿を見ながら、ポツリと言葉を落とす。

「………… あたし、操作してない…………」

「……え？」

ひばりの言葉に、明久は驚いた。
と、盾をかざしたひばりの召喚獣が、それを下ろして構えを解いた。

そのままゆっくり振り返り、ひばりに向き直ると、軽く微笑む召喚獣。

不意に、一陣のつむじ風が召喚獣を包んだかと思うとその姿が、元の召喚獣本来のものに戻り、小さな火の鳥が宙空へ飛び去る。

「あつ?! 待って!？」

火の鳥は、ひばりの制止も聞かずに飛んでいってしまった。

「行っちゃった……。何だったんだろう?」

「え? 召喚獣の能力じゃないの?」

呟くようなひばりの声に驚く明久。

しかし、ひばりは首を振った。

「諦めたくないって、強く思ったら、あの姿になったんだよ。そういえば、操作の仕方と同時に頭に浮かんだっけ」

「ふ〜ん。僕の召喚獣もあんな風になったりするのかな?」

そう言っただけを想像する明久の横で、ひばりは火の鳥が飛び去った方向を見つめていた。

その様子をじっと見つめる者がいる。

黒髪ストリートロングに隅付き半眼の少女、来島アキだ。

彼女も火の鳥が飛び去った方角を見ていた。

赤黒い壁を前に、一人の少女が立つ。

メイドドレスを身にまとい、長い黒髪を水色のリボンでまとめてポニーテールにした、フレームレス眼鏡の少女、神薙御鳥だ。

その正面には六枚の札が、宙空に張り付くように浮かんでいる。目を閉じ、唱えた呪に合わせて手を打ち合わせる。

乾いた音が響いて、壁を揺らし、符が一枚、弾け飛んだ。

しかし、御鳥はそれに構わず手を左右へ開いてゆく。

すると、その合間に顕れるものがあつた。

弧を描いた白木の棒の中央を左手に取った。

その両端は徐々に細くなつていき、端と端を結ぶように弦が張られた弓が顕れていく。

その弦をつま弾くように弾くと、音が広がり、壁を揺らす。

ついで右手を懷へ忍ばせ、二本の指で挟むようにして、一枚の呪符を取り出す。

その呪符の中央を、口先でついばむようにくわえながら、右手で横に引いていくと、呪符はよれて細く、そして長くなつていき、その先端に鏃が顕れた。

矢となつた、それを引き抜く一瞬に、御鳥の舌が艶めかしく動き、鏃を舐める。

抜き取つた勢いのまま、矢尻を摘んだ右の手首を中心に、大きく回転させながら弓と共に頭上へと掲げ、矢尻を弦に充てながらゆつくりとした所作で曳いていく。

そして、時が止まつたかのように静止。

狙いし点を左の人差し指で指向し、照準。

瞳孔が窄まると同時に、指先に柔らかい光が点り、それが鏃に移つた瞬間。

ユンッー！

風を切る音と共に放たれる矢。

それが赤い壁へと向かい、命中した瞬間、そこを中心として魔法陣が広がっていく。

「……くうっ、硬い……」

横に向けた弓を握った左手を突き出し、胸元に引いた右手の人差し指と中指を立てて集中しながら呟く御鳥。

宙空の札が次々に弾けて破れていく。

最後の一枚が弾けると同時に、衝撃波が御鳥を襲う！

「！？」

それを目の当たりにした御鳥の顔が恐怖に染まる。

リボンがちぎれて眼鏡が吹き飛ぶ。

そして、破裂したかのような光に飲み込まれながら目を閉じる御鳥。

「ぬおっ？」

近くで見ることしか出来ない西村も、思わず目を閉じ、声を上げた。

一瞬後に静寂が訪れ、御鳥が恐る恐る目を開くと、そこには文月の男子制服の背中が見えた。

それらをスタスタにされながらも、右手で持った木刀を真っ直ぐ突き出して立っている少年。

高遠祐介がそこに居た。

「御鳥、大丈夫か？」

「だ、大丈夫だよ。でも、祐介が……」
「来るな！」

思わず駆け寄ろうとした御鳥を、声で制する祐介。

その鋭さに思わず足を止めてしまう。

「先にやることがあるだろう？ いま、アレを破れる術者はお前だけなんだ。頑張ってくれ」

「ゆ、祐介……うん、わかった。祐介は防御をお願い！」

「おう、任せろ！ 神薙の守護は、高遠の使命！ 何があっても、お前は俺が守る！」

力強い声と共に笑みを浮かべる祐介。

その後ろで、御鳥は顔を赤らめていた。

「どうした？ 御鳥」

「な、何でもない！　いくよ！　祐介！」

照れを隠すように強い語気で言い放つと、符を数枚取り出して投げ放った。

「あらあら、頑張るわね？　神薙の次期当主さんは。守護役もしやしやり出てきたし、竹原も負けたようだし、今回はここまでかしらね？」

学園旧校舎屋上で呟く影。

「霊力の質も高そうですね？　あれで技術も洗練されてきたらやっかいな相手に成長しそうだ。ここで潰れますか？」

「……いや、捨ておけ。今回の目的は達しているのだ。わざわざ我らの姿を晒す必要はない」

狭夜と真人の言葉に応える白髪の少年。

その視線は、見通せぬはずの紅い壁の向こうにいる者達へ向けられていた。

「じゃあ、どうしようかしら？　わたしはまだ遊び足りないのだけど？」

鋭い目で二人をねめつけながら狭夜が笑う。

それを受けて、真人が眼鏡の位置を直しながら、目を細めた。

「……次の仕込みもありますから、しばらくは大人しくしていて欲しいんですがね？　盛りのついた女狐には言うだけ無駄ですか」

「……あら、不能なトカゲが何か言ってるわね？」

険悪な雰囲気となる狭夜と真人。

金色のオーラと雷を伴う黒雲が二人から沸き立っていく。

「狭夜、しばらくは自重しろ。真人、仕込みは完璧にな」

不意に二人に間を通り抜けるように、冷たい声が響く。

それだけで、狭夜と真人は黙り込み、オーラも黒雲も雲散無消した。

「今回はあわよくば学園を潰せばよいと言う程度だったが、なかなかに侮れないもの達の存在が確認できた。‘黄昏の腕輪’も正常に稼動。目的を達することは叶わなかったが、得るものは多かった。いくぞ」

「は、仰せのままに」

「はあい、わかったわ」

校庭の方に、背を向けて歩き出す白髪の少年。

それに続いて、真人と狭夜も歩き出す。

その足が向かう先の空間が割れ、三人がその中に入ると、裂け目が閉じ、後には何も残らなかった。

「アキくん、どうしよう？ フィールドが解除されないよ？」

不安そうに紅い天井を見上げながら、ひばりが呟く。

隣に立つ瑞希も不安げに明久の袖を掴む。

しかし、明久にはそれに答える方策はない。

「来島、どうだ？」

翔子を伴った雄二が、ホログラム端末を展開したアキに声をかける。

しかし、彼女の表情は優れない。

「……駄目ですね。プログラムのものは解除しましたが、オカルト的なものには手が出ません……悔しいですが」

それでも諦めることなく端末を操作し続ける。

「?!……また？」

「どうした？」

訝しげに眉を顰めた彼女に気付き、声をかける雄二。

「先程から、時折フィールドに、小さなノイズが走ることがあるんです。なんでしょう？」

「……外から何かしている奴がいるんじゃないか？ これだけの事

態だ、外の連中が何もしないとは考えにくい」

アキの答えに軽く思案した雄二がそう言うと、彼女は軽くうなずく。

「神薙さんかもしれません。彼女はオカルト方面のスペシャリストですから。なんとか連絡を取りたいところですが……」

軽く頭を振って嘆息するアキ。

その横で、雄二も頭を捻る。

と、彼の腕が引つ張られた。

「ん？ 翔子、良いアイディアでも……」

「……雄二、来島に近づき過ぎ」

そう言うと、翔子は雄二の腕を抱えるようにして、アキから引き離そうとする。

「何言ってるんだ翔子。今はそんな場合じゃないだろ？」

「心配しなくても、わたしは心に決めた人が居ますので、霧島さんの旦那さんを獲ったりしませんよ？」

呆れたように、ため息混じりに言うアキ。

「……でも、雄二は格好いいから」

「……それは、わたしが浮気をすると言う意味でしょうか？」

底冷えするほどの冷気を伴った、言葉の刃が翔子に投げかけられた。

「……ごめんなさい。わたしは来島に言うてはいけないことを言うてしまった」

失言に気付いて頭を下げる翔子。

アキはそれを受けてため息を吐く。

「はあ、良いですよ霧島さん。元はと言えば、坂本さんがしっかりしないのがいけないのですから」

「おい、何で俺が……」

引き合いに出されるんだ？ という雄二の言葉は、喉の奥に引っかかって出てこなかった。

アキの刺すような視線が、雄二を射抜いたからだ。

「そもそも、坂本さんがはつきりしないから、霧島さんが不安に思うのでしょうか？ 恋愛に疎いわたしでも解るんですから、あなたが気付かないはずはありませんよね？ 少しは彼女を……」

雄二を言葉で切りつけるアキ。

しかし、その間に翔子が割り込む。

「……来島、雄二をイジメないで」

「ふう、そんなつもりはありませんでしたが、霧島さんの顔を立てて矛を収めましょう」

翔子の剣幕に気圧され、嘆息するアキ。

「済まない来島。だが、俺はまだ、なにも証明できちゃいない。だから今は翔子に伝えるわけにはいかねえ」

苦しそうな顔で言う雄二。

それを悲しげに見つめる翔子。

「つまりは証明できれば、きりりんと結婚おっけーということだねい？」

突然、二人の後ろから声が聞こえたかと思うと、その首に白い腕が回されて抱き寄せられる。

「なっ！？」

「?!」

思わぬ事態に目を白黒させる雄二と翔子。

オレンジの布地に包まれた柔らかメロンパンを挟んで、お互いの顔が思わぬ近さに引き寄せられ赤面する雄二と翔子。

見上げれば、そこには、楽しい金髪少女の顔があり、頭の上に、彼女の召喚獣がとろけたように脱力しながら乗っかっている。

「……クリス、雄二にくっつ」

軽く柳眉をつり上げた翔子が声を挙げようとすると、その頬に、己の頬をくっつけるクリス。

「かーわいいねい♪ きりっちは♪ おねーさんは、断然きりっちの味方だよん♪」

「……?!?!」

そのまま頼ずりしてくるクリスにどう対応して良いか解らない翔子。

「んでも、余裕無さ過ぎかなん？ 男の子を縛り付けようとすると嫌われちゃうよん？」

「……え？」

クリスの言葉に目を見開く翔子。

「しょーこりんは、もっちゃんに嫌われたいのかなん？」

そんな翔子に敢えて訊ねるクリス。

「……嫌われたくない」

悲しそうに呟く翔子。

「それじゃあ、縛り付けないように気をつけないとねい」
優しく諭す。

「……うん、わかった」

頷き、微笑む翔子。

それを見てクリスも笑みを浮かべる。

「……そういう話は、俺の居ない所でするもんじゃないのか？」

反対側から惘然とした声が聞こえてくる。

「にゅははは、そりゃあ、もっちゃんにも聞かせるためだしねい」
きりつちの話を聞いてもっちゃんがどう思うのか？ それはまた今度聞き出すとしようかねい」

「チッ」

楽しそうなクリスに、舌打ちを返す雄二。

「んで、アキぴよん？ どんな案配かなん？」

「進展無しですね。フィールドに、どんなに小さくても良いですから穴でも開けば、突破口を開けると思っんですが……」

端末の画面を見ながら考え込むアキ。

「うむん。フィールドに穴ねい。この子の力は使えないのかなん？」

言いながら頭の上の召喚獣を指さすクリス。

その言葉にアキは目を見開いた。

「それです！！」

アキの召喚獣から、弾丸を受け取るクリスの召喚獣。

クリスの提案に閃いたアキは、その場で召喚獣用の特殊弾丸をプログラムミング。

それを使用して御鳥にメッセージを届けることに成功した。

その小さな穴を介し、方策を練り、このフィールドを解除する作戦を立てた。

「……おねーさん、責任重大だよん」

作戦内容を聞いて、クリスは珍しく顔を引きつらせる。

「フィールド貫通能力なんて珍しい能力、ほかにありませんから」
アキも表情を引き締めて説明する。

「わかってるよん。ともかく、みとりんの矢の命中に合わせてまったく同じ場所に二発とも命中させれば良いんだねい？」

「はい。向こうの術式とフィールドの貫通を利用して、このフィールドに干渉し、二発目の弾丸でフィールドを解除するプログラムを流し込みます。タイミングがズレたらおしまいですので、気をつけてください」

アキの説明に、クリスは両手で顔を覆いながら紅い天井を仰ぎ見る。

目を閉じ、集中し、両手で髪を撫でつけるように挙げてから、両頬を打つ。

「よし！」

気合い十分の声に応えるように、槍型ライフルを持った召喚獣が羽ばたく。

中空で静止し、指定された場所をサイトに収め、クリスは唇を舐めた。

顔にはゴーグル状の照準用スクリーンが展開され、青い瞳が狙撃点を凝視する。

タイミングを合わせるためのカウントが聞こえ、豊かな胸の奥は早鐘を打っている。

『10』

荒れそうな呼吸を整え、落ち着いて狙いを定める。

『5』

こめかみを汗が伝い、息をするのももどかしい。

『3』

無意識に指がトリガーにかかったように曲げられ。

『2』

目を瞬かせることも忘れ。

『1』

皆が固唾を飲んで見守る中。

『0』

トリガーは引かれた。

第五十問（後書き）

第五十問、いかがでしたか？
次回で清涼祭編終了です♪
よろしく願います♪

第五十一問（清涼祭編最終話）（前書き）

第五十一問、更新しました♪
グダグダなエピソードです。

読んで下さる皆さんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第五十一問（清涼祭編最終話）

フィールドが解除された大会会場では、青空が見えた瞬間、歓声が上がった。

その後、気絶していた人たちはすぐに目を覚まし、彼らの身内である学園生徒は大いに喜んだ。

しかし、これだけの人数が気を失うという事態はやはり大事であり、即座に多くの黒服さん達に取り囲まれた。

検査を受けた結果としては、特に異常を認められた者はおらず、みな一様に胸をなで下ろしてはいたが、中で起きたことについては口外しないように注意された。

特に竹原教頭と対峙した生徒達は誓約書まで書かされることとなり、ひばり達は揃って微妙な表情になっていた。

ともあれ、残る事後処理は大人の管轄だと、白衣姿のめぐみに追いつかれ、子供達は残り少ない祭りの時間を一所懸命に楽しむことにした。

結局の所、事態の責任は責任者である大人が取るもので、子供達には関係がないことである。

『これにて、第四回、文月学園、清涼祭を、終了します。みんな！お疲れさま〜っ！』

放送部員の、ノリの良い放送に、歓声と笑いと拍手が巻き起こる。クラスメイトのそれを見て、ひばりは本当に嬉しそうな笑顔になった。

その後、雄二と明久、そしてアキが呼び出されてしまったものの、我らが二年Fクラスの大抵の面々にとっては、さしたる重要事ではなく、彼らにとって重要事とは、これから催される打ち上げの方が

よほど大事といえよう。

ともあれ、この時、買い出しを島田美波に頼んだことが、後に、これほどのカオスを生み出すことになるうとは、だれにも想像が出来なかったに違いない。

彼女が選んだ飲み物には、少なからずアルコール類が混じっていたのだから。

無論、彼女に悪気は無い。

ジュースと紙コップを頼まれ、買いに行った店で、アルコールの意味がうまく出てこなかったただけなのだ。

そんな訳で、公園での打ち上げに参加した面々は、少なからずアルコールが入っており、その場は混沌と化していた。

「なるほど、学園祭の売り上げとしては上々だな」

美波の広げた収支ノートをのぞき込み、手にしたジュースをあおりながら雄二はつぶやく。

「そうね。けど、ひばりが言っていたけどこの売り上げじゃ机や椅子は厳しいみたいね」

「中古で揃えてなんとか出来なくもないが……。まあ、クラスの財布を握ってるのはアイツだからな」

ジュースを飲みながら美波と会話する雄二。

相手をしている美波は、どことなく懽然としている。

「……混ざらないのか？」

「……隙間がないわよ」

二人で打ち上げ会場となった公園の一角を見やる。

そこには、ピンク色の空間が出来上がっていた。

「えへへへ、あひく〜ん♪ ック」

「明久君、いい匂いがしゅ〜」

「ふ、二人とも気を確かに持つんだ！ 周囲の殺気で、ボクの寿命

がマツハだ！」

そこにいるのは、緩さと優しさを兼ね備えた少年、吉井明久と、学園トップレベルの才女にして大胆不敵なピンクのウサギ、姫路瑞希と、Fクラスのご意見番にして、クラスの小女神、リトルゴッデス支倉ひばりである。

その二人の少女は、完全に出来上がった赤い顔で、明久の両腕を、それぞれ抱え込んでいた。

「ひばり、落ち着こう。姫路さんもそんな柔らかいモノを押しつけないでっ？！ ひばり？！ 何してんの？！ ボクの手首を股に挟まないでっ？！」

瑞希とひばりに、左右からサンドイッチされた明久から、悲鳴が上がる。

しかも、彼の常として、なぜか状況の説明が言葉に混ざっている。それを聞いている内に闘気を漲らせる美波。

それを受けて雄二は半步間を開ける。

「……坂本。ウチ、がんばったと思うのよ。コロシテキティイワヨネ？」

「……好きにしたらどうだ」

「……そうする」

重量級生物のごとき足音を響かせながら明久の元へ向かう美波。

それを見送った雄二は、改めて周りを見回した。

「うっ……高名あ。高名に会いたいよう……」

地べたにぺたんとお尻を着けて座り込み、はらはらと涙をこぼしながら呟くのは、来島アキ。

手にした紙コップの中身をちびちびとついばむように飲みながらぶちぶち言っている。

その向こうで、人間が風車のように回りながら飛んでいった。

「……おー」

何の感慨も抱かず眺められる辺り、雄二も酔っているようだ。

「はっはっは。名付けて、『人コプター』！！」

「すげえっ！？ 人間は飛べたんだっ！！」

「よし、次は俺だ！ 頼むぜ前田！！」

酔っぱらいが一人、目を輝かせて前に出る。

「よし、動くなよ？ フンッ！」

声とともに綺麗に足を刈りながら頭から激突しないように加速させていく。

そして、回転の中心に指を当てると、何事もないように持ち上げる俊夫。

「おうりゃ、テイクオフ！」

ヘリのローターのごとく回転を続ける生徒をそのまま上へと射出する。

「おおおおおっ？！ 飛んでるっ？！ オレ飛んでべげらごばしやっ？！」

無論滞空時間は短く、そのまま植え込みなどへと墜落していく。

しかもとんでもない回転がかかっているためか、口からキラキラ光る、酸性の液体をまき散らしながら墜落するのだ。

地獄である。

「アホだな」

呟き、視線を転じる雄二。

すると、両腕で康太と秀吉の腕をがっちりホールドし、亮に馬乗りになっているクリスと目が合った。

0.1秒で逸らした。

「ねえ、すがつちーおねーさんを暖めて欲しいよん……ひでみーもむつちーも一緒にねい」

頬を上気させ、艶やかに囁くクリス。

「……………?! (ブババババババ)」

「ぎゃああああっ?! め、眼にムツツリー二の鼻血がああああああっ?!?!」

身動きを取ることも出来ずに康太の鼻血の直撃を受け続ける亮。

「お、落ち着くのじゃクリス！」

秀吉は何とか拘束から逃れようともがきながらクリスに声を掛け
ている。

「ああん♪」

突然あがる嬉しそうな声。

見れば、秀吉の手が暴れた拍子にクリスの胸を鷲掴みにしていた。

「わ、わああああっ?! 済まぬクリスよ。ワザとでは」
慌てて手をどける秀吉。

それを見ながらクリスが笑う。

「可愛い顔してひでみーも男の子だねい♪ すけべ♪」

「んなつ?! こ、こんな形で男じゃと認定されてもまるで嬉しく
ないぞい!?!」

もはや泣きそうな顔の秀吉。

一方で康太はクリスの柔らかくて熱い肢体に、妄想をフルドライ
ブさせていた。

「……………感無量（ふびやびやびやあ!）」

さらに吹き出す鼻血が、真下の亮を赤く染め挙げていく。

「う、うぐぐぐ、制服がねつとりと生暖けえ……………」

身動きも取れず、目を開けることもかなわず滝のように涙を流す
亮。

「くわばらくわばら」

見て見ぬ振りを敢行する雄二。

スパアアンツ!!

よく通る音が響いて、誰かが倒れる。

明久に攻撃を仕掛けようとした美波が、ひばりの【小烏丸】で轟
沈したのだ。

「美波ひゃん、うるひゃい」

明久の腕を抱きかかえながら、器用に【小烏丸】を振るったひば
り。

その目は、完全に据わっていた。

「明久く〜ん」

一方で瑞希は、その柔らかい体で明久の腕を包むように抱きしめながら頬摺りする。

「ひ、姫路さんマズいから！？ その柔らかさは犯罪だからねっ！
？ あああつ？！ 足に太股絡めないでえ〜っ？！」

明久の首元に頬摺りしながら抱え込んだ二の腕を豊かな双丘の谷間に納め、手首を股に挟むようにしながら足を明久の太股に絡めていく。スカートがはだけて大胆な勝負下着が露わになるのも構わずに、そのふんわり柔らかい肢体で明久を包み込まん勢いで押しつけていく瑞希。

「ああもうどうすればって、ひばり何やってるのっ？！」

大胆な瑞希の攻撃に耐えていた明久が、もう一人の幼なじみに目を向けると、そこには、明久の腕に乘っかり、半端にブレザーを脱ぎながら、タイを外し、ブラウスのボタンに手を掛けているひばりがいた。

「……あひゅい〜くるひい〜」

ふらふらと上体を揺らしながらボタンを外していくひばり。

「だ、ダメだよひばり！ 女の子がそんなことし

スパアアアンツ！！

小気味の良い音を響かせながら【小烏丸】が振るわれ、明久の意識を刈り取る。それを見た瑞希は、ぼんやりと明久の横顔を見つめてから、のっそり起きあがり、彼に覆い被さるようにしながら、その唇をついばんだ。

「……明久くん……大好きですよ……」

唇を離して呟く瑞希。

と、横合いから手が伸びて、明久の首に巻き付く。そのまま彼の頬へ唇を押し当てていくひばり。

「えへへっ あきくんだいしゅきっ」

出来上がった顔で明久の頬に自分の頬をくつつけるひばり。
それを見た瑞希も反対の頬に己の頬をくつつけた。

その様子を一通り眺めた雄二は、空を見上げて嘆息した。

「……平和だな」

その言葉は風に乗って、空へと舞い上がった。

「おはようございますっ 明久くん、ひばりちゃん」

翌朝、通学路で遭遇する、幼なじみ三人。

「おはよう、姫路さん」

「うっ、みっちゃんおはよ」

瑞希の挨拶に軽く答える明久。

その横で、ひばりは少し青ざめた顔で挨拶を返す。

「大丈夫ですか？ ひばりちゃん」

「うっ、頭がガンガンする……。完全に二日酔いだよ……」

心配そうな瑞希に、頭を押さえながら答えるひばり。

それを見て明久も苦笑いする。

「お酒が混じってたからね。ボクもひばりも途中から記憶が飛んじやって……」

「そうなんですか？ 実は私もよく覚えてなくって」

明久の言葉に苦笑いしながら答える瑞希。そんな二人に、ひばりも顔を上げる。

「あたしなんか、かなり最初の方から覚えてないよ……」
微妙な顔で呟くひばり。

三人そろってため息を吐く。

「……なにか、とても良いことがあったような気がするんだけど……」

……

三人同時に呟き、顔を見合わせる。

お互いに苦笑いを浮かべて、ふたたび歩き始めた。

第五十一問（清涼祭編最終話）（後書き）

第五十一問、いかがでしたでしょうか？

お酒は二十歳から。

未成年の方は飲んじゃダメですよ？

さて、募集していたリクエストも、これを持ちまして締めきりと
させていただきます。

次回からしばらくは番外編と特別編をお送りしますので、お待ち
下さい♪

それではまた、次回もよろしく願いしますね♪

番外編 7 遊園地デート ♪ あー、ウエディングヴェールのこと。前編

番外編7を更新しました ♪

読んで下さる方に、楽しんでいただければ幸いです ♪

「はあ。俺は無力だ……」

己の部屋でため息を吐く少年が一人。

180はあるとかという長身に、赤い髪。

普段なら野生味溢れる魅力で溢れているであろう顔に陰りを見せ
ている少年、坂本雄二。

今日、この日の約束を、彼は指折り数えて待っていた。

死刑台に上がる気分で……。

と、ドアがノックされる。

「……雄二、お待たせ」

静謐な声が聞こえてくる。

「翔子か？ どれ、行くとするか」

声に答えて立ち上がり、扉に近づいていく。

戸を開けると日本人形のような少女が佇んでいた。

普段は、Ｔシャツにジーンズやデニムのスカートという彼女も、
気合いが入っているらしく、ピンクのカットソーに、白い長袖の力
ーディガン。下は薄手の膝上丈のスカートを履き、下着が透けない
ためのインナーも見えている。

普段、あまり見ない彼女の格好に、雄二は少しだけ注視してしま
った。

それに気づいた翔子は、軽く身を振りながら己の姿を確認し始め
た。

「……雄二？ 私の格好、おかしくない？」

「ん？ そうだな、まあ、普通に良いんじゃないか」

素っ気なく答える。が、翔子は軽くはにかんだ。

「……よかった。雄二がそう言うなら大丈夫」

「その判断基準はどうなんだ？」

翔子の言葉に、少しだけ表情を歪める雄二。しかし、彼女は気に

した風でもなく玄関へと向かう。

「はあ」

その後ろ姿を見て、雄二はやるせない気持ちで息を吐いた。

「で、ここが件のグランドパークか……」

楽しそうな母親の、生暖かい視線に送り出された雄二は、電車とバスを乗り継ぎ、二時間ほどかけて如月グランドパークの入り口にたどり着いていた。

プレオープンということだが、なかなか派手に飾り付けてあり、花火なども上げていて盛大である。

「プレオープンなのに、随分金かけてるなたたたたっ？！ なぜ関節を極める必要があるんだっ？！ 翔子っ？！」

「？」

声を上げる雄二を不思議そうに見上げる翔子。

その腕は、見事に雄二の左肘の関節を極めていた。

「……仲の良いカップルはこうするものと聞いた。みんなやっていく」

周りを見回してそうのたまう。

みれば、カップルとおぼしき男女が腕を組んでいるのが目に入っ
た。

「あれとこれはまるで違だだだだっ？！」

「……さあ、早く中へ入……」

ぺしん。

雄二を引っ張ろうとする翔子の頭が、軽く叩かれる。

「……？」

「何やってるの、翔子ちゃんは……」

頭に感じた一撃に、周りを見回した翔子へと声を掛けるのは小さな少女、支倉ひばり。

その手には、愛刀【小烏丸】が握られている。

「……ひばり？」

「おはよう翔子ちゃん。早く手を離さないと、坂本君の腕が折れちゃうよ？」

目に入ったひばりの姿に小首を傾げる翔子。一方でひばりは、雄二の腕のダメージを指摘する。

すると、翔子は慌てたように手を離れた。

「……雄二、ごめんなさい。痛かった？」

「あ、ああいや、大丈夫だ翔子」

珍しく謝罪してきた翔子にアワを食う雄二。慌てて腕を動かして無事だとアピールする。

「翔子ちゃん、随分緊張してるみたいだけど、大丈夫」

「……雄二と遊園地デートは初めてだから」

心配そうにのぞき込むひばりに、翔子が少し落ち込むように答える。それを聞いて、ひばりは雄二を睨みつけた。

「坂本君、ちゃんとエスコートしてあげなきゃダメだよ？ 翔子ちゃんも女の子なんだから」

「……う？ あ、ああそうだな。翔子、済まなかったな」

ひばりの語気に気圧されながらも、思うところがあるのか頷く雄二。翔子に一言かけながら、彼女の頭に手を乗せる。

「……雄二」

思わぬ事に雄二の腕に飛びつく翔子。

「痛」ただただたたつ？！ しょ、翔子、極まってる？！ 極まってる！？」

「しょ、翔子ちゃん？！ ダメだよ？！ それじゃあ！？」

「????」

なぜか雄二の肘関節を極めてしまう翔子。雄二が悲鳴を上げ、ひばりが止めに入るが、肝心の翔子がいまいち分かっていないようだ。

「お待たせしました」

「何やってんだ？ お前ら」

そこに声を掛けてきたのは、長身に眼鏡の少年、新田と刈り上げた頭の須川亮だ。

「ああ新田君に亮君、おはよう……って、しょ、翔子ちゃんいったん離れて離れて?!」

待ち合わせていた二人に挨拶を返すひばり。息をつく間もなく翔子に雄二から離れるように言う。

翔子は少し不満そうに、渋々離れた。

「はあ。腕の組み方教えるから、ちよつと待っていて？ 新田君、亮君、ちよつといい？」

「なんです？」

「どうした？ 支倉」

ひばりに呼ばれてやってくる二人。

「うん、ちよつとこつちに並んでくれる？」

言いながら二人を並べるひばり。

「そしたら、新田君は腰に手を当てるように肘曲げて……」

「はあ……」

「で、亮君の右手を通して……」

「ああ……」

「で、左手を添えて……はいどうぞ」

会心の作とばかりに胸を張るひばり。

そこには、ラブイカップルのように腕を組んだ新田と亮がいた。

「じゃあ、やってみて翔子ちゃん。あ、二人とも動いちゃダメだからね」

翔子に促すひばり。ついでに、腕を組んで、ヤロー二人に釘を刺す。

言われて新田と亮はゲンナリとなった。

「あ、朝から男と腕組まされるとは……」

「それは、こつちのセリフです！」

不満を隠そうともしない二人。
そうと知ってか知らずか、ひばりは翔子へ説明を続けた。

「……雄二、これでどう？ 痛くない？」

「あ、ああ平気だ。痛くないぞ翔子」

己と腕を組んだ翔子に、不安げに訊ねられた雄二は、慌てるように答える。

それを眺めてひばりは、満足げに頷いた。

「うん」 ばつちりだね」

そんなひばりに首を巡らす翔子。

「……ありがとう、ひばり。ひばりは良い人、いつか必ずお礼をする」

「ううん、良いよ翔子ちゃん」 友達のためだし、こんなのおやすいご用だよ」

礼を述べる翔子に、首を振ってみせるひばり。二人で小さく笑い合う。

と、そこへ、哀愁だだよう情けない声音が飛んできた。

「……なあ支倉、俺たちいつまで腕を組んでいれば良いんだ？」

「……すいません、そろそろ周囲の視線が痛くなってきたんですが……」

声に気づいたひばりがそちらを見ると、すっかり意気消沈した二人の少年が、カッブルよろしく腕を組んで佇んでいた。

「ご、ごめん二人とも、もう離れて良いよ」

慌てて二人へ駆け寄るひばり。言われるままに互いの腕を放す少年二人。しかし、顔色は良くない。

「ご、ごめんね？ 二人とも。あたしじゃあちゃんと腕を組む形にならないから……」

言いながらひばりは、申し訳なさそうに頭を下げる。それを見た

新田と亮は、何とも言えずに顔を見合わせてから、苦笑いをした。

「いいですよ、支倉さん」

「ああ。そんなことより、今日は楽しもうぜ」

笑顔の二人に言われてひばりも破顔する。

「うん」 新田君、亮君「あ、二人ともあたしのことは、ひばりって呼んでよ」 せっかく仲良しになれたのに、名字で呼ばれると、なんか変な感じだし、あたしも名前で呼ぶから…… 亮君は良いとして、新田君はなんて名前なの？」

「え？ オレですか？」

「うん」

屈託のない顔で聞いてくるひばりに、面食らう新田。そして、少し照れくさそうに頬を掻きながら口を開いた。

「恵太です。新田恵太」

「恵太君だね」 うん、亮君、恵太君、今日は一日楽しもうの」

「そうだな」

「ええ」

ひばりの言葉に笑って答える二人。

そんな三人に、声がかかる。

「おい、先に行くぞ？」

言いながら歩き出す、雄二と翔子。それを見たひばりは、亮と恵太の手を、それぞれ亮の手にとって走りだした。

「待ってよ」 坂本君、翔子ちゃん」

先をゆく二人に声をかけるひばり。そんな彼女に手を引かれた少年二人は、顔を少し赤らめた。

ゲートを潜った五人の元へ、係員がやってくる。

アップにした金髪を帽子に引つ詰め、大きなサングラスをしている。制服は男物だが、隠す気など更々無いのか、自己主張の激しい、

ボリユーミーな胸を突きだしていた。

「如月グランドパークへようこそいらっしやいませ」 本日はプレオープン」 ちけつとが無いと入れませんよ」

その聞き覚えのある声に、四人の表情が、微妙なものになる。

「その声、クリスだよな？ なにやってるの？」

代表してひばりが訊ねると、係員は自分の体を抱きしめるようにしながら身を擦った。

「私はクリスなんて美少女じゃありませんよ」 田中一郎（28）
通称ゴンザレスでえっす」

「……………」

「……………」

「……………」

さらに微妙な雰囲気になる四人だが、翔子だけが素で分かっている。
ない。

「さささ」 ちけつとぷりーず」

そんな空気も何のその、係員はチケットの提示を求めてくる。

「……はい、これ」

「う、うん。これだよ」

素直にチケットを手渡す翔子と、微妙な空気のままチケットを見せるひばり。

「ふむん。ひばりん達は一般チケットだねい」 今日は一日楽しんでおいでよん」

「やっぱりクリスじゃないっ！」

「なんのことでしょう？ 私はゴンザレスですよ？ で、こちらのチケットは……、むむ？！」

わざとらしく驚くような素振りを見せる係員。

その様子に、翔子の表情が、わずかに曇った。

「……そのチケット、使えないの？」

心配そうに訊ねる翔子。しかし、係員はにこやかに彼女へ振り向いた。

「いえいえ」 大丈夫ですよ？ チケットのグレードがプレミアムでしたので驚いていたんですよ。ああ、ちよつと失礼」

言うが早いか、五人に背を向けて懷から、なぜか大型の通信機を取り出して耳に当てた。

「うむん。おねーさんだよん」 たったいまターゲットを確認したよん。みんな、ふぉーめーしょんW、ウェディングシフトで確実に仕留めるよん」

「いや待て。なんだその不穩当な通信は」

「うえでいんぐしふと？」

係員の肩を押さえて詰め寄る雄二とよく分かっていない翔子。

「オーウ、何のことでしょう？ キにしないデクダサーイ」

しかし係員は似非外人風の口調で答えながら肩をすくめた。

「さつきまで流暢に日本語喋ってたろうがっ！！」

そう言つて詰めよる雄二。

「アーハー？ ニホンゴ、ムツカシくてワカリマセーン」

「お前、英語の方がダメだろうがっ！！」

さらに詰め寄るが、係員はのりくらりとかわすばかりだ。

「さ、坂本君、あたし達関係ないみたいだから、先に行くね？」

「まあ、がんばれや坂本おー」

「……ふう」

いい加減付き合いきれなくなつたのか、申し訳なさそうにしながら移動し始めるひばり。

それに続く亮はニヤニヤ笑いながら、恵太は肩をすくめて首を振りながらついていった。

番外編 7 遊園地デート ♪ あー、あるいは、ウェディングヴェールのこと。前編

番外編7、いかがでしたでしょうか？

この遊園地デート、いっただいどうなるんでしょう？

次回もよろしく願いしますね ♪

番外編 8 遊園地デート♪ あーはい、ウェディングヴェールのこと。 中編

番外編 8 遊園地デート♪ あーはい、ウェディングヴェールのこと。 中編 を更新しました♪

如月ハイランド編つて、そこそこ長かったんですね……。

三分割になっちゃいましたよ……。

それでは、読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ、幸いです♪

『つまり、あの赤ゴリラは、あの霧島翔子に言い寄られて逃げ回つてると。どんだけヘタレなんだよ』

『うーん、でも見た感じだと、誰かが背中を押して上げればすぐだと思っただよね。如月グランドパークのウェディング体験で、前進してくれればいいんだけど……』

『なんだ、あいつらあのイベント参加すんのか？ 物好きなら……』

『あはは、会場で大勢を前に連れてくつて約束しちゃったしね。渋々だけど、行くみたいだよ。応援したいけど、プレオープンじゃチケットがないと入れないしね。祈るばかりだよ』

『……へ、バアカ、明久。こう言うときこそ、かき回す……援護してやるのが、面白……親友つてもんだろぅが』

『……慎吾、本音が透けてるよ？』

『うおっほん。ともかく当日パークに入れるようにしてやる。つーか、頼んでやる』

『えええっ?! ど、どうやって?』

『おいおい、忘れたのかよ。あいつに頼みやあすぐだぜ』

『あ! そうか、そうだったね! でも良いの?』

『大丈夫大丈夫、なんとって、あのウェディング体験の企画出したの、あいつなんだぜ?』

『……あ、あははは、彼女らしいかも』

『ともかく任せとけ。こんな面白……大切なイベント、間近で見ない……失敗させるわけにはいかねえからな!』

『……だから本音が漏れてるってば、慎吾』

『つーわけで、赤ゴリラ……Fクラス代表とAクラス代表をくつつ

けるために、集まって貰ったわけだが、全員準備は整ってるな！」
『おう！』

通信機から聞こえてくる声に、口の端を持ち上げるように笑う、小さな少年、牧野慎吾。

「すでにゲートでゴンザレスが接触している。イレギュラーとして、支倉が別口で入場したようだが、計画に変更は無え！ ウエディングソフト、対SK特別チームの誇りに掛けて、必ず仕留めるぞっ！」
『了解っ！』

「さあて、赤ゴリラ。楽しませて貰うぜ？」

暗がりの中で、モニターに映る雄二と翔子を見て、慎吾は意地の悪そうな笑みを浮かべた。

「とにかく、そのウエディング何とかは不要だ。後は放っておいてくれて良いぞ？」

「そんな冷たいこと言わずに参加してみると良いよん」

「いらん」

食い下がる係員を冷たく突き放す雄二。しかし、彼(?)はあきらめない。

「わがままだねい」

言いながら肩をすくめる係員。その態度に雄二のこめかみが引きつる。

「お前が……お・ま・え・が、言うなっ！」

係員の鼻先を、人差し指で潰さんばかりに押さえながら、強調する雄二。

しかし、彼(?)はどこ吹く風だ。

「まあまあ、サービスだし、豪勢な食事もつくよん」

「い・ら・ん」

「仕方ないねい、なら、もっちゃんの家に、腐ったザリガニ送る」

つと」

言いながらきびすを返した彼（？）の肩を、力強く引き留める雄二。

「やめろっ！ そんなことをされたら、我が家は食中毒で大変なことになるだろうがっ！」

「なら、記念写真から撮ろうかねい」

振り向いた彼（？）の、勝ち誇った笑みに、雄二は膝を屈するしかなかった。

「ごめんね二人とも……あたしのせいで……」

「いや、こっちこそわりい。正直、ひばりの身長のこと、すっかり忘れてた……」

「仕方がないですよ、動きの激しい乗り物は、身長制限が厳しいんですから」

意気消沈したひばりを慰める亮と恵太。

まず、定番の絶叫系を回ろうとして、ことごとくひばりが身長で跳ねられたのだ。

自分は待っているからと言うひばりを置いて男二人で乗るわけにもいかず、まだなにも乗れていない。

そんな状況に、ひばりが自己嫌悪し始めてしまったのだ。

「はあ、やっぱり身長が低いとそ……ブフウウッ?!」

くよくよと弱音を吐こうとしていたひばりが、突然拭きだした。

「ど、どうした?! ブフッ?!」

「ひ、ひばりさん?! ブフオッ?!」

無言で顔を背けたひばりが指さした方を見て、亮と恵太も拭きだしてしまった。

その指さす方向には、頭が180度反対になった狐の着ぐるみが全力疾走していた。ある種、シニールかつホラーな画面だ。

そうこうしているうちに、リボンをした狐の着ぐるみもあらわれ、ホラー狐ともつれるようにしながら転がった。

「あれ？ 坂本君と翔子ちゃん。それにクリスだ」

狐たちが転がって来た方向を見れば、翔子に耳打ちする男装（？）係員。気づいた雄二がわめくより早く翔子が彼に近づき、その腕を取る。

あわてふためく雄二を後目に、腕を引っ張りながら歩く翔子。雄二は抵抗するも、男装係員と、リボンの狐にも取り囲まれて連れて行かれてしまった。

「……どこ行くんだろ？」

「あの方向だと、お化け屋敷じゃないですかね」

首を傾げるひばりに、パークの案内図を広げて答える恵太。それを聞いていた亮が、ふと顔を上げた。

「お化け屋敷か。なら、身長制限もないし、支倉も……」

言いながら、彼女の方へ視線を向けて固まった。

「お、おお、お化けなんかいない。お化けなんかいない……」
顔面蒼白で、ガタガタ震えるひばり。

「は、支倉？ だ、大丈夫か？」

「だ、だだだだ大丈夫だよよ、りよ、りよりりより亮君」

心配そうな亮に答えるひばり。

その横で恵太が嘆息する。

「ときますか須川。折角許可が出たのに、名字に戻ってますよ」

「いや、なんかこっちのが言いやすくてな」

恵太の指摘に、照れくさそうに頬を掻く。

「オレはもう慣れました！ さあ、ひばりさん。次はどこへ行きましょうか？」

開き直ったように胸を張って宣言する恵太。
それを見た亮は、ジト目でため息をついた。

「……いっそ清々しいな、おまえは。で？ どうするんだひばり……」

…」

言いながら彼女へ視線を移すと、ひばりは己の頬を叩いて気合を入れる。

「~~~~、よし！　いくよ！　亮君、恵太君！」

「行くつてどこにです？」

歩きだしたひばりを追いかけてつづ訊ねる恵太。亮もそれに続くように動き出した。

「お化け屋敷！　坂本君と翔子ちゃんが心配なもの！」

そう言いつつ、力強い足取りで進んでいくひばり。その様子に、亮と恵太は苦笑いしながら顔を見合わせた。

お化け屋敷にたどり着くと、ちょうど翔子を連れた雄二が、何かの書類に署名しようとしているところで、書類の内容を確認している。その横で、翔子が印鑑を差しだし、係員（男装？）が朱肉を取り出した。次の瞬間、雄二はペンを地面に叩きつけ、頭を掻きながら二人に抗議する。

だが、翔子と係員（男装？）は特に気にすることもなく、印鑑と朱肉を締まってしまい、出入り口へ移動していく。

それを遠めに見ていたひばりは、ため息一つ。

「……坂本君、苦勞してるみたいだね」

「……そうだな」

「……やれやれ」

そんなひばりの言葉に、亮は苦笑いしながらうなずき、恵太は首を振る。

そうこうしているうちに、雄二は渋々翔子とお化け屋敷に入っていく、係員（男装？）と狐の着ぐるみたちは、出口へと向かう。

その隙について、ひばりたちも入り口へと飛び込んでいった。

先ほどまで首が180度反対を向いていた狐が、気配を感じて振

り向く。しかし、そのときにはひばりたちはお化け屋敷に突入した後だった。

狐は、少し不思議そうに首を傾げたが、リボンの狐に呼ばれ、あわてて移動した。

『ひう!』

『うひゃあ?!』

『ひうぐ?!』

廃病院を改装して作ったというお化け屋敷。

もともと放置されていた資材なども流用しているようで、臨場感は抜群だ。その証拠に、亮や恵太も緊張を隠せていない。

否、彼らが緊張しているのは、それだけが理由ではなかった。

『わきゆう?!』

小さく悲鳴を上げたひばりが亮へと飛びつく。

「うつく……」

勢いはないため、痛くはない。痛くはないのだが、体格の関係で、彼女の柔らかなふたつの山が、亮の腰回りに押しつけられ、健全な男子の生理現象が大変なことになっている。

ところが、恐がりな為、半ばテンパっているひばりは、それに気づいていなかった。

「りよ、亮君ごめんね?」

迷惑をかけていると思ったらしい彼女は、半ば涙目になって亮を見上げながら謝る。

「!?!?……お、おう」

その様子に息を呑み、なんとか答えると、ひばりは恐る恐る彼から離れていく。

と、小さく、何かが碎ける音がした。

その瞬間。

『ちゅいっ？！』

小さく悲鳴を上げて、今度は恵太へ。

先ほどからこれを繰り返しているのだ。

「大丈夫ですよ？」
ひばりさん ♪ ああっ ♪
ちっちゃくて可愛い



恍惚とした表情になる恵太。と、そのシャツが引つ張られ、何かと下を見る。

すると、軽く涙目のひばりが、恵太を見上げながら、口を開く。

「ち、ちっちやくないよ?」

弱々しく告げられた恵太は、一瞬、胸の奥の鼓動が止まった。

「ふ、ふおおおおお——つつつつ?!?!?!?!?!」

「ふ、ふおおおおお——つつつつ?!?!?!?!?!」

「な、なんだっ？！」

「……ツ？！」

突然あがつた雄叫びに、雄二が身構え、翔子が彼に体をくっつけてくる。

その様子が、ワザとではなく、得体の知れない雄叫びに対する、素の反応だと感じた雄二は、彼女が抱き締めているのとは反対の手を、彼女の頭に乗せた。

「大丈夫だぞ？」
翔子」

「うん」

二人の間に優しい空気が流れた。

【……めじのほ……りもこ……】

不意に、声が聞こえてきた。

「……なにかの演出か？」

「……この声、雄二……？」

翔子の言葉に、改めて耳をそばたててみる雄二。
徐々にクリアになり、なんと知っているか、はつきり分かってきた。

【姫路の方が翔子よりも好みだな。胸も大きいし】

「……雄二、覚悟は良い……？」

「こ、怖えっ！ 翔子が般若を超えて、阿修羅すら凌駕する存在に？！ なんて恐ろしすぎる演出だ！？」

翔子の発する、ドス黒いオーラに、おののく雄二。

迫力に押され、彼が一步後ずさった時、跳ねるような大きな音と共に、何かの仕掛けが作動した。その事実、雄二の目が鋭く細まる。

「しょ、翔子、何か出て……」

「……気が利いている」

飛び出したのは釘バットだった。

「なに考えてやがるんだあいつらはっ？！」

「……雄二、覚悟は……」

「待て翔子、俺は『おまえが好きなんだ！』は？」

突然の告白に、釘バットを取り落とす翔子。

「……雄二、嬉しい」

「えーい、翔子落ち着け。今のもさっきのも俺じゃない。たぶん秀吉の声真似だ」

「……え？」

雄二の言葉にきよとなる。

「まんまと乗せられたわけだ。ん？ どうした？ 翔子」

「……聞き分ける自信、あったのに……」

意気消沈する翔子。雄二はその様子を見て苦笑いする。

「……まあ、秀吉や支倉の声真似はプロの領域だしな。それに秀吉の演技は一級品だ」

「……でも」

言い募ろうとする翔子。雄二は、そんな彼女の頭に、そつと手を乗せた。

「なら、次は看破してやれよ。秀吉のやつ、悔しがるぜ？ 『次は見破らせぬ』とか言ってるな」

言いながら笑う雄二。それに対して、翔子は軽く笑顔になって頷いた。

「んで、そこに隠れてる三人。出てこい」

一点を睨みつけて言う雄二に、慌てる気配が広がる。

「え、えっと、ごめんね？ 坂本君」

「よう、坂本」

「どうもすみませんね」

ひばり、亮、恵太の順に姿を現す三人。

ひばりはバツが悪そうにしているものの、亮も恵太もどこ吹く風だ。

「ったく。まあ助かった。さんきゅーな支倉」

「う、うん」

礼を言う雄二に、不安そうにしながら頷くひばり。

と、軽く何かを擦る音がした。

「ひうにゃあああゝゝっ?!」

悲鳴をあげて翔子に抱きつくひばり。もう半泣き状態だ。

「……ひばり？ もしかしてお化け苦手？」

自分に抱きつきながら震えるひばりを見て、翔子がつぶやく。
するとひばりは涙目のまま翔子を見上げて頷いた。

拳銃が、翔子のハートを撃ち抜いた。

「……雄二」

「なんだ？ 翔子」

雄二が答えると、翔子はいつになく、目を爛々と輝かせて彼に振り向く。

「……コレ（ひばり）持って帰ろう？」

「駄目に決まってるだろう！？」

翔子の提案に、思いつきりツツコム雄二。すると翔子は目に見えてシヨゲかえっていた。

「……残念」

そうつぶやく翔子を見て、雄二は沈痛そうに顔を手で覆いながら天を仰いだ。

「おおぅ」 二人ともお帰んな……」

出口で待っていた係員（男装？）が人の気配を感じて振り向くと、想定しているより大勢が姿を現したので面食らった。

しかも、

「グスッ……」

ひばりが半泣き状態で翔子に抱きついている。

「ひ、ひばりんどうしたの？！」

思わず素で駆け寄ってしまうクリス。

サングラスも帽子も取って、ひばりの前に膝を着くように、しゃがみ込んで、目線をあわせる。

「……お化けとか、かなり苦手みたい」

翔子がひばりを宥めるように髪を撫でながら答える。

「それなのにお化け屋敷に入ったの？　なんで……」

クリスが珍しく表情をゆがめながら言うと、雄二がため息つきながら口を開く。

「俺と翔子が心配だったんだそうだ。まあ、おかげで助かったがな」

「心配だからって、苦手なお化け屋敷に突入したのなん！？　ひばりん、無茶すぎだよん……」

「ぐす。だ、だって……あ」

雄二の言に驚くクリス。しかし、すぐに表情を和らげ、ひばりを抱き寄せる。

「……がんばったねい」偉かったよん」

言いながら、御髪を解かすように梳いてやるクリス。するとひばりも緊張が解けてきて表情を和らげた。

「……うん」

軽く頷く彼女に、翔子も頬を緩める。

「ん……ありがと、クリス」

胸元で手を握りしめながら言うひばり。

その表情は、すでに柔らかな笑みを浮かべていた。

番外編 8 遊園地デート ♪ あー、あるいは、ウェディングヴェールのこと。

中絶

番外編 8、いかがでしたでしょうか？

また次回もよろしく願いしますね ♪

番外編 9 遊園地デート ♪ あるいは、ウェディングヴェールのこと。

後編

番外編 9を更新しました ♪

読んで下さる皆さんに、楽しんでいただければ幸いです ♪

「えええっ?! ひばり、お化け屋敷に入ったの?!」

「ひばりちゃん、大丈夫だったんですかつ?!」 小洒落たレストランのバックヤードで声をあげたのは、吉井明久と姫路瑞希の二人。その迫力に上体を仰け反らせ、冷や汗を流すのは金髪の少女、クリスティーナ。ウエストロードことクリスマスである。

いつもなら余裕の調子で切り返すはずのクリスマスだったが、今回はそうはいかなかった。

なぜなら……

「ひばりの様子、おかしくなかったっ?!」

「今、どこにいるんですかつ?!」

明久も瑞希も、狐の着ぐるみを着たまま、えらい勢いで彼女に迫っているからだ。

愛嬌溢れるはずのその顔は、二人の剣幕にはまるでそぐわず、一種異様な迫力を醸し出していた。

「お、落ち着いて欲しいよん、二人とも。これじゃあ話すに話せないよん」

「あ……ごめん」

「す、すいませんクリスマスちゃん……」

引き気味のクリスマスに訴えられ、我に還る二人。バツが悪そうに（無論、狐の着ぐるみを装着したまま）顔を見合わせる。

その様子に、小さく息を吐いたクリスマスは苦笑いを浮かべながら口を開く。

「かなり怖がっていたみたいだねい。すがっちとにったんが、しつかりエスコートしたみたいだねい。今は、レストランでランチを楽しんでもらっているよん」 んで、実際のところどうなのかなん?」

「……………」

「そ、その……」

何でもないように訊ねるクリス。しかし、その瞳は真剣だ。

「ただの怖がりってだけなら、それも良いけどね。今の二人の感じだと何かあるんだよね？」

その言葉に、明久と瑞希は、着ぐるみのまま顔を見合わせる。そして、そのまま明久が頷いて、二人で着ぐるみの頭を脱いだ。

汗に濡れ、額に髪を張り付かせた二人の表情は硬い。そんな二人に対して、クリスは脇に積んであるタオルと、水分補給のためのドリンクの容器を渡す。

「ありがとうございます」

「ありがとうございます」

二人は礼を言っただけ取るも、少し俯きがちに顔を伏せ、汗を拭くこともドリンクに口を付けなかった。そして、少しの間の後、明久が意を決したように口を開く。

「……ひばりは、イジメられてたって話したよね」

「ラブレター事件の時のことだね」

明久の言葉に、頷きながら答えるクリス。それを肯定するように明久が頷き、話を続ける。

「小学校の……六年の時だったけ？」

「はい。おばさまが亡くなった次の年でしたから……」

確認する明久に、瑞希が頷きながら答える。それを受けて、明久は言葉を続けた。

「うん、そうだったね。その頃には、けっこうイジメ減っていたんだけど、気に入らないって子がまだ居てね。ひばりって、強気なところがあるから衝突は多かったんだ」

「ええ、私をかばって喧嘩になったこともありました」

明久の言葉に頷きながら瑞希も口を開く。

「臨海学校の時です。泊まっていた施設の裏山で、肝試しをしたんです。大した距離でも無かったんですが……」

「その、ひばりのことが気に入らなかった子が、順路にイタズラを

してね。ひばり、山奥へと迷い込んだんだ……」

そう話す二人の顔は、とても悲しそうだった。

「引率していた先生達が探してくれたんだけど、まるで見つからなくて……」

言いながら顔を見合わせる二人。顔を戻し、瑞希が口を開く。

「私たち子供は、すぐさま施設に戻されてしまって、細かい経緯は解らないんですが、警察の方や消防団の人達が総出で探してくれたみたいなんですけど、全く見つからなかったらしいんです」

瑞希の話に頷いて、明久が続ける。

「うん。見つかったのは夜も明けた頃で、なんだっけ？ 山神さまを奉つてあるほらかなんかの近くにある御神木の根元で、泣き疲れて眠っているところを発見されたんだ」

聞いていたクリスは息を吐く。

「……ということは、一晩中、山の中をさまよっていた訳だねい……」

「もう、泣きながら歩き回っていたんだけどね。でも、その祠のこゝと覚えてないんだよね」

苦笑いしながらひばりが締めくくる。話を聞いていたのは、須川亮に新田恵太、そして坂本雄二と霧島翔子の四人。

お化け屋敷を出た後、お昼にすると言う雄二と翔子に、サービスランチがあるというクリスと悶着があったものの、ひばり達も同席するという事で、雄二もクリスも矛を収めた。

本来なら、ひばり達の持っていたチケットではサービスにならないのだが、クリスがどこかへ連絡すると、OKが出たらしく、五人で豪華なランチを楽しむこととなった。

マナーの解らぬ男性陣が四苦八苦する中、お嬢様然とした翔子は苦もなくテーブルマナーをこなしていく。その横で、ひばりもテー

ブルマナーをしっかりと守っており、男三人が肩を落とすこととなった。

一通り食事が終わった辺りで、ひばりが、話題づくりのつもりで話し始めた、お化けが怖い理由だったが、ほかの四人は複雑そうにするばかりだった。

「え、えーと？　そ、そんなに深刻にならないで欲しいかな？　もう、笑い話くらいの感じなんだし……」

ひばりとしては、その時よりはお化けに対する恐怖感が良くなっている位のつもりで話したのだが、その前の怖がりようを見ている四人には、そうは思えなかった。場の空気を悪くしたと感じたひばりは、なんとか打開しようと思案するが、良い案が浮かばないようだ。

「え、えーっと、えっとえっと……そうだ！　見つけたときに、そばに大きくて黒い鳥の羽が落ちて……」

《皆様、本日は如月グランドパークプレオープンイベントにご参加頂き、誠にありがとうございます！》

ひばりの話を遮るように、アナウンスが響きわたる。

《皆様に楽しんでいただけるよう、スタッフ一同、誠心誠意を以ておもてなしさせていただいております！》

アナウンスを聞きながら、ひばりは、ほっと息を吐き、ミネラルウォーターの注がれたグラスに口をつける。

《さて、本日は、なんと！　ご結婚を前提にお付き合いを始めるようとしている、高校生のカップルがこの会場にいらっしゃいます！》

ひばりと雄二が同時にむせる。

「けほっ、けほん……御部、ナフキンとっへ……」

涙目で鼻を押さえながら隣の亮に頼むひばり。むせた瞬間、水が鼻へと逆流したらしい。

見れば、雄二も鼻を押さえて紙ナプキンに手を伸ばしていた。

《そこで！　我々如月グループとしては、お二人の応援をするべく、

催しを企画させていただきました！ 題して、【如月グランドパークウェディング体験】プレゼントクイズ〜！』

アナウンスに続いて、重々しい音と共に出入り口が閉鎖されていき、会場の照明が落とされる。その様子に、雄二は悔しそうに歯噛みした。

『本企画の内容は、至ってシンプルです！ こちらが出題するクイズに答えていただき、見事正解されますと、当グループの提供する最高級ウェディングプランを体験していただけるという企画です！ もちろん、ご本人様方の希望によっては、そのまま入籍していただくことも可能です！』

解説を聞いて頭を抱える雄二。

『それでは！ 坂本雄二さん、霧島翔子さん！ 前方のステージへおいで下さい！』

アナウンスが終わると同時に、二人にスポットライトが当たった。すると、レストランにいる観客の視線が二人に集中する。

「……ウェディング体験……頑張る……！」

珍しく興奮気味に翔子が立ち上がる。

「翔子ちゃん頑張って♪」

応援するひばりにひとつ頷いて微笑む翔子。

「待て、落ち着け翔子！ こういうのは、双方の合意がだ……」
焦るように言い募る雄二。それを見て亮と恵太がため息をつく。

「坂本、見苦しいぞ？」

「ふう、【ウェディング体験】でしょう？ なにを狼狽しているんです？ あなたは」

「人事だと思って気楽に言うなっ！」

同席している同姓二人の呆れたような発言に喚く雄二。そんな彼に、翔子が振り向く。

「……雄二は嫌？」

「だ、だからこういうのは……」

「……坂本君、年齢の関係で入籍はまだ出来ないんだし、翔子ちゃ

んの思いでのために出てあげなよ」

「ぐ」

小さなひばりに、諭すように言われて言葉に詰まる。わずかに思案し、口を開く雄二。

「……わかった、クイズに正解してプレゼントに当たれば参加はしてやる。体験、だしな。それで良いな？ 翔子」

自分にも言い聞かせるように言う雄二。それを聞いていた、ひばり、亮、恵太の三人は、（子供か）と思ったが、黙っていた。

「……構わない。クイズに正解すれば良いだけ」

一方で翔子は雄二公認と言うこともあって、鼻息を荒くする。そのまま彼の手を引いて解答席へと向かうが、雄二は処刑台へと向かう死刑囚のような面もちだった。

《では、第一問！》

クイズが始まり、司会者の声が響く。

「始まったね」

それを眺めて呟くひばり。横で恵太が頷き、亮が生あくびをする。翔子は真剣そうに耳をそばだてさせているが、隣の雄二は悲壮感を感じさせるほど必死な様子だ。

「……坂本の奴、わざと間違える気だな」

亮のつぶやきにひばりがそちらを見るのと同時に、問題が読み上げられた。

《坂本雄二さんと霧島翔子さんの結婚記念日はいつでしょうか？》
聞こえた問題文に目をむいて前を向くひばり。みれば、雄二の顔が、『おかしい。問題文の意味が分からない』という感じになり、動きが止まっている。

チャイムの音が響いて、司会者が翔子に答えを促した。

「……毎日が記念日」

「やめてくれ翔子！ 恥ずかしさのあまり悶死する！！」

頭を抱えて身を振る雄二。しかし、ついで聞こえてきた声に目を剥いた。

《お見事！ 正解です！》

司会者を睨む雄二。しかし、彼は澄ました顔だ。

それを見た雄二は、顔に決意を漲らせる。

《第二問！ お二人の結婚式はどちらで挙げられるでしょうか？》
問題が言い切られると同時にチャイムが鳴り、間髪入れずに答える雄二。

「鰯フライ定食！！」

《正解です！》

「なにいつ！？」

正解とコールされ、思わ声を挙げる雄二。

《お二人の式は、当園併設の如月グランドホテル・鳳凰の間、別名

【鰯フライ定食】にて行われる予定です》

その答えに、ひばりは汗を一すじ流した。

「……無理矢理だね……」

「司会側も必死みたいですね」

三人、妙な汗を流しつつ舞台を見ている。そこでは、雄二の抗議を無視して司会者が問題を読み上げるところだった。

《第三問！ お二人の出会いはどこでしょうか？》

悔しそうちにしながら、ボタンへ手を振り降ろす雄二。その眉間に衝撃が走った！

「ぐおっ？！」

思わず仰け反り顔を押しさえる雄二。その隙に翔子がボタンを押す。
「……小学校」

答える翔子の横で、何事かと周りを見回す雄二。そして、床に転がるBB弾に気づいて、観客席を睨む。

まっすぐ見つめたその先には、はちきれんばかりの筋肉の鎧をウエイターの制服に押し込めた大柄な少年、前田俊夫が楽しそうに手

を振っていた。

「前田っ?! あの野郎!」

表情をゆがめた瞬間、チャイムの音が鳴り、翔子が何事か答えた。
《正解です!》

聞こえた司会者の声に、振り向くと、第四問が終わったらしい。

「し、しまっ……」

「ちよっとお、おかしくな〜い? アタシらも結婚するよてーなのにい、どーしてそんなコーコーサーだけがトクベツ扱いなワケ〜?」

妙な口調の女の声が響き、進行がストップする。何事かと会場中の人間が見回す中、その二人が姿を現した。

「あつちや〜、またあの二人だよん……」

「うわあ……」

ステージ袖で進行を眺めていた明久たち三人。しかし、あらわれた二人を見て、クリスがゲンナリとなる。隣で明久もしかめっ面になった。

「? 何かあつたんですか?」

「ワガママかつ迷惑なお客だよん。お客だからなに言っても良いと思ってる類だねい」

首を傾げる瑞希にクリスが説明する。

「うん、ゲートで雄二たちの写真を撮ってるときもいちゃもんつけてきたし……」

「そんなことがあつたんですか……」

二人の話を聞いて不安げになる瑞希。

舞台では、リーゼントで顔中にピアスをつけたチンピラみたいな男と茶髪で化粧気の多い頭の悪そうな女がスタッフに噛みついていった。

『ああんっ?! グダグダグダぐるっせーんだよ! オレたち
やオキヤクサマだぞ、オ・キャ・ク・サ・マ!』

『アタシラもー、ウエディング体験ってヤツ? やってみたいんで
すけどー?』

ぎゃいのぎゃいのと騒ぐ二人を必死で宥めようとするスタッフ。

しかし、彼らは聞く耳を持たない。

『ゴチャゴチャやるせーんだよゴルァ! オレらもクイズに参加して
やるっつつてんだよ、このボケがっ!』

『そーよー! あ、そーだ、じゃーアタシらがあの二人に問題出
すからー、答えられたらあの二人の勝ちでー、答えられなかったら
アタシらの勝ちってことにしよーよ』

『お? いーねえ。それで行こーぜ! オラ! マイク寄越せつて
んだよ!』

強引にルールをねつ造し、マイクをひったくるチンピラ。

『じゃー問題出してやんよ……』

妙な成り行きに、固唾を飲んで見守る一同。

『ヨオオールオツパの首都はああ、でうくおであああっ?!』

水を打ったように静まり返る会場。予想の斜め上を三回転半捻り
した問題の答えを、だれも導き出せない。

『おめでとうございます、坂本雄二さん、翔子さん。【如月グラン
ドパークウエディング体験】をプレゼントいたします』

いち早く復帰した司会者が、素早くそう宣言すると、舞台に幕が
下りてくる。

いまだにアホカップルが何かがなっ居たが、気にするものはい
なかった。

会場を如月グランドホテルに移し、着々と準備が進められていく
ウエディング体験イベント。

ドレスの着付けと化粧の時間がかかったものの、観客たちは本格的な式の様子に待ちわびているようだった。

ちなみに待たされることに文句を言っていた雄二は、クリスのチヨークスリーパーで落とされ、大人しく待っていた(?)。

《それではいよいよ、本日のメインイベント、ウェディング体験です！ まずは新郎の入場です！ 皆様、拍手でお迎え下さい！》

万雷の拍手に迎えられ、雄二が姿を現す。

《それでは新郎のプロフィール紹介を………省略します》

あまりの仕打ちにずっこける雄二。

と、最前列から品の無い声が聞こえてくる。

『ケ、こーぼーの紹介なんざひつよーねーだろ。オレらの式に使えるかだけがわかりやいーんだしょー』

『だよねー』興味ナシ』

《……他のお客様のご迷惑になりますので、大きなお声での私語はご遠慮願います》

司会者に注意されるアホカップル。しかし、それすら意に介さず大きな声で騒ぐ。

《それでは、いよいよ新婦の入場です》

先ほどより音量が上がったアナウンスとBGMにあわせて、会場の照明がすべて落とされる。

一条のスポットライトが点り、壇上へと降り注ぐ。

《本日の主役、霧島翔子さんです！》

アナウンスと共に、いくつもの光の道が走り、一点を示す。
溢れんばかりの光に、雄二は思わず目を瞑り、ゆっくり瞼を開いていくと、そこに白い……どこまでも白い姿が現れた。

『……………綺麗』

静まり返った会場に、ため息と共に漏れる言葉。サクラも一般客もスタッフも無く出た言葉。どんな修飾も必要ない、純粹な言葉だ。ステージ中央へと歩くその姿には、一切の淀みもなく、静謐な雰囲気纏ったまま、雄二の前に立つ。

「ほんとに綺麗だね……」

「ええ」

「……そうだな」

ひばりの呟きに、恵太と亮が答える。

壇上では、翔子が雄二に小さく声を掛け、雄二が慌てたように答えていた。

「ふふっ、慌ててる慌ててる」

「天下の“悪鬼羅刹”もこうなったら形無しだな」

小さく笑うひばりに、亮も面白げにする。

「？ 動きが……？ 小さく震えてませんか？ あれ？」

訝しげになった恵太の言葉に、視線を飛ばすひばり。

《ど、どうしたのでしょうか？ 花嫁が泣いているように見えますが……？》

アナウンスが入り、司会者が二人に近づいていく。雄二はこうしたものか、動けなくなってしまうていた。

《夢、ですか？》

翔子の声が聞こえたのか、司会者が訊ねる。

「……小さな頃から……ずっと……夢だった……。私と雄二、二人で……結婚式を挙げること……。私が雄二のお嫁さんになること……。私一人だけじゃ、絶対に……叶わない、小さな頃からの……私の……夢……」

普段口数の少ない少女が、ぼつぼつと喋る。

「……だから……本当に……嬉しい……。他の誰でもなく……雄二と……一緒に……こうしていられることが……」

そこまで言って、静かに泣く翔子。

聞いていた亮ですら、胸にこみ上げるものがある。

「……ひばりさん？」

不意に聞こえた恵太の声に振り向く。

と、小さな少女が鼻を噉っていた。ぽろぽろと、こぼれ落ちる涙を拭きもせず、ただ、静かに泣くひばり。

《どうやら嬉し泣きのようです。花嫁さんは、本当に一途な方なのでしょう。さあ、これに花婿さんはどう応えるのでしょうか？》

言いながら雄二へマイクを向ける司会者。雄二は言葉に詰まっているようで、なかなか口を開かない。

それを見て、ひばりが祈るように呟く。

「……坂本君」

応えるように、雄二が動き、口を開く。

「しよ、翔子。俺は……」

『あーああ、つまんなーい!』

すべてを打ち砕くように、声が響きわたる。

ハッとしたように口元を押さえる雄二。

『マジつまんなーい、このイベントおー。コーコーセーのノロケなんてどーでもいいから、早く演出とか見せてよおー』

『まったくだぜ。ガキの戯言なんてどうでもいいっての。っーかよ、お嫁さんが夢? いくつだよオマエ? キヤラでも作ってんの? てか、脚本だよな? じゃなきゃあキメエっての!』

『純愛ごっこなんじゃない? バツカみたい、あのオンナ、マジでアタマおかしいでしょ? ギャグよギャグ』

『ハッ、ちげえねえや、コントだコント。でなけりゃあんなキモい夢、ずっと持つてるヤツなんかいるわきゃあねーだろ?』

『キヤハハハハっ!? マジ受けるんですけどっ?! これ、コントなんだ? キヤーハハハハ』

チンピラアホカップルの暴言で会場の空気はぶち壊しである。

『ああいつらあーっ!』

『だ、ためです明久君! 落ち着いてください!』

舞台そでで全て見ていた明久は、すでに激発状態だ。それを瑞希が必死に止めている。

『アツキー、今飛び出したら、全部台無しだよ。今は我慢なさい』
『けどっ……!』

明久は、落ち着いて寝めるクリスに食ってかかろうとして、息を呑んだ。すぐそばで、瑞希も顔を青くしている。

表情がまるで無い、石膏像のような顔だ。明久はクリスのこんな顔は見たことがなかった。

《は、花嫁さん？ 花嫁さんはどちらに行かれたのですか？》

そのアナウンスに、明久らが壇上に視線を移すと、すでに翔子の姿はなかった。彼女の居た場所には、ブーケとヴェールだけが残されており、雄二がヴェールを拾い上げる。

《霧島さん？ 霧島翔子さーんっ！ み、皆さん、は、花嫁さんを捜して下さい！》

アナウンスされる指示に、スタッフが動き出す。明久と瑞希も頷き合って出ていった。

「亮君、恵太君、あたしたちも捜そう！」

「ああわかった」

「ええ」

ひばりの言葉に、頷く二人。そのまま退場する客と共に、三人は園内へと走っていった。

「なあ、アンタら少し良いか？」

「ああ？ あんだおめえ？」

「大した用じゃあないんだがな……」

上着を脱いでタイを緩める雄二。

「……ちよつとそこまで、ツラあ貸せやあっ！！」

「くっそ、あのガキい、やってくれやがって……」

「リュータ、あんなコーコーセー、シメちゃおうよ」

ボロボロの男は女の言葉に頷いて携帯を取り出し操作する。

「待つてろ、今、松田のアニキに……あ、松田のアニキ、実は……え？ どうしたんです？ あ、アニキ待つて下さいよ！ アニキ！ くそっ、切れちまった」

「ど、どうしたの？」

切れてしまった携帯を見つめるリユータに、女が訊ねる。

「分からねえ。上から切られたとか何とか……」

「いようお二人さん」

不意に声がかかる。夕日を背に佇む、一人の女。逆光でよく見えないが、口元が笑っているようだ。

「ああっ？！ あんだてめえはっ？！」

男の声に笑みを深くする。よく見れば、その髪は金色のようだった。

「あんたの所属していた組は、もう存在しないよん」

「はあ？ なに言つて……」

「知る必要は無いねい」 あんたたちは、二度と外界が見られなくなるからねい」

「……ナメてんじゃねえぞっ？！ メスガキがあっ！！」

叫びながら向かってくる男に、両手を左右に持ち上げてみせる。

その指にはまった銀色が、夕日に輝いて、その軌跡が翼にも見えた。

週明けの学校。亮は教室で、新聞を広げていた。

「亮君どうしたの？」

不意に声を掛けられ、顔を上げると、小さな少女がそこにいた。

「ああ、いや。なんでもない」

顔を背けて新聞を畳む。そこには、『松鷹組壊滅！』『組員は全員重傷』『鬼が現れた』などの文字が踊っていた。

「それより、吉井がまたなんかトラブってるぞ？」

「え？！」

顔を上げながら振り返り、明久の元へ走るひばり。

「あつぶねえ、アダルトページ見たさに誤魔化しながら買ってるのがバレるところだったぜ……」

「なるほどねい、すがっちは巨乳が好きと……」

「ああ、やっぱり男たるもの、大きなおっぱい……って、なにやってんだクリス?!」

「んー? エロページ見てるよん」

「うおおおおっ?! み、見るなあっ?!」

アダルトページを堂々と広げて見ているクリスに、亮が頭を抱える。

今日も、二年Fクラスは騒がしくも平和だった。

番外編 9 遊園地デート ♪ あーいは、ウェディングヴェールのこと。

後編

番外編 9 いかげでしたでしょうか？

それでは、次回もよろしく願いしますね ♪

番外編 10 水着とプール？ あるいは、赤き水滴のこと。前編（前書き）

番外編 10 を更新しました ♪

いよいよプールです ♪

それでは、読んで下さるみなさんに楽しんでいただければ幸いです ♪

番外編 10 水着とプール？ あるいは、赤き水滴のこと。前編

リビングでノートを広げる小さな少女、支倉ひばり。テーブルの前に正座しながら、何枚もの紙片を確認し、何事かをノートに書き込んでいく。それを終えると、ノートを持ち上げ中身を確認する。

その内容に満足したのか、眉と口で、緩い弧を描きながら頷いた。
「うん」 だいぶ余裕出てきたね」 アキ君の生活費」 お小遣い、値上げしようかな」

確認するように口に出して、嬉しそうに笑う。

と、その時。

『うぎゃああああっ？！？！ 目がっ！？ 目がああっ！？』

『ぐぬうおおおお……』

突然聞こえてきた素っ頓狂な声に、正座したまま飛び上がるひばり。

「な、なに？ アキちゃんと坂本君の声？？」

目を白黒させながら立ち上がり、隣の吉井家を目指す。

「遊びに来る坂本君に買いたしたのだから、ご飯要らないって言うたけど、いったい何が……」

不安そうに呟きながら合い鍵を取り出し、鍵を開けるひばり。中からは、未だ喧噪が聞こえてきている。

玄関からリビングへ向かうと、すぐに罵声が聞こえてくる。

お互い罵っているようで、ひばりは足を早める。

「アキくんどうし……」

言いかけて絶句。吉井家のリビングは、食べ物や飲み物が散乱し、大変な事になっている。

呆気にとられていたのは一瞬で、すぐさま辞めさせようと動き出すひばり。

「二人ともやめ……わぶっ？！」

顔面に軽い衝撃。それに機先を制され口をつぐむ。その顔にへば

りついたのは、コーラまみれの縮れ麺。タレが絡みやすいように縮れているソレには、コーラがたっぷり絡んでいた。

そして拳がった声に動きを止める少年二人。

吉井明久と坂本雄二。

壊れた玩具のように声がした方へ首を巡らし状況を確認した。

「あ……」

「げ……」

顔面蒼白となる男二人。それに合わせたように縮れ麺がフローリングへ落ちる。

下から現れたひばりの顔は、コーラまみれで、目が据わっていた。
「ふ・た・り・と・も……なにやってんのおっ！！ リビングこんなにしてっ！ だいたい食べ物で遊ぶんじゃないっ！ そんなもって……こらあっ！！ 逃げるな坂本雄二いつ！！」

ひばりが明久の方へ詰め寄った隙に逃げ出す雄二。まんまと逃げおおせた彼の背を見送ったひばりは、柳眉を逆立て明久に振り返る。
「ひいつ?!」

正座で二時間は堅いと思った明久だった。実際は三時間だったが。

『ふう、危ねえ危ねえ。支倉のあの様子じゃあ、説教三時間は堅かったろうな……。しかし、くそ……体中ベトベトだぜ……帰る前にシャワーを浴びたかったが……。っとそうだ、シャワーがある場所があるじゃねーか……』

名案を思いついた悪ガキの顔で、雄二は歩きだした。

日付が変わった週始めの朝。

「よし、遅刻欠席は無いな？ では、転校生を紹介する！」

『ま、まじかつ！』

『きつと美少女に違いないっ！』

『いやいや、きつとうちゅーじんだよん』』

『お、俺、男の娘が……』

『お前に何があったんだ……』

『静かにせんかつ！！ 馬鹿者どもがつ！！ 高杉！ 入れっ！』

『おうっ！ やつと出番がきたがかっ！』

叫ぶような声とともに戸が乱暴に開かれ、浅黒い肌に野太い眉毛、バサバサの髪にバンダナを巻き、頬に十字傷のある少年が入ってきた。

「土佐から来た、高杉総司ぜよ！ よろしゅう頼むき！」

大きすぎる声で自己紹介する総司。

そんな彼にFクラスは。

『チツ、なんだ男か』

『希望持たせんじゃねーよ』

『ただでさえ男性率高けーのに暑苦しいの増やすんじゃねーよ』

『ひばりたんハアハア』

妙なのが混じってはいるが、テンションただ下がりだった。

「わし、なんかしたがかのう……」

「バカなだけだ。気にするな」

ちよつとだけしゅんぼりした総司に、西村教諭が答える。と、おもむろに手が上がった。

「はいはい、すりーさいずはいくつかなん」

楽しそうに質問するのは金髪の少女、クリスティーナ。ウェストロードことクリスである。

彼女の姿を認めた瞬間、総司は石と化した。

「まったく、酷い目にあつたぜ……」

「ボクだつてそうだよ。掃除、大変だつたんだからね……」

休み時間、不景氣そうな顔を寄せあい、グチり合う雄二と明久。その頭に、軽い一撃がそれぞれ加えられていく。

「自業自得でしょ？ 二人とも」

何事かと振り向いた二人の前に立つのは、愛ハリセン【小烏丸】を肩に担いだひばりだ。

「特に炭酸とコーヒー。アレを処理するの大変だつたんだから……」
言いつつ愚痴モードに入っていく。それはかなわんと表情を歪めた雄二が口を開く。

「すまんすまん、お詫びと言っちゃあ何だが、プールなんてどうだ？」

「プール？」

雄二の言葉に聞き返すひばり。軽くうなずいた彼は、さらに言葉を続ける。

「ああ、あの後、プールを無断使用してるのを鉄人に見つかつてな。罰として今週末にプールの掃除をするんだが、交渉の結果、『その際プールを使用して良い』と言われたからな」

「僕も手伝う予定だよ。『使いたきゃ掃除を手伝え』って言われてね」

「アキくんも？ じゃあ、あたしも手伝うよ。プール掃除なんてそうそう経験できないしね」

苦笑いを浮かべた明久に、ひばりが答える。すると、雄二が何かに気づいたように顔を上げる。

「他の奴らにも声を掛けるか。多すぎるとアレだが、掃除の手伝いは何人か欲しいしな。おーい、秀吉、ムツツリーニ、前田！」

「なんじゃ？」

「……用件は手短かにして欲しい」

「どうした？ 坂本」

呼ばれてやってくる三人。それを確認して笑みを浮かべる雄二。

「今週末に学園のプールに来ないか貸し切り状態で使えるんだ。ただし、ムツツリー二と前田には掃除を手伝ってもらうが」

「俺は構わんぞ？」

「……………」

快諾する俊夫と対照的に表情を歪めるムツツリー二。プール掃除は重労働なので、思うところがあるのだろう。

その様子に、雄二は軽く目をつむりながら言葉を続ける。

「ちなみにクラスの女性陣にも声を掛けるつもりだ」

「……………ブラシと洗剤を用意しておけ！」

即答だった。

「ふむ、支倉も参加するののか？」

「うん、掃除もやるよ？」

秀吉は軽く思案してからひばりに声を掛ける。

そして、彼女の答えにうなずいた。

「そうじゃな。貸し切りのプールなぞ、なかなか体験できるものではないしの。ワシも掃除込みで手伝うでしょう」

「二人ともほんとに掃除も参加するの？ 結構大変だよ？」

「うむ。お安い御用じゃ」

「なかなか体験できることじゃないしね」

掃除も手伝うという秀吉とひばりに、明久が声を掛けるが、二人ともやる気満々である。

「んじゃ、後は女性陣だな。おい、クリス、姫路、島田、来島ー」

雄二のよく通る声で呼ばれた四人は、何事かと振り向き、それぞれやってくる。

「どうしたの坂本？ 何か用？」

まずやって来たのは、特徴的な吊り目とポニーテールの帰国子女、島田美波。

「呼びましたか、坂本君？」

そして、温厚な性格でスタイル抜群なピンク髪の少女、姫路瑞希。
「眠いのですが……………」

あくび混じりに言うのは、シヨボついた目に、べっとりと隈を張り付かせた黒髪ストリートロングの少女、来島アキ。

「おねーさん、惨状　ナニナニにかなん♪」

アップテンポで踊りながら表れる金髪碧眼の少女、クリスこと、クリステイーナ「ウエストロード。」

四人が揃うのを見計らって、雄二が口を開く。

「四人とも今週末は暇か？　学校のプールが貸しきりで使えるんだが、良かったらどうだ？」

「え……？」

美波が一人、プールという単語に反応する。それを見て明久がバツが悪そうに頭を掻いた。

「あ、もう予定とかあった？」

「そうですね。私は無理ですね。その日は召喚システムのメンテナンスがありますから」

明久の言葉に返事を返すのはアキ。

「そっか……残念だったね、来島さん」

「いえ、次の機会にでも誘ってください」

本当に残念そうな明久に、苦笑いを浮かべるアキ。その横で、美波がうんうん唸っている。

「うっ……どうしよう？　プールって水着よね……」

「はいい♪　おねーさんは参加するよん♪　にゅふふ、あちしのせくすいな水着姿に悩殺されるが良い♪」

「私も予定はありませんし、行きますよ」

悩む美波をおいて、参加を表明するクリスと瑞希。

それに驚いて顔を上げる美波。

「えええっ？！　二人ともそんなあっさり？！　み、水着なのよ？！　アキとかに見られるのよ？！」

「おねーさんは別に構わないよん♪」

「私は……明久君には毎年見られてますし、今更ですから……」
あわてる美波に答える二人だったが、爆弾が混じっていた。

「み、瑞希どうしたことっ!？」

「へ? 明久君とひばりちゃんとは、毎年泳ぎに行ってますし……」
美波の剣幕に、気圧される瑞希。その様子に苦笑いしながら明久が口を開く。

「そろそろ泳ぎの課題をクリアーしないとね」

「はい! 目標25メートルです」

「あたしもがんばらないとね」

明久の言葉に、瑞希が小さくガッツポーズして見せ、ひばりも嘆息するように呟く。

「ズ、ズルイわよっ?! 二人ともっ!！」

そんな幼なじみトリオに、美波が声を上げる。

「で? どうするんだ、島田」

「い、行くわ。イロイロと準備して……」

ぶつぶつ呟きながらOKする美波。

と、秀吉が何か思いついたように顔を挙げた。

「ふむ、丁度良い機会じゃし、水着を新調するかの。合わせて買ってくるでしょう」

「ウチも新しいの買おうかしら……?」

秀吉の思いつきに同調する美波。横目で明久を見ている辺りに乙女心が垣間見えている。

しかしそこで、瑞希が何かに気付いたように声を上げた。

「あれ? でも美波ちゃん、この間水着の話をしたときには、『去年買ったばかりだから、今年は要らない』って……」

「み、みみみ瑞希!? 余計なこと言わないでっ!? 今回買うのは別口! 勝負用よ!」

「美波ちゃん、それは墓穴を掘ってるよ……」

「……気のせいよ」

ひばりにツッコまれて肩を落とす美波。掘ってしまったことを自覚したようだ。

「あ、坂本君。ちゃんと翔子ちゃんにも声かけるんだよ?」

「……言われなくてもそのつもりだ」

ひばりに言われて、憮然と返す雄二。

「へえー、雄二も素直になったもんだね」

その様子に明久が感心したような声を出す。と、肩が軽く叩かれた。

「いやいやあ、それは違うよん？ アツキー」

「そうだ、クリスの言うとおり、そういう問題じゃない」

「??? じゃあどういう問題なのさ？」

「はあ。いいか？ 明久。想像して見る。俺の立場で、後々になつてからこのことが翔子に知られるという状況を」

言われて明久はアゴに手をやり考え込む。

木魚を叩く音が聞こえるように思索し、呟く。

「拉致監禁……既成事実……」

「変な方向に想像してないか？ とにかく、後で知られる方が酷いことになるからな。さて、概ねオツケーのようだ。んじゃ、土曜日の朝十時に校門前で待ち合わせだ。水着とタオルを忘れるなよ」

そんな雄二の言葉に続くように、予鈴が鳴った。

時は流れて週末、土曜日。晴れ上がった青空は、絶好のプール日よりである。

「おはよー三人とも」

「おはよっ、みっちゃんとクリスに、木下君」

校門で固まっている三人に挨拶するのは、明久とひばり。

「おはようじゃ、明久に支倉。良い天気じゃな」

「おおっ、二人ともおはようだよん、にゅふふ、この青い空と！ 白い雲の下で！ 思う存分パトスを解放しようじゃあないかなんつー」

「うふふ、おはようございます明久君、ひばりちゃん。今日は良い

一日になりそうですね」

Fクラスの綺麗どころ三人に挨拶を返してもらい、感涙にむせびながら拳を握りしめる明久。その隣ではひばりが額に手を宛てながらため息をついている。と、明久が何かに気付いて移動する。

その先には、校門の陰でしゃがみ込んで、何か作業している土屋康太ことムツツリー二が居た。

「ムツツリー二。おは……」

上機嫌で挨拶をしようとした明久は、思わず息を呑んだ。

なぜなら康太は、オーラを吹き出さんばかりに鬼気迫る様子でカメラの手入れをしていたからだ。しかし、明久はグツとこらえて、彼に声を掛ける。

「あ、あのさ、ムツツリー二」

「……………今、忙しい」

にべもなかった。

しかし、明久は怯むことなく口を開く。

「ムツツリー二。準備はいいけど、無駄になっちゃうんじゃない？」

その言葉を聞いて初めて康太は顔を上げた。

「……………なぜ？」

「いや。だってさ、ムツツリー二はどうせ鼻血で倒れちゃうんじゃないかな」

明久の指摘に、康太は不敵に笑う。

「……………甘く見てもらっちゃ困る」

そういうと、脇に置いてあったスポーツバッグを開けて見せた。

「……………輸血の準備は万全」

中身は携行用の血液パックと保冷剤だった。それをみた明久は、軽く目を細めて遠くを眺めるようになった。

「うん。最初から鼻血の予防を諦めている辺りは、ある意味男らしいよね」

そんな二人の耳に、女性陣の会話が飛び込んでくる。

「そつえば木下君、水着を買うつて言っていたよね？」

「うむ、すっかり買ってまいったぞい。男らしく、トランクススタイルプじゃ！」

「「バカなああああゝっつ？！？！」」

秀吉の台詞に両手両膝を地に着き、絶叫する男二人。

「な、なんじゃ？」

「はあ、なにしてるの二人とも……」

「あはは……」

突然の絶叫に驚く秀吉。ひばりはこめかみを押さえながら呟き、瑞希は苦笑いする。

「酷いよ秀吉！ 僕の気持ちを弄んだのっ！？」

「……………見損なった……………！」

「ひでみーの裏切りものっ！ おねーさん、男の娘の水着楽しみにしていたんだよん！」

いつの間にかクリスが混じっていた。

「なぜワシが責められるんじゃ？」

納得がいかないのか懨然となる秀吉。しかし、ふと思いついたように隣のひばりへと顔を向ける。

「支倉もワシがトランクスを履くのはおかしいと思うのかの？」

「えっ？ 良いと思うよ？ 男の子なんだし、トランクスがおかしいって事はないよ」

突然振られて戸惑うも、にこやかに答えるひばり。それを聞いて秀吉は、我が意を得たりとうなずく。

「うむ。やはりワシの選択に間違いはなかったのじゃ」

腕を組んで胸を張る秀吉に、明久がなおも声を上げようとする。が、軽快な足音がしたかと思うと、背中になにかが飛びついてきて慌ててしまう。

「わわっ？ なんなんだ？」

すると、明久の肩口からひよいと顔がのぞいた。

「おはようございますですっ！ バカなお兄ちゃん！」

「は、葉月ちゃん？」

元気な声とともに、笑顔を見せるのは、島田美波の妹、島田葉月だ。

「もう葉月ってば。アキがびっくりしてるでしょう？」

続いてやってきたのは姉の美波。そして。

「悪いな遅くなった」

はちきれんばかりの筋肉に覆われた、前田俊夫だ。

「あれ？ 美波ちゃん前田君と一緒にだったんだ」

「へっ？ いやあの、そこで会ったのよ。ね？ 前田」

「ハッハッハ、そういうことだな。ん？ 坂本はまだなのか？ 俺たちが最後だと思ったんだが」

「いえ、もう来てますよ。今、職員室へと鍵を借りに行ってます」

「戻ってきたようじゃぞい」

瑞希が俊夫等に説明していると、秀吉が校舎から出てきた雄二と翔子に気付く。

「おはよう雄二、霧島さん」

「おう、さすがに遅刻しなかったか」

「……おはよう」

雄二と翔子に挨拶する明久。

と、その背中から葉月も腕を一杯に伸ばしながら元気良く挨拶する。

「お兄さん、おはようですっ」

「ん？ ちびっ子も来たのか」

「ちびっ子じゃないですっ。葉月ですっ！」

「はは、悪い悪い。良く来たな葉月」

「はいっ」

元気な葉月に相好を崩す雄二。楽しげに葉月の頭にポンポンと手を置いている。

そこへ、バツの悪そうな美波がやってくる。

「悪いわね坂本。出かける準備してる最中に見つかっちゃってね。連れてけって駄々をこねるもんだから……」

「なに、構わないさ。知らない仲でも無し、一緒に楽しめば良い」
気にするなど言わんばかりに笑って答える雄二。それを見て、美波が安堵の息を吐く。

「そう？　ありがと坂本。良かったわね、葉月」

「はいですっ！」

美波に言われてうれしそうにうなずく葉月。それを見てから周りを見回す雄二。

「よし揃ってるな。んじゃさつさと着替えるか。女子更衣室の鍵は翔子に預けてあるから、一緒に向かってくれ。着替えたらプールサイドに集合だ」

雄二の指示に従い二手に分かれる一同。

瑞希と美波とひばりは翔子の後に、明久と康太と俊夫と秀吉、葉月にクリスが雄二についていく。

「って、葉月ちゃんとクリスと秀吉は女子更衣室でしょ。霧島さんについて行かないとダメだよ」

言われて軽く笑う葉月とクリス。

「えへへ。冗談ですっ」

「アツキーツツコみ早いよん？　更衣室について着替え始めて気付くのが正しいツツコミだよん」

「ワシは冗談でもボケでもないんじゃが……」

楽しそうな葉月とクリスに対し、微妙な顔つきの秀吉。

「ほら、遊んでないで行くわよ葉月、クリス、木下」

「し、島田！？　ついにお主までワシをそんな目で見るように！？　い、嫌じゃ！　女子更衣室で着替えるのだけは嫌なのじゃ」

絶対拒否の姿勢を見せる秀吉。だがその体をまさぐる手が現れる。クリスだ。

「まあまあ、一度やってしまえば後は慣れだよん」　嫌よ嫌よも良いの内ってない」

「あ、ふう……い、嫌じゃ……嫌なんじゃ……」

「……………！！（ボタボタボタボタ）」

突然振ってわいた美少女同士（？）の絡みに、康太の鼻から比重の重い液体が垂れていく。

「わわっ?! しっかりするんだムツッリーニ!! ダメだよ秀吉! ムツッリーニが死んじゃうよ! (ポタポタ)」

顔は真面目だが、鼻から赤いモノが垂れている明久だった。その様子を見ていたひばりが嘆息しながら口を開く。

「はぁ、それなら、木下君だけ別の場所で着替えたら? それなら問題ないでしょ?」

この言葉が決め手となり、一同はそれぞれの着替え場所へ向かった。

ただ一人、秀吉だけがむくれていたが。

番外編 10 水着とプール？ あるいは、赤き水滴のこと。前編（後書き）

番外編 10 いかがでしたでしょうか？

みんなの水着姿は次回になります♪

いったいどんな水着を着るのか、楽しみにしていて下さい♪

番外編 11 水着とプール？ あるいは、赤い水滴のこと。 中編（前書き）

番外編 11 水着とプール？ あるいは赤い水滴のこと。 中編
を更新しました♪

普段より短めですが、ご容赦のほどを。

それでは、読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

番外編 11 水着とプール？ あるいは、赤い水滴のこと。 中編

「やっぱり女子はまだ着替え終わっていないか」

「そうみたいだね」

「……………（コクリ）」

「ま、女性が準備に時間がかかるってのは、当然だからな」

トランクスタイプの水着に着替えた男子四人は、思い思いのスタイルで女性陣を待っていた。

引き締まった無駄のない肉体でストレッチしている長身で赤毛の少年は坂本雄二。

その向こうで軽く準備体操をしているのは、はちきれんばかりの筋肉に覆われた肉体の前田俊夫で、すでに泳ぐ気満々のようである。更衣室の方を眺めているのは、どこかネジ一本抜け落ちたかのような少年、吉井明久だ。その隣には、より小柄だが気配の薄さと鋭さを兼ね備えた少年、土屋康太こと、ムツリーニが立つ。

「ムツリーニ、心の準備は良いかい？」

「……………まかせろ。すでにイメージトレーニング512パターン済ましてある」

その言葉に明久が、目を見開いて驚愕する。

「……………そして512パターンの出血を確認した」

「……………致死率100%だね」

力強い康太の言葉に、明久の目が虚ろになる。

「ん？ 誰か来たみたいだな」

雄二の声に、視線を巡らすと、更衣室の方から小さな人影が走ってくるのが見えた。長い赤茶色の髪を頭の左右で結んで、ツインテールにした女の子、島田葉月だ。小学生らしいおとなしめな紺の水着を身にまとい、大きく腕を振り、鎖骨下の大きな果実を揺らしながら走ってきた。

炭酸飲料の蓋を開けたような音と共に、康太の鼻下に、赤く細い

線が刻まれる。

「……………弁護士を呼んで欲しい」

鼻血を垂らしながら呟く康太。それを聞いて明久が苦笑いする。

「お兄ちゃんたち、お待たせですっ」

息を弾ませ駆け寄ってきた葉月の姿を見て、明久が微笑む。

「懲役は二年で済みそうだね、ムツッリーニ」

「……………実刑はやむをえない（ポタポタポタ）」

「なんだつまらん。意外と冷静だな明久。それからムツッリーニは小学生相手に興奮しすぎだ」

二人の様子を見ていた雄二はつまらなそうに明久に言いつつ、康太にツッコむ。それを聞いて明久が苦笑い。

「いや、ひばりで見慣れたプロポーションだしね」

「なるほどな」

と、さらなる人影が更衣室から飛び出してくる。

「こ、こらああつ?! お姉ちゃんのソレ、勝手に持って行っちゃあダメでしょ?! 返さない葉月くっ?!」

片手で胸元を押さえながらも、もう一方の腕を振り回しながら走ってくるのは、葉月の姉、島田美波。スレンダーで、腰の位置が高めなモデル体型の美少女だ。

「? ソレって?」

「……………パッド」

「ほえ?」

美波の言葉に訝しげになった明久だが、隣で呟く康太の言葉にそちらを向く。すると、康太は下の方を見ながら指さしていた。つられるように明久がそちらを見ると、先ほどまでであった葉月の胸の膨らみが、お腹の辺りに移動していた。

「あうう。ずれちゃいました」

そう言って、葉月は水着の中に手をつっ込んで、膨らみを胸の方へと戻す。美波の言う「ソレ」とは、この胸パッドのことのようだった。

「なるほど……」

明久が小さくつぶやきながら納得していると、美波がやってくる。思わず視線がそちらへと動く明久。

「……な、何よ。なんか文句あるの？」

そう言いながら、スポーツタイプのセパレート水着のトップスを両手で押さえつつ、明久の視線から逃がそうと身をよじる。

「えっ!？」 あ、ごめん。あんまりにも似合っていたから見つめちゃったよ。不躰だったよね」

美波の態度に、明久は軽く照れたように目を逸らす。しかし、美波は明久の言葉を耳ざとく聞きつけ、頬に朱を散らす。

「え……? アキ。似合うつて本当に……?」

思わず訊ねてしまう美波。

「え? う、うん。手も足も細くて長くて、ボディラインもすっきりしていて、すごく綺麗だと思うよ?」

明久の素直な言葉に、美波は顔の朱を紅へと変化させ、湯気を噴く。

「なっ?! なななっ?! 何言ってるのよアキってば!」

思わず両手で頬を押さえ、体を左右へ振る美波。

「あ」

間抜けな声に、はたと気づいたときには、パッドを入れて丁度に合わせてあったトップスがズレていた。

が、それは明久と康太の記憶には残らなかった。

「~~~~~っ?!?!」

声にならない悲鳴を上げた美波の放った、マッハパンチの拳しか視界に残らなかったからだ。

そのままダッシュで更衣室へ駆けていく美波。それと入れ替わりで現れたのは、長い黒髪を翻す、霧島翔子。その優雅に歩く姿に明久たちは見入ってしまう。

彼女は、そのまま自然な足取りで彼らの元へと歩み寄っていき、流れるような動作で雄二の頭を両手で左右から鷲掴みにして固定し

た。

「ぐっ？！　しょ、翔子おまえなに、す……」

「……雄二が見ていいのは私だけ」

ほかの人間のことなど意にも介さず雄二の頭を自分の胸へと押しつけようとする翔子。

「雄二、もう諦めなよ」

「……………殺したいほど妬ましい！（ギリギリギリ）」

明久はやれやれと首を振り、康太は嫉妬に血涙を流す。

さらに更衣室から小さな人影が現れた。

Ｔシャツにパーカーまで羽織った小さな体躯にボリウームのあるポニーテールと大きな胸の、支倉ひばりだ。

「お待たせ」

小脇に荷物を抱えてやつてくる。

「あー、やつぱりＴシャツ着ちゃったんだ」

「……………残念」

「う。水に入る時は脱ぐよ」

明久と康太に言われて後ずさるひばり。やはり水着姿を見られることには未だ抵抗があるようだ。

「こっちの荷物は？　ヘルパー？」

「うん、アームヘルパーとかだね。あつちで膨らませてるからね」

「ほーい」

明久の返事を聞きつつプール端へ移動するひばり。ついでに翔子へやりすぎないようクギを刺すことも忘れない。

そうこうしている内に美波も別の水着で現れる。

「あれ？　美波、水着替えちゃったんだ」

やってきた美波を見て言う明久。対して美波は慌ててごまかしにかかる。

「え？　ええ、サイズ間違えちゃったらしくて……」

「はは、そうなんだ。そういえばさっき何かあったような……」

「わ、忘れなさいっ！」

桜色の記憶が脳裏をチラついたが、美波の剣幕に消し飛ばされてしまった。

「……………来た！」

妙に力強い康太の声に、そちらを見る明久と美波。すると、更衣室から走ってくる人影に気付いた。

「す、すいませ〜ん。ちょっと背中 of 紐を結ぶのに時間がかかったやつて…………」

小走りにこちらへ近づいてくる生物兵器（姫路瑞希）。その走るリズムに合わせて弾む、薄ピンクの布地に覆われた二つの果実。

「……………すまない明久」

隣から聞こえてきた、掠れるような声に振り向く明久。

「え？ なに？」

「……………先に、逝く…………」

その言葉と共に崩れ落ちる康太。

その向こうでは、美波が頭を抱え、天を仰ぎながら何事か叫んでいた。

「W o r a u f f u r e i n e m S t a n d a r d h a t
G o t t j e n e u n t e r s c h i e d e n , d i e
h a b e n , u n d j e n e , d i e n i c h t h a b
e n ! ? W a s w a r f u r m i c h u n g e n u g e
n d ! （神様は何を基準に、持つ人と持たざる人を区別しているの
！？ ウチに何が足りないっていうのよ！）」

「…………雄二」

「見てないっ！ 見てないから安心しろ！」

「……………わかった、信じる」

そしてあちらでは入籍目前の夫婦がなにやらやりとりしていた。

「あ、あのみなさん何をしているのでしょうか…………？」

「あはは。気にしなくても良いよ、瑞希ちゃん」

「ふわぁ…………。お姉さんのお胸、凄いです…………」

周りの様子に混乱する瑞希を明久が宥める。その横では、葉月が

瑞希の胸を見て、目を丸くしていた。

「あ、あの明久君……？ どうでしょう？ この水着。変じゃないですか？」

「ううん、凄く似合ってるよ」

もじもじしながら訊ねる瑞希へ、笑顔で答える明久。それを聞いて瑞希の顔が綻んだ。

「ほんとですか？ 似合わなかったらどうしようかと思ってたんです」

照れくさそうに両頬を手で挟みながら、身をよじる瑞希。あわせで二つの果実も変形する。

「ううっ、瑞希はやっぱり敵よ……ウチとの友情を裏切ったのよ…

…」

ぶつぶつ呟きながら瑞希を睨む美波。

「あ、金髪のお姉ちゃんですっ」

「……！」

突然上がった葉月の声に、康太が即座に直立不動となり、明久もそれに並ぶ。

プールサイドを悠然と歩く金髪碧眼の少女、クリスティーナ・ウエストロード。その体には、バスタオルが巻き付いている。そのまま、皆の前に着くと同時に、タオルに手をかけながら軽くスピンしつつ背中につっかけるようにそれを広げた。その瞬間。

『！？』

彼女の姿を見た一同の時間が止まった。その水着姿に呆気にとられたのだ。

首の付け根から左右の鎖骨の上を、2cm幅の布地がまるでレールのように走り、それぞれが左右の山の頂を越え、あばらの上を通

り過ぎ、お腹の真ん中の窪みを挟み込むように抜けて、足の付け根で合流し、腿と腿の間へと入っていく。

スリングショット。あるいは2wayと呼ばれる水着だ。

二本の布地は、右がオレンジで左が白となっているのだが、側面から見ると、遮るものが何も無く、肌色ばかりしか見えない。露出面積ではトップレベルともいえる過激な水着だ。

それを苦もなく着こなし、堂々と胸を張れる辺り、この少女のぶっ飛び具合が解るといふものだ。

「待たせてすまぬ。着替えはさほど手間取らんかったのじゃが、校舎からプールが……って、何事じゃこれはっ?！」
遅れてプールにやってきた秀吉が見たものは……。

天に召されていく、明久と康太。

必死で二人の蘇生作業をする俊夫と瑞希と美波。

目を押さえてのた打ち回る雄二。

右手をチョキにしながらため息を吐く翔子。

プールサイドで轟沈しているクリス。

そのクリスに、【小鳥丸】片手に説教するひばり。

不意に秀吉に気づいた葉月が振り向く。

「わつ。お姉ちゃん、とっても可愛いですっ」

言われて我に返る秀吉。

「む？ 何を言っておるのじゃ？ 島田妹よ。ワシは見ての通り男じゃぞ？」

「ふえ？ でも葉月はその水着、女の子用だと思っです」

「な、なんじゃと！？」

葉月に指摘され、‘女物’のトランクスタイル水着を着た秀吉は、真っ白に燃え尽きていた。

番外編 11 水着とプール？ あるいは、赤い水滴のこと。 中編（後書き）

番外編 11 水着とプール？ あるいは赤い水滴のこと。 中編

いかがでしたでしょうか？

まあ、女性陣の水着披露のみたいになってますけどね。
それでは、次回もまたよろしく願いしますね♪

番外編 12 水着とプール？ あるいは赤い水滴のこと。後編（前書き）

番外編 12 更新しました♪

読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

番外編 12 水着とプール？ あるいは赤い水滴のこと。後編

「じゃあ、ひばりに姫路さん。早速練習始めようか」

カオスな状態になった各人の水着披露だったが、何とか事態を収拾した一同。過激な水着姿が問題視されたクリスは、女子一同に詰め寄られ、しぶしぶ別の水着に着替えていた。

もっとも、替えを用意している辺りに彼女のしたたかさが見えた気もする。

ともあれ、気を取り直して、軽く準備運動してからプールに入り始める一同。競争するものもいれば、ゆったりと流れに身を任せるものプールサイドで談笑するものもある。

そんな中、泳ぎの不得意な少女二人は、幼なじみの少年に、泳ぎを教わっていた。

薄いピンクのビキニ姿の姫路瑞希とスカイブルーの生地には花柄をあしらったビキニの支倉ひばりだ。ひばりの方は、アームヘルパーと呼ばれる腕用の浮き輪もつけている。その三人の元へ、オレンジのビキニに着替えたクリスといままでスピード勝負をしていた、ポニーテールの帰国子女島田美波が近づいてくる。

「ふう、三人で隅っこに固まって泳ぎの練習？」

「はい」

「うん、あたしもみっちゃんも泳ぐの苦手で……」

苦笑いしながら頷く、瑞希とひばり。その隣で明久も苦笑いを浮かべている。

「そうなんだ。じゃあ、ウチも教えてあげるわ。こう見えて水泳は得意だし、アキ一人じゃ大変でしょ？」

三人の様子に、笑いながら提案する美波。

「いいの？」

「構わないわよ？ いつも瑞希やひばりには勉強でお世話になってるし、そのお礼ってことでね」

申し訳無さげに聞いてきたひばりに、片目を瞑りながら答える。
つくづくこういう所作の似合う娘である。

これを見ていた明久は、何かを思いついたように、楽しげに口を開く。

「こうして見ると、美波がAで姫路さんやひばりがFみたいだね」

「失礼ね、寄せて上げればBくらいあるわよっ!!」

「あ、明久君。あんまりそういうことを言うのは……」

「もう、セクハラだよ？ アキくん」

三人から非難されて明久は目を白黒させる。

『はいはい』 おねーさんはFだよん』

『……雄二。ちなみに私はCクラス』

『？ 何を言ってるんだお前は？』

「おにーいちゃんっ」

「わぶっ!？」

背後からの不意打ちに、思わず水中に沈み込む明久。

「な、何が!？」

あわてて水面に顔を出すと、目の前に笑顔の葉月の顔があった。

「何だ葉月ちゃんか。びっくりしたよ……」

「えへへっ。お兄ちゃん、葉月と遊ぶですっ」

屈託のない顔で言われて、思わず首肯仕掛ける明久。しかし、すぐに困ったようになる。

「いいよアキくん。葉月ちゃんと遊んであげなよ」

不意にかけられた声に、驚いてそちらを見る。すると、ひばりと瑞希と美波が笑みを浮かべながら彼を見ていた。

「今日は葉月ちゃんより年上の人ばかりですし、遊びたい相手と遊ぶのが良いと思うんです」

「そうね。手伝わって言うておいて悪いんだけど、葉月の面倒見て

いてくれるかしら？ 葉月、アキの言うことをちゃんと聞くのよ？」

「はいですっ」

「うんそうだね。それじゃあ美波、悪いんだけど、ひばりと姫路さんのこと、頼むね」

瑞希と美波にも言われて、肯く明久。そのまま二人を美波に頼んで葉月と離れていく。

『さあっ！ 二人とも？ まずはその、天然の浮き袋を燃やし尽くすのよっ！！』

『み、美波ちゃん落ち着いてくださいっ』

『目が怖いんだけどっ？！』

『二人にはわからないのよ！ 水の抵抗が少ないおかげで、あんなに綺麗に泳ぐクリスより早く泳げてしまいうちの悲しみなんてっ！』

『そ、そんなこと言われても……』

『み、美波ちゃん。あまり良い事ばかりでもないですよ？ 肩が凝って大変ですし……』

『そ、そうだよ！ 変な目でジロジロ見られるし……』

『それでもいいの！ 肩凝りや見られるくらい我慢するわ！』

『お姉ちゃん、はりきってますっ』

『あ、あはは……』

美波等の様子を見て声を上げる葉月。それを聞きつつ向こうの様子に苦笑いするしかない明久。

そうして遊び始めた二人をみて、プールサイドに腰掛ける俊夫は軽く微笑んだ。そこへ金色の塊が浮かび上がってくる。

「ぶあっは」

水面から飛び出した塊は、クリスの頭だ。軽く振って、水を飛ばしてから髪を掻き上げ、プールサイドへ揚がりながら腰掛ける。

「ふう、楽しいねい♪ トッシー♪」

「そうだな。それに平和だ」

「うむん」 平和が一番だよん」

言いながら大きく頷くクリス。その視線の先では、葉月が明久に何事か提案しているようだった。それを聞いた明久の顔が引きつった。

「ところでトッシー」

「ん？」

「さっきのおねーさんの水着はどうだったかなん？ 興奮した？」

ニヤニヤ笑いながら訊ねるクリス。しかし、俊夫はあまり動じていないようだった。

「うん？ さっきのスリングショットか？ まあ、ああいうのも良いが、ウエストロードには、今着てるような明るい感じのものの方が似合うし、可愛いと思うぞ？」

「へ？ かわ……？」

思案するように答えた俊夫の、思わぬ言葉に朱が射すクリス。そのままあわてたように立ち上がる。

「ま、まあ、おねーさんは何着ても似合うからねい」

「ハハ、かもな」

彼女の言葉に笑って頷く俊夫。それを横目で、チラと見たクリスは軽く勢いを付け、綺麗なフォームでプールへ飛び込んだ。

「あれ？ プールを使ってるの代表達だったんだ」

明久と雄二と翔子にクリスマスまで参戦した水中鬼の最中に、聞き慣れない声が響く。

「……愛子？」

聞こえた声に、翔子が追跡をやめる。次いで明久と雄二も泳ぐのを中止して、翔子が見る方向へ顔を巡らし……二人揃って背後からクリスに襲われた。

派手な音とともに水柱が立ち、三人の姿が水中へ没する。
が、すぐさま逃れて水面に顔を出した。

「ぶはっ?! 何するんだよクリ……ス?」

「げほっ!? なにしゃ……が……る」

「おおっ♪ もっちゃんだいた〜ん♪」

そこで明久が目にしたのは、クリスの胸に手をかけている雄二の姿だった。

「い、いや……これは……その……」

思わぬ事態にしどろもどろとなる雄二。思わず手に力が入り、クリスの柔玉が変形する。

「あん♪ もっちゃんのすけ〜」

「い、いや……だから……ハッ?!」

胸への刺激に嬉しそうな声を出してみるクリス。雄二は慌てて手を離しながら言い訳をしようとして、背後の殺気に気づく。

「……雄二」

「ま、待て翔子! これは事故だ! 決して俺に責任は……!?!」

翔子に向き直って言い訳を始める雄二。しかし、彼女は最後まで言わず、素早く彼の腕を掴むと自らの胸に押しつけた。

「へっ?」

「おおっ♪」

「わぁっ」

「ほっ」

「! ▲ ○×???!」

各人が驚きの声を上げる中、雄二だけが宇宙語になっていた。

「……雄二は他の子を触ったら駄目。触りたければ私のを触れば良い」

軽く頬を染めながら、そう言い切る翔子。

「……へえ、代表って、すぐく積極的なアプローチするんだね」

話の途中で腰を折られた格好だったが、そのボーイッシュな少女、工藤愛子は気にした風でもなく、感心したような声を上げる。

「ええい、落ち着け翔子！ 触りたくて触った訳じゃ無えっ？！ 事故だ事故っ！」

何とか翔子を振り払い、そう言う雄二。翔子は、残念そうにするが、一応、納得したように見せる。

「たく。で？ Aクラスの水藤だったか？ どうしたんだ今日は」

「ボク？ ボクは水泳部だからね」

雄二の言葉に答える愛子。その答えに軽く頷いて口を開く。

「なるほど。だが、今日は水泳部は休みだって連絡が行ってるはずだが？」

「そうなんだよね。すっかり忘れていて、学校までたどり着いてから思い出したんだよ。帰ろうかとも思っただけど、人の声と、水音がしたから見に来たんだ。せつかくだし、良ければボクも混ぜてもらっても良いかな？」

苦笑いしながらそう提案してくる彼女に笑顔を見せる雄二。

「ああ、構わない。別に俺たちのプールってわけでもないしな」
言いながら親指で美波等の居る方を指差す。

「もうすでに一人、増えたみたいだしな」

『お姉さまっ！ プールに行くのなら、どうしてミハルに声をおかけにならないのですか！？ ミハルは、ミハルはこんなにもお姉さまのことを愛していますのに！』

『げえ？！ ミハル！？ 何でアンタがここにいるのよ！ ウチ、プールで遊ぶなんて誰にも話してないハズなんだけど？！』

『ミハルには、お姉さまを守るための、特別な情報網がありますから！』

ドリルツインテール少女の清水美春と、美波のそのやりとりに、その場の誰もが、（それはストーカー行為では？）と、心中でツッコんだ。

「なにやら賑やかになってきたのう」

言いながら、ゆったりと流れるように泳いできたのは木下秀吉。

彼女（？）の姿に、愛子が驚く。

「あれ？ 優子……じゃないね？ もしかして、そっくりだって言う弟君かな？」

「ふむ。その通りじゃ。姉上のご友人かの？」

「うん。クラスメイトだしね。よくしてもらってるんだ。……でさ、ボクも泳いでいいかな？」

「ん？ 遠慮することは無かろう。先ほど雄二も言っていたように、別段ここはワシらのものでも何でもない、学校のプールなんじゃないの」

幾分、探るように訊ねた愛子に、秀吉は何でもないように答える。その答えに、愛子は笑顔になった。

「ありがとう ♪ それじゃ着替えてくるよ」

礼を言いつつ、スポーツバッグを掲げて更衣室へと足を向ける。

ふと、何かに気づいたようにその足が止まった。

「っと。覗くなら、バレないようにね ♪」

「アキくん達が、そんなことするわけないでしょ？ 変なこと言っていないで早く着替えてきたら？ 工藤さん」

愛子の言葉に、呆れたように返すのはひばりだ。

「あらら、動揺もしないんだね？ 支倉さんだっけ？」

「うん、よろしくね工藤さん」

残念そうな愛子に、笑ってみせるひばり。そこには明久達への信頼が垣間見える。

そんなひばりへ、愛子は向き直り、頭を下げた。

「……変なこと言ってごめんね？ 支倉さん。それから、ボクのこととは愛子って呼んでよ」

「あ、うん。あたしもひばりって呼んでくれて構わないよ？ 愛子ちゃん ♪」

「ふふ、じゃあ今度こそ着替えてくるね？ 覗いちゃ、ダメだぞ」
「イタズラっぽく笑いながら片目を瞑って見せた愛子は、小走りに

更衣室へ向かった。

新たに二人加わった一同は、賑やかに時間を過ごす。美波にまわりついた美春は、何故か瑞希をも牽制しており、そんな態度をとられた彼女は、？マークを飛ばしていたりしたが、おおむね楽しく時間を過ごした。

「ふう」

遊び疲れたのか、軽い倦怠感を滲ませつつ、プールサイドのベンチへ腰掛ける明久。その隣には、雄二がすでに座っており、みんなの姿を眺めている。

「ねえ雄二」

「なんだ？ 明久」

水面を打つ大きな音が響く。

「僕の気のせいかもしれないけど……」

「ああ……」

サーブを打つ音と共に、勢い良くビーチボールが飛んでいく。

「あの二人、やけに険悪な雰囲気で水中バレーやってないかな？」

「大丈夫だ。俺にもそう見えているから問題ない」

『美波ちゃん！ 絶対に譲りませんからね！』

『上等よ瑞希！ スポーツでウチに勝てるとは思わない事ね！』

ボールが割れんばかりの勢いで打ち合う美波と瑞希。始めは仲良くやっていたのだが、金髪少女のこんな一言からヒートアップし始めた。

『おおう、そういうえばおねーさんこの間、映画のペアチケット手に入れたんだけどねい。勝った方にプレゼントするよん』

この言葉に、特に反応したのは美波と瑞希の二人だ。瑞希と組んだ翔子は、今回は瑞希に譲ると言い、美波と組んだ美春は何かを企むように目を光らせる。

『勝った方が一緒に行くって約束、忘れないでよね!』

『もちろんです! 美波ちゃんこそ負けても約束破らないでくださいね!』

『そっちこそ!』

『クリス……煽らないでよ……』

『あつはつは、ひばりんは参加しないのかなん?』

『……水中バレーじゃ参加できないよ……』

『ほんとなら参加したかったと』

『ふえっ?! ち、ちがうよっ?! そんなこと思っでないよ?!』

『あつはつはー』

文月学園、地下サーバールーム。

ここには、試験召喚システムの基幹部分とデータが蓄積されている。そこでは、数人の教師と研究員、そして、妖怪ババアこと、藤堂カフル学園長が作業をしている。

その一角で、その少女は、ある種、異様な格好で作業していた。自身を包み込む、二メートル四方の召喚フィールドとおぼしきフィールド内に立てられた支柱に据え付けられたシートは、半ば立っているような姿勢で、両手両足を投げ出すように保持しており、空間投影型のモニターとキーボードを複数出現させ、同時に操る。手で足で、視線でポインタし、タイプしていく。

展開している十のモニターを瞬時にチェックし、八つのキーボードを操る。

『プールですか』

「ええ、みんなで遊んでるみたいです」

モニターの隅に映る少年と雑談しながらも、作業の手は止まらない。無論モニター向こうの彼も作業の手を休めることはない。

『良かったんですか？　せつかく誘って貰ったのに』

「良いんですよ」 私にしてみれば、高名と一緒に作業できるメンテナンスの方がデートみたいなのですから／＼／

『アキ……／＼／』

顔を赤らめながらも、視線はデータをチェックし、指はキーをタッチしていく。

『104から120までのプログラム精査は終わりました。動作チェックに入ります。シゲン頼みますよ』

『わかりましたゾ』

「カオルさん、6000から7300までのデータお願いします」

『おう』

「そつえば例の腕輪の件、何か掴めましたか？」

『ああ、竹原がしていたヤツですか。手がかり無しですね。パーツ類の流れも掴めませんでしたし、戴いたサンプルも、何の変哲もない土くれでした』

『そうですか……』

『負け惜しみに聞こえるかもしれませんが、ある日突然現れたとして考えられませんよ。こういったオカルトめいた結論は出したくなかったですが……』

「いえ、案外それが正解かもしれませんね」

『お役に立てずすみません』

「とんでもない！　高名に調べきれないなら、私にだって無理ですよ。それに貴重な情報が得られました」

『それは確かに』

「『まともな調査では何もわからない』。この事がわかったただけでも収穫です」

『ええ』

「この話はここまでにしましょう。ついては、高名にお礼がしたいのですが……」

『は？ いえですが……』

「藤堂さんから、遊園地のチケットを戴いたんです。折を見て一緒に行きましょう」

『……そうですね、ではエスコートさせていただきますでしょうか』

「ふふ、楽しみですね。そうですね、201番のプログラムなんですが……」

「そんなわけで」 第一回、最速王者決定戦、はっじまるよ〜ん

♪

なんでこうなったのか？ きっかけは純粋な好奇心からだった。

『そういえば、お兄ちゃん達の中では誰が一番早いんですか？』

葉月のこの無邪気な一言が発端だ。

『う〜ん、少なくとも雄二より遅いつて事はないと思うけど？』

『ちよつとまで。それじゃあ俺が遅いみてえじゃねえか』

『さっきだって追いつけなかっただろ？』

『明久のくせに生意気じゃねえか。よし、それなら白黒つけようじゃねえか』

『いいよ。受けて立とうじゃないか！』

『……支倉はやはり泳ぎの達者な方が良いのかの？』

『え？ そうだね。あたしは泳ぎはダメだから、泳げる人はちよつと懂れるかな？』

『ふむ、ワシも参加しようぞ！ 演劇には体力も必須！ 今日こそワシの男らしさを証明するのじゃ！』

『ハハハ、なら俺も参加するか。泳ぎは得意じゃないんだが、面白

『そうだしな』

『およ？ ムツたんは参加しないのかなん？』

『……………（コクリ）』

『うむん。なら優勝したらさっきの水着で個人撮影会やっただげるよん』

『……………（くわっ）』

『どーかなん？』

『……………最速の座は渡せない！（スクツ）』

などなど、紆余曲折を経て競争が行われることになった。

「じゃあ、ボクが判定してあげるよ。準備が出来たら、位置についてね」

愛子がそう宣言し、五人は思い思いのレーンに並んでゆく。

「はい、行くよ。位置について！」

飛び込みの構えをとる雄二、明久、秀吉、康太。唯一、俊夫だけが腕を組んだまま立っている。

「よーい……………」

四人の体に緊張が走る。

「……………スタートっ！」

愛子の合図と同時に飛び込む四人。俊夫だけが軽く跳躍して水中に没する。

『わあ、みんな早いですっ』

『やっぱり坂本は早いわね』

『でも明久君も負けてませんよ？』

『木下君がんばって』

『ムツツリー二君遅れてるよっ？！』

『およん？ トツシーは……………？』

クリスの訝しげな声が聞こえた時、巨大な太鼓を叩いたような重

低音の衝撃音とともに水柱が上がった。水面が大きく乱れ、泳いでいた四人も何事かと動きを止める。

次の瞬間、飛び込み台とは反対側で、爆発するように水しぶきが上がり、皆が巻き込まれる。

「うわあっ?!」

「うおっ!?!」

「な、なんじゃっ?!」

「……………?!?!」

悲鳴じみた声と共に大量に噴き上がった水に覆われる。特に、俊夫の隣のレーンで折り返すところだった秀吉は、完全に姿が見えなくなった。

「と、俊夫やり過ぎだよ……。ん?」

騒ぎを引き起こした俊夫に文句を言う明久。その頭になにが落ちてきた。

「なんだこれ? 布?」

『ぷはあっ?! なにが起きたんじゃ…………? む? なにやら涼しくなったのう?』

秀吉の声に明久が振り向くと、むこうを向いた秀吉の、艶やかな背中が見えた。

しぶきに反射して出来た虹のアーチの真ん中を貫くように、赤い噴水が上がる。

「……………死して尚、一片の悔い無し…………!!」

言いながら親指を立て、朱に染まりし水中へ没していく康太。

『うおっ?! この出血量はまずくないかっ?!』

『ええっこれ、秀吉の水着のトップスっ?!』

『木下! とにかく胸を隠しなさい!』

『なにを言ってるのじゃ島田! ワシは男じゃ! 胸を隠す必要はないのじゃ!』

『ム、ムツッリーニ君っ?! しっかりしてっ!』

『わわわ?! 輸血パック?!?』

『わ、私救急車呼んできます!』

『お? なんだどうした?』

『バカなお兄ちゃんたち、いつも楽しそうですっ』

『……とにかく水から上げる』

『ああ、お姉さま……愛してます……』

『うつひゃっひゃっひゃ』

阿鼻叫喚の地獄絵図が繰り広げられているそこへ、鍛え抜かれた肉体を持つ漢が姿を表す。

「よし、お前ら。掃除を始め………何事だこれは?!」

真っ赤に染まったプールの脇で救急隊員に蘇生作業を受けている康太をみて声をあげる、鉄人西村。そんな彼にひばりが事情を説明すると、こめかみを押さえながら『強化合宿の風呂は、木下弟を別にする必要があるかも知れんな……』と呟き、長嘆息した。

番外編 12 水着とプール？ あるいは赤い水滴のこと。後編（後書き）

番外編 12 いかがでしたでしょうか？

それでは、また次回もよろしく願いしますね♪

番外編 13 電子の迷宮?! あるいは、ちいさな小鳥のこと。

前編（前書

番外編 13 電子の迷宮?! あるいは、ちいさな小鳥のこと。
前編を更新しました。

頭の部分以外は、完全オリジナルエピソードです。

受け入れて貰えるかなあ……。

それでは、読んでくださる方に楽しんでいただければ幸いです♪

文月学園。

試験召喚システムを採用した、試験校。その根幹である、試験召喚システムは、地上階のコントロールルームと、地下階のサーバールームに分かれている。

本来なら、二人のガードマンと認証システムにより、その扉は護られているはずだった。

しかし……。

『ふ、ふはは。こいつは大した腕輪だぜ。ガードマンがあっさり昏倒しやがった。あとは、あいつが寄越したパスで……』

緊張のあまり喉が鳴り、喉仏が動く。自らに聞かせるような独り言が多いのも、緊張と不安から来るものだ。

『あ、開いた……。あとはサーバにアクセスして、試験問題を……』

探るようにオペレートデスクへ近づき、システムを立ち上げる。

この部屋は、いまだ試験的な設備な為、そこかしこにむき出しの機械やケーブルがある。

そして、その隙間に、コンソールにとりついた人物を見つめる一対の目があつた。

なにをしているのか？

そんな好奇心に溢れる、つぶらな瞳。

軽い羽音が響き、宙を舞ったそれは、コンソール上に降り立ち、不思議そうに見上げる。

「う、うわっ?! なんだっ?!」

不安と緊張に染まりきって作業していた人物は突然姿を現したソレに驚いて手を振るう。

「ピッ?!」

小さな悲鳴を上げて飛び立ったその場所に手が当たり、モニターにerrorが表示され、警報が鳴り始めた。

「ヒッ? ち、ちくしょうっ?!」

慌てふためいて、転がるように逃げ出す。と、何かにつまずいて転倒するが、それを気にする余裕もなく、這々の体で飛び出すと背後で分厚いシャッターが降りる音を聞きながら、必死で走った。

「よし! トラップに引っかけた!」

「目を回したぞっ?! 来島、トドメを頼む!」

「了解です。チャージ終了。いきます!」

次の瞬間、携帯ゲーム機を持った男子達が軽くガッツポーズを取る。

「はぎ取りはぎ取り! うおっ?! やった! 紅の竜玉ゲット
お」

「三匹目でドロップとはリアルラック高いな有働」

「いやあ、助かったよ吉井に須川。それに来島さんも。流石に一人で“轟爆赤竜ヴァルバドス”を狩るのはキツかったからね」

そう言って軽く笑みを見せる少年、有働住吉。

「あはは、僕はこの間、“雷閃竜”手伝ってもらったからね。ああ
いこだよ」

そう答えるのは、顔立ちは整っているものの、どこかネジが一本抜け落ちているかのような少年、吉井明久。

「俺は暇だったしな」

明久に続いて口を開くのは、刈り上げた頭と少し小さめの目をした須川亮。その口元の笑みは悪ガキのようだ。

「はい、私も楽しめましたし、気にしないで下さい」

そう言って小さな笑みを浮かべるのは黒髪ストレートロングに、眠そうな目の来島アキ。その目元は不健康そうに隈が浮いている。

「いやいや、それじゃ悪いからさ、なんか討伐ミッションがあれば手伝うよ」

「俺は今のところ、ねーなあ」

「なら、私が頼んで良いですか？」

軽く思案して亮が答えると、アキが言ってくる。

「何の討伐？」

明久が気楽な調子で聞いてくる。

「“紺碧魔竜ギオデイルス”です。流石に一人では無理だったので」

「“一人”で挑戦したのっ？！」「」

あまりの暴挙に三人が声を上げる。彼らがプレイしているゲーム、『ドラゴニックブレイカー』は、いわゆる狩りゲーというもので、協力して巨大な竜を倒すゲームだ。

一応、一人でも狩れるような調整にはなっているが、最終的に討伐対象となる三竜と呼ばれる敵だけは、協力プレイ抜きでは倒せないというのが、世間のヘビーゲーマー達の共通見解だ。

「わりと良いところまで追い込めたと思うんですが、“底力”が発動したみたいで……」

「確かにね。魔竜はみんな“底力”持ちだって話だし……」

「一気に削りきらないと、薙ぎ払われて終わるからなあ……」

「作戦練ろうよ。このメンツならやれるって、昼休みにでも……」

すると、アキがピクリと体を振るわせるポケットから携帯を取り出して確認すると、ひとつ息を吐いた。

「……学園長からの呼び出しですね。すみませんまたの機会に願います」

「またシステムトラブル？ 大変だね来島さんも」

済まなそうに頭を下げたアキに、明久が声をかける。

「仕方ないですよ。システムはまだまだ未完成なところもあります

し、トラブル対応も仕事のうちです。それじゃあ行ってきますね？
次の授業の先生には、一応、言っておいて下さい」

そう言いつつFの教室から出ていくアキ。それを見送った明久達は、各々の席へと戻っていった。

「アキくん、来島さんはまた仕事？」

席に着いた明久の元へ、ノート片手に小さな少女がやってくる。

長いポニーテールがトレードマークのご意見番、支倉ひばりだ。

「うん。急なトラブルみたいだね。こんな呼び出しばかりだと、携帯電話を許可されていても羨ましくないなあ……」

「仕事前の携帯電話だからね」

そう言いながらアキが出ていった入り口を眺めるひばり。

と、予鈴が鳴り、次の授業の教師が入ってきた。

「……何でこんなことになってるんですか……」

学園長室で状況を聞いたアキは、右手の人差し指と中指を揃えながら、額を抑えてつぶやいた。

「セキュリティ系のバグだろうね。監視カメラのデータもトンじまったよ。まったく……」

忌々しそうに言うのは、文月学園の創始者であり、召喚システムの開発者でもある女傑、藤堂カヲルである。

今朝早く、突然に鳴り出した警報に、研究員総出で事態収拾に当たっていたのだが、セキュリティがおかしな具合に作動したらしく、システムのコントロールルーム、サーバールーム共にドアが緊急ロックされたらしい。

外部コマンドでセキュリティの解除を試みたものの、なぜかコマンドが弾かれてしまい、侵入しようにも防壁が堅すぎてどうにもならなかったらしい。

物理的にも、電子的にも遮断された以上、どうにも手の打ちよう

が無く、苦肉の策としてアキが呼び出されたのだ。

「それなら、最初から呼んでくだされば……」

「おまえさんは、ここんと働き詰めだったからね……。出来れば休ませてやりたかったんだよ」

「藤堂さん……。お氣遣いありがとうございます」

丁寧な頭を下げるアキ。その顔には笑みさえ浮かんでいる。

「済まないねえ。アタシらの力が足りないばかりに、アンタにはかり負担をかけちまつてる。保護者失格だね……」

カフルも頭を下げながら言う。

「気にしないで下さい。あなたがいらつしやらなければ、私はあの施設での実験で使い潰されていたはずです。ですから、あなたのお仕事をお手伝い出来るのは、ご恩を返すという意味でお役に立てて嬉しいことなのですよ」

「アキ……」

「手早く收拾してしましましょう。研究室は無事ですか？」

「ああ、大丈夫だよ。頼むね、アキ」

「はい、行ってきますね」

瞋目し頭を下げたカフルに対し、笑顔できびすを返すアキ。目指すは己の研究室である。

「それではホームルームを終了する。では解散！」

全ての授業もHRも終了した放課後。教室中が帰り支度や部活動の支度を始める。

「結局戻ってこなかったね、来島さん……」

「そうだね、お昼も戻ってこなかったし、大丈夫かなあ」

帰り支度をしながら、アキのことを話す明久とひばり。

と、そこへ西村から声がかかった。

「坂本、吉井、学園長から呼び出しが来ている。すぐに学園長室へ

行くように！」

「あ、はい」

「チ、メンドクせえな……」

返事をしながら立ち上がる明久と、悪態をつく雄二。それに続くようにひばりも立ち上がる。

「あたしも行くよ。何か手伝えるかもしれないし」

「そう？　じゃあ行こうか」

三人で連れ立ち、教室を出ていった。

「で？　何でこんなに大所帯になってるんだい？」

「俺が知るか」

「す、すいません学園長」

入ってきた面々を見て、思わず息を吐きながら訊ねる学園長。しかし、雄二は面倒そうに答え、ひばりは恐縮しながら謝罪する。

その隣で明久が苦笑いを浮かべていた。

「まあまあ。気にすること無いよん、かーるん」

「そ、そうぜよ！　クリスの姐さんの言うとおりでせよ！」

「あ、あはは……」

「なんでこんなに堂々と学園長をあだ名で呼べるのかしら？　ウチには分からないわ……」

後ろから顔を覗かせているのは金髪の少女、クリスティーナ・ウエストロッド。その横で畏まっている浅黒い肌の少年高杉総司。

さらにはピンクの髪に自己主張の激しい部位を持つ姫路瑞希と、ポニーテールの帰国子女島田美波もいる。

「やれやれ、呼んだのは坂本と吉井だけだったんだけどね。まあ、人手があるに越したことはないか」

「……」

「??？」

学園長の言葉に雄二は目を細め、ひばりは首を傾げる。

「まあいい。あんた達には、少し来島の仕事を手伝って貰うよ」

「来島さんの？」

学園長の言葉に、思わず訊ねてしまう明久。他の者も顔を見合わせるばかりだ。唯一雄二だけが、顎に手を当てて黙考している。

「詳しい話は来島に聞くんだね。高橋先生、案内しておやり」

「はい、学園長」

部屋の隅で待機していた高橋教諭が進み出る。

「では、こちらです」

いいながら退室していく彼女に、七人七様の表情でついていった。

「お待ちしていました……。何でこんなにいるんです？」

「あ、あはは……」

人の気配を感じて作業を中断したアキが振り向くと、八人もの男女が並んでいて困惑した。それに対して、ひきつつた笑いしか返せないひばり。

「まあ、良いですか。みなさん詳しい話は……聞いてませんね、その顔は」

キョトンとしている者が大半占めているのを見て、アキは嘆息した。しかし、すぐに気を取り直すと口を開く。

「簡単に言いますと、試験召喚システムに不具合が起きてまして、その手伝いを頼みたかったんです」

「そうなの？　じゃあ、ウチやアキなんかは役に立ちそうもないわね」

アキの言葉に顔を曇らせる美波。しかし、それに対して雄二が軽く手を挙げて制した。

「……いや、そうでもないだろう。最初に呼ばれたのは俺と明久だ。つまり、システムを理解できなくてもやれることがあるということ

だ」

「なるほど、そうかもしれないね」

雄二の言葉に首肯する明久。

そして、アキも肯いてみせる。

「ええ。こちらでオペレーターを手伝って下さる方と、召喚獣で作業する人が欲しかったんですよ。坂本さんは指示を出すのがうまいですし、吉井さんは召喚獣操作で右にでる者はいませんからね。こちらへ」

言いながら立ち上がったアキは、奥の部屋へと皆をいざなう。

そこには、大型のモニター三つと、コンソールとモニターのついた、五つのオペレーションシート。そして、なにやらむき出しの機械やケーブルのついたヘルメットが置かれたリクライニングシートが六つ、設置されていた。

「これはなんだ？」

物々しい雰囲気、雄二が口を開く。

「それをこれから説明するんですよ、坂本さん」

雄二にそう返しながらモニターの方へ移動するアキ。

「これから、みなさんには召喚システム内へと召喚獣で突入していただいて、このトラブルの原因を取り除いて貰います」

その言葉に、その場に居た全員が呆気にとられた。

番外編 13 電子の迷宮?! あるいは、ちいさな小鳥のこと。

前編(後書

番外編 13 電子の迷宮?! あるいは、ちいさな小鳥のこと。
前編

いかがでしたでしょうか?

召喚獣自体は電子データの的な部分もありますから、こういうのも
有りかな? と思い、書いてみました。

次回、電子の迷宮へと突入です♪

番外編 14 電子の迷宮?! あるいは、ちいさな小鳥のこと。

中編(前書

番外編 14 電子の迷宮?! あるいは、ちいさな小鳥のこと。

中編 を更新しました♪

読んで下さるみなさんに楽しんでいただければ幸いです♪

『どうですか? みなさん。気分が悪いなどということはありませんか?』

何も無い、無機質な白い空間に、少女の声が響く。

「うん、大丈夫だよ? 来島さん」

それに答えるのは、緩い空気をまとった、ネジが一本足りないような少年、吉井明久……の召喚獣。いつもの学ラン姿に木刀を携え、周囲を見回している。

周囲には、数体の召喚獣の姿。

ピンク色の髪に高品質の板金鎧をまとい、巨大な両手剣を背中に差し、オドオドとした表情を浮かべた姫路瑞希の召喚獣。

赤味がかった髪をポニーテールにまとめ、腰にレイピアを差した軍服姿で辺りを不思議そうに見回す島田美波の召喚獣。

しきりに身体を捻って確認しているのは、長い黒髪をポニーテールにし、腰に倭刀を携えた、青いブレストプレートの支倉ひばりの召喚獣だ。

そして、槍を持ち、銀色の鎧兜を身につけ長い金髪を揺らしながら宙空をふわふわ漂っているのは、クリスティーナ・ウェストロードの召喚獣だ。

「つて?! クリス飛べるの?!」

「みたいだよん、おー」

驚く明久に答えたクリスは感嘆の声を上げた。

「ど、どうしたの?」

「ちゃんと召喚獣が喋ってるねい」

「えええっ?!」

慌てて口を押さえる明久。そこへひばりもやってくる。

「うん。ちゃんと口が動いてるよ? あたしを見て?」

言いながら口を動かして見せるひばり。それを見て明久もうなず

く。

明久が納得したのを見て、ひばりは「ね？」と、ばかりに笑ってみせる。

「……表情もバツチリだねい」

そうして話していると、魔法陣が一つ展開され、一体の召喚獣が姿を現した。

「おおっ?! なんぜよ!? まか不思議な所に出たき!」

現れたそばから騒ぎ出す召喚獣。バサバサの髪に浅黒い肌と頬に傷があり、着流しを着ている。

そしてその手に持つのは……。

「……何でイカリ……?」

その場にいた全員が同じ気持ちになれたという。

ともあれ、着流しにイカリを装備した、斬新な高杉総司の召喚獣をくわえた六体がこの場に揃った。

『これで全員揃いましたね? 手順を説明します。これから、召喚システムに入っていただき、中枢システムを目指していただきます。みなさんには分かりやすい形で見ていただきますのでご安心を』

言っが早いか、周囲の景色が変わっていく。

「森……?」

無機質な白い空間から、緑が生い茂る森に変化した周囲を見回すひばり。

「こつちに扉があるわよ?」

そんな美波の声に振り向くと、召喚獣の五倍はあろうかという扉があつた。

『それが入り口です』

言われて扉の前に集まってくる六体の召喚獣。

『では、改めてご説明します。みなさんは自身の召喚獣へと半分意識を落としていただいてます。センスリアクト 感覚変換によって、みなさんの視覚、聴覚、触覚は召喚獣とリンクしており、軽いフィードバックも起こり得ますので、お気をつけください。セキュリティからは自動で進

入者を排除するアクティヴプロテクトが出現するでしょう。これは、みなさんの武器で撃破することが可能です。また、扉や防壁は触れることで解除作業が行われます」

「でも、改めて聞くほど、なんだかRPGみたいだね」

アキの説明を聞いて、明久が苦笑いする。

『……………』

しかし、それを聞いたアキが黙り込んでしまった。

「え……………まさか……………」

『だ、だって仕方がないですよっ！？ ゲームだって出来ませんし！ こうやってシステムの外見擬装をゲームに見立てるくらいしか楽しみが無くて……………』

必死に言い募るアキ。そこへ追い討ちをかけるクリス。

「んで、召喚獣使ってゲーム感覚でバグ取りしていたという訳だねい」

『う、うぐ…………。と、とにかく中枢についたらこの宝石をコアへと組み込んでください！』

誤魔化すようにまくし立てるアキ。その様子に、ひばりは嘆息する。

「じゃあ、出発しようか？」

「うん、そうだね」

明久の言葉にうなずいて、ひばりは歩きだした。

「大きい扉だねい。開けるのにも苦労しそうだよん」

「そうね」

パタパタと軽く翼を動かし、宙に浮いてるクリスが上を向きながらつぶやくと、美波が同意する。

「よし！ 僕が開けてみるよ」

「わしも手伝っちゃるき、二人でやるぜよ」

扉に手を掛けながら明久が言うと、すかさず総司も名乗りを上げた。

二人で重そうな両開きの扉のとを一枚ずつ押し開けると、目の前に……。

大砲が鎮座していた。

「ケホ、ケホン。なによこれ」

「うう、ススだらけになりましたあ」

ススまみれで涙目になる美波と瑞希。ひばりも憮然とした表情で煤を払っていた。

目の前に出現した大砲は、即座に発砲。先頭にいた明久と総司は直撃を喰らって目を回している。

ちなみにクリスはすぐさま上空に退避していて損害無しである。

「おい。お前ら大丈夫だったか？」

暢気そうに声をかけてくるのは、Fクラス代表の坂本雄二だ。

「来島の奴が、プログラムの処理を始めちまってな。お前達に指示を出すのは俺ってことになった。よろしく頼むぞー」

あまりやる気の感じられない声で言う雄二。その声に、そこはかとなく不安を感じるひばり。それを知ってか知らずか、指示を出してくる雄二。

「よし、そのまますすんでくれ。道が左右に別れているはずだ」

身を起こした明久と総司が戦闘に立ち、真ん中に瑞希、左右にひばりと美波を置き、最後衛にクリスがつく。

その態勢で移動した召喚獣達は、やがて道が真っ直ぐ左右に別れる丁字路にたどり着いた。

「お？ 突き当たりに何かあるぜよ？」

「張り紙だね」

女性陣を少し離れた場所に待機させ、明久と総司の二人が近づく。
「なんじゃ？ えー《頭上注意》？ 上から何かが来るのか？」

張り紙を読んで首を傾げる総司。しかし、明久はその内容を聞いて、脳裏に閃くものがあつた。

「待つんだ高杉君。これは罠だ！」

「うお？ 何か気づいたのか？ 吉井」

明久に止められ、驚く総司。

「これは注意を上に向けておいて下から攻めるといふ高度な引っかけだよ！」

「！」

明久の解説に目を見開く総司。

「つまり！ 下を警戒していれば、この罠は防いだも同然！」

「な、なるほど！ 確かにその通りぜよ！」

「さあこい！ 僕達を罠にかけようつたってそうはいくもんか！」

「もう、仕掛けは見破ったも同然ぜよ！」

叫びながら下を向く二人。

次の瞬間、薄い金属板を叩いたような音が響き、二人の後頭部が痛打される！

「ぐおおおおおつつつ?!?!?!」

あまりの痛さに、後頭部を押さえながら転がり回る二人。その横には金属製のタライが転がっていた。

「……………」

「あ、アキくんっ?!」

「あ、明久君?! 大丈夫ですか?!」

「だああっひゃっひゃっひゃひゃ」

あきれ美波に、笑い転げるクリス。

そして、ひばりと瑞希の二人が慌てて駆け寄ろうとした瞬間。

転がる明久と総司の背中で、カチリと音がした。

重低音と共に爆圧が広がり、その衝撃で天井に叩きつけられる二

人。さらにそこから落ちるタイミングを狙い澄ましたかのように天井からハンマーが飛び出し、二人をはね飛ばす！

真っ直ぐ反対側に弾かれた明久と総司は、壁面に激突し、ボロ雑巾のように転がった。

吹っ飛んでいった二人を見たひばりと瑞希は、丁字路へと走り込む。

「アキ君だいじょッ!」

「明久君だいじょべッ!」

金属板を叩く音が二つ、新たに響きわたり、ひばりと瑞希の頭頂に金ダライが直撃する。

「~~~~~っ?!?!」

あまりの痛さに頭を押さえてしゃがみ込む二人。

「あーひゃっひゃっひゃっ♪　だあーひゃっひゃっひゃっ♪」

「……………」

バカ笑いが止まらないクリスと、顔を背けて口を抑えたまま震える美波。

初のトラップコンボを受けた一行の前途は多難である。

以降もトラップが山のように続いた。

落とし穴。

「うわっ?!　落としあああっつ……………」

暗い穴の底へ落ちていく明久。

「アキくんっ!」

「明久君っ!」

「アキいつ?!」

慌てて穴の縁に集まる三人の女子。のぞき込んでも学ラン姿の明

久の召喚獣の姿は影も形もない。

「そ、そんな……」

「うそ……うそです、明久君」

「アキ……イヤよ、こんなお別れなんてウチは絶対認めないわよお
おっ！」

打ちひしがれるひばりと瑞希。そして美波は天井に向けて叫んだ。
すると。

「……あああああたあすけてえええええええ……」

三人娘の目の前を、学ラン姿の明久の召喚獣が、天井から床に向けて落ちていく。

「……」

「……」

「……」

あまりのことに、目が点になるひばり、瑞希、美波。

その後、明久は総司に蹴り出されて救出された。

磨かれた床。

「うわ、すごい綺麗な通路だね」

「ハイ、ピカピカですね」

感嘆の声を上げる明久に、瑞希がうなずいている。

「おい明久、はやく早く出発するぜよ！」

総司に急かされ、磨き上げられた床に、二人で一步踏み出し、サ
マーソルトキックを放つように縦回転して、後頭部を床に打ちつけ
る二人。硬い岩に石を落としたような音が二つ響き、悶絶する暇も
なく通路を滑っていく。

そして、左へし字に曲がった通路を曲がるわけもなく、二人揃っ

て壁に激突し、目を回した。

「あ、アキくんっ?! ひゅわっ!？」

「あ、明久くみぎゃあっ?!」

慌てて足を踏み出したひばりと瑞希は揃って足を滑らせ、いい勢いで通路を滑走する。

「ごはっ?!」

「ぐえっ!？」

「ひきやつ?」

「あぎゅっ!」

折り重なる明久と総司にヘッドスライディングを敢行するひばりと瑞希。四つの奇声が挙がり、目を回す四人。

「ふ、ふふ、焦ると碌な事にならないわよね……」

そうつぶやく美波は、壁に手を付き、へっぴり腰で移動していた。その横をフワフワ移動するクリス。

「ず、ズルいわよっ?! クリス! 一人だけ飛べるからって!」

「気にしな! いい気にしな! い! だよん!」

美波の抗議もどこ吹く風で、折り重なる四人の元にたどり着くクリス。次の瞬間。

真横の壁面が展開した。

「へっ?」

突然のことに固まったクリスめがけて凄まじい突風が吹き荒れた。「んによおおおおおええええっ?!?!?!」

珍しく悲鳴を上げながら飛ばされるクリスを眺めた美波は、冷や汗をかきつつ、一人ごちる。

「……ま、人間、地味にコツコツ行くのが一番よね」

そして、へっぴり腰のまま前進を再開した。

坂道。

長い長い坂道をひたすら上る一同。

「随分登ったよね？」

「ああ、まだ上は見えんき」

少し疲れた顔の明久に聞かれ、イカリを引きずっていた総司が答える。

「うむん？」

「どうしたの？」

不意に声を上げたクリスに、ひばりが訊ねる。

「たぶんでっぺんだね…… ってげえ」

答えたクリスがひきつった声を挙げるのを聞いた一同が振り向くと、通路の端から、巨大な鉄球が姿を現し、転がり落ちてくるのは同時だった。

「うわあああああつっ?!」

「うおおおおつっ?!」

「きゃあああああつっ?!」

「ひゃあああああつっ?!」

「何なのよこれはあつっ?!」

「そーれ、につげろ〜」

転がる鉄球から逃げるために悲鳴を上げながら全力疾走する一同。なぜかクリスだけが楽しそうだ。

と、突然瑞希が何かに気づいたようにハッとなる。

「み、みなさん！」

「どうしたの！ 姫路さん！」

「手短に頼むぜよ！」

皆に声をかける瑞希。逃げるのに必死ではあるが、一応耳を傾ける一同。

「全力で走っているのに息が切れません！」

「ほんとだ！」

「……だあああつっ?!」「……」

瑞希の言葉にひばりも真剣な顔になるが、明久と総司、美波はず

っこけようとする。が、当然そんな余裕などあるわけもない。

「どーでもいいーわよーそんなことー!!」

「右に同じぜよー!!」

「姫路さんにひばり、今のは流石の僕でも二人にツツコミを入れた
いよっ?!」

「この状況でボケられるお姫ちゃんはおーものだねい♪」

美波、総司、明久からは非難豪々だが、瑞希とひばりは嬉しそう
に走り続ける。

「もういいから誰かどうにかしてええええっ!!」

「わかりました!!」

美波の悲鳴に応え、瑞希が振り向きながらブレーキングし左手を
かざす。腕輪が輝き、強力な熱線が鉄球へと向かい、命中。爆発を
引き起こす!

そして、煙を引き裂き、灼熱化した鉄球が姿を現した。

「『悪化した』って?!!」

「ごめんなさあ……いつつ!!」

灼熱鉄球から全速力で逃げながら悲鳴を上げる一同。そんな中、
瑞希は半泣きで謝りながら走っていた。

結局、登った坂道をすべて下り終えた時、壁面にぶつかった鉄球
は砕けた。熱線によるダメージとのダブルパンチのおかげであろう。

だが、瑞希は状況を悪化させた責任を感じて落ち込む。

「……すいませんみなさん。私のせいで……」

「そんなこと無いよ。誰しも失敗はあるってば」

「そうよ瑞希。あれがなかったら鉄球は壊れなかったかもしれない
んだから」

落ち込んだ瑞希を慰めるひばりと美波。その言葉に明久が頷き、
クリスと総司も笑う。

「何でも悪い方に受け取るの、悪い癖だよ？ 瑞希ちゃん」

「みんな無事だったしねい」

「そうぜよそうぜよ」

「みなさん……ありがとうございますね？ わたし、頑張ります！」

そう言って笑顔になる瑞希。

それを見た一同は、和やかな雰囲気にも包まれた。

そんな六体の召喚獣の様子をうかがう、一対の目。好奇心旺盛に、興味深そうに、彼らを観察する。

「ピ。ピッ」

小さな鳴き声と共に、軽い羽音を響かせて飛び立つ小鳥。

その姿は、空間に溶けるように消えてしまった。

小さく聞こえた羽音は、しかし、長い黒髪ポニーテールの召喚獣の耳にしっかりと届いていた。

「……今の音って……？」

そう呟きながら、ひばりは虚空を見上げた……。

番外編 14 電子の迷宮?! あるいは、ちいさな小鳥のこと。

中編(後書

番外編 14 いかがでしたでしょうか?

このエピソードはかなり特殊ですので、楽しんで貰えるかドキドキです。

では、また次回もよろしく願いしますね♪

番外編 15 電子の迷宮?! あるいは、ちいさな小鳥のこと。

後編(前書

番外編 15 電子の迷宮?! あるいは、ちいさな小鳥のこと。

後編 を更新しました♪

きつとまたバトル小説って言われる(笑)

それでは、読んで下さるみなさんに楽しんでいただければ幸いです♪

様々な罫を交い潜り、システム最深部へ近づく一同。あるときは落とし穴にハマリ、またあるときは、川に流され、槍襖を交い潜り、毒の沼地を突破し、這々の体で辿り着いた。

『よおし、その通路をまっすぐ抜ければ、システムコアだ』

雄二のその言葉に、バサバサの髪で浅黒い肌で着流し姿の高杉総司の召喚獣が反応する。

「お、おお……。ゴールの告知がきたき、みんな頑張るぜよ!」

「お、お」

いかにフィードバックが軽く、肉体的疲労はほぼゼロとは言え、行く手を遮ってきたトラップの山には辟易せざる終えない。どこに仕掛けられているのか分からないこれらを警戒しながら進むのは神経を使うのだ。

無論ダメージ自体は召喚獣が受けるものであり、痛みは軽いものではあるので、体力に任せてわざと罫にかかり、強引に突破する、別名《漢探知》（おとこたんち）を敢行しても良いのだが、やはり痛いものは痛い。

避けられるなら避けて通りたいと思うのは、無理からぬことだろう。

そうして一行は無駄に気合いが入った総司を先頭に通路を進んでいく。と、不意に彼らの行く手を塞ぐかのように、三つの魔法陣が展開される。

「ん? なんじゃ?」

それに気づいた、先頭を歩く総司が足を止めると、他の者もそれにならうように足を止める。

「あれは……」

魔法陣を見つめて呟くのは、整った容姿ながらも、どこかネジが

一本足りないような緩い雰囲気少年、吉井明久の召喚獣

その姿は学ランに木刀である。その斜め後ろには長いポニーテールで青いブレストプレートを身につけ、倭刀を携えた、支倉ひばりの召喚獣がのぞき込むように顔を覗かせた。

「どうしたの？」

「召喚陣だねい」

ひばりの問いに答えるのは、その頭上、その背中に生えた白い翼を軽く羽ばたかせて宙に留まり、長い金髪に銀の鎧兜を身にまとって、槍を携えたクリスティーナ「ウェストロード」の召喚獣だ。

「ま、まさか……」

「も、もしかして……」

クリスの言に、身構え、腰のレイピアに手をかけているのは、濃いめの紅茶のような髪をポニーテールにまとめた帰国子女、島田美波の召喚獣。

その横で、不安そうに呟くのは、最高品質の鎧を身にまとい、背中に巨大な両手剣を差した、ふわふわの綿飴のようなピンクブロンドにオドオドとした表情を浮かべた、姫路瑞希の召喚獣だ。

六人六様の反応を後目に、展開された陣にそれぞれ姿を現す召喚獣。その姿は……。

逆立った髪に灰色の学ランとメリケンサックの召喚獣。

忍装束に小太刀二刀流の召喚獣。

袴姿に薙刀を持った可愛い召喚獣。

その三体だ。

「こ、これって……」

それを見て呆然となるひばり。その隣で、明久は唇を噛みしめる。
「なるほどねい」

皆の頭上に滞空しているクリスなどは得心がいったように頷くが、他の女子二人は明らかに動揺していた。

「そ、そんな」

「嘘でしょ……」

『おいおい……』

モニタリングしていた赤毛に長身の少年、坂本雄二も思わず声を漏らす。

そんな六人とは違い、総司は首を傾げる。

「……おまんら、あん召喚獣どもを知っちゅうがか？」

不思議そうに周りに訊ねる総司。それに対してひばりが答える。

「あれはクラスメイトの坂本君と土屋君、木下君の召喚獣だよ。なんか色は違うけど……」

「きつと、2Pカラーとかアナザーカラーって奴だよ」

色の違いに戸惑うひばりだが、明久が無駄に真剣な様子で答えた。

『……駄目だなコントロールを受け付けない』

モニター越しに様子を見ていた雄二は、自身の召喚獣をコントロールできないか試していたらしい。

と、一斉に突撃してくるアナザー召喚獣たち。

「！」

それを明久、総司、ひばりが各々の得物で受け止める。

次の瞬間、康太の召喚獣に弾丸の雨が降り注ぎ、為す術もなく撃ち抜かれていく。

上空を旋回していたクリスの射撃だ。

合わせるように美波がレイピアを振るいながら走り抜け、ひばりと鎧迫り合っていた雄二の召喚獣の脇を切り裂く。それに怯んだところで、ひばりが胴薙ぎ、袈裟切り、切り上げの三段斬りで斬り伏せる。

「高杉君！」

普段聞き馴れない瑞希の鋭い声に、総司はすぐさまその意図を汲んで秀吉の召喚獣を押し返して横っ飛びに離れる。そこへ振り降ろされるは、瑞希の大剣。体勢を崩しながらも秀吉の召喚獣は、薙刀を横にして受け止めようとすが、そんなものは何の障害にもなら

ないとばかりに、バターヘナイフを入れるがごとく両断。

そして三体とも黒い粒子となって掻き消える。

顕れて数秒で駆逐されるアナザー召喚獣に、ひばりたちは首を傾げる。

「……弱すぎない？」

「うん。パワーは本物と変わらないみたいだけど、動きが遅くて単調だね」

ひばりの呟きに、自らの見解を答える明久。

「……なるほど、そういうことか。みんな聞いてくれ」

誰かと話していたらしい雄二から、その場の六人に声が掛かる。

周囲を警戒しつつ集まる一同。

『まず、今出現した召喚獣たちは、俺の本当の召喚獣じゃあないらしい。データ処理中に残ったデータの残滓を集めて作った紛い物らしい。つまりはコピー召喚獣だな。パラメータはオリジナルと同じだが、きちんと操作できていない。まあ、雑魚だ』

「コピーってことは、何度でも出てくるの？」

明久が雄二に質問する。モニターの向こうでは、赤毛の少年が隣の人物に確認をとっているようで、二、三、言葉を交わす。

『……そうか、わかった。来島が言うには、お前達の武器で一度倒せば補正のプログラムが働いて、同じモノは出てこないそうだ。だが……』

雄二のその言葉に合わせるかのように通路の向こうにいくつもの魔法陣が展開していく。

『それなりの数の召喚獣のデータが残っているらしい。まあ、学園の全員分ってことはないらしいがな』

「何の慰めにもならないよ……」

雄二の言葉に、ひばりが遠い目をしながら答えた。

ブロードソードを木刀が払い、その隙間を縫って倭刀が閃く。

横合いから突き出された槍をイカリが受け止め、その脇から飛び出したレイピアが胸板を貫く。

その頭上で、槍状のライフルが轟然と火を噴き、弓や銃を構えた召喚獣を射ち抜いていく。

さらには、巨剣が唸ることに数匹の召喚獣が黒い粒子へとその姿を変える。

しかし、まっすぐ伸びた通路上には、すぐさま新たな魔法陣が描かれ、十数体にも及ぶ召喚獣が頭れた。

だが、一斉に突撃してくるそれらを見ても、一行は動じない。なぜなら。

「今だよ！ 瑞希ちゃん！」

「ハイッ！」

明久の声に応えて、瑞希が左手を突き出す。同時に高熱の塊が解き放たれ、出現した召喚獣のほとんどを飲み込み焼き払う。

残った数体も大なり小なりのダメージを受けており、掃討はたやすかった。

「だいぶ出てくる数が少なくなったね」

「そのかわり、みつちゃんの負担がっ、大きいけどねっ」

刃を振るいながら話し合う明久とひばり。二人の連携で、今も一体倒したところだ。

出現するコピー召喚獣の数もまばらになり、一行は、さらに奥へと進む。

しばらく戦いながら進んでいくと、コピーの出現がピタリと止み行く手に広い空間が表れた。

ただっ広い空間は、神殿のようなイメージで、奥には大きな祭壇があった。

「ここが終点？」

『そうだ。その祭壇の中央に、宝石を填める場所があるらしい』

周りを見回しながら呟いたひばりに、雄二が答える。その言葉に

うなずき、一同は祭壇へと足を向けた。

不意に羽音が響き、小さなソレが祭壇へと降りてくる。

「ピピッ、チツチツ」

それは、小さな一羽の小鳥。

つばらな瞳で一同を見つめている。

「な、なんで小鳥が……」

こんな所にいるんだろう？ と続くはずだった言葉は飲み込まれた。

「ピイツー!!」

叫ぶような、鋭く切り込む鳴き声。同時に五つの魔法陣が顕れ、そこに姿を顕す召喚獣。

その姿に、一同は息を呑んだ。

黒い学ランに木刀の召喚獣。

黒いブレストプレートに倭刀を携え、長い黒髪ポニーテールの召喚獣。

黒い鎧兜に、漆黒の翼。槍状のライフルを持つ、くすんだ金髪の召喚獣。

高品質の黒い鎧に、漆黒の巨剣を持った、くすんだピンクブロンズの召喚獣。

癖のある髪を短いポニーに結った、レイピア装備の召喚獣。

それは、明久、ひばり、クリス、瑞希、美波の召喚獣だった。

『気を付ける！ この最終局面で切ってきたカードだ。今までとは違うはずだ!』

雄二の警告に身構える一同。それを見計らったかのように五体の召喚獣が飛び出す！

木刀が木刀を受け止め、倭刀が倭刀と鏢迫り合う。

レイピアとレイピアが撃ち合い、槍と槍が火花を散らす。

そして、二つの巨剣の激突は、衝撃波を生み出し、周囲へ伝搬し

ていった。

「って、何でわしの召喚獣だけ居無いかつ?!」

一人相手の居無い総司が声を上げる。

『おそらくデータ蓄積量の問題だろう。今の内に宝石を祭壇へ』

「なにか釈然とはせんがか、やつちやるき!」

飛び出そうとした彼の行く手を遮る影、それは。

「か、亀?」

新たに姿を顕したのは亀。しかもその背中には大砲が鎮座している。

「なんで亀の背中に大砲があるがかつ?!」

総司の叫びに呼応してか大砲が火を噴き、砲弾が総司を狙う。

「うおおおっ?! こいつはたまらんぜよっ!!」

声を上げながら走り出し、大砲の狙いを外していく。亀と総司の奇妙な追いかっこが始まった。

一方で5対5のミラーマッチは膠着状態だ。

カウンター戦術が基本の明久は、同じ戦い方の相手にうかつに飛び込めない。ひばりは抜刀の速度と手数をお互い避けていく。

空中では、クリスが相手と円を描きながら銃弾を撃ち合い、その下では美波がレイピアで罅迫り合いを演じている。

力押しが主体の瑞希は、互いのパワーが拮抗しているため、まるで押し切れない。

だが、誰もが諦めていなかった。

そして、その機が訪れる。

けたたましく鳴り響く警報と共に、一つの魔法陣が展開される。

そこに顕れるは、ドリルロールツインテの召喚獣。

「げっ? 美春の召喚獣?!」

思わず顔をしかめる美波。それをも意に介さず、二体の美波の召

喚獣に、目をピンクのハートに変化させて突進する美春の召喚獣。

「ひいつ?!」

飛びかかってきた美春の召喚獣におのき、頭を抱えてしゃがみ込む美波。その頭上を飛び越えコピー召喚獣へと抱きつく美春の召喚獣。勢い余つてもつれ合うように転がった二体は、そのまま明久のコピーに激突、三体そろって目を回した。

「よし、美波はひばりの援護を頼むよ！ 僕は姫路さんの援護に回るから」

「わかったわ！」

「クリス！ 高杉君は引き続き今の相手を続けて！」

「おっけーだよん♪ アッキー♪」

「何とかやってみるぜよ！」

明久に指示され、それぞれに応える三人。

そして明久は瑞希の元へ走った。

「ひばり、援護するわ！」

「ありがとう美波ちゃん！ 助かるよ」

加勢にきた美波に礼を言いつつも、ひばりは相手から目を離すことなく鐸鳴りの音を響かせる。閃く斬閃を別の斬閃が切り落とす。互いの剣閃を互いに切り払っていく二体の召喚獣。

拮抗するそこへ、美波が切り込んでいく。

「やあぁっ!!」

気合いと共に繰り出されたレイピアの突きを切り落とすことが出来ず、大きく後退するひばりのコピー。その隙を見逃さず、ひばりが鋭く踏み込み、刃を振るう。

その銀閃を、コピーはかろうじて倭刀で払うが、その隙にレイピアが突き出される。

体を振ってそれをやり過ごすコピー。しかし、そこへ、まるでレ

イピアの剣閃をくぐるように、超低空でひばりが踏み込み、倭刀を切り上げる。

胴を切り裂いた切っ先が翻り、さらに袈裟掛けに刃が振り降ろされ、ひばりのコピーを断ち切っていく。

振り抜いた刃を返した三刃目が胴に食い込んだ瞬間、コピーは黒い粒子となって掻き消えた。

天を舞う二体の召喚獣。縦横無尽に宙を舞うその姿は、戦乙女のごとく。

お互いに相手の後ろを獲らんと急降下、急旋回、急上昇する。クリスから牽制で放たれる銃弾をバレルロールの横回転で避け、ついで側面を突かんと加速するコピー体。しかし、クリスも急降下でやりすごさんとする。が、コピー体は大きく羽ばたきエアブレーキをかまして鋭角に反転し追尾する。

まんまと後ろを獲られたクリスとコピー体との高速の追撃戦が始される。

空を飛ぶ二体はそのまま戦場を旋回しながら射撃する。後ろから追い縋るコピー体の銃弾をバレルロールして避けてみせるクリス。次いで翼が大きく羽ばたいて、跳ね飛ぶように真上に上昇するクリス。

意表をを衝かれたコピー体は慌ててブレーキングしつつ反転し……目の前に迫った弾丸と、その遙か向こうでイタズラっぽく笑う金髪の少女の唇の動きを見て射抜かれる。

「チャオ」

投げかけられたその言葉を聞くこと無く、クリスのコピー体は黒い粒子と化した。

「うおおっ?! いい加減にするぜよっ!!」

立て続けに放たれる砲弾に痺れを切らした総司は、手にしたイカリを振りかざしながらジグザグに走って亀へと突貫する。

それを狙って大砲が火を噴くものの、意外なすばしっこさに照準が追いついておらず、明後日の方向に着弾する。

「貰ったき!」

言うが早いか跳躍しながらイカリを振りかぶる。が、待ってましたとばかりに砲口がそちらを向き、砲弾を吐き出……せなかった。

天空を舞う天使のような召喚獣から射ち込まれた弾丸が砲台を襲い、その砲撃を邪魔したからだ。

次いで振り降ろされるイカリが砲台を叩き潰すと、亀は声にならない悲鳴を上げる。

総司はその隙を見逃さずに、着地と同時にイカリを振り回して亀を弾き飛ばす!

神殿の壁面まですつとんでいった亀は、衝突の衝撃で崩れ落ちた瓦礫の下敷きとなって掻き消えた。

撃ち合わせた巨剣が空気を震わせる。幾度と無く繰り返したそれを今一度繰り返す瑞希。

どちらかと言えば技術ではなく、パワーで押し切ることの多い彼女は、この均衡を崩す術を知らない。

だが、助けはやってきた。

再度振り回した巨剣が激突したとき、さらにそこに力を加えるように叩きつけられる木刀。均衡が崩れた瞬間、弾かれるコピー体。

「お待たせ! 姫路さん」

「あ、明久君!」

援軍にきた幼なじみの姿に、顔を綻ばせる瑞希。だが、すぐに表

情が曇る。

その様子が気になった明久は、瑞希に声を掛けようとするが、それは、響きわたった鋭い鳴き声に邪魔をされた。

「ピーイーイー……！」

弾かれて倒れた瑞希のコピー体に小鳥が舞い降り、その姿がコピーへと溶けていく。

すると瑞希のコピー体は目を赤く輝かせ、宙に浮かび上がった。剣も鎧も、凶々しく変化し、赤いクリスタルが生まれる。

その背には赤黒い翼が生え、さらには鋼の鞭のような尻尾まで伸びてきた。

その様はまるで悪魔の王であるがごとく、六人を聘睨する。手にした巨剣を振りかざし、瑞希に切りかかる。

「……！」

その速度に驚きつつ、何とか受け止める瑞希。そこへ横合いから明久が切りかかる。

「たああ……！」

しかしその一撃は、伸びてきた尻尾に受け止められてしまった。その尻尾にレイピアと倭刀が切りつける。

「アキくんお待たせ！」

「アキ、手伝うわよ！」

ダブルポニテが明久の左右に姿を現す。

さらには上空から弾丸の雨が瑞希のコピー体へ降り注ぎ、注意がそちらへ向いた瞬間、大きなイカリがその横面を張り飛ばす。

「援護するよん……！」

「大丈夫がか？」

凶々しい巨剣の圧力から瑞希を救ったのは、クリスと総司。

「はい！」

瑞希も力強く頷いて立ち上がる。

その様子を睨みつけるコピー体。尻尾を鞭のように振るい、明久達を弾き飛ばそうとする。

それを待っていたかのように明久は木刀で受け止めると、尻尾を抱え込む。それに対して不快気な表情を見せたコピー体が巨剣を振りかざそうとするが、剣が動かない。見れば剣に、鎖が伸びたイカリが巻き付き、鎖の先を持った総司が引っ張っている。

「そうは問屋が卸さんぜよ！」

笑みを浮かべた総司に苛つき羽を広げる。だがそこへ銃弾が降り注ぎ、次の行動へ移らせない。

そして。

「タアアアッ！」

「ヤアアアッ！」

裂帛の気合いと共に、美波とひばりが切りかかり、両翼を切り裂く。

「ーーーーっ!!」

声にならない悲鳴を上げるコピー体。

そこへ走り込む瑞希。コピー体は暴れるように総司と明久の拘束を跳ね飛ばすと、瑞希に襲いかかる。

尻尾と剣が鎧を砕き、髪飾りを弾き飛ばすが、瑞希の勢いは止まらない。左手で持った巨剣を突き出し、コピー体の胸を貫く。だが、それでも終わらず剣を振り被るコピー体。

その醜く歪んだ顔を正面から見据えて叫ぶ。

「負けせんっ！」

瑞希の声に呼応するように腕輪が輝き、手にした剣が光輝く。それは光の刃を為し、コピー体を内側から灼いていく！

「たあああっ!!」

瑞希らしからぬ気合いの籠もった声で剣を切り上げる。光の刃はやけにあっさりとコピー体の右肩へと抜け、その身体を灼き払う。手にした巨剣を取り落としたコピー体は、その金属音が響く中、黒い粒子となって消えていく。その残滓の一部が集まり、光の玉になったかと思うと、それが弾けて小鳥が落ちてきた。

「わわっ?!」

思わず落ちてきたそれを受け止めるひばり。小鳥は気絶しているらしく、身じろぎひとつしない。

「この子が原因なのかな？」

「よく分からないわね？ 来島さんに頼んだら？」

「……うん」

手の中の小鳥に視線を落とすひばり。横から覗き込んだ美波の言葉に、曖昧に頷く。

「宝石填めるぜよ」

いつの間にやら祭壇に上った総司が宝石を手にして腕を振り回す。それに対して皆が思い思いに頷くのを見て、祭壇中央の窪みにそれをはめ込んだ。するといくつもの光の線が走り、床へと吸い込まれていく。

「みなさんお疲れさまです。おかげで助かりました」

その声と共にモニターに映ったのは長い黒髪に眠そうな半眼と、べつとり張り付いた隈が特徴的な来島アキ。

「では、感覚接合を解除します」

アキのその言葉に続いて、目の前が暗くなり、一瞬、感覚が消えてしまうような違和感を感じるが、すぐに戻ってきた。

それぞれに身を起こし、HUDを外していく一同。

と、ひばりは胸元に違和感を感じた。

「な、なに？」

慌てて見下ろした瞬間。シャツの隙間から、小さな小鳥の頭が飛び出した。思わぬ事態に凍りつくひばり。

小鳥はキョロキョロと周りを見回してから、ひばりの顔を見て首を傾げた。

「ふえええええつつつ?!?!?!」

学園中に響きわたりそうな位大きな、ひばりの声が響いた。

番外編 15 電子の迷宮?! あるいは、ちいさな小鳥のこと。

後編(後書

番外編 15 電子の迷宮?! あるいは、ちいさな小鳥のこと。
後編

いかがでしたでしょうか? 瑞希の新必殺技、【ヒートセイバー】
もお目見えです♪

次は誰の技を作ろうかな♪

それでは次回もよろしくお願いしますね♪

第五十二問（強化合宿編）（前書き）

第五十二問、更新しました♪

いよいよ原作第三巻、強化合宿編が始まります♪

読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第五十二問（強化合宿編）

『……やっときましたか、この豚野郎』

『すまん。やることは少ないんだ』

『で？ 話とは何です？ お姉さまに関すること伺いましたが』

『ああそうさ。ところで、君はFクラスの奴らをどう思う？』

『……用件を言いなさい。でなければ話はここまでです』

『ああ、わかったわかった。君の大事なお姉さまなんだが最近、君に冷たいだろう？』

『……そんなことはありません！ お姉さまは……』

『まあ、聞けて。きつと、君のお姉さまはFクラスの奴らに色々言われてるのさ』

『……確かに、お姉さまにまわりつく豚野郎も雌牛もFですわね』

『中でも観察処分者は、学園最低のバカの癖して、君のお姉さまに近づくクズだ。それを遠ざける策がある』

『………とりあえず聞きましょう』

『そうこなくてはな』

ドリルロールツインテの切り裂くような視線にも動じず、卑怯者は口元を歪めた。

「で？ 何か解ったのかい？ 来島、神薙」

文月学園の学園長室。部屋の主は机に肘を着きながら、目の前に立つ二人の少女に訊ねる。

「協力者に提供していただいた映像には、はっきりとは顔が映っていませんでしたが、余程の事がない限り、学園の男子生徒ですね。それと、“例の”腕輪が確認されています」

淡々と報告する長い黒髪に半眼の少女、来島アキ。その目の下に

は、もはや取れぬであろう大きな隅が浮いている。

「警備員を昏倒させるのに使用したのもその腕輪でしょう。恐らく契約をしていない者は意識を保つことすら難しいかと」

続けて口を開いたのは長いポニーテールにフレームレスの眼鏡をかけ、スラリとした肢体の神薙御鳥。その表情は固い。

「……はあ、やつかいだねえ。例の小鳥の方はどうだい？」

ため息をつきながらそう訊ねる学園長。それに対して二人の少女は困ったように顔を見合わせるが、すぐに顔を戻した。

「データ的には召喚獣の一種ですね」

「ただ、支倉さんにくつついて来て、妖化することで実体化したみたいですね。現在は彼女の使い魔みたいなものですね」

アキに続いて御鳥も答える。

「はあ。やっぱり素質があっただね？ あの子の母親もそうだったからね」

顔をしかめる学園長。

「で、どうしますか？」

アキは静かに学園長に訊ねる。軽く瞑目した老女は、小さく嘆息し、目を見開いた。

「しばらくは様子見だね。ラボの結界で拘束はしてるんだね？」

「はい。よっぽどの事がない限り抜けられません」

学園長に答える御鳥は自信があるようだった。

「……合宿が終わったら、支倉も呼んでどうするか決めようじゃないか。正式な契約もしてないんだし、リンクを切ることは出来るはずだよ」

「そうですね、使い魔の子には可哀想ですが、支倉さんにとって良い事とは限りませんし」

そういつて目を伏せた御鳥を、アキは黙って見ていた。

「神薙さん」

「なんですか？ 来島さん」

「なぜ、今になって多くの情報を開示したんですか？」

学園長室から出たところで、アキから投げかけられた質問に、御鳥は一瞬、表情を歪めた。

「……召喚大会の時のこと、覚えてますか？」

「あの特殊フィールドのことですね？」

アキの返答に、御鳥は静かに頷く。

「あれは、私一人では解除できませんでした。術式は理路整然としていて、まるで鋼鉄の壁にペーパーナイフで挑んでいる気分になりました……」

自嘲するように笑みを浮かべる御鳥。

「恐らく、科学的かつ論理的に構成されているんでしょう。そう、敵は科学と魔術を併せ、ひとつの技術に昇華した。もはや『魔術は秘匿すべきもの』とばかり言っていられなくなったのが現状です」

「……………」

「この文月学園は、テストケースなんですよ」

「テストケース？」

御鳥の言葉に眉をひそめるアキ。それを見て、御鳥は苦笑いする。「すいません。言い方が悪かったですね。この学園は、一般の人に魔術を受け入れて貰うための第一歩として計画され、設立されたんです」

「そんな話、聞いたことはありませんよ……」

御鳥の言葉に、呆然となるアキ。しかし、御鳥は首を振った。

「一級秘匿事項です。私たち委員会以外では、学園長くらいしか知り得ません」

それでもアキにはショックだった。恩人であり、親代わりでもある学園長、藤堂力丸が、自分に隠し事をしていたことが。

そんなアキの様子に気づいた御鳥は、優しく声をかける。

「藤堂さんも辛かったと思いますよ？」

「え？」

その言葉に驚くアキ。しかし、御鳥は構わず続ける。

「少なからず魔に関わる魔術というものは、厄災を運びます。そんなものには本当は誰も関わらない方が良いでしょう」

「……………」

御鳥の話しに黙って耳を傾けるアキ。

「あなたに何も教えなかったのは、そんなものに関わって欲しくなかったからじゃないでしょうか」

御鳥の語ったことを噛みしめるように瞑目し、そして、笑顔になるアキ。

「…… かもしれません。普段はあんなですが、とても優しい方ですから。ありがとうございます神薙さん」

そう言って頭を下げるアキに笑いながら首を振る御鳥。ふと、ひらめいた顔になり、口を開く。

「御鳥で良いですよ、来島さん」

そんな御鳥の言葉に呆気にとられるアキ。

「いいんですか？」

探るように訊ねる。が、御鳥は笑顔だ。

「はい♪ その代わり、私もアキと呼びますから」

そう言って右手を差し出す。

アキは、少しだけ躊躇したが、意を決してその手を握った。

「ありがとうございます。これからよろしくお願いします」

「いえ、こちらこそ、よろしくお願いしますね？ アキ」

新学年になって二ヶ月が経過した。日没の時刻にもはつきりと変化を感じ始める時期である。

気温も程良く、実にさわやかな朝の教室へと足を踏み入れる二人。

一人は男子。学園指定のシャツにスラックス姿で首元には、やはり指定のタイ。顔立ちは良いものの、どこかネジが一本抜けているかのような雰囲気をもった少年、吉井明久。

一人は女子。指定のシャツに赤いスカート。小学生と見間違えうほどの低身長にポリウーームのあるポニーテールと、自己主張の激しい胸元を持つ少女、支倉ひばり。

「ずいぶん早く着いちゃったね？」

「今朝は全体的に早かったからね」

互いに話しながら卓袱台に荷物を置く。結局、椅子と机を人数分揃えるには稼ぎが足りなかったらしい。ひばり曰く、初日のつまずきがなければ、買い揃えられたとのこと。それでも、この教室に床置き of 空調が据え付けられたのはある意味快挙である。

ともあれ、新品の座布団と卓袱台、畳と人によつてはこちらの方が良いとまでいう者もあり、おおむね歓迎されていた。

「お？ 今朝は早いのか明久に支倉よ」

二人に気づいたクラスメイトの一人が声を掛けてくる。男とは思えぬ小顔に大きな瞳。美少女と呼んで差し支えないほど可愛らしい少年、木下秀吉だ。

「おはよう秀吉」

「おはよう木下君。今朝はみんな早めに動いちゃってね」
彼ににこやかに挨拶する明久とひばり。

「おはようじゃ、明久に支倉。明日からはいよいよ合宿じゃのう」
「そうだね。学力の強化が目的ではあるけど、みんなで泊まりがけだし、楽しみだよ」

秀吉の言葉に明久が頷く。

「もう、浮かれすぎじゃないの？ 二人とも」

そんな二人を、軽く注意するひばりもどことなく楽しげで、くだんの合宿を楽しみにしているのが分かる。

朝の会話を楽しみながら鞆の中身をロッカーへ移す二人。
と、明久の表情が変わる。

「どうしたの？ アキくん。あれ？ 手紙？」

「みたいだね。なんだろう？」

封筒を手に取り、訝しげに眺める。宛名はあるものの、差出人の名前は無い。

「！もしかしてラブレター？」

「あー。じゃあ早いところ読んできた方がよいよ？ また、前みたいな騒ぎになるかもしれないし」

「そうだね。ちょっと行ってくるよ」

封筒を鞆に仕舞い込み、いそいそと出ていく明久。

「おっはろーん」 おねーさんは今日も元気だよーん」と、アッキー？」

入れ替わりに入ってきたのは、指定の夏服を第二ボタンまで外し、タイも緩めた金髪碧眼の少女、クリスことクリスティーナ「ウエストロード。すれ違った明久を、不思議そうに見送ったかと思うと、その口元がニンマリとカーブを描く。

「ちよつと用事を思い出しちゃったよん」 まった後でねーい」

「あつ？！ 待っ！！」

止める暇もあらば、そそくさと出ていくクリス。

「行ってしまったのう……」

「もう、クリスってば……」

諦めの境地で見送る秀吉と、沈痛そうに頭を抑えるひばりであった。

屋上へ続く鉄扉を押し開いて姿を現したのは吉井明久。

緊張気味に足を進める彼を、夏の気配と春の去り行く雰囲気を伴う風が包む。

日差しは心地良く、空は青く澄み渡り、微風が優しく頬を撫でる。そして。

『あなたの秘密を握っています』

目を引く脅迫文が明久を地獄に突き落とした。

「最悪じゃーっ！っ！」

思わず手紙を取り落とし地に突っ伏す明久。その横から手が伸びる。

「おおっ、これまたストレートなきょーはくじょーだねい」

「わ、わあっ？！ クリス返してよっ！！」

慌てて手紙を取り返そうとする明久。彼女の常として、からかわれると思っただのだから。

「ほい。返すよん」

「え？ あ、うん」

わりとあっさり返してくれたことに驚く明久。

「どこのバカだか知らないけど、あたしのダチを脅迫するとはいい度胸だよん」

「え、と……ク、クリス？」

笑ってはいえるものの、いつもの軽い調子ではなく、ドスが利いた声に戸惑う明久。

「……さて、教室に戻るよん、みんなに相談して、対策練らないとねい」

「う、うん。って、え？ こういう脅迫状って、他の人に知られちゃあ不味いんじゃない……あ、でも、もう知られちゃってるか」

「大丈夫だよん、おねーさんはアッキーの味方だし、他の子も協力してくれるよん」

「あ……う、うん」

クリスの言葉に、明久は少しだけ涙腺が緩むのを感じた。

「『脅迫?!』」

話を聞いたひばりと秀吉、そして、勝ち気でポニーテールの帰国子女、島田美波は異口同音に声を挙げた。

「うん」

頷きながら封筒を見せる明久。すると三人そろって封筒を注視した。

「ど、どんな内容だったの？」

「……そう言えば出だしが衝撃的すぎて全部は読んでないや」

おずおずと問いかけたひばりに、少し思案してから答える明久。そのままその文を、その場で広げる。

《あなたの秘密を握っています。あなたの傍にいる異性に、これ以上近づかないこと。もし、この忠告を聞き入れない場合、同封の写真を世間に公表します》

そして、写真が入りそうな大きさの茶封筒が出てきた。

「この中身じゃな」

出てきたのは三枚の写真。

・メイド服姿でにこやかに笑う明久

・翻るスカートの奥にトランクスがのぞいている、メイド服姿の明久

・着崩れたメイド服姿で、ブラを持って立ち尽くす明久

「もう生きていけないっ!」

「わあああっ?! アキくん窓はダメえっ!?!」

「お、落ち着きなさいアキ！　いくら何でも死んじやうわよっ！？」
「そ、そうじゃぞ？！　メイド服ぐらい、人間一度は着るものじゃっ！？」

窓枠に足を掛けて飛び降りようとする明久を、必死で止めるひばり、美波、秀吉。

「放してくれえっ！！」

錯乱する明久。と、教室の戸が開き、一人の女子生徒。ふわふわの綿飴のようなピンクブロンドに、ひばりやクリスと互角のポリウムを誇る胸部の大砲を常備した少女、姫路瑞希。いつもは優しい表情を浮かべている顔が、憂いに染まり、ため息一つ吐いて席に向かう。

その様子に、明久も動きを止め、四人で顔を見合わせた。

「みっちゃんどうしたの？」

すかさずひばりが瑞希のそばへと小走りに近づく。

「?!　ひ、ひばりちゃ……」

ぼんやりしていた瑞希は、ひばりに気づくと、彼女から離れるように後ずさりした。

「え？　みっちゃん？」

思わぬことに困惑するひばり。様子がおかしいと感じた明久らも近づいていく。

「どうしたの瑞希」

「なにかあったの？　姫路さん」

「み、美波ちゃ……明久君、なんでも……ないです、なんでも……顔を逸らして呟く瑞希。そこへ声がかかった。

「おーい、みんなこっちに集まるんだよん。むっちゃんに、アッキーの脅迫のこと頼むからねい」

「え？　脅迫？　明久君もですか？」

聞こえてきたクリスの言葉に、今度は瑞希が慌てる。そして、発した言葉にひばりが反応した。

「え？　アキくん《も》って、まさかみっちゃんも?!」

「え？ あっ！」

慌てて口を押さえる瑞希だったが、すでに遅かった。

「まさかお姫ちゃんまでとはねい……」

渋い顔で呟くクリス。

「《クラスの同性から距離を置け。さもなければ、おまえの一番大事な異性がひどい目に遭う》か。どういっつもりなんだろ」

瑞希への脅迫文を音読したひばりは、首を傾げる。

「なにこれ？ 同性から距離を置けって……」

「どっちも女子から距離を置けみたいな文面だな」

「！」

するとひばりの頭に大きな手が乗せられ、声が降ってきた。180を越える引き締まった長身で、赤い髪をツンツンに逆立てた少年、坂本雄二は、見上げてきたひばりにイタズラっぽく笑ってみせる。

「よお」

「さ、坂本くんっ？！ いつのまに……って、ひゃあああっ？！ 撫でないで？！ 撫でないで？！」

驚くひばりの頭を撫で始める雄二。ひばりは軽くパニック状態だ。「はは、やっぱ支倉の頭はイジリ安いな」小さくて高さも丁度良いし」

「ふえっ？！ ちっちゃっ？！ 違うよっ？！ ちっちゃくないよ？！ あたしちっちゃくないからねっ？！」

ひばりの必死の抗議を軽く聞き流す雄二。

「とりあえず、もう少し詳しく聞かせてくれ。明久はともかく、姫路が脅迫なんてのは、代表として見過ごせん」

「真面目そうにしながらあたしの頭を撫で続けないでよっ？！ 後、アキくんだってクラスメイトなんだから、そっちも気にしてよねっ！？」

そう声を挙げるひばりの向こうで、教室の戸が開かれ、鋼鉄の生活指導にして担任の西村宗一教諭が姿を現し、話は一旦打ち切られた。

第五十二問（強化合宿編）（後書き）

第五十二問、いかがでしたでしょうか？

とっかかりから原作と違う展開ですが、まあいつものことです故、ご勘弁を。

それでは、次回もよろしく願いしますね♪

第五十三問（前書き）

第五十三問を更新しました ♪

いよいよ合宿所に到着です ♪

それでは、読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです ♪

第五十三問

車窓から流れる景色を見ながら頬杖を着く。Aクラスと折半した豊富な予算と、Fクラスのご意見番の尽力により、A、Bクラスと同等のリムジンバスで目的地へ向かうFクラス。乗り心地こそ快適ではあるが、目指す卯月高原までは距離があるためかなり時間がかかる。

となれば暇を持て余した者達が思い思いに時間を潰そうとするわけだが、Fクラス担任である鋼鉄の生活指導、西村宗一が遊具の類を許すわけもなく、必然、やることがない。結局大半の者達が、睡眠を選択し、車内は割合静かであった。

とはいえ、全員が全員とも寝ることを選択するわけもなく、軽く談笑したり、静かに本を読んだりしている（無論、漫画の類は不可である）。

「……雄二、なにか面白いもの無い？」

優しい顔立ちに、どこかネジを一本締め忘れたかのような少年、吉井明久が、隣に座る赤毛で引き締まった体の少年、坂本雄二に声をかける。

「サービスエリアでトイレに行けよ」

眠さを噛みしめ答える雄二。その答えに、明久は不思議そうな顔になる。

「……？　なんでさ」

「鏡がある」

聞き返す明久に即答する雄二。とたんに明久の顔が無然となる。

「……それは僕の顔が面白いつてこと？」

「いや、おまえの顔は割と……すまん」

訊ねた明久から目を逸らす。その態度に慌てる明久。

「謝られたっ？！　言い淀むほどどうにかなってるのっ？　僕の顔！？」

「……まあ、それはどうでも良いが、面白いのはおまえの守護霊だ」
「どうでも良くないよね?!　っていうか、守護霊なんて見えるの?」

「ああ見える。血みどろで黒髪を振り乱している珍しい守護霊だ」
「それってどう考えても護つてないよね……」

「げんなりとなる明久。それを見て雄二が唇の端を持ち上げる。
「安心しろ?　半分は冗談だ」

「……完全な冗談じゃないんだ」

「ああ。実際は茶髪だしな」

「そこは一番どうでもいいよね……」

疲れたように顔を伏せる明久。その隣で、雄二は楽しそうにする。
言い返そうと顔を上げると、通路を挟んで隣に座る、赤味の強いくせ毛をポニーテールにした帰国子女、島田美波が手帳ほどの大きさの、小さな本を読んでいるのが目に入った。

「へえ、漢字が苦手な美波が本を読むなんて珍しいね。何の本?」
気になった明久が声をかけると、美波が顔を上げた。

「ん?　心理テストの本よ。ある程度難しいのはルビが振られてるしね。本を読むのも日本語の勉強の内なの。でね、百円均一で買ったんだけど、意外と面白くて」

普段なら漢字を見ると頭痛がするとばかりに苦手意識を持っている美波が楽しげに答える。

それを見て明久は興味が沸いたようだった。

「ふうん、面白そうだね。問題出してみてよ」

「いいわよ」

明久に答えつつページをめくる美波。その手がピタリと止まる。

「……それじゃいくわよ。『次の色でイメージする異性を挙げて下さい。1・緑　2・オレンジ　3・青』」

出された問題に明久は思案する。

「んゝ難しいね。順番に……、緑が美波と来島さん。オレンジがクリスと秀吉。青が姫路さんと、ひばりって感じかな?」

「……………」

それを聞いて美波が慄然となる。と、上から手が伸びてきて本をひったくった。

「あつ！ ちよつと!？」

その手の主は美波の後ろに座る金髪碧眼の少女、クリスマスことクリスティーナ・ウェストロード。

「ふむん。ほうほう、緑は『友達』、オレンジは『元気の源』、青はつと、なるほどねい♪」

本を見ながら楽しげに笑う。

「ちよつと！ 返しなさいよクリスマス！」

「怒らな〜い怒らな〜い♪」

座席の背もたれから身を乗り出し楽しそうにするクリスマス。そのまま美波に本を差し出しながら笑う。

「もう！ い、言つとくけど、さっきの問題に深い意味は無いんだからね?!」

「はいは〜い♪ わかつてるよん♪」

二人のやりとりに首を傾げる明久。そこへと声が掛かる。

「ワシも参加させてもらっても良いかの？」

明久の前の座席から後ろを覗くのは、世界の性別に正面から喧嘩を売っている男装美少女、もとい、美少女もかくやという可憐さの少年、木下秀吉。

「面白そうだな。俺も参加させてくれないか？」

「はいは〜い♪ おねーさんも参加するよん♪」

秀吉に継いで雄二とクリスマスも参加を表明する。

「ふう。いいわよ」

「あれ？ ムツツリーニや来島さんは？」

参加を承諾する美波の横で、明久が気付いたように声を挙げる。

「眠っておるようじゃ。夕べ遅くまで調べものをしておつたらしい」
そう答えた秀吉の隣で船を漕ぐのは、少し小柄で、シャープさを感じさせる少年、寡黙なる静識者ムツツリーニこと土屋康太。

「アキぴょんも寝てるよん」

そして、クリスの隣でアイマスクにイヤーウィスパーまでした黒髪ロングストレートの少女、来島アキ。

「そつとしておいた方が良さそうだね。姫路さんとひばりも参加しない？」

二人の様に軽く笑った明久は、美波を挟んで彼とは反対側に座る、綿飴のようなピンクブロンドで温厚そうな少女、姫路瑞希と、斜め前方に座る、長い黒髪ポニーテールの小さな幼なじみ、支倉ひばりにも声をかける。

「あ、はい、ぜひ」

声をかけられた瑞希は、手にした文庫から顔を上げて快諾する。ひばりも楽しそうに振り向いた。

「うん、参加するよ、いいですよ？ 西村先生」

そして隣に座る西村教諭に確認をとる。

「あまり騒ぎ過ぎんようにな」

手元の資料を確認しながら小さく笑みを浮かべる西村教諭。なんのかんの言って、この小さな少女に甘いのであった。

「じゃ、第二問ね。『1から10の数字で、今あなたが思い浮かべた数字を、順番に二つ挙げてください』だって。どう？」

「俺は5・6だな」と雄二。

「ワシは2・7じゃな」これは秀吉。

「おねーさんは4・8かなん」とクリスが続き。

「僕は1・4かな」明久が答え。

「私は3・9です」と瑞希。

「あたしは6・2だね」そして、最後にひばりが答える。

それらを聞き終えた美波がページをめくった。

「えっと、『最初に思い浮かべた数字はいつも周りに見せているあ

なたの顔を表します」だって。それぞれ……」

美波が順番に上にした手のひらを向けていきながら、

「クールでシニカル」↓雄二

「落ち着いた常識人」↓秀吉

「騒がしいトラブルメイカー」↓クリス

「明るいムードメイカー」↓明久

「温厚で慎重」↓瑞希

「真面目で公平」↓ひばり

と、告げた。

「ふむ。なるほどな」

「常識人とは嬉しいのう」

「にゅはは、楽しいのが一番だよん」

「ムードメイカーだって」

「温厚で慎重ですか」

「公平って程でもないと思うけど……」

口々に感想を述べていく一同。

「それで、『次に思い浮かべた数字はあなたがあまり見せない本当の顔』だって。それぞれ……」

言いながら各人に掌を向ける美波。

「公平で優しい人」↓雄二

「色香の強い人」↓秀吉

「人が好きな寂しがり屋」↓クリス

「他人の為に頑張れる人」↓明久

「意志の強い人」↓瑞希

「我慢強い人」↓ひばり

と、告げていく。

「秀吉は色っぽいのか」

「クリスが寂しがり屋とはのう」

「確かにアッキーは頑張るよねい」

「姫路さんは意志が強いんだって」

「ひばりちゃんは我慢強いそうです」

「うん、坂本君って案外優しいよね」

心理テストをネタに会話は盛り上がる。そんな風に何問かの心理テストを楽しんでいく。

と、ひばりは、隣で西村教諭が時計を確認しているのに気付いた。「どうしたんです？」

「うん？ そろそろ昼休憩の時間だと思ってな」

西村の答えに、ひばりは軽くお腹に手を当てて頷いた。そして、おもむろに立ち上がる西村。

「ようし傾注！ これから…… っと、どうしたんだお前たちっ！ なにがあつたっ！？」

バス後方の様子を目の当たりにした西村が目を剥く。その様子不思議に思った明久等が後ろを見ると、腕を組み、瞑目するしている筋肉の固まりのような少年、前田俊夫や、起きているのか寝ているのか不明な糸目の少年、加藤武。細身で背の高い眼鏡の少年新田恵太など、一部を除いたFクラス男子勢が轟沈していた。

「こ、これは一体……」

思わずつぶやく明久。と、ひばりが何かに気付く。

「ちよっ？！ クリスその格好っ！？」

「うむん？ どうしたの……？」

美波の座席の背もたれにお腹の辺りでのっかりながら自身の体勢を顧みるクリス。

姿勢が変わって、まあるいお尻がフリンと揺れる。

それと同時に男子がビクリと体を震わせた。

「おおう、おねーさん、ぱんつ全開だったよん♪ 見せパンじゃないから照れるねい。まいっちんぐ♪」

自分でも予期してなかったらしいクリスは両手を、微かに朱に染めた頬にあてつつ身をよじり、お尻を振る。

それがトドメとなってバス内に赤い液体と、鉄錆の臭いが溢れた。

結局、大混乱の中、西村教諭と、なぜかひばりが平謝りし、車内の清掃をクラス総出でやったりなどした結果、Fクラスは予定を大幅にオーバーして旅館にたどり着いた。

さすがに体力の余っている問題児クラスとはいえ、疲労困憊しており、なかでも西村教諭に搾られたクリスは、見る影も無くシヨゲ返っていた。

「うう、にしむーに真面目に怒られたよん…… ひばりん慰めておくれよん……」

「よしよし、クリスは無頓着すぎるんだよ。もう少し自重しようね？」

「うむう。今回のワザとじゃないのにいゝ」

ひばりにしなだれ掛かるクリス。その頭を、しょうがないなあとはかりに撫でるひばり。

旅館に着いた一同は息つく暇もなく学習室でHR。注意事項や今後の予定などを聞き、解散後はそれぞれ割り当てられた部屋に荷物を置いて食堂へ。本来なら休憩時間があつたはずだが、到着が遅れた影響で休む暇もない。

そんな慌ただしく時間は過ぎていった。

「で？ 首尾はどうだ？ ムツツリーニ」

割り当てられた部屋に雄二、明久、康太、秀吉、俊夫の五人で集まり、落ち着いた所で、雄二が切り出す。

それを聞いた明久が不思議そうに首を傾げた。

「あれ？ 雄二、ムツツリーニ何か頼んだの？ 盗撮？」

「んなわけあるかつ！ つーか、なに忘れてんだお前は。お前と姫路のことに決まってるだろう」

雄二に怒鳴られるも、きよんとする明久。

「…………… ああああっ?! そうだった、僕たち脅迫されていたんだっ!」

少し思案して自らの境遇を思い出す。

それを見て沈痛そうに額を押さえる雄二。

「ったく、少しはマシになったと思ったが、やっぱりバカはバカだな」
苦々しく吐き出しながらも、康太に向きなおる。

「で? どうなんだ?」

聞かれて頷く康太。

「…………… まず、二人の脅迫状の出し主は同じ可能性が高い」

「どうしてそんなことが分かったのじゃ?」

訊ねた秀吉に康太が頷く。

「…………… 筆跡を誤魔化するためにプリンターを使用している。が、無駄に高級なプリンターを使っている。どちらかと言えば写真を印刷するのに向いているタイプで、あまり普及はしていない。印字の仕方からもそのタイプの癖が出ているから、まず間違いない」

「よく分かったねそんなこと」

康太の言葉に感心する明久。

「…………… 昔、使っていた」

「…………… そうなんだ」

康太の台詞に微妙な表情となる明久。

「…………… 無論、写真の印刷も同じプリンターでおこなっている」

「なるほど、あまり普及してない高級プリンターを持った二人が脅迫犯と考えるよりは、一人だと思った方が自然だな」

康太からの情報に、雄二は思案しながら言う。

「…………… 次に、脅迫犯が使用したと思われる道具の痕跡も見つけた」

「えっ?! もう?!」

驚きの情報に声を挙げる明久。同じくそれを聞いた雄二は口の端を吊り上げて笑う。

「さすがだなムツツリー二。まさか犯人まで突き止めた。なんて言わないだろうな？」

「……………さすがにまだ分からない」

雄二に聞かれるも力無く頭を振りながら答える康太。

「まあ、そんなに簡単には分からないよね」

康太の様子に苦笑いを浮かべる明久。

「……………すまない。『犯人は女生徒で、お尻に火傷の痕がある』

というくらいまでしか突き止められなかった」

「お主は、一体何を調べたのじゃ」

あきれたようにつぶやく秀吉。それを見て雄二と明久は苦笑した。

「……………校内に網を張った」

言いながら取り出したのは小型録音機。

「……………昨日学校中に盗聴機を仕掛けた」

ピッ 《……………らっしゅい》

「ずいぶん荒い音だね」

「校内をすべて網羅したみたいだからな。この際音質や精度には目をつぶるべきだろう」

かろうじて女子とおぼしき声が聞こえ始めるが、音質が悪く、人物の特定は出来そうになかった。

《……………首尾はどうだい》

《なんだ、客かと思ったら、あんたかい》

《ご挨拶だな》

「今度は男子の声？」

「そのようじゃが……やはり特定は難しそうじゃのう」

《こんなところまで押し掛けしないで欲しいね》

《そう言っなよ。今は仲間だろ》

《……観察処分者には、すでに脅迫状が行ってるはずだよ。それより、あんたも向こうでしくじらないで欲しいね》

「！」

明久が驚愕に目を見開き、声を挙げようとするのを、雄二が手で制する。

《ああ、根回しはしているさ。ついては、いくつか男子が喜びそうな写真を廻せないか？》

《……何枚か用意する。向こうで渡そう》

《助かるね。これで動かし易くなる》

《……ふん。話は終わったね？ なら帰ってくれ。商売の邪魔だよ》
《ふう分かったよ》

「男女が一人ずつか……」

「この二人が僕を脅迫してるんだね？ でも、姫路さんの事は言っていない無かったなあ」

一連のやりとりを聞いて、考え込む雄二。明久も複雑そうに眉根を寄せる。

「……………次は犯人特定の手がかり」

続けて機械を操作する康太。

《相変わらず凄い写真ですね。こんなのバレたら、酷い目に遭いそうですね……》

《ここだけの話、前に一度、母親にバレてね》

《大丈夫だったんですか？》

《本当にお灸を据えられたよ。文字通りにね。全く、いつの時代の罰なんだか……》

《それはまた……》

《未だに火傷の跡が、まあく残ってるよ。乙女の柔肌に、酷い仕打ちだと思わないかい？》

聞こえてきた女子二人の声。後は他愛ない商談の内容が聞こえるだけになり、康太は録音機を止めた。

「……………わかったのはこれだけ」

「なるほどね。それでお尻に火傷の痕か」

「会話の流れからしても女子であることは間違いなさそうじゃのう」

「口調は芝居がかっていたがな。まず間違いないだろう」

四人で頷く。

「にしても、お尻の火傷なんてどう確認すれば良いんだろう？」

首をひねって考え込む明久。そこに一つの人影が近づく。

「お前ら、さつきから何をこそこそ話してるんだ？」

声を掛けるは全身を分厚い筋肉に覆われた少年、前田俊夫。

「ああ、俊夫にはまだ話してなかったっけ。実は……」

事の経緯を説明する明久。それを聞いて、俊夫は大きく頷いた。
「なる程な。なら、女子に確認して貰えば良いだろう？」

「そうか！ 秀吉に確認して貰えばっ！」

俊夫の言葉に、明久は妙案を思いついたとばかりに声を挙げる。

「いや……、ワシは男じゃから女子風呂には……」

「待て明久。それは無理だ」

不服そうな秀吉の声を遮るように雄二が声を挙げる。

「なんでさ」

「これを見る」

自分のナイスアイデアを否定されて、むっとなる明久。そこへ雄二が合宿のしおりを開いてみせる。

合宿所の入浴について

・男子A B Cクラス…	2 0	：	0 0	＼	2 1	：	0 0	大浴場（男）
・男子D E Fクラス…	2 1	：	0 0	＼	2 2	：	0 0	大浴場（男）
・女子A B Cクラス…	2 0	：	0 0	＼	2 1	：	0 0	大浴場（女）
・女子D E Fクラス…	2 1	：	0 0	＼	2 2	：	0 0	大浴場（女）
・Fクラス木下秀吉…	2 0	：	0 0	＼	2 1	：	0 0	個室風呂（4）

「く……これじゃあ秀吉に確認して貰えない」

「そういうこった」

「……な、なぜワシだけ個室風呂なのじゃ?!」

せつかくの妙案が水泡に帰し、悔しがる明久。

「まあ、支倉やクリスも事情を知っているんだろう？ 頼めば……」

「……………廊下が騒がしい」

明久を宥める俊夫を遮る康太の声。耳を澄ませば、言い争うような声が聞こえてくる。

「なんだろう?」

何事かと訝しんだ明久が立ち上がってドアまで行き、開け放つとそこには数十人の女子の団体と、それに立ちはだかり、その集団へ何事かを叫ぶ、支倉ひばりと姫路瑞希の姿があった。

第五十三問（後書き）

第五十三問、いかがでしたでしょうか？

なぜ、ひばりと瑞希は女子と言いつ争うことになったのか？

その答えは、次回をお待ち下さい♪

第五十四問（前書き）

第五十四問、更新しました♪
読んでくださる方に、楽しんでいただければ幸いです♪

第五十四問

『やっぱり大きいわね……』

『でも、琴代ちゃんには負けてますし』

『いゝい湯うだあよゝん』

『すごいポリュームですね支倉さん』

『ずっと伸ばしてるしね。手入れは大変だけど』

『わーい、宏美ちゃん』

『ちよつ！？ 如月さつ？！ 待つ！？ イヤアアゝゝつ！？』

『おねゝさま』 美春がお背中流してあげますわゝ ついでに、あんなところやこんなところも、キレイキレイにして差し上げますわあ』

『げえっ？！ 美春っ！？ ち、近寄らないでっ！？』

『はあ…… アキちゃんと、坂本君のお風呂……ふ、ふふふ、でうふうふうふう』

『玉ちゃん、ヨダレヨダレ』

時間は戻り、DEF女子の入浴時間。

Fクラス女子が少ない分、全体に余裕があり、割合のびのび入浴できているのが特徴的である。クラスの差も、裸の付き合いとなれば、なんのそのであり。お互いに、わりとぎくばらんに接していた。

『代表なんてめんどくさくてやってられないわよ。部活の時間も削られるし。支倉さん替わってくれない？』

『クラスが違うんだから無理だよ。でも、なんだかんだ言ってやりがい感じてるんじゃないの？』

『……解る？』

『ふふ、清涼祭の時もしっかり見てましたから』

『あちゃゝ、恥ずかしいな』

『ぶつぶつ。二人を紹介したのは私なのに、何で分かんない話ばっ

かりしてるのっ？ つまんないよ〜」

『あたし達を抱っこしたままなくせに文句言わないで！！』

『美春やめなさいっ！ 体が洗えないでしょっ！』

『ハアハアハアハア、おねーさまのやわはだ、おねーさまのおしり、おねーさまのぺったんこーっっ！！』

『いやーっ！！』

『お先に揚がるよ〜ん』

『どうぞごゆっくり』

『ちよつとクリス助けなさいよ！ 来島はウチの同志じゃなかったのっ？！』

『ふわあ、姫路さん髪が濡れてストレートになると、また印象変わるのねえ』

『でも、癖が強いので、揚がって水分をとると爆発しちゃうんですよ？』

『それも大変そうね……』 『じゃあ、先に揚がるね？ 美波ちゃん』

『お先に失礼しますね？』

『ちよっ？！ ひばりに瑞希っ？！ ウチを見捨てるつもりっ？！』

『おねーさまー、みなみおねーさまー』

『？ じゃれてるようなものでしょ？ 相手したければ良いじゃない』

『何言ってるのよ！ ヤバいのよ！ マジなのよ！』

『おねーさまー』 ああ、この、手に吸い着くような柔肌、理想的なrのお尻、すべすべのフ・ト・モ・モ、タマらないですわ

〜』

『ぎいやああ〜っ？！ 触るな撫でるな頬摺りするな〜っ？！』

『さあ、観念してめくるめく愛の世界へっ！』

『逝きたくないわよっ！ ちよつとひばり！ なんで笑顔のまま一歩ずつ遠ざかるのっ？！ み、瑞希も顔赤らめて視線を逸らしながら遠ざからないでっ？！』

「……美波ちゃんが遠い……」
「……あの……一足早く大人になっても友達でいて下さいね？」
「いやあああああつっ?! 舐めようとするな先っちょ摘むな指先
差し込もうとするなあああああつっ!」

「もう、美春のせいで、みんなに置いて行かれたじゃない」
その後、怒りゲージが振り切れたポニーテールの帰国子女、島田
美波のサブミッションが炸裂し、美波を愛するドリルロールツイン
テ少女、清水美春は綺麗に折り畳まれながらも恍惚の表情で達して
いた。まさしくHENTAIの極みである。

彼女が復活するまでの時間に、全身を洗い終え、湯船で一息着い
てから揚げた美波だが、その頃には美春も再起動しており、彼女
の規格外さも伺える。

ともあれ、さっさと割り当てられた部屋に戻りたい美波は、脱衣
所にて着替えを手取るのだが。

「おゝ ねえゝ さまつゝ」

「ちよつと止めなさい美春。着替えられないでしょう?」

「そんなもつたいたい! お姉さまの美しい珠のお肌が見れなくな
るなんて、美春は寂しいです」

美波の背中にしなだれかかり、頬摺りする美春。

「やめなさいって! ウチは普通に男が好きなんだから!」

「それは嘘ですわ! あの牛……姫路さんとも随分と仲が良いみた
いですし。それにお姉さまは美春のことを愛してるはずです!」

一瞬、美春の目が鋭く細まる。しかし、美波からはその表情を見
ることは出来なかった。

「み、瑞希? 瑞希はウチの友達だし、そもそもそういう関係じゃ
!」

「やっぱり胸ですか! バストなんですかつ?! そんなに触りた

ければ、美春の乳房を触ってくださいましっ！ 揉んだり吸ったりこねくり回したりしてくださいましっ！ 大きさでは負けますが、感度に自信有りですわっ！」

いやがる美波の背中に、自らの胸を押しつける美春。

「な、なに言ってるんのよあんたはっ！ 意味わかんないわよっ！ 確かに瑞希のおっぱいはすべすべでふかふかで柔らかかったけどっ！」

言ってしまったから美波は、しくじった！ とばかりに顔をしかめる。

「やっぱりそうじゃありませんかっ！」

我が意を得たりとばかりに目を輝かせる美春。

「い、いや、今のはものの喩えといつかなんといつか……」

「問答無用ですっ！！」

美波が勢いを失ったのを見て飛びかかる美春。

「ちよっ？！ キヤアアッ？！」

いきなりだったため、身構えることも出来ずに美春に押し倒される美波。周囲の荷物も巻き込み、二人で派手に転んでしまう。

と、何かの機材が転がる音が、脱衣所に響いた。

「な、なに？」

美春にのし掛かられながらも、その音に首を動かすと、小さな機械が目に入った。

「……なに？ これ」

呟きながら機械を手取る美波。しげしげと眺めていると、美春が体をすり寄せながらのぞき込んできた。

美波が手にした機械を訝しげに見る美春。

「これ、カメラじゃありませんか？ お姉さま」

「えええっ？！ カメラあっ！？」

美春の言葉に、素っ頓狂な声を挙げてしまう美波。それを聞きつけた、周囲の女子も騒ぎだす。

「えっ?! なになに?」

「カメラだって」

「うっそーなにそれ!」

「どーしたのー?」

「カメラがあつたんだって」

「嘘?! それって盗撮じゃあ……」

「え? 盗撮? ヤダアツ!」

「ちよつと本当なのっ?」

「盗撮って犯罪でしょ? そんなバカな事する人いるの?」

「でも、カメラが見つかったって」

「マジっ?! バカじゃないのっ?!」

「……こんなバカな事する男子なんて」

「『あ!』」

「こんなバカなことをするなんて、やっぱり男なんて豚ばかりですわ」

「……こんな、いったい誰がこんなことを!」

美春の言葉を聞きながら、怒りを露わにする美波。その耳元に、美春が唇を寄せる。

「決まってますわお姉さま。こんな常識のない、バカなことをするなんて、学園きつてのバカ以外にありませんわ」

「!」

美春の言葉に息を呑む美波。思い浮かぶは愚かで優しい少年か。
「ち、違う……ア、アキはこんなこと……」

美波は言葉を続けられない。最近はともかく、去年は散々バカな騒動を引き起こしていた少年達。

「いいえお姉さま。彼は男なんですよ? 愚劣で醜い豚なんです。自らの欲望のためなら、どのような愚かな行いにも手を染める、豚」

共なんですよ」

美春の言葉を否定しようと首を振る美波。しかしそれは、あまりにも弱々しかった。

「ち……違……」

「違います。まあ、こういうカメラは、詳しい人間でなければ扱いきれないかもしれませんが」

美春が言ったことに、少しだけ安堵し……

……ようとして、美波の顔が強ばった。

「……つ、土屋……」

「……どうやら思い当たることがあるようですわね？ お姉さま」
美波の掌中にあつた機械を手にして立ち上がる美春。

「見て下さいまし！ こんなもので私たちのあられもない姿を盗撮しようとした輩がいますわ！」

「やだあ、ほんとにカメラよ」

「うつそお」

「さいつてい！」

カメラを掲げた美春を見て口々に嫌悪を表す女子。

「このようなバカげた犯罪を犯すような常識のない男子は居るのでしょうか？」

「きつとあいつらよ」

「そうよ、あれ以上のバカなんていないわよ」

「去年も、今年に入ってからバカな騒ぎばかりやってるし」

「おまけに『観察処分者』もいるんでしょ？ 常識なんて、有るわけ無いわよ！」

徐々にヒートアップし始める女子。

「ええ、きつとみなさんの言うとおり、彼らFクラス（学園の恥部）が犯人に違いありませんわ！特に、代表の坂本に、観察処分者の吉井明久！この二人が主犯に違いありません！」

そう声高らかに宣言する美春。

「きつとそうよ！」

「最低だわ！」

「とつちめてやりましょうよ！」

「あたし、他のクラスにも知らせてくる！」

犯人をFクラス。ひいては明久に決めつけて盛り上がる女子達。

美波は、それを見ていることしかできない。

その目の前に手が差し出された。

「さあ、お姉さま参りましょう♪ バカな真似をした豚野郎に仕置きしなくては♪」

そうにこやかに言う美春。その手を取ろうか取るまいか悩みながら手を持ち上げてしまった美波。

その手を美春が取り、無理矢理引き上げる。

暴走を始めた女子の勢いは止まることも無く、人数を増やしながら、Fクラスの部屋を目指し始めた。

「待てっ！ 待ってくれ中林！ いや、代表！」

柳眉を逆立てて歩く女子一人。それを引き留めようと、小柄な少年が追い縋る。

ソバージュにヘアバンド。気の強そうな瞳の彼女は、中林宏美。二年Eクラスを率いるクラス代表だ。猪突猛進気味ではあるが、強いリーダーシップを発揮し、体育会系のノリでクラスを引っ張っ

ている。

そんな彼女に追い縋っているのは、同じEクラスの生徒、牧野慎吾だ。浅黒い肌に真剣さを帯びさせながら宏美を押し留めようとする。

「なに？ 邪魔しないでくれる？ こんな卑劣なこと、許すわけにはいかないわ！ まさかあなた、盗撮犯の味方をするつもり？！」

「違う！ そんなつもりは無えっ！ だから俺の話を聞いてくれっ！」

盗撮という卑劣な行為に激昂していた宏美だったが、慎吾の必死な様子に足を止めて仁王立ちとなる。

「……とりあえず言ってみなさい」

「……ああ、ありがとよ。単刀直入にいやあ、明久は犯人じゃ無え！ あいつはバカだが、人の、特に女の子の嫌がることは絶対しねえ！ 絶対だ！」

「根拠は？」

「俺は中学であいつとクラスメイトだった。あいつのフェミニストっぷりは散々見てきた。なんの下心も無く、女子の味方をするような奴なんだ！」

「……」

「そして、俺はあいつのお人好し過ぎる程の優しさを、ずっと見てきた！ あいつは、俺が周りに誇れる、親友なんだ！」

そうして、廊下に手を着く慎吾。

「ちょ！ ちよっと！」

焦る宏美をしり目に深々と頭を下げ、土下座する。

「頼む！ 俺の親友を、信じてくれ！」

「……」

慎吾のあまりの必死さに鼻白む宏美。

そこへ、大きな影が現れ、慎吾の隣に座ると、両手を廊下に着いて頭を下げ始めた。

「き、如月さんまで……」

そう、それは慎吾や宏美と同じEクラスに所属する大柄な少女、如月琴代。

普段騒がしい彼女が神妙な顔つきで、静かに頭を下げている。

「宏美ちゃん……ううん、代表。明久ちゃんを信じてあげて下さい。お願いします」

さすがに二人から土下座されてたじろぐ宏美。

「ちょ、ちよつとやめなさいよ。顔を上げて？」

そう声をかける宏美だったが、慎吾と琴代は無言。

やがて、根負けしたように息を吐く宏美。

「わかった、わかりました！ だから二人とも顔を上げなさい！」

「代表……」

「宏美ちゃん……」

「今回はあなた達に免じて、矛は納めるわ」

「ほ、ほんとか！」

「宏美ちゃん！」

「ただし、次に彼らが何かやらかしたら、今度こそ抗議しに行くからね！」

そう言つと、宏美はきびすを返して廊下を戻っていった。

廊下を小さな少女と小柄な少女が歩く。普段はポニーテールに纏めている、ボリュームのある髪をおろした状態なのは小さな少女、支倉ひばり。その隣を歩くのは、まだ少ししんなりとしたピンクブルンドの少女、姫路瑞希。揃いも揃って、胸部に強力な主砲を常備した、Fクラスの幼なじみコンビだ。

大浴場を出た後、クールダウンをかねて、共通の友人である島田美波を食堂にて待っていたのだが、なかなか出てこなかったため、仕方なしに割り当てられた部屋へ戻る頃であった。

そんな二人に声がかかる。

「ねえ、あなた達、Fクラス的女子よね？　ちょっと聞きたいことがあるんだけど、良いかしら」

その聞き方に、何となく違和感を感じつつ、ひばりは振り向いた。すると、そこに居たのは、きつそうな目つきの少女。

Cクラス代表の小山友香だった。

「……はい、そうですね……何のご用でしょう？」

友香の後ろに並ぶ女子の集団をチラと見てから答えるひばり。

「Fクラスの代表と、観察処分者の部屋はどこかしら？　隠すと為にならないわよ？」

ひばりを見下ろし、高圧的に訊ねる友香。

その態度にひばりは眉を跳ねさせる。

「……どういうご用件ですか？」

友香の前に立ち、そう訊ね返すひばり。友香はその態度が気に障ったのか、不快気に鼻を鳴らす。

「……いいから教えないさい」

ひばりを威圧するように見下ろす友香。これには瑞希も黙っておられず、友香を睨むようにしながらひばりの隣へ立つ。

「お二人の部屋は知っては居ますが、用件を伺わなければお教えできません」

友香にそう言い放つ瑞希。さすがに学年二位として名を馳せる瑞希に対して、友香は明らかに気後れした。

「……女子風呂の脱衣所が盗撮されたのよ。その犯人を捕まえに行くのよ」

ひばりは少し思案してから口を開いた。

「……それが、私たちのクラスの代表や観察処分者に、何の關係が？」

「決まってるでしょ？　こんなバカなことをするのは、F代表^{バカ}か觀察処分者（学園の恥曝し）に決まってるわ」

「証拠、あるんですか？」

聞く者が聞けばわかるであろう、ひばりの声質の変化。その堅さ

に気づいたのは瑞希だけだったのだが。

「証拠？ こんなバカなことをするのはFクラスの人間くらいでしよう？ まあ、それでもって言うなら見せてあげるわ」

言いながら友香が取り出したのはCCDカメラと小型の録音器。

「？ これは？」

「カメラと録音器よ。Fには詳しい人が居るんですってね」

「そ、そんな理由でっ？！」

ひばりは信じられないとばかりに声を挙げる。

だが、友香は余裕を見せるように続けた。

「それに、盗撮なんてバカな真似、バカクラスのF以外にあり得ないでしょ？ 特に観察処分者は、壁をぶち壊すくらい常識が無いんだしね」

バカにしたように笑みを浮かべる友香。ひばりはそれを真っ向から受け止める。

「アキくんは、Fクラスは盗撮なんて真似しません！」

はつきり言い切るひばりに鼻白む友香。

「ハンツ、バカも休み休み言いなさい！ バカ共以外に誰がやるって言うのよ。常識で考えなさいよね！」

お返しとばかりに友香が言い放った言葉に、後ろの女子たちが同調する。

しかし、ひばりは屈しない。

「アキくんも、Fクラスのみんなもそんなことしない！ あたしはみんなを信じてる！」

「はい！ 私も皆さんを、明久君を信じます！」

そう言いになったひばりと瑞希に、周囲が静まり……爆笑の渦が巻き起こった。

「あっはははは、あなた本気で言ってるの？ あんなバカ共、信じる価値なんてあるわけ無いでしょ？ あなたたち、Fに染まって、バカになったんじゃないの？ それにね？ あなたのクラスメイトの一人は、そうは思っていないみたいよ？ 出てきて！」

友香の声に従い、女子の集団が割れていく。

そして、そこから、ポニーテールの少女島田美波が、清水美春に支えられながら姿を現した。

第五十四問（後書き）

第五十四問、いかがでしたでしょうか？

美波ファンの方には少し辛いかもしれませんが、お読みいただければと思います。

それでは、また次回♪

第五十五問（前書き）

第五十五問、更新しました。

読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです。

第五十五問

「う、嘘……」

「そ、そんな……」

女子の集団に立ちふさがる小柄な少女、支倉ひばりと、ピンクブルンドの才女にして、その幼なじみ、姫路瑞希は信じられないとばかりに呟いた。

女子の集団の先頭に立つ、Ｃクラス代表の小山に呼ばれて姿を現したのは、ひばりや瑞希と同じＦクラスのクラスメイト、勝ち気なポニーテールの帰国子女、島田美波である。しかし、普段闊達としている彼女の表情は、彼女らしくもなく暗い、悄然としたものだ。

そんな彼女の傍に寄り添うようにしながら支えるのは、美波を愛してやまない、ドリルロールツインテの少女、清水美春である。

「美波ちゃんどうして……」

悲しそうに呟くひばり。それが耳に入ったか、顔を上げる美波。しかし、すぐに視線をひばりから外し、顔を背ける。

「お姉さまは気付いたのですわ！ 男なんて、みんな汚らしい豚だということに！」

顔を背けた美波に代わって、美春が胸を張りながら答える。が、ひばりは無視した。

「美波ちゃん考え直して？ アキくんたちがそんな事するわけ……」

「美春を無視しないで下さい！ 大体、バカの集まりであるＦクラス、どこに信頼すべき要素があるのでしょうか！ 常識の無い豚共にそんな価値なんてありませんわ！」

美波を説得しようとするひばりだったが、その言葉は美春によって遮られてしまう。おまけにほかの女子も美春に同調し始め、騒ぎ始めてしまった。

『そうよ！ バカの集まりなんて信じられるワケないでしょ！』

『常識の欠片もない集団じゃない！』
『どうせ犯人に決まってるわよ！』

吹き荒れる罵倒の嵐。
だが。

いい加減にしてっ！！

小さな体からは考えられない程の音量。

ひばりの一喝にその場の誰もが息を呑む。

「確かにFのみんなは、勉強は苦手だし、羽目を外すことも多いけど、みんな良い人たちだよ！」

「そうです！ クラスのみんなで協力しあって困難を乗り越えることの出来る、すごいクラスなんです！ なのに、なんでクラスの順番とかテストの点数なんかで決めつけようとするんですかつ！」

ひばりに続いて、瑞希も強い調子で声を上げる。

「美波ちゃん、ちゃんと考えて？ 流されちゃ駄目だよ。アキくんは盗撮なんてしないよ」

ひばりは今一度美波に声をかける。それに対して顔を上げた美波は、泣きそうな表情をしていた。

「ごめん、ほんとにごめん。ひばり、瑞希。ウチだって、アキがやつたなんて思いたくない……」

美波のその言葉に、ひばりの表情が明るくなり、口を開く。

「じゃあ……」

「けどっ！！」

が、口に出そうとした言葉は、美波によって遮られてしまう。

「けど……やってないって、言えなかった……言えなかったのよ……」

……」

血を吐くかのように言葉を絞り出す美波。その、緑の双眸には、すでにクルスタルの輝きが溜まり始めていた。

その腕をとったのは、美春。

「お姉さまは間違ってますせんわ！ お姉さまは正しい判断を……」
言い募る美春の手をふりほどく美波。

「……え？」

「ウチは、クラスみんなを、アキを信じてあげられなかった！」「
叫んだ美波は、きびすを返し、女子達をかき分けるようにしながら走った。

「お姉さまっ！」

あわてて美春も追いかけていってしまった。

「……フン」

それを見送り、鼻を鳴らすCクラス代表の小山友香。そして、ひばりと瑞希に向き直り、軽く笑みを浮かべる。

「どっちにしても、同じFクラスの人間に疑われている辺り、Fは、所詮Fという事ね。さあ、犯罪者共の部屋を教えなさい！」

「「なっ?！」」

あまりの言い方に思わず絶句してしまうひばりと瑞希。

「犯人を引き渡せば、F全体へのお咎めは無しにしてあげるわよ」
見下すように言い放つ友香。

「……なんなんですかっ?! アキくん達がやったなんて決まってるわでしょ！ しかも、Fクラス全体が共犯みたいな言い方して！」

「ふん！ バカの集まりですもの、ほかにも共犯が居るに決まってるわよ。ねえ、みんなそう思うでしょ！」

「そうよ！」

「きつと、クラス全体で関わっているに違いないわ！」

「最低よ！」

「ほらね？」

勝ち誇ったように笑う友香。

理屈も、真実も、虚偽も関係なく、ただただ生け贄を欲する、ヒステリー集団がそこにいた。

そのとき、間が悪くも一つの扉が開いて、優しげな顔の少年が顔を覗かせた。

「いったい、何の騒ぎ……」

なの？ と問いかけようとした少年は、数十人の女子から一斉に睨みつけられ、言葉を飲み込む。

「アキくん出て来ちゃだめっ！」

「居たわよ！ 犯人確保……！」

ひばりが鋭く警告するのと、友香が明久を指差しながら叫んだのは同時だった。

驚き硬直する明久。一斉にかかろうとする女子集団。間に割って入ろうとするひばりと瑞希。

すべてが入り乱れようとした瞬間。

壁が爆ぜる音が周りに響きわたる。

そして、全てが止まり、硬質な声が響いた。

「なあゝに、してくれちゃってるのかなん？」

その声に、皆が振り向く。

その視線の先には、金髪碧眼の少女、クリスことクリスティーナⅡウエストロードが、壁面に拳を叩き込んだまま冷たい笑みを浮かべていた。

美波は夢中で走っていた。途中、美春の声も聞こえたが、無視して走る。と、不意に影が差す。

人だ。

そう美波が気づいたときには、ぶつかっていた。

「キヤツ?!」

「……!?!」

衝突の反動で、お互いに尻餅をつく。

痛みに顔をしかめながら相手を見ると、向こうもきよとした顔でこちらを見ている。

「あ……霧島さん……」

「……島田?」

そう、美波がぶつかったのは、美しい絹糸のような黒髪と、静謐な霧困気の少女。二年Aクラス代表の霧島翔子だった。

「……あ」

その翔子が、何かに気づいて声を上げたときには、美波の視界はぼやけ、廊下にいくつかの染みを作っていた。

「あ……うう……」

何かを言いたかった。しかし、なにも言葉にならなかった。

溢れるものを止められず、美波は目の端から滴をこぼし続ける。と、その背中に手が回された。

翔子が美波を抱きしめたのだ。

「……大丈夫。大丈夫だから」

そう声をかけながら美波の背中を、軽く叩いてやる。すると、辺りに小さな嗚咽が聞こえ始めた。

『雌牛に続いて人形女まで……。例え女であろうとも……。お姉さまを誑かすならば、私の敵です! 美波お姉さまを愛して良いのは、後にも先にも、この清水美春、ただ一人ですわ! 豚も、牛も、人形も、必要ないのです!』

「あ……ク、クリスティーナ先輩……」

突然に現れたクリスの姿に、友香は一步後ずさる。

「おー、ゆーかりん。なにことなのかなん？ おねーさんのクラスメイトを取り押さえて、どーするつもりなんだろうねい？」

まるで面か何かのような笑みを張り付けながら、一步足を進めるクリス。

合わせるように、また一步後ずさる友香。

「あ……え、と……その……」

舌が回らず、言葉が出ない。

「……どうするつもりだったのかなん？ ゆーかりんは。言いなさい」

「ひうぐ。と、とと、盗撮のよ、容疑者として、か、かかか、確保をを……」

なんとか言い募る友香。その表情は、先ほどまでの、強気で勝ち誇ったものではなく、怯え混じりのものだった。

そんな友香の言葉を聞いて、クリスは片眉を跳ねさせる。

「……盗撮？」

「そ、そうです！ そうなんですつ！ 私たちは盗撮なんてバカをやらかした輩を捕まえに……」

クリスが反応したことに気を取り直した友香が捲くしたてる。

「こ、こんなバカなことをするなんて、本物のバカに違いないと、観察処分者を……」

が、言葉の選択を間違えていた。

「……証拠は？」

「え？」

冷たい声に友香は間抜けな声を上げる。

「……まさか、証拠も無しに吊し上げようなんていうのじゃないよねい？」

言いながら氷点下の視線を友香に浴びせるクリス。

すでに友香は腰が砕けてしまい、涙目だ。

「ひ、ひうう……、こ、これ……証拠品……」

震える手でポケットをまさぐり、機械を取り出す友香。しかし、クリスマスは一瞥しただけで友香に視線を戻す。

「……なに？　これ」

「カ、カメラとマイクらしいです……」

冷たく訊ねるクリスマスに答える友香。

「……らしい？」

強調して聞き返すと、友香は震え上がる。

「カメラと、マイクです！　盗撮に使われたものです！」
縮み上がりながらもはつきり答える。

「……それだけ？　持ち主は特定できてるの？」

「え？　あ……」

「その様子じゃあ、特定は出来てないみたいだねい。で？　そんな程度でウチのクラスの子を犯人扱いしたのかなん？　あおちゃんが紹介してくれた子だから、もう少し頭が回ると思ったんだけどねい。感情任せの暴論で罪を着せようなんてのは、下の下だよん。一体君は、あおちゃんから何を学んだのかなん？」

「ひ……あ……」

ずるずると、その場にへたり込む友香。

「これは、お仕置が必要だねい」

「……そう。そんなことが」

「うん……つく、ウチ……つく、みんなを……つく、アキのこと、信じられなくて……つく、ウチ……最低だ……」

所は変わって、Aクラスに割り当てられた部屋。女子の人数の関係で、八人部屋を五人で使っている、翔子、優子、愛子、美穂、日和。

その内、教師を呼びに言った優子を除いた四人で美波の話を聞い

ていた（もつとも、日和は涎を垂らしながら聞き流しているようだが）。

「……けれど、島田はまだ信じたいと思ってる？」

「え？……つく。う、うん」

翔子に声をかけられ、しゃっくりあげながらも肯定する美波。

それを見た翔子が一つうなずく。

「……なら、まずやるべきことがある」

「な、なに？」

「……吉井やひばり達に謝ること」

「で、でもどうやって……。今更、顔なんて合わせられない……」

翔子の言葉に俯いてしまう美波。

「ね、ねえ、どう謝ればよいの？」

思わず訊ねるが、翔子は首を振った。

「……それは、島田が自分で考えるべき」

「そ……そんなあ」

翔子に断られてしよげ返る美波。そんな彼女に、ショートヘアの少女、工藤愛子が助け船を出す。

「まあ、今晚くらいはこの部屋に泊まれば良いよ。島田さんも考えを纏めたいだろうし」

「そうですね。幸いこの部屋は余裕がありますし。どうでしょう？代表」

愛子に続けて翔子に許可を求めるのは、ボブカットに眼鏡の少女、佐藤美穂。その言葉に翔子が頷く。

「……わかった。先生には伝えておく。島田はゆっくり考えると良い」

翔子の言葉に美波が深く頭を下げる。

「ありがとっ、霧島さん。このお礼は、いつか必ずするから……」

「……良い。島田はひばりの友達だから」

「……でも、ウチはひばりのことも裏切って……」

肩を落とし、悲しげに俯く美波。普段の彼女からは想像できない

ほどの落ち込みようだ。

その肩に、そつと手が置かれる。

「……大丈夫。ひばりはきっと許してくれる。あなたの友達を、信じてあげて？」

「……う、うん。……ねえ、霧島さん」

優しく諭す翔子に頷く美波。と、顔を上げる。

「……なに？」

「霧島さんは、坂本の事、その……疑ったりはしないの？」

美波にそう訊ねられ、翔子は思案してから口を開いた。

「……以前の私なら、雄二が浮気するんじゃないかと考えて、お仕置きしていたかもしれない。たぶん気持ちに余裕がなかったから、私の雄二への気持ちだけで行動していたと思う」

「……」

「……けど、ひばりに言われて考えた。雄二のこと、自分のこと。

そして、私は雄二を縛り付けるのではなくて、信じることにした」

「霧島さん……」

「……正直、怖くもある。雄二がどこかへ行ってしまうんじゃないかって。だけど、その位で諦めるつもりはない。私に振り向いて貰えるようにがんばる」

寡黙な少女は、美波に己の答えを述べていく。そして、それが美波には眩しかった。

「ウチも……」

「？」

「ウチも……出来るのかな？ 頑張れるのかな？」

不安そうにつぶやく美波。そんな彼女に、翔子は小さく笑いかけた。

「……大丈夫。島田なら、きっと頑張れる」

「……うん。ありがとう霧島さん」

そつ返事をして、美波はこの部屋に来て初めて小さく笑った。

第五十五問（後書き）

第五十五問、いかがでしたでしょうか？

みなさんは、今回の話、どう思われましたか？

正直に言いますが、私は、この合宿編の辺り、つまり原作三巻の話ですが、かなり嫌い話です。特に美波の評価がかなり下がりました。

そんな話に、ひばり達が絡んで、様々な変化が起きています。

ご都合主義とも、甘いとも思われるかもしれませんが、これから本作にお付き合い戴ければ幸いです。

それでは、また次回。

第五十六問（前書き）

第五十六問、更新しました♪
読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第五十六問

「……齒あ食いしばりなさいっ！」

そう言つて拳を振り上げたのは、金髪碧眼の少女、クリスティーナ・ウエストロッド。その拳の向かう先には、怯えた顔でへたり込む、Cクラス代表、小山友香がいる。

そして、拳の振り下ろされるその先に一つの影が飛び込んできた。
「!？」

その影に気づいたクリスは、あわてて拳を止める。拳の先が鼻先に触れるか否か、そんなギリギリのところまで止められた拳の向こうから、強い意志を秘めた双眸が、クリスを見上げていた。

「あ、危ないでしょっ?! どういうつもりなのっ!?! ひばり!？」

割り込んできた影に向かつて声を上げるクリス。その勢いにも呑まれることなく両手を広げながら彼女を見つめて立ちはだかるのは、小さな少女、支倉ひばり。

「駄目だよ、クリス。殴っちゃ駄目」

静かに言葉を紡ぐひばり。だが、クリスの方は納まりがつかない。
「……こういう連中は、殴られなきゃ分らないのよっ! 退きなさい、ひばりっ!」

怒りのあまり声を荒げるクリス。しかし、ひばりは微動だにしない。

「退かない。退いたらクリスは小山さんを殴るでしょ? そんなこととはしちやあ駄目なんだよ」

静かにそう告げるひばり。しかし、クリスは納得しない。

「放っておけば、この子はまたやらかす。Fクラスと言うだけで濡れ衣を着せるのよ。だから、殴り付けてでも分からせなきゃいけないの!」

「それは違うよ。アキくんやクラスみんなのために怒ってくれる

のは嬉しいよ？　けど、疑わただけで殴り付けるのはやり過ぎだよ。疑いは晴らせば良い。暴力を振るう必要はないんだよ」

じつと睨み合う、ひばりとクリス。視線を先に外したのはクリスだった。

「ひばりん……ひばりんは甘いよ……」

「甘くて良いよ。暴力を振るわずに納められれば一番だもの」

クリスの言葉に答えるひばり。それを聞いてクリスは意気を削がれ、ため息をつく。

「……はあ。ひばりんらしいというか。何というか……」

「それにね」

「？」

「それに、これはあたしのエゴだけど、あたしは友達が暴力をふるうのも、ふるわれるのを見るのも、嫌だよ。クリスのそんな姿。見たくない。いつもみたいに笑ってみんなに元気をくれる、あたしの大好きなクリスでいて欲しい」

ひばりの言葉にクリスは頭を掻き始める。

「はあ……わかったよん。ここは大人しく矛を収めるよん」

「うん。ありがとうクリス」

そんなクリスに、ひばりは笑顔に向けた。

それに笑顔返してから、クリスは表情を引き締め、膝を着いて視線の高さを友香に合わせた。

「……ねえ、友香さん」

「は、はい……」

怯えながら答える友香を見て、クリスは軽く眉をしかめた。

「怖がらせてごめんなさいね？　けどね、確たる証拠も無く、人を犯罪者扱いすることがどれだけ相手を傷つけることになるのか、それをよく考えて？　ちゃんと考えれば、分かるはずよ？」

「……はい、すみませんでした……」

優しい口調で諭すクリスに、友香はすっかり頷いてみせる。そんな彼女に、クリスはぎこちなくはあるが、笑って見せ、立ち上がった。

た。

『お前達、何をやっているかっ!』

大きな声と共に姿を現したのは、鋼鉄の生活指導担当にして、二年Fクラスの担任、西村宗一教諭。その後ろからは、二年Aクラスのサブリーダー的な少女、木下優子もやってきた。

その様子を眺めて、クリスは息を一つ吐く。

「また怒られそうだねい……とほほだよん」

そう言いつつ、彼女は西村の方へと足を向けた。

「大丈夫だった？ 小山さん」

歩み去るクリスの背を見送った友香に、声かけられ、手が差し出される。ひばりだ。

「あ。ええ、ありがとう……」

友香は、お礼を言いながら彼女の手を取ろうとして……その手が小さく震えていることに気づいた。

思わずその手を見つめてしまう友香。

「どうしたの？」

しかし、ひばりは少し首を傾げながら笑顔を向けてくるばかりだ。

「……いいえ、なんでもないわ」

友香は、ひばりの手を取って立ち上がり、自分を守ってくれた、小さな少女をまじまじと見つめた。

「……ねえ、支倉さん」

「なに？ 小山さん」

「なぜ、私をかばったりしたの？ 私は、あなたのお友達を犯罪者呼ばわりしたのよ？ クリスティーナ先輩のように怒らないの？」

そう訊ねる友香に、ひばりは困ったような顔になる。

そして、少し思案しながら口を開いた。

「……怒ってはいるよ。さっきの小山さん酷かったもの」

「……」

「……けど、さっきもクリスに言ったように、あたしは友達が暴力をふるうところも、ふるわれるところも見たくない。だから、あたしはあたしのためにあなたを助けたの。あたしのエゴのために」
まじめな顔でそう言葉を紡ぐひばり。だが、友香は納得がいかない。

「でも、それであなたがクリスティーナ先輩と不仲になったらどうするの？ あなたにデメリットが大きすぎない？」

「メリットもデメリットも関係ないよ。あたしがそうしたいんだから。それにクリスは分かってくれて信じてるし、喧嘩になっても仲直りできるように心を尽くすよ」

「……そんなの、綺麗事よ。ただの絵空事。うまくいきっこない」

友香は、俯きながら、ひばりへ言葉をぶつける。だが、ひばりはそれを受け止め、笑ってみせる。

「……いいじゃない綺麗事で」

「……え？」

「みんな、本当は綺麗事が一番良いって知ってる。だから綺麗事なんだよ。だけれども、みんな綺麗事だからって、諦めてしまう。でも、あたしは諦めたくない。一番良いって思える綺麗事をこの手に掴みたいから」

「……私には分からないわ」

「だと思っよ」

複雑そうに呟く友香に、ひばりは苦笑いしてみせる。

「小山、そちらの事情も聞きたい。こっちに来なさい」

「あ、はい」

西村教諭に呼ばれた友香は、返事をしながらそちらへ向かう。と、その足が止まり、ひばりへ振り向いた。

「……支倉さん」

「なに？ 小山さん」

友香に声をかけられ、ひばりは少し眉を上げる。

「改めて、助けてくれてありがとう。先輩の言葉、あなたの言葉、

よく考えてみるわ」

「うん」

お礼と共に言われた言葉に、ひばりは眉を緩めて、笑顔で頷いた。

結局、Fクラスにお咎めは無かった。西村をはじめとした教師達による事情聴取が行われたが、土屋康太が清涼祭で怪しげな写真を撮っていたことが問題にはなったものの、その他については言いがかり以上のものではない。

そもそも、Fクラスは旅館への到着が一時間以上遅れており、自由に動ける時間は全く無かったため、カメラを仕掛ける時間があつたとは考えにくい。それを鑑みれば、Fクラスの間人間が犯人である可能性は限りなく低いのだ。

しかしながら、カメラが誰のものかは分からない以上、犯人の特定は出来ておらず。

女子の情報伝達の早さもあり、男女間に微妙な空気が横たわっていた。

そんな空気の中、夜は更けていく。

消灯時間が過ぎ、真っ暗な部屋の中で、Fクラス所属の島田美波は、布団の中から天井を見上げて考え込んでいた。

本当なら、パジャマパーティーよろしく、おしゃべりの一つもしたかったであろう、Aクラス代表の霧島翔子をはじめとした五人の少女も、美波に気を使つてか、早々に就寝してしまっていた。

「ウチ……どんな顔で謝れば良いんだろう……」

小さくぼつりと呟いて、美波は身を起こした。軽く息を吐いて考える。が、まとまらないのか、もう一度ため息を吐いて立ち上がり、

周りを起こさぬよう、静かに、注意深く移動して部屋のドアを開けた。

見回りの教師を警戒しながら移動し、旅館の裏庭に出て、夜風に当たる。

庭の真ん中に、ベンチを見つけ、そこに腰を下ろして物思いにふけた。

「……アキ、ウチは……」

『コラアッ！ 消灯時間は過ぎてるぞっ！』

「ひゃいつ!？」

ぼんやりしていた美波は突然、大きな声をかけられて飛び上がらんばかりに驚いて返事をして振り向いた。

そこに居たのは、見回りの教師では無く。

「へへ〜ん♪ 驚いた？ 美波」

「ア、アキ？ も、もう……驚かさないでよ。心臓が止まるかと思っただじゃない……」

平坦な胸を押さえて息を吐く美波。明久は、「ゴメンゴメン」と笑顔を浮かべながら彼女に歩み寄る。

「もう、どうしたのよ？ こんな時間に」

聞きながらお尻一つ分ずれる美波。明久はその意味を汲んで美波の隣に腰を下ろす。

「美波こそどうしたのさ？ こんなところで。眠れないの？」

明久にそう聞かれて、美波は顔を曇らせる。

それを見た明久は、軽く目を閉じながら言葉を続けた。

「……もしかして、盗撮騒ぎのこと？」

そう言われ、美波は体を震わせた。

「……うん。カメラとマイクを見つけたの、ウチだから……」

「そうだったんだ……。まあ、疑われても仕方ないよね。僕らは騒ぎばかり起こしてるし」

そう言って、苦笑いする明久。その手に、少し小さな美波の手が重なる。

「……アキ、ゴメンね？　ウチ、アキがやってないって、言えなかった。クラスみんなが無実だって信じてあげられなかった。ひばりや瑞希はみんなを、アキを信じていたのに……ウチ、最低だ……」
俯いたその双眸から、光る宝石が落ちていく。

「……ねえ、美波。上を見てごらんよ。星が綺麗だよ？」
「え？」

明久の言葉に驚き顔を上げると、彼は空を見ていた。
つられるように上を見れば、澄んだ空気の向こうに、満天の星空が見えた。

「……わぁ」

思わず声を上げる美波。

「……ねえ美波。僕らが疑われたのは、きっと、僕達に、何か非があるんだよ。だから、そんなに自分を攻めないで？」

「！　ち、違うわ！　アキ達は悪くない！　ウチがアキ達を信じられなかったから……」

「違わないよ。僕らが信じるに足るなら、こんな騒動は起きなかったんだ。だから、美波に約束するよ。美波が胸を張って信じられる僕になってみせるって」

「アキ……っ！」

美波は様々な感情がない交ぜになったような顔になり、涙を溢れさせる。

「わわ、泣かないでよ！」

「うん……うん……」

頷きながらも涙が止まらない美波。明久はポケットからハンカチを取り出して、涙を拭ってやる。

「うん、ありがとう、アキ。ウチもアキを信じたい。ううん、信じるわ」

そう言って、柔らかく笑う美波。

「ありがとう美波。ふふっ」

「なに？　いきなり変な笑い方して……」

礼を言う明久が、不意に笑いだしたことにかを訊ねる美波。

明久は、しまったとばかりに口を押さえる。

「なあに？ 何で笑ったのよ？ ウチ、そんな変な顔をした？」

「い、いや違うよ。その、バスの中でのことを思い出しちゃって…」

「？」

何のことが分からず、首を傾げる美波。明久は笑顔のまま話を続ける。

「バスの中で、心理テストをやったじゃない？ それで、最初に出してもらった色の問題で、美波が緑って話したよね」

「う、うん」

「なんで、美波が緑色のイメージなのか、分かる？」

明久に聞かれて美波は眉根を寄せた。心理テストの答えとしては‘友達’ではあるが、明久にはその答えは見られていないはず。ならば、明久の問いは、明久自身が美波に対してイメージしているものかもしれない。

「え……なんだろう？ わかんない……」

考えを巡らせても答えは見つからない。そんな美波を見て、明久は、イタズラっぽく笑う。

「ぶつぶー。はい、時間切れ」

「ええ……！？」

明久からタイムアップを告げられ声を上げる美波。

「答えは……これだよ」

言いながら、自分の目を指差す明久。それを見て、美波も自分の目を指差す。

「……これって？ 目？ ウチの？」

「うん。美波の目、翠色で綺麗なんだよね。緑って聞いたとき、真っ先にそれが思い浮かんでさ。それで翠色のイメージってわけ」

わかった？ と聞きながら笑う明久。

「！？」

それを見た瞬間。美波の心臓が、飛び出すのではないかと思うほど跳ねた。

「そろそろ戻ろうよ。まだ夜は寒いし、見回りの先生に見つかったら面倒だしね」

そう言って立ち上がりながら美波へ手を差し出す明久。

「……う、うん」

美波は、自分に向けられた笑顔に、鼓動が強くなるのを感じながらその手を取った。

その手の温もりに、頬が熱くなるのを感じながら、美波は明久について歩いた。

それから少しして、美波は、本日寝泊まりしているAクラスの部屋まで明久に送って貰っていた。

「じゃあ、また、朝にね。お休み、美波」

「う、うん。おやすみなさい、アキ」

扉の前で別れ、明久の背中が見えなくなるまで立ちすくんでいた美波。彼の背中が見えなくなると同時に、胸を抑え、自らに言い聞かせるように呟く。

「……どうしよう。ウチ、どうしようもないくらい好きになっちゃったかも……」

口に出した言葉を確認し、肌を紅に染めあげる美波。

そのまま部屋に飛び込み、布団に潜り込んで頭まで被ってしまう。今日は眠れそうになかった。

『結局、濡れ衣を着せることはかないませんでしたわね。どうするんですの？』

『ククッ。いいのさ、それは失敗しても』

『……はあ?!』

『盗撮犯に仕立て上げられなくても、目的は達せられたということ』

さ

『どういことです?』

『つまり、Fの連中に疑いが向けば良いのさ』

『しかし、犯人には仕立て上げられなかったではありませんか』

『ああ。犯人に仕立て上げられれば、あいつら自身が行動したろうが、その目は無くなった。だが、そんなのを不特定多数の女子が納得すると思うか?』

『……なるほど。一度疑われていますからね。女子全員の疑念を即座にはらうことなど不可能』

『そういことだ。少なくともこの合宿中は疑われ続けるだろう。そこで次の一手だ』

『何を仕掛けますの?』

『もう仕掛けは済んでるさ。あとは高みの見物としゃれ込ませて貰うさ』

『なら、私も紛れるとしましょうか』

『賢明だな。動きすぎればボロが出る』

『では、合宿中の接触はここまでとしましょう』

『ああ。次は敵味方かもしれんがな』

『……ふん』

第五十六問（後書き）

第五十六問、いかがでしたでしょうか？

納得がいかない方もおられるかもしれませんが、これが本作の主人公たちの選んだことです。

みなさんはどう思われましたか？

そして、明久は格好を着けすぎたかも……（苦笑）

まあ、『バカひば』の明久って事で勘弁して下さい。

それでは、次回もよろしく願いしますね♪

第五十七問（前書き）

第五十七問です♪ お話的にはあまり進んではいませんが。
ともあれ、読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第五十七問

「……雄二、一緒に勉強できて嬉しい」

「待て、翔子。さも当然のように俺の膝の上に座ろうとするな。クラスの奴らの視線だけで焼死しかねん」

「後、あたしを抱っこしようとしなくてよっ?!」

合宿二日目。朝からAクラスとの合同授業となったFクラス。

授業前には、美波がクラスみんなを前にして謝罪し、頭を下げるというひと幕はあったものの、わりあいと落ち着いて勉強に取り組んでいる。

合同授業と言うものの、授業の体裁はとっておらず、ひたすら配られたプリントなどに取り組むだけだが、教科書を見ても良いし、周囲の生徒や監督の教員に質問しても良いことになっており、なかば自習の形となっている。

そんな中、絹糸のような美しい黒髪の、Aクラス代表、霧島翔子は、逆立った赤毛と引き締まった筋肉の肉体を持つ幼なじみ、Fクラス代表の坂本雄二の膝上を、猛禽類のような目で狙っていた。ついでに近くにいた、Fクラスの小さな少女、支倉ひばりを抱っこすることも狙っている。しかし、二兎を追うもの一兎を獲ず。

雄二に構えばひばりが逃げ、ひばりを追えば雄二が逃げるを繰り返され、涙目になっていた。

「……………」

恨みがましく翔子に見つめられるひばりと雄二。

「そ、そんな顔されても……」

「わかった。膝上は無しだが、隣に座るくらいなら……」

「はあ……じゃあ、あたしもそれで……」

根負けした雄二が妥協案を出し、ひばりがそれに乗っかる。

すると翔子は、それまで周囲に纏っていた雨雲が晴れたかのように表情を輝かせる。

「……嬉しい。雄二はこっち。ひばりはこっち」

普段物静かな雰囲気の彼女からは、考えられないほど興奮気味に二人を席へと座らせる。

「……すまん、支倉」

沈痛そうにひばりへと声をかける雄二。それに対して、ひばりは苦笑いしてみせる。

「ま、まあ、あたしも煽ってる部分あるし、坂本君大変そうだからね」

「……助かる」

うんざりした風ではあるものの、それほど強く嫌がるそぶりのない雄二。彼自身気づかぬ内に、意識が少し変わってきたようだ。

ともあれ、AとFの中心人物が集まっていれば、自ずとそこへ両クラスの中核メンバーも集まり始める。

「あゝ ひばりちゃんこっちにいたんですね？ 明久君、美波ちゃん。ひばりちゃんこっちにいましたよ」

「ほんとだ。霧島さんに捕まっていたのね」

「霧島さん、僕らもお邪魔して良いかな？」

ひばりを見つけた瑞希に呼ばれ、美波と明久がやってくる。

「……構わない。みんな一緒にやればよい。それと島田」

明久に答えつつ美波に声をかける翔子。

「え？」

「……きちんと謝れて良かった。心配だったから」

「うん。霧島さんの言うとおり、みんな許してくれたわ。ありがとう、霧島さん」

美波がきちんと謝れたことを喜ぶ翔子。それに答える美波の顔には憂いはない。

そして、ひばり隣に瑞希、明久、美波の順番に座っていく。

「それにしても、何で自習なんだろう？ 授業はやらないのかな？」

着席した明久は、勉強道具を広げつつ、疑問を口にした。どうやら遠方まで出てきておいて、特別なにか変わった授業をやるわけで

もないことに疑問を感じたようだ。

これを聞いた雄二が口を開く。

「授業なんざやらねえさ」

「え？ どうしてさ、雄二」

雄二の言葉に困惑する明久。すると、今度は翔子が口を開く。

「……この合宿の目的はモチベーションの強化だから」

「つまりはFクラスはAクラスを見て『あなりたい！』。AクラスはFクラスを見て『ああはなるまい』と感じさせて、やる気を引き出すのが目的なんだよん」

翔子の言葉を引き継ぎながら顔を覗かせるのは、金髪碧眼の少女、クリスティーナ・ウエストロード。

「おねーさんも混ぜとくりん」

ニコニコ笑いながらそう言うてくる彼女からは昨日の激昂ぶりはうかがえない。

「……構わない。歓迎する」

周りを見回せば、いくつかのグループに分かれており、Aクラス、Fクラスの区別無くグループが組まれているようだ。

寝ているのか起きているのか不明な公園日和や無表情な桜間片菜。Fの来島アキと親交を結んだらしい神薙御鳥などはFの男子相手でも気にした風でもなくにこやかに質問に答えたりしている。

先日の盗撮騒ぎに対しても、Aクラスは静観を決め込んでおり、比較的冷静に状況を見極めていたのだ。そこは流石Aクラスと言っべきだろう。

「あれ？ 代表ここにいたんだ。なら、ボクもここにしようかな？」
不意に声が聞こえてきて、明久の正面の席に、ボーイッシュな黄緑色の髪の少女が着席し、勉強道具を広げ始めた。

「あ、愛子ちゃんだ」

「おひさ、ひばりちゃん。プール以来かな？」

「君は確か、工藤さんだっけ？」

にこやかに挨拶を交わすひばりと愛子。それをみながら明久は記

憶の糸をたぐり寄せていた。

「吉井君だったよね？ 改めまして、工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞。スリーサイズは上から78、56、79。特技はパンチラで、好きなものはシュークリームって感じかな♪」

軽く自己紹介する愛子。その中に爆弾が潜んでいることに、気づかない者はいなかった。

「えええっ?! それが特技なのっ?!」

思わず声を上げる明久。それをみた愛子が面白そうに笑う。

「なーに? 疑ってるの? なんなら披露しようか?」

イタズラっぽく笑いながら、スカートの端を摘んで立ち上がり愛子。

その様子に、明久は一瞬釘付けとなるが、突然視界が暗くなる。

両隣の恋する乙女の手の手のひらによって、視界を塞がれたからだ。

「アキ、見ちゃダメよ」

「そうです。そんなに見たければ、後で私を見せてあげますから」

「ウ、ウチだって!」

明久に見えないよう警告する美波。その反対側で瑞希は大胆発言を飛ばし、美波も負けじと同調する。

その様子を見てため息をつくのはひばりである。

「はあ、なにやってるのよ……」

そして反対側に視線を転ずると。

「バ、バカ何をやってるんだお前はっ?!」

「……雄二が見て良いのは、私のパンツだけ」

「だからって、こんな場所で堂々と見せようとするなっ!」

などと言いつつ、自分のスカートをたくし上げようとする翔子と、それを阻止しようとする雄二の争いが視界に入る。

もはやツツコミを入れる気力も沸かない。

「……………工藤愛子に騙されないように」

不意に割り込んだ声に皆が顔を上げる。明久は目を塞がれたままだった。

その声の主は、小柄な体躯に気配の薄さと鋭さを纏った、寡黙な性識者、ムツツリーニこと土屋康太だ。

「その声はムツツリーニ？　ずいぶんと冷静な声だね。僕なんて、見えない分余計にドキドキしているくらいだから、てっきり鼻血の噴射音が聞こえてくるかと思ってたよ」

ちよつとしたことからでも、無限の妄想力を発揮し、鼻血の海に沈むことなど造作の無い彼が、こんなえっちなネタに反応していないことに、明久は疑問を投げかける。

すると康太は、至極冷静な調子で返してきた。

「……………ヤツは、スパッツを穿いている……………！」

「な、なんだつてーっ?!」

康太の指摘した事実、明久は落雷をバックに背負いながら驚愕していた。目は塞がれているが。

「あははは、バレちゃっふんキヤアツ?!」

康太にバラされた愛子が笑いながらスカートから指を放した瞬間、それが全開になるほどまくり上げられ、スパッツに包まれた腰回りが露わになる。

いつの間にやらしゃがみこんだまま愛子の後ろに回り込んでいた金髪少女の仕業だ。

「おー。ほんとだよん♪　スパッツ穿いてるねい♪」

へらへら笑いながら愛子のスカートを持ち上げているクリスマスに一同目を丸くする。

次の瞬間、スカートを、両手で前から押さえ込んでしゃがみ込む愛子。その顔には先ほどまでの余裕は無く、リンゴも裸足で逃げ出すほど真っ赤だ。

「な、な、なにすんのさっ！　は、は、恥ずかしいじゃないか?!」

真っ赤になつてクリスマスに抗議する愛子。しかし、そこで皆一様に違和感を覚える。

「ねえ愛子ちゃん、スパッツだから見られても平気なんじゃないの?」

皆を代表するようにひばりが訊ねる。すると愛子はあからさまに動揺した。

「そ、それは……」

「スパッツ直穿きだからにやあゝ」

恥ずかしがって答えられない愛子に替わって、クリスがさらりと答えてしまう。

愛子は羞恥のあまりダークチェリー並みに赤黒くなって、金魚のように口をパクパクさせるばかりだ。

「……………なん……………だと……………（ボタボタボタ）」

クリスの言葉を聞いた康太は、両の目を見開き、鼻血を垂らしていく。

「な、ななな、なっ?! 何でバラすのさ」

「うむん、面白いからかなん」

「ボクは面白くないよっ?!」

思わず声が大きくなる愛子。

『はい、その人たち。騒いでいないで自習を続けなさい』

「は、はい! 済みません……………」

監督役の教師に注意されて、頭を下げる愛子。その隣でクリスが含み笑いをしている。

「もう、怒られちゃったじゃないか……………」

「ごめんねい? あいポン」

悪びれた様子もなく軽い調子で謝るクリス。

それを聞いて愛子は嘆息しながら小型の機械を取り出す。それを目にしたひばりが、首を傾げながら愛子に訊ねる。

「ん? それなに? 愛子ちゃん」

「これ? 小型録音機だよ。授業を録音しておいて、後から復習するときに使っんだよ」

ひばりの質問に答えて笑う愛子。彼女もAクラスである以上、勉

強にも一工夫必要なのであろう。
「あと、こんな風にも使えるよ」
言いながら機械を操作する愛子。

ピッ 《工藤さん》 《僕》 《ドキドキしてる》 《やらない？》

「わわっ?! 僕そんなこと言っていないよっ?!」

「ね? 面白い……」 「『でしょ? でもボク恥ずかしがり屋だから、こんな風にイタズラ混じりじゃないと普通に話せないんだよ。ごめんね? 吉井君』」

「え? う、うん」

愛子にそう言われて頷く明久。

それと同時に、呆気に取られていた愛子が復帰した。

「って! ボクそんな事言っただけ、いけど、寂しがり屋なのはほんとなんだ。ぐすん。ねえ、ボクと友達になってくれないかな?」 「ちがっ」

「工藤さんって寂しがり屋なんだね。いいよ、僕たちで良ければ友達になろうよ」

焦る愛子を後目に、明久がにこやかに言う。

「ふえっ?! ち、ちがっ?! ボクはそんな事言っただけ、嬉しいな」 仲良くしてね? 吉井君、姫路さん、島田さん」 「ってちがーうっ!」

訳も分らず、うきーっと両手を振り上げる愛子。目はぐるぐるで混乱中なのが窺える。

「…… ひばり、そろそろ勘弁して上げてほしい」

「『そうだね。あんまりやり過ぎても良くないしね』」

翔子に言われて、ひばりは口元を動かすことなく頷いた。

「ボ、ボクの声?!」

聞こえてきた声に驚く愛子。

「『変な台詞をねつ造されたらイヤだって分かった？ 愛子ちゃん』」

「ひ、ひばりちゃんがボクの声で喋ってるっ?!」

さらに仰天し、目を剥く愛子。

「『まったく、録音したアキくんの声で、イタズラしないでよね?』」

「す、すごい……完全にボクの声だよ……」

「ひばりんの声真似は世界レベルだろうからねい」

自分の声で喋るひばりに注意されつつも、驚きを隠せない愛子。
その横で、クリスが笑いながら補足してくる。

「『もう、ちゃんと分かったの？ 愛子ちゃん』」

「……ごめんなさい」

「『分かればよろしい。』まったく、愛子ちゃんは変なイタズラして」

「あ、あははは。ほんとゴメンね？ ひばりちゃんに吉井君。それにしてもすごいね？ ひばりちゃんは。こんな録音ものなんかじゃ足元にも及ばないよ」

両手を合わせて謝りつつも感心する愛子。皆から軽く笑みがこぼれ、和やかな空気が流れる。

と、そこへ一つの人影が近づいてきた。

「坂本、少し話があるんだが、いいか？」

雄二に声をかけてきたのは、同じFクラスの須川亮。その目には真剣な光が宿っていた。

それを見た雄二は鋭く目を細める。

「……わかった。向こうで話そう。済まないな翔子」

「……良い」

席を立ちながら翔子に軽く謝る雄二。それを見た翔子は、怒ることなく頷き、見送った。

「何の話だろうね？」

同じく見送ったひばりが漏らす。しかし、翔子は首を軽く振った。

「……わからない。けど、恐らくとても大事な話」

「うん。雰囲気では感じられるけど……」

翔子の返答に、ひばりは不安そうに頷いた。

「なに？ 覗きだと？」

亮の話を聞いて、雄二は聞き返してしまう。

「ああ、それもFクラスが主導で動いているって話になってるらしい」

亮も困惑気味に話す。トイレで用を足し終えたところで他のクラス男子に捕まり、いつ決行するのか聞かれたらしい。

「坂本の方ではそういう動きはしていないんだろ？」

「当たり前だ。他の連中は？」

雄二は亮の目を鋭く見つめる。

が、亮は肩をすくめるばかりだ。

「知らんそうだ。どういことなんだ？ 坂本」

「……チ。そういうことか。俺たちはハメられたかも知れん」舌打ちしながら呟く雄二。亮はそれを聞きとがめて眉を跳ねさせる。

「なんだと？」

「ともかく情報が欲しいな。過剰労働で悪いが、ムツツリー二に頼むとするか」

考え込みながら歩き出す雄二。亮は軽く嘆息しながらその後を追った。

第五十七問（後書き）

第五十七問、いかがでしたでしょうか？

Fクラスの周囲で、怪しい動きが見られるようですが、果たして？
次回もよろしく願いしますね♪

第五十八問（前書き）

第五十八問、更新しました。

間が空いた上に動きもほとんどありませんが、楽しんで読んでいただければ幸いです♪

第五十八問

「……………以上がすぐ入手できた情報」

「そうか。すまなかつたなムツツリー二。急な依頼で」

「……………構わない。今の状況は、俺にとっても好ましくない」

「違ういな」

割り当てられた旅館の一室で話し込む、長身で引き締まった体つき、赤毛の少年、坂本雄二と、幾分か小柄ながら、気配の薄さと鋭さを兼ね備えた少年、ムツツリー二こと土屋康太。

Aクラスとの合同授業の時に聞いた『Fクラスによる覗き計画』。

雄二は、それに関する情報の収集を康太に頼んでいたのだが、得られた情報は、どれも、Fクラスにとって芳しくないものばかりだ。

「しかし、こうまで情報で包囲されるとはな……………」

もたらされた情報の内容に、顔をしかめる雄二。

康太が入手した情報はこうだ。

・ Fクラスが女子風呂の覗きを計画しているらしい。
・ 覗きは大規模なもので、他のクラスを巻き込もうとしているらしい。

・ Fクラスが覗きをするのは、盗撮犯にされた報復らしい。

・ 覗きの計画は、前々から進められており、準備は万端らしい。

・ すでに覗きに行つて良い思いをしたらしい。

・ 女子にも協力者がいるらしい。

・ というか、この状況で覗かないなんて、ホモなんじゃ？

などなど、様々な情報がある。中には矛盾している情報も少なからずあり、噂の拡散具合がよく分かる。

と、部屋の戸が開いて明久達が入室してきた。

「雄二、みんなを連れてきたよ」

整った顔立ちながら、どこかネジを一本締め忘れたかのような緩

い雰囲気の少年、吉井明久を先頭に、数人の男女が入ってくる。

小柄な体躯にボリウムのあるポニーテールの少女、支倉ひばり。世界の性別に喧嘩を売っている、美少女の少年、木下秀吉。

金髪碧眼の少女、クリスティナ・ウエストロード。

百八十を越える体躯に、筋肉の鎧を纏った巨漢の少年、前田俊夫。

赤い髪のパニーテールがトレードマークの帰国子女、島田美波。

浅黒い肌に、頬の十字傷が特徴的な土佐弁の少年高杉総司。

ふわふわした綿飴のようなピンクブロンドに、優しい顔の少女、

姫路瑞希。

刈り上げた髪と、小さめの目が特徴的な少年、須川亮。

Fクラスの主たるメンバーの八人の少年少女たちだ。

「よく来てくれた。と、加藤と来島はどうした？」

軽い笑顔を浮かべて招き入れた雄二は、二人ほど足りないことをそのメンツに訊ねる。

「加藤君は、別のクラスの美術部の人に話を聞きに言っただけだよ。後から参加するって言っていた」

雄二に訊ねられ、明久が口を開く。そしてその横から顔を覗かせたひばりが言葉を継いだ。

「来島さんはこの旅館に設置された召喚システムのメンテナンスタツて。今日中には終わらせるって言ってたよ」

「そうか。加藤はともかく、来島の知恵は借りたかったんだが、仕方がない。現状で入手済みの情報を伝えるからよく聞いてくれ」

そうして伝えられる噂の数々。それを聞いて一同呆然となる。

「どうしてこんな事になってるの……？」

「……どうやら俺たちをハメたい奴がいるようだ」

悲しそうにひばりが呟くと、雄二が答える。

「そ、そんな……」

その言葉に二の句が継がないひばり。

その様子を見て、美波がうつむき、明久が顔を上げる。

「いったい誰がっ?!」

その声を聞きつつ、雄二が瞑目する。

「……犯人は分らん。が、複数犯の可能性が高い。噂の伝搬が早すぎるからな。今日あった合同授業も大きな要因ではあるが……」

「それはどういう事ぜよ？」

雄二の言葉に、総司が首を傾げつつ訊ねる。すると雄二は片目だけ開いて彼を見る。

「BとD、CとEの生徒がそれぞれ同じ教室に集まっているんだ。噂を一気に広めるには都合が良い。それぞれのクラスにひとりふたり伝手があればあつというまだろう」

雄二の説明に、なるほどと頷く総司。

そこでひばりが口を開く。

「でも、Fが主導なんて話、信じるわけ……」

「そこで昨日の盗撮騒動だ。あれの犯人はまだ見つかっていない。まだ、俺たちへの疑いは晴れていないんだ」

「そんな……先生たちだってちゃんと話を聞いてくれて、根拠は無いって……」

「確かにそうは言っていたが、その言葉だけで疑いが晴れるほど甘くはないさ。潜在的に俺たちを疑っている奴は多いだろう」

ひばりの言葉を雄二が否定していく。

「ウ、ウチのせい……ウチがあんなモノ見つけたから……」

静かに聞いていた美波が突然そんなことを言い出す。

「そんなことありませんよ……。見つからなかったらみなさんが恥ずかしい思いをしたかも知れないんですし……」

泣きそうな美波を瑞希が慰める。

「……妙だねい」

ふと、クリスが呟いた。

「クリスもそう思うか」

彼女の呟きを聞いて、雄二がそちらに顔を向けた。

「妙って、なにが？」

「どういう事じゃ？」

意味が掴めない者達を代表して、明久と秀吉が訊ねる。

それを聞いたクリスは腕を組みながら答えた。

「カメラとマイクが簡単に見つかりすぎだよん。そんな着替えをひっくり返したくらいで転がり出てくるような所に仕掛けるなんて思えないよん」

「……………恐らくフェイク。もう一、二台仕掛けられているかも知れない」

クリスの推測に、康太が頷く。それを聞いて俊夫が嘆息する。

「だとすれば、第一発見者の島田は騒ぎを起こす為に利用されたよなものだな」

そう続けられた言葉に、美波は崩れ落ちそうになる。

「そ、そんな……………」

「み、美波ちゃんっ?」

あわてて駆け寄るひばり。

「で、どうするんだ? 坂本」

そう訊ねるのは須川亮。

「迂闊には動けん。妙な動きを見せれば、疑いが深まるだろうしな」

「しかし、それでは……………」

疑いを晴らせない。そう続けようとして言葉を飲み込む亮。

「とにかく、クラスの奴らに変な動きをしないことと、妙な誘いに乗らないことを徹底させてくれ」

「……………わかった」

雄二の指示に頷く亮。と、そのとき、部屋の扉がノックされた。

「誰だ?」

『僕だよ、代表。加藤武だ』

「加藤か。入ってくれ」

遅れてきた加藤が部屋に入ると、八人部屋でも狭く感じられる。

「待たせたね。情報も仕入れてきたから、勘弁して欲しいけどね」

糸目の少年は、柔和な笑みを浮かべながら雄二の近くへ移動する。
「情報? どんなヤツだ?」

武の言葉に、雄二が目を鋭く細める。

「女子でも噂になってるみたいだ。『Fクラスの覗き計画』」

「……なんだと？」

「うそ、聞いてないよ?!」

武からの情報に雄二は考え込み、ひばりが声を上げる。

「今の所は、BクラスとDクラス内の噂で留まっているみたいだよ」

「……その情報は、信頼できるのか？」

確認するように訊ねる雄二へ、武は力強く頷いてみせる。

「Bクラスに所属している、美術部の女子部員の子だよ。信頼できる子だ。保証する」

それを聞いて雄二は考え込む。

「そうか。しかしそうなるに厳しいな。数々の噂で牽制されて身動きが取れん。妙な動きを見せたら、またぞろ疑われかねんしな。まあ、ほとぼりが冷めるまで静観するのが良策ではあるが……」

独り言を呟くように考察していく雄二。それが耳に入ったか、明久が声を上げる。

「でも、そんな待ちの姿勢なんて僕たちらしくないよ！ なんとか犯人を捕まえられないのっ?!」

「落ち着け。まだ犯人に繋がる手がかりが少な……なんだ？ ムツツリー」

興奮気味の明久をなだめようとした雄二の肩を、康太がつつく。

「………ひとつ言い忘れていたことがある。見つけたカメラとマイク、明久と姫路の脅迫犯のものと同じ」

「なんだと？ すると、一連の事件は繋がりのあるのか……？ だとすれば……脅迫犯を捕まえれば、この騒ぎの大元を押さえられるか？」

それを聞きとがめた総司が首を傾げる。

「脅迫？ 何の話ぜよ？」

「何かあったのかい？」

「話してくれないか？ 坂本」

総司、武、亮の三人から訊ねられ、雄二は苦虫を噛み潰したような顔になる。

「……くそ、口が滑った……すまん明久、姫路」

「まあ、良いよ」

「私も構いません」

謝る雄二に、明久と瑞希が苦笑いしてみせる。

それを契機にして、おおざっぱに事情を話していく雄二。

「なるほど、そがぁ事になっちゃったが」

「やれやれ、くだらないことに労力を費やす人間も居たものだね」

「しかし、なんで姫路もなんだ？」

総司は眉を寄せて不快げになり、武は長嘆息する。

そして亮が疑問を呈すると雄二は軽く頭を振った。

「正直解らん。明久だけなら目当ての女子と仲良くしているのが目障りみたいな理由も成り立つんだが……」

「目的が見えないねい」

クリスも頭に手を宛てながら息を吐く。と、ひばりが口を開く。

「……同じ、なんじゃないかな？」

「同じ……？」

「うん。アキくんが仲良くしているのが気に入らないっていうのは脅迫状の内容から解るよね？ で、同じ人からみっちゃんに脅迫が行ったなら、その子とみっちゃんが仲が良いことも気に入らない」

自分でも確認するように言うひばり。それを聞いて雄二は顎をさする。

「……なるほど。筋は通るか。なら明久と姫路の共通の友人で女生徒。支倉に島田、クリス、来島辺りが狙いか？」

「如月さんは？」

明久は雄二の挙げた名前に、自分と瑞希の共通の友人である如月琴代を挙げるが、雄二は静かに首を振る。

「あのデカ子には牧野が居るからな。まずそっちに脅迫がいくだろ」
「そっか。慎吾も何も言ってなかったしね」

「ほかに心当たりは無いか？ 明久、姫路」

雄二に聞かれて顔を見合わせる二人。

「うーん、僕と姫路さんってクラスが違うことが多いから、共通の友人が少ないんだよね」

「そうですね。中学の時は二年生の時に同じクラスでしたけど、それ以外ではこのFクラスぐらいですし……」

思案する二人だが、特に該当しそうな相手はいない。

「優子ちゃんともだいぶ打ち解けてはいるけど……」

「その線は少ないだろう。クラスも違うことだしな。となれば先に挙げた四人。いや、明久はともかく、姫路は来島との接点は少なかったか？」

ターゲットとなった人物を絞り込む過程で、瑞希に訊ねる雄二。瑞希はそれに頷いて口を開く。

「そうですね。あまりお話した事はないんです」

「となれば、支倉、島田、クリスか？ この三人に絡みそうな女生徒か……」

雄二の言葉に、一同考え込む。と、明久が顔を上げた。

「あ……」

「解ったかも……」

「可能性は高そうじゃのう……」

続いてひばりが微妙そうな表情で顔を上げ、秀吉も相づちを打つ。それを契機として次々に閃いたらしく、皆の視線が一人に集まっていく。

「な、なに？ みんなどうしたの？」

一同の注目を一身に浴びた少女、島田美波は気圧されるように、若干仰け反る。

「だってなあ……」

「まあ、あの執着は怨念じみていたしな……」

「うむん。かなり黒に近いと思うよん……」

美波に聞き返され、亮が歯切れ悪く答える。俊夫もその人物を苦

笑いを浮かべた。

「えええっ?! どういうことよクリス?!」

その反応に周りを見回した美波は、クリスへ声をかけた。

クリスは少しため息を吐いてから口を開く。

「証拠はまだ無いから、絶対とは言えないけどない。いつもなみなみ突撃してくる子がいるよねい」

「ま、まさか……」

クリスの言葉が指す人物に思い当たった美波は二の句が継げない。そんな彼女を見やりながら雄二はその言葉を口にする。

「容疑者の一人はDクラスの‘清水美春’かもしれないって事だ」

その日、数人の男子生徒による、女子風呂の覗きが敢行された。

その男子生徒たちは、待機していた教師等によって即座に制圧され、覗きそのものは失敗に終わった。

だが、その様子を見ていたらしい女生徒から話が広まり、多くの女子が男子に疑惑の目を向けるようになった。

その少年は、覗きが失敗する様を見ていた。

「……やっぱり鉄人が最大のネックだな。数を揃えればほかの教師は突破できそうだが……」

鎮圧されていく覗き犯達を眺めながら、顎に手を宛てて考える。

「Fクラス……特に観察処分者を引っ張り込めなかったのが痛いかな……」

その目がずっと鋭く細まる。

「根本のヤツの口車に乗せられたようなもんだが、面白い物も手に入ったしな。せいぜい桃源郷を拝ませてもらおうとするかな……」

そう呟いて、イヤラしい笑みを浮かべた少年の腕には、鈍い金色に輝く腕輪が填められていた。

第五十八問（後書き）

第五十八問、いかがでしたでしょうか？

集めた情報から犯人を導き出す辺りは、無理矢理感があったかな？

そして、犯人側らしき少年が一人、登場しました。

果たして彼の正体は？　そして、覗き騒動はどうなるのか？

次回もよろしく願いますね♪

第五十九問（前書き）

第五十九問、更新です♪
読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第五十九問

……暗い、静寂の中に立つ、男女。互いの顔を眺めながら会話を交わしていく。

『……本当にそいつを使えば、オレの欲望《望み》が叶うのか？』

男は女に疑問を投げかける。

しかし、女の表情は小揺るぎもない。

『……信じる信じないはあなた次第』

その一瞬視線が交錯する。

が、男は鼻を鳴らして視線を外した。

『……ふん、良さ。とりあえず乗ってやるよ。その、黄昏の腕輪、とやらを渡せ』

『……これ』

右手を差し出す男へ、その腕輪を手渡す女。その目が、妖しく金色に輝く。

一瞬、それに目を奪われ、呆ける男。

だが、刹那の時、その輝きが収まると、何事もなかったかのように腕輪を手にしてイヤらしい笑みを浮かべる。そのままそれを左腕にはめると、強い高揚感に満たされ、恍惚とした顔になる。

『くふふ……必ず手に入れてやる。オレの自由にできる女を……桃源郷で、じっくり品定めしてやるぜ……』

そう呟きながら、男は女に見向きもしないで立ち去る。

彼が居なくなってから、しばらく彼女はその場に佇んでいた。と、その後ろに気配が現れる。

『……良かったのですか？ あの腕輪は本来、あなたに渡されるはずのもの』

『なに、構わないさ。これも先行投資みたいなもんだ』

その気配の主である、新たな男は下卑た笑みを浮かべながら返す。

『ま、フィールドの展開のほうは試しはしたが、召喚の方はまだする気にはならん。竹原の様子を見た限りじゃ召喚獣の変化にとまなつて、召喚者にも影響出るみたいだからな』

『……用心深いことです。根本恭二』

おどけるような男を、女は冷たく見据える。

『くく。試召戦争じゃ、警戒を怠って罠にハマられたからな。用心もするさ。なんにしろ、後は後藤の奴が勝手にやってくれるわけだ』

『そういう暗示です。計画も彼自身が考えたと思いこんでいることでしょう』

『……便利なもんだ。俺まで操られちゃあたまらんがな』

女の言葉に恭二は大きく肩をすくめてみせる。

『契約した以上、あなたへの協力は惜しみませんよ』

『OK。いまは信じるでしょう。さて、後は後藤がどこまで腕輪を使いこなすか。まあ、それでどんな影響が出るかも観察させてもらうか……』

そう言いつつきびすを返す恭二。

それを見送ることなく、白い女、桜間片菜はその場に佇む。

『……はい。順調です。‘黄昏の腕輪’のデータも多く収集できそうです。はい。はい。マークすべきは二年Fクラス……支倉ひばり……分かりました、姉さん』

その呟くような独り言が闇にとけ込むように、片菜の気配も消えていった。

目の前に広がるのは少女の寝顔。いつもは快活でイタズラ好きそうな顔だが、今は穏やかで愛らしい。

「……う……ん」

その特徴的な黄緑色のショートヘアをわずかに揺らし、工藤愛子の唇から息が漏れる。

「……………ん」

目の前のそれに、土屋康太は喉を鳴らしてしまう。

「……………違う。工藤なんて意識してない。接吻などしたくない」
自らに言い聞かせるように言いながらも、目は彼女の艶めかしい唇に釘付けとなる。

それが、なぜか近づいてくるのを感じ、鼻の奥に鉄錆の匂いが充満した瞬間。

康太は目を覚ました。

「……………夢」

その事実気づき、ホツとしたような、残念なような、複雑な気分となり、それを振り払うように寝返りをうつと。

そこには赤毛のゴリラのどアップがあった。

「……………最悪」

その衝撃の出来事に身を起こすと、無警戒な腹めがけて蹴りを放つ。

「ぐふおっ?!」

「……………起きる（怒）」

いつもはあまり感情を見せない康太が、キレ気味に言う。

と、向こうで一人の美少女な少年が目を擦りながら身を起こした。

「む……………何事じゃ?」

その美少女少年木下秀吉は、周りを見回し騒ぎの元を発見すると、小さく嘆息する。

「なんじゃ、雄二は、また、自分の布団から離れた場所で寝ておったのか」

「……………また?」

秀吉の言葉に反応し、康太が訊ねる。すると秀吉は呆れたような

顔で話し始めた。

「いや、別に大したことではないのじゃが……雄二は大層寝相が悪いようでのう。明け方にはワシの布団の中に入ってきておつての。自分の布団へ戻すのに苦労したぞい」

「……………はた迷惑」

秀吉の話を聞いた康太は、どこからともなくカメラを取り出し、雄二の顔を撮影した。

それを見て苦笑いしていた秀吉が、ふと周りを見回す。

「ん？ なにやら人数が足りないのう」

「……………？ 明久と前田がいない」

秀吉の言葉に康太も周りを見回す。

二人でキョロキョロと周りを見ていたが、秀吉が部屋の隅にあるものに気づいた。

「布団も畳んであるのう。どこへ行つたんじゃ？ あの二人は」

そう呟く秀吉の向こうで、康太が首を傾げた。

卯月高原。

数多くの自然で溢れ、観光地としても有名である。本日快晴。空気も綺麗なその地で、数人の男女が軽い運動をしていた。

「まさか、早朝トレーニングの許可が降りるなんて思わなかったよ」

「はは、言ってみるもんだ」

準備運動しながら会話を交わすのは、優しい雰囲気ながらどこかにネジを一本落としてきたかのような少年、吉井明久と、全身を筋肉繊維の鎧で覆われた大柄な少年、前田俊夫。

ほかにも運動部に所属している男女を中心に軽い基礎トレーニングをしている。

そこに付き添っているのは、保健体育の教師、大島教諭である。もっとも、彼は何か指示を出すわけではなく、単純な監督役でし

かない。

何人かで整備されたジョギングコースを走るもの。
広場で柔軟体操をするもの。

道具が無い為、本当に簡単なものしか出来ないが、それぞれまじめに取り組んでいる。

準備運動を終えて、ジョギングコースを走る二人。

と、そこへ声がかかる。

「あら？ あんた達Fクラスの……」

「ほえ？」

「ん？」

明久と俊夫、二人そろって顔を巡らすと、ソバージュの少女が追隨してきているのに気付いた。

「……えつと？」

「誰だ？」

男二人揃って、走りながら首を傾げる。

「あんた達ねえ、各クラスの代表くらい覚えて置きなさいよ。まあ良いけど。私はEクラス代表の中林宏美よ。隣のクラスなんだから覚えて置きなさいよね」

「あはは、ごめん。僕はFクラスの……」

「吉井君でしょ？ 色々有名だから知ってるわよ。で、こつちが……」

「前田俊夫だ。よろしくな中林代表」

「あー、あなたが、あの、前田俊夫なんだ」

宏美は得心がいったように苦笑いする。

「代表さん、俊夫のこと知ってるの？」

それを見た明久が宏美に訊ねる。

「中林で良いわよ、吉井君。前田君は運動部じゃ有名よ？ とんでもない身体能力だって」

「そんなこともないと思うがな」

宏美の答えに、俊夫が苦笑いしながら否定する。

「あつきた。それだけの‘もの’があつてそういう事言う?」

俊夫の答えに、宏美がジト目になる。言われた俊夫は困ったように頬を掻き、明久は苦笑いする。

そんな風に話しながらジョギングする三人。

軽く流す程度だったそれを終え、柔軟体操を始める。

「でも意外ね? 前田君はともかく、吉井君が早朝トレーニングなんて。運動好きなの?」

「うつん違うよ、中林さん。二年になつて思う処があつてね。体力作りを兼ねてやってるんだ。だからまだ二ヶ月くらいだね」

そういつて軽く笑う明久。しかし、宏美は軽く驚いた風に彼を見る。

「へえ、噂で聞いていたのとは大分違うわね。むしろ、牧野君や如月さんの言う通りつてところかな?」

「あれ? 中林さん、慎吾と如月さんを知つてるの?」

呟く宏美の声に、明久が反応する。

「あのね、代表なんだからクラスメイトの顔位は覚えてたわよ。大変だったけど」

苦笑い気味に答える宏美に、明久が伐が悪そうな顔になる。

「う。ごめん」

そう言つて謝る明久を見て、宏美が軽く吹き出した。

「フフ、本当に素直なのね? 吉井君は。あの二人が必死だった訳が分かつたわ」

「ふえ? なんのこと?」

「気にしないで? こっちの事よ。さて、私はあつちでテニス部の子と軽くメニユーをこなしてくるわ。じゃね」

不思議そうな顔の明久を誤魔化しつつ立ち去る宏美。

「なんか、気さくな感じだったね? 俊夫?」

「……下位クラスとは言え、代表は代表か」

すこし嬉しそうに俊夫へ声を掛ける明久。しかし、俊夫は少しだけ目を細めて宏美の背を見送っていた。

「……………昨日の晩、覗き騒動があったらしい」

朝食後の合同授業中。勉強道具を広げつつ、対策会議に入るＦクラス。

そこで康太が発した言葉がこれだった。

「ええっ?!」

「……………詳しく話してくれムツツリー」

明久が驚く中、そう言つて促す雄二。康太はそれに頷いて続ける。

「……………時間は昨夜20:30頃。前半組入浴中。三人の男子生徒が食堂から女子風呂へと続く階段へと突入。そのまま女子風呂へ向かったらしい」

「……………俺たちが会議している最中か」

「そんなことが起きていたなんて……………」

考え込む雄二と、ショックを受けるポニーテールの小さな少女、支倉ひばり。ほかの面々も顔を見合わせ、表情を歪める。

「で、そいつらはどうなったのかなん?」

そう訊ねるのは、金髪碧眼の少女、クリスティーナ「ウエストロード」。

「……………盗撮騒動のおかげで、教師が何人か見張りをしていて、取り押さえた」

「教師に殴りかかろうとした者も居たようで、召喚獣を使用したようです」

康太の解説に続けたのは、目の下にべったりと隈を張り付けた、長い黒髪の少女、来島アキ。

それを聞いた雄二の眉が跳ねる。

「ん? てことは教員用召喚獣は物理干渉できるのか?」

「そうです。フィードバックはありませんけど、昔は基本的に雑用は教師自身がやっていましたからね。今でも、吉井さんに頼みきれ

ないときは自分で召喚してやってらっしゃる方もおられますよ?」

「しかし、点数はどうなるのじゃ? 自分の作ったテストを受けておるのかのう?」

そう疑問を呈する秀吉。しかし、アキが首を振って否定する。

「いいえ、ほかの学年の教師が作った問題でテストするんですよ? 木下君。この学園では教員もしっかり勉強してテストを受けているんです」

これを聞いて一同感心したように声を上げる。

「参考までに申し上げますが、担当科目の点数なら500点から600点位は普通に採ってらっしゃいますよ」

「600つ?!」

アキによつて挙げられた教師の点数に、驚きを隠せない一同。

「ちなみに総合点数トップは西村先生です」

「はっ?!」

続いた台詞に呆氣にとられる。

「あの身体能力で頭も良いなんざ本気で人外だな鉄人は」

「トップは絶対高橋先生だと思っていたよ、僕」

「人は見かけによらぬと言うことかのう」

「……………理不尽」

「問題解く速度速そうだもんね西村先生」

「……それだっ!?!」

ひばりの漏らした一言に雄二、明久、秀吉、康太が反応する。

「でも、それなら突破できそうにないですよね?」

そう言ってくるのは、ふわふわのピンクブロードに優しげな顔の少女姫路瑞希。その隣で、クリスも頷いている。

「だねい。生身で召喚獣と渡り合えそうなのは、にしむーやとっしー位じゃないかなん?」

そう言うクリスに雄二も頷く。

「まあ、確かにそうだが、数を集めればいくら点数が高くて裁ききれんだろう」

が、対抗手段も模索しているようだ。それを聞いたひばりが顔を上げる。

「じゃあもしかして……」

「覗き魔が諦めてなければ、数を増やしてくるだろうな。単純だが効果的だ。そういうえば、例の件は確認できたか？」

ふと思いついたように女性陣に訊ねる雄二。

その言葉に女五人が顔を見合わせる。

「とりあえず手分けしてチェックしたけど、トータル70人以上居る女子のお尻を完全にチェックするのは難しいよ。部屋備え付けのシャワーで済ましちゃう子もいるし。後、ABCクラスに関してはさつき頼んでいた翔子ちゃんと優子ちゃんに聞いたけど半分ちよつと確認して、居なかったみたい」

代表して答えるのはひばりだ。続けて、ポニテの帰国子女、島田美波が口を開く。

「それから美春だけど、昨日ははち合わせなかったわ。だから確認は出来てないわ……」

少し悲しそうな、安心したような、複雑な表情。

「ねえ坂本。ほんとに美春なのかしら？　ウチには信じられない。

ううん、信じたくない……」

これだけ真つ黒に見えそうな証拠を見てなお、美波は美春を庇いたいようだった。

「なみなみ、どうしてみはるんを庇うのかなん？　いつも迷惑してそうに見えるのに、なんで彼女を庇おうとするのか、おねーさんにはそこが不思議だよん」

「ああ。それに今回は明久と姫路を脅迫するなんて暴挙にも出ている。庇ってやる必要なんざ無いだろう」

クリスと雄二にそう言われ、美波は辛そうに俯く。

「う……ん。そう……なんだけど……」

絞り出すように呟く。その様子に、クリスと雄二は顔を見合わせ、肩をすくめる。

「……ねえ、美波ちゃん。美波ちゃんにとって、清水さんってどんな存在なの？」

不意にひばりが、美波にそう訊ねた。

美波は、少し驚きながらも、不思議と柔らかな笑みを浮かべて口を開く。

「美春は……ウチの友達よ。ううん、日本で出来た、初めての友達で、親友なの……」

第五十九問（後書き）

第五十九問、いかがでしたでしょうか？

あまり大きな動きはないですし、いつものバトルシーンがないです
ので寂しいかもしれませんね（言ってる本人が一番寂しい）
それでは、次回もよろしく願いしますね♪

第六十問（前書き）

第六十問を更新しました。
読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第六十問

最初の印象は最悪だった。なぜなら自分が孤立する要因の一つである暴言の主だったからだ。

「アキ達は覚えてるかしら？ 去年、初日にウチの周りに集まったみんなを黙らせるために、ウチが言った言葉」

ポニーテールの帰国子女、島田美波のその言葉に、ネジ一本足りなさそうな緩い雰囲気少年、吉井明久や赤毛で精悍な坂本雄二、美少女少年木下秀吉が苦笑いを浮かべる。

「あー……あれはすごかった」

「確かに」

「衝撃的だったぞい」

「……………（コクコク）」

口々に言う三人に、気配の薄さと鋭さを持った小柄な少年、土屋康太も頷く。

「たしか……………」

『ダマリナサイブタドモ』

異口同音に聞こえた暴言に、一同はひきつり、美波も苦笑いする。「そう、それ。その日の朝通学中に、男子にしつこく絡まれていた美春が言った言葉なのよ。それでその男子が黙ってしまっていたから、静かにして欲しいときに使う言葉だって、勘違いしたのよ」

そう説明する美波に、一同顔を見合わせ苦笑い。

「そんなある日、ウチは勉強を兼ねて街に出ていたのよ。お店を身て周りながら、日本語を確認したり、実際注文してみても通じるか試したりしてね。そういえばこの時、‘ラ・ペディス’でクレープ食べたっけ。うまく注文できて、クレープもおいしかったからよく覚えてるわ。……美春の家だとは思わなかったけど……………」

少し楽しげに話していた美波が、げんなりとなつたのを見て、ポリュームのあるポニーテールの小さな少女、支倉ひばりは首を傾げる。

「そうなの？」

「ええ、最近知ったんだけどね」

ひばりに訊かれて、美波は苦笑いしながら答えた。

「まあ、そのときの事は置いておくとして、‘ラ・ペデイス’を出た後も街の中を歩いて回っていたのよ。その時、騒ぎが聞こえてきたのよ」

聞き覚えのある罵倒に、美波が首を巡らせると、大柄な男が、ドリルツインテな少女の手を取って捕まえようとしているところだった。

美波はその子が、例の男子生徒を罵倒していた少女だとすぐにわかった。

「最初は関わりたくなかったのよ。男の方は、なんだかまがまがいな雰囲気だったし」

しかし、少し気になり、ちょっと見ていたが、誰も助けようとはしない。美波はだんだんイライラしてきた。

「何で誰も助けないの？ って。だからそのとき……」

『ソノテヲハナシナサイツ！』そう叫んで美波は駆け出した。男が何事かと顔を上げた瞬間、勢いのまま相手の膝に足を掛けそのままもう一方の足の膝を突き出した。

その一撃は、寸分変わらず相手のこめかみを貫き、男は大地に伏した。

『サアニゲマシヨウ』

きれいに着地した美波は、惚けるドリルツインテの少女に手を差し出す。彼女はその頬に、薄く紅を散らしながら、ゆっくり手を持ち上げるが、その所作が余りにスローモーションだった為、美波は強引に手を取って走り出した。

どこをどう走ったのか？ 夢中だった美波にはわからなかったが、

とりあえずあの男が追ってきていないことを確認して立ち止まり、大きく息を吐いた。

『ハアハア……。ダ、ダイジョウブデシタカ……。？』

美波は、彼女と同じく息を整えている少女に声をかけた。

『は、はい……。美春は大丈夫ですわ』

『？？？ ミハル？』

『はい？ どうしましたか？』

美春の返事に、美波は意味が分からないという顔になった。

『スミマセン、‘ミハル’トハドウィウイミデスカ？』

『？ 美春は美春ですが？』

『？？？ スミマセン、ニホンゴ、マダヨクワカリマセン。‘ミハル’トハドウィウイミデスカ？』

ここ数日、吉井明久を始めとする数人と打ち解け始めていた美波は、意味が分からない単語はその場で訊くようにしていた。大抵は苦笑いしながらでも教えてくれるので、助かっているのだが。

目の前の少女は、キョトンとしてから笑い始めた。

それを見て美波は眉を寄せる。それに気づいた美春はすぐさま謝った。

『ご、ごめんなさいですわ！ あなたを笑ったものではありません。

‘ミハル’はわたくしの名前ですわ』

『アア、アナタノナマエダッタノデスカ』

『ええそうですね。っと、お礼がまだでした。わたくしは清水美春。助けていただいてありがとうございますわ』

『シミズミハルサンデスカ。ウチハ、シマダミナミデス』

美春が軽く頭を下げ、美波もそれに応える。

『本当に助かりましたわ。あの豚がしつこくって……。』

美春のその発言で、美波は嫌な記憶を思い出し、顔をひきつらせる。

『ソ、ソレジャア、ウチハコノヘンデ』

美波は、顔をひきつらせたまま立ち去ろうとする。

が。

見覚えのない風景に、血の気が引いていく。

『……………どうしました？』

立ち去ろうとした美波が足を止めたのを見て、美春は首を傾げつつ訊ねた。それに対して、美波は錆びたブリキの人形のような動きで美春に向き直って口を開く。

『ナンドモスミマセン。ココハドコデシヨウカ？』

「で、美春に案内されて迷子にならずに済んだのよ。その後も、ウチの日本語の練習に付き合ってくれたり、あっちこっち一緒に出かけたりしていたの。ウチがここまで話せるようになったのは、美春が助けてくれたからでもあるのよ。でも……………」

美波の顔が曇る。

「でも、三学期に入って振り分け試験の話題になったときに、とてもないことを言い出したのよ」

それは、同じクラスになれるかなれないかの話題。

『美波お姉さま、同じクラスになれたら良いですわね』

『そうね。でも、クラスが同じでも別々でも、ウチ達は、ずっと友達よ？ 学園を卒業しても、ずっとずーっとね』

美波にとっては、それは、大切な友人に送る言葉。いつまでも友達でいようという、最大限の親愛の言葉だった。

だが、清水美春にとっては違う。とても残酷で、絶望的な言葉。

『……………嫌です』

『え？』

俯き、呟いた美春の言葉に、美波は耳を疑う。

『美春は……………お姉さまとずっと友達なんて嫌です！』

『そ、そんな美春……………』

拒絶の言葉を投げかけられ、ショックを受ける美波。だが、続いた美春の言葉はもつとショッキングだった。

『愛してるんです!』

『は?』

目が点になる。

意味が分からない。美波はそんな表情で美春を見た。

真っ赤になり、不安そうに、しかし、どこか期待するように自分を見つめる美春。それは、恋する乙女が、勇気を振り絞って告白し、その返事を待っているかのようで……。

そこで美波は一步後ずさる。それに合わせるように美春が一步前進。

『な、なに言ってるの美春。ウチ達は友達でしょう』

『美春は友達以上になりたいのです!』

美波が二歩後退した。すかさず美春が二歩前進。

『み、美春、ウチ達は女同士よ? そんな関係には……』

『性別なんて関係ありませんっ!』

美波が四歩後退。そして美春が同じだけ前進する。

『ウ、ウチは普通に男の子が好きなんだけど……』

『それは嘘です!』

言い切られた。

美波は、えええー……とげんなりした顔になるが、美春は真剣そのもの。

そして背中が固いものに衝突する。あわてて振り向くと、壁際に追いつめられていた。

『……お姉さま♪／＼』

割合近くから聞こえた声に悪寒を感じて正面を見ると、美春の顔が迫っていた。目を瞑り、頬を赤らめ、口をすばめて唇を突き出してくる。

『ヒッ?!』

小さく悲鳴が出たが、美春は気にすることなく顔を近づけてきた。

『イ、イヤッ！！』

余りの気持ち悪さに体が反応した。

バンッ！

手にした学生鞆が美春の横面をはり倒す。

『ウ、ウチはちゃんと好きな男が居るのよ！ だから美春とそんな関係にはならないからっ！ じゃあね！』

それだけ言い放ち、脱兎の如く逃げ出す美波。

結局、美波は美春を突き放しきれなかった。おかしい事を言い出して驚いたが、日本で出来た、数少ない大事な友達だ。

とくに、日本に馴染めたのは明久と美春、二人のおかげと言っても良い。だからこそ、美波は美春を嫌いになりきれなかった。

「……ふう。ウチの話はこれでおしまい。それでね、美春はウチが説得したい。あきらかに今回はやり過ぎだからね。説得して謝らせるから……美春の事、任せて欲しいの」

お願いします。と、頭を下げる美波。

「……みんなどうかな？ 任せてみない？」

まず口を開いたのは明久だった。周りを見回して美波に任せようと訴えていく。

「そう……だね。あたしは構わないよ」

「ですね、私も美波ちゃんにお任せします」

明久に同調するのは、ひばりと、ふわふわのピンクブロンドに、優しい顔の少女、姫路瑞希。

「おねーさんは反対」

次いで出されるは反対する意見。それを出したのは金髪碧眼の少女、クリスティーナ・ウエストロード。

「そうだな。俺も反対だ」

さらにクリスに賛同するのは針金のような筋肉に覆われた、大柄な少年、前田俊夫だ。

そんな二人へ秀吉が質問していく。

「二人はなぜ反対なのじゃ？ そのところは説明して欲しいぞい」その言葉に頷くクリス。

「そうだねい。まず、なみなみがカメラを発見した際、一緒にいたのはみはるんだよねい。その後、女子を煽ったのもおそらくみはるんだよん。今回みはるんは、Fクラスを陥れるために、なみなみまで‘利用’しているよん。そんな人間が、易々と説得されるとは思えないねい」

「俺もクリスと同意見だ。加えて言うなら、すでに個人ではなく、クラス全体の問題でもあるし、今後また覗きなどが起きてこれ以上男子と女子で軋轢が生じてみる。ことは学年全体の問題にまで発展し、ひいては学園の問題にもなりうる。仮に島田が説得に成功しても、清水が謝ったくらいでおさまるとは思えん」

二人から厳しく言われて軽く落ち込む美波。雄二はその様子を見ながら思索を続ける。

「……来島はどう思う？」

不意に顔を上げ、黒髪ロングヘアで、目の下に隈を浮かべた少女に訊く雄二。アキは軽く思索しながら口を開く。

「……そうですね。まず、清水さんですが、島田さんに任せてしまっても良いでしょう」

「……それは何故？」

アキの言葉に、クリスが鋭く目を細めながら訊ねてくる。

「清水さんが主犯ではないからです」

「え？」

アキの答えに一同が驚く。

「一つずついきましょう。まず脅迫。これは、使用ツールと動機からして清水さんである可能性はかなり高いです。次いで盗撮ですが、その後の騒動まで含め、やはり清水さんがやった可能性が高いです。ですが、この後、覗きへの布石となる噂が、男子側に流れました。これはおかしいです。清水さんの男嫌いは有名ですし、美波さんが覗かれてしまう可能性を自ら作りたいとは思わないでしょう。ならばこの噂は誰が流したのか。清水さん以外の犯人となります。この人物、犯人Bとしますが、この人物もおそらくは主犯ではありません。これまでの経緯を考えても、主犯は直接的には関与せず、清水さんと犯人Bを動かし、自身が疑われないように動いています。従って、主犯を捕らえるには、清水さんが犯人B、どちらかに自供しなくてもらう必要があります。このとき、犯人Bが主犯とどの程度繋がりがあるか分かりませんが、口を割るかどうかが未知数ですので、主犯にたどり着けるかわかりません。ですが、清水さんは島田さんの説得が成功すれば、大抵のことは話していただけるでしょう。彼女が主犯をかばうメリットもないでしょうね。リスクはもちろんありますが、強引に捕まえて、口を閉ざされるよりは、主犯にたどり着ける公算は高いでしょう。もっとも、清水さんが犯人側であることが大前提ではありますから、例の火傷ですか。それが確認できないと厳しいですね」

アキの解説に、黙って聞き入る一同。そして、皆の視線が雄二に集まっていく。瞑目していた雄二はそれを受けて眼を見開いた。

「……よし、清水の件は島田に任せる。彼女が犯人側だとしたら説得するんだ」

その言葉に、美波の顔が明るくなった。

「ただし、説得を聞き入れない場合は強硬手段もやむを得ないと判断する。そこでクリス」

「はいよん」

「島田と一緒に清水に当たってくれ。ただし、暴発、やり過ぎはNGだ」

「仕方ないねい、心得たよん」

雄二の指示に、美波とクリスが大きく頷く。

「支倉、姫路、来島は引き続き火傷のチェックだ。頼むぞ」

「わかったよ」

「がんばりますね」

「……面倒ですが仕方ありませんね微力を尽くすとうしましょうか」
ひばり、瑞希、アキが頷いていく。

「よし、男子は覗きを扇動していると思われる犯人Bの特定だ。こいつは押さえて吐かせても問題ない」

雄二の言葉に、男子一同首を縦に振る。

「おし！　こんどこそ犯人を捕まえて汚名をそそぐぞ！」

『おう！』

異口同音に唱和し、一致団結する一同。

だが。

しかし。

夕食後、食事が終了した後、Fクラスは全員が三階の学習室に集められていた。

その目の前で、一人の男が頭を下げていた。

「……みんな、スマン」

巖のごとき巨漢、鋼鉄の生活指導担当、西村宗一。

その彼が、Fクラス全員に向けて、その頭を下げていた。

「……どういうことだ？ 鉄人」

苛ツキを隠そうともせず、クラスを代表して雄二が声を挙げる。

それに対し、西村は頭を下げたまま口を開いた。

「……一部女子から、Fクラス男子が入浴時間中に自由だと、安心して入浴できないという声が出てきてな。何人かの教員もそれに同調し、今日はFクラスの男子は、女子の入浴が済むまで監視されることになった。監視役は俺と大島先生を中心に数人の教師でやることになっている」

『な、なんだそりやつ?!』

『横暴だつ!!』

『俺たち、何にもしてないのに……』

「……スマン。この通りだ」

いつも力強い西村が弱々しく、小さな存在に見えた。

そこへ、学年主任の高橋教諭が姿を現す。

「みなさん、誤解しないでください。西村先生は最後まであなた方に非はないと、こんなことをする必要はないと訴え続けてらっしゃいました。教師たるもの、生徒を信じられなくてどうするのだと……」

……」

だが、この措置に反対した教師は少なく、結局、女生徒達が安心できるならと決定されてしまったらしい。

あまりに理不尽な措置である。

「……うちのクラスの女子は監視対象に含まれていないんだな？」
不意に雄二がそう訊ねた。

「え？ ええ、そちらは大丈夫です」

「なにを考えている？ 坂本」

雄二の質問の真意はわからぬものの正直に答える高橋教諭。西村も、訝しげに雄二をみている。

雄二は高橋教諭の答えを聞くと、軽く瞑目しながら口を開いた。
「そうですか……わかりました。この措置、受けようと思います」
雄二のこの宣言に、Fクラス一同がどよめく。が、雄二は不敵に
笑いながらみんなへと向き直った。
「……みんな、今日、は我慢してくれ……明日、のためにな」

第六十問（後書き）

第六十問、いかがでしたでしょうか？

今回、最初にありました美波と美春の物語は、完全に私の創作です。今後、原作においてこれに当たるエピソードが発表されても差し替へはせず、『バカひば』独自のエピソードとして扱っていきますのでご了承下さい。

後は長々と話し合いのシーンが続いてしまいました。

さて、押し込まれてしまったFクラス。これからどうなるのでしょうか？

次回もよろしく願いますね♪

第六十一問（前書き）

第六十一問、更新しました♪
読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第六十一問

「ほんとに來ますかねえ？ 山田先生。Ｆクラスは監視されてるわけですし」

「まあ、念には念を入れてという所ですわ。安心したところに他の男子が忍び込みでもしたら目も当てられんでっしゃる？ 布施センセ」

女子大浴場へと続く階段を降りた辺りで話し合う教員二人。

一人は化学教師の布施教諭。今一人、頬肉が垂れ、でっぷりと腹の突き出た男は国語の山田貫太郎教諭である。

この山田という教諭、Ｆクラスに危険性を感じたという女生徒の訴えを持つてきて職員会議まで開かせた男だ。

「ハハハ、違いありませんね…… あ、アレは！？」

山田教諭の言葉に、布施教諭は苦笑いしながらうなづく。が、不意に聞こえてきた複数の足音に首を巡らせると、数十人の生徒が押し寄せてくるところだった。

「た、大変です山田先生！ 変態が編隊を組んでやってきました」

「ほお、やつぱり数増やしてきおったな。布施センセは警備に連絡してくれませんか？ わたしゃ定位置につきますよって」

「は、はい」

山田教諭は布施教諭に指示すると動き出した。

「……うまく踊ってくれるように助かるわ。後は‘腕輪’のテストが出来れば万々歳やな……」

そう呟いてほくそ笑む山田に、他の教師達は気付かなかった。

遠くに聞こえる喧噪に気付いた、ネジが一本足りなさそうな少年、吉井明久は顔を上げた。

「……なんだか騒がしいね」

「……大方、大人数での覗きが発生したって所だろ？」

「えええっ?!」

明久の疑問に答えたのは、仰向けに寝っころがりながら足を組んだ、引き締まった体つきの精悍そうな赤毛の少年、坂本雄二。

組んだ両手を枕代わりしながら何でもないように答える彼に、明久は声を挙げた。

「ど、どうするのさ雄二っ?!」

「……なんもせん」「ええっ?! な、なんで」

素っ気ない雄二に明久が詰め寄る。

「……寄るな、うつとおしい。大体、こういう騒ぎに便乗しないように見張られてるんだぞ？ 俺たちは」

「あ。そうか……でも、止めさせることも出来ないなんて……」

雄二に言われて得心するものの、悔しそうに俯いた。

「つと。まあ、‘敵’の狙いはそこにあると言ってもいい」

「どういうこと？ 雄二」

雄二が起きあがって話し始めた内容に明久が首を傾げる。

「……恐らく、相手は俺たちFクラスに覗きを起こさせたかったんだろ。支倉達のおかげで対した被害はなかったが、初日の盗撮騒動の時の女子集団の勢いなら、俺たちは拷問されていてもおかしくない」

「……うん、あれは怖かったよ」

雄二の話でその時のことを思い出したらしい明久は体を震わせる。

「あそこで、濡れ衣から拷問されていたら、覗きに走った可能性はある」

「まあ、さきに罰を受けてるしね」

「‘敵’にしたらそれが理想だったんだろうが、そうはならなかった。逆に支倉達の信頼を裏切らないために俺達は覗きに手は出さない」

「うん。最終的には美波も信じてくれたし、僕らのことを信じてく

れるのに裏切れる訳ないよ」

「それだ明久。今、この合宿に参加している第二学年の男女間はかなり冷え込んでいると言える。Aクラスでも、多少溝が出来始めているらしいからな。例外はウチくらいだ」

「……そっか、僕らがクラスの女子と仲違いしてないなら、女子に協力する可能性は高いよね。ならこの措置になるようにし向けたのは僕たちが女子に協力できないようにするため……って姫路さんやひばりを守れないっ?！」

雄二の話を聞いて、明久は自分なりに結論を出していく。それを聞いた雄二は軽く笑った。

「少しは頭が使えるようになってきたじゃないか」

「あれ……? でも雄二、そうするとまさか……でも、そんな……」
明久は何かに気づいたように呟く。

「ほお。‘ソレ’にも気づいたか。そうだ、奴らの仲間には……」

その様子に雄二は感心したようになる。そして、ふたりは顔を見合わせると、同時に口を開いた。

「教師が居る」

「このスケベども! おとなしくお縄につきなさい!」

「チイツ! 教師だけじゃなくて後半組の女子までいやがるとは!」

「怯むな! 重点的に教師を狙うんだ! 観察処分者がいない以上、物理干渉できるのは教師の召喚獣だけだ! 教師を戦死させれば補習室送りになってフィールドを維持できん!」

「おおっ!」

「させないわよ! 半分は教師の護衛をしつつ、残りであいつらとつちめるわよ!」

「ええっ!」

大浴場へ続く廊下は混戦状態だ。五十人ほどの男子による集団覗き軍団を、教師と後半組の女子で防衛している。

男子がC・Dクラスを中心としているのに対し、女子の中心はD・Eクラス。教師もいるものの、数の上ではほぼ互角。点数では劣る局面も多い。

そんな中で、Fクラス女子は奮闘していた。

展開された古典のフィールドを飛行する銀色の召喚獣。

手にした槍状のライフルで覗き軍の召喚獣を射抜いていく。

射撃武器を持った召喚獣からの応射をひらりひらりと避けしながら弾丸を撃ちだしていく。

「ここは通行止めだよん」

金髪碧眼の少女、クリスティナ「ウエストロードは茶化すようにウインクしながら相手を撃ち抜いていく。

その下で、教員の召喚獣を守りながら戦う女子達も覗き側の召喚獣を討ち取っていく。

しかし、物理干渉できる召喚獣が圧倒的に不足しているため、完全に取り押さえることが出来ない。

戦死にも構わず突撃する彼らを次のフィールドが迎えた。

「くそっ?! 今度は物理か! 試獣召喚^{サモン}!!」

フィールド中央の教師の召喚獣を仕留めるべく、次々に召喚しながら突撃してくる男子。

それを圧倒的な光の奔流が押し流す。

「……面倒ではありますが、やるだけやるとしましょう」

教員召喚獣の前に立ちはだかるは、メカニカルな青い全身鎧の召喚獣。両肩に展開していたパラボラを畳むと、右手の大砲が火を噴き、左手で腰に下げたディスクを地面に滑らせるように投擲する。砲弾の直撃を避けようと動いたその横で、ディスクが炸裂し、次々と火柱が上がり、覗き軍の召喚獣の動きを制限する。

そこへ。

「終わりです」

長い黒髪ストレートロングと、目の下の隈が特徴的な来島アキがそう呟くと、召喚獣の両肩パーツが展開し、パラボラアンテナが出現、一瞬光が収束したかと思うと、圧倒的な輝きが溢れ出し、相手召喚獣を飲み込んでいく。

「さて、これだけ相手が居るとチャージ中に狙われるかもしれないね」

そう呟いて、アキは召喚獣を動かした。

大浴場前、最終防衛ラインを引くのは、山田教諭、高橋教諭、姫路瑞希、支倉ひばりの四人だ。

当初山田教諭一人が担当の筈だったが、Fクラスの女子が率先して防衛に参加すると言い出したため、配置変更が行われていた。

そのため、山田は当初計画していた行動を実行に移せなかった。

「（わざとやられて覗きに便乗するつもりだったんやけどなあ。ここが引き時やるか？）」

教師を中心とした幾重もの防御陣。しかし、それとて物理干渉できる教師の召喚獣でしか生徒を取り押さえきれないため、完全には進攻を止められない。どうしても最終防衛線まで一人二人の進入を許してしまっていた。

だがしかし、そこに展開している‘家庭科のフィールド’を突破するのは不可能に等しい。

鞭を持った高橋教諭の召喚獣とボリウムのあるポニーテールのちっちゃな少女、支倉ひばりの召喚獣。

ともに500点オーバーのモンスター召喚獣だ。

『Fang!!』

『Joker!!』

おまけにひばりはパラメーター補正の高いFang-Jokerのダブルフォームを選択しており、そのパラメーターは700点近

い召喚獣相当となる。さらには、ひばり自身の召喚獣戦闘の経験値の高さ、操作能力の高さとあまって、Cクラスレベルの召喚獣では相手にならなかった。

そんな幼なじみの活躍を見て嘆息するのは、ふわふわのピンクブロードに優しげな顔の少女、姫路瑞希。

「すごいですねひばりちゃん。私、ここにいない必要あるんでしょうか……」

そう呟いて複雑そうにする瑞希へ、高橋教諭がまた一人戦死した生徒を鞭でfishしながら微笑んだ。

「あなたの役割は重要ですよ？　姫路さん。一見、支倉さんが無敵のようにも見えますが、連戦が続いているので消耗しています。もし、支倉さんが戦闘続行に支障が出るほど消耗したなら、こんどはあなたが頑張らなければなりません」

「そうだよ？　みつちゃん。みつちゃんが控えていてくれるから、あたしは消耗を気にせず戦えるんだよ？」

召喚獣に、その手首から伸びた鮫の背鰭のような刃物を振るわけしていく。

右半身を白く、左半身を黒く彩られたひばりの召喚獣が、暴虐の舞を舞う。

その美しさと力強さに曝された敵は、切り刻まれ、光の粒子へと還元されていく。

まだ、戦いは終わりそうになかった。

「つまり、新たな噂を流して状況をコントロールすれば良いのね？」
「坂本はそう言っていたわ」

二人の少女が話しているのは大浴場。

一人は赤毛にロングヘア。翠色の瞳の帰国子女、島田美波。

今一人は、彼女のクラスメイトの美少女少年木下秀吉……の双子

の姉、木下優子。その近くには、長い黒髪ロングヘアで静謐な雰囲気
の美少女、霧島翔子や黄緑色のショートカットでボーイッシュな
工藤愛子も居る。

Fクラスが監視されると聞いた際、雄二は即座に方針を変更した。
相手は、Fクラスの男子の身動きを取れなくした上で、自分たちが
覗きを成功しやすくなるように手を打ってきている。

Fの女子を監視しないのは、彼女らは文月の第二学年でも十指に
入る美少女が揃っている。

覗きの対象にしない手はない。さらにFの男子と女子は第二学年
中でもすこぶる仲が良い。ともすれば、Fの男子は女子を守るため
に行動することは想像に難くなく、覗きの大きな障害となりうる。

この動きを封じ、監視に高い身体能力を持つ西村をはじめとした
教師を監視につけることで、対覗き防衛隊の戦力、特に鉄人西村と
教師を削ったのだ。

だからこそ雄二は、Fクラスの女性陣を防衛の中心に据えるよう
高橋教諭に進言したのだ。

アキ、瑞希はAクラスレベルの成績。クリスは科目を指定すれば
大きな戦力となる。

そしてひばりは高橋教諭と行動を共にすることで、最強の矛‘家
庭科’を指定して戦えるわけだ。

一方で、数学以外に難のある美波は、防衛ではなく、前半組であ
るAクラスと合流、情報戦の一端を担わせることになった。

状況が変わった以上、清水美春の説得は後回しとし、新たな噂を
散布する。美波に課せられた役割は重要だった。

「で？ どんな噂を流すのさ」

「うん、それはね……」

愛子に問われ、美波が口を開く。
と。

「……ねえ、少しいいかしら？」

遠慮がちに声かけられ、美波らが振り向くと、そこにはＣクラス代表小山友香が立っていた。

「協力したい？」

友香の話を聞いた美波の第一声はそれだった。

「……ええ。今、Ｃクラスはバラバラなのよ。男子と女子の溝が深まりすぎて、男子が暴走しているの。残念なことに今の私では男子を押さえきれなかった……代表失格ね。私……。でも、だからこそ、事態を早急に終息させたいのよ。Ｆクラスをあんな風に疑っておいで、虫の良い話だというのは分かってはいるの。だから、信じて欲しいとは言わないわ。むしろ利用するくらいのつもりで構わない。お願い手伝わせて」

そう言って、友香は頭を下げる。それを見て美波は困ってしまった。

一応、雄二からは想定外の事が起きたなら、美波の判断で決定して良いとは言われている。連絡を取るのが難しいからだ。

ふと、顔を上げてＡクラスの面々を見る美波。しかし、彼女らは揃って首を振ってきた。

「……この件で、雄二に全権を委ねられているのは島田、あなたなのだから、決定するのは島田」

「そうね。もちろん助言やフォローはするけど、最終的にはあなたが決めるのよ」

「そ、そんなぁ……ウチ、そんな決断できないよぉ……」

翔子と優子に言われてうなだれる美波。普段の勝ち気な様子など、欠片も見られない。美波は、重要な局面で冷静に判断し、なにかを決めたことは少なかった。

どちらかと言えば感情に任せて突っ走るか、周りに流されるかしていることが多い。

今回の対策は、覗きのみならず、Fクラスの名誉回復も兼ねてFクラス主導でAクラスに手伝って貰っている形だ。ならば指示を出すのも判断するのもFクラスの間でなければならず、そして今ここには、Fクラスの間は、美波しかない。

もし仮にAクラスの間が指示を出したとすれば、何か問題が起きた場合、Aクラスに多大な迷惑を掛けることとなる。

美波はうんうん唸りながら考え込み、しばらくして決断した。

「……うん。決めたわ」

顔を上げてそう呟くと、美波は友香へと顔を向ける。

「……ウチは小山さんを信じるわ。手伝ってくれる？　小山さん」

そう言っただけで、友香へとどこかすっきりとした笑顔を向けた。その表情に、友香は少しだけ見とれた。

「……あ、ありがとう島田さん。でも良いの？」

「いいの。ウチはそう決めたわ」

「……やりにくいわね。まあ良いわ。なにをしたら良いの？」

軽く嘆息しつつ美波に指示を求める友香。美波はそれに頷いて口を開いた。

「まずはCクラスの子……」

第六十一問（後書き）

第六十一問、いかがでしたでしょうか？
また次回もよろしく願いしますね♪

第六十二問（前書き）

第六十二問、更新しました♪
読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです

第六十二問

結局、三日目の覗きは失敗した。二クラス分の男子の戦力では押し切れなかったのだ。

『ち。やはり戦力が足りねえ……やはり、AクラスとBクラスを引き込まねえと話にならん』

次々に捕縛されていく男子達を見て、彼、後藤祐一は呟く。

先日と同じく、成り行きを物陰に潜んで見物していたわけだ。

『……Bクラスは代表のおかげでまとまり無え分誘導しやすいが、問題はAクラスか。カス以下のE、Fも捨て駒としては欲しいが、Fの結束にあてられてかEの男子も反応鈍いしな……脳筋のくせに使えねえ……』

思考を纏めるようにぶつぶつ呟く後藤。その瞳は、狂気に染まりつつあった。

DEFの女子による防衛で、集団覗き側は全員捕縛され、反省文を書かされている。

前半組の入浴が終了した後は、ABC有志と教師によって警戒は続けられていたが、その日の覗きは、もう無かった。

そして、夜は更けていく。

薄暗い廊下を、一人の少女が足音を立てずに歩いていた。

寝間着代わりの体操服の上とジャージのズボン。昼間なら映えそうなオレンジの髪を頭の両側で縛り、くると螺旋を描く、ドリルロールに仕上げた少女、清水美春。

噂を広めたり、覗きが発生しやすくなるよう細工したりと忙しかった彼女だったが、そろそろ‘お姉さま分’を補充したくなっていた。

「（むふ、むふふふ） 待っていて下さいましお姉さま♪ 愛しい美春が、めくるめく官能の世界へいざなって差し上げますわ♪」
変質者さながらの表情でFクラス女子の部屋へと足を進める。幸いにして、Fクラス女子の部屋はひとつしかない。

目的地を間違えることなどあろう筈がなかった。

しかし……。

「おかしいですわ……階段までこんなに距離があるはずが……」
振り返って息を呑む。

廊下の反対側にあるはずの非常灯が、遙か向こう、地平の彼方とも思えるほど遠くに見えた。

非常灯だと認識できよう筈もないくらい遠くに感じながらも、ソレが非常灯だと分かる。

今一度振り向けば、廊下の向こうは薄暗闇に覆われ、先が見えない。

その深淵の向こうとおぼしき闇に、体を震わせる美春。

「な、なんですか？ いったいなにが？」

不意に、背後に気配を感じた。薄く光るようなソレを感じて振り向く美春。

が、何もいない。

しかし、またもや背後に生まれた気配に戦慄する。

「ヒツ?!」

慌てて振り向いても何もいない。

美春は恐怖にかられて後ずさる。背中が壁にあたり、追いつめられる恐怖を増長する。

と、手に何かが触れた。

それがドアレバーだと気づいた瞬間、美春はドアを開け放ち、中へと飛び込んで閉じた。

隙間から一瞬見えた薄い光が、確実に何か居ることを示唆していた。

ドアを閉め、ホッと息を吐く。どこの部屋に飛び込んだのか？

それを確認しようと振り向いた美春は、再度息を呑むことになった。

そこは、部屋ではなく、廊下だった。

「ど、どうなってますのっ?!」

思わず声を上げて走り出す美春。

走れど走れど廊下は続き、非常灯は遙か遠くへと遠ざかる。

その事実には、思わず近場のドアを開けて飛び込む。

しかし、そこにはまたもや廊下が横たわる。

恐怖にかられ、次々にドアを開け放っていくが、結果は変わらない。

「た、助け……」

思わず声を上げて走り出す。

目を瞑り、無我夢中で走った。そして、何かにぶつかり尻餅を着いた。

「きゃんっ?! な、なんですよ」

目を白黒させながら、何にぶつかったのか確認する。

それは大きく突き出た腹の、山田貫太郎教諭だ。

その事実には驚く間もなく、美春の背後に光が立ち上がる。

その気配に振り向くと、大きな、白い「狐」が佇んでいた。

「な、なん……」

白狐を見て絶句した美春の背後で、軽い破裂音が響いた。

「……え?」

その音にゆっくり振り向くと、そこには、編み傘を背負い、どぶろく片手に持った、大きな腹と、だらんと下げた玉袋の、巨大な狸が鎮座していた。

「……」

呆気にとられて見上げている美春を見下ろし、狸はニヤリと笑った。

「大したもんやな狐の妖瞳っちゅうんわ」

大きな腹を揺らし、山田教諭が言う。

その視線の向こうには、焦点の合わなくなった美春と、その瞳を妖しく金色に輝かせた桜間片菜が居た。

「これで、彼女は我々や根本恭二と接触したことを忘れるでしょう」
「まあ、どっちでもええけどな」

言うや否や、軽い破裂音と共に山田教諭の体が煙に包まれる。

そして現れたのは、二足歩行で人間大の大きさの狸だった。

「で、その嬢ちゃん、後藤っちゅうガキを捨て駒にするんはわかったけど、この後どうすんのや？　ここが霊地候補になるんか調べとったんやろ？」

「はい。残念ながら霊地へと昇華するのは難しいようです」

淡々と答える片菜に山田は嘆息する。

「はあ、こないな騒ぎまで起こしておいて、成果無しかいな」

「『黄昏の腕輪』の運用データは取れそうです」

「ほお、あの後藤っちゅうガキ、まだ諦めとらんのかいな。どんだけ女に飢えとるんや」

そう言つて嫌らしい笑みを浮かべる山田。

「……彼が真に固執し、欲している女性はただ一人です。騒ぎに乗じて手に入れたいようですが」

「誰でも良いんちゃうんかいな」

「……ハーレム願望もあるようです」

いつも無感情な片菜が、吐き捨てるように言うと、山田は呆氣にとられ、次いで笑いだした。

「……ダアッハッハッハ！　アホや！　アホがおるで！　女欲しさに妖怪と契約しよるなんざ、アホの鏡やつ！　よし、気が変わったで。そのアホさ加減に免じて、アホガキに協力したるわ。いやあ、ハーレム欲しさに寿命減らすなんざ笑わせてくれるわ」

腹を抱えて笑い出す山田を、片菜は冷たく見やる。

「相応の‘対価’でしょう。一年かそこらの寿命で望みが叶うんですから」

「だっはっは、そっから転げ落ちてくんを眺めるんが楽しいんやないかいな。人間っちゅうんは欲の皮、つっぱらかつてるからなあ」
おかしくて仕方ない様子の山田。しかし、片菜は目を伏せてしま

う。
「……よく分かりませんね私には」

そう呟く片菜に、山田は笑みを消して侮蔑の視線を送る。

「お人形さんには分からんか？」

その言葉に、片菜が怒気の籠もった視線を山田に向けた。

「……」

「おお怖い怖い。ま、人形は人形らしく言われたことだけやっときや」

そう言つて山田は立ち去っていった。

後に残された片菜は、顔を歪めて胸を押さえる。

「……わたしは……」

つぶやき、かぶりを振ると、美春に向き直り、懷から腕輪を取り出した。

「……あなたの欲望を叶えなさい、清水美春」

そう言つて腕輪を彼女の左手に填めた。すると、腕輪は乾いた地面に水が染み込むように彼女の腕の中へと消えていった。

「つまりお前達は教師に覗きの協力者、あるいは黒幕が居ると考えているんだな？ 坂本、吉井」

そう言つて目の前の生徒を見る、巖の如き男。鋼の生活指導担当にして、Fクラス担任の西村宗一は瞑目する。

その正面に立つは、180を越える長身に、引き締まったボディと、逆立った赤毛が狼を彷彿とさせるワイルドな少年、坂本雄二。

そして、顔立ちは整っているものの、どこかネジ一本を締め忘れたかのような緩い雰囲気の子、吉井明久の二人だ。

「その通りだ。でなけりや俺たちの監視なんて話、通るわけが無い」
「確かに証拠はないけど、その方が全体の説明がすっきりするんです」

そう言ってくる二人の言葉に耳を傾ける西村。そして、おもむろに頷くと目を開く。

「……わかった。確かに今回のこの措置には、俺も腑に落ちんところがあった。お前達の言うように教師が関わっているのなら、ゆゆしき事態だ。教員側は俺の方で探っておこう。お前達は誘いに乗らんよう注意……」

「いや、待ってくれ鉄人。今回、俺たちFクラスは覗きに対する防衛に回りたいと思っている」

「……なんだと？」

雄二の提案に驚く西村。しかし、雄二は構うことなく話を続ける。
「恐らくだが、最終日前日。また仕掛けてくる可能性がある。その時は今回より数が多いはずだ。そうなれば防御陣を体力に任せて突破する可能性が高い」

「だよ。教師は人数が少ないから相手が多いと捕らえきれないんじゃないかな？」

雄二の言葉を次いで明久も話しに加わる。だが、西村は顔をしかめた。

「しかしだ。お前達の監視の話が今日も出ないとは限らんぞ？」

「いや、今回俺たちを監視して覗きが発生した以上、Fクラスだけを監視する意味はなくなったはずだ。男子全部を監視するか、監視はしないかの二択だ。そして、万一を考えると、教師の人数を割かなければならない監視を選択するのはナンセンスだ」

雄二の解説に、西村は考え込む。

「……確かに坂本の言うとおりだな。わかった何とか通してみよう」
「お願いします、西村先生」

西村の言葉に、明久が頭を下げてお願いする。それを見た西村は一瞬、呆氣にとられた。

「……フ、はっはっはっは。よし、任せろ吉井。なんとしても通してやる。汚名を返上して見せろ」

「はいつ！」

二人は、異口同音に返事をして見せた。

そうやって西村と話をしたのが昨晚のこと。

日付が変わり、朝の騒動を終え合同自習時間中に会議をする。ちなみに、女性陣は回復試験の真っ最中だ。

「で、防衛戦には参加できるのかのう」

少し心配げに訊ねてくるのは、性別の壁を天元突破している美少女少年、木下秀吉だ。だが、雄二は自信ありげに笑う。

「十中八九いけるはずだ。鉄人にも説明したが、俺たちだけを監視している最中に覗きが起きた時点で、Fクラスだけを監視する意味は失われているんだ。さらに、島田に頼んだ新たな噂も効果を発揮するだろう」

「しかし、あの小山にも頼んだのであろう？ 大丈夫かのう……」

秀吉はなおも心配そうだ。

「……懸念はもつともだ。だが、あの件に関して島田に判断を委ねたのは俺だ。島田が小山を信用したならその責任の所在は俺にある。もしもの場合は俺が責任をとるさ」

「ふむ。お主がそこまで言うのなら大丈夫じゃろうて」

「すまん、100%安心できるような言葉でなくて。だが、小山が言って回るなら効果的なんだ」

そう言いながら頭を垂れる雄二。

「して、その噂とは？」

「Fクラスはクラスメイト女子に頼まれて、防衛に参加するはずだったらしい」と、覗きを成功させるためにFクラスを監視させて教師を少なくした」と、他クラスに邪魔されたFクラスが報復に他クラスの覗きを妨害したいらしい」の三つだな。特に最初のはアレ

ンジして小山に言わせれば効果は抜群だ」

「最初の二つはまだしも、最後の一つはどうなんじゃ？」

雄二から流された噂を聞いた秀吉が、微妙な顔になる。

「はは、その噂こそがミソだ。おれたちがそういう集団だと思っている女子は少なくはない。だから逆手に取ってやるんだ」

「……なんともお主らしい皮肉混じりの噂じゃのう」

雄二から噂の内容を聞き出した秀吉が嘆息する。

「戻ったぞ坂本。Eクラス男子は覗きに参加しないらしい」

そう言って声を掛けてきたのは、全身を針金のような筋肉で覆われた少年、前田俊夫だ。

「そうか。なら牧野經由で引き込めそうだな」

「そうじゃのう。仲間が増えるのは心強いもんじゃ。ん？ そう言えばAクラスはどうするつもりなんじゃ？ こちらに引き込むのかの？」

「……出来ればな。いま、明久に久保と交渉させている」

この雄二の言葉を聞いて、秀吉の顔が曇った。

「む。そ、それは大丈夫なのかの？」

「……正直不安もあるが、防犯ブザーもスタンガンも持たせた。大丈夫なはずだ」

それから少しして、交渉に行っていた明久が戻ってきた。

「戻ったか。どうだった？」

「うん。防衛に参加するのは難しそうだって。やっぱり覗きに参加したい人が少なからず居て、それを押さえるだけで精一杯みたいだったよ」

残念そうにうつむく明久。しかし、雄二は気にした様子もない。

「そうか。まあ敵に回らないだけでも良かったと思うさ」

そう言っただけで苦笑いする。

「となりやあ敵はBCDの三クラス分の男子か」

つぶやく俊夫に頷いてみせる雄二。

「だな。よし、作戦を立てる。女子が集まったら説明するから待機

「していてくれ」

雄二の言葉にその場に居る者達は頷いた。

第六十二問（後書き）

第六十二問、いかがでしたでしょうか？

合宿編もクライマックスに向けて進んでおりますゆえ、次回もよろしく願いしますね♪

第六十三問（前書き）

第六十三問、更新しました♪
読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第六十三問

「ふう……」

濡れた手をハンカチで拭きながら、トイレを後にする小さな少女。ボリユームのあるポニーテールが特徴的な彼女は支倉ひばり。

家庭科の回復試験を受け終わり、用を足してきたばかりである。AクラスとFクラスの合同学習が行われている部屋を指して、一人廊下を歩きながら考える。

なぜ、騒動が続くのか？ 盗撮疑惑から始まり覗き騒動へ。

「なんでこんなことするんだろ？」

口をついたのは疑問。明らかな犯罪である盗撮や覗きに走る男子の心理はいまいち分かりきれない。

汚名を被りながらも女子の裸体を求める姿勢には、怒りを通り越して、呆れを感じる

「……あたしの裸なんて、見る価値もないと思うんだけど……」
いびつに感じる己の体を見下ろし、嘆息するひばり。

『あれ？ きみ、支倉さんかい？』

ふとかけられた声に、顔を上げる。一人の少年がひばりを見下ろしていた。

「やあ、久しぶり。四年ぶりくらいかな？ 覚えて……無さそうだねその顔は」

そういつて苦笑いする少年。身長は明久より少し高い程度。癖のある茶髪を短めにカットしており、顔立ちはまあ良い。

柔らかい笑みを浮かべるその顔に、ひばりは言いようのない不安を感じた。

「ご、ごめんなさい？ どこかでお会いしましたっけ？」

軽く頭を下げて、謝罪しつつ訊ねるひばり。その様子に、少年はいよいよ落胆したようだ。

「まあ、仲が良かったとは言い難かったからね。仕方がないよ。同

じ小学校だった、後藤だよ。後藤裕一」

「えええっ?! 後藤君なのっ?!」

少年が名前を告げると、ひばりは素っ頓狂な声を上げて驚いた。なぜなら、この後藤という少年。小学生の頃は丸坊主で、ガキ大将みたいな顔をしていたのだ。

「ご、後藤君、文月だったんだ……」

そう言いつつ少し構えてしまうひばり。それを見て、後藤は困ったような顔になった。

「はは、やっぱり犬猿の仲だった俺相手じゃ身構えなくなるか」
「う……」

そう、この後藤裕一こそが、小学校時代、ひばりとよく衝突し、彼女を虐めていた本人だった。とはいえ、今の後藤の態度を見ていて、ひばりは少し悩んでしまう。

「いや、仕方がないよ。俺はそれだけの仕打ちを君にしてきた。……ごめん! 許して貰えるとは思わないけど、本当にごめん!」
「……………」

直立不動の姿勢から、腰を九十度折り曲げて謝る後藤。彼の率直な謝罪に、ひばりは面食らう。

突然の再会に突然の謝罪。戸惑うのも無理はない。

なかなか頭を上げない彼に、だんだんひばりの方が申し訳なさそうな顔になる。

「も、もういいよ後藤君……。完全には……許せないけど……謝ってくれたから……も、もう顔を上げてよ……」

そう言って、なんとか頭を上げさせる。

「あ、ああ。ごめん、かえって気を使わせたかもな」

バツが悪そうに笑みを浮かべ、頬を掻く後藤。

「ひばり? どうしたの?」

不意に声がかかって、そちらを見るひばりと後藤。そこには優しい空気を纏い、ネジを一本締め忘れたかのような少年、吉井明久が立っていた。

「アキくん、後藤君だよ。小学校の時、同じクラスだった……」

そこまで聞いた明久は顔を強ばらせ、二人の間に割り込んでいく。

「……いまさらなんの用？ また、ひばりに手を出そうなんて言うなら……」

「やれやれ、久しぶりに会ったつてのに喧嘩腰かよ、吉井」

張り付いていた笑みを消して、明久を見下すように立つ後藤。それを真つ向から見返す明久。

一触即発の空気を破ったのは、ひばりだった。

「アキくん待つて。後藤君は謝ってくれたんだよ？ ね？ 後藤君」

そう言つて後藤に同意を求める。すると、後藤は気持ち悪いくらいあつさりと態度を翻し、笑みを浮かべた。

「ああそうだ。なのに睨まれるなんてな……」

「……君がひばりにしたことを考えたら当然だよ」

後藤の言葉に明久がキツく返すと、ひばりから明久へと注意が飛んだ。

「アキくん！ ごめんね？ 後藤君」

「いやいいよ。大事な‘友達’を傷つけた相手なんて、そう易々とは許せないさ。気にしないでよ支倉さん」

ひばりに向けて、笑顔を張り付けたまま答える後藤。

その笑みは、どこか歪んで見えた。

「おっと、そろそろ学習室に戻らないと、お互い怒られるな。それじゃあ、また今度」

そう言つてきびすを返す後藤。ひばりと明久はその背中を何とも苦い気分で見送るしかなかった。

「あいつ、いったい何のつもりだったんだ」

「……わかんない。謝ってくれたのは確かだけど……」

言い淀むひばり。普段なら、もっとはつきり許してしまうかもしれない。

けれど、今回の後藤の気配にひばりは言いしれない不安感を感じていた。

「とにかく行こう」

「う、うん……」

ひばりは明久に促され、学習室に足を向けた。そして、一度だけ振り向いたが、後藤の背中はまだ見えなかった……。

昼の長休み。合宿中の数少ない自由時間である。早めに食事を済ませれば、三十分近く休むことが可能で、頭を一時的にクールダウンさせるにはもってこいではある。

もっとも、膨れた腹で受ける午後の合同学習は、集中力を著しく欠くのも自明の理ではあるのだが。

そんな休憩時間。割り当てられた部屋で、一人の漢が窓から景色を眺めていた。その背後に、五つの陰が現れる。

『ミニコンの新田!!』

『おっぱい星人福村!!』

『footballlover有働!!』

『LO横田!!』

『スレンダー近藤!!』

『我ら!!』

『Fクラス!!』

『五連帝!!!』

いちいちポーズを取る五人の背後で、五色の爆発が起きたような気もするが、そんなことはなかった。

「で？ いきなり召集とはどうしたんです？ 須川」

窓辺に立つ漢の背中に、長身で眼鏡の少年新田恵太が声をかける。それに応えるように漢、須川亮が振り向いた。

「諸君！ よくぞ集まってくれた。これよりFクラス、陰の会議を開始する」

おごそかに告げる開会の宣言。それを聞いた五人の顔が引き締まる。

「……今日の議題はこれだ」

言いながら亮が取り出した紙束を五人に見せた。

【プロジェクトFFF】

表紙にはそう書かれていた。

「つ、ついに動かすのか？ あの計画を……」

唸るように呟く福村。

しかし、亮は答えない。

その様子に、五人は訝しげになって注目した。その注目を受けて口を開く亮。

「俺は……この計画を、破棄しようと思う……」
「なっ?!」

恵太を除いた四人が、異口同音に声を上げる。

「バ、バ力なっ?!」

「異端者を見過ごすというのか?」

『どうしたんだ須川っ!』

『やつらを血祭りに上げるんじゃないのか?』

次々に拳がる声、それを一身に受け、亮は瞑目する。

その声が潜まった頃、亮は再び口を開いた。

「……この合宿に来てからこつち、俺たちは濡れ衣を着せられたり、冤罪で監視されたりと碌な目にあっていない。周りのクラス……特に女子がどうという目で見ていたのかが一目瞭然だろう」

『……………』

亮の言葉に思うところがあるのだろうか、四人は顔を歪める。その様を見ながら亮は言葉を続けた。

「だが……そんな俺たちを信じてくれる女子がいる。そう、ウチのクラスの女子だ」

その言葉に四人がハツとなり、恵太が小さく笑う。

「支倉と姫路は俺たちを信じてくれたし、姐さんは俺たちのために怒ってさえくれた。島田は疑ったことを謝罪し、来島は弁護してくれた……」

そこで言葉を切り、五人を見回す。口元に笑みを浮かべ、瞑目する恵太以外の四人は真剣な顔つきになる。

「そんな彼女たちに報いたい。俺はそう思った。その為には、この計画では駄目なんだ!」

そう力強く言い、紙束を破り捨てる亮。

『!』

それを見て息をのむ四人。しかし、亮は気にせず言葉を続ける。

「Knight、s of Goddess the F（女神の騎士達たるFの者共）。それが、新たに立ち上げる団体の名だ。お前達がどうするかは任せる。以上だ」

それだけ言って、再び、窓辺に目をやる亮。
しかし。

「待てよっ!」

鋭く切り込む声。その声に、亮は動きを止める。

「須川っ！ てめえ、なんでも一人で決めやがってっ！」

「……すまん。FFF団の起ち上げを望んでいた奴らには本当に悪いと……」

そこまで言ったところで肩を掴まれる亮。そのまま引くに任せて振り返る。

「バカヤロウッ……！」

拳がった声とともに、頬に衝撃が走った。

「グウッ?!」

その一撃に、うめき声を上げながら倒れ伏す。振りきった拳を震わせるのは横田だった。

「そう言う事じゃねえっ！ そう言う事じゃねえんだよっ！ 須川っ！」

「よ、横田……」

己を殴りつけた横田を見上げる亮。

「俺たちは仲間だったんじゃないのかよっ！」

その言葉にハッとなる。

「お、俺は……」

「お前が計画のことで悩んだことなんざ、とうの昔に分かったんだよっ！ 何で一人で悩む！ 何で一人で決める！ 悩みを分かち合ってこそその仲間じゃねーのかよっ！」

横田は我知らず涙を流していた。それを見た亮は体を起こし、両手のひらを地に着き頭を下げた。

「……みんなスマン。俺が、俺が間違っていたっ！ 許してくれっ！」

土下座しながらそう叫ぶ亮。

その肩に、そっと手が置かれる。

ふと、顔を上げれば、横田がイイ笑顔をしていた。

「許すも名にも無いさっ！ 俺たち、仲間だろっ！」

そう言って親指を立ててくる。

それを見た亮が、ほかの四人に顔を向けると、恵太がシニカルに笑い、ほかの三人がイイ笑顔で親指を立てていた。

それを見た亮の目からも涙があふれた。

「お……お前ら……お前ら、最高の仲間だっ！」

「須川っ！」

「俺たちの絆は永遠だっ！」

「やろうぜっ！俺たちの女神を守るんだ！」

口々に叫びながら亮の元へ集まる、有働、福村、近藤。

「やるぞ！みんなっ！」

『応っ！』

五人で唱和する。

と。

突然。

戸が開け放たれた。

突然のことに固まる亮、横田、有働、福村、近藤。

入室してきたのは、バサバサの髪に浅黒い肌の少年、高杉総司。

普段なら、暑い太陽のような笑顔をその顔いっぱいに浮かべている彼だが、今はなぜか無表情だ。

そのまま室内へと足を進め、自分のバックのところまで行ってしやがみ込むと、中から参考書らしきものを取り出す。

目的のものを手に立ち上がる総司。その間、室内は無言だった。

そのままきびすを返した彼は、元来た道筋をたどって入り口へ向かう。ドアに手をかけ、その足が止まった。

「このドアなあ……」

不意に呟く総司。六人六様の顔で彼に注目。

「このドア、さっきまで少し開いとったがよ」

その言葉に、六人ともヒビが入った。

「おんしらの、小芝居が外までもれ聞こえとつてのう。入りづろつて仕方なかったき。しかも……」

切られた言葉の先に嫌な予感を覚えつつも、止めることが出来ない。

「……しかも、廊下を通つちよつた連中、特に‘女子’も微妙そうにこつちをみとつてのう。わしも仲間じゃあ思つたんかなま暖かく見られて恥ずかしかったぜよ……」

無表情な総司に言われ、死刑が確定したかのような表情になる六人。

「おまんらが何をしゆうがかは、おまんらの自由じゃが、代表達、特に支倉に迷惑かけんようにせえよ。支倉は、あん小さい体でがんばつちゅうにおまんらと来たら……」

そう言つて呆れたように部屋を出ていく総司。後に残されたのは六体の屍のみ。

午後の合同授業に出てこなかった彼らは、鉄人によって捕獲され、六人揃つて特別授業を受ける羽目になった。

「どうしても駄目かい？ 久保利光君」

「くどいね。吉井君とも約束した以上、覗きに協力など出来ないよ、後藤君」

対峙する二人の少年。一人はAクラス次席にして、男子主席たる久保利光。相対するは、二年Bクラス次席の後藤裕一。

険悪な雰囲気で話し合う二人だが、当然のごとく物別れに終わるようだった。

「君はBクラス代表よりまともだと思つていたんだけどね。失望したよ」

そう言つて眼鏡の位置を直しながらきびすを返す利光。

だがしかし。

「……簡単に帰れると思わないことだね。さあ‘黄昏の宴’を始めようか」

後藤のその言葉に呼応するように、彼の腕に腕輪が現れ、赤黒い光を放つ。すると、そこからフィールドが展開し、後藤と利光の二人を覆った。

「こ、これはっ?!」

突然のことに驚愕する利光。しかし、彼の動揺が収まるのを待つこともなく後藤は言霊を紡いだ。

「試獣^{サモン}召喚」

召喚のキーワードに従い、魔法陣が展開していく。

「く、試獣^{サモン}召喚!」

反射的に召喚獣を召喚する利光。二体の召喚獣が現れ、相対するすると、後藤の召喚獣が震え始めた。

その影が膨らみ、盛り上がり、巨大化していく。

「……バ、バカな……なんなんだソレは……」

目の前で起きていることに愕然となる利光。その顔に、影が差ししていく。

「あ、あ、ああ……」

『うわああああーっっっ!!!』

響きわたる悲鳴。しかしそれは赤いフィールドの中だけに木霊していた。そして、倒れ伏す利光。それを見下ろす後藤。その顔に、愉悦が浮かぶ。巨大な影が動き、利光の頭を鷲掴みにする。その手が淡く赤い光を放つ様を見て後藤は哄笑した。

「フッフッフ……クククク……ハァーハッハッハッ!」

第六十三問（後書き）

途中、お見苦しいシーンがございましたこと、深くお詫び申し上げます。

第六十三問、いかがでしたでしょうか？

まあ、FFF団とは異なる団体が結成されたことを示唆したかっただけなんです、書いてる本人でさえウザいと思う辺り大概だと思（笑）

それでは次回もよろしく願いしますね♪

第六十四問（前書き）

第六十四問を更新しました。

読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです。
♪

第六十四問

夕食が終わり、前半組の入浴時間になつてすぐに事は起きた。

B C Dクラスの男子、約60人が覗きのために動き出したのだ。すでに二階ではC Dクラス女子との間で戦闘が開始されている。

文月学園の第二学年は、変わった編成になっている。一クラス約50人の六クラス。男女併せて計約三百余人。男子約150名、女子約150名。男女比は基本1:1だ。

しかし、振り分け試験という制度のおかげで、クラスの男女比が大きく変動する。

そして、今年はFクラスに51名もの男子が在籍することとなつた。第二学年男子の、約三分の一である。

このため、ほかの五クラスは一クラスあたりの男子の数が二十人前後になっている。

対する女子は三十人前後。

FクラスとAクラスを除いた四クラスは、女子が男子の1.5倍はいる計算になる。

本来なら数の上で女子が有利なはずだった。

しかし、前半組であるA B Cクラスの半分以上は入浴中。

後半のD E FはFの女子が極端に少ないため、前半組より余裕があり、前半の防衛に参加したA B C女子も入浴できるようにしているのだが。

結局のところ、女子側は戦力が多くは無く、二階にいる女子もC D併せて四十数名ほどしかない。特に点数の高いCクラスの女生徒が少ない以上、不利は否めないのだ。

しかし、ここでE F男子が参戦していることが大きな意味を持っていた。各フロアの戦力配置は、各クラスの代表者(A C E Fはクラス代表。B Dは代行)と教師の話し合いによって決定されていた。

『な、なんだこの人数は』

『CDクラスの女子全部合わせてもこんな数にならないぞ?!』

『くそっ！ とにかく攻撃だ！ 試獣召喚！』

次々に召喚していくCDクラス男子。その前に、二つの影が立つ。

「二年Eクラス！ 牧野慎吾！ 受けるぜ！」

「同じく二年Eクラス！ 如月琴代！ 受けます！」

Eクラスの凹凸カップル、小さな少年、牧野慎吾と大きな少女、如月琴代のコンビだ。

「「試獣召喚！！」」

二人の声が唱和され、混ざり合った声に導かれて二体の召喚獣が召喚される。

学制服に肩当てを付け、カトラスと呼ばれる剣を持った慎吾の召喚獣とチアガールの衣装で両手にボンボンを持った琴代の召喚獣が姿を顕した。

その後ろで、Eクラス代表の中林宏美も召喚獣を召喚しつつ号令をかける。

『相手は上位クラスよ！ CDクラスの女の子たちと協力して複数で当たるのよ！』

凜と張った声に、Eクラスの男女ともに応える。

その様子上に浮き足立つCDの男子。

『くそっこっちは四十人位しかないのに、向こうは百人近くいるぞ?!』

『無理だ突破出来ねえ!』

『……そうだ上から回り込め！ Eクラスが二階にいるんだ、三階は手薄のはずだ!』

言いが早い数人が三階に向けて走る。

階段を上がりきった彼らが見たものは、英語Wフィールドを展開した遠藤教諭と、Fクラス所属の筋骨隆々たる大柄な少年、前田俊夫以下十名。

「よお、ここは通行禁止だぜ？」

漢臭い笑みを浮かべる俊夫に怯む覗き魔。

「ちいつ?! 見張りがいたか!」

「構うな! 教師を倒しつつ強行突破だ」

「いくぜつ?! 試獣^{サモン}召喚!!」

召喚を開始する覗き魔達。

それを見て、俊夫が大笑する。

「はっはっは、その意気や善し! 試獣^{サモン}召喚!」

彼の言霊に導かれ、手甲脚甲の召喚獣が姿を顕す。

「さあ、喰い散らかしてやろう」

そう言っ、俊夫は召喚獣に足を進めさせた。

所は変わって一階食堂。

ここを守るのはA Bクラス女子約三十人弱と教師が三人。相対するはBクラス男子、約二十人。

「くそ、数と質で上回られてる。このままじゃあ……」

「やはり戦力不足か……」

「ちくせつ! 理想郷^{アガルタ}への階段は、すぐそこだつてのにつ!」

次々に駆逐されていくBクラス男子。

覗き騒動は、このまま鎮圧されるかに見えた。しかし……。

「……おかしいわ美春がどこにもいない……」

そうつぶやくのは、Fクラス本隊とは別行動の、ポニーテール帰国子女、島田美波。3フロアーに分かれた戦場を、説得の相手であるドリルツインテ少女、清水美春を探して往復する。

「……うむん。どこに隠れたのかねい。連絡が無い以上、大浴場に
いるはず無いんだけど……」

隣で思案する金髪碧眼の少女はクリスティーナ・ウエストロード。彼女らは、教員が大浴場の鍵を開け、入浴予定の子達が脱衣所に入り終えてから出発した。入れ違いになったとしても、大浴場前で守備についている明久達から連絡が来ないわけではない。

「どこかの宿泊室に潜んでいるのかしら？」

そう言って周りを見回すのは、いざというときの立ち会いのためについてきて貰った現国の木内教諭だ。若くて美人で、明るい性格と少しお茶目なところが人気だ。

「仕方がないねい。宿泊室を当たってみるかねい。まりりんに立ち会って貰えば問題は少ないよん」

「ウエストロードさん。さすがにその呼び方はどうかと思うのよ？
私は」

ちなみに木内教諭のフルネームは木内真理である。

「きにしなーい、きにしなーい」

歌うように歩き出すクリス。

一方で美波は浮かない顔のままだ。
と、その肩に手が置かれる。

木内教諭だ。

「島田さん、しっかりなさい。お友達を説得するんでしょ？ 先生
も力になるから、早く清水さんを見つけましょ」

そう言っつて片目を瞑ってみせる。

「あ……はい！」

木内に励まされ、美波は力強く頷いた。

大浴場前。ここには最終防衛ラインとして、鋼鉄の生活指導、西村宗一と、優しげで、どこかネジ一本締め忘れたかのような少年、吉井明久が陣取っていた。

「……まさか、お前とこんな風に並んで立つことになるとはな……」
「あはは、僕もそう思いますよ」

仁王立ちしたまま、微動だにせず言う西村教諭。それに対して隣に立つ明久は苦笑い気味に頷いた。

「まあ、ここまでこれる奴はいないだろう。曲がり角には、霧島、姫路、来島の三人に高橋先生。階段を下りてすぐの所には、土屋、工藤、大島先生。階段の上には坂本、支倉を始めとしたFクラスの連中と山田先生に木村先生がいる。よほどのことがなければ突破は出来んだろう」

「はい！」

西村の言葉に、大きく頷く明久。

結局、教師側に潜んでいるとおぼしき犯人は見つけられなかった。犯人を捜し出すには時間が無さ過ぎたとも言える。

しかし、事が起きた以上、動く可能性は高い。そこを押さえる事が出来れば……。明久はそう考える。

しかし、どこか釈然としない不安感も抱えていた。喉の奥に引っかかり、いつまでも取れない魚の小骨のような違和感。

結局、彼はその違和感の正体に気付くことは出来なかった。

「さて、主犯と黒幕はどう動くか……」

食堂から女子大浴場へと続く階段前で、雄二は小さく呟いた。Fクラスの戦力は、三階の

警戒チーム十名と階段前に20名ほどを配置している。これは召喚獣戦力としてより、壁としての役割が主となる。残りは須川亮を中心として、各フロアーの戦況に応じて投入される即応部隊として三階学習室で待機中だ。

「坂本君は主犯と黒幕が動くと思うの？」

そう180オーバーの引き締まった赤毛の少年、坂本雄二に訊ねるのは、Fクラスご意見番、小さなポニーテール少女、支倉ひばりだ。その彼女に、雄二は頷いてみせる。

「やつらは目的を達することが出来ていない。明日は移動日。勝負をかけるなら今日しかないはずだ……。そして、この不利な状況で動かないはずはない。どんな札を切ってくるかまでは見当がつかんが……」

「逃げちゃうつて事は？」

「無いこともないが、今更逃げるくらいなら、最初の覗きが失敗した時点で辞める公算が大きい。だのに、昨日は俺たちをダシに教師連中の戦力を削ってまで敢行している。そこまでやっている以上、何か理由はあるんだろうがな」

「うーん……」

顎に手を付き、考え込むひばり。その頭に雄二の手が乗せられる。「なににせよ。今はこの状況を乗りきらにゃならん」

「そうだね……あと、あたしの頭はアームレストじゃないんだけど？」

真面目に呟いてからジト目で雄二を見上げるひばり。

それを見下ろす雄二。

「……………」

「……………」

二人の間に、静寂が走る。

と。

おもむろにひばりの頭を撫で始める雄二。

「ちよっ?! 辞めっ?! 撫でるなあっ?!」

「はっはっは。支倉の頭は撫でやすいな、ちっちゃくて高さも丁度いいしな」

「ふえっ?! ちっちゃっ?! ちっちゃくないよっ?! あたし、ちっちゃくないからねっ!」

ひばりの抗議に聞く耳持たずに彼女の頭をかいぐり続ける雄二。

『必死なひばりタソ、萌へ』

『ああ、誰が見ても小さいのは分かりきっているのに、必死だ』
『くっ。坂本……。いつか殺します……。』

その様子を見ていたクラスメイト達が和み始め、一部から殺意が漏れ始める。

そんな時だった。

『きゃあっ?!』

『な、何であなた達が?!』

『どうなってるの?!』

食堂の前線付近から悲鳴のような声が挙がり始め、雄二とひばりが顔を引き締める。

A B女子で形成された前線部隊の向こうに見えた人影に、二人は驚愕した。

「おいおい……マジかよ」

「嘘……あれって久保君とAクラスの人達? 参加しないってアキちゃんと約束したんじゃない?」

呆然となる雄二とひばり。

ほかのクラスメイト達も大なり小なり驚きを隠せずにいる。

「くそ……こいつが奴らの札か？　どんな手を使ったかは知らんが、久保が明久との約束を破るなんて……」

「どうしよう？」

「Aクラスの男子は25人は居る。全員とは思えんがあの様子じゃ大半が参加してやがるな……。まずい、この局面でAクラス男子とBクラス男子の残存兵力が合流したら、手が着けられんぞ……」

突然の事態に、焦りを隠せない雄二。携帯を取り出し、番号をプッシュする。

「……須川か？　俺だ、坂本だ。やっかいなことになった。すぐに一階の食堂まで来てくれ」

そう言って携帯を切ると、周囲に指示を出す。

「よし、高杉、加藤、十人ほど連れて前線を援護に行ってくれ。木村先生も前へ出て下さい」

「分かったぜよ！」

「了解だ。代表」

「では山田先生、後は頼みましたよ」

「おう。後ろは任しときや」

返事をして高杉、加藤を中心とした十人が前線へ移動していく。木村教諭もほかの教員とフィールドが重ならないように前進していく。

「横田！　お前は下へと連絡だ。鉄人と明久まで伝え終えたら戻ってくれ。新田は階段を守ってくれ」

「了解！」

「わかりました」

返事をするや否や、走り出す横田。長身の新田恵太も、他のクラスメイトと共に、階段をぐるりと囲むように並ぶ。

「山田先生は連中が接近してきたら現国のフィールドをお願いします」

「任しときや」

指示を出し終えた雄二は、再び戦場へと視線を転ずる。
だから気付かなかった。

山田教諭の口元が、小さく歪んだことに。

「……試^{サモン}獣召喚」

言霊に曳かれ、姿を顕す使役獣。二丁大鎌を構えたそれは、顕現と同時に飛びかかる。

「キヤアアツ?!」

召喚獣を一刀の本に切り捨てられた女子が悲鳴を上げる。

「そ、そんな……。あの久保君が覗きだなんて……」

学年三席の成績にして、男子学年主席の成績を誇る久保利光。その、知的でクール、かつストイックなところにファンが多い。

もつとも理性的で、こんな犯罪じみた行為に参加するはずが無いと思われていた人物だ。

もつとも、彼に関する、ある噂を聞いていれば、女子風呂への覗きなどしないと、確信すら出来るはずなのだが。

ともあれ、そんな彼を含めたAクラス男子、計24人の参戦により、一階食堂の戦況はひっくり返されてしまった。

「久保君、何故ですっ?! あなたがこんな犯罪紛いの行為に手を染めるなんて!」

そう叫ぶのは、久保とはクラスメイトのメガネボブカット少女、佐藤美穂。召喚獣に鎖鎌を投擲させて牽制する。

「ふっ、すまないね佐藤さん。僕も男だという事さ……」

メガネのブリッジを指で押し上げながら応じる久保。その召喚獣が二本持っている大鎌の片方で弾きながら迫る。

「くっ?!」

必死でガードさせるものの、そのスピードに追従するのが精一杯だ。

展開されているのは古典のフィールド。理数系の美穂にとっては厳しく、点数も226とふるわない。

一方の久保は、文系。その点数も343と高い。

「終わりだよ。佐藤さん」

縦横に振るわれる二丁大鎌な、美穂は手も足も出ない。受けに徹していたが、それも長くは続かず、大鎌の一撃を受けてしまう。

「ああっ?!」

思わず声を上げる美穂の目の前で、彼女の召喚獣はバラバラに切り刻まれ、光の残滓となって消えていった。

第六十四問（後書き）

第六十四問、いかがでしたでしょうか？

何も解決しないまま、状況が動いていきます。

果たして、美春はどこへ行ってしまったのでしょうか？

そして、覗き騒動の行方は？

強化合宿編、クライマックスへっ！！

第六十五問（前書き）

第六十五問、更新しました♪

シリアスさんが降臨しておりますが、読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第六十五問

「みんな！　なるべく戦死を避けて！　古典の点数が低くなったら
後ろの木村先生の数学のフィールドまで下がるのよ！」

一階食堂における戦闘は、Aクラス男子がBクラス男子残存兵力
と合流したことで、戦況をひっくり返されてしまった。

主戦力の一人であった、Aクラスのメガネボブカット少女、佐藤
美穂が同じAクラスの男子、久保利光の手によって戦死したことも
大きい。

動揺して討ち取られるものが続出した。

そんな総崩れになってもおかしくない防衛隊を必死でまとめている
のが、Aクラスのまとめ役でもある木下優子だ。しかし、その表
情は、いつも強気な彼女とは思えないほど余裕がない。

主戦力であるAクラス女子十一人中、美穂を含めた五人が討ち取
られている。Bクラス女子も当初十六人居たのが半分近い七人討ち
取られ、九人にまで減らされた。

すでに戦力が六割を割り込みかねないところまで来ている。
いつ戦線が崩壊してもおかしくない。

優子は、召喚獣を操作し、Aクラス男子二人を相手取る。

繰り出される大剣を楯ではじきつつランスを突き出す。その一撃
に、バトルアクスを持ったもう一人があわてて防御する。

硬い金属音を響かせ、ランスをこすったバトルアクスが火花を弾
けさせる。

「くっ?!」

彼は、あわててその場から飛び退き、追撃を警戒する。

が、優子のランスは彼ではなく、崩したバランスを取り戻そうと
四苦八苦している大剣の方へと突き出された。

「あっ?!」

無防備にその一撃を受けた大剣の召喚獣は、あっさり点数がゼロになる。その様子に、バトルアクスが急いで優子に迫った。

しかし優子は落ち着いてその一撃を、右へのサイドステップで避け、裏拳のように楯で殴りつける。その攻撃に体勢を崩すバトルアクス。

その隙を優子が見逃すはずもなく、体をねじるように一歩踏み出しながらランスを突き出す。

それを喰らったバトルアクスは、簡単に戦死してしまう。

その様子を見て、優子は軽く息を吐きながら周囲を見回した。

「……なんとか持ち直したかしら」

彼女がそう漏らしたとき、その視界に一つの影が現れた。

「……やあ木下さん」

「久保君……」

メガネのブリッジを押さえながら立つ少年、久保利光。

彼が目の前にたつてなお、優子は信じられなかった。

「久保君……何故なの？」

「フ……愚問だね。漢たるもの、覗きのひとつくらいできなくてどうするんだい？」

両手を広げ、とうとうと語る彼に、優子は頭を振る。

「違う！ アタシの……アタシの知ってる久保君は、“女子”風呂を覗いたりしないっ！！」 妙に《女子》が強調された気がする。

「……僕は君が思っているほど真面目ではないし、きれいな人間ではないんだよ……試獣召喚^{サモン}」

言霊に導かれ、法陣の門をくぐり、一匹の使役獣が姿を顕す。顕現したソレが二丁大鎌を構えると、優子の召喚獣もランスを構えた。軽くにらみ合い、得物を持つ手に力が入る。足先に力が入られ、わずかに腰が落ちた瞬間、二匹の獣は、飛び出していった。

「一階にAクラスの男子が？」

場所は変わって二階。その報告を受けたのは、CDEクラス連合の防衛隊をまとめる、Cクラス代表小山友香。

その隣に立つ、Eクラス代表の中林宏美も眉をひそめながら聞いている。

「確かなの？」

確認するように訊ねる友香に、伝令役の少女がうなずく。

「はい。突然の事に、一階の防衛陣はあつというまにボロボロに……Fクラスの男子も協力してくれてますが、このままじゃ突破は時間の問題かと……」

少女は悄然とした様子でうなだれてしまう。

そんな彼女の肩に、手が乗せられた。ソバージュにヘアバンド。

勝ち気な表情の彼女は中林宏美。

「大丈夫よ。あたし達の戦力なら、Aクラス男子だつて制圧できる。覗きなんてさせやしないわ。そうでしょ？ 小山さん」

「……そうね。こちらに来ていた覗き魔は全員取り押さえたし、二階から奇襲をかけましょう。CDクラスはこのまま男子側の階段を下りて彼らの後背をつくわ。Eクラスは女子側の階段を下りて、そのまま防衛チームに合流してちょうだい」

「わかったわ！」

友香の指示に、宏美は大きくうなずき、Eクラスへ指示を出していく。

「さあ、こちらも動きましょう！」

CDクラスを促して移動を始める友香。不安がないわけではない。二階での防衛戦で、CDの男子は完全に制圧したが、防御側の被害もバカにはならなかった。

CDE併せて百人近くいたのだが、現在七十人ほどにまで減っており、生き残っている者も少なからず被害を受けていたからだ。

そんな状況でAクラスと戦うとなれば、大損害は免れないだろう。「でも……やらないとね」

「……？ どうしたの？ 代表」

つぶやいた言葉を、近くにいたクラスメイトに聞かれたらしい。にも関わらず、軽く笑ってみせる友香。

「ん？ 何でもないわよ。行きましよう」

そう言つと先頭を切つて歩き出す。不安を見せるわけにはいかなかった。

彼女は、クラスの代表なのだから。

二階。Dクラス女子に割り当てられた部屋で、少女は一人うずくまっていた。オレンジの髪を頭の両側で縛り、くるくると螺旋を描くようにロールした髪型。いつもなら少々高飛車な雰囲気のにじませる顔が、すっかり覇気を無くし、虚ろな表情で何事かを呟いている。

と、部屋の扉が開け放たれた。

「美春！」

飛び込むように部屋に入ってきたのは、赤みの強い髪のポニーテール帰国子女、島田美波。

続いて、金髪碧眼の少女、クリスティーナ「ウエストロードことクリスと、普段なら優しい弧を描く眉を寄せている木内教諭も入室してくる。

「美春、あんたどうして……」

美波はそこから言葉が続けられなかった。顔を上げた美春がこちらを向いたから。

彼女のその顔に浮かぶのは、空虚。

美波は絶句した。美春のこんな顔は見たことがない。彼女は感情豊かで、表情がごろごろ変わる愛らしい女の子だったはずだ。

「み、美春？ どうし……」

「なみなみ、待ちなさい、様子がおかしいわ」

美春の異様な様子に、美波は心配げに近づこうとするが、クリスに押し留められてしまう。

「……」

不意に美春の口が動いた。

それに気づいた美波が、美春へ声をかける。

「？ なに？ どうしたの？ 美春」

その声に合わせるように、美春の口は音を発し始めた。

「おね……さま……」

「どうしたの？ 美春。なにがあつたの？」

「……声」

「声？ 声はどうしたの？」

美春の答えに、美波がオウム返しに訊ねる。

すると、美春は視線を落としながら口を開く。

「……声が……聞こえるんです。お姉さま」

「……なんて、聞こえるの？」

少しの逡巡とともに問いかける。

「……望みを……叶えろと……」

「望み？」

「ええ、そうなんです……。『お前の望みを叶えろ、蹂躪し、征服し、犯し尽くせ』と……」

その内容に、三人は息を呑む。

「昨晚からずっとなんです。何をしていても、耳を塞いでいても、音楽でかき消そうとしても、聞こえてくるんです……。今も……聞こえてるんです。耳元でかなり立てるように、お姉さまを『島田美波を犯し尽くせ』って……」

再び顔を上げた美春は、ひきつったような笑みを浮かべていた。

「こ、こんなの……イヤです……お姉さまとなりたかったのは……こんな……暴力的な……っ?!」

呟く美春が、突然目を見開き、両の耳を手で塞いだ。

「イヤッ！ イヤイヤイヤッ！ お姉さまになりたいのは、もっと

甘い関係ですっ！ いつも一緒に居て！ 笑顔を向けて欲しいだけです！ 愛を詩って欲しいんです！ そんなことしたくありません！」

己にしか聞こえぬ声にあらがおうとする美春。その左手首が輝き赤黒い光が溢れる。

「いやあああああつっ！！」

悲鳴のような叫びとともに、その光は部屋一杯に広がった。

一階食堂での激闘は続く。

「もうダメっ！」

あきらめるような声が響いて、Bクラス女子の召喚獣が撃破される。

それを横目で見ながら、優子は利光の猛攻をさばいていた。

「やるね、木下さん」

「当たり前よ！」

強気に言い返すが、余裕はない。

Aクラスは成績こそ優秀だが、リーダーシップをとれるような人間が少ない。

こういった場面で指揮を執るのは、基本的には優子の役割だ。また、一階にいる女子でもっとも点数が高いのも優子である。

従って、彼女が倒されることは、戦力的にも全体士氣的にもマズイ。優子はその事をよくわかっていた。だからこそ、後方に陣取っていたのだが、Aクラス男子の攻撃で戦力を削り取られ過ぎた今となっては、彼女も前線に立たざる終えなかった。どちらにしても、ここで利光を討って捕らえなければ、形勢の逆転は無理である。

「タアアッ！！」

気合いの籠もったランスの一撃を、利光の召喚獣へ繰り出す優子の召喚獣。

風を切り裂き、空気の壁を貫くように突き進む槍の先端が、利光の召喚獣の胸板へと向かう。

「……甘いよ」

しかし、利光は動じることなく、二本の大鎌を交差させて穂先を押さえ込む。

「あ……」

武器を押さえ込まれたのを見て優子は青ざめた。利光は召喚獣にランスを踏みつけさせ、二本の大鎌を振りかぶった。

「終わりだよ」

右腕が振るわれ、大鎌の鋭い切っ先が、優子の召喚獣の首へ吸い込まれ……る事無く、左手の楯に阻まれる。

が、すぐさま左腕が動き、もう一方の凶刃が迫った。

「ダメ！」

思わず目をつむってしまう優子。

『まだ諦めるのは早いぜよ！』

聞こえてきた声に顔を上げて見ると、自分の召喚獣に迫っていた死の刃を着流しの召喚獣が、手にしたイカリで防いでいた。

そして優子の両隣に、二人の少年が姿を現した。

「ふー、間一髪間に合ったき」

息を吐きながら言うのは、バサバサの髪に浅黒い肌と太い眉。そして頬の傷が特徴的な少年、高杉総司。

そして、優子を挟んで反対側には、目を瞑っているようにしか見えない糸目の少年、加藤武が立つ。

「気を抜かないでくれるかい？ 相手は強敵だ。試獣召喚！^{サモン}」

武の言霊に導かれ、魔法陣が広がる。

幾何学模様のそれはゆっくり回転し、‘門’となる。

そして、少し間抜けな破裂音とともに、小さな使役獣が姿を顕した。

文月の制服を着た武をデIFORMメしたかのような姿で、右手に絵筆、左手にスケッチブックを持ち背中に小さな小さな羽がある。

その頭上には、302と表示されている。

ちなみに総司の方は64だ。

『助けに来たぞ!』

『これ以上はやらせないぜ!』『いくぜいくぜいくぜえっ!』

続くように聞こえてきた声に、優子が視線を転ずると、威勢の良い声とともに、数人の男子生徒がAクラス男子へ挑んでいき……蹴散らされていた。

「……助けに来てくれたのはうれしいんだけど……」

「……なんか、済まんぜよ」

「ははは……」

Fクラス男子の勢いだけのふがない様に、優子が呆れたような残念なものを見るような顔になり、総司がうなだれ、武が苦笑いする。

そこに声が切り込んだ。利光だ。

「やれやれ……漫才はそこまでしてくれないかな?」

合いも変わらずメガネのブリッジを、右手の人差し指と中指で押さえながら悠然と立つ。

「気をつけて、今の久保君はとんでもなく強くなっているわ」

「……ま、気配で何となく分かるぜよ」

「……」

優子の言葉に軽い感じで返す総司だが、そのこめかみに汗が一筋つたう。一方で武には、優子と総司に見えないものが見えていた。利光の額の辺りに、ピンク色の光がこびり付いているのだ。

「（あれは……妖力の残滓か?）」

軽く眉を寄せる武。しかし、それがなんなのを考えている暇は無さそうだった。

第六十五問（後書き）

第六十五問、いかがでしたでしょうか？

戦闘はまだ続きます。

戦況は変化していきますが、防衛側が不利なことには変わりありません。

果たしてどうなるんでしょう？

そして、美春はどうなってしまったのか？

次回もよろしく願います！

第六十六問（前書き）

第六十六問、更新しました。

シリ阿斯さんが降臨中ですが、読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第六十六問

その部屋は、赤黒い光で満たされていた。

そのまがまがしい色に、部屋の中がすべてゆがんで見えるような錯覚を抱いてしまう。

その場に居合わせた四人のうち、ポニーテール帰国子女の島田美波と、現代国語教諭の木内真理の二人は、その雰囲気飲まれてしまっている。

そんな中においても、金髪碧眼の少女、クリスティーナ・ウエストロードは、油断することなく、もう一人の少女を見つめていた。

オレンジ色の髪を頭の両側で縛って、くるくるとローリングさせたドリルロールツインテールの少女、清水美春。

悲鳴を上げ、手首から赤黒い光を放って以後、ぴくりとも動かない。

が、その体から放たれる異様な気配は尋常ではないものだ。

「ね、ねえクリスこれってあの時の……」

「……だねい。竹原教頭が張ったフィールドと同じ感じだよん」

不安そうに訊ねる美波に答えるクリス。その間も視線が美春から離れることはない。

そんな二人の後ろで、木内教諭も事態を何とかしようとはしていた。

「召喚承認！……ダメですね。私のフィールドは展開できません」

自分が承認可能な現代国語のフィールドを展開、干渉を引き起こそうとするが、フィールド自体を展開できない。

「どうしようクリス。ウチ、どうしたら……」

美波がクリスに指示を求めようとしたとき。

美春が唐突に立ち上がった。

まるで、繰り糸に引き起こされる人形のように。

「……試獸召喚^{サモン}」

こぼれるように紡がれた言霊に従い、美春の足元に赤黒く、まがましい魔法陣が広がり、美春の召喚獣が顕れる。次の瞬間、美春の左腕からまたもや赤黒い光が放たれると、彼女の召喚獣が体を掻きむしるように苦しみだす。

木が軋むような音を響かせ、召喚獣の右腕が長く伸びていく。装備の鎧を砕きながら胴が太く長くなっていき、左腕も長く伸びていき、合わせるように両足も、股関節が壊れたかのように真横へ開きながら細く長くなっていく。

そして、首が太くなり、苦しみに涙を流す目が、ぐりぐりと位置をずらしていき、鼻と口が前へと突き出していく。

唐突にバランスを崩し、前へ倒れ込んだかと思うと、四つん這いの姿になりながら体を支える。

すると、今度は尻のあたりが盛り上がり、飛び出すように粘液をまき散らしながら長いしっぽが伸びた。

その姿は、まさにトカゲのよう。いや、全体にぬめりを帯びているあたり、イモリと言うべきか。

それでも、その頭に申し訳程度にオレンジの髪とドリルロールツインテがあることで、かろうじて美春の召喚獣だとわかる。

「ま、また怪物っ?! ウチ、こういうの苦手なのにっ!?!」

美春の召喚獣が変態したことに悲鳴を上げる美波。

その一方で、クリスは美春の様子を観察していた。

「(やつぱり教頭と同じ腕輪……。でも、いつ腕にはめたの? うずくまっていた時にはなかったはず。いったいいつ……)」

己にしか聞こえぬほど小さく声に出し、美春の様子を確認しているクリス。しかし、そんな余裕はここまでだった。

無拳動で跳ねるトカゲ。その金色の瞳には、恐怖にゆがむ、美波の顔が映り込んでいた。

一階食堂。女子による防衛線が引かれたそこでの戦いは、再度逆転の時を迎えていた。

「Cクラス山下清美っ！！ そのAクラス男子に数学勝負を申し込めます！」

「同じくCクラス金井晴子もですっ！！」

「Dクラス玉野美紀！！ こっちのAクラス男子に現国勝負です！！」

「Dクラス川上初音！」

「おなじく菅生由美もです！」

『な、なにっ？！ 背後から女子がっ？！』

『くそっ！ 敵の援軍だ』

『だ、だめだっ？！ やられるっ？！』

A Bクラス男子達の背後に表れたのは、C Dクラス女子。

背後からの奇襲に驚いた隙に、二対一、三対一の勝負を挑まれ、討ち取られるAクラス男子。

「一人ずつ、確実に討ち取るのよっ！」

指示を出しつつ足を進めるのは、Cクラス代表小山友香。

それに焦ったAクラス男子が、目の前のBクラス女子の召喚獣に止めを見舞おうと剣を振りかぶった。

「ダ、ダメえっ？！」

思わず顔を背けてしまう。

しかし。

金属を、金属で弾く音が響き、凶刃は彼女の召喚獣に届くことはなかった。

「大丈夫か？ お前ら」

その少女を助けた人物を見て、その場の人間誰もが驚いた。

「……どうしたんだ？ みんなして鳩が豆鉄砲食らったような顔して……」

その男こそ、卑怯で知られたBクラス代表、根本恭二だったからだ。

「……だ、だって代表が私たちを助けるなんて……」

「てつきり覗きに参加しているものだ……」

助けられた女子を含め、Bクラスの女子達が戸惑うように顔を見合わせる。

「ま、お前等の認識なんてそんなもんだろっな」

しかし、根本自身は気にした風でもなく、覗きに荷担するAクラス男子に切りかかる。

『な、なんで根本みたいな野郎が女子に味方してるんだっ?!』

『お、俺が知るかつ?! おいつ、お前Bクラスだろ? ということだよ』

『知るかよっ! 代表とか言っただって、誰も相手にしてねえんだからよ!』

『舐めやがって、ハブられた腹いせに俺たちのじゃまをする気だなっ?!』

女子に味方するように現れた根本の姿は、男女問わずに波紋を呼んだ。

それは、双方のリーダー格にも及んだ。

「な、なに? 根本君は味方なの?」

「……なるほど、彼はそっちに着いたわけか」

少しきつめの美少女、木下優子と、クールな眼鏡少年、久保利光の二人は、たがいの召喚獣に刃を交えさせながら混乱の主を見る。

「おい、木下姉」

「な、なによ」

と、その当人たる根本が、優子に声をかける。

「ウチの女子連中は後退させるぞ。人数も半分以下になったようだしな。これ以上は無理だ」

「ま、待ちなさい！ 勝手なことしないで……」

「Eクラスも到着している」

言いながら根本は親指を立てた右手で後ろを指し示す。

それと同時に女子側の上り階段から、代表の中林宏美を先頭にEクラスの面々が続々と降りてきた。

「遅くなつてごめんなさい！ Eクラス一同、一階の防衛に参加するわ！」

「俺たちFクラスもだ！」

声を上げた中林に続いたのは、Fクラスの須川亮率いる即応部隊だ。

『おいおい……なんて数だよ』

『くそ、突破できるのか？』

『いまさら引けるかっ！』

総勢で百人才オーバーの戦力となった防衛部隊。質では劣るものの覗き側の五倍を超える人数だ。

勝敗は決したかに見えたが……。

「……ねえ坂本君。あたしたちは動かなくて良いの？」

「……どうもな。流れはこちらに向いたはずなんだが……」

ポニーテールの小さな少女、支倉ひばりに訊ねられた背の高い赤毛を逆立てた少年、坂本雄二は顔をしかめた。

確かに流れは防衛側に傾きつつある。

だが雄二は、漠然とした不安感を消せずにいる。

「……まだ、切っていない札も多いはずだ。Aクラスを戦場に投入するのと同レベルクラスの札がな」

「でも大丈夫じゃない？ 一階にこれだけ人が集中してるんだし」

「確かにこれだけ戦力が集中していれば、ウチの主力を集めなくても……」

ひばりに答えていた雄二の表情が固まる。

その様子を不思議そうに見上げるひばり。

「？ どうしたの？ 坂本君」

「……不味いかもしれん。須川っ！！」

少し声をうわずらせながら、前方の戦場で戦う亮に声をかける雄二。

よく通る彼の声は、亮の耳へと確実に届いたようで、そのまま戦線を離脱してくる。

「どうした？ 坂本」

「三階の前田達はどうした。一緒じゃないのか？」

「前田？ 前田なら三階の防衛チームと一緒に置いてきたぞ？ 立ち会いの遠藤先生も一緒だ。それがどうか……」

「連絡は取れるか？」

「携帯の番号なら登録してあるが、自分でかければ良いじゃないか」
「……」

亮に言われた雄二は、無言で携帯を開き、アドレス帳を見せる。
登録されているのは一人。【霧島翔子】だけだった。

「何で翔子ちゃんだけ？」

「アイツ、機械オンのくせに、俺のアドレスを登録したい一心で削除と登録の方法を覚えたらしい……。で、俺に自慢したくてこっそりやったんだと……」

渋い表情で質問に答える雄二。

それを聞いたひばりと亮は微妙な顔になった。

「……もう、翔子ちゃんは……」

「ノロケにしか聞こえねえ。自分がやられたらイヤだが……」

「そういうことだから連絡を取ってみてくれ。無事ならこっちに合流するようにも伝えてほしい」

「わかった」

雄二の指示を聞いて、亮は携帯を操作する。
が。

「？　なんだ？」

「どうした？　須川」

「いや、圏外にいるらしい」

「圏外だと？　……どういうことだ？　……イヤな予感がする。支倉、島田かクリスにかけてくれ。須川はもう一度前田にだ」

亮からの答えに軽く思案した雄二は、新たにひばりと亮へ指示を出す。

「う、うん。じゃあクリスにかけてみるね？」

「オレはリダイヤルか」

二人が携帯を操作するのを見て、雄二も携帯を操作する。

「……出てくれ、翔子」

「……雄二？　どうしたの？」

携帯から聞こえてきた幼なじみの声に、軽く息を吐く。

「……いや、そっちは異常ないか？」

「……大丈夫、愛子達も、吉井達も問題無さそう。そっちは？」

「……なんとか押し返しているところだ。引き続きそっちを頼むぞ」

「……任せて」

そんな風にやりとりしてから、電話を切る雄二。ふと、顔を上げるとひばりも亮も顔色が良くない。

「……須川、支倉、そっちはどうだ？」

「だめだ。前田どころか武藤や朝倉、近藤にもつながらん」

「こっちもだよ……。クリスどころか、美波ちゃんにもつながんない……」

ひばりは不安げに眉を寄せる。

と、その頭に、手が乗せられた。雄二である。

「大丈夫だ、支倉。前田とクリスは召喚獣の扱いもうまいし、いざというときの腕っ節もある。だから大丈夫だ」

念を押すように、自身も納得させるように、雄二は言葉を紡ぐ。

「……うん」

彼の言葉を聞いて、ひばりも小さくうなずいた。

「……よし、須川は前線に戻ってくれ。それから、今の話は他言無用だ。余計な混乱を招きかねない」

「……わかった」

雄二の指示に、苦虫を噛みつぶしたような顔でうなずいた亮は、きびすを返し、前線へ戻っていく。

「……ねえ坂本君。やっぱり前田君達の様子を見る……」

「ダメだ」

心配そうに訴えてくるひばりの言葉を、鋭く切り捨てる雄二。そのことに、ひばりは少し驚いて、顔を伏せてしまう。

「……すまん。だが、現状優位になったとはいえ、薄い氷の上を歩いているような状態には違いないんだ。わかってくれ」

苦々しく顔をゆがめる雄二。

実際、一階の戦闘は防衛側が優位になったとはいえ、そのバランスは危うい。Aクラス生徒一人の戦力は、下位クラス三人分にもなる。数の上で有利となったからと言っても油断はできない。それだけではなく、まだ敵の札はすべて見えたわけではないのだ。

「（奴の狙いはこちらの大札か？　なら、次はどう動く？　本当の狙いは何だ？　くそ、情報が少なえ）」

しかし、雄二はあきらめることなく思考を続ける。相手の打ち筋を読むために。

「おおおおおっ！！」

裂帛の気合いとともに、手甲脚甲だけを装備した召喚獣が突き進

む。

その拳が、相手の胸板に突き刺さり、鋼と鋼がぶつかる、かん高い音が響いた。

「やるね前田俊夫君。これだけ能力の差があっても引けを取らないなんて」

「そりやどーも」

己の召喚獣の攻撃に小揺るぎもない相手に、俊夫は珍しく焦りを覚える。

三階。男子側階段を防衛していた俊夫たちは、突如として広がった紅い空間に閉じこめられていた。

姿を現すのは一人。Bクラス次席の少年、後藤祐一。

柔和な笑みを浮かべてたたずむ彼に、不気味さを感じずにはいられない。

そして、彼に呼び出された召喚獣は、その体を、特に胸板と両腕をが太く、分厚く、巨大に変化させる。

毛むくじらの巨体は、頭が天井に届くのではないかと思うほどだ。

丸太のような腕を振り回し、武藤や朝倉の召喚獣を薙ぎ払って戦死させつつ迫りくる後藤の召喚獣。

「くそ、パワーと防御力に特化してるのか」

召喚獣の攻撃がほとんど通っていないことを感じた俊夫は、我知らず呟く。

「後藤君！ やめなさい！」

声とともに、矢が飛来し、後藤の召喚獣へ向かう。放ったのは、英語Wの担当教師、遠藤教諭だ。

アーチェリーを構えたその召喚獣から、二の矢、三の矢が放たれていく。

その一本一本が、高得点者ならではの、必殺の威力を秘めている。それを以てやっとダメージが入っているようだった。

「さて、遊びは終わりにしようか」

その言葉とともに、後藤の召喚獣が素早く殴りかかる。召喚獣でも、俊夫でもなく、“遠藤教諭”に向かつて。

「くそっ?!」

後藤の意図は読める。

が、乗らずにはおられなかった。

自らの召喚獣に全力で割り込ませる俊夫。

豪腕を受け止め、威力を削りながらも戦死してしまう俊夫の召喚獣。さらに俊夫自身もその拳の前に身を踊らせる。

「前田くんっ?!」

「うおおおおっ!!」

廊下が砕けるほどの震脚を響かせ、全力で後藤の召喚獣の軌道と威力を逸らす。

体がバラバラになりそうなほどの衝撃と、全身の骨が砕けるのではないかと思うほどの軋みを聞きつつ、その豪腕が逸れるのを確認する。

だが、その衝撃が生み出した余波を消しきれず、遠藤教諭もろともはね飛ばされてしまう。

「がっ!」

「きゃうつ!」

廊下に転がる二人。俊夫はとっさに受け身をとって体勢を立て直そうとしたが、体は言うことを聞きそうになかった。

後藤はそんな俊夫を見下ろす。

「……さて、君をこちらの戦力にできれば最上だったけど。その様子じゃ役に立ちそうもないね。まあ、数に限りもあるし、男の下僕はあまり欲しくないからね……」

「……ど、どういうことだ……?」

「はは、どういうことだろうね? 考えてみたまえよ」

痛みをこらえながら問う俊夫を見やりながら笑う後藤。彼の召喚獣が動き出し、己の体毛を数本抜き取る。

それを廊下にまくと、三匹の猿のような召喚獣に変化した。

「あとはコイツらとでも遊んでいてくれたまえよ。僕は僕の念願を果たす。ははは」

笑いながら立ち去る後藤。それでも紅いフィールドは消えることはない。

俊夫は、そんな後藤を見送ることしかできなかった。

第六十六問（後書き）

第六十六問、いかがでしたでしょうか？

リアルファイト最強の男、前田俊夫敗れる！

そして姿を現した後藤はどこに？

ピンチの美波の運命は？

クライマックス、怒濤の進行中ですっ！！

次回もよろしく願いしますねっ！！
♪

第六十七問（前書き）

第六十七問、更新しました♪

シリ阿斯さん、降臨中でございます♪

それでは、読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第六十七問

「キヤアアアアッ？！」

大きく口を開けて飛びかかってきた、イモリの化け物に、癖のある赤毛をポニーテールにした少女が悲鳴を上げる。帰国子女でもある彼女、島田美波は己の身にふりかかるであろう脅威に、目をつむって顔をそむけた。

そのとき、部屋いつぱいに言霊が響き、硬いものが重いものにぶつかるような音がする。何かと彼女が顔を上げると、翼を持ち銀色の鎧と槍のような銃を持った召喚獣が、イモリの横ツラに跳び蹴りを決めたところだった。

「なみなみもまりりんも早く召喚してっ！！ 召喚獣でなきゃこの化け物には対抗できないっ！！」

そう叫ぶのは金髪碧眼の少女、クリスティーナ・ウエストロードことクリス。

「う、うん！」

「わかりました！」

『^{サモン}試獣召喚！！』

異口同音に紡がれた言霊に従い、二体の召喚獣が姿を顕す。

サーベルに軍服姿の美波の召喚獣と、桜色の着物を右腕だけほどけさせて露出し、長巻と呼ばれる柄の長さが刀身と変わらないほどの太刀を携えた、木内教諭の召喚獣だ。

クリスの召喚獣に蹴り飛ばされたイモリの化け物は、さらに二体の召喚獣が顕れたことに警戒してか、体勢を立て直しても動きを見せない。

その様子に、クリスが銃を構えさせる。

「そつちが動くのを待つてやる必要無いよねい」

手にした銃から、次々と弾丸が放たれ、イモリへと向かう。それを跳躍してかわしたイモリは、壁に張り付きそのまま縦横無尽に動き出す。

「壁も天井も関係ないのっ?!」

しゃかしゃかとき回るイモリを見て、美波は思わず声を上げる。木内教諭も今まで戦ったことのないタイプの相手に、戸惑いを隠せずにいる。

「こいつは厄介だよんつと」

クリスは自分の召喚獣を飛行させ、イモリの動きを追尾させる。

「そこだよんつ!」

声とともにクリスの召喚獣が振り向き、抜き撃ちのように槍を振り回して射撃する。

「ギヤウっ?!」

弾丸は果たしてイモリに命中し、この怪物に悲鳴を上げさせた。動きは早いものの、防御力はさほどでもないらしい。しかし、イモリはさらに速度を上げ、床、壁、天井を駆け巡る。

「ああもっ! うつとうしいわね!」

その行動にイラだったのか、美波が召喚獣を突進させる。

「なみなみダメっ!?!」

「え?」

完全に遅きを失しながらも警告を発するクリス。対して美波は意味が分からないという顔になった。

そんな間隙を付くかのようにイモリが跳躍し、さらに壁を蹴って美波へ向かう。

「う? あ……?!」

思わず硬直してしまう美波。

そんな彼女の前に、長巻を持った木内教諭の召喚獣が割り込んだ。「生徒には手を出させません!」

長巻を一文字に構え、イモリの突進を受け止める。これを好機と

ばかりに撃ちまくるクリス。

しかし、イモリはすぐさま跳躍し、それを避けてしまふ。その動きに、クリスは鋭く舌打ちする。

「ッ！ はしっこいよん。なみなみ大丈夫？」

「う、うん、大丈夫よ？ クリス。木内先生もありがとうございます」

クリスから声をかけられうなずく美波。そして窮地を救ってくれた木内教諭にも礼を述べる。すると木内も美波に、にっこり笑いかけた。

「大事無くて良かったわ。こんな怪物、早くやつつけて清水さんとお話をしましょうね？」

「はい！」

この状況で、まだ美波とドリルツインテ少女、清水美春のことを気にかけてくれる木内教諭に、美波は力強くうなずく。

「二人とも！ 来るわよっ！」

クリスの鋭い警告に、美波と木内も身構え、おのおのの召喚獣も武器を構える。

そこへ飛びかかるイモリ。その一撃を木内の召喚獣が受け止め、美波の召喚獣がすかさず切り裂く。痛みを感じるのか、その太くて長い胴体をくねらせもかくイモリ。

さらにクリスの召喚獣が追撃を行い、ダメージを与えていく。

「キュウアッ?!」

悲鳴を上げるイモリ。

「そんなに強くないみたいね」

かすかに笑みを浮かべて美波がつぶやく。

その時、イモリの体が大きく震えた。

「な、なに？」　ぬめりを帯びた表皮を突き破って顔を出すのは、無数のウロコ。それも鋭くとがっており、ヤマアラシのようになっている。そして、四肢の指先からも、肉を突き破るようにして、鋭い爪が伸び、のっぺりしていた口にもギザギザの牙が生えてきた。

「こ、これは……」

「随分とまた攻撃的になったねい」

あまりの変貌に、美波も木内教諭も絶句し、クリスも軽くつぶやく。

それを聞いてか突進するイモリ。

それに立ち向かう、美波と木内の召喚獣。

「たああっ！」

「ハッ！」

気合いを込めた声とともに、サーベルと長巻を振るいながらイモリの左右へ分かれて踏み込む。

それぞれの刃がウロコを砕き、ダメージを与えはする。

が、勢いを止めることなく、イモリは跳躍。大きな口を広げて三人に襲いかかる。

「危ないっ！」

とつさに反応したクリスは、木内を突き飛ばし、美波を押し倒して覆い被さった。

「た、たた……。大丈夫？ なみなみ？」

「う、うん……。ふえっ?!」

掛けられた声に顔をあげる美波。すると、思わぬ距離にクリスの顔があり、顔を赤らめる。

次の瞬間。

「キシヤアアアッツ!!」

雄叫びをあげるイモリ。

美波とクリスが何事かとそちらを見ると、怪物が黒いオーラをまとって二人を……。否、クリスをにらみ付けていた。

「わ、わーお。おねーさん目え付けられたかなん？」

軽口を叩きつつ、美波の上からどいて、彼女から数歩離れてみる。しかし、イモリの目はクリスにターゲットONしたかのように外れることはない。

「ク、クリス……」

危ない雰囲気、身を起こしながらクリスへ声をかける美波。

それをキツカケとして、イモリがクリスへ跳躍した。

迫る顎に、クリスの顔が恐怖でひきつる……………などということはなく、不敵な笑みが浮かぶ。それと同時に、イモリの頭頂に銀色の閃光が突き刺さり、床にたたきつけられた。

その隙を逃がさんばかりに、銀色……クリスの召喚獣が撃ちまくる。

幾度と無く、火薬の破裂音と着弾の衝撃を響かせ、イモリのウロコを砕く銃弾の雨。

それが、リロードのために一時止んでしまう。

すると、その隙を待っていたかのように、イモリが垂直に跳躍する。

その先にいるのは、翼を広げた銀色の召喚獣。あわてて身をよじったものの、衝撃を受け、召喚獣の鎧が砕けて金色の髪がばっさり切り裂かれる。

舞い散る金系の向こう、天井に‘着地’したイモリの瞳に、金髪の少女の姿。

金系を蹴散らし、間髪入れずにクリスへ跳ぶイモリ。

「！！」

その状況に、今度こそクリスの表情に焦りが浮かび、息をのむ。

「させない！」

鋭い声とともに、イモリの横っ面に、きれいに揃えた短い足がたたき込まれた。美波の召喚獣が、勢い良くドロップキックを見舞ったのだ。

そして、吹き飛んだ先には、長巻を大上段に構えた木内教諭の召喚獣。

「これで終わりです！」

声とともに振り降ろされる長巻。

その刃が、

銀色の斬閃を引き、

イモリの鋭いウロコへ、

たたき込まれ

無かった。

「え？」

「なに？」

「うそ……」

霞のごとく消えゆく木内の召喚獣。それを見て呆然となる三人。
イモリは壁に激突し、砕けた残骸に埋まっていく。

「ど、どうして召喚獣が……」

呆然とつぶやく木内。一方で美波とクリスは、あわてて自分の召喚獣を見る。

何事もなかったたずむ二匹を見て、軽く息を吐く二人。

その向こうで、木内は焦りを隠せない。

「試獣召喚！！^{サモン} 試獣召喚！！^{サモン} 駄目だわ……」

木内が何度言霊を紡ごうとも、召喚獣を呼び出す召喚門たる魔法陣は展開されない。

「どうなっているの？」

シヨックにうなだれる木内。

そして、ガレキをはねとばし、イモリが姿を現した。

「来るっ！！ 構えて美波！！」

「ええっ！！」

クリスに促され、召喚獣を身構えさせる美波。

それを見届けると何かに気づいたように顔をあげる金髪の少女。

「そうだわ！ 木内先生は清水さんを！！ 何かあるかも！」

「！ ええ！ わかりました！」

彼女の指示に、木内も動き出す。

そして、クリスはイモリを見据えた。

「さあて、やるわよ？ 美波！」

「オツケークリス！」

そのやりとりで、二体の召喚獣は飛び出していった。

一階食堂。

主戦場たるこちらでも、異変が起きていた。

「しよ、召喚獣とフィールドがっ？！」

数学の木村教諭の悲鳴のような声にそちらを見ると、教諭の召喚獣が霞のように消え去り、召喚フィールドが、風船から空気が抜けていくようにしぼんでいく。

『な、なにこれっ？！』

『お、おい、どうなっただ？！』

『いったいなにが……？』

男女、教师生徒を問わずに混乱が広がっていく。

その様子を少し離れた位置で見る、ポニーテールの小さな少女、支倉ひばりは、隣に立つ、長身で赤毛を逆立てた少年、坂本雄二に声をかけた。

「な、なにが起こってるの？ 坂本君」

「わ、わからん。だがこいつは異常事態だ……。？！ あれは……？！」

ひばりの問いに答えていた雄二の視界に、男子側の階段から赤黒いもやがあふれ出てきたのが見えた。

ちょうど階段のそばに居た、Ｃクラスの女子は、食堂内の異変に気を取られていて、それに気づくのが遅れた。

階段口にかかる、巨大な手。毛むくじらのそれに気づいて見上げる女子の顔が、恐怖に染まる。

「きゃあああああつっ？！？！」

つんざくような悲鳴に、男女ともにそちらへ顔を巡らす。

彼らの、その目に映ったのは、階段をミシミシと軋ませながら姿を現そうとする、丸太のような腕と、大きく盛り上がった胸板の、巨人であつた。

『アキ！ 大変だ！』

地下一階、女子大浴場続く廊下で、学年主任の高橋教諭とともに待機していた、長い黒髪と目の下に張り付いた隈が特徴的な少女、来島アキ。

その彼女が首から下げているペンダントから、その声が響く。

「どうしたんですか？ カオルさん」

おのれの相棒たるＡＩ召喚獣のあわてた声に、アキは眉をひそめる。

『何者かが、ここの召喚システムに強制介入していやがる』

「なんですって？！ 防壁はっ？！」

『あつというまだ。ただの電子攻撃じゃねえ。例のヤツだ』

カオルの言葉に、アキの顔が歪む。オカルト側からのハッキング対策はまだ始まったばかり。性能の良い防壁など期待できようもな

い。

「どうしました？ 来島さん」

アキのただならぬ様子に、学年主任の高橋教諭が声をかけてくる。一緒にいるふわふわのピンクブロンド少女、姫路瑞希と、静謐な雰囲気、黒髪美少女、霧島翔子も心配そうにこちらを見ている。

しかし、アキは応対する暇も惜しいようで、彼女らを手で制し、カオルとの話を続ける。

「相手はハッカーですか？ それとも、ウィルスかなにか？」

『たぶんウィルスだ。どうするんだ？ アキ』

「……なら、駆除します」

決意に満ちた顔でそう言つと、高橋教諭に向き直つた。

「高橋先生、召喚システムが何者かにアタックを受けています」

アキのその言葉に、高橋と翔子の目が鋭く細まり、瑞希が不安げになる。

「私は、これからその驚異を排除しに向かいますので、サポートをお願いします」

「判りました。姫路さんと霧島さんは、西村先生のところへ合流しててください」

言うが早いか一階へ向けて動き出すアキと高橋。

そして、瑞希と翔子は、大浴場前に見える巖のごとき男と、柔らかな雰囲気をもった少年の方へ足を向けた。

毛むくじやらの巨人が現れた食堂は、ちょっとしたパニックになっていた。

『ば、化けものっ？！』

『と、とにかく向こうへ！』

特に、至近距離にそいつが現れた。Cクラス女子たちのパニックの度合いは大きかった。

「みんな、落ち着いて距離をとるのよ！」

そんなクラスメイトたちへ声をかけるのは、Cクラス代表の小山友香。その声に従い、女子たちは女子大浴場側へと後退を始める。

それを見届けた友香は、ほっと一息ついた。

だからこそ、反応が遅れてしまった。

自らの頭上に伸びる、巨人の手。

覆い被さるように迫るそれに、声も出ない。

迫る影に、思い切り目をつむり、身をすくめる友香。

覚悟を決め、あきらめようとした彼女の耳に、その声が響いた。

「どおおっっせええ~~~~いつっ!!」

それと共に、友香の体かふわりと浮き上がる。何事かと目を開けると、その男子の横顔が飛び込んできた。

訳も分からず目をぱちくりさせる友香。自身が、その赤い棒を担いだ少年に、横抱きに抱えられていることに気づき、その顔が見る見る間に真っ赤に染まっていく。

「なっ?！ えっ?！ ちょっ?！ まっ?！」

混乱に、目をグルグルにする友香。それに気づいた刈り上げの少年は、小さめの目を友香に向ける。

「わ、悪い。とっさだったもんでつい。もう少し我慢してくれよ」

少年、須川亮の言葉に、友香は赤い顔のまま顔を縦にコクコクと振った。

それを見て亮は小さく笑うが、すぐに顔を引き締め、姿勢を低くする。

その彼の頭上を、丸太のような腕が通過するのを見て、友香の顔が青ざめる。

「だあぁっ?！ しっつけえっ?！ ちっと揺れるから、しっかつかまっついてくれよっ!!」

友香は、無言でうなずき亮にしがみつく。そんな彼女をお姫様だ

っこしている亮ではあったが、その感触を確かめる暇はなかった。
なにせ、天井に頭が着くのではないかというほどの巨人が振り回す腕を交い潜りながら逃げているからだ。

両腕が塞がっているため、小脇に挟んだ赤い棒を振り回すことも出来ない。

その間中、友香は思わぬほど逞しい腕に抱かれる安心感に、胸の奥が爆発しそうになっていた。

なんとか距離を取り、巨人の腕から逃げ延びた亮は、軽く息を吐いて、友香を降ろそうとする。

が、友香はそれに気づかず、亮の制服を掴んだまま放さない。

「えっと……？」

「……」

「もしもし？」

「……え?! なに?」

ようやく我に返った友香が亮に伝える。

「……いや、距離がとれたから降ろそうかと……」

「えっ?! あ、うん……ありがとう」

礼を述べながら、名残惜しそうに亮から離れる友香。

そのとき、声が響きわたった。

「あーあ、根本の元力ノだって言うから、手に入れたかったんだけどなあ」

柔和な笑みを浮かべ、巨人の後に続いて降りてきたのは、二年Bクラス次席の少年、後藤祐一。彼が姿を現すと同時に、赤黒いフィールドが、食堂いっぱい広がる。

それを見たひばりと雄二は、驚愕に目を見開く。

「こ、これって……」

「竹原の時と同じフィールドかつ?!」

驚きを露わにした二人同様、周囲の生徒にも動揺が広がる。

そんな中、巨人から離れない生徒が一人居た。

学年三席の男、久保利光。メガネのブリッジを押し上げ、言霊を

紡ぐ。

「サモン試獣召喚」

言霊に応え、魔法陣が広がり、彼の使役獣が、その姿を顕した。それと同時に、巨人が己の毛をむしり、周囲にばらまくと、猿のような召喚獣が数十体顕れた。

それを見た後藤が、イヤらしく笑いながら口を開いた。

「男は不要だ。女は捕らえて連れて来い」

その命を聞いて、猿どもが飛び出した。

第六十七問（後書き）

第六十七問、いかがでしたでしょうか？

状況は、どんどん変化していきます。

そんななか、どうしてかフラグを立てるのは、須川亮。

どうしてこうなったっ？！

そう叫ぶ人も多そうな気がする（笑）

まあ、実を結ぶかは判りません。サブキャラの恋愛事情まではプロットしてないしねっ♪

それでは、次回もよろしく願いしますね♪

第六十八問（前書き）

第六十八問です。

読んでくださるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです。

第六十八問

『キヤアアアアッ?!』

『な、なんだこの猿はっ?!?』

『いやあぁっ?!!』

食堂に姿を現した巨人と、その巨人の体毛から生まれた小猿達に、男女を問わずパニックになる。

そんななか、一人の少年が大きな声で言霊を紡いだ。

『^{サモン}試獣召喚っ!!!』

言霊に導かれ、魔法陣が広がり、彼の小さな使役獣が顕現し、手にした絵筆とスケッチブックを構えて小猿へ突進する。

「ギギ!」

その姿に、小猿の一匹が反応し飛び出した。

召喚獣は、小猿の突き出す爪をスケッチブックで受け止めると、絵筆でその腹を突く。

「ぎゃいつ!」

つと叫んだ小猿は、そのまま後ろへ逃れようとするが、逃がさんとはかり召喚獣が前へ踏み出し、スケッチブックの背で、小猿の脳天を痛打した。

「ぎゃんっ?!」

悲鳴と同時に破裂音が響き、小猿は跡形もなく消え失せる。

その様子に、生徒達はどよめいた。

「召喚獣なら対抗して倒せるぞっ!! みんな召喚するんだ」

そう大声を張り上げるのは、Fクラスでも目立たない糸目の少年、加藤武。

それを聞いてなお、生徒達は動揺を隠せない。

と、食堂に声が響く。

『サモン
試獣召喚!!』

その声は、Aクラスのまとめ役にして、学園一の美少女少年の双子の姉、木下優子だ。

「みんなっ!! 召喚してっ!! 召喚獣でこのおかしな奴らを倒すのよっ!!」

声を張り上げる優子。それに応えるように、そこかしこから、使役獣を呼び出すあの言葉が上がり始める。

『サモン
試獣召喚!!』

『サモン
試獣召喚!!』

『サモン
試獣召喚!!』

次々に姿を顕した召喚獣と小猿どもの戦いが始まる。

その最前線で、武は召喚獣に絵筆を振るわせていく。が、その後ろに迫る影があった。

「しまったっ?!」

操作になれていない武はそれに対処が出来ない。

だが、彼の召喚獣の背後に迫った小猿にイカリとランスがたたき込まれた。

「加藤っ!! 手伝っきっ!!」

「さっきは助かったわ。混乱を収めてくれてありがとう、えっと……?」

武の左右に優子と、浅黒い肌でさばさの髪バンダナを巻いた少年、高杉総司がやってくる。

「二人とも助かったよ。それから、僕はFクラスの加藤武。よろしくね? 木下優子さん」

己の召喚獣に小猿の一匹を討ち取らせつつ礼を述べつつ自己紹介する武。

「ワシは高杉総司ぜよ。よろしゅう頼むき」

のつかるように総司も自己紹介をし、優子は軽く笑んだ。
しかし、そこに声がかかる。

「やれやれ、また君たち三人か」

呆れを含んだ声音がクールに通った。

Aクラス次席、久保利光。

メガネのブリッジに指をあて、悠然と歩く。その周りには、数体の小猿と、彼の召喚獣。

その様子に、優子は歯噛みし、一步前に出る。

「久保君っ！？ いい加減にしてっ？ もう、覗きがどうか言う話じゃ……」

そう言い募る優子だったが、久保は冷笑を浮かべるだけだ。

「……ふふ、残念だけど君は討ち取らせてもらっよ？ 木下さん。後藤様が君をご所望でね」 言うが早いか、久保の召喚獣と小猿が飛び出していく。

しかし、小猿の群は巨大なイカリと絵筆によって弾かれた。
吹っ飛んでいく小猿を横目で見てから視線を転じる久保。

「そうはいかんぜよっ！！」

「やれやれ、僕らを見ないで欲しいね」

氣勢を上げる総司と武に冷たい視線を投げかける久保。

そんな彼を見て、優子はかぶりを振る。

「目を覚ましてっ？！ 久保君っ！！」

悲痛な叫びも彼には届かない。

そして、その声を合図に、猛攻が始まった。

次々に繰り出される二丁大鎌を、イカリと絵筆とランスがいなす。

受け止め、逸らし、弾いていく三人の召喚獣。三対一でも、互角。
いや、わずかに久保が押しているように見えた。

「く、強すぎぜよ……」

「この操作技術は……」

「久保君がこんなに強かったなんて……」

久保のその強さに、三人の顔が焦りに染まっていく。攻防は始まったばかりだった。

「メンテナンス用の作業部屋は無事そうですね」

その部屋へと足を踏み入れた、長い黒髪で痩せぎすな少女、来島アキは、そう言って後ろから着いてきていた、若いキャリアウーマンのような学年主任、高橋洋子に声をかけた。

「ええ、急ぎましょう。生徒まで召喚不能になつては、大変です」

高橋教諭の言葉にうなづくアキ。

「直接中からアプローチします。感覚変換準備。カオルさんはモニタリングと周囲の警戒を。高橋先生はナビをお願いします」

『おう、任せろ！』

「分かりました」

AI召喚獣のカオルが内包されたペンダントをスロットに挿入し、コンソール脇のHUDを被るアキ。そのまま自らの召喚獣に感覚を繋げていく。

「行きます……！」

その言葉が終わらぬ内に、アキは自身の召喚獣と一体化し、電脳世界に降り立っていた。

「こ、これは……」

周囲を見回し、絶句する。

そこは、すでに赤黒く染めあげられた世界と化していたからだ。

「……やってくれますね」

そうつぶやいたアキの顔に浮かぶのは“怒り”。己の世界を、こうまでイジリ回されたのだ。

その心情や推して知るべし。というところだろう。

そんなアキの目の前に、赤黒い魔法陣が三つ展開し、三体の怪物が現れる。

それは、召喚獣と同じくくらいの大きさの蜘蛛だった。ただし、その頭には、ぎよろりとした眼球が八つついており、その口に備える牙は鋭く長い。

体は甲殻類のような殻に覆われていて硬そうだった。

それらが動き出した瞬間、大型の砲弾が撃ち込まれ、一匹が爆発四散する。それにあおられた二匹が体勢を立て直すより早く、ブル―のメカニカルアーマーが一匹に近づき、手にした巨砲を鈍器代わりに叩きつぶした。

残る一匹は、大きく後退し、逃げる構えを見せたが、そのときにはすでに蜘蛛の真横にディスクが滑ってくる。

爆発したそれから幾本かの火柱が上がり、蜘蛛は炎に包まれた。

炎に包まれたそれを手にした巨砲から砲弾を撃ちだしてとどめを刺し、奥へと足を進めるアキ。

それに合わせるようにして数十の魔法陣が展開し、蜘蛛達が姿を顕し……光の奔流に灼き尽くされて消えた。

「邪魔です」

両肩のパラボラを折り畳みながらそうつぶやいたアキは、また足を進め始めた。

「ぎゃぎゃ」

「ぎぎゃ」

異形の雄叫びをあげて襲いかかる二匹の小猿。

三階、男子側階段付近で戦う漢達。

前田俊夫とFクラスの近藤達三階防衛チームだ。

その背後には、英語Wの遠藤教諭をかばいつつ、二匹の小猿を迎撃していく。

後藤が残っていた三匹の内一匹は、遠藤教諭の召喚獣の巧みな弓捌きで倒された。

だが、次の瞬間、彼女の召喚獣の姿は掻き消えてしまったのだ。
おりしも、美春と対戦中だった木内教諭や一階防衛チームの立ち
会い教師らの召喚獣が消えたタイミングだ。

こうなってしまうと、遠藤教諭も、か弱い女性に過ぎない。

あつというまに小猿達に追いつめられる教諭。しかし、そこで割
り込んだのが、多少回復した俊夫だった。

だが、満身創痍には違いなく、二匹相手に追い込まれていく俊夫。
しかし、そこで立ち上がったのが近藤や無糖をはじめとしたFク
ラス三階防衛チームの面々だ。

十人掛かりで小猿の一匹を押さえ込んだのだ。

これを見て、この漢に火が着かぬはずはなかった。

「はっはっは！ やるじゃねえかお前ら。マウンテンゴリラ並の猿
を素手で取り押さえるなんざ大したもんだ！ 俺も気合い入れんとな
っ！」

言うが早いか、目の前に迫る小猿の手を取り、ひねってバランス
を崩させ転がす。

鋭く風の吹き抜ける音が響く。

それは、この漢の息吹の音。

小猿をいなし、崩し、転がす度に、鋭い呼気が響いていく。

そして、大きく転がし、距離が開いたところで、左足を大きく前
に出し、右足を後に引きつつ、腰を膝の高さへ落とす。

脱力した両腕を、軽く曲げながら肩の高さへ持ち上げ、その拳を
軽く握ると、不敵に笑って見せた。

「ぎいあああつ！！」

それを見た小猿は、いいようにあしらわれたこともあってか、激
昂したかのように声を上げ、俊夫に襲いかかる。

「前田君！」

『前田っ！！』

微動だにしない俊夫に、遠藤教諭とクラスメイトから声が挙がった。

小猿の手が、真っ直ぐ俊夫の顔を目指して突き出され……………派手な破裂音と廊下を砕く衝撃がこえました。

いつの間にか入れ替わった前後の足。突き出された右肘。

事後に見えるそれだけが、何があったかを物語る。

しかし、彼の動きはそれで止まったわけではない。

小猿の腕を巻き込みながら上に払った左腕は、円を描き、さながらハンマーのように振り上げられる。それに同調するように、いつの間にやら後ろにあった左足が前へと動き、右足と揃え全身を押し上げるように伸びた。

この勢いを借りた左腕は、さながら砲弾のごとき勢いで小猿の顎を捉え、力チ上げる。

さらに体が伸びきったところで止まらず、左足を軽く持ち上げ、踏み込むようにしながら小猿の胴へ頭突きを見舞う。

そして、そのままの流れに任せるように右腕を右下へ振りながら腰が回転し、中断の回し蹴りが腹に食い込んだ。

その蹴りによって黒い粒子が舞い上がり、小猿は消滅してしまっ

『す、すげえ…………』

誰が漏らした言葉かはわからない。だが、生身で召喚獣レベルの化け物と渡り合い、勝ってしまうこの漢に、何も感じない者などいるのだろうか？

「ぎゃぎゃー！！」

『う、うわぁっ?!』

『こ、こいつ？！』
『どわあっ？！』

突然暴れ出したもう一匹の小猿が、近藤達をはね飛ばし、俊夫を突進していく。それを見て、漢は不敵に笑うと口を開いた。

「……さあ、喰い散らかしてやろう……」

鋭く尖った鱗に覆われたイモリが跳躍する。それをギリギリで避けるは、白い翼に金髪 of 召喚獣。

崩れた体勢で槍に似たライフル銃を撃つも、その弾道は、イモリを逸れていく。

「ッ！！ スピードが増してるよん。 なみなみ！」
「ええっ！」

白い翼の召喚獣の主たる金髪の少女クリスティーナ「ウエストロードが、舌打ちしつつ濃いめの紅茶のような赤毛をポニーテールにした帰国子女、島田美波へ指示を出す。

それにあいづちをうちつつ、自分の召喚獣を走らせる美波。相手の着地点を計算して、サーベルを振るわせる。その刃は、見事にイモリの胴体を捉えるが、鱗を切り裂いただけであまりダメージにはなっていないようだ。

さらに跳躍し、天井に張り付くイモリ。そのまま天井から壁へ、壁から壁へと這い回り二人の隙を探すイモリ。

「清水さん、清水さん！ しっかりなさい」

一方で、召喚獣を呼び出せなくなった木内教諭は美春の肩をつかんで声をかけていく。

だが、うつろな表情の美春は、ぴくりとも反応しない。

しかし、幸いと言うべきか、不思議なことに、イモリは美春を揺り動かす木内教諭に興味を示さなかった。

おかげでクリスも美波もよいいな気を回さずにすむものの、それがフェイクでないという保証はなく、いまいち集中し切れていないのも事実だ。

「……埒が明かないねい」

「どうするの？ クリス」

背中合わせに立ちながら言葉を交わすクリスと美波。その周囲をイモリは様子をつかがうように時折足を止めながら移動していく。

「……なみなみ。これ使いなさい」

顔も向けずに美波の手にそれを押しつけるクリス。

いぶかしげに渡されたものを見た美波は、その存在に驚いた。

「こ、これ、“黒金の腕輪”っ?! どうしたのよこれっ?!」

「護衛一人だからって、もっちゃんから預かってただけどねい。

タイミングが無くて。それに、言っちゃあ悪いけど、なみなみの召喚獣がパワー不足だからねい。補う意味でも使って欲しいよん」

驚く美波に説明していくクリス。

それを神妙に聞いていたポニテ少女は、意を決してうなずくと、

自らの左腕を“黒金の腕輪”に通す。

ブーストアップ

「……ありがたく使わせてもらうわ。強化!!」

言いながら胸の前に左腕をかざし、コマンドワードを紡ぐ。すると、彼女の召喚獣のサーベルが、光の粒子に還元され、さらに姿を変える。

長い白銀の柄の先に、精密な意匠を施された石突きと、二重になった三角形の穂先があらわれる。そして、内側の三角を埋めるようにエメラルドが生み出されて光輝く。

その柄の中央を持ち、大きく旋回させた美波の召喚獣は、それを構えてみせた。

「綺麗な槍……。それに……」

強化変換された自身の召喚獣の武器を見て、感嘆の息をもらす美波。そして、それにはめ込まれたエメラルドの輝きに、少し目を細め、頬に朱を散らしながら小さく笑う。

「ふふ」 すてきな武器ね」 気に入ったわ！」

美波がそう言うと、彼女の召喚獣は、軽やかに槍を回し、石突きを床に突き立てた。

「準備オーケーよっ！」 クリスっ！！」

「うむん」 ノってきたねい、なみなみ」 それじゃあ、反撃開始と行くよん」

美波の声に応じてウインクを飛ばすクリス。そして、二体の召喚獣が怪物に向けて飛び出した。

「後藤君…… 何でこんなことを……」

混乱する戦場を見て、ポニーテールの小さな少女、支倉ひばりがもらす。

それは、小さな声ではあったが、隣に立つ長身で赤毛の少年の耳にはしっかり届いていた。

「…… 知り合いか？ 支倉」

「…… うん。小学生の時、あたしとよく衝突していた子で、後藤君まさか文月に来ていたとは思わなかったけど……」

ひばりのその言葉を聞いた少年、坂本雄二の目が鋭く細まる。軽く思案気に右手を顎に当てる雄二。

その横で、ひばりが思い詰めたような顔になったことにも気づかない。

「……… あたし、後藤君と話してくる！」

言うが早いか飛び出すひばり。

思考の海に没入しようとしていた雄二は、彼女の突然の行動にとつさの反応ができない。

「ま、待て、支倉っ！？」

あわてる雄二を後目にはしりだすひばり。

「あー、くそっ！ 仕方ねえ。山田先生、新田、後は頼んだ」

そう言つと、雄二もひばりを追つて動き始めた。

第六十八問（後書き）

第六十八問、いかがでしたでしょうか？

少しずつ反撃していきますが、まだまだ劣勢ですね。
それでは、次回もよろしく願いしますね♪

第六十九問（前書き）

第六十九問を更新しました♪

流動する戦場で、戦いは激化していきます。

それでは、読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第六十九問

合宿所一階、主戦場たる大食堂を、一つの小さな影が走る。

ボリユームのある長いポニーテールを跳ねさせながら走るのは、Fクラスのご意見番にして小女神、支倉ひばり。

昔なじみの少年の暴挙に、いてもたっても居られずに飛び出したのだ。それを見逃す彼ではない。

「……行け」

まるで楽しくて仕方ないという風な愉悦を口元に浮かべつつ、控えさせていた小猿達に命ずる。それに応えた偉業の猿どもが、小さな人影に向かって走った。

『サモン
試獣召喚ツ!!』

言霊に応えて飛び出す青いブレストプレートの召喚獣。貫頭衣の裾をはためかせ、鐸鳴りの音を響かせながら銀閃を閃かせる。

その刃は、小猿の首を見事に切り裂き、黒い粒子へと変え、残心。さらに納刀する。

だがそこへ、新たに三匹が襲いかかる！

「フツ!!」

ひばりの目が細まり、鋭い呼気とともに、軽く腰を落としながら柄に手をかけた彼女の召喚獣が、一歩踏み出す。

脇へ抜けながら刃を走らせ、さらに体を返ししながら銀光を振り降ろし、さらに切っ先が跳ね上がる。

流れるような三連斬。

舞を舞うように振るわれた刃を鞘に納め、鐸が鳴り響くと、三匹の小猿が粒子に戻る。

「へえ。やるねえ支倉さん。やっぱり戦い慣れてる人の召喚獣は動

きが違うなあ」

「……後藤君」

召喚獣に小猿を切り伏せさせたひばりへ投げかけられる声。

ソレは柔和な笑みを、顔面に張り付けた少年の声。

彼、後藤裕一は、小学生の頃、ひばりとはよく衝突していた。彼女が嫌がることもしたし、体のことも揶揄した。

「本当に君は変わらないね？ その姿も、性格も、体つきも、その薄気味悪く膨らんだ胸もね」

「……！！」

裕一の言葉に顔を青ざめさせ、胸を隠すように自分の体を抱きしめるひばり。その背後に小猿が忍び寄る。が。

「うらあっ！！」

雄叫びと共に繰り出された拳が、小猿の横面を捉え、弾き飛ばされる。

「えっ?!」

慌てて振り返るひばり。そこには赤毛を逆立たせた長身の少年、坂本雄二が赤くなった手を痛そうに振っていた。

「……つつう、前田の奴よく殴る気になったな。コンクリの壁を殴ったような感触だぞ？」

「さ、坂本君?! 大丈夫?!」

その様子に思わず駆け寄るひばり。

その脳天に衝撃がはしる。

「いったあゝ。な、なにをするの?!」

「何をするじゃねえっ!! 勝手に飛び出すなっ!! あぶないだろえがっ!!」

小突かれたことに抗議するひばりを怒鳴りつける雄二。

その剣幕に息を呑んだひばりはうつむいてしまう。

「……ごめん……」

自分でも気が付いたのであろう、バツが悪そうに謝るひばり。その頭に、軽く手が乗せられた。

「今度から気をつけろよ」

「う、うん……」

そのぶつきらばうな声にうなずく。

と、そこヘイラついたような声が飛ぶ。

「……三文芝居は終わったかな？ Fクラス代表に支倉さん」

「ご、後藤君……」

「お前が小学生の頃に支倉と衝突していたって奴か」

裕一の声に、ふたりが振り向き、雄二が問い返す。

それに対して裕一は笑みを浮かべながら口を開いた。

「そうだね。ま、衝突と言うより、虐めていたよ。彼女をね。さて、Fクラス代表には初めましてかな？ 僕は後藤裕一。Bクラスの次席だよ」

その答えに、ひばりは消沈し、雄二は視線を鋭くする。

「てめえ……支倉になんの恨みがあつて……」

「恨み？ そんなものは無いよ。僕はね、支倉さんが好きなんだよ」

「……は？」

「……え？」

裕一の思わぬ告白に、雄二とひばり、二人そろって目が点になる。
「よくあるだろ？ 好きな子の気を引きたくて虐めてしまうつてヤツ。アレだよ」

裕一は二人の様子に構うことなく言葉を続ける。

「だけど、君は僕の事なんて見てなかった。いつも吉井を見ていた……」

その顔が、醜くゆがむ。

「……悔しかったよ。あんなヘラヘラしたバカのどこが良かったってね。だからもっとこっちを見てほしくてね、エスカレートしてしまっただよ」

表情が一変し、恍惚となる。

「だけど、君は結局僕の元へは来なかった。まあ、おかげで女の子へのアプローチについて考えるようにはなってるね。中学時代は女の

子には困らなくなったんだけどね」

話の風向きの変化に、ひばりと雄二が眉を寄せる。

「で、この文月に入學して、君を見つけた……。小学校の時と寸分変わらない容姿の君をね。だけど君の隣には、相変わらずあのバカ面が居た……。それを見た時に、やっぱり“君が欲しくなった”んだよ」

そう言いながら横たわった三日月のような笑みを浮かべる裕一。

それを見たひばりの背中を、悪寒が走る。

そして、雄二の眼差しが刃のごとき鋭さを放つ。

「まさかお前……。そのためにこの騒動を引き起こしたのか？」

「……え？」

雄二の言葉に、あつけにとられるひばり。

反対に裕一は肯定するように笑みを深くする。

「……最初はね、支倉が吉井に愛想を尽かさないかと思ってね？
ある人物の協力を得てFクラスの盗撮事件を仕組んだんだけどね。
うまくいかなかったなあ。おまけに支倉は率先してバ力達をかばうし。おかげで計画も台無しだよ」

「計画……だと？」

裕一の言葉に訝しげになる雄二。

「ククク。そうさ、暴走した女子が君たちに仕置きをすれば、君たちは報復に動くだろ？ もう仕置きされたんだから覗いてしまえつてね。それに巻き込まれる形が一番良かったんだけどねえ」

裕一の言葉に合わせ、巨人が足を踏み出す。

「こいつには、人間を操る力があるんだよ。まあ、数に限りはあるけどね。覗かれてパニックになった連中を一網打尽にして、僕の“ペット”にしたかったんだけどね」

狂気の気配をまといながら言う裕一に、ひばりは血の気が引く音を聞いた気がした。

その隣で雄二が嫌悪を露わにする。

「……てめえは正気じゃねえよ、後藤裕一」

そんな雄二の放った言の葉の刃にも、裕一は微動だにしない。

「やれやれ、わからないかなあ。この学園の雌どもは、気が強いのが多いじゃないか。それを思いのままに出来るんだぜ？　楽しいだろ？」

そう言いはなつて狂笑する裕一。その様子に戦慄するひばりと雄二。

「ハハハ。御託はこのくらいにしようか。支倉、まずは君を僕の人形にしてあげるよ。ハハハハ」

笑い声をバツクに歩き出す巨人。その巨大な腕が、ひばりと雄二の頭上に振り上げられた。

合宿所でそんな騒ぎが起きている頃。その裏手にある山の奥で、いくつものフラッシュが炊かれた。

否。

それは、ただのフラッシュではなく、純然たる驚異を内包した光。その証拠に。

大きな破裂音と共に巨木が碎けた。

その破壊を為したのは、一人の少女。長い黒髪を青いリボンでポニーテールに結び、フレームレスの眼鏡を掛け、白木の和弓を構えた巫女服姿の彼女は、神薙御鳥。

矢筒を持たず、弓だけを持つ姿は奇異ではあるものの、弓を構えた姿を見れば納得する。

弦を引き、構えた瞬間生まれ出ずるは光の矢。

作り出されたそれが射出された先には、狐の面を被った白装束。腰に差した白木の鞘から刃を抜き放ち、光の矢を両断する。

断たれた矢は、ひときわ大きく光って消え去ってしまう。

しかし、御鳥はそれに怯むことなく二の矢、三の矢を放っていくが、それらはことごとく切り捨てられ、避けられてしまう。

そのまま御鳥に迫る狐面。

だが、その頭上に降ってきた人影に気づき、後ろに大きく跳んだ。空を切るは木刀。しかし、その威力は地を抉らんばかりのもの。

立ち上がった人影は、ばさばさの髪に鋭い目つきの少年、高遠祐介。

手にした木刀を狐面に突きつけ、片手で口元を拭う。

見れば、身にまとった文月の体操服とジャージはズタズタになっておりあちこちに擦り傷が見える。

口を拭った手の甲には、血の跡が付き、口中を切っているものと思われた。

静寂が辺りを支配し、倒れた木の葉っぱが舞い散っている。

それが彼の目の前を通過した刹那。

狐の面が、祐介の視界一杯に広がり、手にした刃が銀色の輝きを閃かせる。

が。

その刃は、彼には届かない。手にした“木刀”が、その凶刃を押し止めたからだ。そして、木刀から黄金の輝きが吹き出し、狐面を吹き飛ばした。

そして、三つの人影は、戦いの舞を舞う。

この戦いは、表にて語られるものではない。

だが、この戦いは表舞台にとっても重要なファクターでもある。

その結末は、また闇の中。

「ふいっ。やっと厄介な二人がおらんようになったわ」

女子風呂への入り口に陣取ったFクラスの防衛隊の横で、腹の出

つ張った現代国語教師、山田貫太郎は呟いた。

その言葉に、長身で眼鏡の少年、新田恵太は訝しげな表情になり、山田教諭を見た。

その横顔が、醜く歪んだかと思うと、軽い破裂音が響き、モクモクと煙があがる。

「なっ?!」

思わぬ事に声をあげる恵太。その隙をつくかのように、煙が盛り上がり獣毛に覆われた腕が防衛隊を薙払う。

『う、うわあっ?!』

『な、なんだっ?!』

『い、一体何がっ?!』

呼び出していた召喚獣ごと薙ぎ払われる防衛隊。

ただ一人、恵太の召喚獣だけが、かろうじてその大盾で攻撃を防いだものの、ほかの者達は戦死してしまう。

そして、煙の中より出でるは網み傘を背負い、片手にどぶろくをぶら下げた、熊のような大きさの狸だった。

その大狸は、恵太の召喚獣が生き残っているのを見ると、目をまん丸に見開いた。

「おお? やられんかったんかいな。なかなか頑丈な下僕を使役しとるようやな? そやけど、もうしまいや」

そう言つて、恵太の召喚獣を蹴りつける大狸。大きくはね飛ばされた己の使役獣の姿に歯噛みする恵太。

その姿を後目に、大狸は階下へと足を進めた。

上階の喧噪に耳を傾けていた黄緑髪のボーイッシュなショートカツトの少女、工藤愛子は、比較的近くから聞こえてきた騒ぎに身構

えると隣に立つ小柄でタレ目の少年、土屋康太に向けて口を開いた。
「なんだか上の方が騒がしいねえムツツリー二君」

「……………静かに」

しかし、康太は何かの気配を感じ、彼女を制する。

「どうした？ 土屋。む？」

康太の様子に、二人の後ろに立っている保健体育担当教師の大島教諭が声をかけ、異変に気づいた。

上階から流れてくるのは異様な気配をとまなう赤黒いモヤ。

それが階段口から溢れ出た瞬間、赤黒い空間が女子風呂へ続く廊下に広がってゆく。

「……………こ、これはっ?!」

「清涼祭の時のっ?!」

「……………どうなっているっ?!」

その現象に、康太、愛子、大島教諭が声をあげる。

そして…………。

「さあて、次の相手は三人かいな。まあなんとかなるやろ」

などと言いながら階段口に姿を現したのは、熊と見まごうばかりの大狸。

対して身構える康太と愛子。

そして異口同音の言霊が紡がれる。

『^{サモン}試獣召喚!!』

その響きに導かれるように、二人の足下に、いつもの青い魔法円が現れる。それを門とし、顕現するは二匹の使役獣。

一方は、忍びの者を彷彿とさせる黒装束に、二本の小太刀。

今一方は、セーラー服姿に巨大な斧。

並び立ち、武器を構える二匹の召喚獣。

その主たる二人も、眼前にそびえる大狸に臆する事はない。

二人と大狸の戦いが、今、始まるうとしていた。

「むう……」

「これって……」

「そ、そんな……」

「……雄二」

女子風呂前。最終防衛線を張っていた、巖の如き鋼鉄の生徒指導担当、西村宗一教諭と、優しい顔立ちに、ネジが一本抜けたような雰囲気の少年、吉井明久の元に、ふわふわの綿飴のようなようなピンクブロンドで、自己主張の激しい双子の山を備えた才女、姫路瑞希と、ストレートロングの黒髪に、静謐な美しさと優雅さを兼ね備えた日本人形のような美少女、霧島翔子が合流し、次のことを話し合っていた際に異変は起きた。

赤黒い空間に染めあげられる廊下。

それは、清涼祭の召喚大会後に竹原教頭が張ったあのフィールドと同じもの。

だからこそ、不安げな明久や瑞希、翔子の脳裏をよぎっているのは、おそらく化け物と化した竹原教頭の召喚獣のことだろう。

また、西村自身、あのフィールドには苦い思いもある。

と、明久が西村教諭を見上げた。

「……西村先生。僕たち、上の階に行きたいんですけど、駄目ですか？」

「お願いします！ ひばりちゃん達が心配なんです！」

明久の言葉に瑞希も追従する。

「む……」

二人の願いに眉を寄せ瞑目する西村教諭。

と、翔子がきびすを返し、歩き出す。そんな彼女へ、西村教諭は目をつぶったまま声をかける。

「霧島、どこへ行く」

「……雄二のところ。夫の危機に駆けつけない妻などいない」
もう止まらない様子の翔子に、深く嘆息する西村。

「……やれやれ。一人で行かせるには危険だな。吉井、姫路。霧島の護衛に付いてやれ」

言いながら小さく笑う西村教諭。

その意味するところに、明久と瑞希の表情が明るくなり頷きあった。

「わかりましたあつ！ 吉井明久！ 姫路瑞希と一緒に霧島翔子さんの護衛に付きまっす！」

「ありがとうございます。西村先生」

芝居がかった調子で敬礼する明久と、丁寧にお礼を言って頭を下げる瑞希。

翔子は、軽く首を巡らせ、そんな二人を見やり、小さく笑う。

西村教諭も目を閉じたまま小さく笑みを浮かべ、「早く行け」と、優しく呟く。

『ハイッ！！』

明久と瑞希は、二人の思いを重ねるように、大きく返事をする、身を翻し、翔子に続いた。

第六十九問（後書き）

第六十九問、いかがでしたでしょうか？

前回の続きから、裏での戦い。

そして、明久達も動きます！

混沌となる戦場でピンチに陥ったひばりの運命は？

次回もよろしく願いしますね♪

第七十問（前書き）

お待たせしました♪

第七十問、更新です♪

読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第七十問

階段からのつそりと姿を現したのは、でっぷりと突き出た腹に、編みがさを背負い、どぶろくぶら下げた大狸。熊のごとき体躯のそれに対して、二匹の使役獣が突進する。

黒装束に、二刀の小太刀を携えて走るのは、小柄で鋭さをまとった三白眼の少年、土屋康太の召喚獣。そして、その隣には巨大な斧を担いだセーラー服姿の召喚獣が並ぶ。

その主たる黄緑色のショートカットでボーイッシュな少女、工藤愛子がイタズラっぽく笑う。

「先手必勝♪」

その言葉にあわせてセーラー召喚獣が跳躍し、巨斧を振りかぶった！

「しゃらくさいわあっ！！」

言いながらどぶろくで殴りつけようと構える狸。その腕に銀閃が走り、動きが止まった。

「な、なんやつ?!」

「……………加速」

つぶやくような康太の声に応えて、狸の背後に姿を現したのは、小太刀を振り切った康太の召喚獣。そのままブレーキングしつつ振り向き、油断無く小太刀を構える。

そして、ざっくりと裂けた腕を押さえて康太の召喚獣をみる大狸。その頭上で、雷鳴が轟いた。それに驚いた狸が首を巡らせたときには、すでに雷をまとった刃が迫っていた。

「し、しもたっ?!」

大狸が焦ったような声を出したときには、刃がその脳天に食い込んでいた。

『なんてな♪』

そんな声とともに、軽い破裂音が響き、愛子の召喚獣が煙に巻かれつつ着地する。

「え？ な、なに？」

一瞬、虚を突かれる愛子。それを反映してか、彼女の召喚獣もキョロキョロと周りを見回す。

と、煙が晴れた中にあるのは、“はずれ♪”と書かれた葉っぱが一枚。

「う、嘘っ？！」

驚いた愛子は、横合いに影が現れたことに気づかない。

「工藤っ！ 横だっ！！」

愛子と康太から少し離れたところに立っている保健体育担当の大島教諭から警告が飛び、愛子が驚いて周囲を見回す。

そして、自分に迫る獣毛に覆われた丸太のような腕を認めたときには、その鋭い爪が頭上に振り降ろされたところだった。

「ヒッ？！」

悲鳴を挙げることも出来ずに息を呑む愛子。

その身体に手が掛かり、引き寄せられながら体が宙を舞う。突然のことに目を白黒させる愛子だったが、自分が暖かいものに包まれているような感覚に顔を上げると、すぐそこに、何かを睨みつけるような三白眼の少年の顔が真剣な顔があった。

「ふえっ？！」

そこで初めて、愛子は康太に抱きすくめられていることに気づき、頬に朱を散らす。

「……………大丈夫か？ 工藤」

「う、うん……………ありがと、ムッツリー二君」

お礼を言う愛子を抱えたまま、再び姿を現した狸を睨む康太。

『なんやけつたいなガキやな。気に入らんわ』

「……………気に入らなくて結構」

その言葉に従うかのように、黒い影が狸へと跳ぶ。その一閃を、

巨軀に似合わぬ俊敏さで裂ける狸。

「ボクだって！」

そして避けた先へ斧を振り降ろす愛子の召喚獣。その一撃は、狸の肩口へと叩き込まれ袈裟掛けに切り裂く。

軽い破裂音とともに消え去り、『はずれ』と書かれた葉っぱが一枚ひらりと舞う。

「えええっ?! またあっ!?!」

思わず声を挙げてしまう愛子。そんな彼女を後目に、二人の前に、“ドロ”とばかりに姿を現す大狸。

『だあーっはっはっは、残念やったなあ? そんな攻撃では、わいは倒せへんでえ?』

からかうような調子でしゃべる大狸。それを聞いて愛子は悔しげに歯噛みする。

しかし、そんな愛子とは裏腹に、康太は狸の様子を訝しんでいるようだった。

「……………おかしい」

「え?」

至近距離の愛子にしか聞き取れないような声で康太がつぶやく。

「……………あの葉を身代わりにする防御を俺の召喚獣の攻撃には使ってきていない」

「……………確かにボクの召喚獣の攻撃を受けた時にしか使ってないね。でも、まだ二回だよ」

愛子も康太に合わせて密やかに返す。そして、康太の目が鋭く細まった。

「……………試してみる。工藤はスキをみて仕掛けてくれ」

「りょーかいっと。けどさ、ムツツリー二君」

康太の指示に、普段の余裕さを取り戻しながら応える愛子。その顔がイタズラっぽく笑った。

「……………」

そんな愛子に視線を落とす康太。

「い・つ・ま・で・ボクを抱きしめてるつもりかな？ それとも抱き心地が良すぎて放したくないのかな？」

「……………！？ ス、スマン」

愛子の言葉に、あわてて彼女を解放する康太。その様子に、愛子はちよつとだけ寂しそうにしたが、すぐにいつもの余裕しやくしゃくといった笑顔で立ち上がる。

「じゃあ、やろうかムツリー二君。しくじらないでよね」

「……………フ。それはこっちのセリフ」

康太のその言葉に合わせるように、牽制を続けていた彼の召喚獣の挙動が変わり、さらに愛子の召喚獣も飛び出していく。

「……………加速！！」

「行けっ！！」

康太の召喚獣の姿が掻き消え、愛子の召喚獣の得物に雷がまとわりつく。

瞬時に十七もの斬閃がきらめき、大狸を包み込む。

『あつつつ？！ うつとおしいわカトンボがつ！！』

両の腕を振り回し、康太の召喚獣を追い払おうとする狸。そこへ

愛子の召喚獣が大斧を振り回しながら駆け寄っていく！

「今度こそ！」

『ぬわあっ？！ なんつつてなあ』

斧が叩き込まれた瞬間、間抜けな破裂音とともに、狸の姿が煙にまぎれる。

「ま、またっ！？ 今度はどこに……………」

二度の奇襲を受けていた愛子は周囲を見回す。

「……………？！ 工藤！！ 召喚獣だ！！」

「えっ……………」

康太の声にそちらを振り向くと、自分の召喚獣に迫る影が見えた。
「あっ！！？」

召喚獣に迫る剛腕に、あわてて避けさせようと操作するが間に合

わない。

が、そこへ黒い影が突進し、獣毛に覆われた丸太のような腕に激突する。

その腕に突き立つは小太刀。それを手にするは黒装束の召喚獣。

『ぬがつ?!』

突然、腕に走った痛み、狸は顔をしかめ、愛子の召喚獣を叩き潰すはずだった腕を引つ込めてしまう。

そのスキに小太刀を引き抜き離脱する康太の召喚獣。

「助かったよ、ムツツリー二君」

軽く息を吐きながら礼を言う愛子に、康太は親指を上に向けてサムズアップ。

小太刀に傷つけられた腕にフーフーと息をかける狸から目を離さずに康太が口を開く。

「……………やはり奴はおまえの武器を警戒している」

「みたいだね。腕輪の可能性もあるけど……………」

康太の言葉にうなずく愛子。それを聞きつつ、康太は軽く思案して愛子に告げる。

「……………ひとつ、考えがある」

「どんな考え？」

「……………それは」

『ガキどもおっ!! ようもやってくれよったなあっ?!』

そのとき、大狸が吼え、突進してきた。

それを召喚獣で迎え撃たんとする二人。

そこで。

「ムツツリー二!!」

廊下に声が響き、優しさと緩さを纏った少年が、二人の少女とともに姿を現した。

「……………明久? それに姫路も」

「代表? どうしたの?」

康太はクラスメイトのその少年、吉井明久の姿に軽く驚く。そし

て、愛子も明久に続いてやってくる黒髪ロングで静謐な印象の少女、霧島翔子の姿に驚きを隠せなかった。

「……愛子、無事で何より」

「つ、土屋君、く、工藤さん、お、お二人とも……怪我は……ありません……か？」

翔子は見ただ感じ大丈夫そうな愛子に安堵の息を吐き、もう一人の少女、ふわふわのピンクブロンドの姫路瑞希も遅れてやってくる。

運動を苦手とする瑞希は、すでに息が切れかけているようで、逆に愛子が心配そうになっている辺りはご愛敬だろう。

そんな三人と、康太たちの姿に、大狸はその顔を人間のようにしかめさせる。

『……カトンボが増えよってからに。うざったいのう』

そんな狸の声に、明久たちもそちらを見やる。

「ムツツリー二、手伝うよ。早いところコイツを倒して一階へ……」

言いながら身構えた明久を、康太が制した。

「……いや、ここは俺たちに任せて、お前たちは上に向かえ」

「えっ？ でも、五人でやった方が……」

「……階段前には、雄二や支倉たちが陣取っていたはず。なのにコイツが降りてきたという事は、二人に何かあったのは確実」

康太の言葉に、明久たちの顔色が変わる。

「……ここは俺と工藤で十分だ」

「そういうことだよ、代表に吉井君、姫路さん」

言いながら身構えた康太の横に立ち、愛子が明久たちへウインクしてみせる。

その二人を見て、明久らは一瞬、逡巡したがすぐに大きくうなずいた。

「……わかったよムツツリー二に工藤さん。コイツは任せた！」

「……愛子、無理はしないで？」

「土屋君、工藤さん、お気をつけて」

三人の声に、振り向くことなくうなずきながら、左手を真横に突

きだし、サムズアップする康太。その隣で、愛子も右手を左の肩口から覗かせるようにVサインを見せてくる。

それが合図だった。

飛び出す康太と愛子の召喚獣。それに合わせて翔子、瑞希、明久が走り出す。

三人が大狸の横を駆け抜け、階段へ姿を消したのと同時に、二人の召喚獣は主の元へ戻った。

「……………なんで行かせた？」

切り裂くような視線で狸を見つめながら康太が口を開く。

愛子も大狸が明久たちの突破を邪魔する素振りを見せなかったことに不信感を覚えたようににらむ。

そんな二人に対して、大狸は口を鮫のようにしながら笑みを作った。

『別にどうという訳やあらへん。上はここより大混乱に陥つとるさかいなあ。それに五人でこられるよりあんたら二人だけを相手にした方が、わいには都合がええんや』

その狸の言葉に、康太も愛子もすぐに理解した。

なめられているのだ。

「……………俺をなめるな」

「以下同文！」

二人の言葉を合図に、彼らの使役獣が飛び出していった。

赤黒く染め上げられた幾何学模様の壁。そこにひしめく異形の蜘蛛ども。それらをなぎ払い、ブルーのメカニカルアーマーをまとった黒髪の少女が走る。

「邪魔です」

行く手を遮る蜘蛛の群へと手にした大筒から砲弾を撃ちだし粉碎する。

占拠された召喚システム内の電腦空間で、少女。

来島アキは孤軍奮闘していた。

『来島さん、もうすぐ中枢部です。そこに食いついているウィルスプログラムを駆除すればコントロールを取り戻せます』

「分かりました高橋先生」

サポートをしてきている学年主任の高橋洋子教諭にお礼を言いつつ周囲を見回す。

アキの顔の前にディスプレイが立ち上がり、情報をポップアップ。ルートを検索しながら次の手を考える。

「さて、どんなウィルスが待ちかまえているのか。見当もつきませんが。気を引き締めていきましょうか」

ひとりごちる彼女の頭上に、一匹の蜘蛛。

不意を撃つて襲いかかろうというそれは、しかし一発の砲弾によって粉碎される。

蜘蛛の方を見ることもなく、アキが手にした大砲を撃ち放ったからだ。

「移動します」

特に感慨もなく紡がれた、アキの言葉に従い、周囲の“空間がスライド”していく。

いくつもの壁が、道が、彼女の前を通過し、やがて大きな扉が目の前に出現した。

「……着きましたか。さて、何が出ますやら」

言いながら扉に手を触れると、ロックが解除され二重三重の壁が四方へと引っ込んでいき、入り口となった。

そして、中へ足を踏み入れたアキは、思わず絶句した。

幾何学模様の部屋を覆い尽くすのは、白い糸。まるで蜘蛛の巣で埋め尽くされたかのように、白く、白く染め上げられている。

そして、部屋の中央にあるクリスタルの球体状の中枢部もすでに蜘蛛の巣に絡めとられていた。

「こ、こんな……」

およそ信じられない光景に、周囲を見回しながら足を進めるアキ。そのとき、何かの気配が動くのを感じた。

「……そこです！」

振り向きざまに大砲をぶっ放すアキ。しかし、謎の移動体はあっさりそれを避けてしまう。

「くっ?! 早いっ!?!」

思わず悪態をつく。

そんな彼女を後目に、移動体は素早く動き回り、アキを翻弄する。

「……埒があきませんか」

つぶやきながら砲弾を次々撃ち出していくアキ。しかし、そのすべてがことごとく避けられてしまう。

そして彼女の背後に、鋭い牙が迫った。

第七十問（後書き）

第七十問、いかがでしたでしょうか？

保体コンビの戦いに、電脳世界で孤軍奮闘するアキ。

戦いはますますヒートアップしていきます♪

それでは次回もよろしく願いしますね♪

第七十一問（前書き）

少し遅れましたが、第七十一問更新です♪

今回は、ここしばらく出番が無かった“彼？”が活躍します♪

それから、本日九月九日を以て、『バカと雲雀と召喚獣』が一年となりました♪

ここまで続けられたのも、ひとえに応援してくださるみなさんのおかげです♪

本当にありがとうございます！

これからも『バカと雲雀と召喚獣』をよろしくお願いしますね♪
それでは今回も、読んで下さるみなさんに楽しんでいただければ幸いです♪

第七十一問

「……！」

頭上に迫る剛腕に、思わず身を固くしてしまうポニーテールの小さな少女、支倉ひばり。

その小さな肢体にぶつかるとように影が飛び込む！

「支倉……！」

鋭い声と共に彼女をかつさらっていくのは、世界の性別に真つ向から喧嘩を売っている美少女少年、木下秀吉。ひばりの小さな体を抱え込むように転がり、彼女を窮地から救い出す。

それに続くように長身で赤毛の少年も転がってくるが、そちらのことは意に介さず、腕の中の小さな少女の安否を確認する秀吉。

「支倉、大丈夫かの？」

「え……？ あ……き、木下君？」

少し呆然としていたひばりは、秀吉の声に目をしばたたかせながら応える。

その様子に軽く安堵する秀吉。

「どこか痛いところはありませんか？」

「う、うん……。大丈夫だよ木下君。ありがとう」

「うむ。しからば！」

ひばりの返事に一つうなずいて彼女を放すと立ち上がる。

そこへ駆け寄るふたつの小さな影は、彼らの使役獣。

巨人となった後藤の召喚獣を牽制するように武器を構える二匹。

「……後藤とやら、何故このような暴挙に出たのじゃ？ こんなやり方、間違っておる！」

よく通る声を張り上げる秀吉。しかし、後藤は意に介した様子も見せず、秀吉を見やる。

「……性別『秀吉』だったっけ？ いいね、君も僕のコレクションに加えてあげるよ。行け！」

獲物を狙う蛇のように笑い、巨人に命を下す後藤。丸太もかくやというほどの太くて巨大な腕を伸ばし、ひばりと秀吉を狙う。

「……お前ら、俺を忘れてんじゃあねえよ。試獣^{サモン}召喚^{ブーストアップ}!!! 強化!
リミットブレイク
限界突破!!!」

横合いから連続でコマンドワードが紡がれ、メリケンサックを巨大な腕甲へと変化させた白ランの召喚獣が飛び出し、巨大な腕を殴りつけた。その威力で腕を軽く弾かれた巨人は少しだけ体勢を崩す。「……クソ堅えな。ダメージになつてんのか? コレ」

破壊力抜群のはずの己の召喚獣の攻撃を受けて、外見上ダメージがあるように見えない巨人に対して立ち上がりながらつぶやく雄二。「坂本君!」

「おお、無事じゃったか雄二」

そんな彼の姿に、ひばりも秀吉も声を挙げる。だが、雄二は不満そうに鼻を鳴らすと秀吉を見る。

「……秀吉、おまえな。近場に居たのにそれは冷たくないか?」

「……何の事だかさっぱりじゃ」

ジト目の雄二にしれつと答える秀吉。そんな二人に、小さな少女の声が飛ぶ。

「そんなことより、来るよ!」

「む?」

「ち。」

ひばりの言葉に、巨人の方へ向き直る秀吉と雄二。

そして、三人の前にそれぞれの召喚獣が武器を構えつつ並んだ。

「漫才はその位にしてくれよ」

そんな後藤の声と共に、巨人は再び前進し、巨腕を振り上げる。それを見ながらひばりは言霊を紡いだ。

リミットブレイク
限界突破!!!

それに応えるように光の粒子がひばりの召喚獣の左腕に収束し、腕輪を形成す。

それが光輝き、HとMのイニシャルが飛び出したかと思うと、そ

の胸に吸い込まれた。

すると、右半身が紅蓮の炎のごとく紅く染まり、左半身が鋼鉄の輝きのような銀色に染まっていく。

そして、手にした倭刀がほどけて粒子となり、それが新たに集まって、銀色の棒になっていく。

そこで巨腕がハンマーのごとく振り下ろされた。

腹に響くような重低音と、戦場を揺るがす衝撃が広がった。

その戦鎚は、床をえぐることは無かった。

その巨大な拳は地に降りることはなかったのだ。それを支えるのは、80cmの身長しかない小さな使役獣。

紅と銀に染まったひばりの召喚獣だ。両足が床にめり込みながらも、横一文字に構えた鋼鉄の棒で受け止めている。

「なんだとっ?!」

思わず叫ぶ後藤。本来なら召喚獣の防御など物ともせずひねり潰せたはずだった。

だが、この召喚獣は見事に耐えて見せたのだ。

これは、ひばりの召喚獣の特殊能力の特性のおかげでもあった。

もともとパワーのあるH、ヒートフォームと、もともと防御力のあるM、メタルフォーム。この二つのフォームは非常に相性が良く、効果を高め合う。

この相乗効果が巨人の一撃に対抗しえた要因と言える。

だが、そんな事は知らない後藤の受けた衝撃は大きい。全力ではないとはいえ、パワーと防御に優れた自分の召喚獣に互されるとは思っていなかったのだ。

そしてその隙を二人は見逃さなかった。

「今じゃっ!」

「行けっ!」

秀吉と雄二の声に応え、二匹の使役獣が跳躍する。手にした薙刀と腕甲がうなり、巨人の頭を捉えた。

しかし、薙刀は空しく弾かれてしまった。

ついで命中した腕甲は、さすがに腕輪で強化されただけあり、巨人の身体が小揺るぎする。

それを見たひばりは、召喚獣に拳を押し返させた。

「えーいつー!!」

かわいらしいかけ声に合わせて紅い半身が燃え上がり、巨人の拳を押し返す。

その反動でたたら踏む巨体を見て、ひばりはさらなる行動を命じる。

「いつちゃえーっ!!」

その声に応え胸元から銀色に輝くMのインシヤルが飛び出し、手にした銀色の棒に吸い込まれる。

すると棒の両端から紅蓮の炎が噴き出した!

『Metal!! Maximum drive!!』

響きわたる電子音とともに突撃するひばりの召喚獣。振りかざした棒を回転させながら跳躍し、巨人へと向かう。

紅蓮の炎をまとった一撃が、巨人の胸へと袈裟掛けに叩き込まれ、さらに逆袈裟に二撃目を撃ち込んだ。

その瞬間、圧縮された炎が膨れ上がり、爆発する。

それを見届けながら着地するひばりの召喚獣。

その瞬間。

爆炎を突き破り、巨大な手が召喚獣へ伸びた。

「あっ?!」

ひばりはとつさに召喚獣を操作したが、この時、今のフォームの欠点が災いした。

パワーと防御に優れるヒートメタルフォームだが、総てのフォーム中、もつとも動きが遅いのだ。

避けようと動き出すが、間に合わずに捕まってしまうひばりの召喚獣。そして、炎をかき消しながら後藤の召喚獣が姿を現した。

巨人のその胸は、爆発によって体毛が吹き飛ばされ、焼けただれ

た無惨な姿になっていたが、まだ健在であった。

「……やれやれ、今のは少し焦ったよ。だけど、こちらを倒せるほどの威力は無かったみたいだね」

言いながら薄ら笑いを浮かべる後藤。

そして巨人の手が握りしめられていく。

その圧力に苦悶の表情を浮かべるひばりの召喚獣。それを見たひばりはせつぱ詰まったような顔になった。

「ああっ?! や、やめてっ!?!」

その声に、愉悦の表情を浮かべる後藤。その様子を見て、秀吉は後藤をにらみ付ける。

「ええい、支倉の召喚獣を放さぬかつ!」

その声に合わせて秀吉の召喚獣が飛び出していくが、巨人は空いてる方の腕ではね飛ばしてしまう。

「……なんと、なんと弱いんじゃ……ワシは……」

歯牙にもかけられていないことを感じ、膝を着いてしまう秀吉。その隣から、雄二の召喚獣が、普段より素早い動作で飛び出していく。

「行けえっ!」

その速度のまま巨人に殴りかかる雄二の召喚獣。巨人はそれを振り払おうとするが、その動作は先ほどまでよりもさらに鈍かった。

「?……なんだ?」

その状況に戸惑う後藤。

それでもひばりの召喚獣を放さないのは大したものである。

「……そうか、Fクラス代表の腕輪か! やっかいな。召喚獣の洗脳ができれば、支倉の召喚獣を操ってやるんだが」

その答えに行き着いた後藤は、さらに思考する。

そのとき、彼らがその戦場に姿を現した。

「ひばり!」

「ひばりちゃん!」

「……雄二!」

緩い空気をまとった少年、吉井明久。

綿飴のようなピンクブロンドの少女、姫路瑞希。

日本人形のような美しい少女、霧島翔子。

階段口から躍り出た三人は、異口同音に、その言の葉を紡ぐ！

『試獣召喚！！』
サモン

それに応えて三つの魔法陣が顕れ、三体の召喚獣が、飛び出すように顕現した。

向かう先は、巨大な異形の召喚獣。

その様子に、翔子と瑞希の召喚獣の腕輪が輝いた。

「……は！」

翔子の意を受け、召喚獣が刀を振るう。すると、その刀身に巻き付くように顕れたエネルギーの竜達が巨人へ向かい、殺到する。

「なんだとっ？！」

竜達にその身を絡みつかれた巨人を見て、焦る後藤。

そこへ、膨大な熱エネルギーを宿した大剣を、大上段に構えて跳躍した瑞希の召喚獣が迫る。

「しまっ……」

その一撃に反応できず、ひばりの召喚獣を捕らえている腕に食らってしまった巨人は、それを取り落としてしまう。

すかさず明久の召喚獣が走り込み、ひばりの召喚獣を受け止めた。それと同時に、形態変化が解け、通常状態に戻ってしまうひばりの召喚獣。

Hはパワーだけではなく、身体の活性化を促す効果もある。

Mの防御力と合わせればその耐久力はふつうの召喚獣に倍するほどであるが、巨人の怪力による締め付けは、かなりのダメージになっていたようだっ。

痛々しい姿の召喚獣を抱き上げようとするひばり。しかし、その手は召喚獣をすり抜けてしまう。

その事実が、ひばりの胸を締め付けた。

そんな彼女の元へ、二人の幼なじみが駆け寄ってきた。

「ひばり、大丈夫？」

「怪我とかしてませんか？」

「……うん。大丈夫だよ？ アキくん、みっちゃん」

心配そうな二人に軽く笑顔で答えるひばり。

そして後藤の方へ視線を転じる。

「あ、あれは後藤君？！」

「ええっ？！ あれが“あの”後藤君なんですか？！」

ひばりの視線につられた二人も、その先の人物を見て驚愕した。それに答えるようにうなずくひばり。

そんな三人に気づいた後藤は、蛇のように笑う。

「やあ吉井。それに姫路も久しぶりだな。なまっちろい子豚ちゃんも、今じゃ進学校で一、二を争う才媛ってわけだ」

後藤のその言葉に、瑞希は両手で口元を押さえながら、顔色を真っ青にする。

「後藤っ！！ お前っ！！」

それに対して激高する明久。

それに応じるように、彼の召喚獣も後藤を威嚇する。しかし、後藤はどこ吹く風といった風に肩をすくめた。

「ははっ、怖い怖い。バカ久は相変わらず白豚のナイト様か？ 精が出るねえ」

小馬鹿にしたように笑いながら言う後藤。そのとき、鋭い声が拳がった。

「姫路っ！ 召喚獣の動きを止めるなっ！」

「！ ハ、ハイ！」

雄二の声に我に返ると、あわてて召喚獣を動かす瑞希。

刹那、瑞希の召喚獣の居た場所を、丸太のような腕が通過する。

「ち、そのままボケててくれりゃあ、簡単に倒せたものを」

忌々しそうにつぶやく後藤。

それを見て翔子が嫌悪を露わにする。

「……あなた、最低」

「そりやどうも、学年主席殿。あんたも洗脳して、俺の隣にはべらせてやるよ」

「……雄二以外なんてまっぴら。そんなことさせられるなら、舌を噛み切る」

後藤の軽口に、真顔で言い切る翔子。さすがの後藤もこれには鼻白むしかない。

そんな翔子の頭に、手が乗った。雄二だ。

「んなことはさせねえよ」

少し照れくさそうにしながらそう宣言する彼に、翔子は頬を赤らめる。

その様子を見せつけられた後藤は奥歯を強くかみしめ、それがこすれた音が響いた。

「どいつもこいつも見せつけてんじゃねえっ！！ どうせ女どもは全員洗脳して俺を、俺だけ愛するようになるんだっ！！ 愛だの恋だのなんてどうとでもなるんだよっ！！ この学園の女は、全部俺の物になるんだ！！」

そう叫ぶ後藤。それに対して小さな少女は立ち上がった。

「後藤君、そんなの間違ってるよ。気持ちを踏みにじって、心を操って手に入れた愛なんて、偽物だよ。そんなのどこまでいったって空しいだけだよ？ それは、後藤君自身がよく解ってるはずだよ！！」

その言葉に、後藤は顔をひきつらせる。

「……うるさい、うるさい！ うるさい！！ うるさいっ！！ 欲しい物を手に入れようとしてなにが悪いっていうんだ！！」

「やり方が間違ってるんだよ！ ちゃんと気持ちを紡いで、相手に理解して貰わなきゃ、何も始まらないよっ！！」

叫ぶ後藤にかぶりを振るひばり。そんな彼女の姿に後藤は頭を掻き毟る。

「支倉っ！！ 何で僕の邪魔をするんだっ！！」

「あたしはただ、みんなと楽しく平和に過ごしたいだけだよ？ だ

から、こんな滅茶苦茶なこと、許せないっ！」

そう言い放ったひばりの、力強い視線にたじろぐ後藤。

「お前っ！！ なんなんだっ！！ いったい何なんだよっ！！」

「あたしは、ただの学生だよ。文月学園、二年Fクラスに所属する、ただの学生だよ！」

ひばりのその叫びに応えるように、彼女の召喚獣を中心として黄金の魔法陣が広がっていく。そして、光の柱が立ち上り、道を開いた。

「いったい何事だいつ?!」

文月学園学園長室。その部屋の主たる女傑は、突然の事態に面食らっていた。

『わ、わかりません！ 例の使い魔が突然光りだしたかと思ったら、黄金の魔法陣が展開して……うわっ?』

「どうしたんだいつ?! 応答しなっ!!」

突然切れてしまった通信に、女傑、藤堂カヲルは怒鳴りつけるがまるで反応がない。

と、空がまばゆいばかりの輝きに包まれた。

あわてて窓から天を見上げると巨大な黄金の魔法陣が天空に描かれ、そこへ向かって一筋の光が上っていくのが見えた。

「……こいつは一大事さね」

呆然とつぶやくが、すぐに我を取り戻すカヲル。

すぐさま車のキーを取り出すと、そのまま駐車場へ向かった。

文月学園の屋上。そこに、三つの影。

天上に広がる魔法陣を見つめ、言葉を交わす。

『やはり、彼女か？』

『大した力ねえ』

『では、計画通りに？』

『……慎重に進める。邪魔が入ってはかなわん』

『了解』

『心得ました』

『……巫女が手に入れば計画は大きく前進するが……さてな』
そのつぶやきと共に影は跡形もなく消え去った。

第七十一問（後書き）

第七十一問、いかがでしたでしょうか？

ようやく明久達も主戦場に到着し、反撃開始です！

それでは、次回もよろしく願いしますね♪

第七十二問（前書き）

第七十二問、更新です♪
読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第七十二問

「たあああつつ!!」

裂帛の気合いを以て繰り出される槍を、鋭い鱗に覆われたイモリが跳躍して避わす。

その着地点を狙い、銃弾が風を貫く。

それは、見事に異形のイモリを捉え、その鎧を砕いた。

さらに畳みかけるような速射を嫌い、逃げようと体を避わした先には、エメラルドグリーンの宝石が詰められた槍が突き出され、その腹をえぐった。

「ぎいアアあアあツ?!」

異形の悲鳴を上げるイモリ。

その声に顔をしかめつつ、赤毛のポニーテール帰国子女、島田美波が軽く息を吐く。

「だいぶ弱ってきてるみたいね?」

しかし、その隣に立つ金髪碧眼の少女、クリスティーナ・ウエストロードは油断無く化け物を見つめる。

「油断しないで? 美波。窮鼠猫を噛むの喩えだってあるんだから。それに相手は化け物のたぐい。どんな手を隠し持つてるやら……つてどうしたの?」

隣の美波が妙な顔をしているのに気づいたクリスは、横目で彼女をちらりと見ながらたずねた。すると、美波は視線を逸らしながらぼつりと答える。

「……キューソって何?」

その言葉に、クリスの膝からカクリと力が抜けた。
瞬間。

飛びかかるイモリ!

だが、クリスの口の端は笑みの形を浮かべている。

その刹那、イモリの横面に、強烈な一撃が入った。

ばさり。

と、翼の羽ばたく音が響き、もんどりうつ異形に隙を与えることなく二撃目が決まる。ついで三撃目、四撃目と、目にも止まらぬ連撃がイモリに叩き込まれ、締めの一撃が頭頂に痛打し、部屋の畳に叩きつけられる異形のイモリ。

「す、すごいじゃないクリス……」

「名付けて『必殺！ 分身ボコス力あたつく』！ だよん」

感嘆する美波に、ドヤ顔Vサインで応えるクリス。

それを見て、感心して損したとばかりにげんなりとなる美波。

「……その名前はどうかの……？ もつとこう……格好良さげな……」

「ヴァイスヴィルヴェルヴィント……？ とかさ……」

「じゃ、それで！」

「えええ……」

クリスのセンスに、思わず名前をあげてみると、クリスはなんでも良いという感じでその名前を受け入れてしまい、美波は自分の案が通ってしまったことに心底後悔する。そんなふたりの向こうでは、そのやりとりを見ていた木村教諭が苦笑いを浮かべている。

と、頭を振りながらイモリが身を起こした。それに気づいた美波が驚いて声を挙げる。

「って、やつつけたんじゃないのっ?!」

「連続でぶん殴っただけだからねい」

「じゃあふざけてる場合じゃ無いじゃない!」

そう言つと、槍を構えた己の召喚獣を突進させる。

その穂先が、イモリを捉える刹那、イモリは避けようと、ほんのわずか身を沈ませ……上空からの銃弾の雨にさらされる。

「逃がさないよんっ」

言いながらウィンクするクリス。

そして、その隙にエメラルドの宝石をあしらった槍が、イモリの鱗を貫き、その肩にたたき込まれた。

「あ、当たった?!」

「ぎゅあああつつ!」

当たったことに驚く美波。その声をかき消さんばかりの悲鳴を上げるイモリ。

その様子に笑みを浮かべるクリス。

「ふふん。闇雲に攻撃していたわけじゃないよん。トカゲツテルの拳動はたいてい把握済みだからない。なみなみ、畳みかけるよん。」

「ええっ!」

彼女の言葉に美波が応え、それを合図に大きな羽音が響く。

美波の召喚獣が槍を引き抜き、頭上に掲げながら大きく旋回させ、勢い良く槍を突き出す。そして、手元を引いてさらに突き、また引いて、さらに突く。

そのサイクルが徐々に短くなり、ギアが上がっていく。

さらにその上空では手にしたライフルを撃ち、短距離移動するクリスの銀色の召喚獣。

移動し、撃ち、さらに移動して撃つ。

地上の美波と同じく、その速度が上がり、あたかも分身したかのようにライフルを撃ちまくる銀色の召喚獣。

その、地上と空の暴風雨が重なり、イモリを包む鱗の鎧を砕いていく。

そして、それが止んだ瞬間、美波の召喚獣がイモリの顎を蹴り上げ、さらに軽く跳躍しながら反対の足で回し蹴りを放ち、かの異形を吹き飛ばす。

その軌道の向こうヘクリスの召喚獣が素早く回り込んで蹴り飛ばし、手にした槍状ライフルから三連射し、飛翔。

それが命中したイモリの向かう先には。

左足をまっすぐ伸ばすように大きく足を前後に開きながら身を沈み込ませ、エメラルドの槍を斜めに構えた美波の召喚獣が、鋭い眼差しと共に待ちかまえている。

その眼が、いつそう鋭く細まった瞬間。

「やあああああつっ！！！！」

美波のかけ声とともに、槍は全身のバネを受け、跳ね上がるように突き出され、イモリの体を貫く。その異形の背中へ、クリスの召喚獣も勢い良く手にした槍状のライフルを突き込み、銃身を怪物の体内に食い込ませながらもさらに三連射。

そのタイミングで美波の召喚獣は、手にした槍を大きく振り上げるようにしながら怪物の体を切り裂いた。

「ぎゅあああああつっ？！？！」

断末魔の悲鳴を上げる異形のイモリ。そしてそのからだ固まり、ひび割れ、砕け散った。

それを合図に木村教諭の腕の中で眠る、オレンジ髪のだリルツインテ少女、清水美春の腕にはまっていた腕輪が、小さく澄んだ音を残して砕け散る。

それと同時に彼女の体から赤みがかった霞が抜けていき、宙空で霧散した。

「……終わった……の？」

「……この場はねい」

ぼうぜんとつぶやく美波。竹原の時は、皆で協力して何とか倒した化け物の仲間を、苦戦したとはいえ、二人だけで倒したのだ。

信じられないのも無理はない。

そんな美波に、周囲を見回しながら応えるクリス。彼女は、フィールドが解除されていないことが気になっていた。

そんなとき、向こうで動きがあった。

「ん……。んー」

「！？ 清水さん？！」

身じろぎをし始めた美春に、木村教諭が声を上げる。

それに気づいて、美波とクリスマスもそちらを振り向き、二人の方へ近づいていく。

「ん……ん？ こ、ここは……？」

徐々に覚醒する美春。少し寝ぼけたように目をこすり、身を起こす。

「ふわ……なんだか悪夢を見ていた感じがしますが……？ ……お姉さま？」

軽くあくびを噛みしめながら周囲を見回す美春。その視線が美波を捉えた瞬間。

その目が大きく見開かれた。

「……おねーさま」

瞬時に美波へ飛びつく美春。

その身を美波は優しく受け止める。

「お姉さま、お姉さま！ 美春、怖い夢を見たんですの！ 慰めて下さい」

甘えるように美波に体をこすりつける美春。

その体を、美波は軽く抱きしめる。

「?!」

その事実には驚く美春。そして、その表情がとろけていく。

美波が、彼女の頭をそつと撫で始めたからだ。

「お、おお、お姉さま……」

恍惚の表情で、軽く鼻血まで噴いてしまう美春。

そんな彼女に、美波は優しく語りかけた。

「……怖かったのね？ 美春。もう大丈夫よ？」

「は、はい」

優しい美波の声に、美春は、もう、ゴールしても良いかも、な表情となる。

しかし、そんな蜜月は長くは続かなかった。
ふと、美波が美春を撫でながら言葉を紡ぐ。

その温度とトーンを下げて。

「……ねえ？ 美春」

「ひゃ、ひゃい、なんでしゅか？ おねえしゃまあ」

しかし、蕩れっ蕩れっにとろけている美春は気づかない。

「あんた、お尻に火傷の痕がある？」

「ふえ？ にやんでおねえしゃまがそによことを知ってるんでしゅかあ？ もしかして美春のお尻に見とれて……」

そう答えた瞬間。

美春の全身の骨が、軋む音を発した。

「……??？」

突然、羽毛に抱きしめられているような感覚から、拘束衣に締め上げられる感じになり戸惑う美春。

「……クリス。確認」

「ほいほい」

金剛石より硬そうな美波の声に、楽しそうに応えるクリス。

そのまま美春の背後に回ると膝を着いた。

「あ、あの……な、なにを……？ それからお姉さま？ もう少し力を緩めていただけると……」

「……クリス。やっちゃって」

「うむん。しからば！」

少し青い顔になった美春に構わず、クリスに指示する美波。

それにうなずいたクリスが、美春のジャージの下に手を掛け、シヨーツもろとも一気にズリ降ろす！

「みぎやあああああああつっつっ！……！」

思わず悲鳴を上げて鎖骨まで紅に染めあげる美春。何とかしようと身をよじるが、体は美波によって完全に固定されて身動きが出来ない。

フリーだったはずの足も、ズリ降ろされたジャージとシヨーツが膝の辺りにあるため、うまく動かせない。

クリスの目の前では、もがく美春の体にあわせて、彼女のまる出しの白い尻が揺れている。

「間違いないねい」

その白い柔肌にまんまるに残った、ピンクの火傷痕を確認してうなづくクリス。

「いやあああつ?! ひ、ひどすぎますっ!! こんな恥辱っ!!」

あまりの羞恥プレイに半泣きになる美春。そんな彼女の耳元で、地獄から響くような声が聞こえてきた。

「……やっぱりあんただったのね? 美春。盗撮の犯人は」

その言葉に、美春の体が硬直し、顔が青ざめる。

「な、なんでお姉さまがそのことを……?」

「それをアキ達に擦り付けるために、ウチまで利用したのね?」

「……………」

続いた美波の言葉に、美春は尻がまる出しなのも忘れてイヤな汗を大量に流す。

「……そ、それは……お姉さまのために……」

言い募ろうとした美春の体から、美波が離れ、そのまま腕をとり、体を曲げさせ、足を掛ける。

流れるように掛けられる間接技。

「みぎやあつっ?!?! い、痛すぎますっ?! お姉さまっ?!」

「だまんなさい! ウチは本気で怒ってるんだからねっ?!」

「みぎやああつ?!! せ、せめてショーツを上げさせてくださいましっ?! お尻まる出しで固め技なんてはずかし過ぎっにやぎやぎやっ?!?!」

激痛と羞恥にもうどう反応すべきかわからなくなっている美春。それを眺めてクリスは嘆息し、木内教諭は呆気にとられてしまう。

「やれやれだよ。話し合いじゃなくて拷問になってるよん……」

「ハッ?! し、島田さんっ! 暴力はダメですっ!」

「これはお仕置きですっ!」

あわてて止めに入る木内教諭。しかし、美波は怒りに我を忘れて
いるようだ。

そうこうしている内に、美春の表情がうつとりしたものになり
始める。

「ああっ?! な、なんだか気持ちよく……美春、目覚めちやいそ
うです……」

なにか禁断の扉が開いたかもしれない。

「ぐだぐだよん……」

あきれをにじませながら立ち上がったクリスは、軽く頭を掻きな
がら立ち上がった。

『アキ! 後ろですっ!!』

響いた少年の声に、身を沈めながら転がる青いメカニカルアーマ
ーの少女。

長い黒髪に、眠そうな半眼と、その下にべっとり張り付いた隈が
特徴的な少女、来島アキ。

敵の奇襲を避けて体制を立て直し、相手に視線を向けながらも、
聞こえた声に驚きを隠せない。

「……ま、まさか……高名? 高名なんですかつ?!」

『ええ、そうですよアキ。助けにきました』

驚く彼女の視界にパネルがポップアップし、金髪の少年が映った。

「ああっ……た、高名……」

『再会の挨拶は後です。まずはこいつを倒しましょう』

「ええ!」

少年の言葉にうなずき、身構えるアキ。

目の前には異形なる蜘蛛。髪を振り乱した醜悪な顔の女の頭を持
ち、首の付け根の辺りから蜘蛛の牙が生え、黄色と黒で彩られた巨
大で艶やかな尻。胴から延びるのは、細く長い人肌のような四対の

足。その先端から伸びるのは、鋭く伸びた人の爪だ。

「キキキ」

人のような顔を持ちながらも、知性も理性も感じさせぬその顔に、アキは表情をゆがめながら砲弾を撃ち放つと、右へ向かってスライドするように移動する。

攻撃された蜘蛛は、それを音もなく避け、八本の肌の色の足をわしやわしや動かしながらアキへと迫る。

と、その足下から火柱が上がった。いつの間にか投擲されていたディスクマインが炸裂したのだ。

その衝撃で動きを止めてしまう蜘蛛。それを好機とばかりに両肩を展開させるアキ。パラボラが花開き、収束した光が奔流となって放たれる。

が、蜘蛛はすかさず跳躍してそれを避けてしまう。

そのまま縦横無尽に動き出す蜘蛛。その素早い動きに、アキの攻撃はすべて避けられてしまう。

しかし。

『……甘いですよ』

少年の声が響き、蜘蛛の足に光のロープが巻き付いた。

「キ？」

身動きの取れなくなった蜘蛛へ、アキは再び爆光を解き放つ。今度こそその直撃を受ける蜘蛛。

ふっとんだそれを追うように走り出したアキのアーマーがすべて浮き上がり、一歩踏み出した瞬間、破裂するかのようにアーマーが弾け飛び、軽装備となったアキの召喚獣が姿を現し、信じられないような速度で走り抜け、蜘蛛の落下地点でブレーキングし、体を大きく回転させながら回し蹴りをたたき込む。

さらに吹っ飛んだ蜘蛛を追跡するように走り出し、あつという間に追い抜いて跳躍し、その肩アーマーが花開いた。

「パワーMAXIMUM」

コールドしながら体をひねり、真下に向けてその光を放つ。

その輝きは、今までに倍するほどのもの。

それが、飛ばされてきた蜘蛛に直撃し、その身を灼き尽くしていく。

そして、光が止んだとき。

蜘蛛の姿は、もうすでに残されていなかった。

『やりましたね。システムの再構築はこちらで済ませておきました。すぐに修復します』

少年の声に応えるように、周囲の蜘蛛の糸が消え去り、元の幾何学模様の壁の部屋に戻る。

それと同時に、赤黒く染まっていた空間が、清浄な青い空間に戻った。

それを見たアキは、小さく息を吐く。

「ふう、助かりました高名。あなたのアシストのおかげです」

『いえ……間に合って良かった。君にも大事無くて……』

言いながらどちらともなく笑みをこぼす二人。

その時だった。

『おおっ?! 大変ですゾっ!?!』

『どうしました?! シゲン!』

『アキ殿に近づくものが……』

その声が最後まで続けるより早く、アキをかすめるように小さな鳥が飛んでいく。

「!」

それを見て、目を見開くアキ。

『大丈夫ですか?! アキ!? すぐに追跡を……』

「……いえ、その必要はありませんよ高名。あれは、きっと“味方”です」

『なんですって?』

アキの言葉に驚く高名。しかし、アキは動ずることなく彼に振り向く。

「それより、データを取ってしましましょう。今回のデータがあれ

ば、より強固に防壁を組めるはずです」

『……分かりました』

アキの言葉にうなずき、作業を始める高名。

アキもウィンドウを呼び出し、作業を始める。

と、不意に彼女は鳥が飛び去った方を見やった。

「……支倉さん。みんな。がんばって下さい」

彼女のエールは、電子の海へと融けだし、霞のように宙を舞って消え去った。

第七十二問（後書き）

第七十二問、いかがでしたでしょうか？

美春が大変な目に遭ってしまいました。ファンの方々ごめんなさい。

そして、アキの元には彼が！

そんな中、電脳空間を飛び去った鳥は、いったいどこへ？

次回もよろしく願います♪

第七十三問（前書き）

第七十三問、更新しました♪
読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第七十三問

十七の銀閃がひらめき、獣毛に覆われた体を包み込む。

合宿所の地下、女子大浴場へ続く廊下で、その戦いは行われている。

でつぷりと突き出た腹を揺らしながら暴れるのは、熊のような大きさの大狸。

それと対峙するのは、少々小柄で細身な三白眼の少年、土屋康太と、黄緑髪をショートカットにしたボーイッシュなスレンダー少女、工藤愛子。

それぞれ、己の使役する召喚獣を操り、この大狸と相對する。

先ほど、康太のクラスメイトで、少々ネジが足りなさそうな少年、吉井明久を上へ送り出して以後、攻撃は康太だけが行っている。彼の召喚獣の腕輪の力である、『加速』の力を以て、ほぼ一方的に攻撃を仕掛けている。

反対に愛子は防御に徹し、狸が攻撃してきたときだけ対応していた。

この狸が、愛子の攻撃だけは妖術で必ず避けてしまうからだ。

しかし、それをする以上、愛子の攻撃以外は驚異ではないという答えにもなる。事実、何度も攻撃している康太だが、あまり攻撃が通った感触がない。

『もう諦めたらどうや？ カトンボの攻撃なんぞ、わいには効かへんでえ？』

人語を放つ狸にしかし、康太は答えず、黙々と攻撃を続ける。

その間も愛子は召喚獣に巨大な斧を構えたまま微動だにしない。

『なに狙うとるんかしらんが、わいの裏をかけると思ふなやつ！』

声とともに繰り出された狸の一撃を、康太の召喚獣はするりと避くわす。それに対してイラついたように腕を振り回す狸。

『うつとおしいわ！ ガキどもが！』

暴れる狸の周りを、康太の召喚獣が、残像を残しながら跳ねまわり、大狸を攪乱していく。

再度銀閃が一本刻まれ、二本三本と数を増やし、あっという間に十七の斬閃を生み出す。

それをうつとおしそくに振り払い、目にした康太の召喚獣へと腕を叩きつける。が、その一撃は、彼の使役する黒装束の召喚獣をすり抜けてしまう。

『がああっ?! 残像かいなっ?!』

「……………その通り」

イラついた声を上げた狸へ康太が答え、狸は訝しげにそちらを振り向く。

鋭い眼差しの少年と、小さく笑みを浮かべた少女と。

違和感を感じた。

何かが足りない。

その違和感を、狸が口に出そうとしたときには、その全身を新たな十七閃が包み込んだ。

雷撃を伴った十七閃が。

『ぎ?! があああっ?!』

思わず絶叫しながら、膝を着く狸。その視界に、愛子の召喚獣を抱えた康太の召喚獣が着地するのが見えた。

それこそが、先ほどの違和感の正体。

愛子の前に陣取っていた、巨斧を構えたセーラー姿の使役獣の姿

が無かったこと。

『ぐ、が……いつの間に……』

その事実には驚きを隠せない大狸。

「……………おまえが工藤の召喚獣を警戒しているのは分かっていた」

「ボクの攻撃だけ念入りに避けていたからね」

「……………だから工藤の召喚獣の攻撃が当たれば何かあるとは思ってたが」

「まさかこんなに効果があるなんてね……………」

目の前でもがく狸を見て、愛子は驚きを隠せない。

『けっ。気づいたらんのやろ？ そっちの嬢ちゃんの使役獣は、土の気に強いんや。木気のようなやからな。しかし、このわいが人間に遅れをとるとは……………』

悔しげにつぶやき、くずれ落ちる。そして、その巨体にヒビが入ったかと思うと、からだは崩れさり、土クレと枯れ葉の山となった。

「……………」

それを見てなお、二人は警戒を緩めない。

「……………終わったか？」

「かな？」

油断無く周囲を見回し、終わったようだと息を吐く二人。

「はあ……疲れたよ、ムッツリー二君」

「……………確かに」

へたり込む愛子に答えつつも未だに周りを警戒する康太。

「……………にしても、よくあんなこと思いついたね？ まさか、ボクの召喚獣を抱えて『加速』を使うなんて……………」

「……………それでもあいつに当てられるかは分らなかった。だから、散々攪乱させて怒らせた」

淡々と答える康太。その横で愛子が立ち上がる。

「うん。耳打ちされたときはちょっと不安だったけど、うまくいった良かったよ」

「…………俺とお前なら、当然の結果」

軽く笑顔を見せながら言う愛子から視線を外しつつ答える康太。
それを聞いて、愛子が笑みを深くする。

「ふふ♪ 照れちゃって♪ ムツツリー二君ってば、カーワイイ♪」
「…………冗談はよせ…………?!?!」

からかうように言う愛子にそう言った康太だが、その頬に柔らかい感触を感じて目を丸くする。

「…………な、なにをする?!」

あわてて飛び退きながら頬を押さえる康太。その視線の先に、頬に朱を散らしながら笑みを浮かべた愛子がいた。

「さつき、助けてくれたお礼♪ 格好良かったよ? ムツツリー二

君♪ ボク、惚れちゃったかも

「…………じよ、冗談は止せ、^{フイッ}工藤愛子」

愛子の言葉に顔を逸らす康太。その態度に、愛子の顔が不満げになる。

が。

すぐにイタズラっぽい笑みを浮かべると、康太の背中にすり寄った。

「…………?!?!」

女の子の柔らかさと熱さを感じた康太は身を震わせ硬直した。

「…………ヒドいよムツツリー二君。ボクのこと嫌いな?」

しなだれかかりながら紡がれた言葉に、康太の鼻から赤いものが垂れ始める。

「…………な、なんのことかわからない(ボタボタボタ)」

それでも、とぼける康太に、愛子はまた不満そうになる。

「…………ねえ、ムツツリー二君」

「…………な、なんだ?(ボタボタボタ)」

耳元から聞こえる艶めかしい声に我慢しつつも聞き返してしまう康太。

そこで愛子はニンマリ笑った。

「……ボク、今日はノーブラなんだ」

「……………?!?!（ブシャアアッ）」

大出血級の鼻血を吹く康太。

「だから、さきつちよがムツツリー二君の背中にこすれて……」
言いながら軽く胸元を康太に押しつける愛子。

「……………?!?!?!（バシャバシャバシャ）」

その感触に、バケツをひっくり返したかのごとき鼻血を吹く康太。
そんな二人の様子に、少し離れたところで戦いを見守っていた大
島教諭が、沈痛そうに頭に手を当てながら足を踏み出した。

合宿所裏手の山中。

そこへ一匹のハエが飛んでくる。

それが、軽い破裂音とともに爆発し、煙が立ちこめた。

それが晴れたとき、そこにいたのは、あの狸が化けていた文月学
園現国教諭、山田貫太郎。

そのからだは傷だらけで、ボロボロだった。

「アタタタ、やってくれよったわ。あんガキども……。まさかわい
が人間に担がれるとは思わなかったわ」

ぶつぶつ言いながら懷に手を伸ばし、取り出したるは二枚貝。

それを開いて緑色の塗り薬を指ですくい、傷口へ塗り込む。

すると、傷口がみるみる内にふさがり始めた。

と、小枝を揺らす音が聞こえ、思わず身構える貫太郎。

そして、姿を現したのは、白い着物に狐面の人物。

それを見て安堵の息をもらす貫太郎。

「……なんや、あんたかいな。脅かさんといてえな」

貫太郎に言われて、面を外す。そこに表れた顔は、二年Aクラス
所屬、桜間片菜。

と、その姿に貫太郎は軽く片眉を跳ねさせる。

「あん？　よう見たらあんさんもボロボロやな」

彼の言つとおり、片菜の着物はそこかしこが裂けており、ボロボロだ。被っていた狐面にも亀裂が入っている。

「“神薙の姫”さんと、その守護者はそんな強いんか」

続けた貫太郎の言葉に黙ってうなずく片菜。それを見た貫太郎は深く嘆息する。

「やれやれ……最近の人間はおつそろしいのう。あの召喚獣いうんも、わいら妖怪駆逐するためのもんやって話もあるしな」

「……人と妖は、太古から争ってきた。そんな話はいまさら」

貫太郎のつぶやきに、片菜が答えると、狸が変じた妖の男は小さく笑う。

「そつやな。にしても人間ちゅうんはほんま恐ろしいわ。もう係わり合いになるのはごめんやな」

そう言つて立ち上がると懷から木の葉を一枚取りだして頭に乗せる。

「……選別や。良く効くで？」

言いながら二枚貝を片菜へと放り投げると、破裂音とともに煙に包まれる。

それが晴れるより早く、翼がはためく音が響き、一羽のフクロウが飛び去った。

後に残されたのは、白い狐が一匹。

彼女は二枚貝を開くと、その塗り薬を傷口に塗り込み始めた。

と、不意に空が金色に彩られた。

それは、巨大な黄金の魔法陣。

その中央に、光の柱が立つ。

「……あれは」

つぶやく彼女の視線の先、光の柱の中を、小さな火の鳥が急降下していった。

「なんだこれはっ?!」

「こいつはあの時のっ!?!」

その光景を目にして、巨人の召喚獣の主たる少年、後藤裕一は驚愕に目を見開いた。そして、これを見るのが二度目となる赤毛を逆立てた長身の少年、坂本雄二も驚きを隠せない。

そんな彼らを後目に、光の柱を通って一羽の鳥が降り立つ。

広げた翼が“X”の字をかたどり、光の柱が左右に割れた。

『EXTRREAM!!』

電子音とともに、緑とプリズムカラーと黒の三色で縦に色分けされたポニーテールの召喚獣が姿を顕し、その胸から一本の剣が差し込まれた盾が姿を顕す。

その盾を手に取ると、“P”のインシヤルが剣の柄に吸い込まれ、召喚獣が一気に剣を抜きはなつた。

「そんな派手な演出程度でっ!!」

叫んだ後藤が巨人に命を下し、その巨大な両腕を振り上げる。

「散開しろ!!」

雄二の指示を受けるのは、小さな体躯にポリウムのあるポニーテールの少女、支倉ひばりと、どこか緩い気配をまとった優しい少年吉井明久。そして、ふわふわの綿飴のようなピンクブロンドの姫路瑞希に、長い黒髪に静謐な美しさを備えた少女、霧島翔子。世界の性別に喧嘩を売っている美少女少年、木下秀吉の五人。

それぞれ、己の召喚獣とともに、巨人から距離を取る。

それを見て足を踏み出す巨人。それに合わせるように、雄二と翔子の召喚獣が飛び出していく。

その速度は雄二の召喚獣の特殊能力の効果を受け、普段よりも格段に早い。

「オラアッ!」

召喚獣の姿が隠れるほど大きな腕甲を振りかざし、その剛拳を巨人に叩き込んだ。

が、小揺るぎしかない。

しかし、雄二は攻撃の手を休めない。むしろその手数は増していき、拳の壁を巨人の眼前に作り出す。

その嵐のような連打を嫌い、巨人が手を振るった。

それを、反動を利用して身をひるがえしながら避わず雄二の召喚獣それと入れ替わるように翔子の召喚獣が得物を大上段に構えて飛びかった。

その腕にはめられた腕輪が輝き、翔子の召喚獣が持つ刀から、半透明で細長い紐状のエネルギーが何十本と噴き上がり、刀を中心に螺旋状に巻き付いていく。

あつという間に二メートルを超えるエネルギーの刀身を作り出し、翔子はそれを思い切り叩きつけた。

重量物と重量物が衝突したような音が響き、巨大な剣と巨人の腕が衝突した。

が、巨人はその一撃にも耐えてみせる。しかし、その右足からがくりと力が抜けた。

足下へ飛び込んだ瑞希の召喚獣の大剣による一撃を、膝裏にたたき込まれたからだ。

すかさずそこへ切り込む明久の召喚獣とひばりの召喚獣。
ブーストアップ
「強化！」

明久の言霊に応え、木刀が大太刀に変化する。

そして明久とひばり、二人の斬撃が巨人の胴体を捉えた。

その威力に押され、ついに尻餅をつく巨人。

それを見て、明久は己の腕にはまった腕輪をかざした。

「畳みかけるっ！ 多重^{ダブル}召喚！！」

次の瞬間、明久の召喚獣の姿がブレ、二体に分かれた。

「ちい、召喚大会の腕輪かつ！」

分身した明久の召喚獣の姿に、後藤はするとく舌打ちした。

その間にも明久と雄二の召喚獣が相手を滅多打ちにする。

二体の召喚獣を同時に操作するそんな離れ業を、明久はやっての

けた。

だが、巨人はそれをものともせず立ち上がり、無造作に右腕を振り回す。

「わわっ?!」

「ちっ!」

あわてて召喚獣に避けさせる明久と雄二。

そして、入れ替わるようにひばりと瑞希の召喚獣が切り込んでいく。

「やああああっ!」

「たああああっ!」

気合いを込めて、大剣とグラディウスが突き込まれた。それを受けてなお微動だにしない巨人。だが、少女二人の召喚獣を飛び越え、翔子の召喚獣が巨人へ切りつけていく。

しかし、巨人の防御力は並大抵ではなかった。これだけの連続攻撃にさらされてなお、弱ったようには見えない。

仕切り直しとばかりに距離を取る一同。

「くっそ、弱点とか無いのかよ」

『探しましょうか?』

「できるならさっさとやって……って、誰だっ?!」

自分に聞こえた、聞き覚えのない声に、ノリツコミの要領で誰何の声を上げる雄二。

明久、瑞希、翔子、秀吉が首を振る中、唯一ひばりだけがぽかんとした顔で己の召喚獣を見ていた。

そこには、あの電子の迷宮から連れてきてしまった小鳥が半透明の姿で召喚獣の頭の上に佇んでいたからだ。

『? どうしました? マスター。私の顔になにか?』

つぶらな瞳のまま、くりんと首を傾げつつ訊ねてくる小鳥。

それを聞いたひばりの目が、まんまるに見開かれる。

「しゃ、しゃべった! 小鳥がしゃべったよっ?!」

思わず声を上げたひばりへ、ほかの面々の視線が集中し、呆気に

とられた。

なにせこの小鳥、

『みなさま初めまして名前はまだありませんが、私、支倉ひばり様の使い魔となることになりました。よろしくお願いしますね♪』

と、のたまったからだ。

「ほんとにしゃべつとるぞい」

「……ちよつと可愛い」

「不思議ですねえ」

「すごいね、ひばり」

「な、なんだか変な感じだよ」

周囲が口々に言う中、比較的冷静な雄二が、小鳥に問いかける。

「おい、あの巨大召喚獣の弱点を調べられるってホントか？」

『あれをサーチすれば、すぐですね』

雄二に聞かれて、小鳥は胸を張って応えた。

「なら、すぐにやってくれ」

『わかりました。マスター、剣を盾に戻して敵に向けて下さい』

「え？ えっと、こうかな？」

小鳥の声に戸惑いつつも召喚獣を操作するひばり。その操作に従って、彼女の召喚獣が盾をかざすと、スキャン用のサーチビームが放たれ、巨人を走査する。

『スキャン完了。検索終了。パワーと防御力な特化したミュータント召喚獣。金気の属性を持っており、熱には特に弱いようです。もっとも、体毛で熱を吸収発散しておりますから、余程の威力を一点に集中させなければなりません。狙いどころは、マスターが奴の胸につけた傷の中央ですね。あそこの中心を正確に貫ければ倒せます』
「……わかった。なら……翔子、秀吉、明久。俺たちであいつの動きを止めるぞ」

「……わかった」

「うむ、今度はやってみせるのじゃー！」

「了解だよ、雄二」

指示を出す雄二に、三人がうなずく。それを確認し、赤毛の少年は、ひばりと瑞希に顔を向ける。

「支倉は姫路のつゆ払いだ。そしてとどめは姫路、おまえだ」

「え?! わ、私ですか?!」

雄二に役割を言い渡され、瑞希は驚きを露わにする。

そんな瑞希へ、ひばりが笑顔を向けた。

「大丈夫だよ、みっちゃん。あたしもフォローするから」

そんなひばりの言葉に安心したのか、ほっと息を吐く瑞希。

それを確認しつつ、雄二はゆっくりと近づいてくる巨人に向き直った。

「よし、行くぞっ!」

雄二の号令を受け、七匹の召喚獣が飛び出していく!

それを見た後藤はせせら笑った。

「ハハッ、お前達の策なんか、揉み潰してやるよ!」

そんな彼の意志を受け、巨人が両手を広げながら前進する。そ

の両足へ、雄二の召喚獣と明久の副獣が突進していく。

ガチンコでぶつかり、衝撃で地を揺らしながらその足を大地へ縫いつける雄二の召喚獣と明久の副獣。

それを嫌った巨人が、二匹を排除しようと腕を振り上げ、動きが止まった。

翔子が腕輪の力で作り上げた大蛇達でその両手両足を縛り上げたからだ。しかし、圧倒的なパワーを誇る巨人はそれを無理矢理ふりほどこうとする。

そこへ明久の主獣が右腕へ、秀吉の召喚獣が左腕へ飛びつき押さえ込んだ。

「今だ! 支倉! 姫路!」

「ハイっ!」

雄二の合図を受け、ひばりと瑞希の召喚獣が一気に間合いを詰める!

ひばりの召喚獣が、いったん剣を盾に納めると、四つのイニシヤ

ルが浮かび上がった。

J

C

H

L

それが“X”を描くように盾の四力所へ吸い込まれていく。

「J o k e r M a x i m u m D r i v e ! !」

「C y c l o n e M a x i m u m D r i v e ! !」

「H e a t M a x i m u m D r i v e ! !」

「L u n a M a x i m u m D r i v e ! !」

その四つの電子音に続き、Pのイニシャルが剣の柄に顕れる。

「P r i s m M a x i m u m D r i v e ! !」

そして、五つ目の電子音が響き、再度グレイウスを引き抜くと、紫、緑、赤、金に変化する光り輝く剣と化した。

それを手に走るひばりの召喚獣。

その後ろで、瑞希の召喚獣も剣を握ったまま腕輪を起動させ、炎熱の剣を生み出しながら駆ける。

それを見た後藤は、憤怒の形相となった。

「なめるなああああつっ!!」

雄叫びのようなその声に呼应し、暴れる巨人。

それを押さえる四人も必死だ。

「く、ぐうう」

特に二倍のフィードバックがかかっている明久は、脂汗を流しながら耐えている。

が、ほころびは生まれてしまう。

「だ、ダメじゃ……押さえきれん……！」

悔しそうに顔をゆがめる秀吉の視線の先で、彼の召喚獣がはね飛ばされてしまう。

そして、不完全ながらも自由になった左腕が、瑞希の召喚獣へ襲いかかった。

それをとつさに剣を真横にして受け止めさせる瑞希。

その瞬間、膨大な熱エネルギーが解放され、爆発が起こる。

「きゃあっ?!」

思わぬことに悲鳴を上げる瑞希。

そして、澄んだ音とともに砕け散る大剣。

「あ、ああ……」

それを見て呆然となる瑞希。

対して巨人はというと、その巨腕手首の先は失われ、肘の辺りまで炭化していた。

だが、それすら棍棒代わりに振り回そうとする。それを見たひばりが、意を決したように叫んだ。

「アキくん！ みつちゃんと！」

「え？ そうか！」

言いながらひばりは召喚獣を走らせると、そのまま巨人の右腕にグラディウスを叩き込む。

わずかに食い込んだそれで右腕を押さえ込んだひばりの召喚獣。それと入れ替わりに飛び降りた明久の主獣が瑞希の召喚獣を抱えて転がると、その上を炭化した左腕が通り過ぎる。

「あ、明久君。わ、私……」

シヨックで半泣きになる瑞希。

「瑞希ちゃん」

そんな彼女に、明久は笑って見せた。

「え？」

「一緒に……やろう！」

そう言つて右手を差し出す明久。

同時に明久の主獣が、大太刀を持った手を瑞希の召喚獣へ突き出す。

それを見た瑞希は、涙があふれそうな眼に力を込めた。

「ハイッ！！」

大きくうなずき、明久の手を取る瑞希。

それに応えるように瑞希の召喚獣が左手で、明久の召喚獣が右手で持つ大太刀の柄を握った。

二匹で一本の大太刀を握りしめる召喚獣。

そのまま同時に走り出し、巨人へ向かう。

振り回された左腕の残骸を、二人同時のステップで避け、その胸元へ向けて跳躍した。

「だああっしやああっつ！」

「やああああっつ！！」

二人そろつて雄叫びを上げ、二匹で握った大太刀を突き出した。

その瞬間、瑞希の召喚獣の腕輪が輝き、大太刀が刃が真紅に染まる。

それは、ひどくあっさり巨人の胸板を貫き、背中まで貫通した。

そして、刀身が真っ赤に輝くとその傷口から炎があふれだし、あつという間に巨人を覆い尽くしていくのだった。

第七十三問（後書き）

第七十三問、いかがでしたでしょうか？

ついに決着です♪

最後を締めたのは明久&瑞希♪

戦闘パートではあまり出番がなかったのでもうなりました。

さて、強化合宿編も残りわずかです。

が、一つ重大な問題があります。

例の小鳥の名前が決まりません（泣）

そこで、ひばりが名付ける、この小鳥の名前を募集します！

感想、メッセージ、活報コメントなどで受け付けますのでどしどしどうぞ♪

締め切りですが、申し訳ありませんが、次回更新にも絡みますので、九月二十五日とさせていただきます（日付が変わるまで）。

ポイントは、“ひばりが思いつきそう” “女性人格” “通常召喚獣型に変身可”です。

それでは、次回もよろしく願いしますね♪

第七十四問（前書き）

第七十四問、更新しました♪
読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第七十四問

巨人の体が焼き尽くされ、砕けて赤黒い粒子へと変換されていく。それと同時に、その主だった少年、後藤裕一からも赤黒い光が吹き出した。

「うあああああつっ!?!?」

悲鳴とともに禍々しい光はいつそう強くなり、彼の頭上にたゆたう。

そして、それが出尽くしたようにおさまると、彼の腕にはまっていた腕輪が、まるで陶器の割れるかのような澄んだ音とともに砕け散ってしまう。

それと同時に倒れ伏す後藤。

後に残ったのは、赤黒い障気の雲。

それを見上げるのは緑と黒とプリズムカラーで縦の三ラインに色分けされた、ポニーテールの召喚獣。

それを操る小柄でポリウムのあるポニーテールの少女、支倉ひばりの肩に、小さな小鳥が舞い降りた。

『マスター。あの障気の塊を逃すのはまずい。一気に浄化してしまう』

「ふえっ? ど、どうすればよいの?」

ひばりの肩で次にすべきを示唆する小鳥に、ひばりはどうすればよいかを訊ねる。すると小鳥は一つうなずいてから説明を始めた。

『まずはサーチしたときのように剣を盾に納めてかざすんだ』

「こ、こう?」

指示されたとおりに剣を盾に納めるように操作するひばり。

それに従って、彼女の召喚獣も動く。

かざした盾に、四つのインシタルがXを描くように浮かび、電子音が響いた。

『HEAT MAXIMUM DRIVE!!』

『LUNA MAXIMUM DRIVE!!』

『METAL MAXIMUM DRIVE!!』

『TRIGGER MAXIMUM DRIVE!!』

四つのマキシマムドライブのエネルギーが盾の中央へとむかい、合流したところで大きくPのインシヤルが浮かんだ。

『PRISM MAXIMUM DRIVE!!』

その電子音な応えて赤、金、銀、青の四つの光弾が螺旋を描くように撃ち出され、その中央を、七色に輝く光線が翔け上がっていく。それは、宙にたゆたう不気味な雲を斬り裂き、雲散無消させてしまった。

『これで良い。あれは逃してしまうと後々やっかいだからね』

障気の消えた場所を見上げるひばりの肩で、小鳥が軽くうなづきながら言う。

「これでもう平気なの？ えーっと？」

それを聞きながら首を傾げるひばり。

『問題ない。どうかしたかい？』

彼女に答え、小鳥が不思議そうにひばりをみる。

その仕草にひばりは軽く苦笑いを浮かべると小鳥に訊ねた。

「えっと、あなたのお名前はなんて言うのかな？」

『名前か。ボクにはまだ名前は無いよ。マスターに付けてもらわないとね。けれどもその前に説明しなくてはいけないことがあるんだ』

そういつて目を瞑る小鳥。

「説明すること？」

オウム返しに問い返すひばり。それを受けて小鳥はうなずいて、軽く羽ばたいてとひばりの肩から飛び上がり、彼女の召喚獣の頭の上に降りたつた。

『まずはボクのことだ。ボクはデータ生命体と呼ばれる存在であり、また、使い魔と呼ばれる存在でもある。まあ、意志のある召喚獣みたいなものだと思ってくれればよい』

説明を始めた小鳥にひばりがうなづく。

『さて、ボクが発生した理由には、マスター。君の存在が大きい。君とともにあの電脳空間から飛び出したおかげでボクは肉体を持てたんだ。しかしボクの体は未だに不安定だ』

「どうして？」

『それは、マスターとの繋がり、使い魔の契約が中途半端だからだ。このままではボクの存在は消えてしまっただろう』

「ええっ?! そうなの?! じゃ、じゃあ早く契約を……」

小鳥が消えてしまうと聞き、あわてて契約をしようと言い出すひばり。しかし、小鳥は首を振る。

『あわててはいけないよ? マスター。なにも今日明日にも消えてしまふというわけじゃあない。安心してくれ』

「そ、そうなんだ……」

小鳥の言葉に安堵の息を吐くひばり。

『ふふ、優しいねマスターは。さて、使い魔の契約をすると、使い魔の体を維持するためにマスターから魔力を貰うことになる。まあ、マスターの体がどうにかなるようなことは無いから安心してくれたまえ』

「う、うん」

『ただし、これは使い魔との契約が終了するまで続くことになる。よくよく考えることだね。わからないことがあれば、文月学園の学園長に訊ねると良いよ』

「う、うん」

ひばりがうなづくのを見た小鳥は、翼を広げる。

『さて、少し疲れてしまったので、先に文月学園に帰らせて貰うよ』
「え? こ、このフィールドはどうするの?」

帰ると言い出した小鳥にひばりはあわてて訊ねる。すると、小鳥は羽を止めた。

『ふむ。確かに入るときは強引に入ったが、出るときもとなると面倒ではあるね』

と、その時、彼女らの前にホログラムモニターが突然展開した。
そこに映るのは長い黒髪で、目の下にべつとりと隈を張り付けた少女、来島アキだ。

『そのことについて提案があります』

そう続いた言葉に、小鳥は羽根をたたんでモニターへと向きなおった。

『提案？　どんなものかな？』

聞き返しつつ小鳥は、その翼をまるで人間の手であるかのように腕を組み、右の羽根をアゴ下にあてる。

その姿にひばりは何とも言えない表情を浮かべるが小鳥もアキも気にした様子はない。

『こちらでも、このフィールドを解除する試みをしているのですが、成果がはかばかしくありません。そこで、あなたにお手伝い願えないかと』

モニター向こうのアキがそう言うと、小鳥はアゴ下から羽根を外し、そのうちの二本を、まるで人差し指と中指のように立て、それを軽く首を傾げながらこめかみにあてる。

『……なるほど、科学とオカルトの申し子であるボクならその知識があると踏んだわけだね？　来島アキ』

そう言ってこめかみにあてていた“指”をアキへと向ける。

しかし、アキ自身は表情を崩すことはない。

『そうです。これに関しては、私と高名のふたりがかりで良い結果が出ていませんから』

『……小田高名。彼の力オス理論はとても興味深いね。意図してエラーを作ること、イレギュラーを引き起こし、そこから結果を導き出す。実に面白い』

高名の名を聞いて楽しそうに“笑う”小鳥。

『……それでどうでしょう？　ミスタ……』

『残念ながら“ミス”だよ？　来島アキ。そしてまだ“名前は無い”』

小鳥の訂正と、名前はまだ決まっていけないという話を聞いて、アキの表情がわずかに揺らぐ。

「……そう、ですか。失礼しました。で、お受けいただけますか？」
「構わないよ？　こちらにとっても渡りに船ではあるし、ここで解除法を確立できれば、この先ボクにとっても、君たちにとっても役に立つ。では、検索を開始しよう。キーワードは……」

二人（？）の話に完全に置いてけぼりを食らったひばりは、周囲を見回す。周りでは、おのおのが無事を喜び合い、安堵の息をもらっているのが見えた。

それを見て軽く笑顔になるひばり。

と、緩い雰囲気の子が、涙目になっている綿飴のようなピンクブロンドの少女を慰めているのが目に入った。

軽く嘆息し、幼なじみでもあるその二人へ踏み出そうとして、その足が止まった。

少女は泣きながら少年に抱きつき、彼はそれをしっかりと受け止めると、その御髪を撫でてやる。

そんなふたりの姿にきびすを返すひばり。胸に手をあて、うつむき加減にふたりから遠ざかる。

その姿を見て息をもらすのは180オーバーの長身に、赤毛を逆立てさせた少年、坂本雄二。

その隣には、日本人形のような和の雰囲気をもった静謐な黒髪美少女、霧島翔子も悲しげに瞳を揺らしながら寄り添うように立っている。

「……雄二。ひばりが……」

「……わかってる。だが、こいつはデリケートな問題だ」

「……けど……」

「……俺もあんな支倉は見えて辛い。しかし、下手に手を出してこじれば、明久と姫路、そして支倉も二度と道を交わらせることが無くなっちゃうかもしれん」

「……うん」

「ともかく、アイツがあんなにかたくなに明久への想いを否定する理由が分かれば道が見えるかもしれないんだが……」

言いながら頭に手をやる雄二。

そんな彼の背中に衝撃が走り、首周りに白い腕が回された。

「どーん」

「ぐへっ?!」

楽しそうな声とともに、カエルが潰されたかのような声が響く。

それを聞いた翔子が雄二の方を見上げると、その背中には金髪の少女が楽しそうにのっかっていた。

それを見た翔子が眉を寄せる。

「……クリス？ 雄二にくつついちゃダメ」

そう言いながらクリスを雄二から引き離そうとする翔子。

それを見たクリスがいたずらを思いついたかのようににんまりと笑った。

「うむん」 焼き餅やキナきりんも可愛いねい」

言いながら今度は翔子に抱きつくクリス。もともとスキンシップになれていない翔子はそれに目を白黒させてしまう。

「ふいー、誰かと思えばクリスか。脅かすな。で？ 首尾は？」

「ばつちりだよん」 かなり苦労したけどねい」

珍しくジタバタしている翔子に頬ずりしながらウィンクを跳ばすクリス。その様子に雄二も軽く息をもらす。

「そうか。その様子じゃあやっぱり清水だったか」

「盗撮と脅迫状に関しては間違いないねい。火傷の痕も確認したし、間違いないよん」

「そうか。ああ、覗きの主犯はそこに倒れてる奴だ」

軽くうなずいてから後藤をアゴで指し示す。するとクリスの眼差しが細く鋭い刃へと変化する。

「ふーん。そうなんだ。どーしてくれよーかねい」

クリスのまとう冷気を気にするでもなく、雄二は言葉を続ける。

「ついでに言えば、小学校で支倉をイジメていたのもコイツらしい

んだが、その理由がガキの恋愛観でな……」

「……なにそれ？」

それを聞いてクリスが困惑したような顔になり、雄二がかいつまんで話すと眉間に深くシワを刻んだ。

「さらに言やあ、支倉に告白まがいなことも言ってる」

「……そうなると、処遇を決める際にひばりんを同席させないわけにもいかないねい」

そう言いつつ深く嘆息する。

その場でひばりがなにを言い出すか想像がついたのだろう。

「……だが、そうでもしなけりや支倉は自分を責めるだろうな。この騒動を引き起こしたのは自分だ」くらい言い出しかねん」

「……だねい。ともあれ……」

『おいクリス！』

口を開きかけたクリスの耳朵を、聞き覚えのある小さな少女の声が打つ。小走り駆け寄ってくるのは、雄二との話題にあった少女、支倉ひばり。

その姿を認めて、クリスは翔子を解放し、ひばりへと向き直った。

「クリス、無事だったの？」

「いえあゝ おねーさんもみなみも無事だよん」

「そうなんだ、良かった……」

友人の無事な姿と言葉に安堵の息をもらすひばり。ふと、その顔が何かに気づいて足を進めた。

その先にいるのは、倒れ伏した少年。後藤裕一。

どうやら意識を取り戻した彼の姿が視界に入ったらしい。

身を起こそうとする彼の横に、膝を着きながらしゃがみ込むひばり。

「……後藤君、大丈夫？」

そう訊ねながら手を伸ばす。

「……支倉？ ぼ、僕は……… いったい……？」

そんなひばりの姿を認めて、裕一は頭を軽く押さえながら振る。

「いや、違う……覚えてる……僕は、僕はとんでもないことを……」
つぶやき、震え始める裕一。その姿を白けた様子で見ていたクリスは、不意に得心がいったような面もちとなった。

そんな彼女に気づいた雄二が、片眉をはねさせる。

「なんか気づいたのか？」

「うむん？ 確証無いけどねい。もっちゃん、この後藤って子、竹原みたいな怪獣型召喚獣を使っていなかったかなん？」

「ああ、だいぶ苦戦させられたがな」

「……みはるんも怪獣型呼び出していたよん」

クリスのその言葉に雄二は目をむいた。

「おい、それでよく無事だったな？」

「うむん。なみなみと二人でなんとか倒したけどねい。で、みはるんは竹原と同じ腕輪をしていたよん」

「ふむ。確かにコイツも腕輪をしていたな。そうか清水もか……」

アゴに手をあてて考え込む雄二。

「……はあ。その腕輪バラマいてる奴は、なに考えてるんだろっねい」

「さてな。そこまでは皆目見当もつかん。だが、確かなことは、まだ一連の事件に決着は着いていないってことだ」

「だねい。……まったく、こっちは楽しく学生生活したいただけだっというのに……って?!」

「ん？ どうし……オイオイ……」

真剣に話し合っていた二人は、その光景に呆気にとられた。

その視線の先には、震える裕一を抱きしめて慰めるひばりの姿があったからだ……。

「ようやく終わったみたいだな」

戦場の後方で、その男はそう漏らす。その後ろから、一人の少女

が声をかけた。

「……でも、良かったんですか？ 代表」

「ん？ なんだ、あの化けもんどもと戦いたかったのか？」

少女へ振り向きながら男はそう投げかける。

「……い、いえそんなことはありませんが、ほかのクラスは戦っていたのに、私たちBクラスは参加しなくて良かったのかな？ と…

…」

そんな少女の言葉に、その男は軽く口の端を上げる。

「かまうことはないさ。覗き連中とやり合っていた時点でお前らの点数もヤバいことになっていたんだ。後退は当然だ」

自信たっぷり言い切る男。その言葉に、Bクラスの女性陣は抱いていた罪悪感が軽減したらしく、少し表情を緩め始めていた。

そんな彼女らを見て、卑怯で知られたこの男はほくそ笑んだ。

そして、主戦場であった食堂に視線を転じる男、根本恭二。

その視線の先には、二人の男子の姿。

「……待つてろよ？ 坂本、吉井。お前らは必ず潰してやるからなあ」

第七十四問（後書き）

第七十四問、いかがでしたでしょうか？

あれだけのことをしでかした後藤に対してさえ、優しさを見せる
ひばり。いったい、なにがそこまで彼女を駆り立てているんでしょ
うか？

次回もよろしく願います♪

第七十五問（強化合宿編最終話）（前書き）

第七十五問、更新しました♪

忙しさにかまけて遅くなってしまうました。すいません。

それでは、読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

第七十五問（強化合宿編最終話）

その後、フィールドは解除され、生徒に教師もあの空間から解放された。

その直後に現れた学園長は、髪を振り乱し、ものすごい形相だったため、一部生徒に悲鳴を上げられてしまったのは、完全に余談だ。そしてその日の内にどこからともなく黒服のみなさんと養護教諭の北丘めぐみが現れ、事態の收拾にあたった。

ひばり達は知らないことではあるが、合宿所の裏手の山はめっちゃくちゃになっており、何かが争った後が見受けられた。

その何かは公にはならず、地滑りが起きたなどという発表がなされた辺り、きな臭さを感じずにはいられない。

結局、生徒達もその地滑りによるパニック症状を引き起こしたとして、北丘が中心となりメンタルケアを行っていた。

しかしながらあの騒ぎの後でも平然としているものが多い辺り、文月学園の二年生は神経が太いらしい。

ともあれ、あれだけの事件にも関わらず、大きい怪我をした人間が皆無であったのは幸運であったといえよう。

しかしながら、世間の手前パニックを起こした生徒たちを登校させることも出来ず、文月学園の第二学年は合宿の後、一週間の自宅待機となった。

「そうですか。目撃された腕輪は二つとも土くれに変わってしまいましたか……」

そうつぶやき、ソファに座りながら足を組んだ、朱いドレスを身

にまとった、癖のある長い黒髪の女性が、手にした孔雀のような赤い羽根で出来た扇子で口元を隠す。

その目は机に両肘を着きつつ組んだ手で口元を隠した老女傑へと注がれる。

そのナイフのように鋭い視線をものともせず、この老女は口を開いた。

「……ああ。竹原の時と同じさね。まったく、どこどいつが造ったんだか……」

「……錬金術による腕輪の生成。“我々”にとってノドから手が出るほど欲しい技術ですね」

「……フン。“あんたとあんたの属する組織”が。だろう？ あたしは例え妖 あやかし 相手でも召喚システムは戦争の道具にすることを容認しちゃあいないよ」

老女と女性の視線が交錯する。

が、すぐに女性の方が視線を外した。

「……それに関してはこちら意思の統一が出来ていませんしね。

西は機能しておりませんし、北は相変わらず静観の構え。東は反対見事にバラバラですよ」

「音に聞こえた『七の竜 セブンスドラゴン』も一枚岩とは言えないようだねえ？ 朱羽容子代表？」

皮肉っぽく言った老女の言葉に軽く眉を寄せる。

「……返す言葉ありませんね。藤堂カヲル学園長」

言いながら扇子を畳み、立ち上がる容子。

「世間的な隠蔽はまず大丈夫でしょう。この国の政府にも“ご協力”願いましたしね。なんにしても、この文月学園という“実験場”と、折角集めた資質ある生徒という“実験動物 モルモット”を失うのは避けたいですしね」

「あんたっ！！」

容子の言葉に思わず叫びながら立ち上がる学園長。その様を見て、容子は軽く笑みを浮かべた。

「これは失礼。しかし、合否に召喚システムへの適性が大きく関与していることは事実でしょう？ 早く資質の無い人間にも召喚が出るようにして欲しいものですね」

「……………」

楽しそうに笑う容子をにらみつける学園長。

容子の眼が、さらに鋭く細まった。

「……………それとも、もう完成していて隠してらっしゃるとか？」

「そんなこと、あるわけが無いさね。冗談も休み休み言ってくれ」

「ま、構いませんが」

そう言いながら退室しようときびすを返す。

と、その足が止まった。

「ああそれから……………」

「まだ何かあるの……………」

「“七の龍”の主、央見麟 おうみ りん 様が、近々こちらの学園を視察したいそうです。追って日時を伝えますので、よろしくお願いしますよ？」

面倒そうに応じようとした学園長の言葉を遮って放たれた容子の言葉に、老女傑は思わず絶句する。

「はあっ！？ な、何を考えてるんだいっ？！ あの子はっ！？」

「確かに伝えましたよ？ 藤堂学園長。では」

思わず素っ頓狂な声を上げた学園長を後目に退室する容子。

と、扉を開けた先にたたずむ小柄な少女とぶつかりそうになりながら体を反らした。

「おっと失礼」

「あっと、すみません」

小さな少女は、トレードマークの跳ね上がりそうな勢いで頭を下げ、その姿に容子は小さく微笑む。

「いえ、良いですよ。……………ところで、今日は二年生はお休みではないのですか？」

にこやかに笑いながら訊ねてきた容子に、ひばりは顔を上げた。

「あ、はい。そうなんですけど、学園長先生に呼ばれましたので登校してきたんです」

「そうですか。藤堂さん……学園長なら中におられますよ？」

「あ！ありがとうございます。失礼します」

容子に頭を下げてから扉へ向かいノックする小さな少女。

それを見届けた容子は、赤い孔雀の羽のような扇子を広げ、口元を隠しながら歩み去っていった。

まだ開いたままの学園長室の扉を軽く二度ほどノックし、遠慮がちに中を覗きながら小さな少女支倉ひばりは声をかけた。

「呼び出しを受けた支倉ひばりです。入室してもよろしいでしょうか？」

「ああ、待ってたよ。入んな」

中からの返事を受け、半開きの扉を開けて会釈する。

「失礼します」

丁寧に入室してきたひばりを見て相好を崩す学園長。

「よく来たね。用件はわかっているとは思うが……」「……使い魔のことですよ」

そう答えたひばりに学園長がうなずいてみせる。

「で？ どうするのか決めたのかい？」

そう訊ねられ、ひばりは軽く瞑目する。

「……いっぱい考えたんですけど……やっぱり契約しようと思いません」

目を開け、学園長を正面からまっすぐ見据えて答えるひばり。

そんな彼女を真っ直ぐに見つめて学園長は口を開いた。

「いいんだね？ 契約をしたら最後、おまえさんは魔の世界に関わっていくことになる。望むと望まざるにかかわらずだ」

その言葉にも、ひばりは揺るがない。

「それでも、あの使い魔の子が消えちゃうよりいいです。それに、あの子はあたしのせいで実体化しちゃったみたいですし、相応の責任は取らないと……」

そう言つて笑う小さな少女。

そんな彼女を見て、学園長は深く嘆息する。

「……そうかい。決意は固そうだね。なら、これを持っておいき」
言いながら机の引き出しを開けて取り出したのは小さく透明なケースに銀色の円盤が封入されたペンダント。

「こいつは来島が持っているA I召喚獣用の簡易フィールド作成装置さね。あの使い魔には普段この中にいて貰うと良い」

「あ、はい。ありがとうございます」

お礼を言いながらペンダントを受け取るひばり。

「……けどね、積極的に魔と関わろうとしちゃあいけないよ。あんなものに関わっても、ろくなことにはなりはしないさね。わかったかい」

「……わかりました」

諭すように言う学園長へ、神妙にうなづくひばり。

「それで？ 名前はもう決めたのかい？ あの使い魔の
そう聞かれて、ひばりは微笑んだ。

「はい、もう決めました♪ あの子の名前は……」

「へえ、そんな事してたんだ」

自宅待機期間を明けて初の登校。おっきなポニーテールがトレードマークの小さな少女、支倉ひばりは、隣家の幼なじみである優しい空気をまとい重要なねじを締め忘れたような雰囲気少年、吉井明久と肩を並べて歩いていた。

「うん。この子を調べるんだって話で、学園長先生やアキちゃんに

付きつきりだね」

さすがに疲れたよと苦笑いを浮かべるひばり。

「それで、そのペンダントの中にいるんだ？ えっと……」

「うん」 出ておいで？ “風華”^{ふうか}」

明久に答えながらペンダントを手のひらの上に載せるひばり。すると、銀色の円盤が広がりながら浮かび上がって回転する。

そして、その上に小鳥の像を結んだ。

『呼んだかい？ マスター』

「うわ、ほんとにカオルさんみたいだ……」

『君は吉井明久だね？ 改めて自己紹介しよう。ボクの名前は“風華”。よろしく頼むよ』

「よろしくね風華」

そう言つて明久が手を差し出すと、軽い破裂音が響いた。

「え？」

呆氣にとられた明久の目の前に佇んでいたのは、くせつ毛を首もとの辺りで切りそろえた、茶色い尾羽根を持つ召喚獣だった。

「エエエーッ？！？！ しよ、召喚獣になっちゃったよ？！」

あまりのことに目も口も鼻も飛び出しそうな勢いで驚く明久。

その驚きっぷりに風華は目を丸くする。

『……さすがにそこまで驚くとは思わなかったよ』

「あはは……」

そんなやりとりに、ひばりは苦笑いを浮かべることしきりだ。

そんなとき、二人の後ろから声がかかる。

「おはようございます」 明久君、ひばりちゃん、何してるんですか？」

声に振り向いた先にいたのは、ふわふわのピンクブロンドの少女、姫路瑞希。明久とひばりが何をしているのかのぞき込もうと少し背伸びする。

「おはよう瑞希ちゃん」

「おはようみっちゃん」

『おはよう姫路瑞希』

と、二人と一匹に挨拶を返され目を丸くする。

「お、おはようございましゅ……え？ え？」

そのまま挨拶を返す瑞希だが、驚きのあまり頭がついてこないらしい。

その様子を見て、明久とひばりは顔を見合わせながら苦笑いを浮かべた。

「やっぱり驚いてるね」

「そうだね。あのねみっちゃん、この子はね……」

と、風華が顕現しているペンダントを載せた手のひらを見せながら説明するひばり。

それを聞きながら感心したようにうなずく瑞希。

と、そこへ軽快な足音が聞こえてきた。

ついで明久のからだに軽い衝撃。

「おっはよーアキ」

赤みの強い茶色い髪をポニーテールにまとめた帰国子女。島田美波。

軽快に挨拶しながら明久の腕に軽くぶつかってきた。

それに気づいて瑞希とひばりもそちらを見る。

「おはよう美波」

「おはようございます美波ちゃん」

「あ、おはよ、美波ちゃん」

「瑞希とひばりもおはよう、三人で何の話？」

四人で挨拶を交わしながらのぞき込む。

『おはよう島田美波』

そして、ひばりの手の上の小さな召喚獣に挨拶されて目を丸くする。

その驚きようにひばりと明久、そして瑞希は顔を見合わせ笑みを浮かべた。

「あのね美波ちゃん、この子はね……」

そうして瑞希にしたのと同じ説明を、楽しそうに美波にしてい
ひばり。

青く、高い空は、もうすっかり夏の様相を見せていた。

第七十五問（強化合宿編最終話）（後書き）

第七十五問、いかがでしたでしょうか？

これにて強化合宿編終了です♪

またしばらく番外編シリーズの流れとなり、その後、原作第四巻に入っていきますのでよろしくお願いします♪

最後に、小鳥の名前募集にたくさんの方から名前の候補をいただきました。

良い名前ばかりの中、条件に合いそうなものをピックアップしましたが、最終的に五つまで絞り、後は語感で選ばせていただきました。

そう言うわけで、小鳥の名前は『風華 ふうか』となりました

♪ この名前を応募して下さった秋雨さん、ありがとうございます♪

また、名前を応募して下さいましたみなさんも、本当にありがとうございます♪

これからも『バカと雲雀と召喚獣』をよろしくお願いします♪

番外編 16 闇に囚われし少女。あるいは来島アキのこと。(前書き)

番外編 16 更新しました♪

よろしく願います♪

今回はいつもと違う感じですが、楽しんで読んでいただければ幸いです♪

番外編 16 闇に囚われし少女。あるいは来島アキのこと。

薄暗い部屋の中央に置かれた椅子と机。

そこに一人の女の子が座っている。

その体は、手術着のようなもので覆われているのみであったが、見えている肌色の面積は、そう多くない。

頭を鼻の辺りまですっぽり覆うような機械をかぶり、椅子の横に置かれた点滴から伸びるチューブは彼女の左腕に差し込まれていた。体のあちこちに電極がつけられ、いくつかの機械や計器がテープで直接からだに固定されている。

その小さな両手は、机の上に鎮座する奇妙な機械に差し込まれ、大きなモニターに無数のアルファベットの羅列が流れていた。

『計測できた思考速度は53・84倍で安定していますね』

『ふむ。まだいけるだろう。追加投与だ』

『脳が破裂しますよ？』

『構わん。この研究がうまくいけば、超能力者を作り出すことも夢ではないんだ。科学に犠牲はつきものさ』

『追加投与開始』

『98・44倍……208・38倍……1264・70倍……28

98・74倍……思考加速が極端に鈍りましたね？』

『限界か？』

『鼻腔からの出血を確認。毛細血管が破裂したみたいです』

『こりゃ終わったな……』

『ああ……なんだっ？！ 貴様ら！？』

『ま、待て！ 暴力を振るうな！ 抵抗しない！』

頭の機械が外されると、真っ赤な視界が広がった。

そこに見えたのは一人の老婆。

何かを必死で叫んでいるのが見えてはいるが、女の子にはよく聞こえないのか、反応がない。

ふと、女の子は顔をずらそうとして、息がしづらいことに気づいたようで、腕で鼻の辺りを拭う。

ぬるりとした赤い液体が付着し、それを眺めながら彼女はくずおれた。

白いベッドの上で、長い黒髪の女の子は目を覚ました。

身を起こそうとするが、体が言うことをきかないのか、もがくばかりだ。

起きることを諦め、視線だけを部屋中にさまよわせる。

白い壁。

花が生けられた花瓶。

自身の腕につながった点滴のチューブ。

そして……。

「空だ……」

あの施設に連れてこられて数年。見るもののかなわなかった青空が見えた。

その事実には、視界が揺らいだ。

「起きたのかい」

唐突に声を掛けられ、そちらに視線を向ける。

いつのまにやら入ってきたのか、一人の老女がそこに立っていた。老女が入っても、背筋はピンと張り、肌艶も目の輝きも生命力に

あふれている。

それに引き替え、女の子はどうだ。

ベッドから起きあがることも出来ず、顔には生気がない。

今も視線だけを動かし、老女を見上げるだけだ。

「また、実験ですか？」

淡々と訊ねる女の子に、女傑とまで言われるこの老女の顔が、わずかに揺れる。

「いや、もう実験は無いよ」

その老女の言葉に、女の子は視線を外しながら瞑目し、深く嘆息した。

「……なら、私はもう不要なものですな。廃棄予定はいつでしょう」
ついで彼女が口にした言葉に、老女は絶句した。

己がゴミ同然に廃棄されることを淡々と受け入れる女の子。

その異様さが老女、藤堂カヲルをして戦慄せしめたのだ。

「……いや、廃棄もしない」

その言葉に、女の子は目を見開き、カヲルを見る。

「お前が居た施設は閉鎖されたんだよ。研究内容と実験内容の凄惨さに耐えられなくなった研究員の告発によってね」

「……………」

そう言い放ったカヲルの顔を、女の子は見つめた。

「お前さんは、もう自由なんだよ」

優しく言うカヲルから、女の子は視線を外して天井を見上げる。

「自由……………」

ぼつりとつぶやいた女の子を見て、カヲルは安堵した。

しかし、続いた言葉に顔を強ばらせた。

「いったい、何をすればよいのでしょうか？ 何をしたらよいのか
わからないのに、“自由”等というものを貰っても意味はありません」

つぶやく女の子に、カヲルは答える術を持たない。

その代わり、彼女のベッドに腰掛け、軽く抱きしめた。

「……すまないね。もつと早くにあの施設のことを知ることが出来たら……いや、言い訳にもならないね」

そして老女傑の目の端からあふれる輝き。

不意に、女の子の手が持ち上がり、カラルの体に触れた。

拒絶のサインかと顔を上げたカラルが見たものは、諦観に染まった顔ではなく、あふれる感情の奔流に頬を濡らす女の子の顔だった。

『茶番ですね』

『そういう言い方はやめてほしいね』

『全くです。不愉快ですよ』

『……』

『あらあら、西と東のお二方は、こういうのが好みですか？ わたくしにしてみればおままごとにしか思えません』

『……やめておけ、品性を疑われるぞ？ 南の』

『ふう、いつもはだんまりの北にまで言われるとは思いませんでした。まあ、今回は私の不手際ですからね。潔く退かせていただきます。しょうか。では』

『……』

『やれやれ。僕も帰らせて貰うよ。妹を寂しがるわけにはいかないしね』

『……好きにしろ』

『ねえ、めぐみ』

『なんだ？ 聡美』

『これで良いのかな？ “ボク”達』

『……良いか悪いかは関係ない。これが“四神”に生まれたものの定めだ』

『……“ボク”……いや、“私”ももう行くよ。“彼ら”との折衝もあるしね。じゃあ』

『…………… ああ。…………… すべては運命の銀輪の廻るまま…………… か』

「今日からここがお前さんの家になる。まあ、最初は馴れないだろうが、我慢しな」

「…………… はい、藤堂さん」

半年も過ぎた頃、なんとか退院した女の子をカヲルは引き取った。研究者として忙しい日々を送るカヲルが引き取っても育てられるわけがないという周囲の声を押し切って引き取ったのだ。

「それから、コイツがお前の名前だよ」

「来…………… 島…………… アキ」

渡された書類に書かれた名前を反芻する。

「スタッフ連中が付けた名前だからね。不満はあるかもしれないが…………… どうしたんだい？」

「あ…………… いえ、なんと言いますか……………」

「？」

「その…………… 嬉しいんです」

「嬉しい？」

「はい。“あそこ”では“おい”とか番号でしか呼ばれませんでしだから…………… だから、こんな素敵なお名前を頂けて、嬉しいんです」

女の子、いや、来島アキの素直な言葉に、老女傑の頬にわずかに朱が差す。

そして、ふたりはしっかと手を繋ぎ藤堂邸へ足を向けた。

二人の生活は、親子とはいいがたいものだった。
しかしカヲルは、忙しい中時間があればアキと過ごすようになって

ていた。

そしてその時間は、アキにとっても掛け替えのないものでもあった。

そうして一年もたった頃。

「すまないねアキ。このところ忙しくてね」

「いえ、大丈夫ですよ？ 家のことは家政婦さんがやってくれますし……けど、お仕事うまく行っていないんですか？」 ソファにもたれ、少し疲れた様子のカラルに、アキが寄り添う。

「……ああ。ホログラムを実体化させて、それを人間がコントロールするって新しいシステムさ。今のところうまくいっていないがね」
「……大変そうですね。何かお手伝いできたら良いのですが」

「その気持ちだけで十分だよアキ。そら、もつとこっちに來な」
言われてアキはカラルに抱きついた。

「おや、ずいぶん甘えん坊だね？」

「次はいつ甘えられるかわかりませんから」

「そうだったね。じゃあ、今日は一日二人でのんびりしようじゃないか」

「ハイ」

そうして笑い合う二人。

しかし……。

『どうしてそんな事になっているんだい！』

『わかりません！ 突然にコンピュータが！』

『実験用のものは、すべて独立させてあるはずさね！ ウィルスなんてあり得ないよ！』

『しかし現に！』

『もういい！ 今からそっちへ行く！ あたしが陣頭指揮を執るさね！』

その電話のやりとりを聞きながら、アキは己の部屋に飛び込んだ。
そして……。

外出の支度を終えたカヲルが、アキの部屋に声をかける。

「アキ、すまないね。研究所でトラブルが起きちまってね。休みはここまでだよ。埋め合わせは……」

そこでアキの部屋の扉が開け放たれた。

「ああ、アキ。悪いね。あたしはこれから……」

そう言ったカヲルの前に、ノートPCのモニターが開かれる。

そこを流れるアルファベットを見て、カヲルの顔が驚愕で固まった。

「このプログラムは……？」

「すいません藤堂さん。少しでもお役に立ちたくて、前々から造っていたんです」

「“V・ARMSシステム”……仮想空間に感覚を接続して、ダイレクトにプログラムに干渉する……しかし、こいつは……」

「……はい、私にしか使えません。ですから、私をあなたの研究所まで連れて行って下さい。ご恩を……返させて欲しいんです……」

それは、カヲルと暮らし始めたアキが初めてのお願い。初めてのわがまま。

保護者としての嬉しさと、危険に近づいて欲しくないという願い。そして、研究者としての好奇心。

数瞬悩んだカヲルの答えは。

「………わかったよ、支度しな。お前さんには、アタシの手伝いをして貰うからね」

「あ………はい！」

嬉しそうにはにかみ、部屋へ舞い戻るアキ。

その姿を見て、カヲルは己の決断が正しいのか？

答えを出せずにいた。

『素晴らしい手際でしたよ？ 藤堂さん』

『そりやどうも。あんたが出張ってくるとは思わなかったけどね。朱羽代表』

『ふふ、わたくしはこのプロジェクトをかっていますのよ？ 実現すれば、様々なビジネスチャンスにつながりますし』

『ふん。あんたの狙いは軍事用だろう』

『否定はしませんよ。まだ許可も得られていませんし、あなたの同意もありませんけどね』

『そんなくだらない事にこのシステムを使わせるわけには行かないね』

『残念ですこと。そうそう、あの子、来島アキさんでしたか』

『！』

『正式にスタッフに組み込みました』

『あ、あんた！ 何を勝手に！』

『あれだけの才覚を持っていたとは思いませんでしたが、とんだ広いものです。本人の同意も得られてますし、七の龍の正式な要請です。あなたに拒否権はありませんよ？』

『く……』

『良い子じゃないですか、あなたの手伝いが出来ると喜んでましたよ』

『アンタがそう誘導したんだろうにっ！ お得意の手でっ！』

『ふふ、それも否定しませんが。決めたのは彼女自身ですよ』

『……………』

『おお怖い怖い。視線だけで殺されそうです、なので退散いたしましょう。では』

『……アキ……すまない。アタシのせいで……すまない……すまない……』

その時、女傑とまで呼ばれた彼女の目に光るものが浮かんた。

番外編 16 闇に囚われし少女。あるいは来島アキのこと。（後書き）

番外編 16 いかがでしたでしょうか？

今回の番外編は、来島アキの過去となっています。
次回はクリスカ俊夫ですね。

それでは、また次話もよろしく願いますね♪

番外編17 黄昏に舞う堕天使。あるいは、クリスティーナ「ウエストロードの

番外編17を更新しました。

よろしく願います♪

今回の話は、クリスのファンの方にはキツいかもしれませんが。
心して読んで下さい。

煌々と照らされた部屋の中。一人の少女がベッドの上でうなされていた。

「……や、……めて、……や……ちゃん……。いや……嫌あああああつっ！！」

叫びながら跳ね起きる少女。美しいであろう金色の髪はざんばらに乱れ、蒼い瞳は極限にまで見開かれている。

クリスティーナ「ウエストロード」。

彼女が、まだバカな彼らと出会う前。その心を覆う闇は、未だ晴れない。

「だからあ……良いでしょ？ お・じ・さ・ま」

媚びを売るかのように、微笑む長い金髪の少女。その蒼い瞳も魅力的だ。

大きく胸元がはだけた扇情的な衣装に、高そうなコート。

黒いミニスカートに同色のガーターストッキングを履き、すき間からのぞく白い肌が情欲をかき立てる。

彼女に腕を取られた中年の男は、その顔をだらしなく弛ませ、二の腕に押しつけられた柔らかい感触をスーッ越しに楽しんでいた。

「参っちゃうなあ……じゃあ、一時間だけ、遊んじゃうか？」

「やった」 おじさま素敵」

そう言いながら中年の頬に口づける。

「おうっ！ ほっほう！ 大胆だね」 ティナちゃんは」

「ふふ」 ベッドの上なら、もっと大胆になれるかも」

そう言いながら、中年の太股を撫で擦る。

「おほう」

だらしなく顔がゆるみ、男の象徴がいきり立った。

その様子に、蒼い瞳が細くするどくなり、口の端が持ち上がる。と、声が響いた。

『その二人！ 何をしている！』

太く逞しさを感じる声に男がすみあがり、少女は舌打ちした。

振り返ってみると、そこには予想通りの姿。はちきれんばかりにスーツを圧迫する筋肉。長いモミアゲに野太い眉。浅黒い肌の大男。

「チツ。鉄人が」

小さく悪態をつく。

「な、なんなんだあんだ！ ま、まさか騙したのかっ？！」

動揺した男が口走った内容に、少女はほくそ笑んだ。
すぐにしなを作って大男にすり寄る。

「あーんダーリン♪ このひと、あたしの胸を揉みしだいたのよ？
早くやつちゃって♪」

「ひ、ひいゝ、助けてくれゝ」

「ま、待て！ 俺はそんなのでは……」

焦った大男の弁明を無視し、悲鳴を上げながら逃げ出す男。

その姿が見えなくなったところで、金髪の少女は笑いだした。

「アハハハハハ♪ なぁにあれ、なっさけなあ」

「……ウエストロード！」

少し強い口調に、笑うのをやめる。

「なんだよ鉄人」

そして彼をにらむように応える。

「いい加減にしろ。おまえはそんな事をする娘ではないだろう。ご家族も……」

言ってしまったから西村は後悔した。

そんな彼を、少女の蒼い瞳が射殺さんばかりに睨んだ。

「心配してるって？ そんな訳無いじゃん。あたしが助かったって聞いても、顔も見に来やしない両親。あたしを組み伏せて、強引に

奪った兄さん。家族？ 何を期待しろって言うのよっ！ もうほっ
といてよ！」

「……」

大男、西村宗一は言葉の選択を誤ったことを痛感した。

目の前の少女、クリスティーナ・ウエストロードは、もともと信
頼していた兄に裏切られた。

その後も二ヶ月にも及んで監禁され、様々なことをされた。

「……すまん。俺がもっと早く気付いていれば……」

そこから彼女を助け出したのは、西村だった。

彼女が休学した際に、不審に思い、家を訊ねたが、応対した兄に
言いくるめられてしまった。

それでもなお、疑問を持ち続けてはいたものの行動には出られな
かった。だが意を決し、彼女に会わせて欲しいと彼女の兄に頼んだ。
思えばすでに彼女の兄は狂っていたのかもしれない。

薄気味の悪い笑みを浮かべながら、高級マンションへ案内された。
そのマンションの一室で芋虫のように転がる少女に群がる男ども
を見て。

西村は我を忘れた。

気付けば彼女の兄を含む十人以上の男を半殺しにしていた。

そして、その事件は、その場に現れた北丘と名乗る女によって、
無かったことになった。

後に残された少女は身も心もボロボロだった。

治療とりハビリが続いたが、西村も根気よく付き合い、結果二ヶ
月ほどで退院できたのは奇跡だと言われた。

これで大丈夫だと、西村は思った。

だが違った。

名家の系譜と言われる彼女の親類縁者からの誹謗中傷。帰ってこない両親。

心ない仕打ちに、彼女の心は限界だった。

男を引っ掛け、そこかしこで喧嘩を繰り返す。

そんな生活を繰り返すようになっていた。

「すまん、ウエストロード。俺は……」

いつもの覇気もなく、力無くうなだれる西村。

その言葉に何かが擦れる音が響く。

「……ッ、謝んなっ！ この筋肉ゴリラっ！！」

素早く繰り出された銀色の一撃はしかし、西村がとっさにスウェー
ーしてかわした。

ッウ。

が、彼の鼻から赤いものが垂れた。鼻先をかすったのだろう。
見れば彼女の手には、銀色に輝くカイザーナックル。

「ムウ……！」

鼻を押さえてうめく西村。その隙をついて、少女は走り出した。

「ばーか、死ね！」

「ぬぐ？！ ま、待はんかつ！ ウエフホフオード！！」

とっさに追いかけるれない彼を置いて、彼女は走った。

その口元が、わずかに歪んでいた。

『鉄人の奴、なにがあつたんだ？』

『さあ、でも、鉄人のあのデカい鼻の穴に詰め物なんて、間抜けだよね』

『鼻血でも止まらんのかのう』

『ムツツリー二じやあるまいし』

『……………俺は鼻血など吹かない』

『『それは嘘』』』

『……………不本意』

『真面目な話、鉄人は夜な夜な誰かを捜してるらしい』

『そうなの？』

『いったい誰を捜しておるんじやろうな』

『……………女の気配』

『まさか、鉄人だよ？ 人間の女の子に興味なんてあるわけ…………』

『ちよつと吉井。さつきからうるさいわよ？ いい加減にしなさいよ』

『う、ごめん島田さん』

こそこそと話し合う生徒たちの背後に、大きな影がたった。

「吉井、俺の授業はそんなに退屈か？」

「やだなあ、たいくつに決まって…………」

西村の声に、頭のネジが足りなさそうな少年が答え、冷や汗をたらだら流しながらそーっと振り向くと、伝説巨神が立っていた。

あわてて周りに助けを求めようとするも、先ほどまで密やかに話していたクラスメイトたちは、真面目に前を向いて板書していた。

「……………って、みんなのうらぎりものっ！！ へうっ？！」

叫んだ瞬間、脳天に鋼の固まりとみまごうばかりの鉄拳を落とされた。

授業を終えた西村は放課後になると、早速出かける。

彼が気にかける金髪碧眼の少女、クリスティーナ・ウエストロド。

彼女はこの二月から自宅学習となっており、助けたいきさつ上、西村が放課後に彼女の家に行って教えることになっていた。

だが、自宅へ行って家政婦に聞いてみれば、どこかへ出かけたと言われ、あちらこちらを探し回る羽目になる。

幸か不幸か、目立つ容貌ではあるため、探すことにはそれほど苦労はしないのだが、学園で教鞭を執っている間も気が気ではない。なにしろ初めてボイコットした際に見つけたのは、数人の男を相手に殴り合いの喧嘩をしているところだったからだ。

それ以外にも男をホテルに誘ったりなど危うい行動が増えており、西村はほとほと困り果てていた。

今日も今日とて彼女を捜して歩く。

が、今日に限ってはなかなか見つからなかった。

路地裏を一人の女が歩く。

ニット帽をかぶり、サングラスをかけた姿。黒い皮ジャンにジーンズとスニーカー。

その胸の大きな膨らみが、彼女の女を主張する。

不意に、その足が止まった。

すると、周囲に数人の人影が現れる。

「よう、ねーちゃんこんな誰も来ないようなところに一人で来ちゃあ危ないぜ？」

「ああ、俺たちが守ってやんよ」

下卑た笑いを浮かべながら近づいてくる。男が六人。

その内の一人が一気に近寄り、彼女の肩に手を回す。

「だからよう、気持ち良いことしようぜ」

そう言いながらポリウムのある双丘を揉みしだく。

男は彼女の反応を見ようと、その顔へと視線を這わす。

それが、サングラスの隙間から彼を見る蒼い瞳とぶつかった。

「……いいわよ？　なんなら六人まとめて面倒見てあげるわ」

艶然と微笑んだ彼女が言うと、歓声が上がった。

「このポークビッツみたいなのであたしを満足させられるならね」

「へぐっ?!」

突然、肩を抱いていた男が奇妙な悲鳴を上げる。

見れば彼女の白い手が、彼の股間のモノを握りしめ、捻り上げていた。

「て、てめえっ!？」

上がった声に応えるように、モノを放す。

次の瞬間、悶絶していた男の顎が弾けた。

目にも留まらぬ早さで繰り出されアッパー気味の一撃で、その男は仰向けに倒れた。

上へ向けられた拳を開き、ニット帽をつかんで一気に脱ぎ去ると、中から黄金の輝きがあふれ出た。

折しも夕暮れ、ビルの合間から、路地裏に差し込み黄昏時の茜色が反射する。

かけていたサングラスを捨て、皮ジャンに一度手を突っ込み、羽を広げるように左右へ持ち上げた。

その手に輝くのは、銀色のカイザーナックル。

天使が翼を広げ、蒼い瞳で彼らをへい睨する。

「……白銀の……堕天使……」

誰が漏らしたかわからぬそのつぶやきに、彼女の口が、ニイイッとつり上がった。

[illegible]

西村が彼女を見つけたとき、彼女は男の一人に馬乗りになり、狂ったように笑いながら殴り続けていた。

周囲にはボロ切れのようになった男どもが五人、転がっていた。

.....

あまりの凄惨さに、絶句してしまう西村。しかし、すぐに我を取り戻し、彼女を取り押さえる。

「やめんか！ ウエストロード！ 殺してしまうぞっ！！」

「うっせえっ!! 放せっ!! こんな奴ら、死ねばいいんだ。死ね! 死ね! 男なんてみんな死んじまえっ!!」

西村の剛腕によって押さえられるも暴れ続ける。

その体を、西村は抱き寄せた。

「放せっ！！　ちくしょっ！！　放しやがれっ！！」

「やめろ、ウエストロード。もうやめてくれ。俺はもう、おまえの心が切り刻まれるのを見たくない……」

抱きしめられもがく彼女に、西村は懇願する。

そして、彼女の頬に冷たいものが落ちた。

見上げた先に見たのは、鋼鉄とまで言われた男の涙。

「なんで……、なんで、先生が泣くのよお……」

「……それは、お前が泣いているからだ。ウエストロード」
言われて気付いた。

自分が涙も流さず泣いていることに。

「な、なんで……せん、せ……は、あたしに……かまつの……よ……」

泣きながら訊ねる。

「それは、お前が俺の、可愛い生徒だからだ……」

その言葉に、蒼い湖面が揺れる。

「……でも、きつと、いなくなっちゃう……。みんなと同じに……。仲間も、友達も、恋人も、パパも、ママも、そして……。お兄ちゃんも、居なくなっちゃった……。きつと……。先生も……。居なくなっちゃう……。そしたらあたし……。また……。ひとり……。ぼっちだよ……。ひとりは嫌、ひとりは嫌だよ……。だれか、ずっとあたしと一緒に居てよう……。ひとりは……。さびしいよう……。う、あ……。あ……。あ……。あーっあっあっあっ……。あーっ、あっあっあっ……。」

もがくのをやめ、泣き始める彼女をしっかりと抱きしめる西村。そして、夜の帳が落ちる路地裏に、泣きじゃくる少女の声がいっまでも響いていた。

その後、またあの女が現れ、すべてを無かったことにしてしまった。

その際、交わした言葉に出てきた『七の龍』。

西村はそれに不吉なモノを感じた。

だが、一介の教師たる彼にどれほどのことが出来るのか？

だが、生徒を守る。

その一点においては何者にも譲るつもりはなかった。

それから、泣きつかれて眠ってしまった彼女を、家まで送ったが、鍵が見あたらず、仕方無しに自宅へ運んだり、その夜目覚めた彼女

に裸で迫られたりしたのは完全に余談だ。
結局、出席日数も足りず留年してしまった彼女ではあったが、ひとりでの生活をがんばっているらしい。

そして春。

『む？ 坂本か？』

『げっ？！ 鉄人。何でこんなところに立ってんだ？』

『西村先生と呼ばんか。そら、振り分け試験の結果だ。受け取れ』

『面倒なことしてんなあ。まあ良いか』

『ちゃんと中身を確認しろよ』

『うーい』

そんなやりとりをしている、漢を見て、笑みがこぼれる。

“セミロング”の金髪が揺れ、少女はスキップするように彼へと近づいた。

『おっはよん♪ にっしむ♪』

その声にやれやれとばかりに振り向く西村。

『西村先生と呼ば……』

彼女を見て、西村は驚いた。

声で彼女だとは気付いていたが、腰まで届いていたあの美しい金髪が、肩に掛かる程度のセミロングになっていた。

『……ウエストロード、おまえ、その髪は……』

『切った♪』

半ば呆然と訊ねる西村に、彼女、クリスティーナ「ウエストロードは、花が咲くような満面の笑みで答えた。

その表情を見て、小さく微笑む西村。

『ほら、これがお前のクラスだ』

そう言いながら封筒を差し出す。

それを受け取ったクリスは、即座に破って中身を取り出し広げた。

「あー、やっぱりね」

そこに書かれた内容を見て苦笑い。

「まあ、お前の場合、留年というのが大きいかな」

内容を知っている西村はしかめっ面になる。

「べつに構わないよん」今度は必ず仲間を守ってみせるからねい

」

「……さっきから気になっていたんだが、なんだそのしゃべり方は？」

西村が痛痒に耐えるように聞くと、クリスは快活に笑った。

「これが新しい“あたし”だよん」よろしくねい」てっちゃん

」

「てっちゃんではない、西村先生と呼ばんか。まあいい……ウエストロード」

「なにかなん？」

「なにかあれば、いつでも俺の処に来い。教師として、いつでも相談に乗ってやる」

「……うん、そうするよ西村先生。じゃね」

右の人差し指と中指の二本で先ほどの紙を挟みながら軽く振ると、颯爽と歩くクリス。通り過ぎ際に、西村へウインクを飛ばす。

クリスティーナ「ウエストロード 二年Fクラス

手にした紙には、そう記されていた。

番外編17 黄昏に舞う堕天使。あるいは、クリスティーナ「ウエストロードの

番外編17、いかがでしたでしょうか？

クリスの過去、といっても、Fクラス入りする直前くらいの話です。

短期間で身も心もズタズタにされた彼女。

仲間のために頑張る理由もおわかり頂けましたでしょうか？

重い話が続きましたので、次回は肩の力を抜いて楽しめる話にしたいと思っています♪

それではまた次回♪

番外編 18 逃亡者達 あるいは金髪少女のこと。 前編（前書き）

番外編18 更新です ♪

よろしく願います ♪

「さつて今日の買い物は……」

つぶやきながらメモを見る少年。優しげな雰囲気をまとい、どこかネジを締め忘れたかのような感じの彼は、吉井明久。

しかし、この四月から鍛え始めた効果か、そのシャツの下肉体は、細身ながらも筋肉質になってきており、歩く姿も様になり始めている。

とはいえ彼の本質がそうそう変わることもなく、優しさと緩さを兼ね備えた空気感は健在だ。

様々な騒動があった強化合宿では有ったが、宿舎の裏手の山が崩れた事故があり、オカルトめいた事件の数々は闇に葬られたらしい。そうは言っても生徒たちはある程度のことは知っているわけで、どうしても噂として漏れ出てしまうわけだが、結局、尾ひれがつかまったり、類似の噂に埋もれたり、真相に至るのは難しそうだった。

「まあ、だからってライオンのシッポを踏みに虎穴に入る必要はないよね」

やはりまだ学力的には残念なようだ。

「……今さりげなく罵倒されたような気がするけど……」

つぶやきながらメモを折り畳む。

強化合宿明けの日曜日。明久は隣家の幼なじみに頼まれ、日用品の買い出しに出かけていた。

二人で来ても良かったのだが、幼なじみ曰く、「その間に両家とも掃除しちゃうから、買い出しお願いね？ 分量あるから大変だよ？」とのことで、一人でこうやって買い出しに出てきたわけだ。

「それにしても良い天気だな」。ひばりが布団を干すって言うていたから、今晚は気持ちよく寝れそうだ」

ちよつとした楽しみだが、それを甘受できることは幸せなのだと

思う。少なくとも妖怪じみた化け物どもと戦うよりは。

清涼祭、強化合宿とそんな非日常的な出来事に巻き込まれてきたが、そういう目に遭ってみると、この日常のちよつとしたことが大事に思えてくる。

友達とのちよつとした時間が、宝石のように輝いているかのように思えるのだ。

そんな事をつらつらと考えながら歩く明久。

その視界の端に、陽の光に反射するほどの金色が写った。

『どうしたですか？』

『はい、少し道に迷ってしまつて……』

『そうなんですか？　なら、葉月が案内してあげるです！』

聞き覚えのある声も聞こえてきて明久はそちらに顔を向けた。

自宅マンションからそうは離れていない公園に見覚えのある赤茶色の髪のツインテールが見えた。

『あれつて……おい、葉月ちゃん！』

見知った女の子の姿に声をかけてみる。

それが聞こえたか、葉月は小動物のようにひょこんと頭を跳ねさせ、周りをきよきよと見回す。その度に長いツインテールが振り回され、もう一人の金髪の女の子に当たっていた。

『葉月ちゃんこつちこつち！』

見かねて声をかける明久。それでわかったのか、葉月は明久を見つけて花が咲くように笑った。

『バカなお兄ちゃんだ！　バカなお兄ちゃん♪』

金髪の子の手を取り、明久の元へ駆けてくる。

その様子を苦笑いを浮かべる明久。

『慌てると転ぶよ』

言いながら腰を落とし、視線を合わせられる高さへと降ろして葉月を待つ。

「バカなお兄ちゃん、こんにちわです！ 今日はお散歩ですか？」

「こんにちわ、葉月ちゃん。これから買い物に行くんだよ」

「あの〜」

二人のやりとりに、おずおずと声がかかる。

明久がそちらを見るとそれはそれはボリユームのある、見事な金髪縦ロールの女の子がいた。背丈は葉月と変わらないほどで雪のような白い肌をしており、翠色の瞳が特徴的である。

見た目儂いようなイメージなのにどこか鮮烈な印象を残す、不思議な女の子だ。

「えっと、君は……？」

「あ……。はい、わたくし、皇見麟と申します」

名前を聞いて、明久の顔がひきつった。

その様子に、麟は首を傾げた。

「どうされました？」

「いや、な、なんでもないよ？ 漢字が出てこないなんて、そんな事無いからね？」

焦りのあまり、バラしてしまう明久。

その様子に麟は呆氣にとられた。

「プツ。ふふふ、しゃべってしまってますよ？ バカなお兄さん」

「い、いやその呼び方、出来ればやめて……。僕は吉井明久。明久で構わないよ」

少し落ち込み気味に言う明久。

その落ち込みように、麟は焦ってしまう。

「あ、あら？ 葉月さんが嬉しそうにおっしゃってましたので、あだ名か何かだと思ったのですが……。え、えーそれでは明久さんとお呼びしてもよろしいでしょうか？」

そう聞いてきた麟に、明久は柔らかく笑いながらうなずいた。

そこへ葉月が割り込んでくる。

「バカなお兄ちゃんバカなお兄ちゃん、麟ちゃんは迷子さんなんです！」

「そうなの？」

「はい、お恥ずかしながら。文月学園というところへ行きたいのですが、迷ってしまいました」

明久に訊ねられ、上品そうな所作で苦笑いする麟。

見た目、葉月変わらなくらいの歳に見えるが、実際はどのくらいか分からなくなってくる。

「……ごめん、失礼だけど麟ちゃんって何歳？」

「はい？ 十歳ですけど」

「あ、見た目通りなんだね。ずいぶんしっかりしてるみたいだから、同じくらいの年齢かと……」

「??? 明久さんは高校生くらいですよ？ 私くらいの身長で高校生というのはいくら何でも……」

明久の不思議な言いように麟がそう言ってくるが、明久はとっさに目をそらした。

「……………」

「え？ ど、どうして目を逸らすんですか？ ま、まさか本当に私くらいの身長の高校生が？ あ、ああ飛び級ですよ？」

「それってひばりちゃんのことです？」

明久の様子に信じられない面持ちの麟。そこへ葉月が口を挟んだ。

「ひばりちゃん……？」

その名前に麟は訝しげになった。

「……いや、僕の幼なじみでね？ 支倉ひばりって言うんだけど、僕と同じ歳なのに身長が伸びなくてさ、未だに葉月ちゃんくらいの身長なんだよ……」

「そ、それはまたなんとも……」

明久の話を聞いて、麟の顔が微妙そうになった。

「話がそれちゃったね。うん文月学園なら案内してあげるよ」

「え？ よろしいのですか？ 何か用事があったのでは？」

明久の申し出に驚く麟。

そんな彼女に明久は笑顔を向ける。

「構わないよ。文月学園までそう遠くはないし、買い物は急いでるわけじゃないからね」

「で、でも……」

麟は明久の手を煩わせることに恐縮してしまう。

それを見た明久は笑みを深くした。

「大丈夫だよ。それにね？ さっき言った幼なじみのひばりは、困っている人を見過ごせない子でね。君が困っているのを僕が放っておいたなんて知られたら怒られちゃうよ。だから、僕が怒られないためにも案内させてくれないかな？」

明久の言葉に、麟の顔が笑顔になった。

「ふふふ」 そうなんです。なら仕方ないですよ？ では明久さん、私を文月学園まで案内していただけますか？」

「一命に換えましても」

芝居がかった調子でお願いする麟に、これまた芝居がかった調子で返す明久。

澄ました様子の二人だったが、どちらからともなく笑い出す。

すると葉月も笑いながら明久に抱きついた。

「麟ちゃんとバカなお兄ちゃん、仲良しさんです！ 葉月も入れて欲しいです！」

「じゃあ一緒に麟ちゃんを学園まで送っていいこうか？」

「はいです！」

明久の提案に、葉月は満面の笑顔で返事する。

その様子に、麟は優しく微笑んだ。

「さて、それじゃあ行こうか？」

二人にそう促し立ち上がる明久。その左腕に葉月飛びつき、手を繋ぐ。

それを見てほほえましく思う麟。しかし、次に葉月から飛び出した言葉に、固まった。

「麟ちゃんも、バカなお兄ちゃんと手を繋ぐです！」

「え？ わたくしもですか？」

突然の提案に戸惑う麟。それを見た明久は、再度腰を落とした。
「嫌だったら、無理に繋ぐ必要は無いよ？　ただ、はぐれるといけないからねあまり離れないでね」

優しく言う明久に、麟は顔をほころばせた。

「……いえ、よろしければ明久さんと手を繋がせて下さい。はぐれるといけませんし」

そう言って手を差し出す彼女に、そう？　と言いながらその手を右手で取る明久。

そのまま立ち上がり、行こうか。と声をかけて歩き出す。

その歩みは、幼い二人に合わせたゆっくりしたものだった。

文月学園に向かう道すがら、三人でおしゃべりをする。特に葉月は話したいことだらけのようで、学校や日常のことを矢継ぎ早に話し続けていた。

それを麟と明久は嫌な顔ひとつせず、耳を傾け、時折相づちを打ちながら自分の思ったことなどを言葉にしていく。

そんなゆつたりとした空気が、三人の間に流れていた。

そんな風楽しく談笑しながら歩いていた三人だが、目の前に一人の男が通りがかったことで終わりを告げた。

黒いサングラスに黒いスーツの禿頭の男だ。

その男の姿が見えた瞬間、麟のからだが強ばり、足が止まる。

「……？　麟ちゃん？　どうしたの？」

突然足を止めてしまった彼女を不思議に思い、声をかける明久。
しかし、麟はそれに反応するでなく、その男を凝視し、顔色を無くす。

そして明久がその男に目を向けると、彼が明久達の方を見て驚いた風になると同時だった。

いずこかへ連絡しながら近づいてくる男を見つつ、明久は麟の様

子をつかがった。

どこか諦めたような暗い顔。
それを見た瞬間に決心した。

「……逃げるよ、二人とも」

小さく、しかしはつきりとした声で告げると、二人の返事を待たずにすばやく彼女らを抱え上げ走り出す！

「ま、待て！」

虚を突かれた黒服ハゲがあわてて声を上げるが、明久は無視して全力で走る。

それを追跡するハゲ。その追い足は十二分に早く、葉月と麟を抱えた明久との距離はどんどん縮まっていく。

と、視界の隅に映ったものを、とっさにハゲへ向けて蹴り込んだ。ゴミ集積用の、大きなポリバケツだ。

それがあっさり蹴り飛ばされたことにハゲは空だと断じて走る。が。

『おぐうわっ?!』

中身はきっちり入っていたようで、思わぬ衝撃に吹き飛ばされるハゲ。

ゴミまみれとなった彼を後目に、明久達は走り去っていった。

「ハア、ハア、と、とりあえず捲いたかな？」

繁華街の路地裏で、抱えていた麟と葉月を降ろしながら明久は一息ついた。

そんな彼を麟は心配そうに見上げた。となりで葉月も心配そうにしている。

「だ、大丈夫ですか」

その声に明久は笑って見せた。

「はは、大丈夫だよ。鍛えてますからっ！」

すこしおどけるような彼に、麟はホッと息を漏らす。

その横から、葉月が明久へと飛びついた。

「バカなお兄ちゃんスゴいです！ さすがは葉月のお嬢さんです！」

「え……？」

葉月の落とした爆弾に、麟があからさまに反応した。

「ま、待つんだ麟ちゃん。君は何か誤解をしている」

必死な面持ちでそう言うと明久は説明し始めた。

葉月はいまいち分かっていないようだが、麟は得心がいったかのように頷いていた。

「はあ、良かったです。実は明久さんが12歳以下にしか欲情できない性犯罪者予備軍かと思っちゃいました」

「……よくじょーって風呂のことです？」

「待つんだ麟ちゃん。君はほんとに十歳なのか？ それから葉月ちゃんはそのピュアさを失わないで欲しい」

少々頭痛がするようで頭に手をやりながらツツコミを入れる明久。それに対して麟はわたわかし始め、葉月は首を傾げた。

「はっ！？ ほ、ほんとに十歳ですよっ？！ 信じて下さいっ！？」

「よく分からないけど、分かったです！」

麟は必死に、葉月は楽しげに言う。そんな二人を見て、明久は小さく笑った。

番外編 18 逃亡者達 あるいは金髪少女のこと。 前編（後書き）

番外編18 いかがでしたでしょうか？

謎の少女、皇見麟の正体とは？

次回もよろしくお願いしますね♪

番外編 19 逃亡者達。あるいは金髪少女のこと。 中編（前書き）

お待たせしました！

番外編 19 更新です♪

読んで下さるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

「……それで、何で追われてるの？」

ひとしきり笑い終えたところで明久が切り出した。そう聞かれてうつむく麟。

その顔は汗がたらたら流れている。

「え、えーっとそうですね。何故と聞かれると返答に困るのですが、なんと言えばよいのでしょうか？……そ、そうです！　じ、実はあの方は……せ、世界征服を企む患者の一味なのです！　明久さん！」

麟はそう言いながら顔を上げた。

「わ、わたくし、彼らの企みを……ぐ、偶然聞いてしまいました……えと、えと、それを正義の味方に伝えるために文月学園にむかっているんです！」

言い切った麟の話の内容に、明久と葉月は、ぽかーんとなった。

その様子に麟は盛大に汗をかき始める。

「え、えっと以上なんですけど、やっぱり無……」

「そうだったのか？！」

「これは大事件ですっ！　バカなお兄ちゃん！」

「信じちゃうんですかつ？！　今の話をっ？！」

明久と葉月の反応に思わず突っ込む麟。それに対して二人はきょとんとなってしまう。

「え？　だってそれが理由なんでしょ？」

「です？」

明久と葉月、二人そろってクリンと首を傾げる。

「……な、なにやら罪悪感が……」

純粹そんな瞳で自分を見つめてくる二人に、麟は胸が痛む。が、

いまさら訂正できそうもないと開き直った。

「……は、はい、そうなんです」

心苦しそうにうなずく麟。

しかし、二人は疑うことなくうなずいてみせる。

「うん。文月学園まで行けば何とかなるの？」

「は、はい。あそこにはわたくしの一番の味方がいますから」
頭をひねる明久に、麟が答える。

「なら、遠回りしながら近づいてみようか」

「ハイです！」

明久の提案に、葉月が元気良く返事をする。

その様子に、麟は小さく笑った。

それに気づいて明久は麟を見る。

「どうしたの？」

そう聞いてくる麟に、明久が訊ねた。

「いえ、お二人がとても仲良しで、本当のご兄妹のように見えてしましまして……」 それでつい。と、麟は笑う。

そう言われた明久と葉月は、少し不思議そうになってから互いを見て、明久は苦笑い、葉月はお日様のように笑った。

「……参ったね」

「悪者さんが増えてますです」

「す、すいません」

物陰から大通りを伺う三人。

その視線の先では、あきらかに怪しいだろうっ？！ と、ツツコミが入るであろうほど黒服にサングラスの輩が増えていた。

道行く人々も、何事だろうかと彼らを見るほどだ。

「こんなにたくさん居るとなると、町中を突っ切るのは難しそうだ

ね」

黒服の様子を見ながら明久が呟く。それを見て麟が申し訳なさそうに頭を下げた。

「すいません」

「気にしないでよ、麟ちゃん。僕がやりたくてやってるんだから」

そう言って笑う明久。つられて麟も笑顔になる。

その様子に、葉月が下から見上げてきた。

「バカなお兄ちゃん、どうするですか？」

そう聞いてくる葉月に、明久は顎に手を当てて考え込む。

「うゝん、何かでカモフラージュできれば良いんだけど……」 そ

ういつて周囲を見回す明久。

あいにくこれといった物は見あたらない。

「とにかく行こうか。見つからないように隠れながらね？」

「はいです！」

「わかりました、明久さん」

こうして三人のスニークングミッションが始まった。

周囲を警戒し、街中を行く三人。黒服の姿が見える度に、看板や電柱、ポストの裏、自販機の横に身を潜める。

「といますか、隠れるのがお上手なんですね？ 明久さん」

「バカなお兄ちゃんは、かくれんぼの名人さんです！」

的確に身を潜める場所を見つけ、気配を消す明久の姿に、麟も葉月も感心することしきりだが、とうの明久は純粹に尊敬の眼差しを送ってくる二人の姿に恥いるばかりだった。

「（い、言えない！ 鉄人から逃れるために磨いたスキルだなんて、とてもじゃないけど言えないっ！）」

そんなことを考えつつ周囲を警戒する明久。

そのときまたもや黒服の姿が見え、あわてて隠れる。

「埒があかないや」

ちよくちよく姿を現す黒服たちに辟易する明久。

電柱の裏からお団子のように顔を三つ縦に並べて様子をうかがう三人。

その視線の先には、黒服の姿がよく見える。

「どうしようか？」

「うん。どの道ここを突破しないことには……」

明久が麟に答えた瞬間、一人の黒服が振り向いた。

あわてて隠れる明久と麟。

しかし。

「です?!」

葉月がワントンポ遅れてしまい、その長いツインテールが大きく揺れた。

それが黒服の視界に入る。

訝しげになった彼は、その尻尾が隠れた電柱に近づく。

特に警戒もせずなんだったのか確認しようとしただけだったのだが、不意に黒い影が懷に飛び込んできた。

「え？」

驚き、下を確認しようとしたときには、鳩尾に軽く拳が添えられ、踏み込んだ右足の震脚の音と共に両膝が回り、腰の回転と連動して左肘が引かれ、右拳が前に出る。

それを食らった男は、冗談のような勢いで吹き飛び、もう一人を巻き込んだ。

「い、今だっ!」

明久は叫んで麟と葉月を抱え上げて走り出した。

「お兄ちゃん強いです!」

「す、すごいですね? 明久さん……」

一瞬で黒服一人を吹き飛ばしたことに、葉月は大はしゃぎし、麟が呆然とつぶやく。

が、明久自身は心臓がバクバクものだった。

相手が油断していたこと、不意を打てたこと、そして、崩れた形ではあったが、技が完全に決まったこと。

これらがそろってこそその結果。明久にしてみれば、偶然の産物とは思えない出来すぎた結果だ。

しかし、走るのを止めるわけにはいかない。

さすがに十歳児を二人抱えて走るのは限界であつたが、根性で疲労をねじ伏せつつ、身を隠せる場所を探す。

と、視界の隅に入った場所へ飛び込んだ。

「いらっしやいませ……って豚野郎っ?! いったい何をしに……」
燈髪のドリルロールツインテのウェイトレスは、入店してきた客に挨拶しようとして、驚く。

「ごめん清水さん! 少し匿って!」

「な、なぜ美春がつ?!」

勢いに圧されるものの、拒否しようとする美春。
だが。

「お願いします!」

「お願いするです! くるくるのお姉ちゃん!」

二人の幼女の懇願に顔を赤らめ(特に葉月)る美春。

「……………し、仕方ありませんわ。合宿の件もありますし、奥のボックス席へ」

席を指し示す美春。

明久は、ありがとう。と伝えて奥に向かう。

それと店の前を黒服が数人通過するのは同時だった。

「で? 何をしたんですか? 豚野郎。幼女誘拐ですか? この性犯罪者」

ボックス席までやってきた美春が、葉月を抱きしめながら聞く。
ちなみに麟と葉月の前にはプリンアラモードとデラックスパフェが

鎮座しており、明久の前には、氷の入っていない水道水が置かれていた。

「違うからねっ?!……うーん。話すと長くなるかもしれないんだけど……」

「十文字以内で」

「この子が追われてる」

美春に睨まれ九文字で答える明久。それに対して舌打ちをする美春。

「あのう、清水さん?」

不意に麟が口を開く。

「美春で構いませんわよ、えーと?」

「あ、麟です。皇見麟」

「葉月は葉月です!」

「麟さんに葉月さんですわね、お二人とも可愛らしいですわ」

とくに葉月さんは愛らしすぎて……」

「?」

自分を見つめる美春に、首を傾げて屈託のない笑みを見せる葉月。

「ゴフウツ?!」

その一撃に、血を吐きながら宙を舞う美春。背景に一瞬見えた惑星の数々は幻覚だろう。

「ま、まさかお姉さま以外にこのわたくしをここまでときめかせる女性ひとが居るなんて……」

葉月の輝く笑顔にK.O状態の美春。その様子に、明久も麟も顔をひきつらせる以外無かった。

「まあ、もう少ししたら裏口から逃がしてくれるかな? 文月学園まで行かないといけないからね」

「学園までですか? 大変ですわね? ああ、葉月さんと麟さんは危険ですから美春が丁重にお預かり……」

葉月を抱きしめた美春がそこまで言った瞬間、粘つくような殺気

が一同を包み込んだ。

『デイイアマアイドウウタア……』

「ヒツ?!」

「ですつ?!」

「こ、これは?!」

「うぐつ?!」

地獄の底より沸き出るかのような声に、四人が軽く悲鳴を上げる。すると、黒いオーラと共に、赤い目を爛々と輝かせた大男が姿を現した。

その怪人を見た美春がひきつるようにつぶやいた。

「お、お父さん」

『えええええーっ?!』

「です?」

明久と麟が、驚愕の事実により異口同音の声を上げ、よくわかっていない葉月が、コクンと首を傾げた。

『オマエタチガマイエンジェルヲタブラカスオトコトオンナダナ? ユルサンユルサンゾオオオーッ!』

氣勢を上げ襲い来る男。明久はとつさに麟を抱え、テーブル足を掛けながら葉月の腕を取り、壁を蹴るようにして逃げた。

これに着いていけなかったのは美春である。

『ひひひひひっ?!』

『オオマイエンジェルミハル! パパノムネニトビコンデキテクレタンドネ! サアオヤコノアイヲタシカメヨウ!!』

逃げ遅れた美春は、思い切り抱きしめる怪人（美春父）。

「ブ、ブタヤロウツ!? た、助けなさいっ?!」

『ナンピトタリトモオヤコノスキンシップヲジャマスルモノハユルサンー!!』

「……………」

もがきながら助けろと言ってくる美春を抱きしめつつ、怪人（美春父）がすさまじいプレッシャーを放つ。

それを受けた明久は。

「……親子のスキンシップを邪魔しちゃ悪いよね? じゃ!」

シュタツと片手を上げて裏口へ向かう明久。

「ぶ、豚野郎っ?! 美春を見捨てるつもりですかっ?! ヒイツ?!!」

『サアミハルジャマモノハモウイナクナッタヨタツプリトカゾクノキズナヲフカメヨウ』

見捨てられた美春は、必死で抵抗するが、怪人（美春父）の拘束をふりほどけず、頬ずりされる。

『ぎゃあああーっっ?!?! ヒゲがっ?! ジョリジョリがっ?! 加齢臭がっ?! 筋肉があああーっっ?!?!』

『デイイアマアイドウウタアアアーッッ!!』

美春の悲鳴じみた叫びと、怪人（美春父）の雄叫びを背に、明久は二人を連れて裏口から外に出ていった。

「まったく、いい気味です!」

「え? り、麟ちゃん?」

三人で裏通りを歩くうちに、ぽつりと麟が漏らした一言が、明久には信じられなかった。

「だって、あの清水って人、明久さんのことを、豚、豚って何度も言うんですもん!」

頬を膨らませ、ぷりぷりと怒る麟。その姿に明久は、やっと彼女

の年相応の姿が見れた気がした。

「あー！ 何笑ってるんですかつ！？ バカにされてるんですよ！？」 明久さんっ！！」

「あはは、ごめんごめん。ほっぺを膨らませた麟ちゃんが可愛くてさ」

「ふへっ?!」

さらっと言つてのける明久に、麟の顔が、熟しきつた瑞々しいリンゴのように赤くなった。

「わあっ、麟ちゃん真っ赤ですっ！！」

「は、葉月さんっ?!」

笑顔の葉月に指摘され、両手で頬を押さえた麟の顔の赤みが増す。

「もうっ！ お二人ともからかわないで下さいっ！！」

ギャピーッとはかりに怒る麟に、明久と葉月の笑顔が増した。

ほんのひととき、三人の楽しい時間が過ぎていった。

番外編 19 逃亡者達。あるいは金髪少女のこと。 中編（後書き）

番外編19、いかがでしたでしょうか？

忙しさにかまけて、遅れに遅れました。

『蒼い』を書きながら少しずつ書いていたんですが、なんやかんやでこんなことに……。

もっとしっかりしないとなあ……。

ともあれ、次回もよろしくお願いします♪

番外編 20 逃亡者達あるいは金髪少女のこと。 後編（前書き）

お待たせしました！ 番外編20、更新です♪
読んでくださるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

陰から陰へ、潜みながら進む、三つの影。

そこかしこにいる黒服サングラスの男達の視界から逃げるため、身を潜め、静かに、素早く動く三人。

一人は少年。優しい空気をまといながらも、最近付き始めた少しばかりの精悍さがミックスされた容貌。しかしながら、どこかネジ一本締め忘れたかのような緩い雰囲気をも持つ彼。吉井明久。

「大丈夫？ ふたりとも」

振り返った先にいるのは二人の女の子。

一人は艶やかで長い赤茶色の髪をツインテールにした、お日様のような笑顔が似合う女の子。島田葉月。

いま一人はボリウムのある金髪を縦ロールにし、白磁の肌をわずかに紅潮させ、翠色の瞳で彼を見る女の子。皇見麟。

「はいです！」

「は、はい、大丈夫です」

幼女二人の返事に明久は一つ頷くと、周囲を警戒するように見回した。

そして、人の流れに逆らうようにたたずむ、黒服サングラスの男を視界に捉える。

彼らは追うもの。そして追われるのは明久たちだ。

「くそ……なんとかして突破しないと」

「……」

うめく明久の姿を見て、麟が申し訳なさそうな顔になった。

一生懸命に思案する彼の優しさと生真面目さ。ある種バカ故の思いこんだら一直線な明久らしい姿が、麟の胸を締め付けた。

だから麟は、意を決して口を開いた。

「あ、あのっ!？」

商店の中をのぞき込み、居ないことを確認して出ていく。
商店主からすれば、迷惑この上ない。

ほかの店も同様で、黒服が増えたことから、商店街側のストレスは高まる一方だ。

その店先に、茶色い段ボールが三つ並んでおいてあった。

それは、黒服が見えなくなると、そろりそろりと動き出した。

『あ、明久さん。これは本当に大丈夫なんでしょうか？』

『大丈夫だよ麟ちゃん。この方法は、ある伝説的な男が潜入ミツシヨンで使う、シンプルかつ確実なスニーキングスキルなんだ』

『は、はあ……』

『よく考えてもごらんよ。道端に段ボールが置いてあっても、何もおかしいことはないでしょ？』

『……』

『もちろん移動しているところを見られたらだめさ。だから、やつらの動きには注意するんだ』

『は、はあ……』

『バカなお兄ちゃんすごいです！ 物知りです！』

以上が、移動する段ボール同士で交わされた会話である。

そう、明久たちは段ボールに潜んで隠れたまま移動するという伝統的なテクニクを駆使して学園を目指していた。

むろん、そのテクニクはある名作ゲームの中にしか存在しないわけだが、ある種奇跡的な偶然（段ボールを店先に置いてる商店が続いた）の産物により機能していた。

そう、彼らは順調に移動していたのだ。

しかし、現実問題として、それは長続きするものではない。

段ボールで移動する三人が、大胆にも黒服二人の真後ろを通過し

ようとしたとき、ふと一人の黒服が振り向いた。

なんの変哲もない段ボール。

先ほどまで無かったような？ と、首を傾げながら前を向く。

そのまま黒服の一人は、もう一人を促しながら歩きだした。

そして、歩きだそうとしたもう一人は、ふと足を止め、段ボールを持ち上げた。

中で縮こまっていた少年と目があってしまう黒服。

ふたりは、にっこり笑い合い、黒服はそつと段ボールを戻した。

回れ右をして、サングラスを外し、目頭を揉みほぐす。

今一度サングラスをかけなおし、彼は段ボールの方へ向き直った。そして、もう一度段ボールを持ち上げた。

再び姿を現す少年に、黒服は、優しく笑いかけると、

『居たぞおおー！ー！ー！ー！っ！っ！っ！』

「ちいっ！！ 見つかったあぁっ！！」

声を上げる黒服に対し、明久は舌打ちしつつ隣が被っていた段ボールと葉月の被っていた段ボールを外して黒服にぶつけつつ、幼女二人を抱き抱えて走り出した。

大通りを、幼女二人を抱きすくめて走る少年と、それを追う黒服の集団。明らかに異様なその光景に、人々が目を丸くし、足を止めた。

当然、警察や消防へ連絡する者も少なからず居たわけだが、何故かそれらの組織は動きを見せなかった。

まるで、巨大な何かに押さえつけられているかのように。

「ハアハアハア……」

肩で息をしつつ、荒い息のまま、小さな二人を背後にかばう少年。明久たちは街外れにまで追いつめられていた。

黒服は二十人は居るだろうか？

完全に包囲されてしまっている。

明久自身、体力の消耗が激しく、どれほど抵抗できるかわからない。

しかし、彼女らを渡さないという強い意志だけは、彼の眼光から察することができた。

しかし、現実問題気概だけでは抵抗できないに等しかった。

「くっそお……」

「バカなお兄ちゃん……」

「明久さん……」

悔しそうな明久の姿に、葉月は泣きそうな顔になり、麟の顔は罪悪感にまみれる。

そして、彼女は口をへの字に結び、一歩踏みだそうとした。その時。

そこに響くは衝撃音。

そして、ロケットのごとく垂直発射された黒服のひとり。ついで、黒い陰が宙を舞い明久たちの目の前に降ってきた。着地の音はしかし、無音。

そこに佇むは、美しき麗人を肩に乗せたFクラスの鬼神。

前田俊夫。

「いよう、明久。なかなか面白いことになってるじゃねえか」

「と、俊夫?!」

俊夫の突然の出現に目を白黒させる明久。

そんな彼に漢臭い笑みを見せ、黒服と対峙する。

180の長身と全身余すことなく鍛え上げられた肉体は、まさに鬼の力を体現していた。

そこから発せられる気配に、黒服どもが一瞬気圧される。

そして、その肩からするりと白いドレスのようなワンピースを着た麗人が降りたった。

「ハアイアツキー♪ 両手に花とは隅に置けないねい♪」

「え？ も、もしかしてクリスなのっ？！」

「いえーす♪ おふこーす♪ おねーさん惨状♪」

驚く明久に、クリスはポーズをとって答えた。

いつもと違い、めかし込んだ彼女は黙っていれば金髪碧眼のお嬢様にしか見えない。

「え？ どうしたの？ やけにおしゃれしてるようにしか見えないんだけど？」

「ふふーん♪ 今日はおねーさんでーとなんだよん♪ とっしーとねい♪」

楽しげなクリスの表情。しかし、その頬が、僅かに赤い。

今までにもFクラスの男子たちとデートしていたことはあったが、あきらかにグレードが違う。

そこで明久は、はたと気づいた。

「ま、まさかクリス……俊夫と？」

明久にそう聞かれた彼女は、一気に赤くなった。

「……い、いや、まだそこまでは……。でも、良いかなあって……」

あのクリスが、乙女な発言。

「天変地異の前触れっ？！」

「なんでそうなのよっ？！」

明久の言葉に“素”で突っ込みつつ、横合いから近づいてきていた黒服の顎を殴り飛ばすクリス。

先ほどの会話の間中、ずっとこんな案配だ。

そしてその背後で五、六人の黒服が宙を舞うのだが、明久は見なかったことにした。

「でつかいおじさんすごいです！」

「し、死んじゃったりはしてませんよね……？」

目を輝かす葉月の隣で麟は顔を引きつらせていた。

「大丈夫だよん♪ ああ見えてとっしーは加減がうまいから……」
と、麟に答えていたクリスの顔が訝しげになった。

「……お嬢ちゃん、どっかで会ったことがあるような……？」
「え？」

そのクリスのつぶやきに、麟が身を強ばらせた。

「い、いえっ？！ しよ、初対面ですじょ？」
噛んだ。

麟の白い肌が、見る見る赤く染まる。

その様子にクリスは相好を崩しつつ後ろから近づいた黒服を振り向くように蹴り飛ばした。

ワンピースの裾がふわりと舞い、彼女の白い下着がちらりと見える。

「いやん♪ えっち」

茶化すように言いながらウイंकを飛ばす。

が。

「見ちゃ駄目です！」

「そうですよ？」

「見えてません（泣）」

幼女二人に目隠しされ涙を流す明久。

その様子にクリスが楽しげに笑う。

「あつはっは♪ 残念だったねいアッキー。おねーさん今日は勝負下着だったんだけどねい♪」

「なん……だと……？」

そんな追加情報に明久は打ちひしがれた。

「もう！ 明久さん！ 早く行きましよう！」

もはや放っておけぬとばかりに明久を引っ張り始める麟。

「ですです！」

葉月も一緒になって明久の背中を押した。

「わ、わかったよ！？ 俊夫！ クリス！ ごめんっ！ 後よろしくっ！」

幼女二人に主導権握られた明久は、それだけ言つと包囲の崩れた一角から飛び出していった。

それを見送つたクリスは小さくつぶやく。

「黄にして央。皇たる王なるもの。か……。あんな小さな子だったなんてね……」

そんな彼女の横に宙を舞う鬼神が降り立った。

「明久たちは行つたのか？」

「うむん♪ あとはこいつらをぶつちらばすだけだねい♪」

鬼神と堕天使が並び立つ。

『さあ、喰い散らかしてやろう』

文月学園前上り坂。

俊夫とクリスが黒服達の相手をしていているおかげで、学園までは、黒服に遭遇することなく済んだ。

「もうすぐだよ？ 麟ちゃん」

ゴールが近いことから、笑みを浮かべつつ麟に話しかける明久。

対して麟は、少し寂しそうに笑顔を見せるだけだ。

その様子に不思議に思うが、踏み込んで良いのかわからなかった、明久はなにも言わなかった。

そんな風に並んで歩いてた三人だが、とうとう校門までやってきた。

「さあ着いたよ」

そういつて笑う明久は二人の手を取ったまま校門をくぐった。

すると、そこには学園を支配する妖怪と、けだるそうにしているボブカットの保険医が居た。

すると麟は表情を明るくして保険医の方へ走りよっていった。

「めぐみさん」

「麟さん、心配しましたよ？ 君が連れてきてくれたのかい？」

「は、はい」

普段見ることのないめぐみの優しそうな笑顔に思わず見とれる

明久。

「そうか、礼を言う。ありがとう」

「い、いえ、当然のことをしただけですから」

そう答える明久にめぐみは、そうか。と、答えた。

そして麟が一步前に進み出る。

「明久さん、今日は本当にありがとうございました」 大変でしたけど、楽しかったです」

「悪人たちに追っかけ回されたただけだけどね」

麟の言葉に、明久は苦笑いを浮かべ、麟も、はい。とうなずいた。

「それでは、ここでお別れです。またどこかでお会いしましょう」

「うん、またね」

「バイバイです」 麟ちゃん」

麟に手を振って帰っていく明久と葉月。そんな二人へ麟も手を振り続けていた。

二人の姿が見えなくなって少し経ったとき、おもむろにめぐみが移動し、臣下の礼を取る

「お帰りなさいませ。皇龍妃様」

その言葉に、麟は口をとんがらかせた。

「もう、まだ良いではないですか玄武」

「戯れはその辺りにしてください。部下達からとんでもなく強い男
女に邪魔をされたと報告が来ていましたが、なにがあったのですか
？」

「ふふふ♪ 秘密です♪ さあ、学園長。視察を済ませてしまいま
しょう♪」

「分かったよ。やれやれ、こっちはスポンサー最大手、七龍の頭首
が行方知れずって聞いて気を揉んだって言うのにねえ」

「申し訳ない学園長」

「さあ行きましょう♪」

うなだれる二人を後目に歩き出す麟。

「（ふふ♪ 吉井明久さんかぁ♪ 格好良かったなあ♪ また、会
いたいな♪）」

麟は上機嫌で学園の建物に足を踏み入れた。

番外編 20 逃亡者達あるいは金髪少女のこと。 後編（後書き）

番外編20いかがでしたでしょうか？

麟の正体に気づいていた人はどれだけいますかね？

次回は、この騒ぎの最中、他の人達がなにをしていたかになります。

まずは島田美波から♪

それでは次回もよろしく願いします♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6715n/>

バカと雲雀と召喚獣

2012年1月4日02時47分発行